茨城県教育財団文化財調査報告第45集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17

屋代（やしろ）B遺跡 III

昭和63年3月

住宅・都市整備公団　つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

正　　誤　　表

頁	行	誤	正
写真目次	ＰＬ99	上師質土器	土師質土器
25	4	掘い込まれている	掘り込まれている
50	4	時期にとられる	時期にとらえられる
53	31	掘立柱建刻跡	掘立柱建物跡
59	第39図１	浅い刃底を	浅い丸底を
123	図版番号 57	口縁防の破片で	口縁部の破片で
167	図版番号 15	口緑部は外反	口縁部は外反
〃	図版番号 21	底池外面	底部外面
221	15	土塁の検出	土塁は検出
〃	25	鎌国幕府	鎌倉幕府

茨城県教育財団文化財調査報告第45集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17

屋代B遺跡III

昭和63年3月

住宅・都市整備公団　つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

序

竜ヶ崎市北部の北竜台・龍ヶ岡地域では，竜ヶ崎ニュータウンの建設が，住宅・都市整備公団によって進められております。ニュータウンの建設は，時代の要請に基づくものでありますが，一方において，開発と，その開発区域内に存在が確認されている数多くの貴重な埋蔵文化財の保護とを，どのように調和させていくかが大切な問題となっております。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団の委託を受けて，昭和52年度から竜ヶ崎ニュータウン建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。これらの調査によって，数多くの貴重な資料が検出され，地域の歴史を解明する上で資するものが多いと考えられます。

本書は，屋代Ｂ遺跡の昭和61年度分の調査結果を収録したものであります。本書が，中世城館跡研究の資料としてはもとより，教育文化の向上の一助としてお役に立てれば幸甚に存じます。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である住宅・都市整備公団から寄せられた御協力に対して，深く感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し，心より謝意を表します。

昭和63年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　川　又　友三郎

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和61年度に実施した竜ヶ崎市八代町に所在する屋代Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2　屋代Ｂ遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		川又友三郎	昭和61年４月～
副理事長		礒田　勇	昭和61年４月～
常務理事		滑川貞雄	昭和61年４月～
事務局長		堀井昭生	～昭和62年３月
		坂場庸克	昭和62年４月～
調査課長		青木義夫	昭和59年４月～
企画管理班	班長	北畠　健	～昭和62年３月
		水飼敏夫	昭和62年４月～
	主任調査員	山本静男	昭和61年４月～
	係長	田所多佳男	～昭和62年３月
	主任	山崎初雄	昭和60年４月～
	主事	富永　明	昭和62年４月～
		大部　章	昭和61年４月～
調査第一班	班長	沼田文夫	昭和61年度
	主任調査員	佐藤正好	昭和61年度調査，昭和62年度整理・執筆
	調査員	西野則史	昭和61年度調査
整理班長		倉本冨美男	昭和62年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，佐藤正好が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，屋代Ｂ遺跡の城館跡について，中世城郭研究者の藤本正行・市村高男両氏に御指導をいただいた。また，炭化米・豆等の同定については，農林水産省農業生物資源研究所の中川原捷洋・江川宜伸の両氏に依頼し，分析結果の報告をいただいた。

5　遺跡の地形測量・土塁・堀・虎口・土坑部の実測について，シン航空写真株式会社に委託し，写真測量を実施した。

6　本書に使用した記号等については，第３章第１節の２の項を参照されたい。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査方法……3
1　地区設定……3
2　遺跡の基本層序……3
3　遺構確認……4
4　遺構調査……5
第３節　調査経過……6
第２章　位置と環境……7
第１節　地理的環境……7
第２節　歴史的環境……9
第３章　遺構と遺物……16
第１節　遺跡の概要と記載方法……16
1　遺跡の概要……16
2　遺構・遺物の記載方法……17
第２節　弥生時代……22
1　遺構と遺物……22
第３節　古墳時代……42
1　遺構・遺物……42
第４節　奈良時代～中世……59
1　遺構・遺物……59
第５節　中世……75
1　中世城郭の構造……75
2　遺構・遺物……78
(1)　虎口……78
(2)　土塁……80
(3)　堀・土橋・木橋……84

(4) 掘立柱建物跡……94
(5) 井戸…… 105
(6) 道路…… 110
(7) 1号墓壙…… 110
(8) 中世遺物－(1) 陶・磁器と金属製品…… 115
(9) 中世遺物－(2) 土製品・石製品…… 138
(10) 鋳銅関連遺物…… 165
第6節 その他…… 171
1 土壙…… 171
2 地下式壙…… 193
3 溝…… 198
4 方形周溝遺構…… 201
5 出土遺物について…… 203
第4章 まとめ…… 217
第1節 弥生時代～奈良時代…… 217
第2節 中世…… 221
1 館跡について…… 221
2 城郭期について…… 223
3 屋代城館跡について…… 233
4 地割と城郭遺構…… 236
5 土坑群について…… 238
終 章 むすび…… 240
別 編 竜ヶ崎屋代B（R－6B）遺跡より出土した植物炭化種子の同定について…… 243

挿 図 目 次

第1図 調査区呼称方法概念図 …… 3
第2図 基本土層図 …… 4
第3図 遺跡周辺地形図 …… 8
第4図 屋代B遺跡周辺遺跡分布図 ……14
第5図 第44号住居跡実測図 ……23
第6図 第44号住居跡炉実測図 ……24
第7図 第44号住居跡出土遺物実測・拓影図 24
第8図 第46号住居跡実測図 ……26
第9図 第46号住居跡出土遺物実測・拓影図 27
第10図 第56号住居跡実測図 ……29
第11図 第56号住居跡出土遺物実測・拓影図 30
第12図 第59号住居跡実測図 ……31
第13図 第59号住居跡炉実測図 ……32
第14図 第59号住居跡出土遺物実測図(1) ……33

第 15 図　第59号住居跡出土遺物実測拓影図(2) 34
第 16 図　第60号住居跡炉実測図 ……35
第 17 図　第60号住居跡実測図 ……36
第 18 図　第60号住居跡出土遺物実測・拓影図 37
第 19 図　第62号住居跡実測図 ……38
第 20 図　第62号住居跡出土遺物拓影図 ……38
第 21 図　第63号住居跡実測図 ……39
第 22 図　第63号住居跡炉実測図 ……39
第 23 図　環濠遺構実測図 ……41
第 24 図　第45号住居跡実測図 ……43
第 25 図　第45号住居跡出土遺物実測図 ……44
第 26 図　第49号住居跡出土遺物実測図 ……46
第 27 図　第51号住居跡実測図 ……47
第 28 図　第51号住居跡出土遺物実測・拓影図 48
第 29 図　第52号住居跡竈実測図 ……50
第 30 図　第52・53号住居跡実測図 ……51
第 31 図　第52号住居跡出土遺物実測図 ……52
第 32 図　第54号住居跡実測図 ……54
第 33 図　第54号住居跡出土遺物実測図 ……54
第 34 図　第58号住居跡出土遺物実測図 ……55
第 35 図　第58号住居跡実測図 ……56
第 36 図　第61号住居跡竈実測図 ……57
第 37 図　第61号住居跡実測図 ……58
第 38 図　第47号住居跡実測図 ……60
第 39 図　第47号住居跡出土遺物実測図(1) ……63
第 40 図　第47号住居跡出土遺物実測図(2) ……64
第 41 図　第55号住居跡実測図 ……65
第 42 図　第55号住居跡竈実測図 ……66
第 43 図　第55号住居跡出土遺物実測図 ……67
第 44 図　第48号住居跡出土遺物実測図 ……67
第 45 図　第48号住居跡実測図 ……68
第 46 図　第57号住居跡実測図 ……69
第 47 図　第57号住居跡出土遺物実測図 ……70
第 48 図　第64号住居跡実測図 ……71
第 49 図　第64号住居跡出土遺物実測図(1) ……72
第 50 図　第64号住居跡出土遺物実測図(2) ……73
第 51 図　堀・土橋の構造 ……76
第 52 図　堀の断面・木橋の架け方 ……77
第 53 図　虎口の防禦施設 ……78
第 54 図　屋代城・虎口の変遷図 ……79
第 55 図　第 1 号掘立柱建物跡実測図 ……95
第 56 図　第 2 号掘立柱建物跡実測図 ……96
第 57 図　第 3 号掘立柱建物跡実測図 ……97
第 58 図　第 4 号掘立柱建物跡実測図 ……98
第 59 図　第 5 号掘立柱建物跡実測図 ……99
第 60 図　第 6 号掘立柱建物跡実測図……100
第 61 図　第 7 号掘立柱建物跡実測図……101
第 62 図　第 8 号掘立柱建物跡実測図……102
第 63 図　第 9 ～14号掘立柱建物跡配置図
……103～104
第 64 図　第 6・7・8・9・11号井戸跡実測図…107
第 65 図　第10号井戸跡実測図……108
第 66 図　第12・13号井戸跡実測図……109
第 67 図　1 号墓壙実測図……112
第 68 図　1 号墓壙出土遺物実測図(1)……113
第 69 図　1 号墓壙出土遺物実測図(2)……114
第 70 図　中世遺物実測図（陶・磁器－ 1 ）…116
第 71 図　中世遺物実測図（陶・磁器－ 2 ）…117
第 72 図　中世遺物実測図（陶・磁器－ 3 ）…118
第 73 図　中世遺物実測図（陶・磁器－ 4 ）…119
第 74 図　中世遺物実測図（青磁・白磁）……124
第 75 図　蔵骨器……126
第 76 図　鉄製品実測図(1)……129
第 77 図　鉄製品実測図(2)……130
第 78 図　銅製品実測図(1)……131
第 79 図　銅製品実測図(2)……132
第 80 図　古銭拓影図(1)……134
第 81 図　古銭拓影図(2)……135
第 82 図　古銭拓影図(3)……136
第 83 図　古銭拓影図(4)……137
第 84 図　中世遺物実測図(内耳形土器－ 1)…140
第 85 図　中世遺物実測図(内耳形土器－ 2)…141
第 86 図　中世遺物実測図(内耳形土器－ 3)…142
第 87 図　石製品実測図（宝篋印塔－ 1 ）……145
第 88 図　石製品実測図（宝篋印塔－ 2 ）……146
第 89 図　石製品実測図（五輪塔－ 1 ）……147
第 90 図　石製品実測図（五輪塔－ 2 ）……148
第 91 図　石製品実測図（五輪塔－ 3 ）……149
第 92 図　石製品実測図（五輪塔－ 4 ）……150
第 93 図　石製品実測図（砥石－ 1 ）……151
第 94 図　石製品実測図（砥石－ 2 ）……152
第 95 図　石製品実測図（砥石－ 3 ）……153
第 96 図　石製品実測図（砥石－ 4 ）……154
第 97 図　石製品実測図（石臼－ 1 ）……156

第98図　石製品実測図（石臼－２）……157
第99図　石製品実測図（石臼－３）……158
第100図　石製品実測図（石臼－４）……159
第101図　石製品実測図（石臼－５）……160
第102図　石製品実測図（石皿）……161
第103図　石製品実測図（石擂鉢）……162
第104図　遺跡内出土押印文様土器
拓影図－(1)……163
第105図　遺跡内出土押印文様土器
拓影図－(2)……164
第106図　遺跡内出土押印文様土器
拓影図－(3)……165
第107図　遺跡内出土遺物実測図（坩堝）……166
第108図　遺跡内出土石器実測図(1)……168
第109図　遺跡内出土石器実測図(2)……169
第110図　石製品実測図(1)……170
第111図　石製品実測図(2)……170
第112図　第703号土坑実測図 ……173
第113図　第703号土坑出土和鏡拓影図 ……174
第114図　土坑実測図(1)……175
第115図　土坑実測図(2)……176
第116図　土坑実測図(3)……177
第117図　土坑実測図(4)……178
第118図　土坑実測図(1)……183
第119図　土坑実測図(2)……184
第120図　土坑実測図(3)……185
第121図　土坑実測図(4)……186
第122図　土坑実測図(5)……187
第123図　土坑実測図(6)……188
第124図　土坑実測図(7)……189
第125図　土坑実測図……190
第126図　粘土貼り土坑実測図(1)……195
第127図　粘土貼り土坑実測図(2)……196
第128図　第10号地下式壙実測図……197
第129図　第11号地下式壙実測図……198
第130図　第66号溝実測図……200
第131図　第１号方形周溝遺構実測図……202
第132図　遺跡内出土弥生式土器実測・
拓影図……205
第133図　遺跡内出土弥生式土器実測・
拓影図(1)……206
第134図　遺跡内出土弥生式土器実測・
拓影図(2)……207
第135図　土製品・石製品・ガラス製品
実測図……208
第136図　遺跡内出土土師式土器実測・
拓影図……209
第137図　遺跡内出土遺物実測図（須恵器）…209
第138図　中世遺物実測図(土師質土器－１)…210
第139図　中世遺物実測図(土師質土器－２)…211
第140図　中世遺物実測図(土師質土器－３)…212
第141図　中世遺物実測図(土師質土器－４)…213
第142図　中世遺物拓影図(土師質土器，
底部に板の圧痕の残るもの）……213
第143図　中世遺物実測図（陶・磁器・
擂鉢）……214
第144図　中世遺物拓影図（擂鉢－１）……215
第145図　中世遺物拓影図（擂鉢－２）……216
第146図　龍ヶ崎地方の郡と荘園，南北朝
時代の城館分布……225
第147図　室町時代の領主と城館分布，戦
国時代龍ヶ崎地方の諸勢力と城館…226
第148図　戦国時代における常陸・北下総・
下野東部の主要勢力分布図，関
東の主要城郭……227
第149図　屋代城館跡第Ⅰ期……233
第150図　屋代城館跡第Ⅱ期……234
第151図　屋代城館跡第Ⅲ期……236
第152図　地割りと城郭遺構……237
第153図　第690号土坑より出土した炭化
米及びコシヒカリ玄米の長さと
幅の相関図……250
第154図　第699号土坑より出土した炭化
米及びコシヒカリ玄米の長さと
幅の相関図……250
第155図　出土した皮ムギの長幅比の変異……251
第156図　出土した皮ムギの長さの変異……251
第157図　出土した皮ムギ炭化種子とカシ
マムギ（皮ムギ）の長さと幅の
相関図……252
第158図　出土したリヨウトク，アズキ炭
化種子及び現在の茨城県アズキ
在来系統における種子と長さの
相関図……252

表　目　次

表１　屋代Ｂ遺跡周辺遺跡一覧表……15
表２　古銭一覧表 ……133
表３　石製品一覧表（宝篋印塔）……146
表４　石製品一覧表（五輪塔）……148
表５　石製品一覧表（砥石）……155
表６　石製品一覧表（石臼）……162
表７　石製品一覧表（石皿・石擂鉢）……163
表８　石器一覧表 ……169
表９　石製品一覧表 ……169
表10　土壙一覧表(1)
墓壙及び墓壙と思われる土坑 ……178
表11　土壙一覧表(2)
墓壙の可能性のある土坑 ……181
表12　土坑一覧表・粘土貼り土坑 ……193
表13　竜ヶ崎（R-6B遺跡の各調査地点
における出土物）……244
表14　出土した玄米の形態 ……244
表15　出土したアズキ，リヨクトウ種子の
長さ，幅及び長幅比の計測結果 ……247

付　図　目　次

付図１　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図
付図２　屋代Ｂ遺跡城郭遺構全体図
付図３　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－１）
付図４　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－２）
付図５　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－３）
付図６　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－４）
付図７　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－５）
付図８　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－６）
付図９　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－７）
付図10　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－８）
付図11　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－９）
付図12　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－10）
付図13　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（堀－11）
付図14　虎口・土橋・木橋・陥し穴配置図
付図15　堀土層断面図
付図16　堀土層断面図
付図17　堀・土塁断面図
付図18　堀・土塁断面図
付図19　堀・土塁断面図
付図20　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（Ｉノ郭内遺構配置図）
付図21　屋代Ｂ遺跡航空写真測量図（Ｉノ郭内掘立柱建物跡配置図）

写真図版目次

PL　1　屋代城館跡全景
PL　2　調査前風景(1)，調査前風景(2)
PL　3　第44号住居跡，第46号住居跡遺物出土状況
PL　4　第46号住居跡，第56号住居跡
PL　5　第59号住居跡，第60号住居跡
PL　6　第62号住居跡，第63号住居跡
PL　7　第45号住居跡，第51号住居跡遺物出土状況
PL　8　第52号住居跡，第54号住居跡
PL　9　第58号住居跡，第61号住居跡
PL 10　第47号住居跡遺物出土状況，第47号住居跡
PL 11　第48号住居跡，第55号住居跡

PL 12　第64号住居跡遺物出土状況，第64号住居跡

PL 13　第１号虎口，第４・５・６号虎口，第４・５・６号虎口，第５号虎口，第６号虎口と折り

PL 14　第１号土塁，第２号土塁，第２号土塁断面，第２・３・４号土塁，第３・４号土塁，第５号土塁，第５号土塁，第５号土塁

PL 15　第７・10号堀，第10・20号堀，第22号堀，第22号堀，第１号堀，第２・３号堀，第14-A号堀，第１・18・19号堀

PL 16　第20号堀，第１号道路，第１号道路，第１号堀（南側），第１号堀（東→西），第１号堀（南→北）

PL 17　第２・３号堀，第４号堀，第12号堀，第20号堀，第12号堀，第12号堀，第12号堀（折り）

PL 18　第12号堀，第12号堀，第15・16号堀，第15号堀，第14-A号堀，第14-B号堀

PL 19　第14-A号堀，第14-B号堀，第17-B号堀，第17-A号堀，Ⅰノ郭全景，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲノ郭全景

PL 20　第20・Ⅰ-B号堀・環濠断面，第20号堀断面，第20号堀断面，第20号堀断面，第20号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面

PL 21　第1-B号堀断面，第20号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面

PL 22　第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第１号堀断面，第９号堀断面，第８号堀断面

PL 23　第８号堀断面，第８号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面

PL 24　第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第12号堀断面，第14-A号堀断面,第14-B号堀断面

PL 25　第14-B号堀断面，第14-B号堀断面，第16号堀断面，第16号堀断面，第17号堀断面，第17号堀断面，第67号溝断面，第67号溝断面

PL 26　土橋No.１，土橋No.２・３，土橋No.３，土橋No.４，土橋No.５，土橋No.５，土橋No.５・６，土橋No.７

PL 27　木橋No.10(虎口)，木橋No.10，木橋橋脚穴，木橋No.10橋脚穴，木橋No.10橋脚穴，木橋No.11（Ⅱノ郭），木橋No.11

PL 28　陥し穴No.４・５，陥し穴No.６，陥し穴No.７，陥し穴No.８，排水孔，陥し穴No.８，陥し穴No.８，陥し穴No.９

PL 29　陥し穴No.10，陥し穴No.11，陥し穴No.11，陥し穴No.12，陥し穴No.12，陥し穴No.13，陥し穴No.14，陥し穴No.15

PL 30　堀・陥し穴石塔出状況

PL 31　第６・７・８・９・10・11号井戸，第６・７号井戸，第10号井戸，第12号井戸，第13号井戸，井戸（竪穴）

PL 32　Ⅰノ郭土坑・掘立柱遺構群，Ⅰノ郭土坑・掘立柱遺構群，第133号土坑，第685号土坑，第692号土坑，第693号土坑，第697号土坑

PL 33　第697号土坑，第700号土坑，第703号土坑和鏡出土状況，第719号土坑，第719・720号土坑，第739号土坑，第744号土坑，第753・820号土坑

PL 34　第754号土坑，第755・756号土坑，第755号土坑，第772・850号土坑，第776号土坑，第785号土坑，第791号土坑，第794号土坑

PL 35　第800号土坑，第800号土坑木枠の掘り方，第819号土坑，第763・823・826・827・829・830号土坑，第832号土坑，第754・833号土坑，第845号土坑，第851号土坑

PL 36　第851号土坑，第856号土坑，第861号土坑，第914号土坑，第967号土坑，第1179号土坑，第1187号土坑，第1197号土坑

PL 37　第1205号土坑古銭出土状況，第1213号土坑，第1290号土坑，第1322号土坑，第1325号土坑炭化物出土状況，第1189号土坑，蔵骨器（常滑），蔵骨器（常滑）
PL 38　粘土貼り土坑，第770号土坑，第788号土坑，第787号土坑，第792号土坑，第793号土坑，第812号土坑，第846号土坑，第1010号土坑
PL 39　環濠，環濠，環濠，方形周溝遺構，方形周溝遺構，１号墓壙遺物出土状況，１号墓壙
PL 40　Ⅰ～Ⅲノ郭，Ⅰノ郭，Ⅱノ郭，Ⅰノ郭，Ⅳノ郭
PL 41　長峰城，牛久城
PL 42　登城山城，外八代遺跡（砦）
PL 43　第44・45号住居跡出土遺物
PL 44　第46・47号住居跡出土遺物(1)
PL 45　第47住居跡出土遺物(2)
PL 46　第47住居跡出土遺物(3)
PL 47　第48・49号住居跡出土遺物
PL 48　第51号住居跡出土遺物
PL 49　第52・54・55号住居跡出土遺物
PL 50　第55・56・57・58号住居跡出土遺物
PL 51　第59号住居跡出土遺物
PL 52　第60・62・64号住居跡出土遺物
PL 53　第64号住居跡出土遺物
PL 54　青・白磁器
PL 55　陶・磁器(1)
PL 56　陶・磁器(2)
PL 57　陶・磁器(3)
PL 58　陶・磁器(4)
PL 59　陶・磁器(5)
PL 60　陶・磁器(6)，土製品
PL 61　陶・磁器（擂鉢）
PL 62　鉄製品（釘）
PL 63　鉄製品（釘・鏃）
PL 64　鉄製品（刀子・鏃・鎌）
PL 65　和鏡
PL 66　銅製品（刀装具）
PL 67　銅製品（笄・鞐・簪・鏃）
PL 68　銅製品（留金・古銭・六器・煙管）
PL 69　古銭(1)
PL 70　古銭(2)
PL 71　１号墓壙出土遺物(1)
PL 72　１号墓壙出土遺物(2)
PL 73　１号墓壙出土遺物(3)・蔵骨器
PL 74　蔵骨器・土師質土器(1)
PL 75　土師質土器(2)
PL 76　土師質土器(3)
PL 77　土師質土器(4)
PL 78　土師質土器(5)
PL 79　土師質土器(6)
PL 80　押印文様(1)
PL 81　押印文様(2)
PL 82　押印文様(3)
PL 83　内耳形土器(1)
PL 84　内耳形土器(2)
PL 85　内耳形土器(3)
PL 86　坩堝(1)
PL 87　坩堝(2)
PL 88　坩堝(3)・鉄滓
PL 89　石塔（宝篋印塔）－１
PL 90　石塔（宝篋印塔・五輪塔）－２
PL 91　石塔（五輪塔）－３
PL 92　石塔（五輪塔）－４
PL 93　石塔（五輪塔）－５
PL 94　石製品(1)
PL 95　石製品(2)
PL 96　石製品(3)
PL 97　石製品(4)
PL 98　石製品(5)
PL 99　上師質土器底部（板の圧痕）
PL100　石器・石製品
PL101　土製品・石製品・ガラス製品
PL102　遺跡内出土遺物(1)
PL103　遺跡内出土遺物(2)

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

住宅・都市整備公団は，自然の保全に留意した潤いのある生活環境のもとに，既成の竜ヶ崎市街地と有機的に結合した調和のある新しい町づくりを目指し，竜ヶ崎市の北部台地上に，総面積671.5ha[1]に及ぶ竜ヶ崎ニュータウンの建設に着手した。これは，首都圏への人口や産業の集中を緩和させると同時に，ぼうだいな住宅用地の需要に対応し，良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と地域内に就業の場を設けることにより，居住者の地元定着をも意図したものである。

竜ヶ崎ニュータウンの建設計画は，当初，日本住宅公団によって計画され，昭和46年1月「竜ヶ崎・牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され，その事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」と称した。その後，昭和51年4月に設立された宅地開発公団茨城開発局が，日本住宅公団に代って事業を引き継いだ。同56年10月1日付をもって宅地開発公団と日本住宅公団が統合し，新たに「住宅・都市整備公団[2]」として発足したが，従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に継承され，今日に至っている。

茨城県教育委員会は，昭和45年に実施した埋蔵文化財の分布調査の結果に基づき，開発地域内に所在する遺跡について，文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため，地元竜ヶ崎市教育委員会と協議を重ねた。その後，再度実施した分布調査によって，昭和51年7月に7遺跡，昭和55年5月に2遺跡[3]，昭和56年5月に工業団地内で2遺跡[4]，昭和57年10月に1遺跡[5]を各々追加した。

県教育委員会は，これら36遺跡[6]（表1）について関係機関と再度協議を行った結果，現状保存が困難な31遺跡について，記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，昭和52年4月「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を，当時の宅地開発公団と締結し，竜ヶ崎ニュータウン建設区域内の埋蔵文化財発掘調査・並びに整理報告を継続して実施してきた。

昭和61年度は，屋代B遺跡[7]，南三島遺跡4区[8]，長峰遺跡の発掘調査を実施し，茨城県教育財団本部調査課調査第一班が担当した。なお，屋代B遺跡の今年度調査区域内に確認された2か所の土塁については，県教育委員会，住宅・都市整備公団との協議において，現状保存の処理が講じられた。

注

(1)　開発面積は，小柴新田町（こしばしんでん）・柏田町（かしわだ）の全域と，若柴町（わかしば）・稲荷新田町（いなりしんでん）・馴馬町（なれうま）・馴柴町（なれしば）・南中島町（みなみなかじま）・別所町（べつしょ）の一部からなる北竜台地区が326.6ha，貝原塚町（かいはらつか）・羽原町（はばら）・八代町（やしろ）・長峰町（ながみね）の各一部からなる龍ヶ岡地区が344.9haである。

(2) さらに，昭和61年４月１日付をもって，住宅・都市整備公団茨城開発局は研究学園都市開発局と統合し，住宅・都市整備公団つくば開発局竜ヶ崎開発部となる。

(3) 羽原川調整池の造成工事中に，仲根台Ｂ遺跡が発見された。

(4) 工業団地予定地は100haに及び，分布調査の結果，周知の薄倉遺跡のほか稲荷峰古墳が加えられた。

(5) 山王台遺跡は竜ヶ崎ニュータウン開発事業関連道路整備の一環として行った主要地方道土浦・竜ヶ崎線道路改良事業に伴い，昭和58年４月から４か月にわたる発掘調査を実施した。

(6) 遺跡の略号はR1～R33までであるが，R6がR6A・R6Bに，R28がR28とR28A・R28Bに枝分れし，各々を１遺跡と数え36遺跡とした。

(7) 屋代Ｂ遺跡は，総面積61,259m²に及ぶ集落跡・城館跡である。昭和58年度からの継続調査であり，調査の便宜上，昭和58・59年度分（18,314m²）を屋代Ｂ遺跡Ⅰ，昭和60年度調査分（22,503m²）を屋代Ｂ遺跡Ⅱ，昭和61年度調査分（20,442m²）を屋代Ｂ遺跡Ⅲとした。

(8) 南三島遺跡は，総面積109,193m²に及ぶ大集落跡（縄文時代～室町時代）で，昭和56年度から継続調査を実施し，昭和61年７月31日をもって終了した。

参考文献

(1) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10「南三島１・２区（上）」茨城県教育財団　昭和59年

(2) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11「南三島６・７区（上）」茨城県教育財団　昭和60年

(3) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「屋代Ｂ遺跡Ⅰ」茨城県教育財団　昭和61年

(4) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15「屋代Ｂ遺跡Ⅱ」茨城県教育財団　昭和62年

(5) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16「南三島３・４区」茨城県教育財団　昭和62年

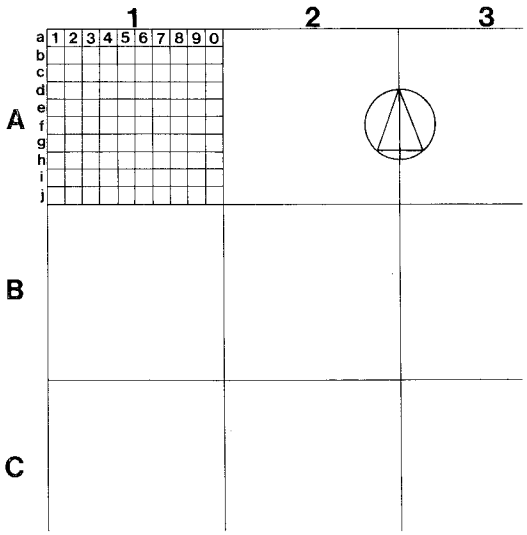
第2節　調査方法

1　地区設定

屋代B遺跡の昭和61年度の調査対象面積は，20,442m²である。

当遺跡の地区設定は，昭和54・55両年度にまたがって調査された屋代A遺跡の地区設定時に同時に行われたものであり，同一の地区割がなされている。

公団基準点No.435を任意点とし，日本平面直角座標系第IX座標，X軸(南北)－8,900m，Y軸（東西）＋34,100mの交点を通る軸線を基準として，東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区（大グリッド）を設定した。さらに，大調査区を東西・南北方向に各々10等分して，4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。大調査区は，基準点から北へ160m，西へ200mの点を起点とし，北から南へ「A」・「B」・「C」…，西から東へ「1」・「2」・「3」…と大文字を付して，「A1」区・「B2」区のように呼称した。さらに，大調査区内を4m四方の小調査区に100等分し，それぞれ同様に北から南へ「a」・「b」・「c」…，西から東へ「1」・「2」・「3」…と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせた四文字「A2b_3」区・「E3h_6」区のように呼称した（第1図）。



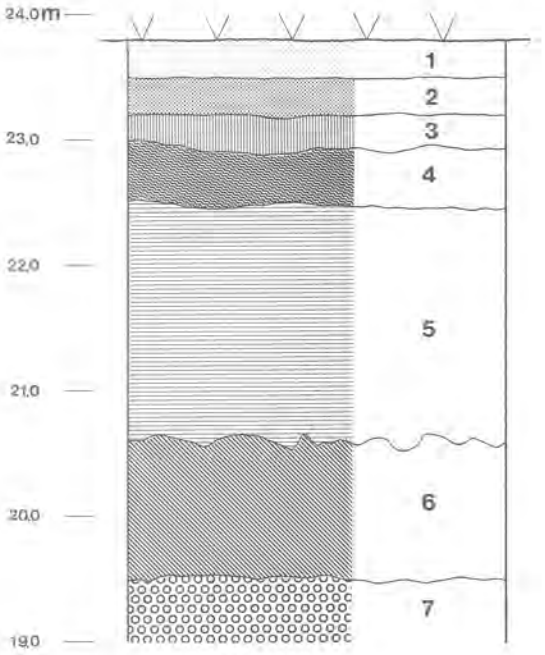
第1図　調査区呼称方法概念図

なお，屋代B遺跡は，大調査区で南北「A」～「J」，東西「1」～「10」の範囲に位置している。

2　遺跡の基本層序

当遺跡の基本層序については，第2図のとおりである。1は，表土層で耕作土となっており，平均50cm前後の厚さである。2は漸移層であり，暗褐色または褐色を呈している。3は，いわゆるソフトローム層であ。4は，ハードローム上位のブロック化した層である。5はハードローム層で，色調等で3層に分けることが可能である。6は常総粘土層であり，7は竜ヶ崎砂礫層である。

地表面は，北西側でほぼ平坦となっているが，東側及び南側は傾斜地となっている。昭和60年度調査区域の南東側には，浸食谷から分かれた支谷が入り込んでおり，南側の台地部には，黒色



第2図　基本土層図

土が2.2mほどの厚さに堆積している。東側の傾斜地にも同様の状況が観察される。この黒色土層は，7,000～1,000年程前に，谷に土が流入し，自然堆積したものと考えられる。従って，当遺跡の中世当時の地形は，ほぼ現状と同じであったことが推定できる。

遺構の堀り込みは，深い場合でも5の上位までであるが，地下式壙・堀・井戸等は，6～7にまで及んでいる。

3　遺構確認

屋代B遺跡の昭和61年度の調査対象面積は，20,442m²である。これまでに実施した発掘調査等の結果から，本年度調査区域内は，城館跡に伴う堀・土塁・虎口等が存在することや，2次にわたる調査結果から，本年度調査区域内においても，隣接する屋代A遺跡[(1)]の関連から集落跡の検出が考えられ，集落の分布が予想される台地部について，遺構確認面までの深さも含めてグリッドによる試掘を実施した。

試掘の結果，虎口・堀・溝・住居跡・土坑等と思われる落ち込みが検出され，場所により遺構の密集の度合いに差が認められるものの，台地部のほぼ全域に遺構の分布が認められた。また，遺構確認面までの深さが台地部で40～50cmであることから，調査区域内全域について重機による表土除去を実施し，その後遺構確認を進めた。

（注）

(1)　屋代A遺跡は，昭和54～55年にかけて調査された弥生時代から中世に至る複合遺跡である。遺構の分布状況から，屋代B遺跡調査の結果，屋代A遺跡・屋代B遺跡は，共に同一の集落を当台地上に形成する遺跡であることが判明した。

参考文献

(1)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6「成沢遺跡・屋代A遺跡」茨城県教育財団　昭和57年3月

4　遺構調査

当遺跡における遺構の調査は，次のように実施した。

住居跡の調査は，長径（主軸）方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け，四分割して掘り込む「四分割法」で実施し，地区の名称は，北から時計回りに１～４区とした。また，重複している場合は，新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は，長径方向で二分して掘り込む「二分割法で実施し」，大形のものは住居跡の調査法に準じた。土塁・堀・溝の調査は，規模に応じて適宜数か所に直交する土層観察用ベルトを設けた。

土層観察は，色相・含有物・混入物の種類や量，及び粘性・吸水性・締まり具合を観察し，分類の基準とした。色相の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著，日本色研事業株式会社）を使用して行った。

遺構や遺物の平面実測は，水系方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は，遺跡内の水準点を基準として，レベルを用いて水系を水平にセットした実測基準を設定して行った。また，堀や土塁・虎口等については航空写真測量を実施した。

遺物は原位置を保ち，住居跡・土坑の場合は，各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物台帳や図面に記録して収納した。堀・溝の場合は区名に代わってグリッド名を用い，他は住居跡や土坑と同様とした。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真等に記録できない事項はその都度野帳等に記録し，これを調査記録カードや遺構カードに整理した。

第3節　調査経過

昭和61年度に実施した屋代B遺跡の調査経過については，以下のとおりである。

4　月　発掘調査の諸準備を整え，基本杭打ち・調査区設定を行い，遺構確認調査と第3・4・5号土墨周辺の伐開作業を実施した。

5　月　前月に引き続き調査区内の伐開作業・遺構確認調査を行い，遺構の分布・表土層の堆積状況等について検討を加え，12日より重機による表土除去を開始した。

6　月　重機による表土除去と遺構確認を進め，11日より竪穴住居跡・土坑の掘り込み調査と並行して，堀の土層測量を進めた。

7　月　重機による表土除去と遺構確認を進め，併せて重機により堀（第1・69・70・75・77・78・81号）の掘削，竪穴住居跡・土坑の掘り込み・測量調査を実施した。

8　月　重機による堀（第69・70・75・77・78・81・82・86号）の掘削，竪穴住居跡・土坑の掘り込み，測量を進めた。その結果，第1号堀が調査区域外に延びている現状から，城館跡の全容調査を考え，28日，県文化課・公団・財団で，調査区域の拡張について現地で三者協議を行った。

9　月　前月に引き続き重機による堀（第69・70号）の掘削，内郭部の調査・測量を進めた。

10　月　重機による堀（第1・69・70・90・92号）の掘削，内郭部・Ⅲノ郭内（竪穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡群・井戸）の調査・測量を進めた。

11　月　重機による堀（第1・2・10・72・76・95・96・98号）の掘削，内郭部・Ⅲノ郭内の調査・測量を進め，新たに確認された堀・虎口部について調査面積1,311m²が追加され，重機による表土除去と遺構確認を並行して行った。また，内郭部の遺構測量について協議を重ね，内郭部については，写真測量を実施する方向で調査を進めた。12月重機による堀(第1・8・10・36A・B・69・70B・72・82・90・99・103号)の掘削，内郭部・Ⅱノ郭・拡張部内の調査を進め,17日に内郭部の土坑・掘立柱建物跡の写真測量を実施した。

1　月　12日をもって重機による堀の掘削作業を終了する。Ⅱノ郭・Ⅲノ郭・拡張部内の遺構の掘り込み，測量調査を進めた。

2　月　Ⅱノ郭・Ⅲノ郭・拡張部内の掘り込み，測量を実施し，14日に遺跡現地説明会，19日には堀・土墨の航空写真測量を行い，Ⅱノ郭・Ⅲノ郭内遺構測量と併せて，写真撮影を進めた。

3　月　Ⅱノ郭・Ⅲノ郭・拡張部内の遺構測量，写真撮影を行い，18日に遺跡全景の航空写真撮影を実施,25日迄に全ての遺構調査を終了し,26日をもって屋代B遺跡の調査を完了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

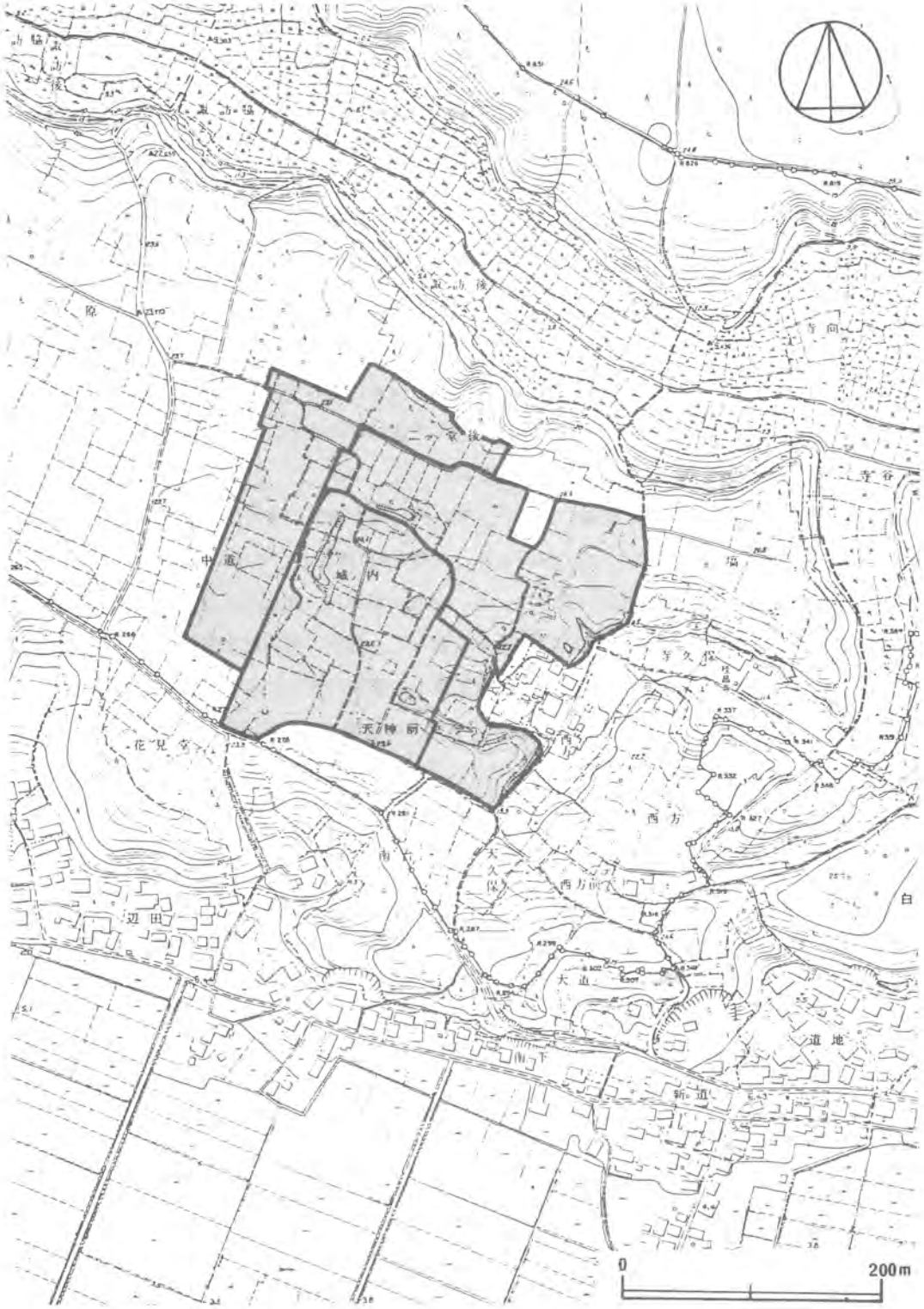
屋代Ｂ遺跡は，茨城県竜ヶ崎市八代町字二ツ堂2459-1ほかに所在する。

当遺跡の所在する竜ヶ崎市は，茨城県の南部に位置し，JR東日本常磐線佐貫駅から東へ延びる関東鉄道竜ヶ崎線の終点竜ヶ崎駅から，東へ約２kmにわたって市街地の中心部を形成している。同市は，東で稲敷郡江戸崎町・同郡新利根村，南で同郡河内村・北相馬郡利根町，西で取手市・北相馬郡藤代町・筑波町伊奈町，そして北で稲敷郡茎崎町・牛久市と接している。面積は約75㎢，人口約５万余人を数え，稲敷郡域の中核都市となっている。しかし，昭和46年に竜ヶ崎ニュータウン建設計画事業が開始され，昭和57年に第一次の入居がはじまり，さらに各種の開発によって竜ヶ崎市は大きく変貌を遂げようとしている。

竜ヶ崎市付近は，稲敷台地の南縁にあたり，至る所に浸食谷が刻まれて複雑な地形を呈している。市域は古鬼怒川と小貝川によって形成された沖積平野（標高３～６ｍ）と洪積世に形成された稲敷台地（標高20～27m）の一部からなっている。両者の境界は，比高15～20mの急崖になっている。地質は，台地上では成田層・成田砂礫層を基盤とし，更に，常総粘土層・関東ローム層が堆積している。低地谷津部には，軟弱な粘土及び腐植上の堆積が見られる。

屋代Ｂ遺跡は，竜ヶ崎市街地の北東約２kmの台地上に位置する。遺跡内の標高は23～24mを測り，ほぼ平坦である。遺跡の北東から北にかけて，同市八代町から別所町に達する幅150～200mの細長い浸食谷が入り込んでいる。このため遺跡の所在する台地は，南北を低地に挟まれ，台地と低地の境界は急崖となっている。比高は北で17m内外，南で19m内外である。台地の平坦部は狭く，幅300～350mに過ぎない。また，西側は平坦面が続いているものの，東側には浸食谷から分かれた支谷が南に向かって入り込んで狭まっている。この地域の一部では，造成工事が進められている。

現在の八代町の集落は，台地南縁に沿った微高地上に形成されており，遺跡の南側の崖下から東方へ1.6kmにわたって細長く延びている。遺跡の北側へ入り込んだ浸食谷は，八代町の集落とさらに東方の長峰町の集落との間に開口している。



第3図　遺跡周辺地形図

第2節　歴史的環境

茨城県南部，とりわけ霞ヶ浦沿岸や利根川下流域を中心とする稲敷台地の縁辺部は，県内においても遺跡が濃密に分布する地域として広く知られている。中でも陸平貝塚[1]（美浦村）をはじめ，花輪台貝塚[2]（利根町）・興津貝塚[3]（美浦村）・上高津貝塚[4]（土浦市）・椎塚貝塚[5]（江戸崎町）・福田貝塚[6]（東村）・広畑貝塚[7]（桜川村）等は特に著名である。

竜ヶ崎市の北部台地上においても同様であり，以下竜ヶ崎市内に所在する遺跡について概述する。

先土器時代の遺跡としては，船底形石器や掻器が出土した沖餅遺跡[8]をはじめ赤松遺跡[9]が上げられる。縄文時代になると，早・前期の廻り地B遺跡[10]・町田遺跡[11]，前・中期の赤松遺跡・打越A遺跡[10]・打越C遺跡[10]・南三島遺跡2区[12]，中期末から後期初頭にかけての廻り地A遺跡[13]・南三島遺跡3・4区等がある。また，弥生時代の遺跡としては，外八代遺跡[14]・屋代A遺跡[15]・屋代B遺跡[16]が上げられる。古墳時代になると，前期の大羽谷津遺跡[10]・成沢遺跡[15]・南三島遺跡4区・松葉遺跡[17]や前述した沖餅遺跡・平台遺跡[18]がある。外八代遺跡や屋代B遺跡からも古墳時代や奈良・平安時代の遺構が検出されている。

中世になると，地下式壙や土坑群が検出された前清水遺跡[10]や，堀・掘立柱建物跡や柵列等が検出された外八代遺跡がある。また，これら外八代遺跡や屋代B遺跡は，鎌倉時代から戦国時代にかけての城館跡としても捉えられる。当教育財団が調査報告したこれらの遺跡から，竜ヶ崎市及びその周辺地域における各時代の様相が明らかになりつつある。

当遺跡の所在する竜ヶ崎市は，古代茨城国に属していた。律令制下後常陸国は，多珂・久慈・那賀・香島・行方・茨城・新治・白壁・筑波・河内・信太の11郡からなり，『和名抄』に見られるごとく，信太郡稲敷郷に属したとされている。稲敷の地名の由来・位置については，『常陸國風土記』信太の条に，「其里西飯名社，此　筑波岳所有飯名神之別屬也」とある。また，中山信名は『新編常陸國誌』の信太郡稲敷郷の条で，「倭名鈔ニ云，稲敷，按ズルニ，今ノ河内郡八代〔寺院記ニハ，社トアリ，コレハ飯名社ヨリ出タル名ナルベシ〕，貝原塚龍ヶ崎ノ邊，古ノ稲敷郷ナリ，八代村ニ稲塚ト云フ丘アリ，イネツカト訓ス，蓋イナジキノ轉ナリ」と述べ，また，「飯名社ト稱スルモノハ，…出タルニモアルベシ」と述べ，稲敷の地名の由来を「飯名社の敷地」に，八代の地名の由来を「飯名社」に求めている（傍点筆者）。この「飯名社」については，前述のように女化稲荷神社（牛久市女化）に比定する説と，稲塚[19]（龍ヶ崎市八代）の墳頂にまつられている小祠に比定する説があるが，中山信名自身は後者を支持している。

平安時代，信太郡は小野川を境として，南東部を信太郡東条・北西部を信太郡西条とに二分され，常陸平氏直幹の子忠幹が，信太郡東条を譲られて東条氏を名乗った。

東条は，小野川以南の東部，現在の稲敷郡桜川村・東村・新利根村・江戸崎町南東部・竜ヶ崎の東部が属し，建長8年（1256）以前の段階で立荘され，東条荘[20]は熊野社域として荘園化され，東条氏が荘官として支配権を行使した。

また，西条[21]は，小野川以北の地で，霞ヶ浦を境とし，行方郡と常陸川を南境として下総国と接し，常陸平氏直幹の子下妻広幹の支配下にあったものと考えられるが，下妻広幹の没落後，北条氏一族が台頭し，地頭としてその地位を確立していった。

東条荘・信太荘と隣接する河内郡は，小貝川と小野川・乙戸川とによって囲まれた地域であり，現在の竜ヶ崎西部・牛久市・茎崎町南部・伊那町南部・河内村の一部である。

元弘3年（1333）後醍醐天皇が北条氏打倒に立ち上がり，足利尊氏・新田義貞らも挙兵し，北条氏・鎌倉幕府は倒壊した。

竜ヶ崎地方でも，東条荘の東条氏や相馬氏が，河内郡では下河辺氏（南部総地頭[22]）が倒幕に動いた。東条領信太荘は，北条氏の所領であった関係から没収された。熊野社領東条荘は東条氏に，伊勢神宮領相馬御厨は相馬一族に安堵され，ここで竜ヶ崎地方は，北条氏に取って代わって建武政府の影響下にさらされた。

建武2年(1334)10月足利氏の離反により，建武政府は分解し，足利氏＝北朝方，後醍醐天皇＝南朝方という分裂抗争は竜ヶ崎地方にも大きな影響を与えた。常陸国においては，佐竹氏・大掾氏（常陸平氏）が北朝方に，小田氏や東条氏は南朝方の中心となった。

暦応元年（1338）奥洲・関東経営の使命を帯び，義良親王を奉じた北畠家親房・顕信父子と結城宗広，そして遠江の南朝方勢力統率の使命を帯びた宗良親王ら一行の船団は，伊勢から陸奥へ向かう途中暴風雨のため難波し，宗良親王は遠江白羽へ，また，東条浦[23]に漂着した北畑親房は，東条氏を頼り神宮寺[24]に入るが，佐竹氏に攻撃され神宮寺は陥落し，次いで阿波崎城[25]も攻略され，親房は小田城[26]へと難を逃れた。

興国2年（1341）高師冬の率いる足利方の軍勢が信太荘・東条荘に攻め入り，竜ヶ崎地方は合戦の場と化し，同年9月，屋代彦七信経は師冬の軍（武蔵の別府幸実）と同道して，信太荘佐倉城・東条城・亀谷・高井[27]・馴馬[28]の諸城を攻略し，竜ヶ崎地方における南朝方の敗北を決定的にした。

南北朝の終り頃，信太荘は高師冬の没落などによって，小田孝朝が新たな支配者になったが，小山若犬丸の乱に関与し，上杉憲方・朝宗らに攻られ，信太荘の所領を失うことになる。この地方における小田氏の勢力後退に伴い，換って上杉氏の代官として，信太荘の荘惣政所をおさえたのが美濃国守護土岐氏の支流である土岐原氏[29]であった。

土岐原氏は，秀成の時，信太荘江戸崎に江戸崎城[30]を築き，小田氏と対立した。小田氏は，岡見郷の岡見氏，東条荘の屋代氏と結び，河内郡・信太荘へも進出を図っていた。16世紀はじめ小田

氏は常陸国西南部で最大の勢力を誇り，竜ヶ崎地方にも大きな影響力を及ぼしていた。

小田氏の南進に対して土岐原氏が強い抵抗を示して，大永3年（1523）東条荘の「屋代要害」での土岐原・小田政治方の合戦は，かなり激しい戦闘が行われたことが窺われる。

永禄11年（1568），江戸崎城主土岐治英の次男胤倫が江戸崎より分かれ，竜ヶ崎城主[31]となった。この時期，土岐原氏はかっての郡・荘城の，信太荘中南部・東条荘の全域・河内郡の南東部周辺を支配していた。

16世紀後半，竜ヶ崎地方の各城（竜ヶ崎・江戸崎・牛久・土浦・布川）は，すべて豊臣秀吉に掌握され，天正18年（1590），土岐原氏も滅ぼされ，土岐原氏の領地は佐竹義宣の弟芦名義勝に，江戸崎城は芦名氏の本城となり，竜ヶ崎城をその支城としたが，この間竜ヶ崎地方は城下町として整備された[32]。

関ヶ原合戦後の徳川政権下で，竜ヶ崎・江戸崎・牛久・布川の各城は廃城の運命をたどるが，竜ヶ崎城は，竜ヶ崎領が仙台藩（伊達家）の領地となった関係で，城下に代官の陣屋[33]が設けられ幕末まで支配された。

現在，竜ヶ崎市内における城館跡は16か所[34]が知られているが，全てに文献・伝承が少なく不明な点が多いが，いずれの城館跡も形態から鑑みて，14～16世紀にかけて築城・改修が行われたものと考えられる。

注・参考文献

(1) I. IIJIMA, AND C. SASAKI,「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」『TOKYO DAIGAKU. SCIENCE DEPARATMENT』MEMOIR VOL1 PART1）TOKYO DAIGAKU　明治16年

(2) 吉田格・甲野勇「花輪台貝塚」（『縄文式文化編年図集第一回』）1949

(3) 西村正衛「茨城県稲敷郡興津貝塚」（『日本考古学年報』10）昭和38年

(4) 小宮孟「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」（『第四紀研究』VOL1.19）1980国指定史跡（昭和51年）。土浦市上高津所在。

(5) 八木奘三郎・下村三四吉「常陸國椎塚介墟発掘報告」（『東京人類学会雑誌』8-27）明治26年　骨ヤスのつき刺ったタイの頭骨で名高い。

(6) 佐藤伝蔵「常陸國福田村貝塚探究報告」（『東京人類学会雑誌』9-100）明治27年明治以来多くの先学によって発掘され，おびただしい遺物の出土をもって名高い。

(7) 池上啓介「広畑貝塚」（『史前学雑誌』5-5）昭和8年

(8) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3「沖餅遺跡」茨城県教育財団　昭和55年

(9) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4「赤塚遺跡」茨城県教育財団　昭和55年

(10) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書５「前清水遺跡・大羽谷津遺跡・打越Ａ遺跡・打越Ｃ遺跡・廻り地Ｂ遺跡」茨城県教育財団　昭和56年

(11) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書９「仲根台Ｂ遺跡・町田遺跡」茨城県教育財団　昭和59年

(12) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10「南三島遺跡１・２区」茨城県教育財団　昭和59年

(13) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書７「廻り地Ａ遺跡」茨城県教育財団　昭和57年

(14) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書２「外八代遺跡」茨城県教育財団　昭和55年

(15) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６「成沢遺跡・屋代Ａ遺跡」茨城県教育財団　昭和57年

(16) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「屋代Ｂ遺跡Ｉ」茨城県教育財団　昭和61年

(17) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書１「松葉遺跡」茨城県教育財団　昭和54年

(18) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書８「平台遺跡」茨城県教育財団　昭和58年

(19) 竜ヶ崎八代町3903所在。塚でなく残丘である。

(20) 『新編常陸國誌』信太郡稲敷郷の条に，「屋代，龍ヶ崎，長峰，薄倉，貝原塚，羽原，別所，馴馬，中島，若柴（中略）鎌倉将軍ノ此ヨリ，河内郡ニ入ル，コレヨリ東ハ東條荘トナレリ」とあり，庄の範囲が推定できる。

(21) 仁平元年（1151），平頼盛の母藤原宗子によって立荘され信太荘となる。安元二年（1176）までに八条院庁分の荘園となっている（「八条院領目録」）。

(22) 常陸国の府中（現在の石岡市）以南を指す。

(23) 現在の霞ヶ浦。

(24) 県指定史跡。稲敷郡桜川村神宮寺所在。平城で，現在は堀・土塁が残存する。延元３年（1338）10月５日落城。

(25) 県指定史跡。稲敷郡東村阿波崎天神台所在。南北朝の争乱に北畠氏が築城。佐竹氏のために落城。落城後名主14名が断罪になっている。

(26) 国指定史跡。筑波郡筑波町大字小田所在。小田氏の始祖八田知家が築城。平城。

(27) 竜ヶ崎市貝原塚町字城山2,309外所在。高井城は古名。代々諸岡氏の拠城。戦国時代は小田氏の支城で，貝原塚将監氏胤のとき江戸崎土岐氏に滅ぼされた。

(28) 県指定史跡，竜ヶ崎市馴馬町山王台所在。春日顕国の立籠った城。興国５年（1344）落城。

(29) 土岐原氏については，伊藤勲著「土岐原史紀」に詳しい。

(30) 稲敷郡江戸崎町大字江戸崎甲3,212の1外。江戸崎小学校西側裏手の台地部が本丸跡。本丸の南側に二の丸跡（現在の公民館・農業改良普及所の地）がある。

(31) 竜ヶ崎市古城3,087所在。現茨城県立竜ヶ崎第二高等学校。永禄11年（1568）に土岐胤倫が城主となり，天正18年（1590）に退転するまで約20年間拠城とした。

(32) 市村高男「戦国時代の竜ヶ崎城下町」（『紀要』創刊号）竜ヶ崎市郷土史研究会昭和60年

(33) 竜ヶ崎市根町所在。現竜ヶ崎市立竜ヶ崎小学校。

(34) 藤本正行「龍ヶ崎の中世城郭跡」竜ヶ崎市史別編II昭和62年

竜ヶ崎市域の中世城郭跡は，竜ヶ崎城・馴馬城・羽原城・屋代城・外八代城・貝原塚城・長峰城・登城山城（半田城）・要害山城・大日山城・七曜城・泉城・宝泉寺城・若柴城・北方平野館・別所城の16か所である。

・関城禪史～「興国二年六月高史冬以信太庄為己所有土人有屋代彦七信経者為部属以見熟地理史冬使之嚮尊分兵信太荘今河内郡八代古信太東条地信経蓋其地人」と見える。更に同書の同年九月の記録に「興国二年九月　屋代信経等　攻信太荘高井城　縦火焼民舎」

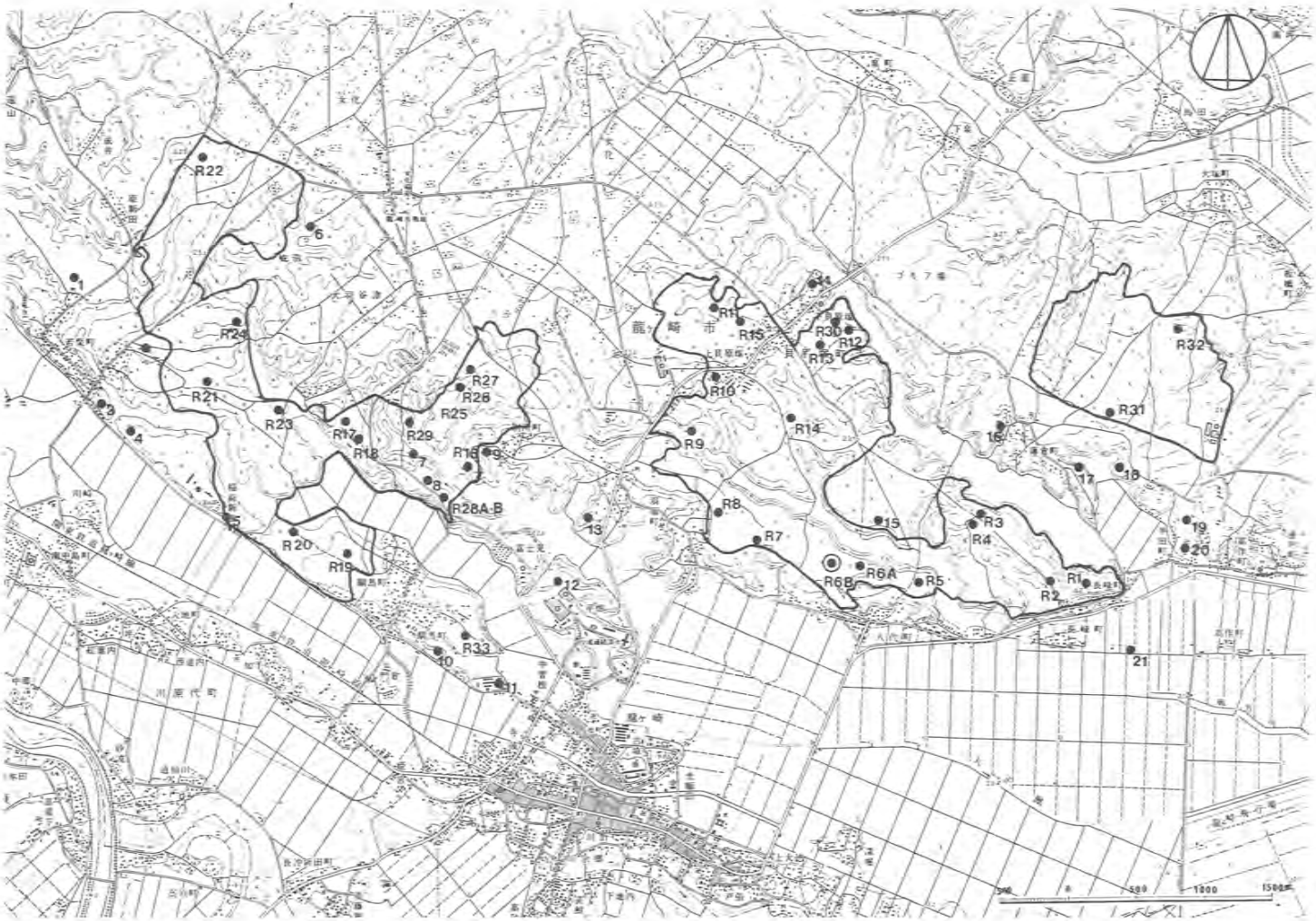
・別府幸実軍忠状写～暦応四年七月十七日　屋代彦七信経同道仕天　馳向千信太庄之処　佐倉城凶徒等令没落候訖　討渡伊仗度之入海　馳参東条之処　御敵降参　同日相向亀谷城之刻　又以降参　同廿三日　押寄高井城　焼払所々候訖

・永和三年五月鎌倉府奉行所宛雑賀希善請文（円覚寺文書）

円覚寺造営料所常陸国小河郷事　任去月十六日御施行之旨　今月十八日　壱岐左京亮政高・希善相共莅彼所　沙汰付下地於寺家雑掌妙識候訖　仍請取状如此候　云村々名字　云土貢分限　欲注申之処　百姓等与本主益戸常陸入道行政一躰之間　更不隋所勘　不及致厨雑事　結句同廿日妙識被追出之間　地下目録不能認進之候　仍可令帰参候之処　屋代越中守師国拝領之地　当国東条庄内社村事　希善為使節　被成御教書候之間　遂其節可令帰参候　若条々偽申候者　八幡大菩薩御罰於可罷蒙候以此旨可有御披露候哉　恐惶謹言

永和三年五月廿一日　　沙弥希善（裏花押）

進上　御奉行所



第4図　屋代B遺跡周辺遺跡分布図

表１　屋代Ｂ遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R 1	長峰城跡	城館跡					○
R 2	長峰古墳群	古墳群				●	
R 3	十三塚塚群	塚群					●
R 4	尾坪台遺跡	集落跡			●	●	
R 5	外八代遺跡	集落跡・城館跡			●	●	●
R 6—A	屋代Ａ遺跡	城館跡・集落跡			●	●	●
R 6—B	屋代Ｂ遺跡	城館跡・集落跡		●	●	●	●
R 7	稲荷塚古墳群	古墳群				○	
R 8	南三島遺跡	集落跡		●		●	●
R 9	ダンゴ塚	塚					○
R10	町田塚群	塚群					●
R11	かがみ塚	塚					○
R12	高井城下城跡	城館跡・寺院跡					○
R13	前清水遺跡	集落跡・貝塚・塚群				●	●
R14	塚下遺跡	塚群・他					●
R15	町田遺跡	集落跡		●			●
R16	行部内遺跡	集落跡・貝塚		○			
R17	大羽谷津遺跡	集落跡				●	
R18	廻り地Ａ遺跡	集落跡		●		●	
R19	平台遺跡	集落跡				●	
R20	成沢遺跡	集落跡				●	
R21	松葉遺跡	集落跡・塚群				●	●
R22	庚申塚遺跡	集落跡		○		○	
R23	沖餅遺跡	集落跡	●	●		●	
R24	赤松遺跡	集落跡		●		●	●
R25	打越Ａ遺跡	集落跡		●			
R26	打越Ｃ遺跡	集落跡		●			
R27	ウツブタ遺跡	集落跡		●			
R28	仲根台塚群	塚群（１・２号）		●			●

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R28—A	仲根台塚群	塚群（３・４号）					●
R28—B	仲根台Ｂ遺跡	集落跡		●		●	●
R29	廻り地Ｂ遺跡	集落跡		●			
R30	白蔵寺遺跡	包蔵地					
R31	簿倉古墳	塚					●
R32	稲荷峰古墳	塚					●
R33	山王台遺跡	集落跡				●	●
1	金塚遺跡	集落跡	○	○		○	
2	林遺跡	集落跡				○	
3	若柴城跡	城館跡					○
4	宿畑遺跡	集落跡				○	
5	稲荷古墳	古墳				○	
6	永山前遺跡	集落跡		○			
7	仲根台遺跡	集落跡・古墳		○		○	
8	奈戸岡古墳群	古墳群				○	
9	堂ノ下貝塚	貝塚群		○			
10	馴馬城跡	城館跡					○
11	愛宕山古墳	古墳				○	
12	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡				○	
13	西花輪貝塚群	貝塚群		○			
14	貝原塚城跡	城館跡					○
15	向井原遺跡群	集落跡	○	○		○	
16	西平遺跡	集落跡		○			
17	馬込稲荷遺跡	集落跡		○			
18	要害山館跡	城館跡					○
19	半田遺跡	集落跡				○	
20	登城山館跡	城館跡					○
21	向須賀遺跡	包蔵地		○	○		

●は発掘調査を実施した遺跡等である。

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と記載方法

１　遺跡の概要

当遺跡は，屋代城跡[1]として周知の遺跡である。昭和54年，茨城県教育委員会が実施した分布調査によって，当遺跡の東側に隣接する地区（同一台地上）から，弥生時代から近世に及び集落跡が確認された。その結果，新たに確認された遺跡を屋代Ａ遺跡[2]，屋代城跡を屋代Ｂ遺跡と呼称することになった。屋代Ｂ遺跡は，昭和58年度から発掘調査を開始し，昭和58・59年度の調査面積は18,314㎡，昭和60年度の調査面積は22,503㎡，昭和61年度は20,442㎡の調査を実施した。

当遺跡（昭和61年度調査区）からは，調査の結果，竪穴住居跡21軒，土坑652基，溝48条，土塁１基，堀24条，虎口４か所，井戸８基が検出された。その後，出土遺物を整理し，遺構の状況を再検討した結果，遺構でないと判断したものを欠番とし，本項から除外した。その結果，当遺跡における最終的な遺構数は以下の通りである。

住居跡		
	弥生時代	８軒
	古墳時代	７軒
	奈良～中世時代	４軒
土坑		81基（11基粘土貼り土坑）
地下式壙		２基
土塁		１基
堀		19条
竪堀		12か所（陥し穴）
虎口		６か所
土橋		６か所
木橋		２か所
道路		１条
井戸		８基
掘立柱建物跡		14基
溝		８条（環濠を含む）

遺物は，弥生時代の土器（壺）のほかに，古墳時代の土器（甕・坏），中・近世の青磁・内耳形

土器・灯明皿・古銭・刀装具・石鍋・鏃・和鏡・仏具・石塔（五輪塔・宝篋印塔）等が出土している。

なお，当遺跡は屋代城跡としての城館跡の調査であるが，弥生時代から古墳時代にかけての集落跡も検出されており，隣接する屋代A遺跡と関連しているものと思われる。

注・参考文献

(1) 「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会　昭和52年

茨城県遺跡地図によれば，屋代A遺跡・屋代B遺跡は屋代城跡として記載されており，昭和54年，県の分布調査によって新たに屋代A遺跡が分離されるまでは屋代城跡として周知されていた。屋代城跡については，稲敷郡志に「大字八代の中央桂昌寺の傍に在る小丘にして（中略）建武中興八代信経此にをり」との記載がある。

(2) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告6「成沢遺跡・屋代A遺跡」茨城県教育財団昭和57年

昭和54年11月から昭和55年11月にかけて調査され，住居跡64軒（弥生時代28軒・古墳時代26軒・平安時代9軒・不明1軒），土坑232基（地下式壙を含む），土塁1か所，掘立柱建物遺構2棟，溝16条，井戸状遺構1基が検出されている。遺物は，弥生式土器・土師器・須恵器・陶器等が出土しており，弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

2　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は，以下の通りである。

(1) 使用記号

	各称	住居跡	土坑・地下式壙	堀・溝	土塁	井戸	道路	掘立柱建物	その他
遺構	記号	SI	SK	SD	SA	SE	SF	SB	SX

(2) 遺構・遺物の実測図中の表示

＝焼土　＝竈・炉　＝粘土　＝炭化米　＝坩堝・釉

(3) 遺構番号

遺構番号については，調査の過程で遺構の種別毎に調査順に付したが，整理にあたり遺構でないと判断したものは欠番とした。

(4) 土層の分類

各遺構内の堆積土については，調査時に観察記録した結果に基づき，色調と含有物を下記のように整理し記号化した。色調と含有物の量については，『新版標準土色帖』（小林正忠・竹原

秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用し，Hue7.5YRを基準とした。

なお，含有物の量については少量（面積の10％未満）検出されたものを基準とし，中量（10％以上30％未満）検出されたものには「’」，多量（30％以上）検出されたものについては「”」をアルファベットの右上に付加して表示した。（例…a’・a”）

番号	土色名	色相	明度／彩度	含有物
1	明褐色	Hue 7.5YR	5/6 5/8	a　ローム粒子・ロームブロック・黒色土ブロック・粘土ブロック
		Hue 10YR	7/6	
2	にぶい黄褐色	Hue 10YR	5/4 5/3	b　木炭粒子（炭化物）・炭化粒子
3	にぶい褐色	Hue 7.5YR	5/4 5/3	c　焼土・焼土ブロック・焼土粒子
4	褐色	Hue 7.5YR	4/3 4/4 4/6 3/4 3/3	d　砂
		Hue 10YR	4/6	e　黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黒色土粒子
5	暗褐色	Hue 7.5YR	3/3 3/4 4/3	f　粘土
		Hue 10YR	3/3	g　灰（白色灰・明黄褐色灰・わら灰）
		Hue 5YR	3/3	h　炭化米
6	極暗褐色	Hue 7.5YR	2/3	i　礫
7	黒褐色	Hue 7.5YR	2/2 3/2 3/3	j　ローム塊
		Hue 10YR	3/1 2/2 3/2	k　耕作土
		Hue 5YR	3/2 2/2 2/1	l　ローム
8	灰褐色	Hue 7.5YR	4/2	
		Hue 10YR	5/2	
		Hue 5YR	4/2	
9	浅黄色	Hue 2.5YR	7/3	
10	明赤褐色	Hue 5YR	5/8 3/2 5/6	
		Hue 2.5YR	5/8	
11	にぶい赤褐色	Hue 5YR	4/4 5/4 4/3	
12	赤褐色	Hue 5YR	4/6	
13	暗赤褐色	Hue 5YR	2/3 3/4 3/2 3/3 3/6	
		Hue 2.5YR	3/6	
14	極暗赤褐色	Hue 5YR	2/4 2/3	
15	橙色	Hue 7.5YR		
16	にぶい橙色	Hue 7.5YR	6/4	
17	浅黄橙色	Hue 7.5YR	8/3	
18	にぶい黄橙色	Hue 10YR	6/4 7/4 5/4 7/6	
19	黒色	Hue 7.5YR	2/1	

(5)　遺構実測図の作成方法と掲載方法

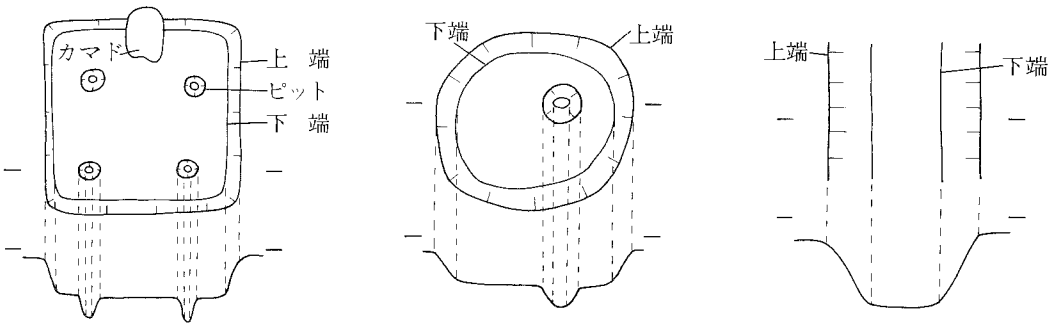
○各遺構の実測図は，縮尺20分の１の原図を浄書して版組し，縮尺３分の１で掲載することを基本とした。

○長大な溝・堀については，その規模に応じて縮尺100分の１の原図を２分の１，４分の１，８分の１に縮小したものを浄書して版組し，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

○実測図中のレベルは標高であり，m単位で表示した。また，同一図中で同一標高の場合に限り

番号	土色・含有物	番号	土色・含有物	番号	土色・含有物	番号	土色・含有物
1	4a	11	5acd	21	7abcg	31	1ab
2	4ab	12	5abcd	22	地山	32	5ac
3	4abc	13	6ab	23	6a	33	1abcd
4	4abd	14	6abc	24	7a	34	7ac
5	4abcd	15	6abd	25	5abcg	35	4ac
6	5a	16	6abcd	26	5abcdg	36	1a
7	5ab	17	7ab	27	1abd	37	4acd
8	5abc	18	7abc	28	4abcdg	38	1abc
9	5abd	19	7abd	29	5abdg		
10	5abg	20	7abcd	30	8abd		

掘立柱遺構土層分類



一つの記載で表し，標高が異なる場合は各々表示した。

○遺構からの出土遺物は，(2)で示した記号を用い，出土遺物に付した数字は遺物実測図及び拓影図の番号と一致する。

(6)　遺物実測図の作成方法と掲載方法

○土器の実測は，原則として中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

○土器拓影図は，右側に断面を図示した。表裏双方の拓影図を掲載する場合には，断面を中央に配し，左側を外面，右側を内面とした。

○遺物は，原則として実測図を浄書したものを３分の１に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより異なる場合もある。

(7)　表示の見方

○住居跡番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。整理の過程で，住居跡でないと判断したものは欠番とした。

○位置は，小調査区（グリット）名で表示した。他の調査区にまたがる場合は，遺構の占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもつて表示した。

○方向は，長径ないし長軸が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを，角度で表示した（N-10°-E，N-10°W）。なお，（　）を付したものは推定を表す。

○平面形は，現存している形状の上端面で判断し，円形・楕円形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

・円形（短径：長径＝１：1.1未満のもの）

・楕円形（短径：長径＝１：1.1以上のもの）

○規模の欄の長径・短径は，平面形の上端面の計測値であり，壁高は，残存壁高の計測値である。また，平面形が円形・楕円形の場合は長径・短径とし，隅丸方形・隅丸長方形などの場合は，長軸・短軸として表示した。

○壁高は，その有無を表示した。

○ピット数の総数は，住居跡に伴うものと考えられるピットの総数を表示し，主柱は主柱穴数，（　）を付したものは推定を表す。

○炉・カマドは，その種類を記した。

○覆土は，堆積の状態が自然堆積と人為堆積を表示した。

○出土遺物は，遺物の種類を記した。

土坑一覧表

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					

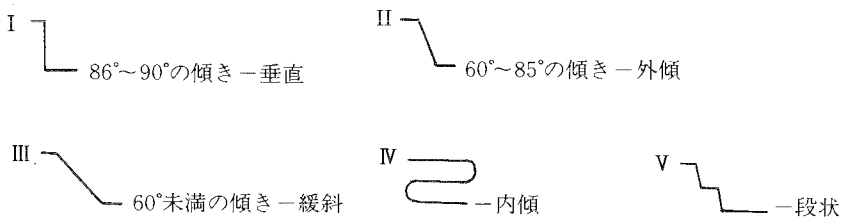
○土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また，整理の過程で遺構でないと判断したものは欠番とした。

○平面形は，円形・楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。

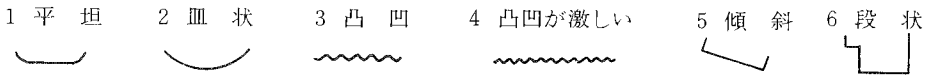
・円形（短径：長径＝１：1.2未満のもの）

・楕円形（短径：長径＝１：1.2以上のもの）

○規模の欄の深さは，確認面から坑底の最も深い場合までの計測値である。



○底面は，下記の基準を設け，番号で表示した。



○壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を記号で表示した。

○地下式壙は，土坑一覧表から除外し，文章で記述した。

土器観察表

図版番号	器　　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備　　考

○図版番号は，実測図中の番号である。

○法量は，A－口径，B－器高，C－底径，D－高台高を示し，現在値は〔　〕，復元推定値は（　）を付して示した。

○備考の欄は，土器の統一番号（P）を記した。

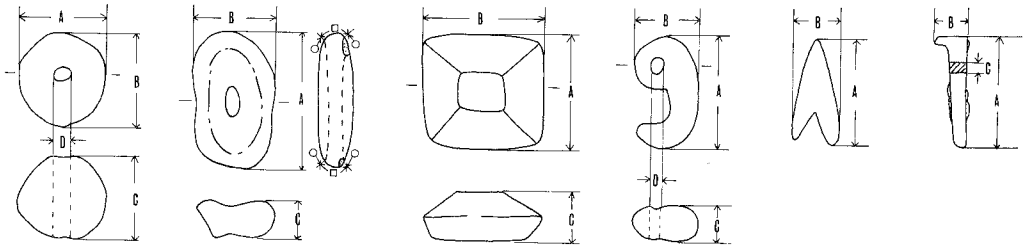
石器一覧表

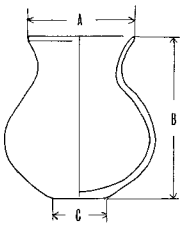
図版番号	器　　種	法　　量　　(cm)			重量(g)	石　　質	出土地点	備　　考
		最大長	最大幅	最大厚				

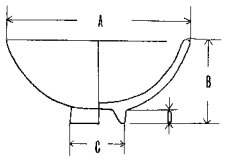
鉄・銅製品一覧表

図版番号	器　　種	法　　量	特　　徴	備　　考

○遺物の法量は，次のように計測した。







土器
A 口　径
B 器　高
C 底　径
D 高台高

土製品・石器・石製品・鉄製品
A 最大長
B 最大幅
C 最大厚
D 孔　径
←○→ 磨りの範囲
←□→ 敲の範囲

第2節　弥生時代

1　遺構と遺物

第44号住居跡（第5・6図）

本跡は，調査区$H2_{C6}$区を中心に確認された住居跡である。

平面形は，長軸6.05m，短軸5.50mを測り，主軸方向はN-57°-Wを指している。壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は住居跡東側で10cm，北側から西側にかけては15～20cmを測るが，南壁部分は，土坑の掘り込みにより攪乱を受けて不明である。壁溝は，壁下を全周し，上幅20～50cmで，U状に8～10cmの深さに掘り込まれている。床面は平坦で，全体的に踏み固められており，炉の周囲は特に硬く締まっている。炉は，住居跡のほぼ中央部に検出され，鉢形土器口縁部を利用した土器埋設炉としている。土器片は，炉床を若干掘り込んで直立した形で埋められており，炉周囲も含めてレンガ状に良く焼けている状況であり，炉床の状況から炉の使用頻度が高いことが窺えた。ピットは，9か所で検出され，主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_5・P_8と考えられ，いずれも円筒状を呈して，深さ40～70cmを測る。また，P_7・P_9は南側に位置し，住居跡の出入口部の柱穴として掘り込まれたものと考えられる。

覆土は，上層にローム粒子を少量含む黒褐色土が，下層にはローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土が，壁際にはローム粒子・ロームブロックを含む褐色土がみられ，自然堆積の状況を示している。

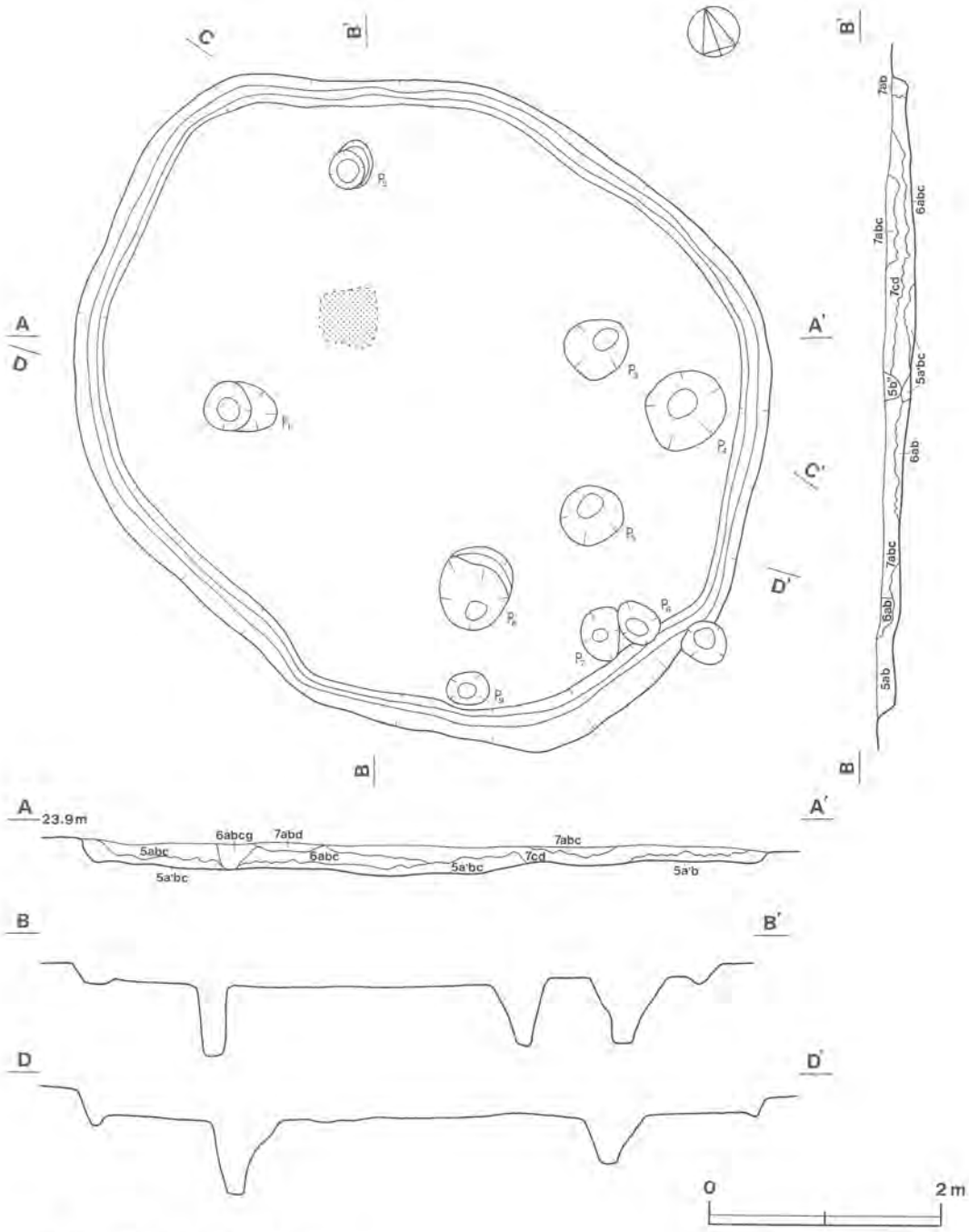
遺物は，埋設炉に使用された弥生式土器（鉢形土器）と覆土中から土師器甕・坏破片が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，本跡は，弥生時代後期の住居跡と考えられる。

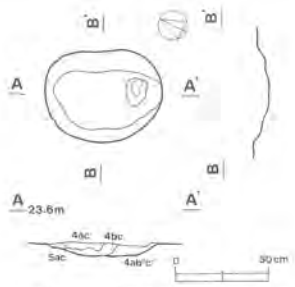
出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	壺 弥生式土器	A(6.8) B 12.9 C 5.2	胴部中央部に最大径をもち，内彎する。口縁部は折り返し口縁で，口唇部には縄文が押圧され，口縁部から胴部にかけて単節LRの回転圧痕文が施されている。	胴部から底部横・斜位方行にナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	P-31
2	広口鉢 弥生式土器	A(25.8) B(18.4) C	口唇部に指頭による押圧痕。口縁部は波状口縁で口縁部に最大径を有する。	口縁部・頸部は横方向，胴部以下は縦方向への刷毛目調整。	細粒・砂礫 黒褐色 普通	P-32
10	鉢 弥生式土器	A B(10.3) C	胴部破片。胴上半部は緩く外反し，器外面に刷毛具による刻み。	外面斜・縦位方向へナデ。 内面斜・横位方向へナデ。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	P-34

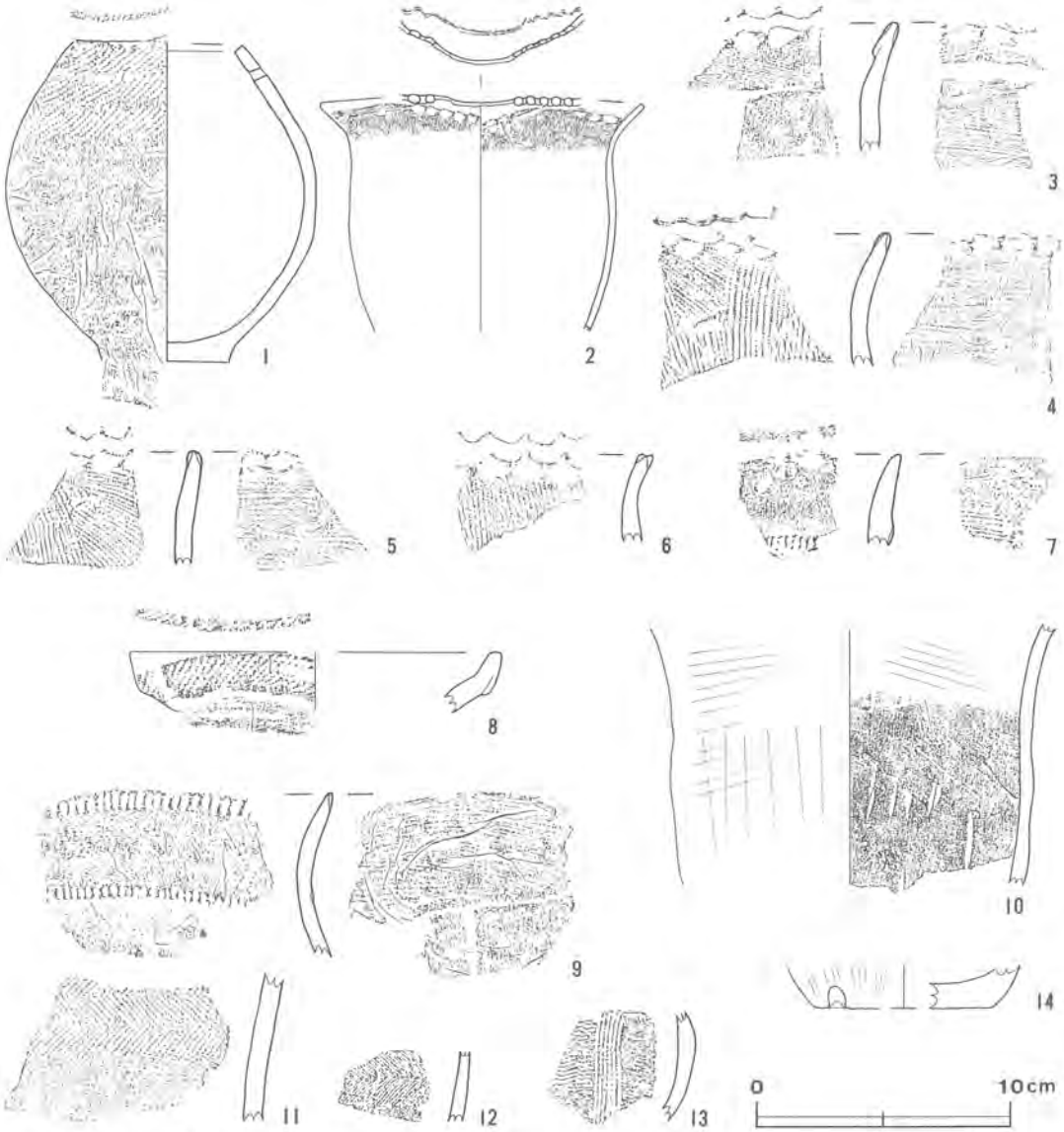


第５図　第44号住居跡実測図



第6図　第44号住居跡炉実測図

第７図２～９・11～13は，第44号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。２～５は口唇部内・外面に指頭圧痕文を施した口縁部片で，４～７は，器表面に全面刷毛目が施され，内面も刷毛目を残す。８は，折り返し口縁を有する口頸部片で，口唇部・口縁部に縄文（LR）を，９は器表面に刷毛具による刻みが，内面には刷毛目が施されている。11・12は羽状縄文を施し，13は櫛歯状文による直線文と波状文の組み合わせである。



第７図　第44号住居跡出土遺物実測・拓影図

第46号住居跡（第８図）

本跡は，調査区$H4_{C3}$区を中心に確認され，第45号住居跡の東側に位置する。本跡の北側には，中世の土坑群が検出されており，本跡は第703・704・705号土坑とそれぞれ重複し，壁及び床面の一部が掘い込まれている。

平面形は，長軸10.7m，短軸7.4mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-60°-Wを指している。

壁は，垂直な立ち上がりを示し，壁高は50cmを測るが東壁付近は崩落が激しく段差をもって立ち上がっている。壁溝は，本跡南・西壁下にかけて廻るが攪乱により部分的な検出しかできなかった。床面は，全体に住居跡の中心部に向かってなだらかに傾斜し軟弱であり，炉は認められなかった。ピットは９か所検出されたが，配列が不規則であり，主柱穴は明確に判断できなかった。

覆土は，全体に自然堆積の状況を示すが，土坑との重複地域には，土層の乱れ（攪乱）が認められたが，若干黒色土とロームブロックを含む層が堆積していた。

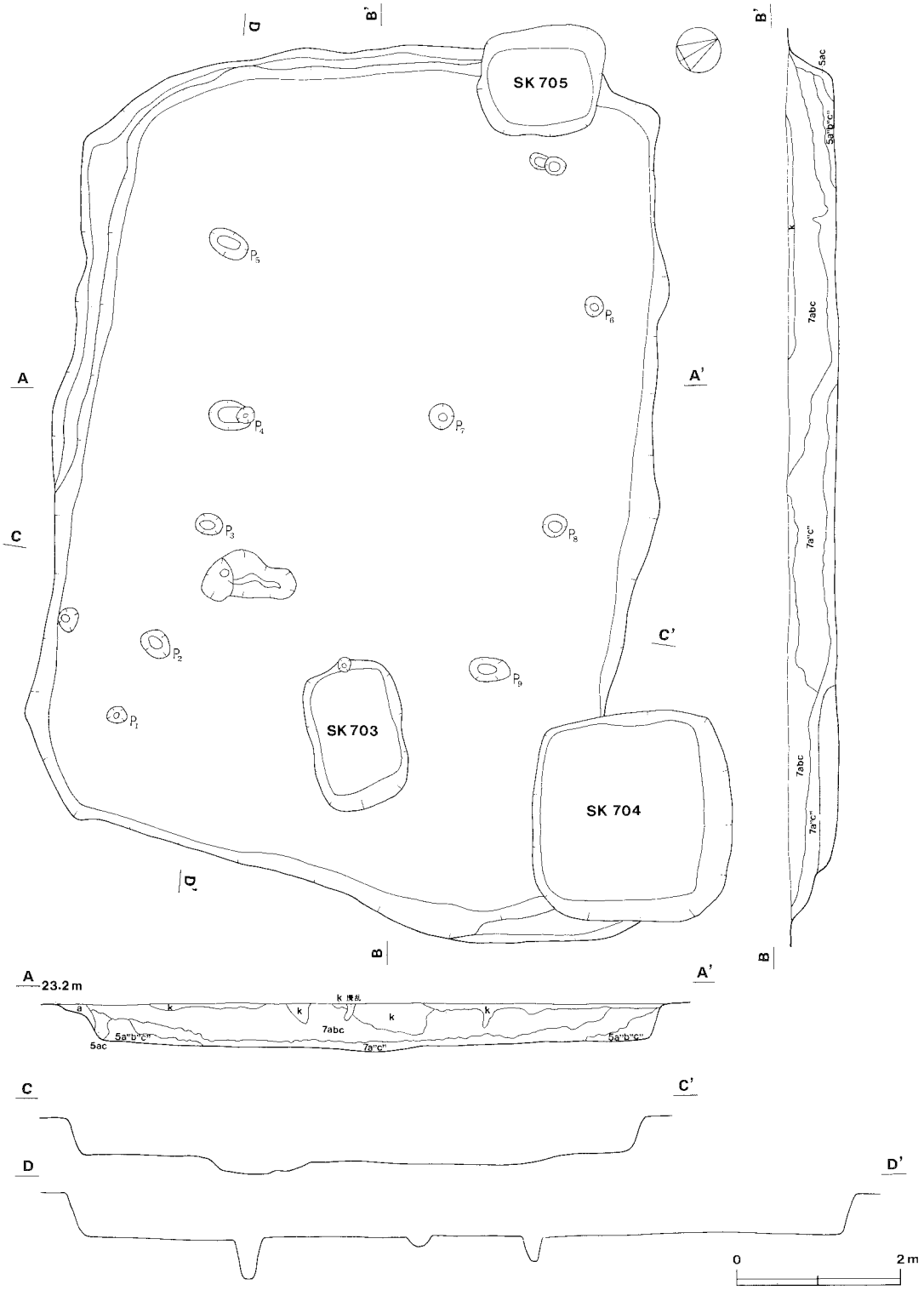
遺物は，床面より20cm程上部の覆土より，古墳時代前期の土師器甕片が出土し，また，銭・炭化米・豆類が出土しているが，これらはいずれも投棄か土坑等の構築に伴って埋没されたものと考えられる。床面からは，弥生式土器の小型壺口縁部片と壺形土器片が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，弥生時代後期の住居跡と考えられる。

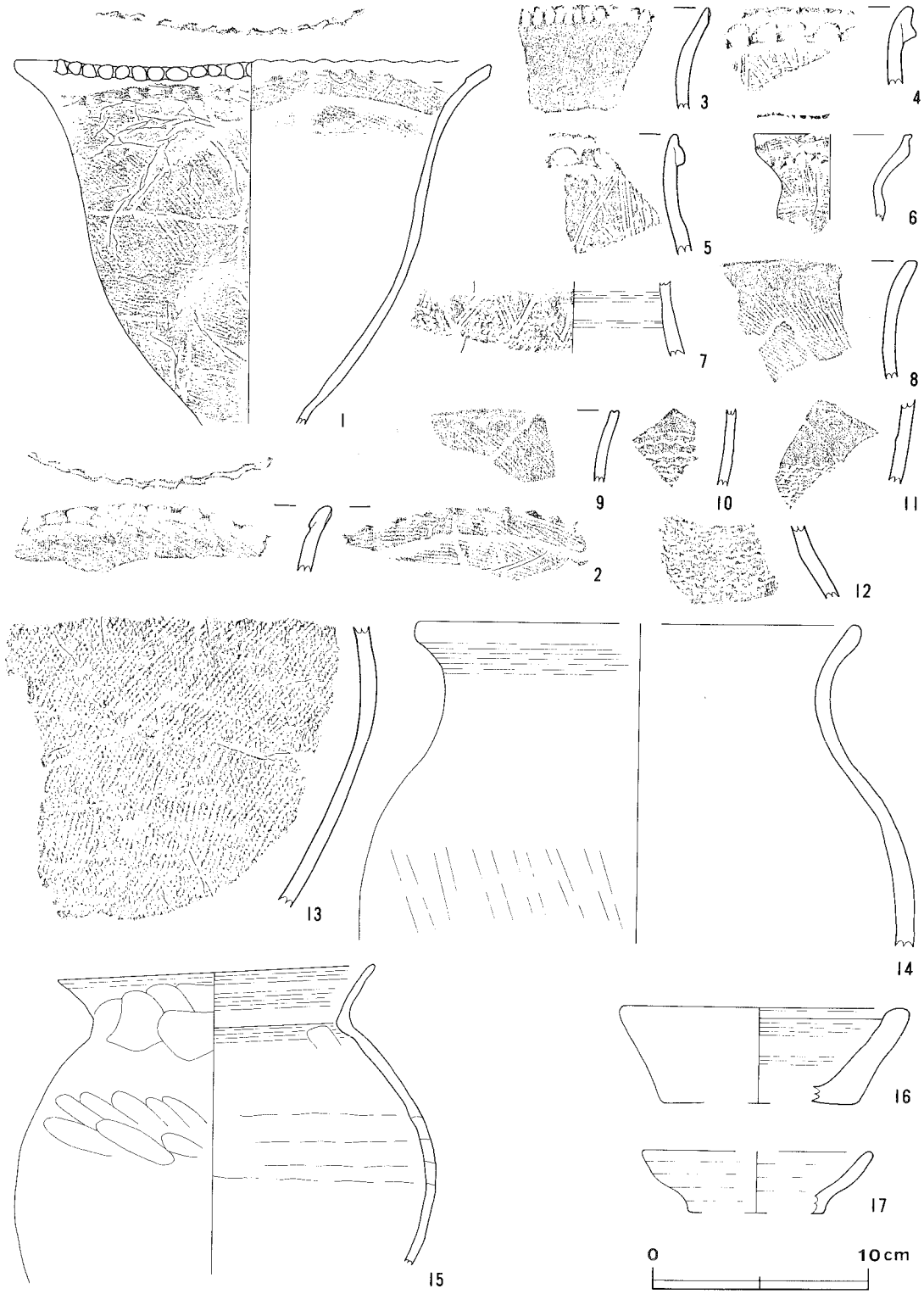
出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第９図 1	広口鉢 弥生式土器	A 22.0 B(17.1) C	口唇に若干の丸味を持たせ，指頭押捺が表裏から交互になされる。口縁部内外面に刷毛目が施され，器表面は刷毛目で覆われる。	器内・外面には刷毛目痕を残し，外面底部付近はナデられ，消される。	砂粒 にぶい橙色 良	P1
14	甕 土師器	A(20.4) B(15.0) C	胴部中位に最大径をもち，口縁部は外傾しながら開く。口唇部は丸味をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。胴部斜位・縦位の篦削り。	砂粒・礫 橙色 良	P46
15	甕 土師器	A 14.8 B(14.2) C	胴部中位に最大径をもち，頸部から口縁部にかけて強く外反する。口唇部は丸味をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。胴部斜位・縦位方向に篦削り。	砂粒 橙色 良	P2
16	小型鉢 土師質土器	A 13.5 B(4.5) C(9.0)	平底で，体部は器肉厚く，外反気味に開く。口唇部は丸味をもつ。	外面篦ナデ後に篦切り。内面ナデ。	砂粒 褐色 良	P43
17	皿 土師質土器	A 10.8 B(6.4) C(2.9)	平底で，体部は内彎気味に開き口縁端部はやや外反する。外面に強いロクロ痕。	水挽き 横ナデ	砂粒 橙色 良	P44
6	小型壺 弥生式土器	A(7.2) B(4.0) C	底部欠損。体部は外反気味に開き，口縁部は直立気味に立ち上がり，胴が張る。頸部には円形刺突文が，胴部には横・縦位の沈線文が施されている。	内面ナデ	砂粒 褐色 良	P47



第 8 図　第46号住居跡実測図



第９図　第46号住居跡出土遺物実測・拓影図

第９図２～５・７～13は第46号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。２は口唇部内・外面に指頭圧痕文・刷毛目を施こし，３は刷毛具による刻みが，４・５は口唇部に指頭圧痕文と櫛歯状が施され，７は櫛歯状文と縄文の組合せである。８・９は，口唇部を無文帯とし，口縁部から頸部にかけて縄文（ＬＲ）が，10～13は縄文が施され，13は単節ＬＲの横位回転縄文である。

第56号住居跡（第10図）

本跡は，調査区H2f_5区を中心に確認された住居跡である。

平面形は，長軸6.60m，短軸5.50mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-10°-Eを指している。住居跡の北壁の一部は土坑との重複によって壁・床面の一部が掘り込まれている。壁は，床面よりやや斜めに立ち上がり壁高20～35cmを測る。床面は全体に凹凸しているが良く踏み固められている。ピットは７か所（P_1～P_7)検出され，５本（P_1・P_2・P_5～P_7）が主柱穴で深さ80cmを測る。

覆土は，全体に黒褐色土を中心に自然堆積の状況を示している。

本住居跡からの遺物は，床面上から弥生式土器の壺の破片が出土している。

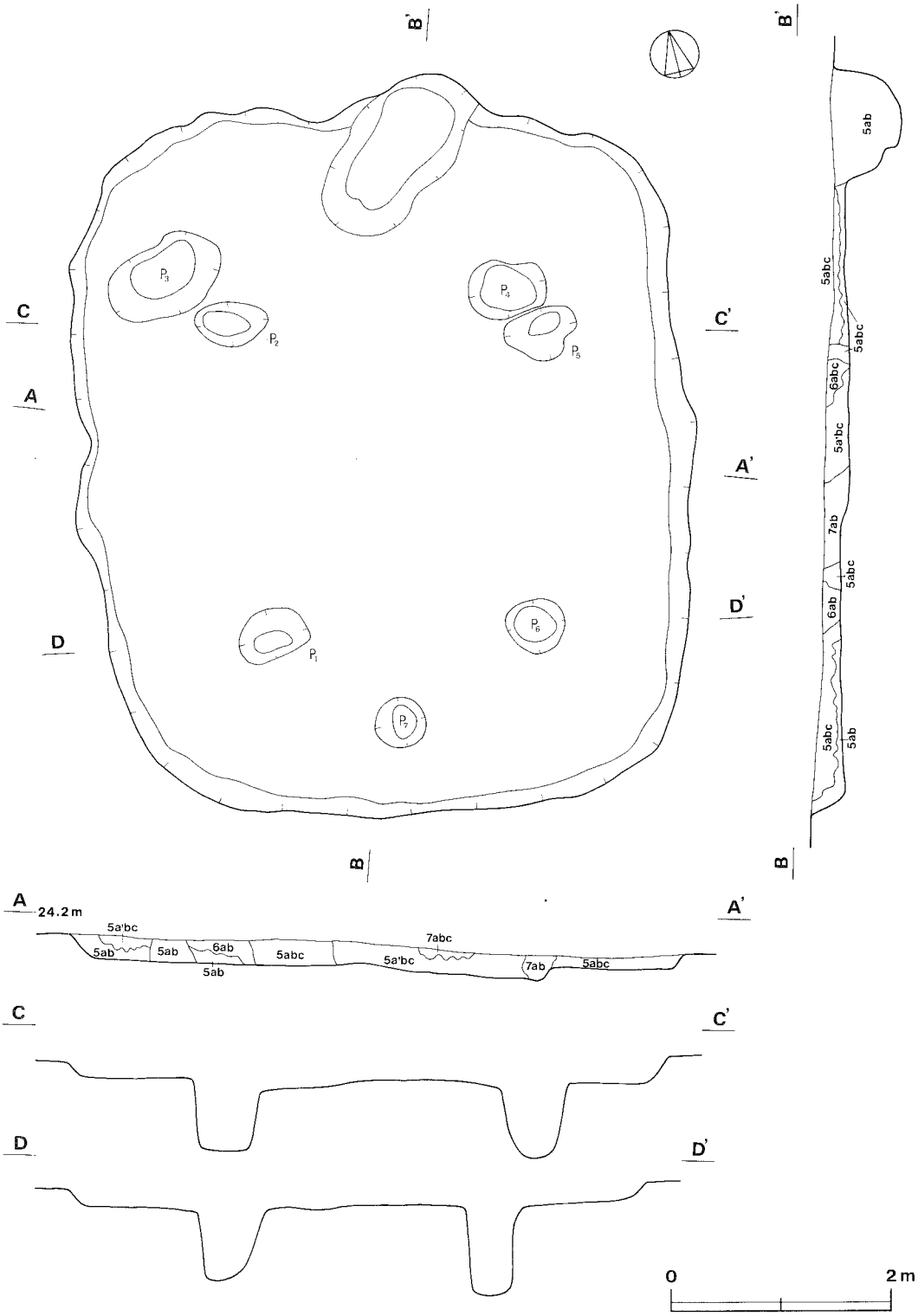
出土遺物や住居跡の形態から，弥生時代後期に位置すると考えられる。

出土遺物

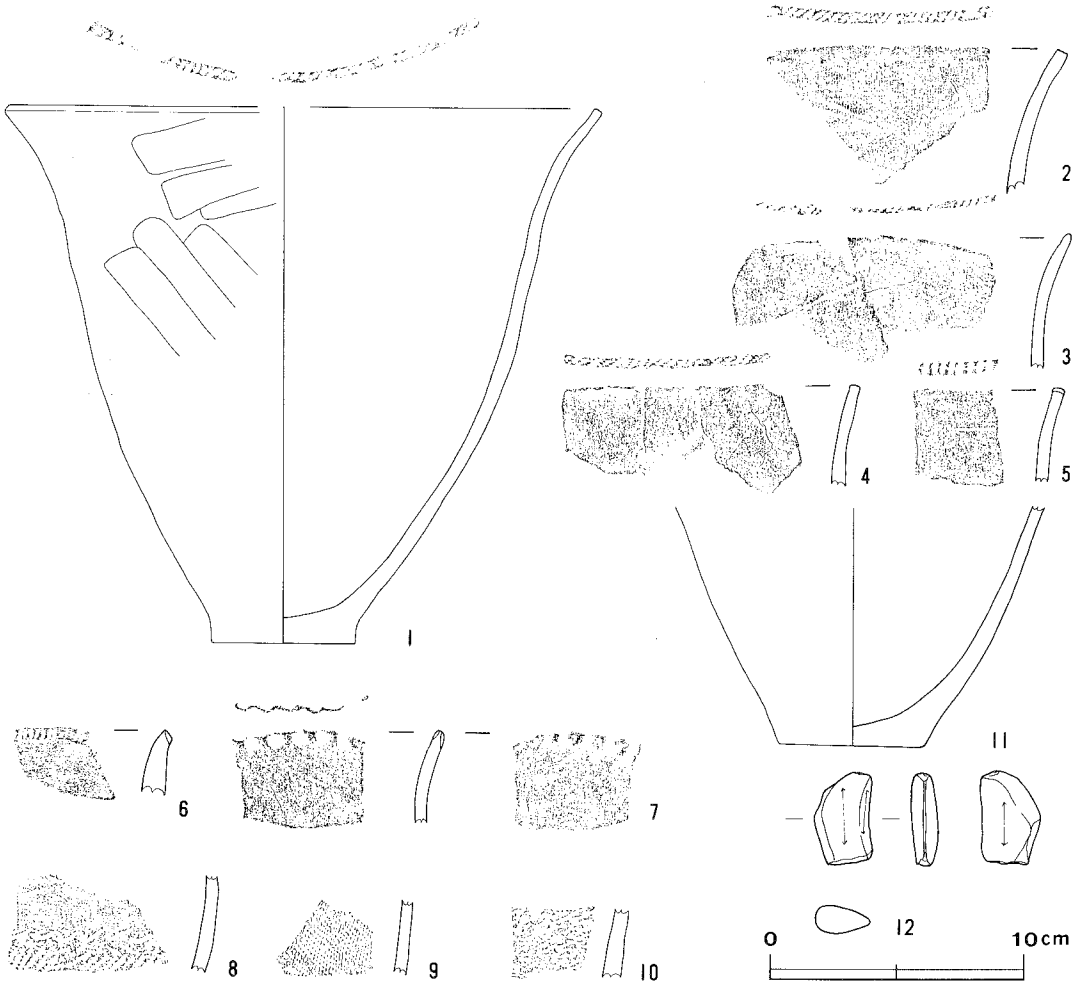
出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	広口鉢 弥生式土器	A(23.6) B 21.5 C 5.6	底部から内彎気味に立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部に最大径をもち，口唇部には縄文が施される。	原体は単節LR。頸部から胴部には斜・横方位の篦ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良	P9
2	広口鉢 弥生式土器	A B 9.5 C 5.8	底部破片。平底で内彎気味に立ち上がる。	器外面は，斜方位の篦ナデ。	砂粒 橙色 良	P102

第11図１～12は，第56号住居跡から出土した遺物で，２～10は弥生式土器片の拓影図である。２～４は口唇部に縄文(単節LR)が施され，５は口縁部に刷毛具による刻み，７には，口唇部表・裏に指頭圧痕文を施した口縁部片である。８は頸部破片と考えられ，無文帯の下に櫛描文と縄文を配して横位の櫛描文で区画をしている。９・10は胴部破片で，撚糸文・付加条縄文がそれぞれ施されている。12は砥石であり，三角形を呈し研磨痕が表・裏・側面の全面に認められる。石材は砂岩である。



第10図　第56号住居跡実測図



第11図　第56号住居跡出土遺物実測・拓影図

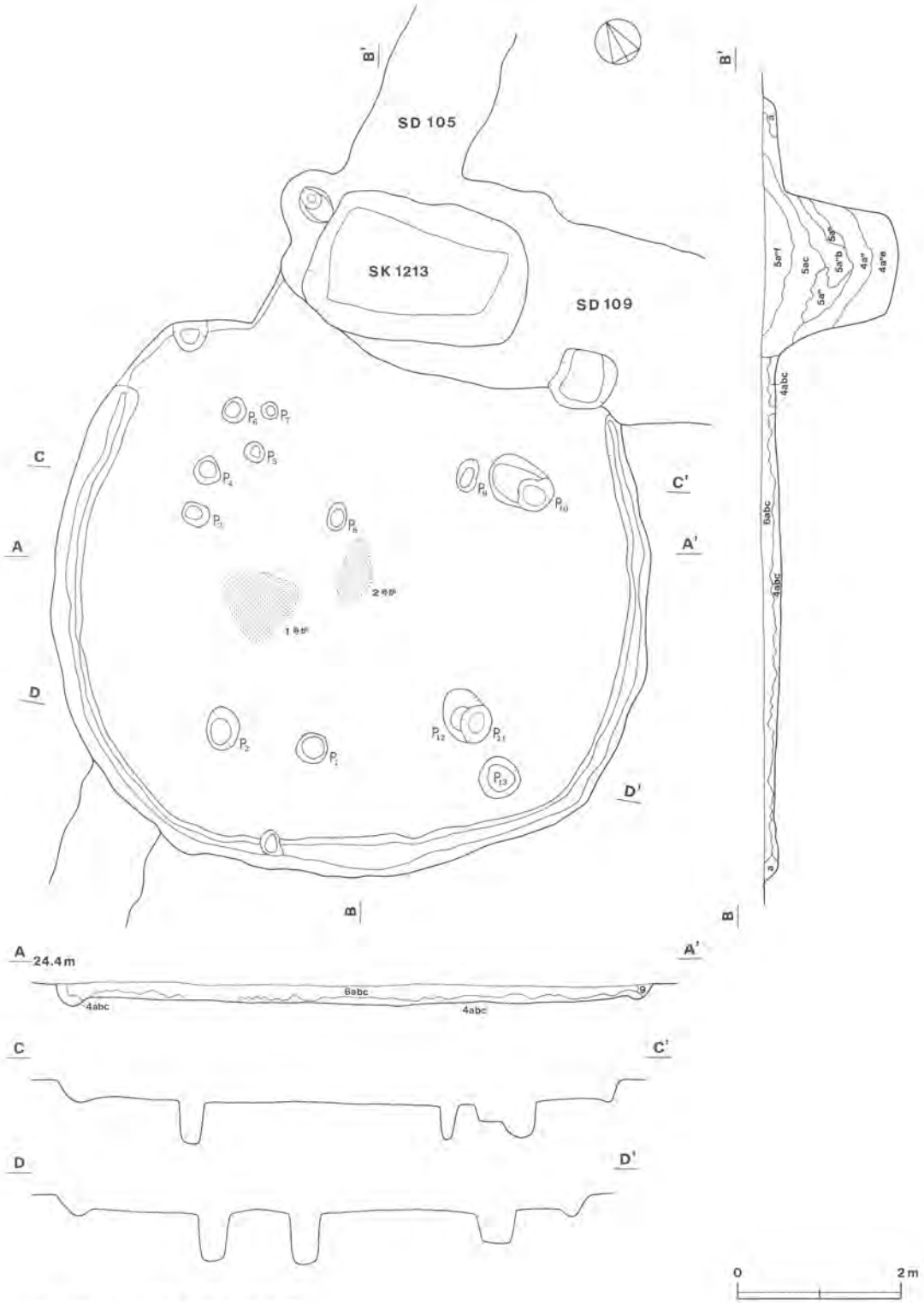
第59号住居跡（第12・13図）

本跡は，調査区H2i_7区に確認された住居跡で，第56・57号住居跡の東側に検出された。本跡の北壁と床面は，第1213号土坑によって掘り込まれている。

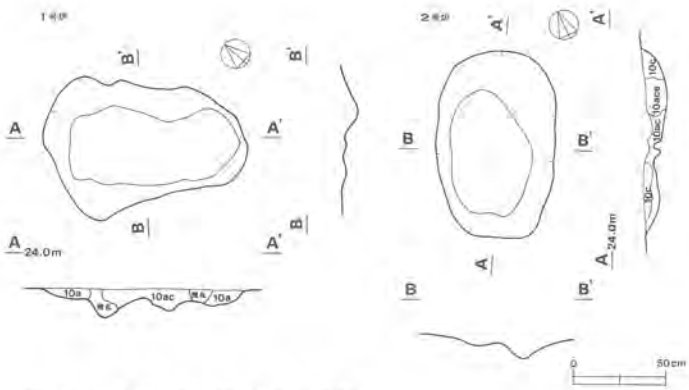
平面形は，長軸7.35m，短軸6.65mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-55°-Wを指している。

壁は，北側で重複遺構によって掘り込まれているが，残存部の壁高は25cmを測り，やや斜めの立ち上がりを示している。床面は凹凸が認められるが，全体に良く踏み固められ平坦であり，特に住居跡南側の出入口部と考えられる部分は堅緻である。

炉は，住居跡中央部に２か所検出され，炉１は楕円形を呈する地床炉であり，炉床はレンガ状に焼けている状況から使用頻度の高いことが窺える。炉２は弥生式土器の広口鉢形土器の口縁部片を使用した土器片囲い炉であり，炉内覆土の堆積状況からは，焼土類が若干検出された状態で



第12図　第59号住居跡実測図



第13図　第59号住居跡炉実測図

あることから，炉跡の使用頻度の低いことが窺えた。ピットは8か所検出され，主柱穴としてはP_1～P_5の5本が使用されたものと考えられ，深さは35～62cmを測る。

覆土は，黒褐色土，暗褐色土を中心に自然堆積の状況を示している。

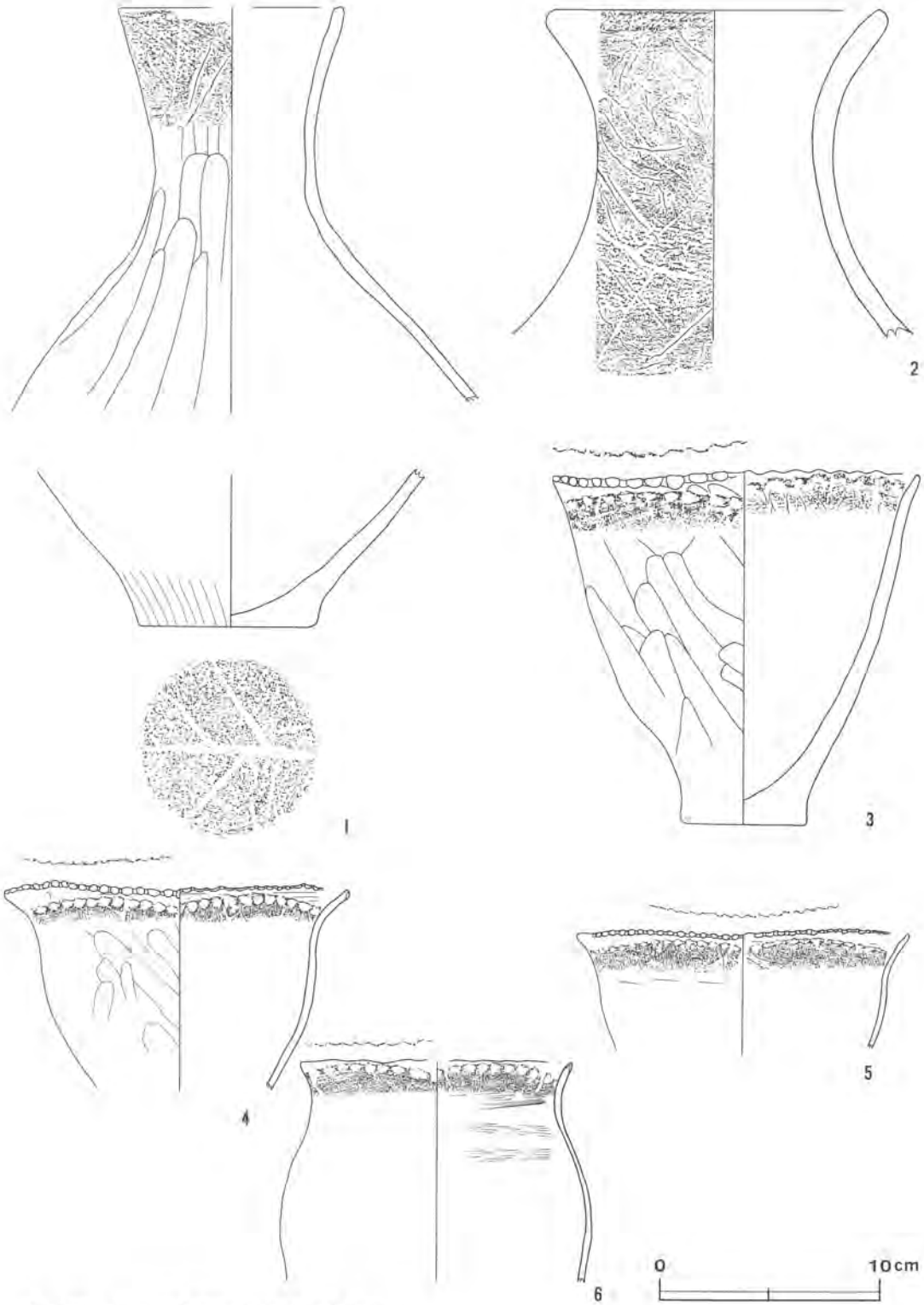
遺物は，炉跡内・床面より弥生式土器片が，覆土上層より五領式土器片が出土している。

本住居跡は，出土遺物・住居跡の形態から，弥生時代に構築されたものと考えられる。

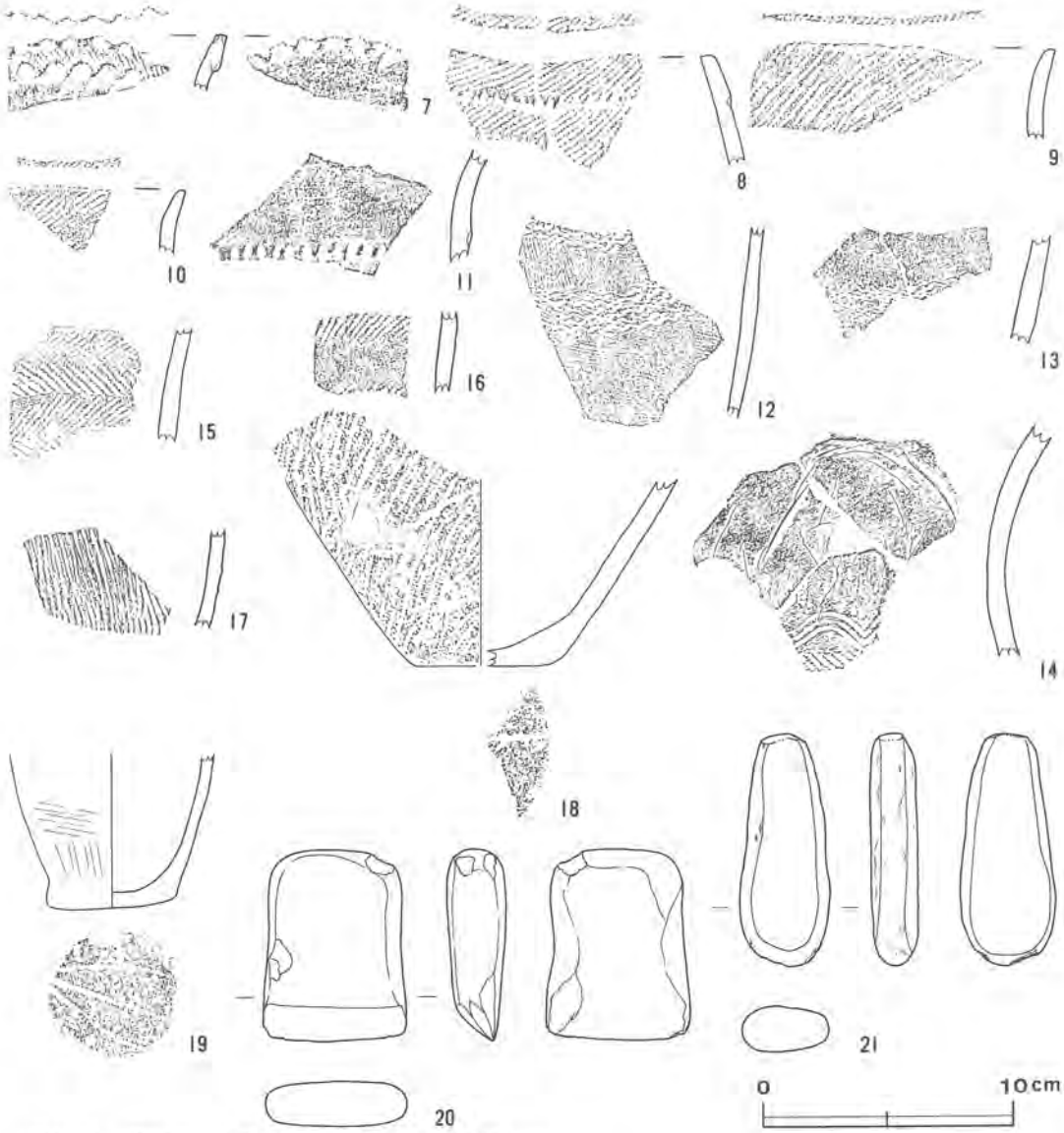
出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	壺 弥生式土器	A(10.4) B C 7.9	口唇を平坦に調整し，口縁部から頸部にかけて縄文（単節LR）を施文している。底部は平底である。	頸部から胴部にかけてナデ。	砂粒 にぶい橙色 良	P10
2	壺 弥生式土器	A 15.7 B 15.5 C	口縁部破片である。口唇部を平坦に調整し，口唇部と肩部に縄文（単節LR）を施文している。肩部から口縁部までは「く」の字状に外反する。	口縁部から肩部にかけて磨消し。	砂粒 にぶい橙色 良	P107
3	広口鉢 弥生式土器	A 16.8 B 16.4 C 5.4	底部から内彎気味に立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部に最大径をもち，口唇部内・外面に指頭圧痕文が施されている。	口縁部から頸部は，刷毛目。頸部から胴部には，斜・横方位の篦ナデ。	砂粒 橙色 良	P13
4	広口鉢 弥生式土器	A(32.0) B 11.8 C	底部欠損。胴部から内彎して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部に最大径をもち，口唇部内・外面に指頭圧痕文が施されている。	頸部から胴部にかけて，斜方位の篦削り後ナデ。	砂粒 にぶい褐色 良	P11
5	広口鉢 弥生式土器	A(30.6) B(11.2) C	口縁部破片である。頸部から口縁部にかけて外反し，口唇部は直立する。口唇部内・外面に指頭圧痕文が施されている。	口縁部以下ナデ。	砂粒 灰褐色 良	P12
6	広口鉢 弥生式土器	A(25.0) B 20.0 C	底部欠損。胴部から内彎気味に立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。口唇部内・外面に指頭圧痕文が施されている。	口縁部刷毛目。胴部内・外面ナデ	砂粒 橙色 良	P106



第14図　第59号住居跡出土遺物実測図（1）



第15図　第59号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

第14・15図１～21は，第59号住居跡から出土した遺物で，７～19は弥生式土器片の拓影図である。７～10は口縁部片で，７は口唇部表・裏に指頭圧痕文を施し，８は折り返し口縁部で，口唇部・口縁部に付加条の縄文（単節LR）と刷毛具による刻みが施されている。９・10は口唇部・口縁部の全面に縄文を施している。11は頸部破片で，刷毛具による刻みが，12～14は櫛描波状文が，15には羽状縄文，16・17には撚糸文を横位に施している。18・19は壺形土器の底部片で，底部は平底で外面に木葉痕が見られ，胴下半部には無節Ｒの撚糸文が施されている。20・21は磨製石斧である。20は，両刃に研磨が認められ，石質は角閃岩で長さ7.7cm，幅5.4cm，厚さ1.8cmを測る。

21は，刃先に使用痕跡が認められ，石質は安山岩で長さ9.4cm，幅3.5cm，厚さ1.8cmを測る。

第60号住居跡（第16・17図）

本跡は，調査区G5b$_4$区に確認された住居跡で，壁及び床の一部は道路・溝・土坑によって攪乱を受けている。

平面形は，長軸5.70m，短軸5.10mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-53°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は40～45cmを測る。床面は全体に平坦で締まっており，炉の周囲は良く踏み固められ堅緻である。炉は住居跡の中央部に検出され，皿状に15cm程掘りくぼめた地床炉である。炉床は凹凸しており，焼土の堆積状況や炉床の焼けた状態から，長期間にわたって使用された事が窺える。

ピットは4か所検出され，4本とも主柱穴であり，いずれも円柱穴で深さ20～25cmを測る。

覆土は，黒褐色・暗褐色土が自然堆積の状態であるが，壁際には崩落によるロームブロックの堆積がみられる。

遺物は，床面・覆土から弥生時代の鉢形土器片が出土している。

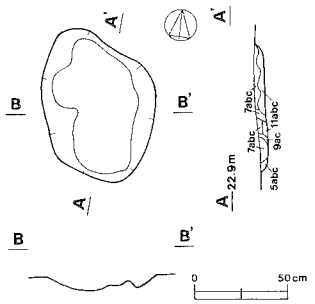
出土遺物や住居跡の形態から，弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物

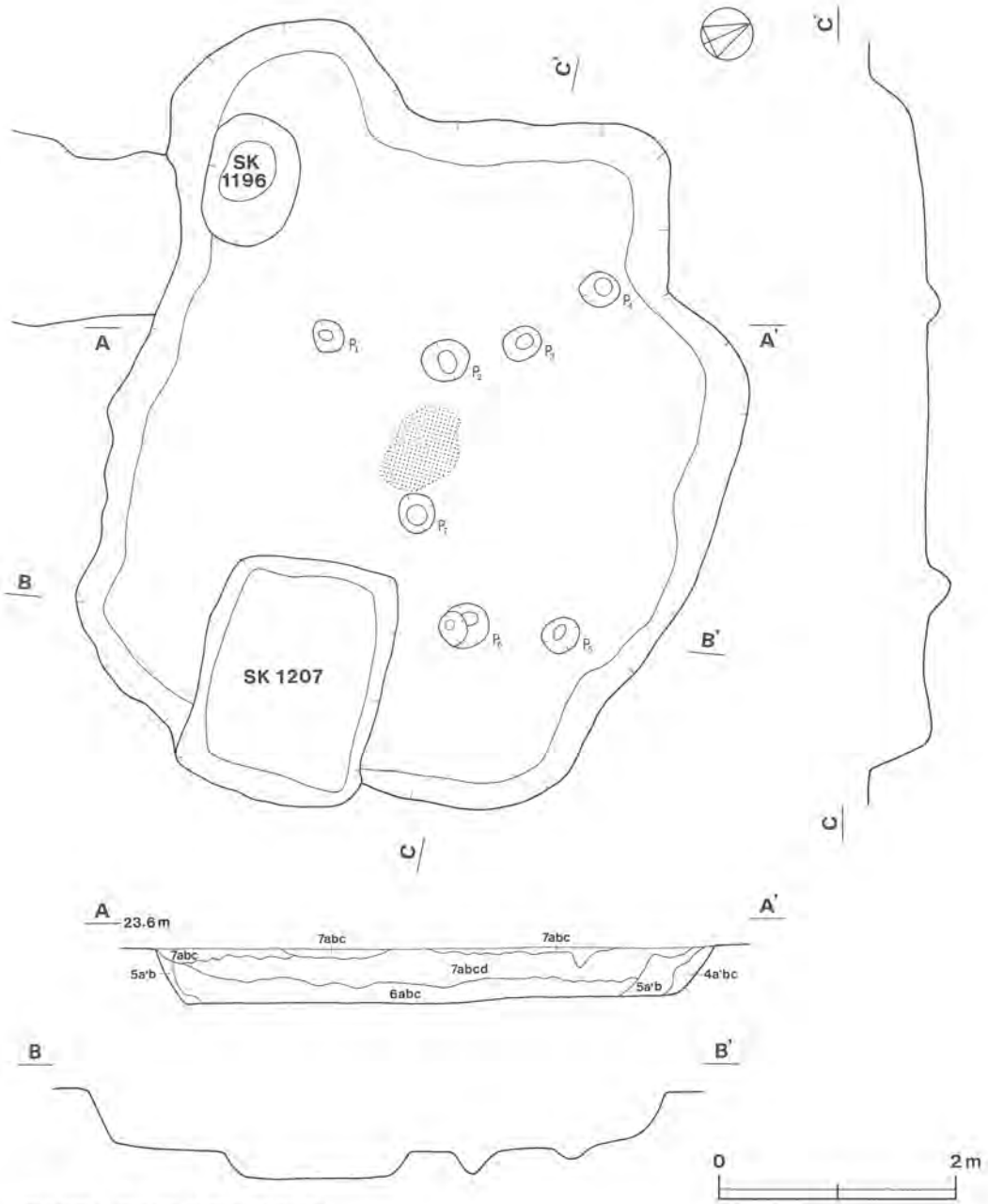
出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	壺 弥生式土器	A B 28.5 C 7.4	底部は平底を呈し，底部から胴部までは内彎し，頸部にかけては外反して立ち上がる。頸部には2か所の無文帯をもち，器外面には，縄文を施文している。	頸部内面ナデ。	砂粒 にぶい褐色 良	P14
2	深鉢 弥生式土器	A(17.0) B 9.2 C	口縁部破片である。頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。頸部に無文帯を有し，口唇部・口縁部・肩部に縄文が施されている。	頸部外面は磨消し，内面ナデ。	砂粒・礫 灰褐色 良	P110

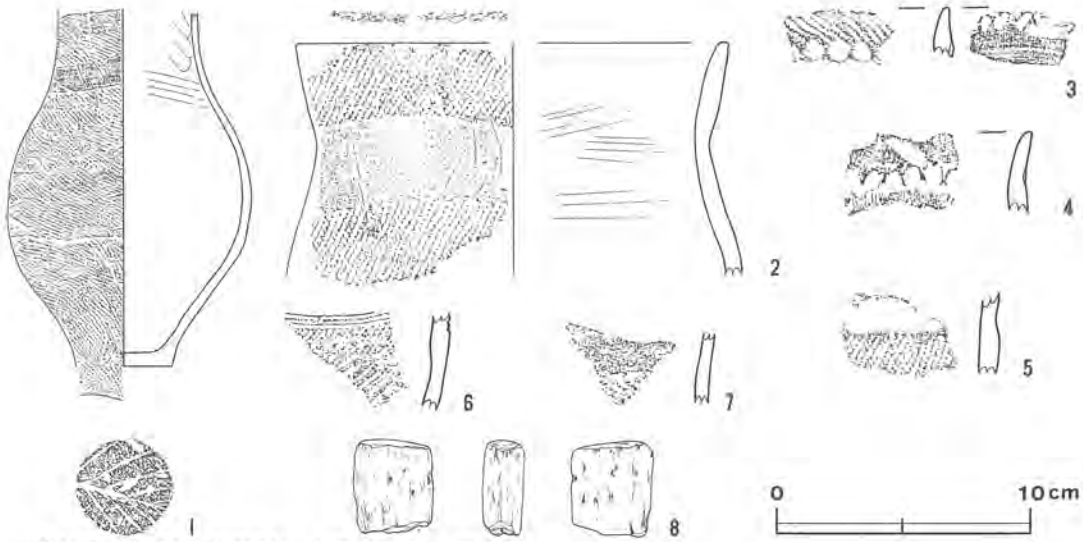
第18図1～8は，第60号住居跡から出土した遺物で，3～7は弥生式土器片の拓影図である。3は折返し口縁で，口唇部や口縁部に付加条の縄文を施し，折返し下端部と口唇部裏面に刺突を加えている。4は口縁部に刺突を加え，下部に縦位の櫛描文を施している。5～7は胴部破片で，付加条縄文がそれぞれ施されている。8は軽石で，浮子として使用されたものと考えられる。



第16図　第60号住居跡炉実測図



第17図　第60号住居跡実測図



第18図　第60号住居跡出土遺物実測・拓影図

第62号住居跡（第19図）

本跡は，調査区I5b$_3$区に確認された住居跡であるが，住居跡の南側半分は，第61・67号溝によって掘り込まれている。

平面形は，住居跡の南側の２分の１ほどが第61・67号溝によって掘り込まれているため明確ではないが，北壁は4.5mを測り，方形状を呈する住居跡と推定される。壁は，残存している北壁と東壁の一部が垂直に立ち上がり，壁高は35cm程である。床面は，全体にほぼ平坦であり，南側の一部に部分的に硬く締まっている所があり，他は軟弱である。ピットは，４か所検出され，主柱穴は配列や規模からP_1～P_4と考えられ，深さは40cmを測る。また，住居跡の形態を考えた場合，主柱穴が５本の検出例が認められることから，本跡においても５本の主柱穴の存在が考えられ，残りの柱穴痕跡は，第61号溝によって破壊されたことも考えられる。

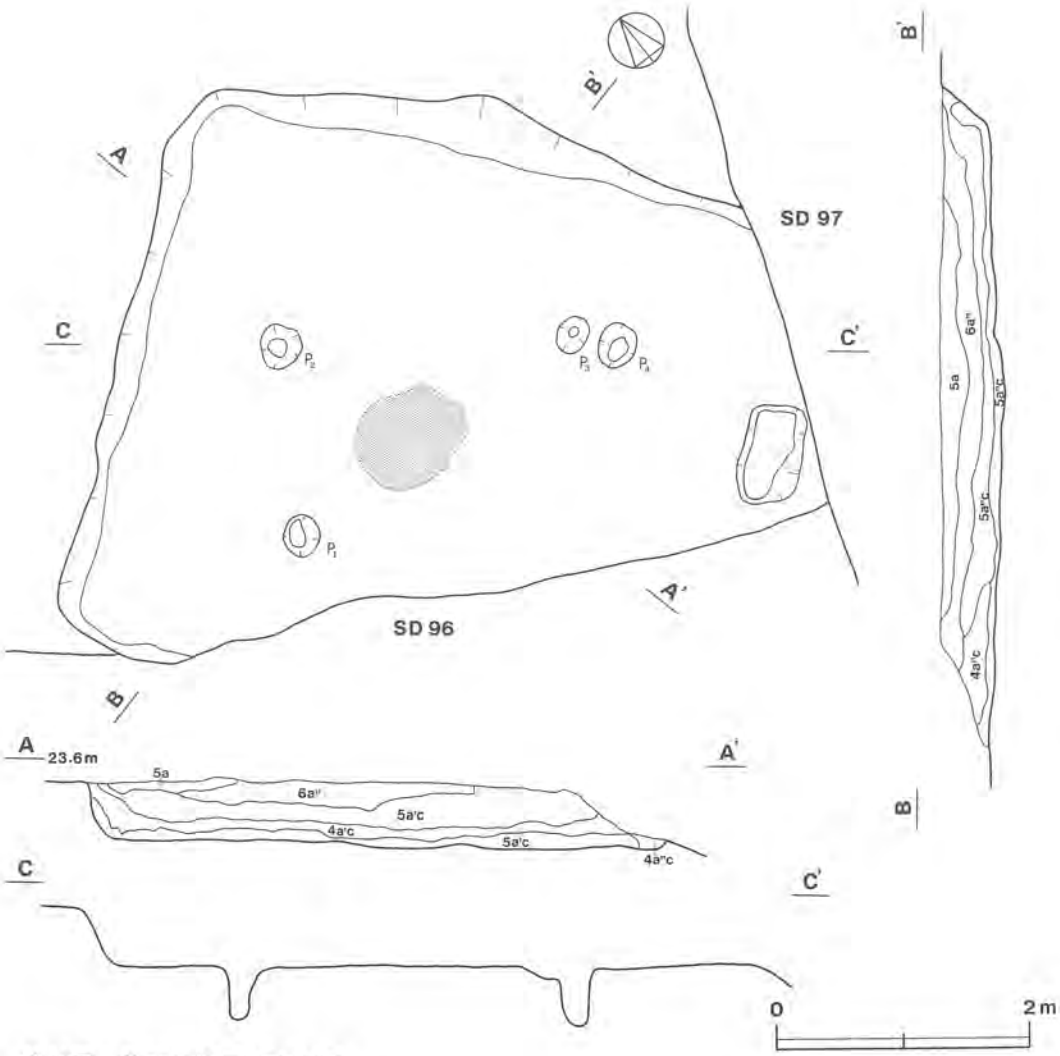
覆土は，上層から下層にかけて黒褐色土が，壁際にはロームブロック・焼土層が含まれている状況から，本跡の堆積状況は自然堆積を呈している。

遺物は，ピット（P_2）内から弥生式土器が出土している。

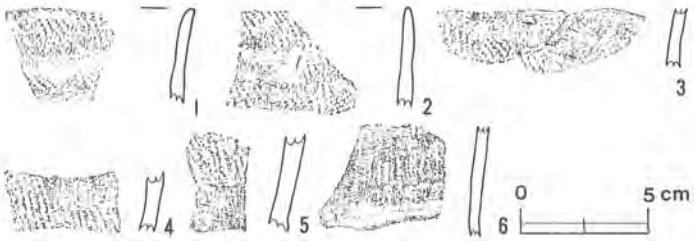
遺物や住居跡の形態から，弥生式期の住居跡と考えられる。

出土遺物

第20図１～６は，第62号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。１～４は口縁部破片で，５～７は胴部破片である。１～７には，いずれも付加条の縄文が施されている。



第19図　第62号住居跡実測図

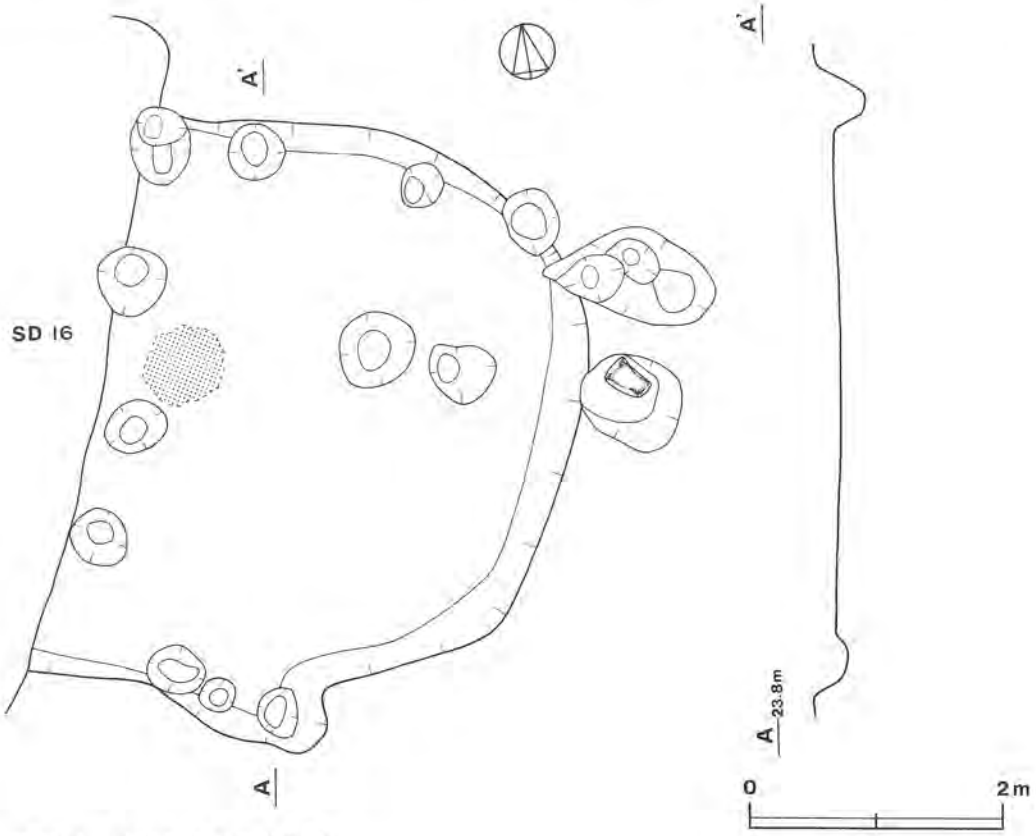


第20図　第62号住居跡出土遺物実測・拓影図

第63号住居跡（第21図）

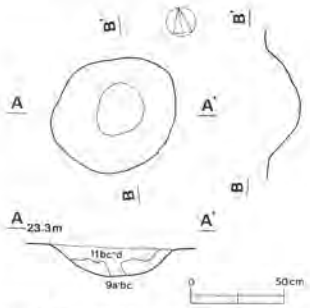
本跡は，調査区F4b_3区を中心に確認された住居跡である。第55号住居跡の南側に位置し，西側は第16号堀と重複し，東・南側は土坑によって掘り込まれている。

残存部からの推定平面形は，長軸4.5m，短軸3.8mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-32°-Eを指すものと思われる。壁は，北東側・西側・南側で重複遺構によって掘り込まれているため不明であるが，残存壁高は15cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は，やや凹凸状を呈し，残



第21図　第63号住居跡実測図

存している炉の周囲が良く踏み固められて堅緻である程度で，大部分は，重複による攪乱によって確認はできなかった。炉は，住居跡の中央部に位置し，楕円形を呈し皿状に掘り込まれ，覆土中に少量の焼土を含み炉床はレンガ状に焼けている。炉の周囲の床面には，焼土の堆積がみられた。ピットは，土坑等（掘立柱建物跡）との重複から，本住居跡に伴う柱穴は確認できなかった。



第22図　第63号住居跡炉実測図

覆土は，自然堆積の状況を示し，全体に極暗褐色土・ロームブ

ロックを含むが，重複部分は特にロームブロックの混入が多い。

遺物は，覆土から中世の土師質土器が出土しているが，これらの土器は本跡に伴うものでなく，土坑からの混入物である。

調査の結果，住居跡の形態から，本跡は，弥生時代後期の住居跡である。

(1) 環濠について（第23図）

調査区G2・3，H2・3区から検出された第68号溝であるが，調査エリアの関係上，本跡の全容を把握することはできなかったが，溝の形態，位置等から判断して，本跡は弥生期に伴う環濠として捉らえた。

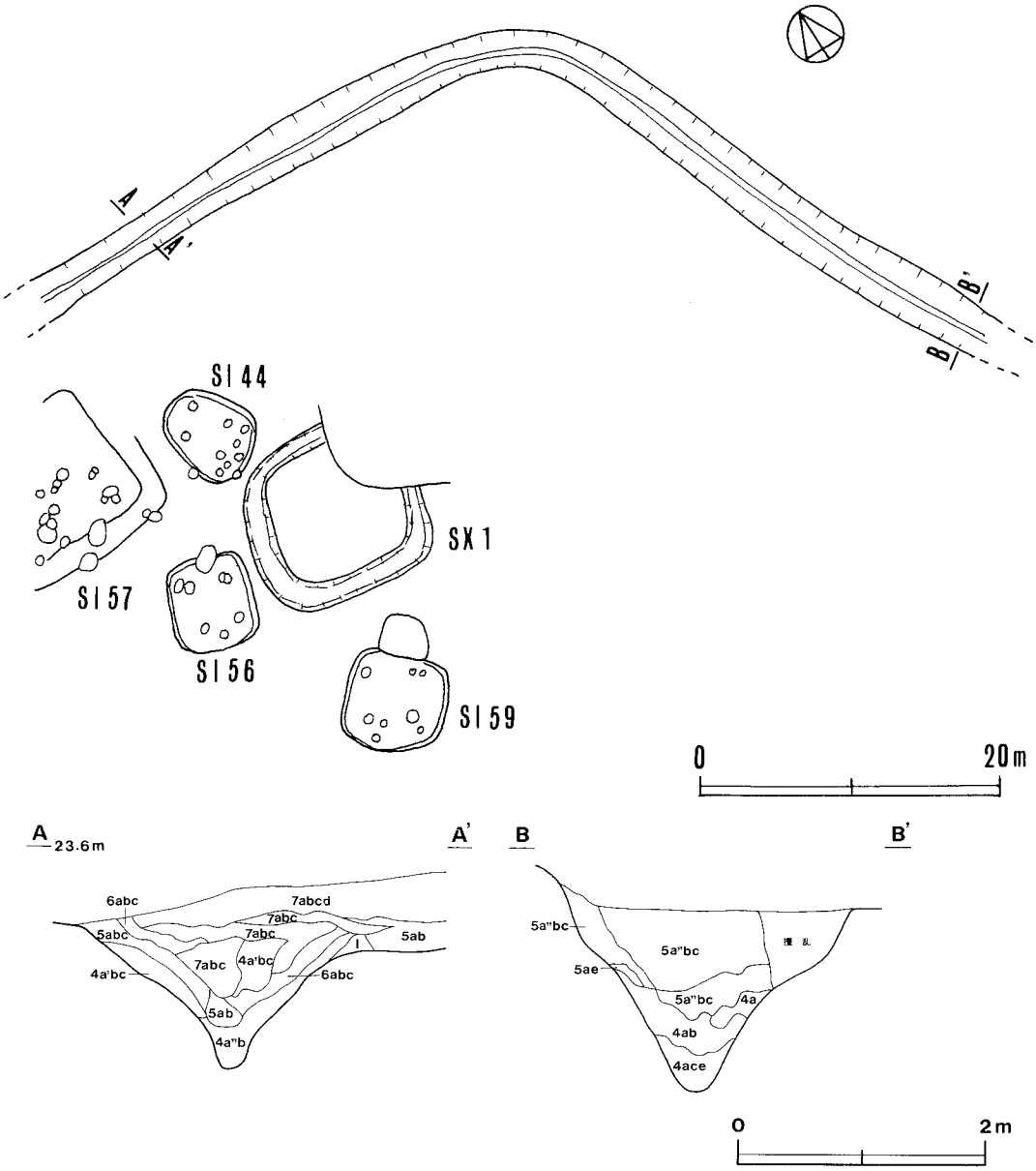
調査された濠の全長は，77mを測り，G3区で西から南東方向へ屈曲している。濠の上幅3m，底幅20cm，深さ1.5mを測り，壁は40°の傾斜で立ち上がり，断面形状は「V」状を呈し，濠は南側崖面に向かって楕円形に廻る様相を呈している。

濠内からは，弥生期の住居跡2軒，古墳時代の住居跡1軒，方形周溝遺構1基が検出され，弥生期の住居跡はいずれも中期～後期に位置する。

本跡の調査は，濠内の一部の調査であり，濠内での集落構成の把握はできなかったが，環濠については，様々な推測がなされており，集落区画あるいは防禦施設と考えられ，弥生時代中期の遺跡からはかなりの検出がみられている。

千葉県大塚遺跡[1]・根田遺跡[2]は，いずれも弥生時代中期の環濠集落で，環濠の性格を「集落の防禦」または「要害」の施設として位置づけしている。

これらの点から，屋代B遺跡から検出された弥生期の集落構成は，台地南側で中期末に環濠を伴った集落が形成され，後期に入るや，台地東側に集落が移動構成されたものと考えられるが，台地上における弥生期の集落の構成を把握するための資料が十分に得られず，断定することは不可態である。また，前述した弥生期の集落変遷も一つの方向性として考えておきたい。



第23図　環濠遺構実測図

第3節　古墳時代

1　遺構と遺物

(1)　鬼高期

第45号住居跡（第24図）

本跡は，調査区G2g_9区を中心に確認され，第44号住居跡の北側に位置し，住居跡の東壁及び床面の一部は，第714号土坑によって掘り込まれている。

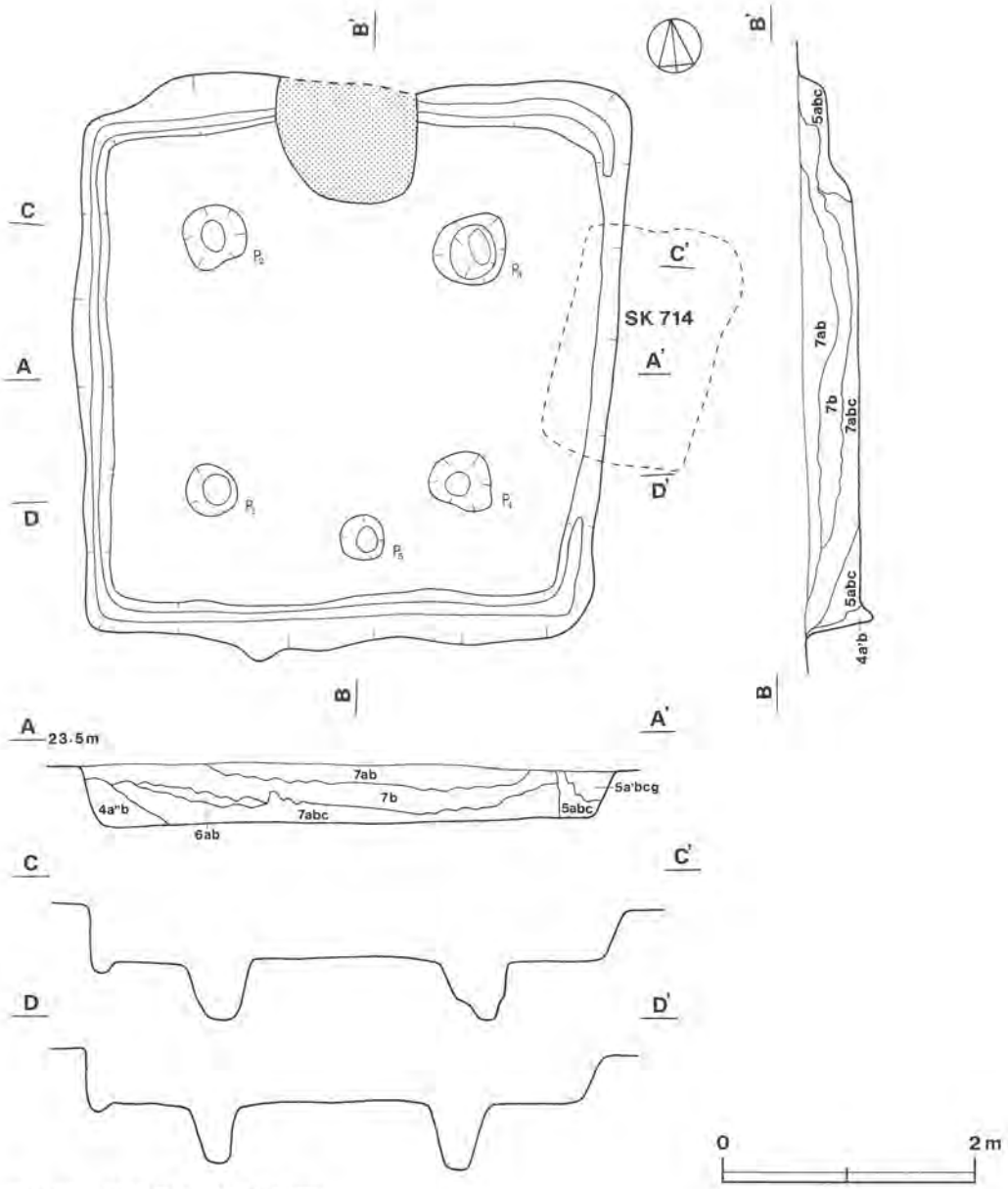
平面形は，長軸4.60m，短軸4.35mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-10°-Eを指している。壁は，全体に垂直な立ち上がりを示し，壁高は30cmを測る。壁構は，幅15cm，深さ12cmでU状を呈するが，東壁の一部は土坑により攪乱を受けて検出されなかった。床面は全体的に平坦で良く踏み固められ，特に竈付近は堅緻である。竈は，北壁中央部に付設されている。煙道部は近世の溝により破壊されて現形は不明であるが，袖部・天井部の遺存状態は良好である。竈の規模は，長径1.1m，短径0.95mを測り，壁を掘り込んで粘土，砂，ロームで構築され，焚口及び燃焼部の状況から竈は長期間にわたり使用されていたことが窺える。ピットは，5か所（P_1～P_5）検出され，5

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	埦 土師器	A(18.8) B 3.4 C 8.9	丸底で，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部でさらに内彎する。	口縁部横ナデ。他は横位の篦ナデ。底部は篦切り。	砂粒 褐色 普通	P36
2	埦 土師器	A(19.6) B(7.1) C	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，体部と口縁部の境に稜をもち，口縁部は外反する。	口縁部横ナデ。底部篦切り。	砂粒・砂礫 褐色 普通	P40
3	埦 土師器	A(16.2) B(7.1) C	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。	口縁部横ナデ。他は横位の篦ナデ。	砂粒・砂礫 橙色 普通	P38
4	高坏 土師器	A B(6.3) C(11.0)	裾部は大きく開く。脚部は内傾しながら立ち上がる。	脚部縦方向に篦ナデ。裾部は横位のナデ。	砂粒・砂礫 明赤褐色 良	P39
5	皿 土師質土器	A(10.2) B 2.7 C(5.6)	平底で，体部は内彎気味に開き，口縁端部はやや外反する。外面に強いロクロ痕。	水挽き。 横ナデ。 底部回転糸切り。	細砂 にぶい橙色 普通	P41
6	皿 土師質土器	A 6.9 B 5.2 C 2.0	平底で，体部は器厚を減じながら直線的に開く。体部内・外面に煤と思われる黒色の付着物。	水挽き。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P37

第25図7は第45号住居跡から出土した土製支脚である。



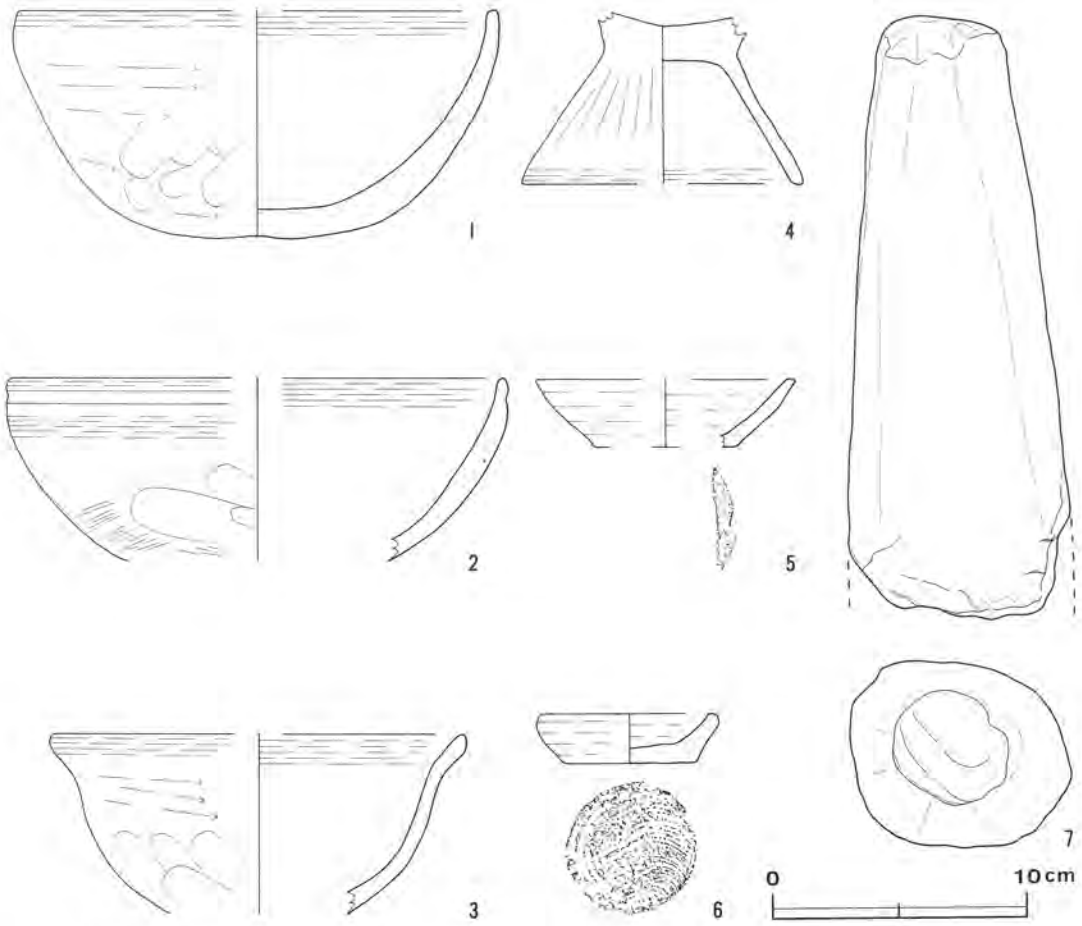
第24図　第45号住居跡実測図

本いづれも主柱穴であり，深さ50～55cmを測る。

覆土は，全体に自然堆積を示すが，東側は中世の土坑による攪乱を受けている。

遺物は，大半が覆土中層から土師器甕・坏破片が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，本跡は，古墳時代後期鬼高期の住居跡と考えられる。



第25図　第45号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡

本跡は，調査区D5a$_7$区に確認され，第５号土塁の東側に位置する。

住居跡の西側半分には土塁が構築され，東側は掘立柱建物跡による攪乱が著しく，わずかに床面の一部と竈の袖部と燃焼部が残存しているに過ぎない。床面の残存部分は良く踏み固められているが，大部分は，他の遺構によって破壊されている。竈は，粘土・砂によって構築され，袖部には補強材として土師器甕片が使用されている。また，燃焼部の状況から判断すると，長期間に亘って使用されたことが窺える。

本住居跡は，住居跡の上に構築された土塁が現状保存されることになり，住居跡の全容は把握できなかった。

遺物は，土師器甕・須恵器壺が出土している。

出土遺物から，古墳時代後期鬼高期に位置する住居跡と考えられる。

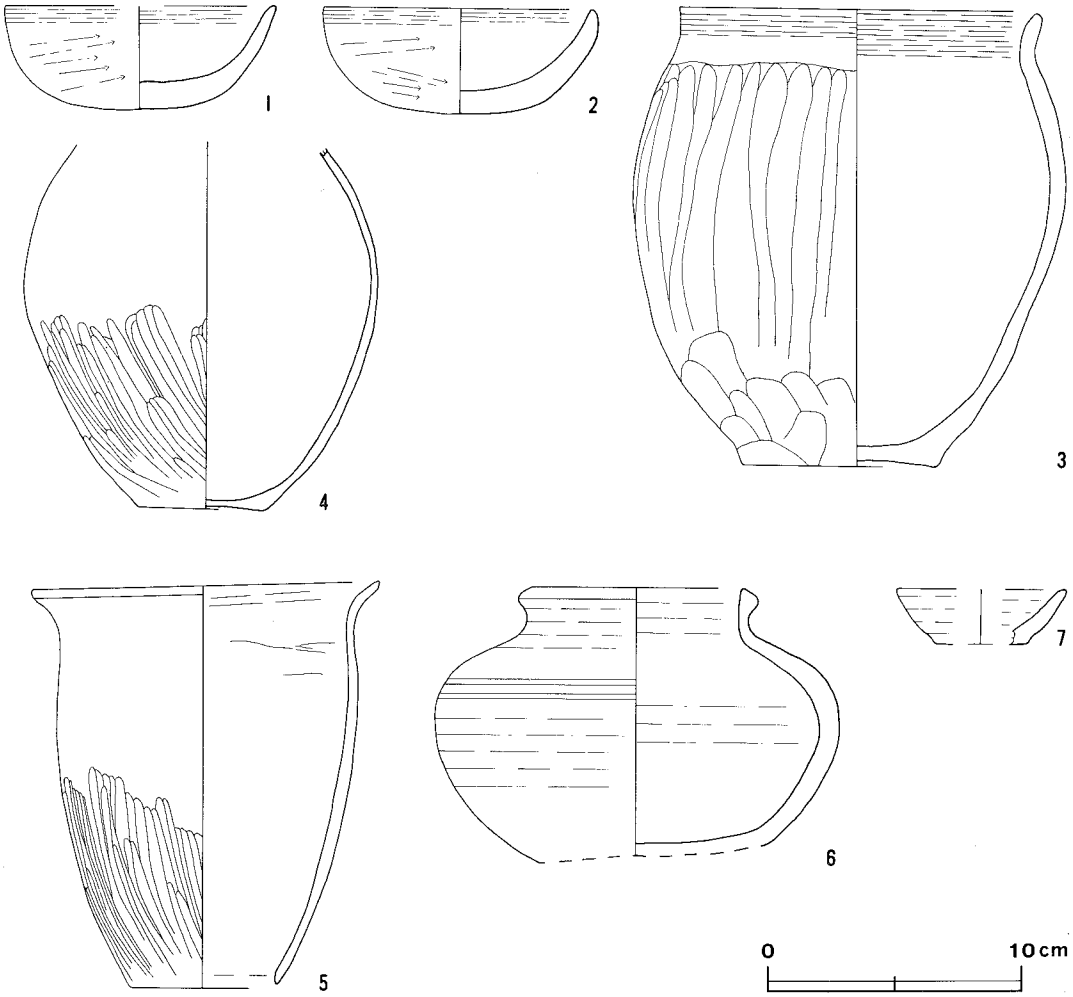
出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	坏 土師器	A(10.8) B 4.1 C 4.0	底部はやや平坦な丸底で，器肉が厚い。体部は内彎気味に開き，口縁部は外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面篦削り後，ナデ。	砂粒 黒褐色 良	P73
2	坏 土師器	A 10.8 B 4.2 C 5.0	底部はやや平坦な丸底で，器肉が厚い。体部は内彎気味に開き，口縁部は直立する。器高の高い深めの坏。	口縁部内外面横ナデ。体部外面斜方位の篦削り。	砂粒 明褐色 良	P72
3	甕 土師器	A 14.3 B 7.7 C 18.1	底部は平底で，胴中位に最大径をもち，内彎しながら開いて立ち上がり，上半部で内彎の度合を強める。頸部から口縁部にかけて外反し，口縁部外面には強い横ナデによる凹線が巡る。	口縁部内外面横ナデ。胴部・底部外面粗い篦削り。	砂粒 橙色 良	P7
4	甕 土師器	A B(29.0) C(9.8)	胴部中位に最大径をもち，内彎しながら立ち上がる。	胴部・底部外面篦削り後ナデ。	砂粒 にぶい褐色 良	P6
5	甑 土師器	A 27.4 B 31.8 C 11.4	胴部は緩やかに内彎しながら，わずかに外上方に開き，口縁部は外反する。底部穿孔（孔径5.7cm）	口縁部内外面横ナデ。胴部外面粗い縦位の篦削り。穴端は内・外面とも篦ナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 良	P5
6	壺 須恵器	A 9.9 B 11.0 C(9.0)	底部はやや平坦な丸底で，胴部中位より上に最大径をもち，下半部は内彎し，上半部は強く内反して頸部に移行する。頸部は直立し，口縁部は緩やかに外反する。肩部には2条の細い凹線を巡らしている。	体部は水挽き（右回転）	砂粒・砂礫 灰白色 良	P75
7	皿 土師質土器	A(6.8) B 2.2 C(3.6)	平底で，体部は直線的に開き，口縁部はやや内傾する。内・外面にロクロ痕。	水挽き。	砂粒 にぶい橙色 良	P74

第50号住居跡

本遺跡は，調査区H4区に確認されたが，調査の結果，土層堆積状況・形態等から鑑み，土坑として取り扱うことにした。



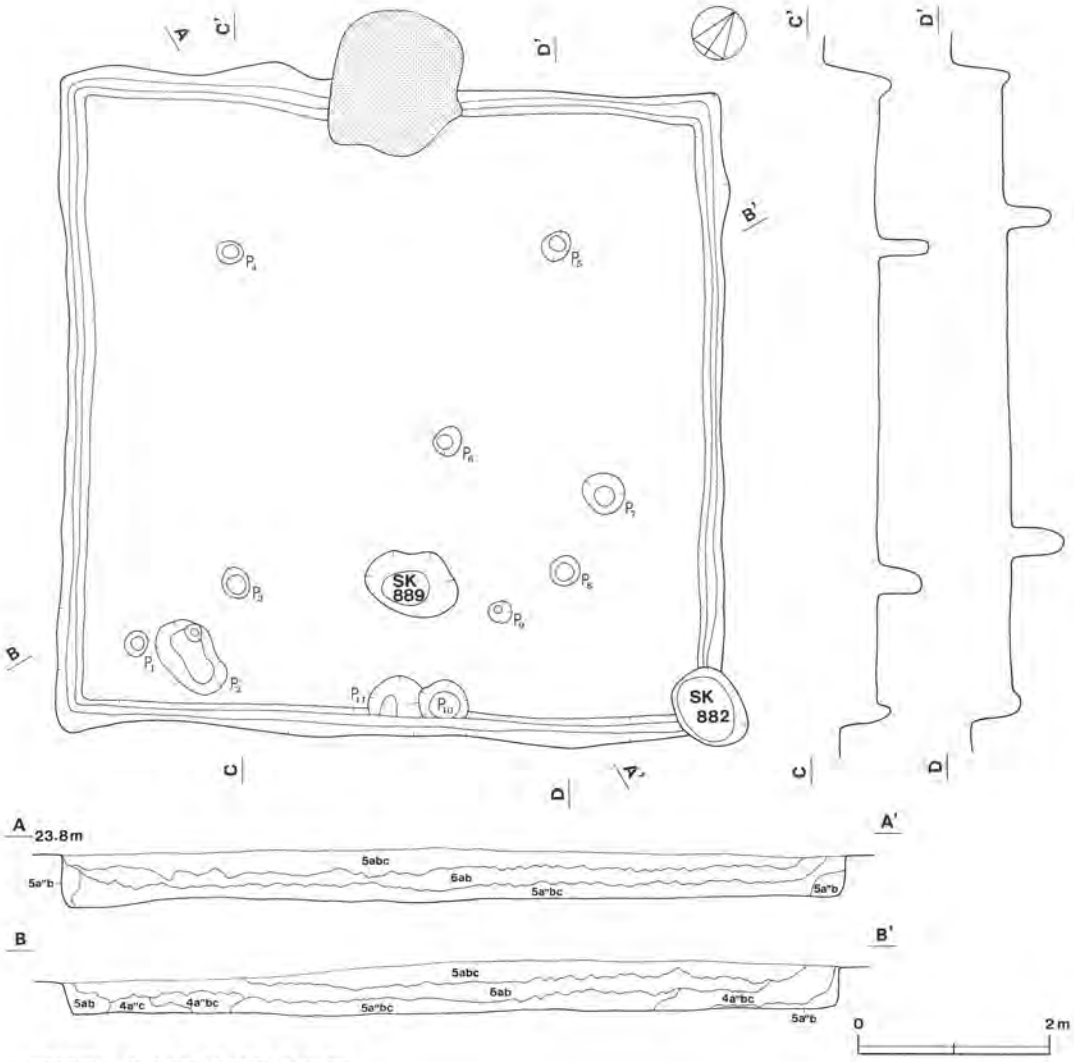
第26図　第49号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡（第27図）

本跡は，調査区E5a_2区を中心に確認され，第47号住居跡の北側に位置し，北壁コーナーの一部は，第17号堀によって掘り込まれて破壊されている。

平面形は，長軸6.90m，短軸6.70mの方形を呈し，長軸方向はN－33°－Wを指している。

壁は垂直に立ち上がり，壁高は50cmを測る。周溝は，上幅20～25cm，深さ10～15cm前後でV字形を呈して全周する。床面は全体に平坦で良く踏み固められている。竈は，北壁中央部に付設され，壁を掘り込み粘土・砂によって構築されているが，壁外に延びている煙道部・袖部の一部は土坑によって攪乱を受けている。焚口及び燃焼部の状況から，竈は長期間に亘って使用されていたものと思われる。ピットは11か所検出されたが，住居跡に伴うピットは4本（P_3～P_5・P_8）で



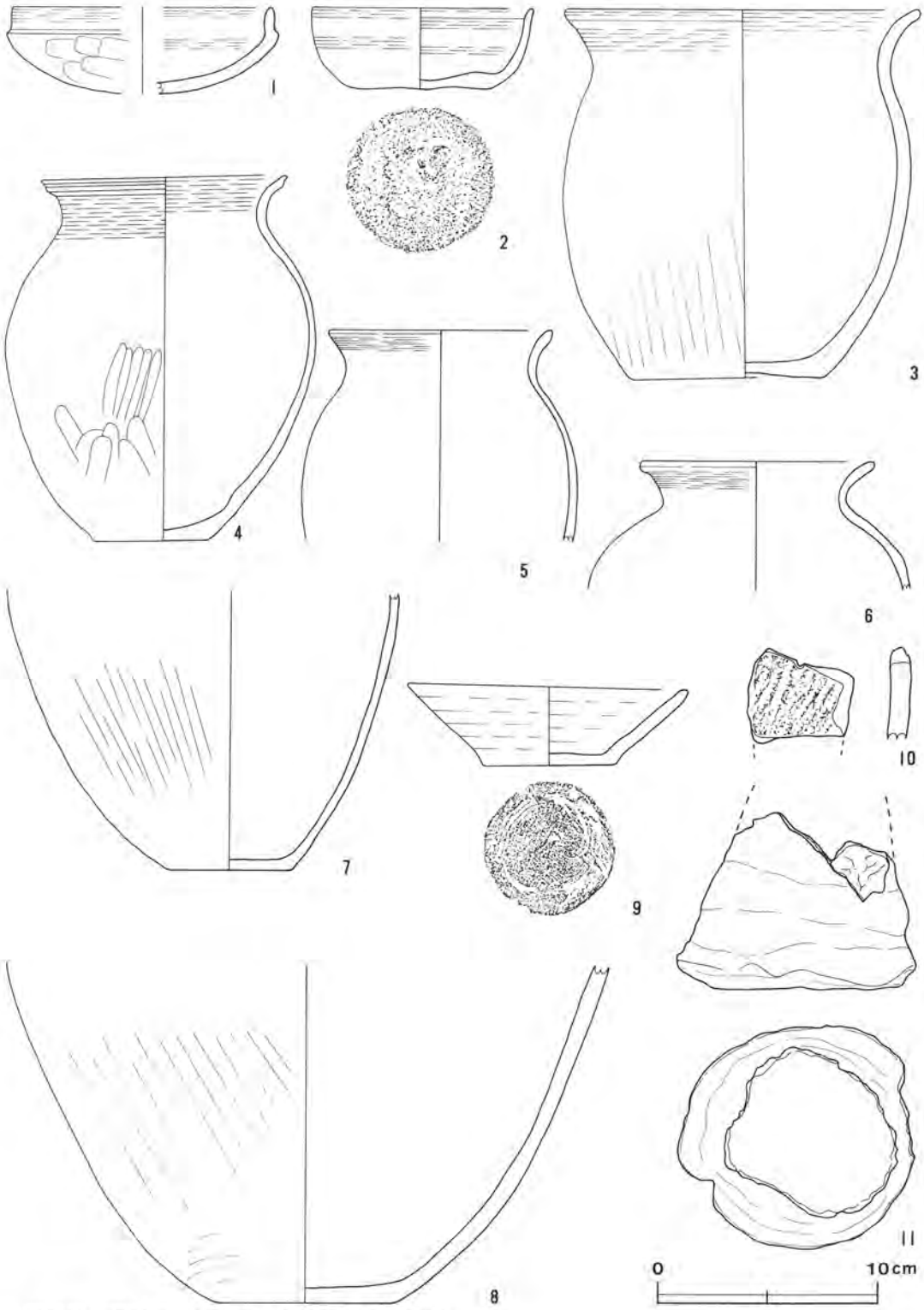
第27図　第51号住居跡実測図

あり，他のP_1・P_2・P_6・P_7・P_9～P_{11}は中世における掘立柱建物跡のものと考えられる。

覆土は，全体に自然堆積の状況を示すが，埋没覆土中に中世の掘立柱建物跡と考えられる柱穴痕が検出され，部分的に土層の攪乱が認められた。

遺物は，土師器の甕・坏・須恵器埦が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，古墳時代後期に位置するものと考えられる。



第28図　第51号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	坏 土師器	A(12.0) B 4.0 C(4.0)	底部は丸底で，器肉が厚い。体部は内彎しながら，斜上方に開いて立ち上がる。口縁部は直立し，口唇部はつまみ上げられている。体部と口縁部との境には稜が見られ，浅い凹線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面篦ナデ。内面ナデ。	砂粒 褐色 良	P83
2	坏 須恵器	A 10.2 B 3.8 C 6.6	やや平坦な丸底で，体部は内彎気味に開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部篦切り後ナデ調整。	砂粒・砂礫 灰色 良	P81
3	甕 土師器	A 16.4 B 8.9 C 17.3	底部は，外面中央がやや窪む平底で，器肉が厚い。胴部は中央部に最大径をもち，内彎しながら開いて立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反し，口縁部外面には強い横ナデによる凹線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。胴部から底部外面篦ナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 良	P80
4	甕 土師器	A 22.4 B 33.8 C 10.3	底部は平底で，器肉は薄い。胴部は中央部に最大径をもち，内彎しながら開いて立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反し，端部を僅かに外上方につまみ出し，丸くおさめている。	口縁部内・外面はナデ。体部内・外面は篦ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良	P8
5	甕 土師器	A 20.4 B(19.4) C	胴部は上半部に最大径をもち，内彎しながら立ち上がる。口縁部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内・外面はナデ。体部内・外面は篦ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 良	P76
6	甕 土師器	A 21.4 B(11.7) C	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を僅かに外上方につまみ出して丸くおさめている。	口縁部内・外面は横ナデ。体部内・外面は篦ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 良	P77
7	甕 土師器	A B(25.6) C 11.5	底部破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面は篦ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい褐色 良	P78
8	甕 土師器	A B(15.7) C 8.4	底部破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面は篦ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 良	P79
9	皿 土師質土器	A 13.1 B 3.9 C 6.2	底部は平坦で器肉は厚い。体部は内彎気味に開き，口縁端部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部切り離しは静止糸切り。	砂粒 浅黄橙色 良	P82

第28図1～11は第51号住居跡の出土した遺物である。10は土錘，11は土製支脚で，10の土錘は縄文土器片を再利用して加工したものである。

第52号住居跡（第29・30図）

本跡は，調査区D4g_8区を中心に確認された。住居跡は，第17号堀によって西側は破壊され，南側は第53号住居跡と重複している。本跡は，第53号住居跡を破壊し構築している関係で，第53号住居跡が古く，本跡は新しい時期にとられる。

平面形は，長軸6.70mの方形を呈し，長軸方向はN－33°－Wを指している。壁は，床面より垂直に立ち上がり，壁高は60～70cmを測る。壁溝は，上幅10～15cm前後でU状を呈し，ほぼ全周している。床面は全体に踏み固められ，平坦で遺存状態は良い。

竈は，北壁に付設され壁外に煙道部の掘り込みを行い，竈本体はすべて屋内に設けている。焚口・袖部の一部は攪乱によって崩落しているが推定規模は，長軸1.5m，短軸0.8mを測る。構築は，青褐色粘土・砂・ロームを主体に造られている。ピットは，5か所検出され，P_1～P_5はいずれも主柱穴で深さ50～70cmを測る。

覆土は，全体に黒褐色土を中心に自然堆積を示すが，西側に若干ロームブロックの混入が認められる。

遺物は少なく，竈袖部から土師器甕片が出土している。

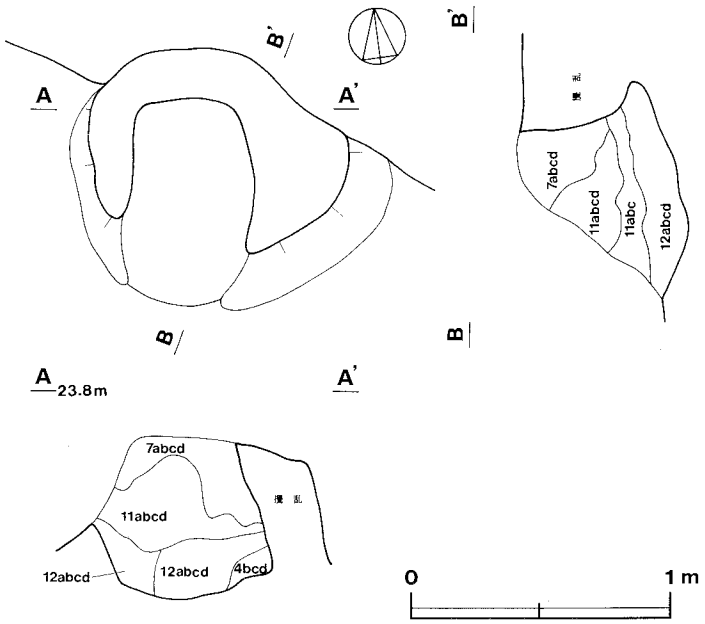
出土遺物や住居跡の形態から，古墳時代後期鬼高式期に位置すると考えられる。

第53号住居跡（第30図）

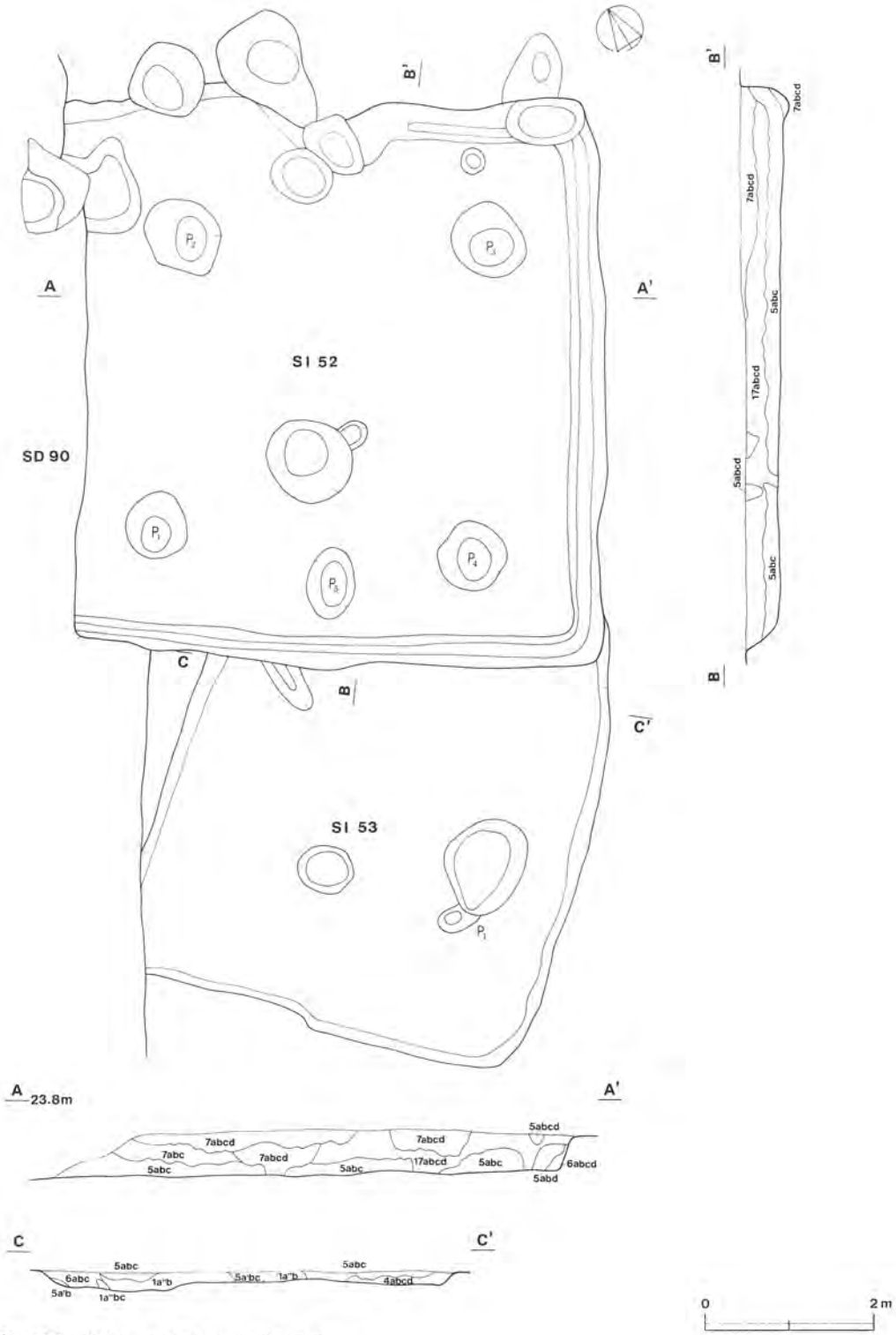
本跡は，調査区D5f_9区を中心に確認され，第17号堀によって西側壁を，第52号住居跡によって北側を破壊されている。

平面形は，方形を呈し残存する部分は全体のほぼ半分である。壁は垂直に立ち上がり，壁高20cmを測る。床面は全体に軟弱であるが，部分的に踏み固められてた部分も認められた。竈・ピットは検出されない。竈は，第52号住居跡構築で破壊されたものと考えられる。

覆土は，全体に自然堆積の状況を示すが，掘り込みが浅く，黒褐色の中に若干ロームブロックを含む層が堆積している。

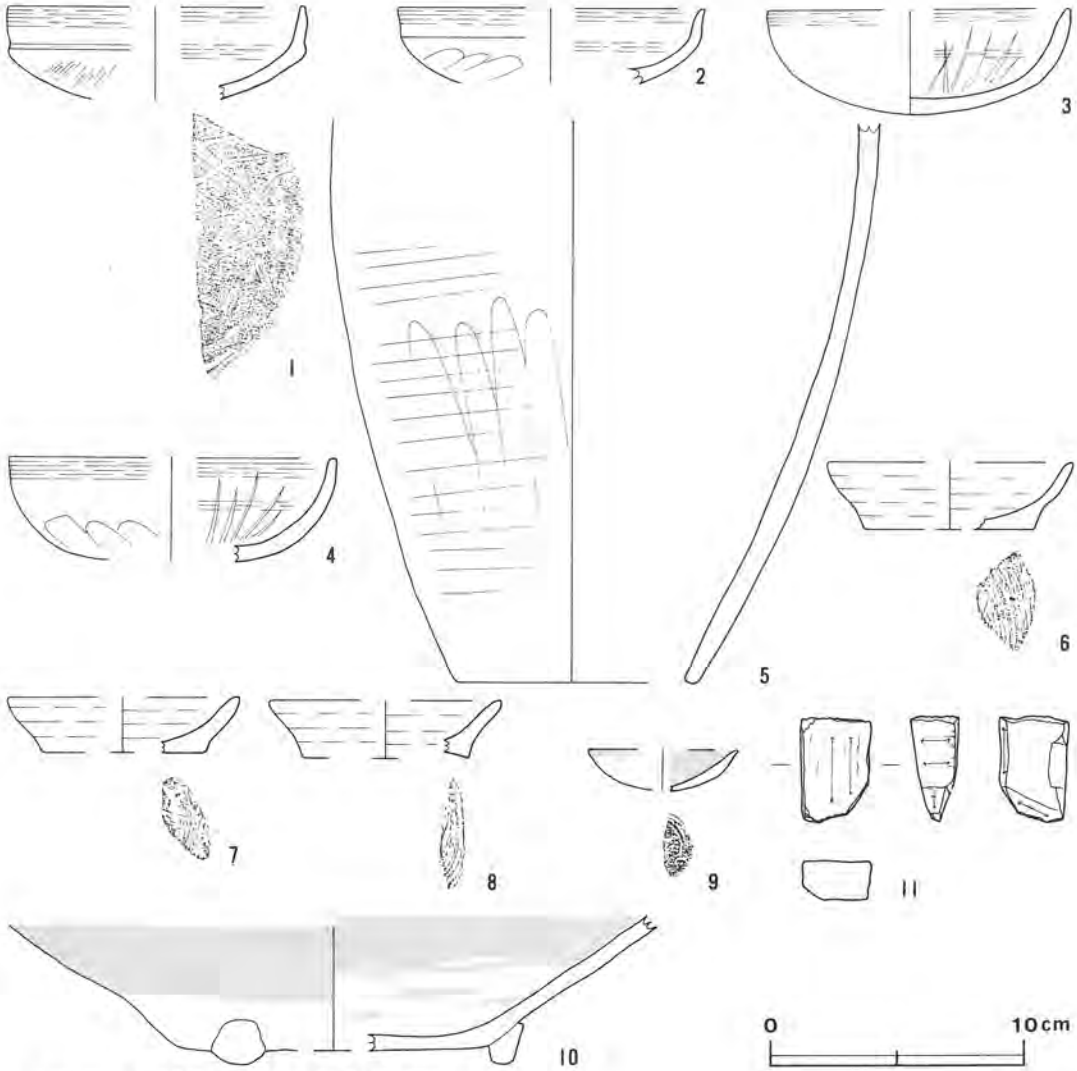


第29図　第52号住居跡竈実測図



第30図　第52・53号住居跡実測図

本跡の時期は，遺物の出土がなく，第52号住居跡によって破壊されている状況から，第52号住居跡よりも古い時期（古墳時代後期）に構築されたものと考えられる。



第31図　第52号住居跡出土遺物実測図

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	坏 土師器	A 11.8 B(3.7) C	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開く。口縁部と体部の境界にやや明瞭な稜を持ち，口縁部は外反して外上方に延び，端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面水挽き。	砂粒 にぶい橙色 良	P87

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
2	坏 土師器	A(12.2) B(3.0) C	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開く。口縁部は外反して外上方に延び，端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面水挽き。底部外面篦削り。	砂粒 にぶい赤褐色 良	P92
3	坏 土師器	A(12.1) B 4.2 C 3.0	底部は丸底で，器肉が厚い。体部は内彎しながら，斜上方に傾いて立ち上がる。口縁部は外反して外上方に延び，端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面ナデ。体部外面篦削り後ナデ。	砂粒 褐灰色 良	P88
4	坏 土師器	A(13.0) B(4.1) C	体部はやや内彎気味に外上方に大き開く。口縁部は内反し端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面はナデ。体部内・外面篦ナデ。	砂粒 明褐灰色 良	P85
5	甑 土師器	A B(22.4) C 9.5	胴部は緩やかに内彎しながら，わずかに外上方に開く。口縁部欠損（孔径8.5cm）	胴部外面・縦・横位の篦削り後ナデ。	砂粒・砂礫 明赤褐色 良	P90
6	皿 土師質土器	A(9.8) B 2.7 C(6.8)	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部は外反する。	口縁部内・外面は横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P89
7	皿 土師質土器	A(9.2) B 2.2 C(6.6)	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部は外反する。	水挽き 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P91
8	皿 土師質土器	A(8.2) B 2.3 C(6.6)	底部はやや平坦で丸底。体部は外傾気味に開き，口縁部は若干外反する。	水挽き。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P86
9	皿 陶器	A(6.0) B 1.6 C(2.0)	底部は丸底で，体部は直線的に開き，口縁部は外反する。外面にロクロ痕。内面施釉の陶器。	水挽き。 底部回転糸切り。	細粒 にぶい褐色。 (釉)褐色 良	P317
10	香炉 陶器	A B(4.9) C(12.4)	底部破片。 底部外縁は，丸味を以って立ち上がり，体部はやや外反する。	水挽き 横ナデ。 底部回転糸切り。	細砂・長石粒 灰白色。(釉) 淡黄色 良	P336

第31図１～11は，第52号住居跡から出土した遺物である。11は砥石で，使用痕跡が砥石の表・裏，側面の全面に認められる。石材は凝灰岩である。

第54号住居跡（第34図）

本跡は，調査区E5f_1区を中心に確認され，周囲には第47・51号住居跡が位置する。

平面形は，長軸5.00m，短軸4.50mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-21°-Eを指している。

本跡は，第47号住居跡同様土坑・掘立柱建物跡との重複関係がみられ，壁・壁溝は部分的に破壊されている。残存壁は垂直に立ち上がり，壁高15～25cmを測る。壁溝は，南隅コーナー部は掘立柱建刻跡との重複のため検出されなかったが，上幅25cm，深さ20cmを測り，周回している。床は，全体に平坦であり，竈付近の床面は最も良く残存し，踏み固められている。ピットは，16本

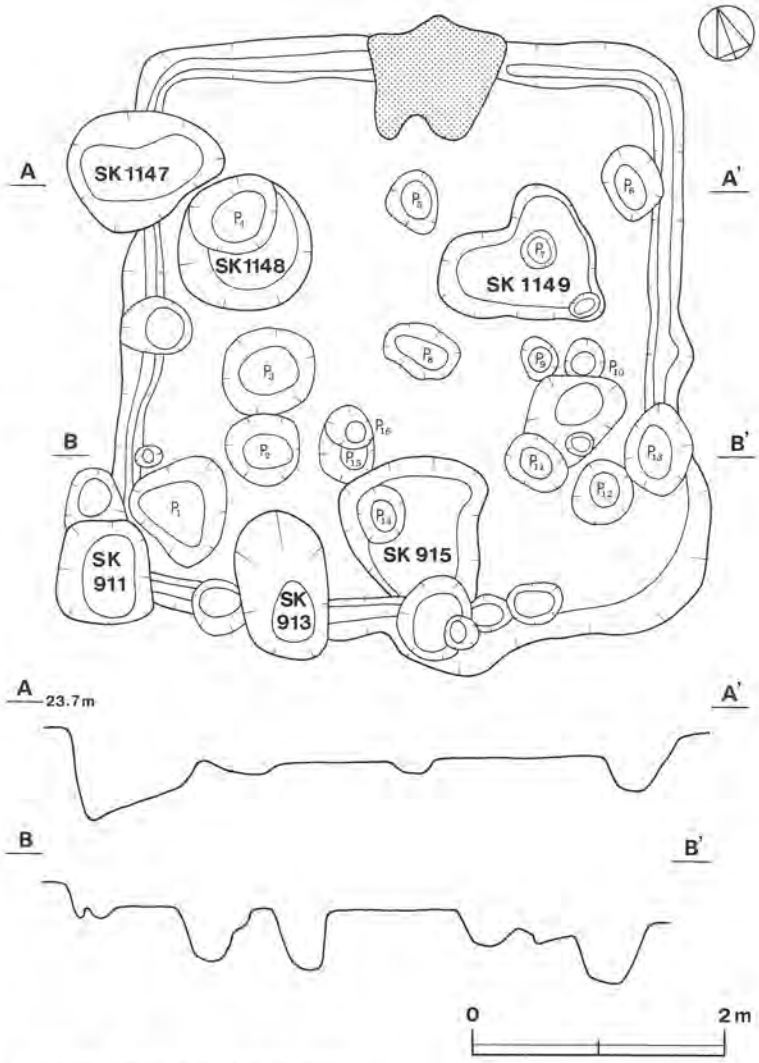
検出されたが，いずれも土坑との重複関係から，本跡に伴うピットとして明確にとらえることはできなかった。

竈は，北壁中央部に付設され，袖部だけが残存し，粘土・砂・ロームにて構築され，燃焼部との境界付近に若干の焼土塊が認められた。

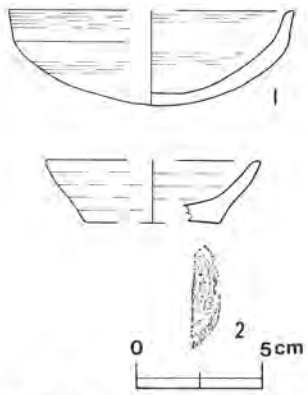
覆土は，黒褐色土を中心に自然堆積の状況を示すが，土坑・掘立柱建物跡との重複から攪乱を受けて，部分的にロームブロック等が混入している。

遺物は，土師器の坏・甕が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，古墳時代後期鬼高期の住居跡と考えられる。



第32図　第54号住居跡実測図



第33図　第54号住居跡出土遺物実測図

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	坏 土師器	A(11.4) B 3.8 C(4.0)	底部は丸底で，器肉が厚い。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反して外上方に延び，端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面ナデ。体部外面篦削り後ナデ。	砂粒 橙色 良	P94
2	皿 土師質土器	A(8.6) B 2.5 C(5.4)	底部はほぼ平坦な丸底で，体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。	水挽き。ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 良	P9

第58号住居跡（第35図）

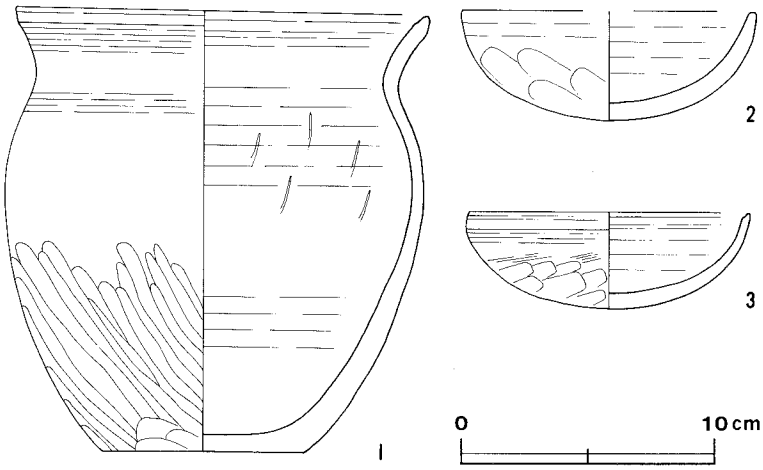
本跡は，調査区F5i_2区を中心に確認され，第14号堀と土坑によって本跡の東・北壁及び壁面の一部は掘り込まれている。

平面形は，長軸4.55m，短軸3.90mの方形を呈し，長軸方向はN-35°-Eを指している。壁は，南側・西側で20～30cmの高さを測り，垂直な立ち上がりを示している。壁溝は検出されず，残存している床面は平坦であり全体に踏み固められている。ピットは，4か所(P_1～P_4)検出され，深さは20～25cmを測り，４本いずれも主柱穴である。

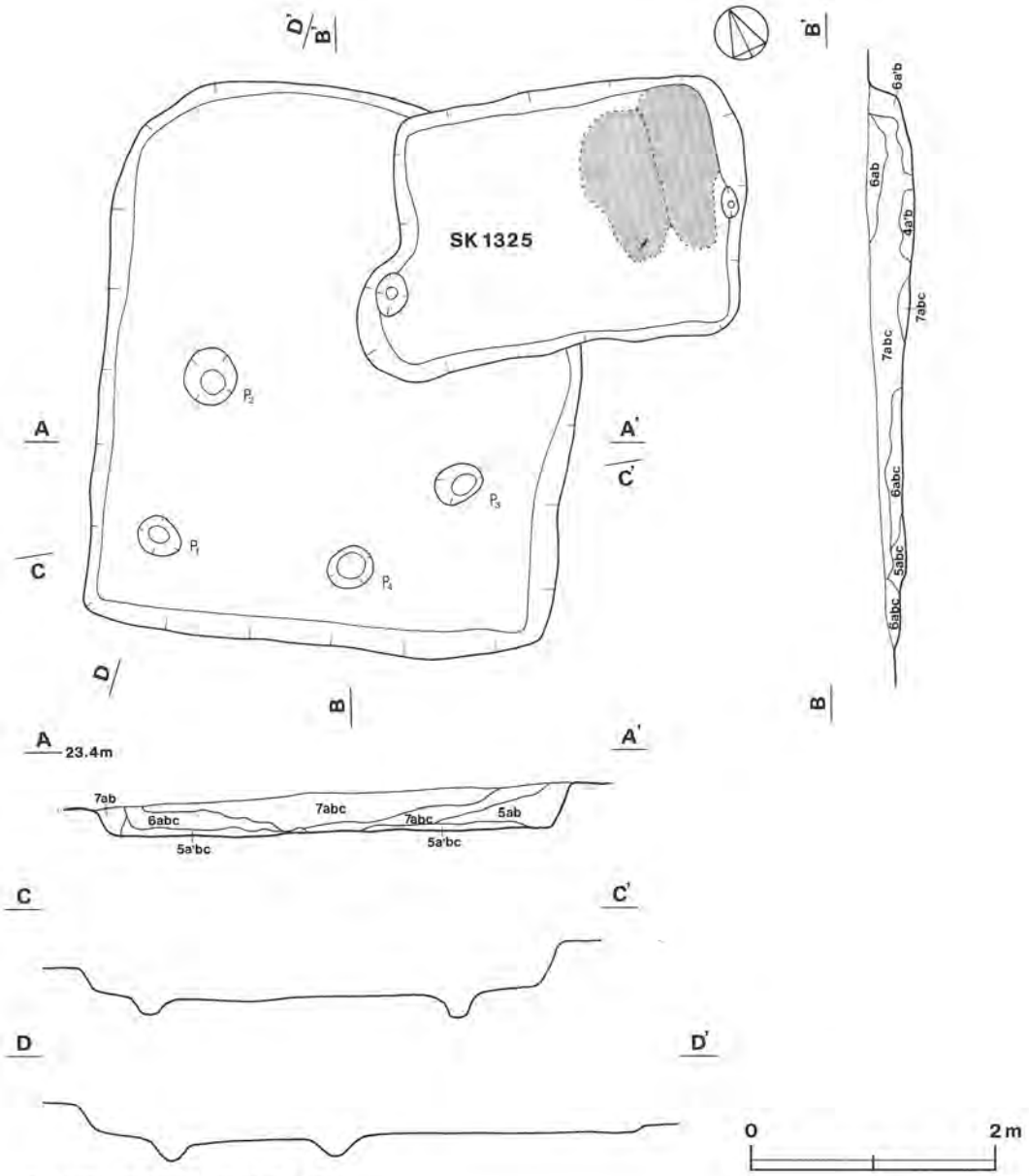
覆土は，重複・攪乱部分を除いて，全体に自然堆積を示すが，床面より20cm程上の堆積土には，焼土層がかなり認められ，本跡は，焼失家屋と考えられる。住居跡の付属施設である竈は検出されなかった。

遺物は，大半が覆土中から出土しているが，坩形土器・甕形土器が壁付近の床面から出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，古墳時代後期鬼高期の住居跡と考えられる。



第34図　第58号住居跡出土遺物実測図



第35図　第58号住居跡実測図

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	甕 土師器	A 16.5 B 17.7 C 8.0	平底を呈し，胴部に最大径をもち，頸部から口縁部にかけて丸味をもって外反する。口唇部は斜方向につまみ上げられている。	口縁部内・外面は横ナデ。胴部以下底部は，斜方向への箆削り。	砂粒・雲母にぶい橙色普通	P367

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
2	埦 土師器	A(11.8) B 4.4 C 3.0	丸底を呈し，底部から丸味をもって立ち上がる。口唇部は丸くおさめている。	口縁部ナデ。 胴部外面篦削り。	砂粒 明赤褐色 良	P105
3	坏 土師器	A 11.2 B 3.8 C 2.0	丸底を呈し，底部から丸味をもって立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，口唇部は丸くおさめている。	口縁部内・外面ナデ。 底部斜方向の篦削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P368

第61号住居跡（第36・37図）

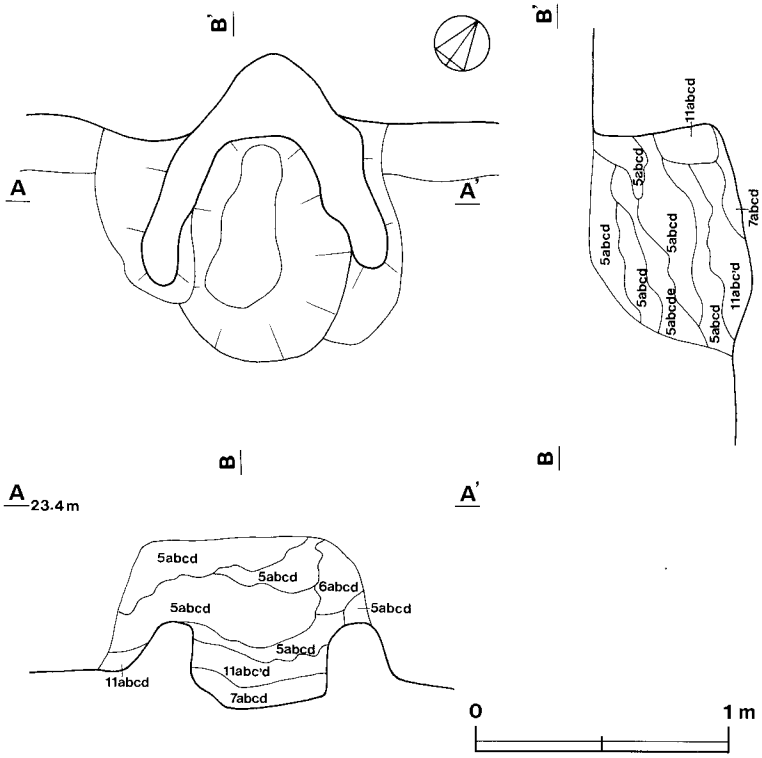
本跡は，調査区G5f$_4$区に確認された住居跡である。

平面形は，長軸5.70m，短軸5.25mの隅丸方形を呈し，主軸方向は，N-40°-Wを指している。壁は，全体的に垂直に立ち上がり，壁高は60～80cmを測る。壁溝は，上幅10～15cm，深さ10cmほど掘り込まれU状を呈して全周している。床面は，全体に平坦で良く踏み固められているが，特に竈周辺は堅緻である。竈は，北西壁中央部に粘土・砂によって構築され，遺存状態は良い。焚口部・燃焼部から壁外に30cm程延びて煙道部は造られ，竈は，1.2×1.2mの大きさで構築されている。また，燃焼部の状態から使用頻度の高いことが窺い知れる。ピットは，5か所検出され，全て主柱穴である。5本のピットはいずれも30～50cmの深さを測り円筒状を呈する。

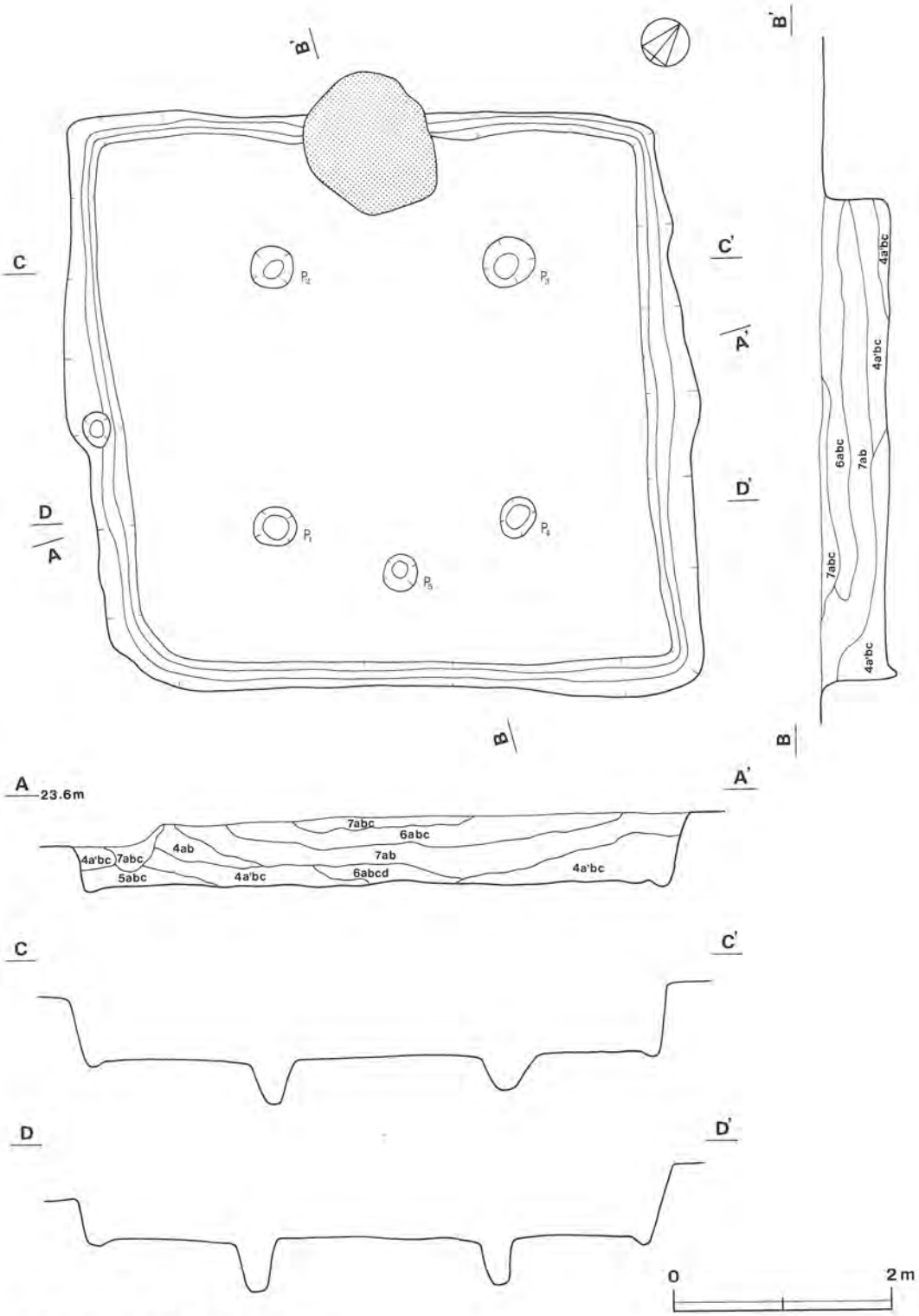
覆土は，黒褐色土・暗褐色土が堆積し，若干のローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含み自然堆積の様相を呈している。

遺物は，覆土中から土師器片（甕・坏）が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，古墳時代後期鬼高期の住居跡と考えられる。



第36図　第61号住居跡カマド実測図



第37図　第61号住居跡実測図

第4節　奈良時代～中世

1　遺構と遺物

第47号住居跡（第38図）

本跡は，調査区E4i_1区を中心に確認された。本跡は，掘立柱建物跡の掘り込みによって攪乱を受け遺存状態は悪い。

平面形は，長軸6.80m，短軸6.60mの方形を呈し，長軸方向は，N-33°-Wを指している。壁は，東・西・北壁の一部が土坑との重複によって掘り込まれている。残存している箇所は，ほぼ垂直に立ち上がり壁高は，40cmを測る。壁溝は，上幅25cm，深さ10cm前後でU状を呈し，土坑によって攪乱を受けている箇所以外は，ほぼ周回している。床面は，中央部付近が最も残りが良く，やや凹凸状を呈しているが硬く踏み固められている。竈は，住居跡北壁部に付設され，掘立柱建物跡の柱穴によって破壊されて，わずかに袖部・焚口部が残存している状況で遺存状態は悪い。ピットは，4か所検出され，いずれも主柱穴で，深さ40～50cmを測る。

覆土は，黒褐色土を中心に，若干のローム粒子の混入が認められる自然堆積である。また，土坑等の掘り込みを受けている場所は，ロームブロック・ローム粒子が多量に含まれている。

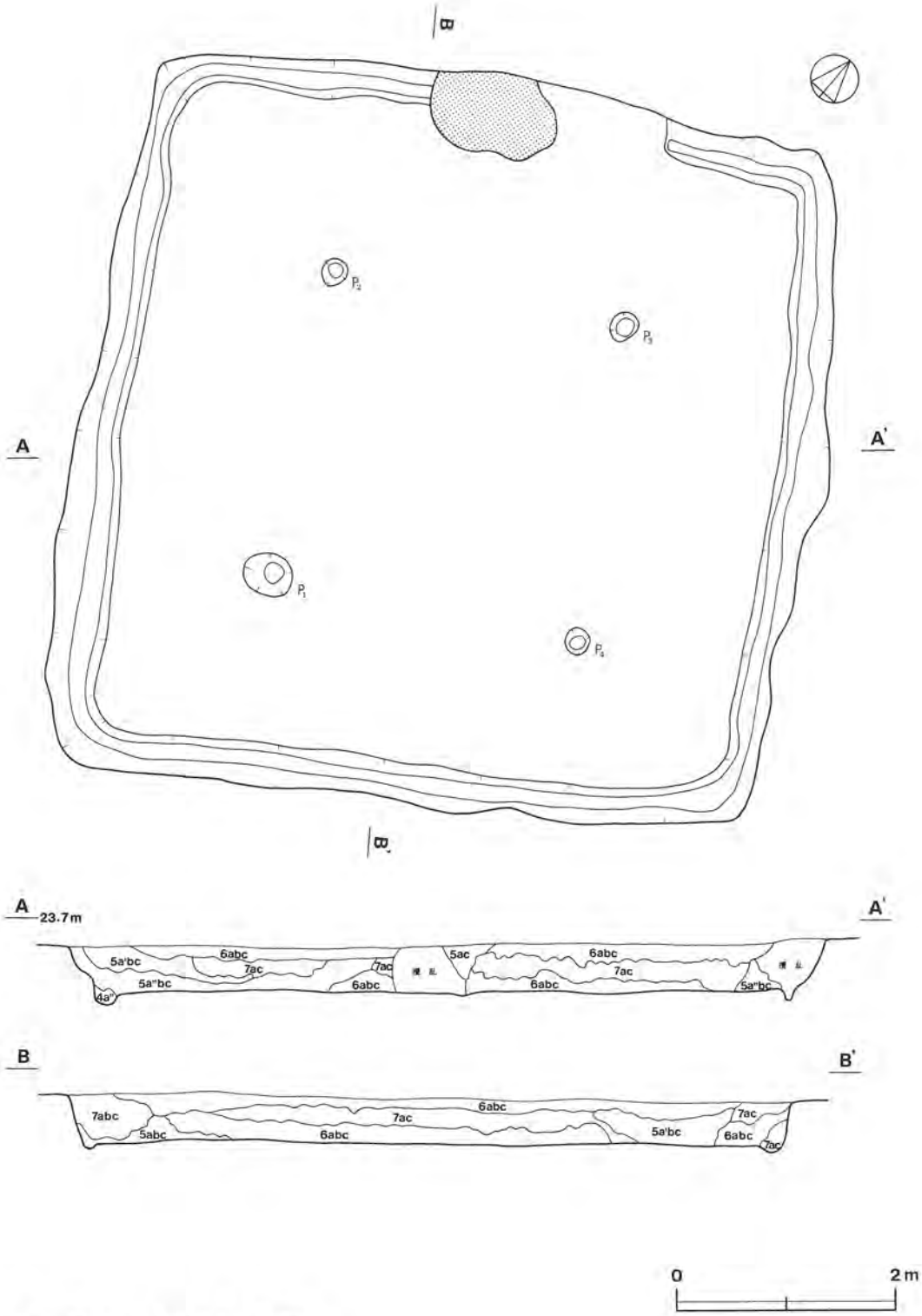
遺物は，土師器の坏・甕，須恵器破片が覆土・床面上より出土している。

出土遺物や住居跡の形態から，奈良時代から平安時代の住居跡と考えられる。

出土遺物

出土土器観察表

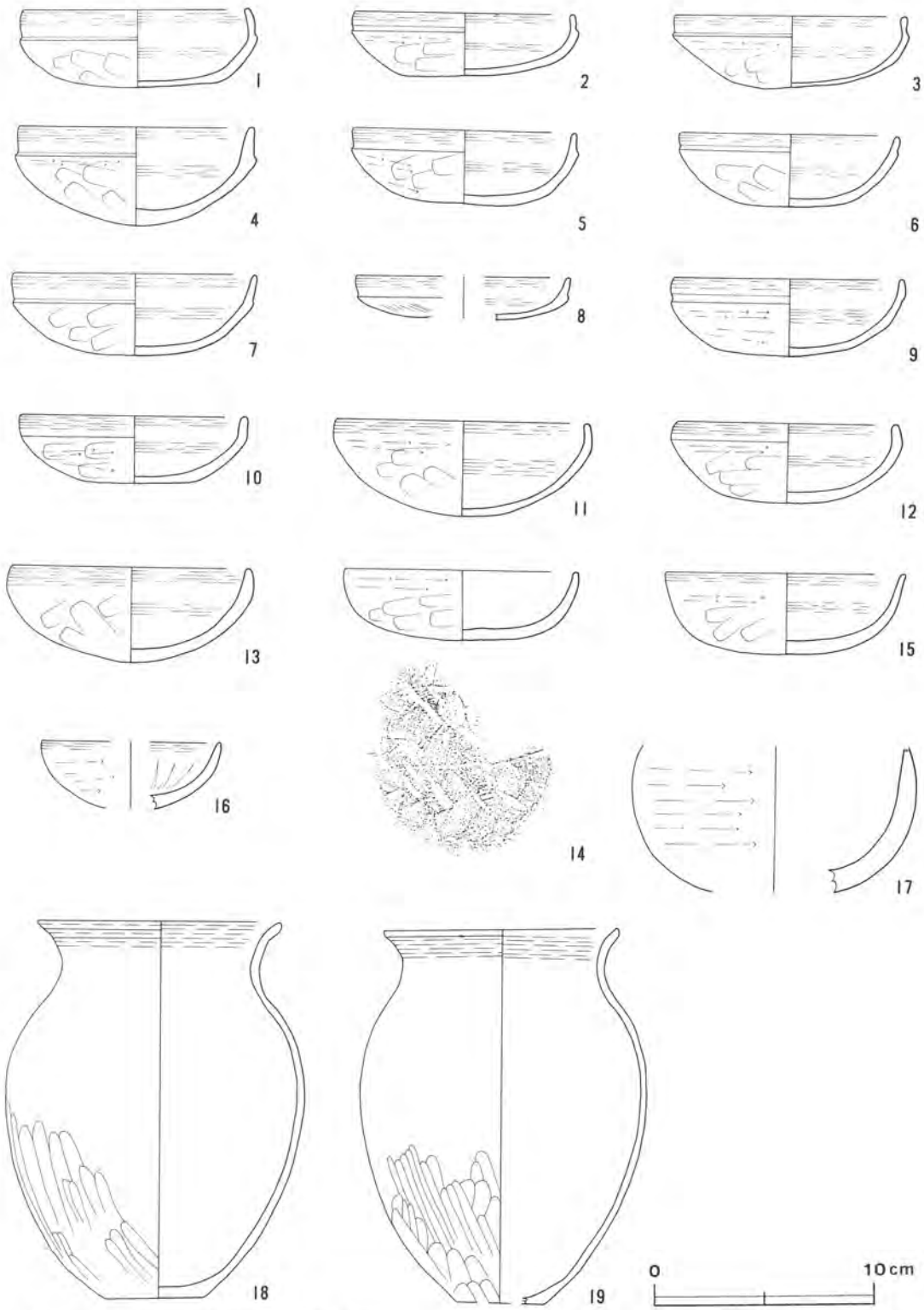
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	坏 土師器	A 10.6 B 3.6 C 5.9	浅い刃底を呈し，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに内彎しながら立ち上がる。体部と口縁部の境に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面横位の篦ナデ。底部斜位の篦削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P58
2	坏 土師器	A 10.2 B 2.9 C 4.5	浅い丸底を呈し，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はやや直立し，口唇部を丸くおさめている。体部と口縁部の境に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面横位の横ナデ。底部斜位の篦削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P2
3	坏 土師器	A 10.6 B 3.3 C 1.7	丸底を呈し，体部は内篦しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はやや直立し，口唇部を丸くおさめている。体部と口縁部の境に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。底部篦削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P52



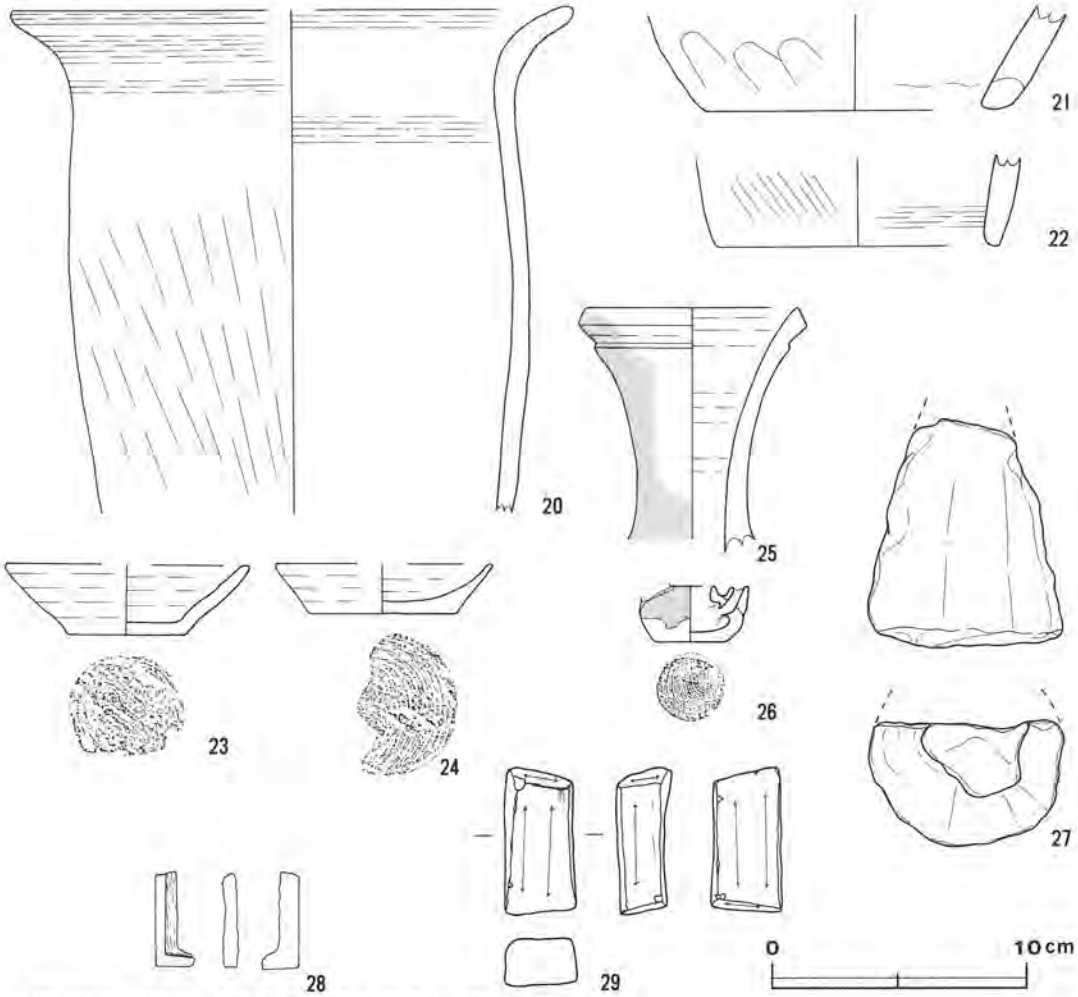
第38図　第47号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
4	坏 土師器	A 11.0 B 4.6 C 2.0	丸底を呈し，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は直立し，口唇部を丸くおさめている。体部と口縁部の境に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。底部外面斜方向へ篦削り。内面ナデ。	砂粒 褐色 普通	P47
5	坏 土師器	A 10.4 B 3.4 C 3.8	丸底を呈し，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。口縁部下端には一条の凹線が巡り,体部との境に明瞭な稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面篦削りの後ナデ。	砂粒 明褐色 普通	P49
6	坏 土師器	A 10.0 B 3.4 C 3.4	丸底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し，口唇部を丸くおさめている。口縁部下端には一条の凹線が巡り，体部との境に明瞭な稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。底部外面斜方向へ篦削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P48
7	坏 土師器	A 11.4 B 3.0 C 3.8	丸底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し，口唇部はつまみ上げられている。体部との境に稜をもつ	口縁部内外面横ナデ。底部外面粗い横・縦位の篦削り。	砂粒 橙色 普通	P51
8	坏 土師器	A(10.0) B(1.9) C	浅い丸底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し，口唇部は丸くおさめられている。口縁部下端には一条の凹線が巡り，体部との境に明瞭な稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。底部外面篦ナデ。	砂粒 明褐色 普通	P61
9	坏 土師器	A 10.6 B 3.6 C 3.1	丸底を呈し，体部は内彎気味に大きく開いて口縁部に移行する。口縁部は直立気味に立ち上がり，口縁部下端には一条の凹線が巡り,体部の境に明瞭な稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。底部外面篦削後ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P51
10	坏 土師器	A 10.6 B 3.1 C 5.4	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がりる。口縁部はやや外反し，口唇部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。底部外面篦削り後ナデ。	砂粒 明褐色 普通	P56
11	坏 土師器	A 11.8 B 4.4 C 5.2	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は内傾気味に立ち上がり，口唇部を丸くおさめている。	口縁部内外面横ナデ。底部外面篦削り。	砂粒 橙色 普通	P57
12	坏 土師器	A 10.2 B 3.7 C 3.0	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は内傾気味に立ち上がり，口唇部は丸くおさめている。	口縁部内外面横ナデ。底部外面篦削り後ナデ。	砂粒 褐色 普通	P53
13	坏 土師器	A 11.2 B 4.4 C 2.0	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに内彎する。口唇部は丸くおさめている。	口縁部内外面横ナデ。底部外面篦削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P54

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
14	坏 土師器	A 10.8 B 3.4 C 4.5	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに内彎する。口唇部は丸くおさめられている。	体部外面は横ナデ。内面は指頭によるナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P60
15	坏 土師器	A 11.0 B 3.8 C 4.0	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。口唇部はつまみ上げられている。	口縁部内外面は横ナデ。底部外面斜位方向への篦削り。	砂粒 灰褐色 普通	P50
16	坏 土師器	A(8.4) B(3.1) C	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反し，口唇部は丸くおさめている。	口縁部内外面横ナデ。底部外面横位方向への篦ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P62
17	埦 土師器	A B(6.8) C	体部は底部から丸味をもって立ち上がる。体部外面には横位の刷毛目がみられる。	胴部外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P65
18	甕 土師器	A 22.6 B 8.9 C 35.0	平底を呈し，胴部中位に最大径をもち，頸部から口縁部にかけて丸味をもって外反する。口縁部上端の外面には稜が認められ，口唇部は斜方向につまみ上げられている。	口縁部内外面は横ナデ。肩部縦位のナデ。底部斜方向への篦削り。	砂粒 橙色 良	P3
19	甕 土師器	A 22.0 B(8.3) C 34.6	平底を呈し，胴部に最大径をもち，頸部から口縁部にかけて丸味をもって外反する。口唇部は斜方向につまみ上げられている。	口縁部内外面は横ナデ。底部斜方向への篦削り。その他ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良	P4
第40図 20	甑 土師器	A(22.2) B(20.2) C	頸部から口縁部にかけて大きく外反し，口唇部は斜上方につまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良	P68
21	甑 土師器	A B(3.8) C(12.2)	底部破片。緩やかに内彎しながら立ち上がっている。底部は全体を穿孔している。(孔径10cm)	器外面篦削り。内面に篦ナデ痕。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P66
22	甑 土師器	A B(3.5) C(11.2)	底部破片。緩やかに内彎しながら立ち上れる。底部は全体を穿孔している。(孔径9.8cm)	器外面斜方位の篦削り。内面ナデ。	砂粒・礫・雲母 明褐灰色 良	P69
23	皿 土師質土器	A(9.7) B(2.8) C(4.6)	平底で，体部は内彎気味に開き口縁端部はやや外反する。内外面に強いロクロ痕。	水挽き。横ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P63
24	皿 土師質土器	A(8.6) B 5.8 C 2.0	平底で，体部は内彎気味に開き口縁端部はやや外反する。内外面に強いロクロ痕。	水挽き。横ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P64
25	壺 須恵器	A 8.4 B(9.2) C	頸部・口縁部破片。 頸部は外反しながら立ち上がり口縁部は開く。頸部外面に釉が施されている。	水挽き。	細砂・長石粒・鉄分 灰白色 良	P67
26	注口土器	A B 2.2 C 2.8	小型で把手・注口先端部破損。底部は平底で内傾して立ち上がる。外面に釉が施されている。	底部切り離しは回転糸切り。	細砂・長石粒 浅黄橙色 褐色 良	P302



第39図　第47号住居跡出土遺物実測図（1）



第40図　第47号住居跡出土遺物実測図（2）

第39・40図１～29は，第47号住居跡から出土した遺物である。27は土製支脚で28は硯片，29は砥石で28の硯片は，側面・海に面する部分も斜めに磨かれている。石材は粘板岩であり，29の砥石には研磨痕が，表・裏，側面の全面に認められ，石材は凝灰岩である。

第55号住居跡（第41・42図）

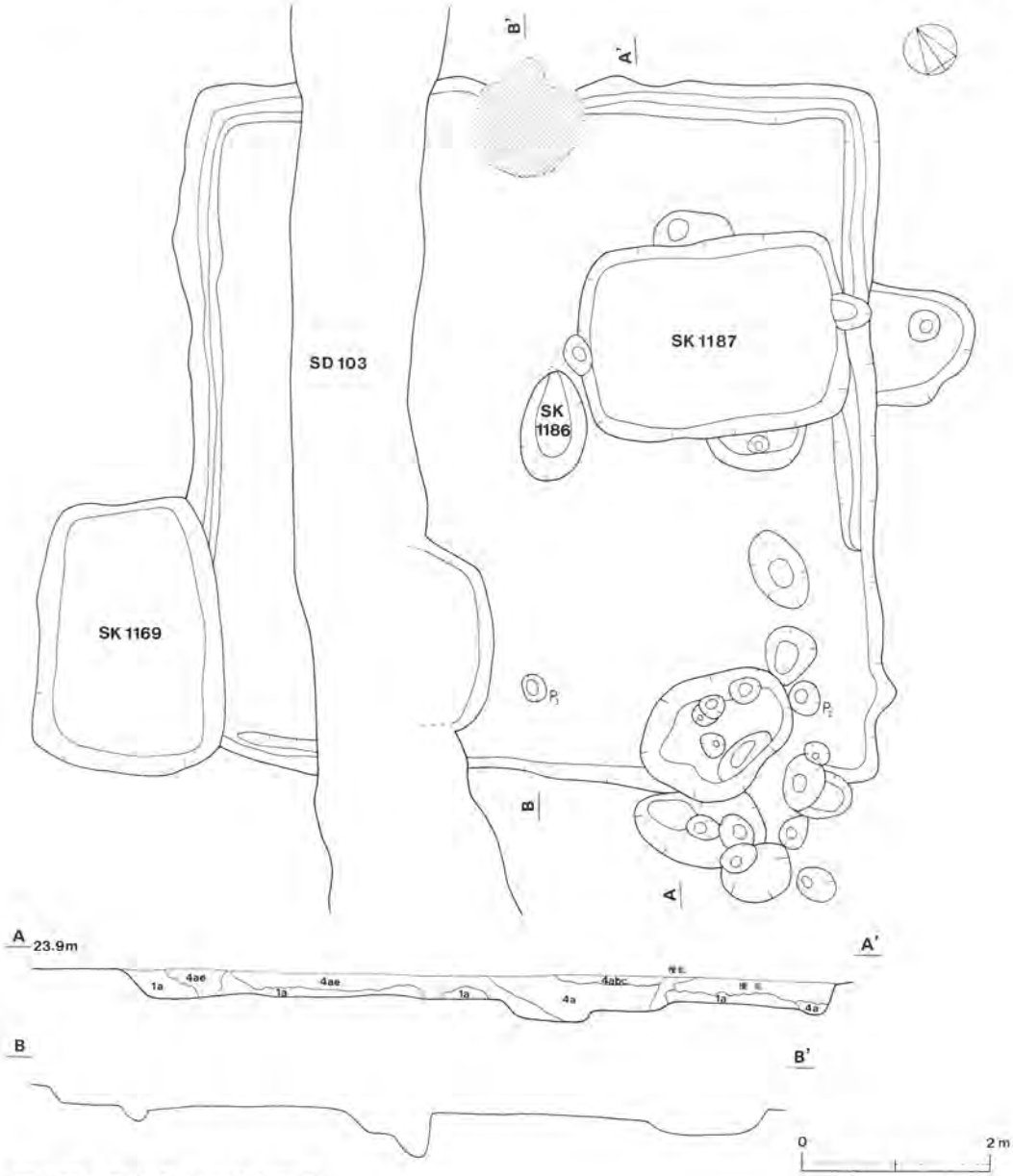
本跡は，調査区F6a_3区を中心に確認され，第21号堀，土坑と重複し，壁・床面の一部が掘り込まれている。

平面形は，長軸7.70m，短軸7.50mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-32°-Eを指している。

壁は垂直ぎみに立ち上がり，壁高は，西・北壁で20～25cmを測る。壁溝は，東・北・西壁下に上幅15～20cm，深さ５cm前後でU字形を呈して廻る。床面は全体に平坦であるが，竈付近は踏み

固められて硬化面となっている。竈は，北壁中央部に付設され，壁を掘り込んで粘土・黒褐色土混りの砂質土によって構築され，煙道部は壁外へ延びている。竈の規模は，焚口から煙道部迄1.3m，袖部から燃焼部までは0.6mで，袖部幅は1.1mを測る。また，竈の燃焼部の堆積状況から，本跡は長期間にわたって使用されたものと思われる。ピットは，堀・土坑の重復が著しく検出されなかった。

覆土は，上層に黒褐色土・中・下層にはロームブロックを含む暗褐色土が自然堆積の様相を示

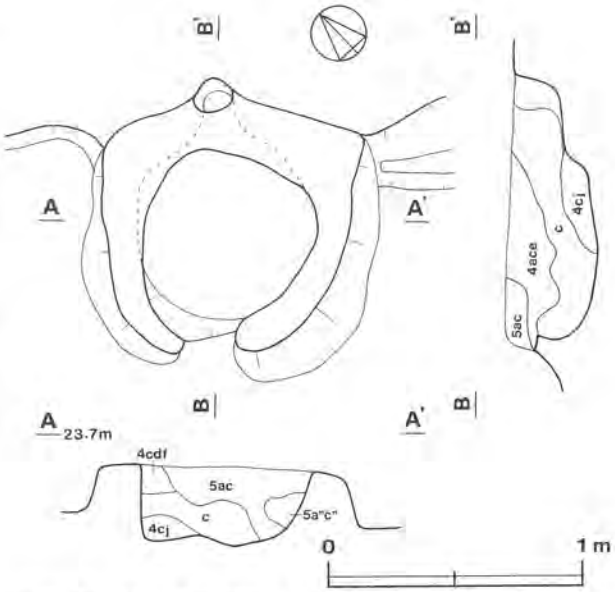


第41図　第55号住居跡実測図

すが，堀・土坑等の重複区域は，ロームブロックが多量に含まれている。

遺物は，覆土から土師質土器が出土しているが，本跡に伴うものでなく，土坑に伴うものであり，本跡に伴う遺物の出土はなかった。

本跡に伴う遺物の出土は認められなかったが，住居跡の形状から判断して，奈良へ平安時代に位置するものと考えられる。

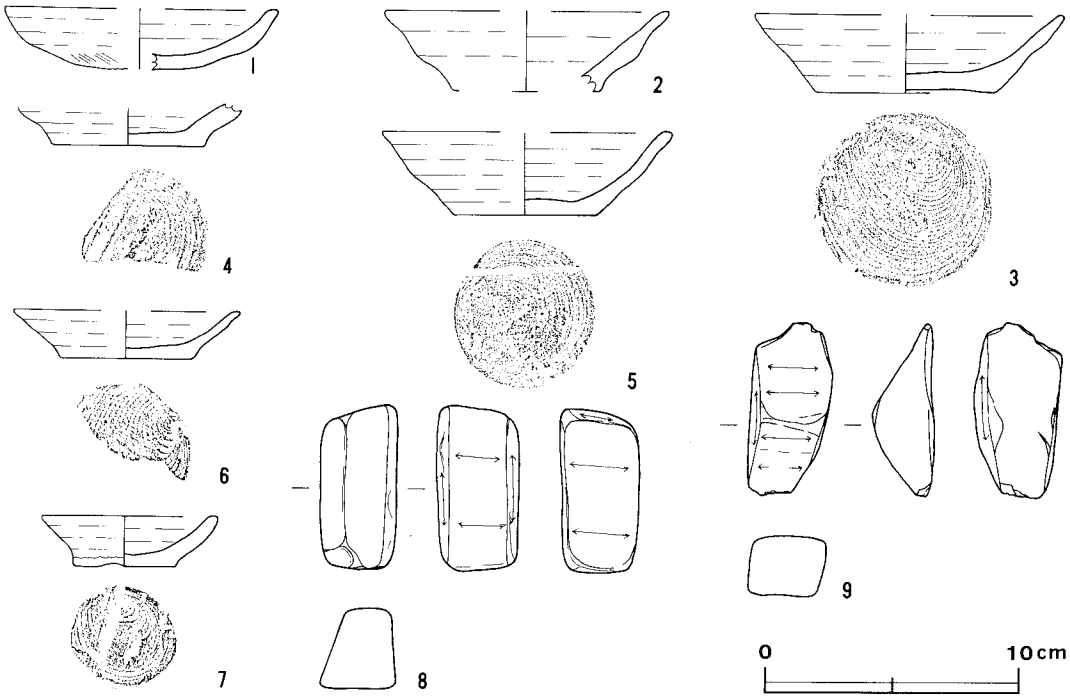


第42図　第55号住居跡・カマド実測図

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	坏 土師器	A(10.8) B 2.4 C(4.0)	底部は丸底で，器肉が厚い。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し端部を丸くおさめている。	口縁部内・外面横位のナデ。 底部篦削り。	砂粒 にぶい赤褐色 良	P99
2	Ⅲ 土師質土器	A(11.2) B 3.2 C(5.8)	底部欠損。体部は中ほどに膨みをもつが，器厚を減じながら外反気味に直線的に開く。外面に強いロクロ痕。	水挽き。 横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良	P96
3	Ⅲ 土師質土器	A(12.3) B 3.1 C 7.2	底部は平坦な丸底で厚手。体部は内彎気味に開く。外面に強いロクロ痕。	水挽き。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 橙色 良	P95
4	Ⅲ 土師質土器	A B(6.0) C 1.5	底部破片。底部は平坦で，体部は器厚を減じながら直線的に開く。外面にロクロ痕。	水挽き。 底部回転糸切り。	砂粒 褐灰色 良	P101
5	Ⅲ 土師質土器	A(11.5) B 3.3 C 5.6	平底で，底部内面がやや窪む。体部は器厚を減じながらやや内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。内面に煤と思われる黒色の付着物。外面にロクロ痕。	水挽き。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P98
6	Ⅲ 土師質土器	A(9.0) B 1.9 C(5.2)	平底で，体部は直線的に開き，口縁端部はやや外反する。内面に煤付着。外面にロクロ痕。	水挽き。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい赤褐色 良	P100
7	Ⅲ 土師質土器	A 7.0 B 2.0 C 4.0	底部内面がわずかに窪む平底で，体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は器肉厚く，口唇部は丸味をもつ。外面にロクロ痕。	水挽き。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P97



第43図　第55号住居跡出土遺物実測図

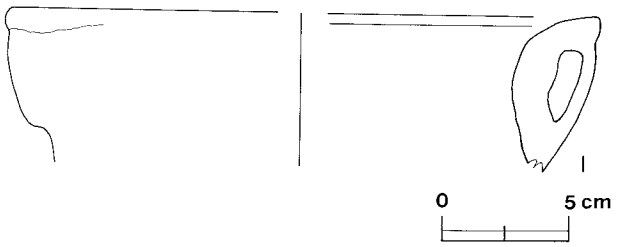
第43図８・９は，第55号住居跡から出土した砥石である。８は長方形を９は三角形を呈する。使用痕跡は，いずれも表・裏，側面の全面に認められる。石材は８が砂岩，９が凝灰岩である。

第48号住居跡（第45図）

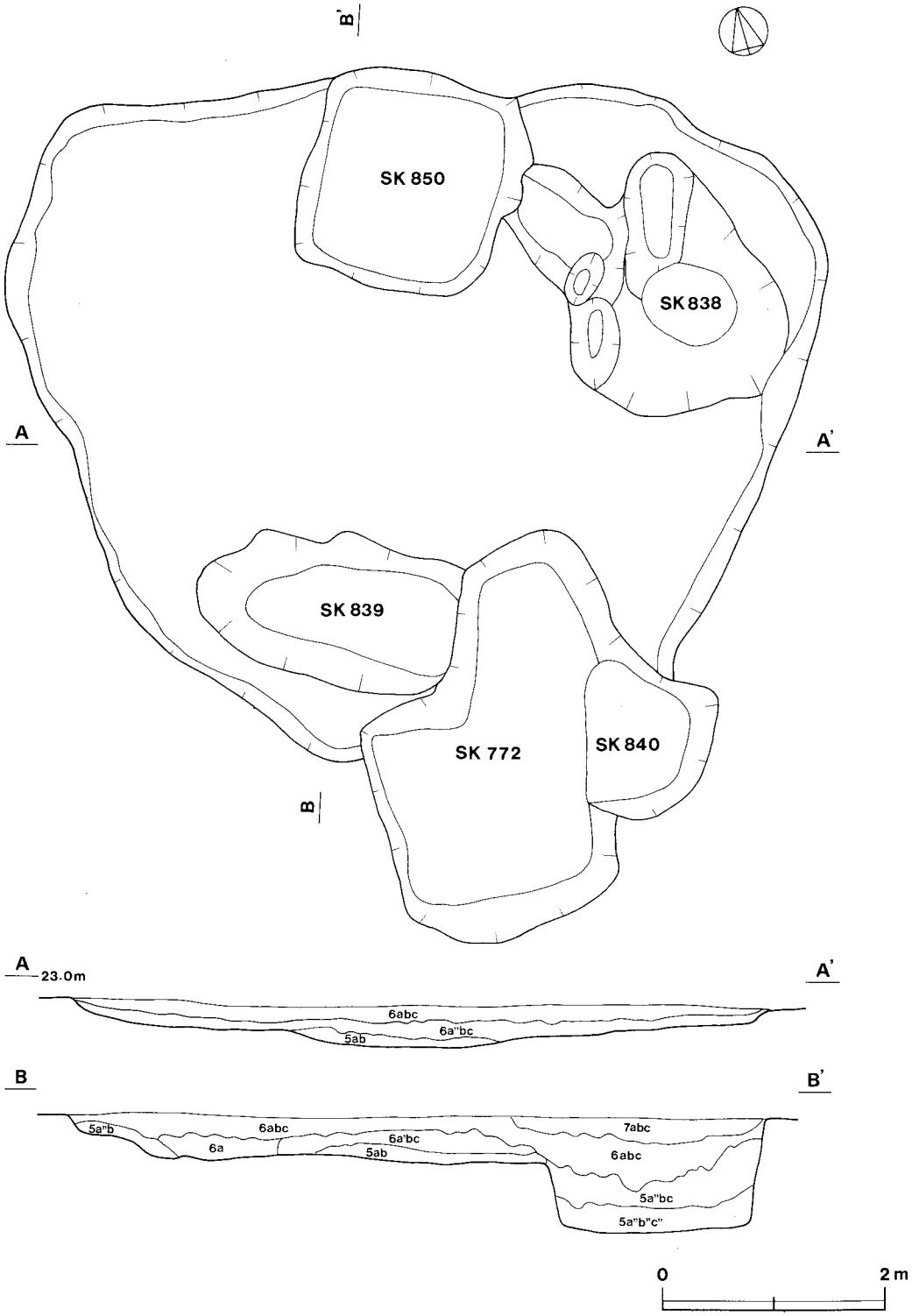
本跡は，調査区H4a_6区を中心に確認された。

平面形は，長径6.80m，短径6.30mの楕円形を呈し，長径方向はN-74°-Wを指している。壁はやや斜めに立ち上がり，壁高は15cmを測る。床面は全体に踏み固められているが，中心部に向かって擂鉢状になっている。住居跡北東コーナー部は，土坑の掘り込みによる攪乱がみられ，重複関係を示している。ピットは検出されず，遺物の出土は認められなかった。

本跡からは，時期を決定する資料は検出されなかったが，住居跡の構築状況から中世に位置する住居跡と考えられる。



第44図　第48号住居跡出土遺物実測図



第45図　第48号住居跡実測図

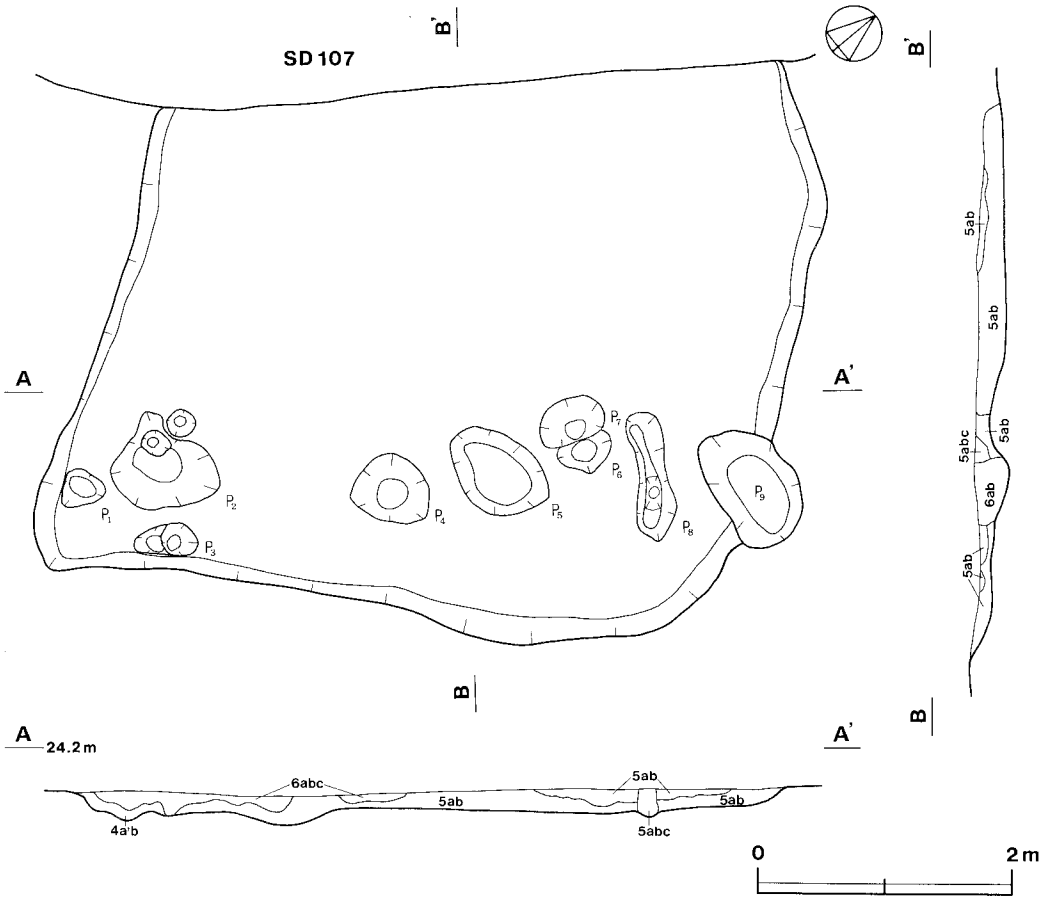
出土遺物

出土土器観察表

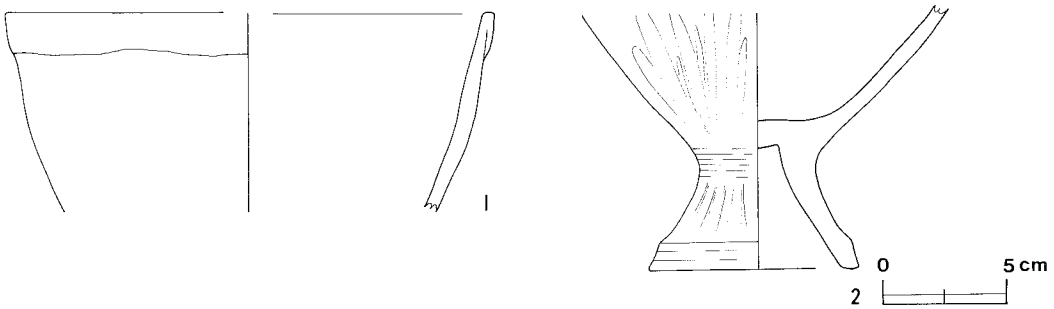
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	内耳土器 土師質土器	A(23.6) B(6.1) C	体部は薄く、外傾して内反する。頸部は外反し、内側に幅広の浅い凹帯が周回する。外面に鍋墨付着。	口縁部内外面ナデ。	砂粒・雲母 内面　橙色 外面　黒色 良	P7

第57号住居跡（第46図）

本跡は，調査区H2g_2区に確認されたが，調査の結果，土層堆積状況・形態等から住居跡としてとらえることは不可態であり，土坑として取り扱った。



第46図　第57号住居跡実測図



第47図　第57号住居跡出土遺物実測図

出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	鉢 土師器	A(19.8) B 8.1 C	底部欠損。体部は内彎しながら開いて立ち上がる。口縁部は外返しながら外上方に開き，折り返し口縁で，口唇部を丸くおさめている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面横位の篦ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良	P103
2	台付鉢 土師器	A B 10.9 C(8.4)	台部破片。台部は「ハ」の字に開き，甕部は内彎しながら球形を呈する。(1・2は同一個体である。)	台部外面は篦ナデ，内面はナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 良	P104

第64号住居跡（第48図）

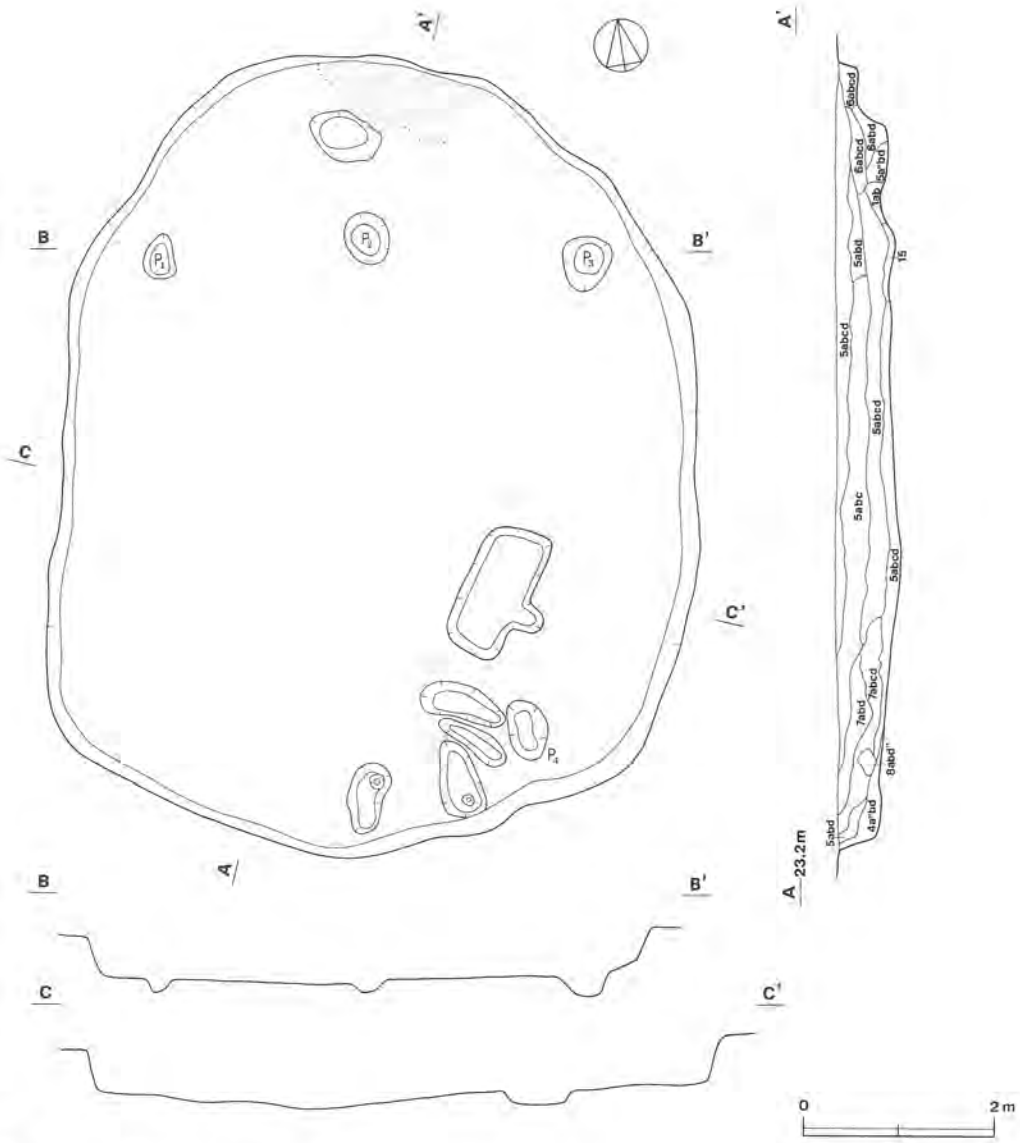
本跡は，調査区H4e_6区を中心に確認され，第46号住居跡の南東に位置し，本跡の南西側・北壁は土坑によって掘り込まれている。

平面形は，長径8.50m，短径4.60mの楕円形を呈し，長径方向はN-12°-Eを指している。壁は，壁高50～60cmを測り，外傾して立ち上がっている。床面は，壁から中央部になだらかな傾斜をもって構築され，全体に軟弱である。ピットは，4か所検出されいずれも本跡の主柱穴であるが，南西側は土坑による掘り込みによって攪乱され，柱穴の検出はされなかった。いずれの主柱穴も深さ20～30cmを測る。

覆土は，上層が黒褐色土，中・下層にはロームブロックを含む暗褐色土が自然堆積の様相を示し，南側では粘土ブロック・砂を含む層が流れ込みの状態で堆積している。

遺物は，覆土中から石塔（五輪塔）・内耳土器・陶磁器片等が出土し，床面上からは，刀子・土師質土器片が出土している。石塔は土坑の構築されている覆土より出土し，内耳土器・陶磁器片はいずれもブロック状に固まって出土しており，これらの状況から遺物の投棄が考えられる。

出土遺物や住居跡の形態から，中世の竪穴遺構と考えられる。

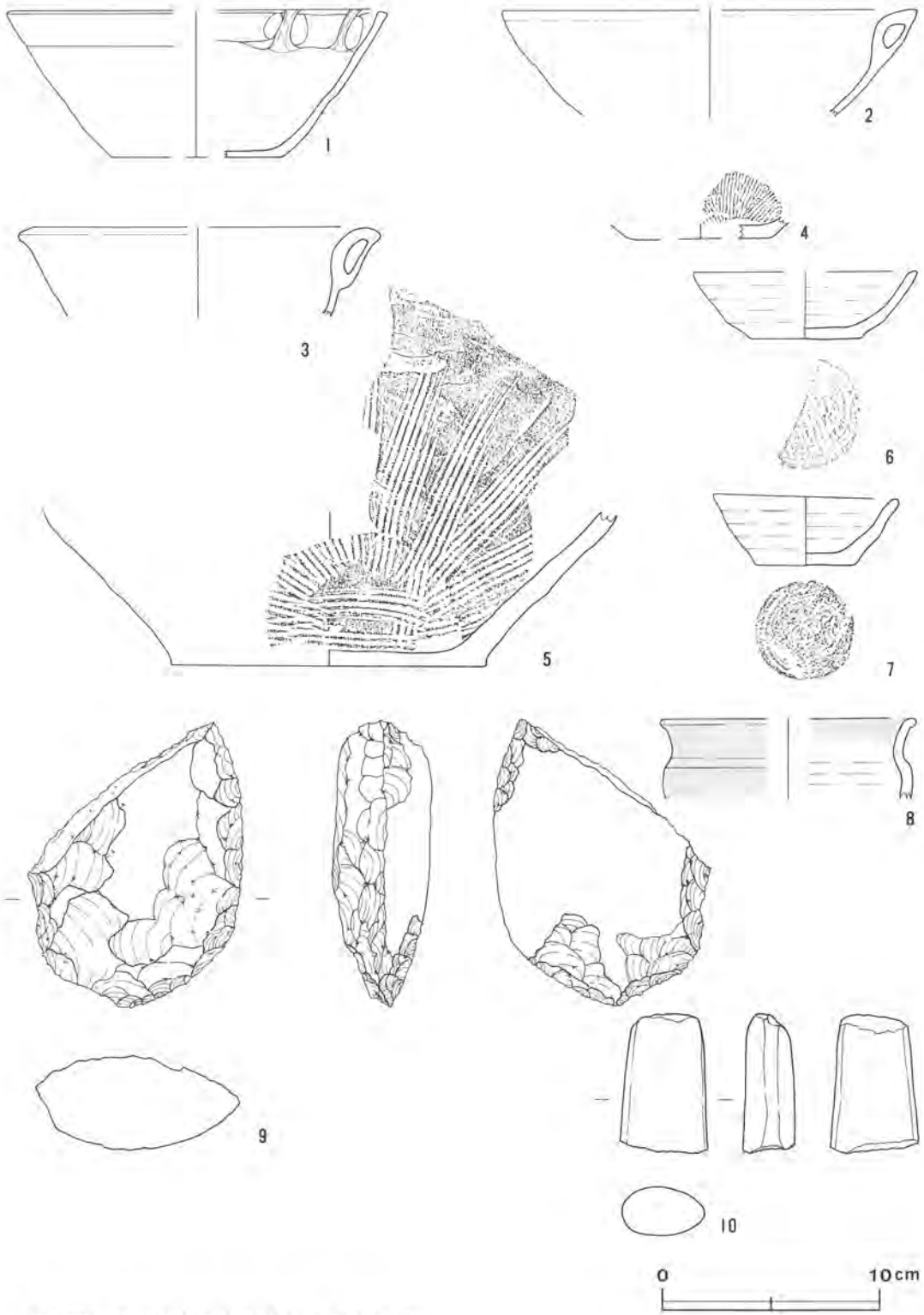


第48図　第64号住居跡実測図

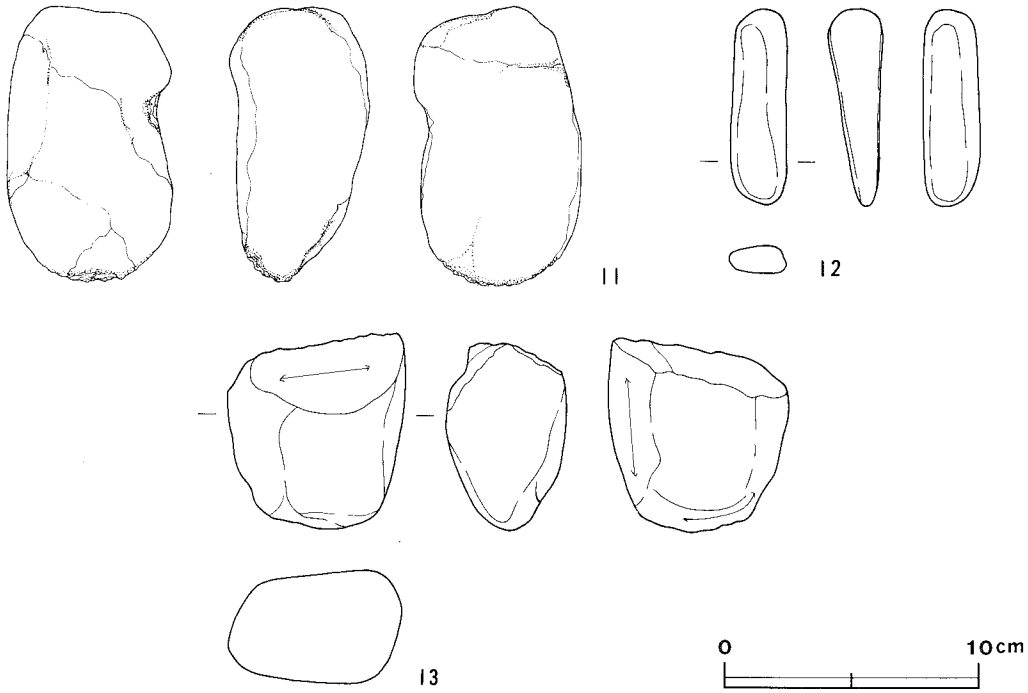
出土遺物

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	内耳形土器 土師質土器	A(35.0) B 13.4 C(15.6)	平底で，体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。体部は中央が膨らむ。口唇部は平坦。耳は2か所残存。外面に鍋墨付着。	口唇部，頸部内・外面横ナデ。 その他ナデ。 耳接合。	砂粒・雲母 橙色 良	P15



第49図　第64号住居跡出土遺物実測図（1）



第50図　第64号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
2	内耳形土器 土師質土器	A(38.2) B 9.6 C	底部欠損。体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部は平坦。耳は2か所残存。外面に鍋墨付着。	口唇部，頸部内・外面横ナデ。 その他ナデ。 耳接合。	砂粒 にぶい褐色 良	P113
3	内耳形土器 土師質土器	A(33.4) B 8.1 C	底部欠損。体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部平坦。耳接合部の外面はふくらむ。耳は1か所残存。外面に鍋墨付着。	口唇部，頸部内・外面横ナデ。 その他ナデ。 耳接合。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良	P114
4	擂鉢 （陶器）	A B 0.7 C(6.4)	底部破片。底部は直線的に開いて立ち上がる。内面には，8本1単位の櫛目が縦位に施されている。施釉の陶器。	ロクロ成形。	砂粒・砂礫 にぶい赤褐色 良	P281
5	擂鉢 土師質土器	A B 7.1 C 14.6	平底で，体部は直線的に開いて立ち上がる。内面には，6本1単位の櫛目が縦位に，底部には同心円状に施されている。底部中央は格子目状となっている。	ロクロ成形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 良	P280
6	皿 土師質土器	A(10.4) B 3.1 C(5.2)	平底で，体部は器厚を減じながら内彎気味に開く。底部に板の圧痕。外面に強いロクロ痕。	水挽き。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P112

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
7	皿 土師質土器	A 8.6 B 3.2 C 4.6	平底で，体部は器厚を減じながら内彎気味に開く。底部に板の圧痕。器内・外面に媒と思われる黒色の付着物。	水挽き。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良	P111
8	香炉 陶器	A(11.8) B 3.7 C	口縁部破片。口縁部は外反する。口縁部外面に太い凹線が1周する。口縁部のみ施釉。	水挽き。 横ナデ。	砂礫 灰白色 （釉）黒褐色 良	P352

第49・50図9～13は，第64号住居跡から出土した石器である。9は礫岩の扁平片刃石斧で，礫の周縁に打ち欠きが認められるが，使用痕が認められない。10は，磨製石斧で刃部が欠損しているが，全面に研磨痕が残る。石質は閃緑岩。11は自然礫を加工せず使用した敲打器で，先端部に使用痕跡が認められる。石質は流紋岩。12・13は砥石である。全面に使用痕である研磨痕跡が認められる。石質は，12が頁岩，13が砂岩である。

第5節　中　　世

1　中世城郭の構造

(1)　曲輪

城郭は，曲輪（郭）の連立から成り立っている。曲輪は，堀や土塁などの人工の施設や崖などの自然地形で区画された一区域である。

曲輪の数がひとつの城郭を単郭式と呼び，館跡にはこれが多い。また，方形かそれに近い形の館を方形館跡と呼ぶ。

(2)　土塁

土塁とは，土を土手状に盛ったものである。また，曲輪の隅，虎口の脇，折りなどの場合に土饅頭状に土塁が作られる箇所があり，これらは櫓台である。

また，土塁は曲輪全体に廻らす場合と，一部に作る場合があり，この場合土塁の大きさは一定ではないが，場所によっては高低差をつける。また，台地上に構築した場合は重要な防禦施設としている。

(3)　堀（第51図１～17）

堀には，水堀と空堀がある。

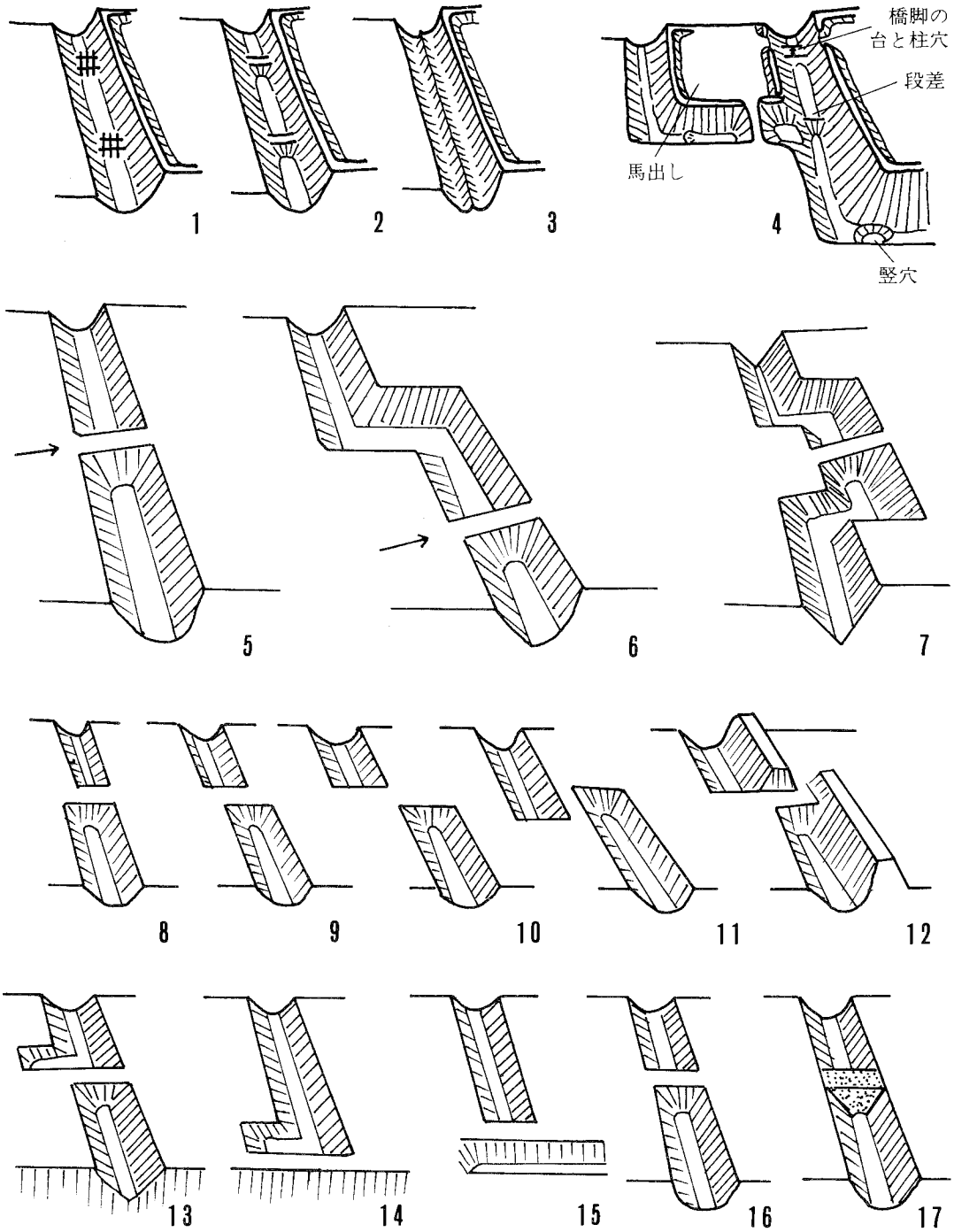
水堀は，敵・味方を遮断する防禦施設であり，空堀は，台地や山岳地帯に構築された中世城郭に多くみられる。

また，空堀は堀底を通路とする場合もあるが，この場合敵に利用されて堀底を移動されることから，防禦施設（第53図１～３）を設けている。

①は，堀の線と直交する形で柵を設けている。②は，土手で仕切って堀障子の形態をとっている。③は，堀底により小さな堀を２～３本，堀と平行に掘っている。いずれも防禦施設の目的で作られ，複数の堀障子を設けた堀を障子堀といい，堀底に堀と平行に堀を掘ったものを畝堀という。畝堀は，外八代城跡第２号堀でも検出されている。

さらに，堀の構築には，堀を直線的に掘る場合と，鍵の手に折り曲げて掘る場合があり，また一つの堀に折りを二つつけ，向い合わせて造っているものもある（第51図７）。

堀の形態は，堀の断面形状から，箱形堀・毛抜堀・薬研堀・片薬研堀・箱薬研堀などに分類される（第52図18～21）。



1～4 堀底の構造　　5～7 土橋と折り　　8～12 喰違い堀
13～15 堀（一方の堀を外側に突き出した）　　16～17 土橋の作り方

第51図　堀・土橋の構造

(4) **橋**（第51図13～17）

橋の構築には，堀を橋の設置する場所で，左右の端の線をズラしたり，完全に喰違わせたりする方法（喰違い）と，橋の端で一方の堀を外側に突き出す（橋と平行にする）方法があり，さらに直交する二本の堀に狭まれた橋では，一方の堀を外側に突き出す（橋と平行にする）方法がみられ，これらはいづれも敵が橋を渡る時間を延ばし，一か所に集中させて，敵を攻撃しやすい目的で造られている。

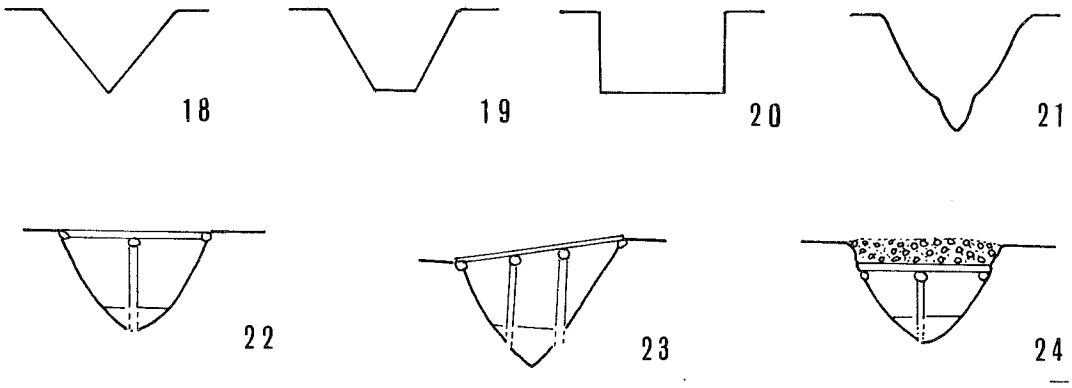
橋には，土橋と木橋がある。

土橋は，一旦掘った堀の中に幅の狭い土手を堀の線と直交するように築いたものや，また，あらかじめ橋の位置を決めて，その両端を掘り，中央の掘り残した部分を橋として使用したものがあり，後者は，土橋の補修・補強等は必要なく堅固である。

また，木橋は木造の橋であり，堀の壁面や堀底に橋脚を据えて構築する。木橋は，土塁の切れ目や，折りの付近に設置されている。

橋の架け方には，次の方法が考えられる（第52図22～24）。

①水平に架ける。②城の中心に向かって登り気味に架ける。③堀の壁面のへりより低い位置に水平もしくは少々登り気味に架け，両端もしくは城外側に階段をつける方法が考えられる。



第52図　堀の断面（18～21）・木橋の架け方（22～24）（竜ヶ崎市史・別編Ⅱより）

(5) **虎口**（第53図）

虎口は，城郭の出入口であり，戦闘時において最も激しく争奪戦がおこなわれる場所である。

また，城郭構築時に最も注意深く，複雑に造られた場所であり，堀や土塁の喰違いは，虎口に対して造られる。

虎口には，枡形あるいは馬出しがあり，枡形は門の内か外に造る小型の曲輪であり，城の内側

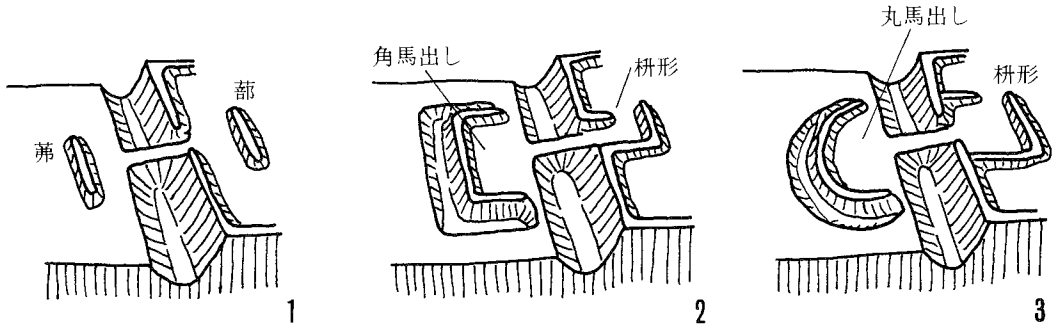
に造るものを内枡形，外側に造るものを外枡形という。

虎口の構築には，周囲に土塁や堀などを廻らし，二か所に出入口をもうけて一方を城内に，もう一方を城外に通じるように配置し，二つの出入口は原則として直線的に配置しない。

馬出しは，門の内・外に造る比較的小型の曲輪である。

曲輪は，周囲全体に堀を廻らし，島状に造っている。

なお，枡形や馬出しの虎口が流行したのは，16世紀に入ってからのものと考えられる。



第53図　虎口の防禦施設（竜ヶ崎市史・別編Ⅱより）

2　遺構と遺物

当遺跡は，第３章第１節の１で述べた様に，弥生時代から古墳時代，中・近世にわたる複合遺跡である。本節では，中世の屋代城に伴う虎口・土塁・堀・土橋・木橋・掘立柱建物跡・井戸・道路と，中世に属すると考えられる竪穴状遺構・土坑・地下式壙について記載することにする。

土坑については，特徴的なものは文章表記し，他は一覧表に掲載した。

(1)　虎口

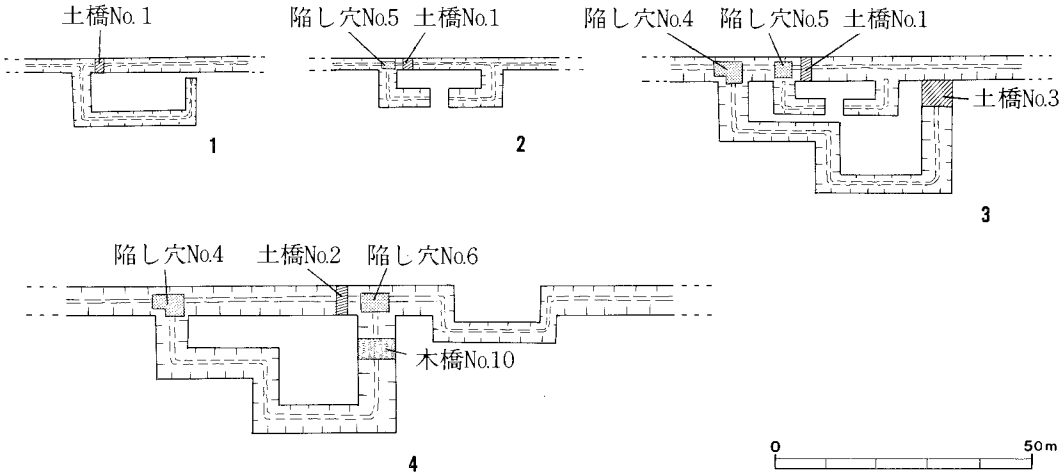
屋代城に伴う虎口は，昭和60年度調査時において，地形や残存する土塁の位置等から，調査区内南東側傾斜地（H7区）と残存する第２号土塁と第３号土塁との開口部（第１号虎口）と，第10号堀の北西部・第１号土塁の西側に木橋をかけて通路とした虎口（第２号虎口）の２か所が検出された。

昭和61年度調査の結果，虎口は内郭部を囲む第22号堀の南側（F4区）で枡形の曲輪（第３号虎口）と，第１号堀・第1B号堀・第６号堀の接続する調査区南側（G2・３，H2・３区）で枡形（第４・５号虎口）と馬出し（第６号虎口）の曲輪３か所が検出された。

調査された虎口の内，第２号虎口と第３号虎口は，屋代城館跡の第Ⅰ期の構築であり，第１号

虎口は第II期に構築され，土塁・堀の増改築に伴って最終時期迄の存続が考えられる。また，第4・5号虎口は第II期の改修時に造られ，第6号虎口は，屋代城の最終増改築時に構築されたものと考えられる。

調査の結果，虎口部には，土塁等は検出されず，堀と橋（土橋・木橋）・陥し穴（竪堀）が検出された。



第54図　屋代城・虎口の変遷図

第3号虎口（第149図）

本跡は，第22号堀の南側に位置し，「⌊⌋」状を呈する「枡形」の曲輪である。

屋代城館跡の第一期(館跡第149図)の段階で構築された南西側の虎口である。第22号堀の東側・西側は新たに掘られた堀によって重複し破壊され全容は不明である。

第4号虎口（第54図－1）

本跡は，第1号堀構築の段階で調査区南側（G2・H2・3区）に「⊔」状に構築された「枡形」の曲輪である。城内外への出入口は，第1号堀の部分に第1号堀構築時に土橋を構築する場所の両側を掘り，中央の掘り残された部分を橋としたのか，または一旦掘った第1号堀を埋め戻して土橋を構築し使用した事が考えられるが，調査の段階では明確にとらえる事ができなかった。しかし，屋代城跡の構築状況等から鑑み，古い段階での構築方法を考えると，あらかじめ堀の位置を決めて，その両側を掘り中央の掘り残された部分を土橋として内郭部への出入口に使用したことが窺える。曲輪内は，東西19m，南北6mを測る。

本跡の時期は，館跡から，城跡への過渡期と考えられ，屋代城館跡の第II期である。

第5号虎口（第54図－2・3）

本跡は，第4号虎口の内側に「 」状に構築した「枡形」の曲輪である。本跡の構築は，第54—1図に示した通り，第4号虎口の東側部を埋め戻して（調査の段階で，「 」状に斜線の部分を埋め戻して版築した箇所に東側の堀を新たに構築している状況が検出された。）新たに本跡を構築している。内郭部への通路は，第1号土橋（第4号虎口時に構築された土橋）が使用され，土橋西側に陥し穴（竪掘）を構築し，さらに土橋西側を若干拡張して防禦上の施設をより強固にしたと考えられる。

また，第150図に示した堀のうち，第II期（屋代城構築）の段階で構築され埋め戻された堀以外は，本跡の外堀として使用されたことも考えられる。

曲輪内は，東西18m，南北3mを測る。

第6号虎口（第54図－4）

本跡は，第4号虎口の西側堀を拡張し，さらに南へ新たな堀を掘り，第5号虎口を埋め戻して，「 」状を呈する「馬出し」の曲輪を構築し，曲輪内への出入口を，第1B号堀の東側に第3号土橋（第1B号堀構築時に，下幅6m・上幅2mの台形状に掘り残して土橋としている。）を構築して通路とし，さらに内郭部への通路は第1号堀の東側，第1B号堀と接続する西側に第1号堀を埋め戻して第2号土橋を架けている。また，第2号土橋の西側・東側の第1号堀を拡張（堀底を掘り窪めて深くしている。）し，曲輪の東側に新たに張り出し状の「折り」を造り第1号堀を埋め戻している。この折りは，曲輪内への入口部である第3号土橋に対しての後面への攻撃を目的として造られた遺構である。

内郭部への通路の土橋（第3号土橋）は，城の中心に向かって若干登り気味に架けられ，さらに，屋代城の最終期（第II期から第III期の増改築期）の改修に伴って，第3号土橋の部分を木橋に造りかえていることが堀壁側面の状況から認められ，木橋を架けた痕跡として，堀底・堀壁面に，左右に8脚の柱穴痕跡が検出された。

(2) **土塁**（付図－1）

土塁は，堀や崖のきわに作り，土塁の斜面と堀の斜面とを一連のものとして城壁全体の高さを増し，内・外郭部の視界を防ぎる防備上重要な施設である。

また，土塁は，曲輪の周囲全体に廻らせる場合と，一部に作る場合とがあり，土塁構築時においても，曲輪の内部を削って得た土を用いる方法と，堀を掘って出た土を用いる場合とがあり，土塁の大きさや高さを一定にせず高低差をもうけることもおこなわれている。

さらに，土塁を堅固に構築している場所は，敵に狙われ易い場所であり，平坦な台地上を利用

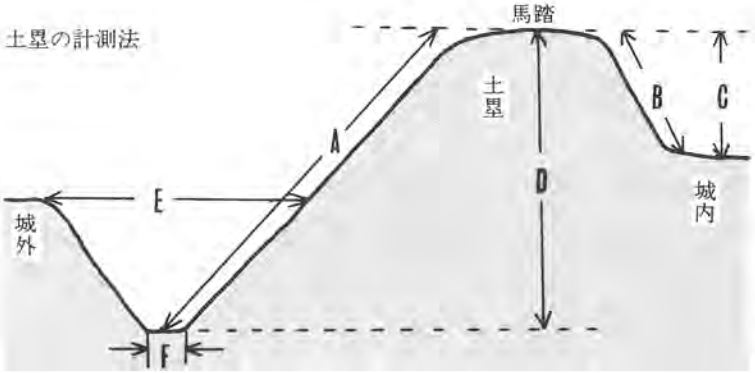
し城館跡を造る場合，山城のような高低差に頼ることができにくいため，土塁は重要な防禦施設である。

屋代城跡調査に伴い調査された土塁は，昭和60年度４基（第１～４号），昭和61年度１基（第５号土塁）の計５か所である。

第１・５号土塁は，主郭を形成する土塁であり，第２～４号土塁は虎口部を形成する土塁であり，第４号土塁は，第３号土塁の盛土中から検出されている。

なお，第３・４号土塁の一部と第５号土塁は，現状保存の処置が講じられ，土塁の構築状況の鑑察はできなかった。

土塁の計測法



A 外短高　D 土塁高
B 内短高　E 上　幅
C 内　高　F 下　幅

第１号土塁（付図－１）

本跡は，屋代城の主郭部の北東側に位置し，土塁の外側には，上幅６m，下幅２m，深さ３m前後の第７号堀（薬研堀）が巡らされている。南西側20mほどには，屋代城の西側の土塁である第５号土塁が，北東から南西方向に構築されている。

第１号土塁と第５号土塁は，ほぼ直角に構築されており，北西側が開口している。この開口部には，主郭部からクランク状に屈曲しながら延びる古道と思われる農道が通っている。また，第７号堀と重複する第10号堀からは，橋脚の柱穴痕と思われる規則的に配列されたピットや，堀の一部を埋戻し通路として使用したと思われる版築された部分が検出されている。

方向

主軸方向はN-70°-Wで，南東から北西方向に構築されている。

規模

土塁の基底面の最大長は36.5m，最大幅は基底面で11.5m，頂上部で５mを測る。また，土塁高5.8～６m，外短高7.15～7.8m，内短高5.4～6.2m内高2.15～2.6mで，斜度は内側（城内）で23.5～25°，外側（城外）で51.5～53°を測る。土塁の頂部と現地表面との比高は２～2.5mである。

土塁の規模は，盛土が周囲に流れており，構築時の状況とはやや異なっている。

構築状況

基底部を，周囲の現地表面より40cmほど上に残存する旧地表（黒褐色土）の上面に置き[注1]，ローム・黒褐色土・暗褐色土・ハードローム・粘土の順に盛り上げ，外表にはロームを置いている。

基底部から土塁の中段付近までは版築されており，両側が高く，中央部がくぼんでいる。土塁の両側をまず固めて皿状にし，その上に盛土していることが窺える。土塁の土は，外側に掘り込まれた第7号堀の掘り上げ土を用いており，盛土の層序が，堀の自然層序と逆転していることが観察できる。また，第7号堀の壁面に横列する多数のピットは，盛土の崩れを防ぐ土止め用の杭の痕跡と考えられる。

注

(1) 現地表面は，耕作等により削平されているものと思われる。

その他

土塁の馬踏の南東端は，他の部分に比べ広い平坦面となっており，ここには，江戸時代（宝永5年）の石造の稲荷様が祀られていた。祠付近の土塁表土からは，6枚の寛永通寶が出土している。

第2号土塁（付図－1）

本跡は，第3号土塁や第8号堀と共に屋代城東側の虎口部を形成する土塁で，傾斜地に構築されている。土塁の外側には，第8号堀が「コ」状に巡り，南西側には，本土塁に対して直角方向に第3号土塁が構築されている。

方向

主軸方向はN-17°-Eで，北東から南西方向に構築されている。

規模

土塁の基底面の最大長は30.5m，最大幅は基底面で6.4m，頂上部で2.3mを測る。また，土塁高3.5m，外短高3.9m，内短高0.8m，内高1.1mで，斜度は内側で29.5°，外側で63°を測り土塁の頂部と現地表面との比高は，内側で1m，外側で3m前後である。土塁の頂部は，北東側が最も高く標高23.98m，南西側が最も低く22.17mであり，比高は約1.8mである。この地区は自然の傾斜地（谷津）となっており，北東側で標高23m，南西側の虎口付近で20m前後を測る。土塁は一部削平され，また盛土も周囲に流れているため，本来の形状や規模とはやや異なっている。

構築状況

基底部を黒褐色土（立川ローム第2暗褐色帯〈BBII〉）の上に堆積するハードロームの上面に置き，黒褐色土と暗褐色土を交互に盛り上げている。盛土の上層には，第8号堀の掘削面に見ら

れる浅黄色の粘土が多量に含まれており，第８号堀の掘り上げ土を盛土していることが観察される。

第３号土塁（付図－１）

第２号土塁とともに，屋代城東側の虎口部を形成する土塁で，主郭の南東側の傾斜地に位置している。土塁の外側には第８号堀が掘り込まれており，第３号土塁の下からは第４号土塁，第９号堀が検出されている。

方向

主軸方向はN-72°-Wで，北西から南東方向に構築されている。第２号土塁に対して直角方向に位置する。

規模

土塁の基底面の最大長は30.5m，最大幅は基底面で5.4m，頂上部で2.8mを測る。土塁の全長は69m前後であり，基底面で頂上部の幅は土塁の北西端のH5区（昭和61年度調査区）で最大となっている。調査区内における土塁高は3.8m，外短高4.8m，内短高3.8m，内高2.7m前後で，斜度は内側で39～45°，外側で50～53°である。現地表面との比高は，1.7～2.7mである。第３号土塁は第２号土塁に対して直角方向に構築されており，その先端部（南東側）は，第２号土塁の延長線よりも3.5mほど外側に突き出している。盛土は周囲に流れており，構築時の状況とはやや異なっている。

構築状況

調査の結果，第３号土塁の下から新たに第４号土塁，第９号堀が検出された。第３号土塁は，先に構築された第９号堀の外側に新たに規模の大きな第８号堀を掘り，第９号堀や第４号土塁の上に第８号堀の掘り上げ土である黒褐色土や粘土を盛土している。黒褐色土は，色調や含有物により12層に細分することが可能である。黒褐色土中には，ローム粒子やハードロームブロック，粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子等が少量含まれている。粘土は土塁の上層に盛土されており，盛土の層序が堀の自然層序と逆転していることが観察できる。土塁の上面は，暗褐色土によって覆われている。

その他

第３号土塁・第８号堀の調査によって，第３号土塁下から検出された第４号土塁・第９号堀との新旧関係が明らかとなった。第４号土塁・第９号堀の構築後，防禦をより堅固にするために第３号土塁や第８号堀が構築されたもので新旧関係は第１号堀でも確認されており，屋代城が三度に亘って規模拡大されたことが窺えるとともに，部分的な改修がおこなわれたことも考えられる。

第4号土塁（付図－1）

主郭の南東側に位置し，第3号土塁下から検出されている。土塁の外側には，第9号堀が掘り込まれている。

方向

第3号土塁と同様，N-72°-Wに主軸を持ち，北西から南東方向に構築されている。

規模

トレンチ調査により，3か所で断面観察を行った。断面観察地点における基底面の最大幅は，2.5～2.7m，頂上部で0.65～0.85mを測る。また，土塁高2.5～2.6m，外短高2.65～3.05m，内短高2.6～2.7m，内高1.7～2.1mで，斜度は内側で39～51°，外側で59～64°である。

構築状況

谷津に自然堆積する黒色土を基底面とし，褐色土や黒褐色土を1～1.5mの高さに盛土している。褐色土中には，多量のハードロームブロックや少量の粘土ブロックが，黒褐色土中には，多量の粘土や少量のローム粒子・砂が含まれている。盛土には，第9号堀の盛り上げ土を使用しており，土塁の層序は堀の自然層序と逆転している。

その他

第4号土塁は，調査区南東端（昭和61年度調査区との境界）の第3号土塁断面においてもその存在が確認されており，調査区外の第3号土塁下に延びていることが予想される。

第5号土塁（付図－1）

主郭の西側に位置し，第1号土塁とともに内郭部を囲む土塁である。土塁の外側（西側）には第12号堀（箱薬研堀）が「 ⊏ 」状に巡っている。第1号・5号土塁はほぼ直角に構築され，北西側が開口し，この開口部に第7号堀と第10号堀が交差している。

また，本土塁の西側には，折り曲げた個所（折り）が検出されている。

規模

土塁の基底面の最大長は74m，最大幅は基底面で11.2m，頂上面で1.8mを測る。また，土塁高6.7mで，斜度は外側で43°を測る。土塁の頂部と現地表面との比高は6.0～6.2mである。土塁の規模は，盛土が周囲に流れており，構築時の状況とはやや異っていると考えられる。

(3) 堀　土橋　木橋

61年度調査区内から検出された堀は，第1号(SD4)・第6号(SD76)・第8号堀・第10号(SD64・68)・第12号（SD69）・第13号（SD70A）・第14号（SD70B）・第15号（SD71）・第16号（SD72）・第17号（SD74）・第18号（SD87）・第19号（SD88）・第20号（SD103）の13条である。これらは全

て，屋代城に伴うものであり，第１号堀は，東西240m，南北約210mの規模を有し，主郭をほぼ方形状に囲む外堀である。

第８号堀は，第２号土塁や第３号土塁と共に虎口部を形成する堀であり，第９号堀は，第３号土塁下から検出されていたが（昭和60年度調査にて検出された）第３号土塁は，現状保存の処置がほどこされたために，第９号堀の全容は検出されなかった。第10号堀は，第１号土塁の外側に掘られ，今年度は，昭和60年度の延長部分の調査を行った。第12号堀は，第５号土塁の外側を廻り，内郭をほぼ方形状に囲む内堀の西側・南側に位置し，さらに，その内郭部を区切る堀として，第13・14・15・16号堀があるが，各堀は，拡張（掘り下げたもの，堀幅を広げたもの）がおこなわれた事が認められた。第17号堀は，城館跡の外堀第１号堀の南側に位置して虎口部を形成する堀である。第18・19号堀は，第12号堀の東側部に位置して，18号→19号→12号の順に掘られ，堀の底・幅を拡張している。第20号堀は，第16号堀によって分断されているが，同一時期に構築された堀である。

（調査に際しては，溝と同一記号（SD）を用いたが，以下記載する堀の名称については，屋代Ｂ遺跡Ⅰ・Ⅱの報告書との統一を図った。）

第１号堀（SD4　付図－２）

本跡は，昭和59～61年度で検出調査された堀で，昭和59年度はB3・４・C2・３・５・６・D2，F1，G1・２区，昭和60年度はC6，D7，E6，E7区，昭和61年度はH2～５，F6，G2・５・６区の各区の調査区から検出された屋代城の外堀である。

B3区からG1区までは，全長211mで上幅６m，底面幅約1.5m，深さ２mの規模を有する。長軸方向はN-24°-Eを指し，G1区でほぼ直角に屈曲し東に延びコーナーより10m程の所で第５号堀と接合し，接合部には，上幅４×3.6m，底面幅2.6×1.9m，深さ2.5mの陥し穴（№２）が構築されている。本跡は，これより東に延び第６号堀と重複する。第６号堀は，第１号堀を掘り直ししたものであり，上幅6.7m，底面幅約0.7m，深さ3.1mの規模を有する。さらに本跡は，東へ46m延びたG2地区で分岐し，第６号堀は東に直線的に42m程延び，本跡は南へ屈曲して虎口部を形成しH3区で第６号堀と接合する。

本跡と第６号堀の分岐する地点には上幅4.1m，底面幅3.1m，深さ3.9mの陥し穴（№４）が設置され，さらに東へ８m・27m直進した地点で，第20号堀と接合する。本跡の虎口部は，G2区でほぼ直角に屈曲し南へ15m延び，さらにほぼ直角に東へ屈曲して19m延び，再度南へ屈曲して15m延び，東へほぼ直角に屈して22m進み，この地点でさらにほぼ直角に屈曲して北に24m延びて第６号堀と接合するが，H3区で，土橋・木橋の痕跡が検出されている。土橋は，堀壁面に「⌒」状の面が検出され，さらに木橋については，土橋同様堀壁面，底面に８本の柱穴痕跡が検出された。

この土橋（No.3）・木橋（No.1）は，土橋が一段階古く，木橋はその後の改修にて設置されたと考えられる。

本跡と第6号堀の接合する地点には，上幅4.9m，底面幅2.3m，深さ5.2mの陥し穴（No.6）が設置され西側には土橋（No.2）が堀を埋めて構築されている。

本跡はH3区で第6号堀との接合部から東へ6m直進し，東進する第18・19号堀と分岐し，ほぼ直角に屈曲して南へ折れ6m延びて，再度直角に屈曲して東に19m直進した地点で北へ直角に屈曲し6m延びて東にほぼ直角に屈曲して32m東進し，H5区で北西方向へほぼ直角に屈曲して延びている。

本跡の東コーナー部，H5区の堀底には，上幅2.4m，底面幅1.7m，深さ4.2mの陥し穴（No.7）が設置され，東側へ18m延びた地点で第8号堀と接続し，接続地点堀底には，上幅3.0m，底面幅1.6m，深さ2.8mの陥し穴（No.8）が設置され，さらに2m先の堀壁面に第9号堀の堀底が検出されているが，本跡よりも第9号堀が古く，本跡構築によって破壊され，壁面に検出された堀は，埋め戻された状況を呈していた。第9号堀と接続する地点から北へ8m延びた地点G5・H5区付近で，第12号堀と接続するが，本跡と接続する部分は，幅1m，長さ4mにわたって埋め戻されて土橋（No.3）が構築され，さらに，本跡堀底には，上幅3.9m，底面幅3.7m，深さ4.1mの陥し穴（No.9）が設置されている。この陥し穴の北側の壁面には，「レ」状の面が，また，堀底には段差が確認され，堀の拡張がおこなわれた事が窺い知れる。

第12号堀と接続する地点から北へ40m直進したF5・6，G5・6区で第14号堀と接続し，第12号堀と同様に，幅1m，長さ6mにわたって埋め戻されて土橋（No.4）が構築され，土橋東側堀底には，上幅4.2m，底面幅2.8m，深さ3.8mの陥し穴（No.10）が設置されている。さらに，この地点から北へ13m延びた地点で第8号堀と接続し，本跡堀底に，上幅2.2m，底面幅1.5m，深さ3.6mの陥し穴（No.11）が設置され，さらにE6区内で，上幅2.6m，底面幅1.9m，深さ4.2mの陥し穴（No.12）が第16号堀と本跡間の土橋構築に伴って設置されている。No.12号陥し穴より北東方向へ42.8mの地点（E7区）で堀は狭くなり，上幅1.7m，下幅1.0m，深さ2.3～2.5mで，壁は43～51°の傾斜で立ち上がり，E7区を境に，南側は北側より上幅1.7m，下幅が1m前後東側に広がっており底面にも段差が認められる。

本跡の北側は，B3区からD7区迄ほぼ直線で175mを測り，B3区コーナー部には，上幅9.0m，底面幅7.0mの陥し穴（No.1）が設置されている。

覆土は，壁際や堀の底面に，壁が崩れて堆積したと思われるローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し，下位には少量のハードロームブロックを含む褐色土，中位には粘土ブロック，中量のハードロームブロックや焼土・炭化物を含む暗褐色土，上位には中量のローム粒子や少量のロームブロックを含む暗褐色土・極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師質土器片，内耳形土器片，陶・磁器片，砥石，礫，石塔（五輪塔・宝篋印塔）が出土している。

第１号堀は，全体に箱形堀状を呈し，部分的に（コーナー付近）箱薬研堀状を呈している。E7・G1・G5区には，拡張の痕跡が認められる地点がある。

第２・３号堀（SD2・３号　付図－２）

本跡は，調査区Ｆ・G2・３区にまたがって検出された堀である。F3区で第４号堀と接続し東西方向へ17m延びF2区で東にほぼ直角に屈曲して７m延び，さらに南西方向へ34mほどで西へ屈曲して4.6m延びて，そこから再び南西方向へ８m延びている。F3区で第４号堀と接続する箇所には，上面幅2.5m，底面幅1.8mの陥し穴（No.３）が設置されている。

本跡は，「枡形」の虎口に対する「折り」として構築されている。

本跡の一段階古い特期の構築と考えられる第３号堀[(注1)]は，G2区から北東方向F2・３区に直線で16m程延びていたことが把えられた。第３号堀は，上幅３m，底面幅60cm，深さ1.6mの断面形「⌒」状の逆台形状で薬研堀である。

第２号堀の覆土は，下位にローム粒子を多量に含む褐色土・明褐色土が堆積し，中位と上位には褐色・暗褐色土が堆積し，埋設状況は自然堆積の様相を呈している。

第３号堀の覆土は，上位に人為的に埋め戻されたと思われる層が認られ，ロームブロックが多量に含まれている点から，本跡使用後は，第２号堀構築時に埋め戻しがおこなわれたものと考えられる。

〔注１〕屋代Ｂ遺跡Ｉの報告では，第２・３号堀の全容が不明であったために，統一がなされなかったが，調査の結果，第３号堀が古く直線的に構築され，その後改修によって，「枡形」の出入口と「折り」が造られ，この段階で第３号堀は埋め戻されていることが判明した。

第４号堀（SD426　付図－２）

本跡は，E2・３，F3区の各区にまたがって検出され，東へ50mほど延びF3区で第12号堀と接続する。規模は，上幅４～５m，底面幅約20cm，確認面からの深さが約２mである。壁は45～55°の傾斜を有し，断面形は「Ｖ」字状で薬研堀状を呈す。本跡はやや蛇行気味に掘られて構築され，F3区で第2号堀と接続する箇所に陥し穴(No.３)が設置されている。全体としての長軸方向はN-65°-Wを指している。

堀の埋没状況は，自然堆積である。

第6号堀（SD76　付図－2）

本跡は，昭和59年度調査において，第1号堀と重複して検出された堀であり，虎口部の内側で西から東に延び，第1号堀と第5号堀の交差する地点から始まり，虎口部の№2土橋迄の間74mを測る。上幅5.0～6.0m，下幅0.6～0.8m，深さ3m前後で壁は50°前後の急角度で立ち上がっている。縦面形が「V」状を呈する薬研堀であり，掘り込みは粘土層に達している。堀の形態は，底面の幅が極端に狭く，壁の立ち上がりも急である。

また，壁面，土橋（№2）の埋没状態の断面（PL21）から判断すると，第6号堀の構築前の堀が断面に認められ，第6号堀は，堀自体の幅を広げ，深さを加えて，より強固に拡張をほどこしている。この時期（第1号堀）に土橋の№1地区を設置したものと考える。さらに第1号堀との接合地点に竪堀（陥し穴№3～5）を設置している。

第8号堀（SD8　付図－2）

本跡は，昭和60年度調査において，調査区の南側F6・G6・G7・H6・H7・I6・I7区で調査された堀で，主郭の南東側に位置し，今年度調査区域は，H5・6・I6区であり，第3号土塁の南側で検出された。

堀の全長は，183mで，「コ」状に構築され，第1号堀と接する$F6h_4$区付近から南東方向に56mほど延び，$G7h_6$区で63°の角度で南へ屈曲し，南西方向に60mほど延びている。さらに，$I7c_1$区でほぼ直角に屈曲し，67mを測り，第1号堀に接合する。規模は，上幅4～5.5m，下幅0.2～1.0m，深さ2～2.5mで，壁は40～50°前後の角度で立ち上がっている。断面形は，虎口部・北側では「V」状を呈する薬研堀であるが，南側では，「⌊」状を呈する箱形堀に形態が変化している。（この場所は第9号堀とは重複せず，第9号堀より新しく構築されている。）

覆土は，下位に砂・粘土を含む黒褐色土，中位にローム粒子・ハードロームブロック・粘土ブロックを中量含む黒褐色土，上位に黒褐色土・極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師質土器・内耳形土器片が出土している。いずれも，中・下層より出土している。

第10号堀（SD64・68・103　付図－2）

本跡は，昭和60年度調査区の北西側D4・D5・D6・E6区に位置し，中央部は第7号堀によって掘り込まれているが，「⊓」状に掘り巡らされていたものと判断され，残存部については，昭和61年度に調査をおこなった。

本跡の形状は「⊓」状を呈し，西側では第12号堀の北側より堀が始まり，北へ10m延びて，東へ屈曲し16mほど延びた所で第7号堀によって切られている。中央部は，第7号堀によって切られているため不明であるが，堀は第7号堀との重複部(D6区)からさらに南東方向に25mほど延びE6

区で再び直角に屈曲し，南西方向へ31m程延びた所で留まるが，第16号堀の南側で再び堀が始まり，E6・F5・F6区に延びる。第16号堀によって虎口の一部は切断されている。上幅2.3～2.8m，下幅0.2～0.3m，深さ1.5mで壁は60～70°の角度で立ち上がっている。

また調査の結果，D4区，第12号堀の手前で留まっている本跡は，さらに南へ延びたものと考えられるが，第12号堀の構築によって破壊されたものと考えられる。また，第7号堀・第12号堀の構築時において，第10号堀も同時に存在していた事が考えられ，第7号堀を構築した時点で，第10号堀との接点地点は，ハードロームや粘土によって人為的に埋め戻され版築されている。この事からも，第7号堀，第12号堀との同時存在がとらえられる。さらに，E6・F5・6区内で構築された堀は，土坑・住居跡を破壊し造られている。

覆土は，下層に暗褐色土，中層に暗褐色土・黒色土，上層に黒褐色土が自然堆積している。覆土中には，全体にローム粒子やハードロームブロックを含み，特に上層には炭化粒子・焼土粒子が含まれている。

遺物は，覆土中から土師質土器・内耳形土器が出土しているが，土師質土器は，土坑との重複地区から出土している。

第12号堀（SD69　付図－2）

本跡は，屋代城跡の内郭部を方形状に囲む内堀である。本跡の形状は「⊏」状を呈する堀で，D4・5，E3～6，F3・4，G3～5，H5区で検出された。

堀の全長は，285mで，第1号土塁の南で，東から西へ84mほど延び，上幅6.8m，下幅0.6m，深さ4.0mで，壁は38°前後の角度で立ち上がり，第7号堀と接合する北西側に竪堀（陥し穴）が構築されている。この区間（第1号土塁の南側）の堀は，第12号堀と第7号堀が接合する地区において，（第1号土塁の東側部分）第7号堀構築時には，埋め戻された事が，土層堆積状況や，堀の構築状態から窺う事ができる。

D4区でほぼ直角に屈曲し，第5号土塁の西側を南に延び73mを測り，F3区でほぼ直角に東へ屈曲して東方向へ23mほど延びている。さらに，南へ直角に屈曲して25m延びるが，この部分は“折り”の部分であり，堀に木橋（№2）をかけ，通路（虎口）として使用されたものと思われる。ピットは，計6か所検出され，長径60～80cm，深さ（確認面から）50～60cmを測り，ピット北側には，堀底に竪堀（陥し穴）が認められた。また，“折り”の部分から東に延びる堀は，第5号土塁西側に検出された堀（薬研堀）と形状に違いがみられ，“折り”の部分から東にかけての堀は箱薬研を呈し，堀幅が10～12mを測り，堀底幅の状態から，拡張された事が窺い知れる。

G3区で東にほぼ直角に屈曲して南東へ62mほど延びG5区で南へ5m，さらに東へ10m程屈曲して延び，第1号堀と接合するが，G5区の堀壁面に3度にわたって堀の増拡張がほどこされた

面が検出された（ＰＬ18）。第１号堀と接合する地区は，堀が人為的に埋め戻されて土橋（№３）として使用されている。また，Ｇ５・Ｈ５区は，虎口部に対する“折り”の部分であるために，堀が「 ⌊ 」状に構築されている。また，第12号堀の北側に検出された堀は，堆積状況の観察の結果，“折り”を造る段階で，人為的に埋め戻しが（ＰＬ17）おこなわれたことが認められた。堀上幅９～12ｍ，下幅0.8～1.0ｍの規模を有し，壁は第５号土塁西側で42°，東側（Ｅ４区）で20°前後の角度で立ち上がっている。断面形は「Ｖ」，「 ⋁ 」状を呈し，薬研堀・箱薬研堀状に掘られている。

覆土は，下層に黒褐色土，中層に暗褐色土・黒色土，上層に黒褐色土が自然堆積している。覆土中には，全体にローム粒子やハードロームブロックを含み，中層には，炭化粒子・焼土粒子・炭化材片が含まれている。

遺物は，覆土中から内耳形土器片，陶・磁器片，土師質土器片が出土している。

第13号堀（SD70A　付図－２）

本跡は，調査区F4区に位置し，第12号堀の北側で主郭を構成する堀である。堀は西から東に延び全長は25mを測り，断面形は「 ⊔ 」状を呈する箱形堀であり，第14号堀と接合する地点には，土橋（№５）と竪堀（陥し穴№10）が検出されている。土橋の構築は，本跡を埋めて使用している。また，竪堀は，堀底を掘り窪めて「 ▭ 」状の長方形を呈している。規模は，上幅４～５ｍ，下幅0.3～0.4m，深さ1.8mで壁は35～55°前後の角度で立ち上がっている。

本跡の土橋の堆積状況から判断すると，本跡は，第14号堀より一段階古い時期に，第１号堀に接合して構築されていたものと土橋（第１号堀と第14号堀の接合部に構築されている土橋）の断面より判断された。これらの事から，本跡の最初に構築された長さは，68mを測り，断面は「Ｖ」状を呈する薬研堀であり，その後，拡張し検出時の堀の形態になったものと考えられる。

覆土は，下位に粘土を若干含む黒褐色土，中位にローム粒子・ハードロームブロックを含む黒褐色土，上位には黒褐色土・極暗褐色土が自然堆積し，堀底より0.3m上に，焼土・木炭類がレンズ状に堆積している。

遺物は，土師質土器片が出土しているが，いずれも，中・下位層より出土している。

第14号堀（SD70B　付図－２）

本跡は，第13号堀の東側，調査区F4・５，G4・５区で確認された堀で，東端は第１号堀と南側は第12号堀と接合する。

堀の全長は72mで「 ⌈ 」状に構築され，第１号堀と接合するF5・G5区には，通路として使用された土橋(№４)が検出されている。№４土橋の堆積状況や断面の観察の結果，本跡は，２～３

回にわたり拡張（増幅・掘り下げ）がおこなわれた事が窺える。堀は，F4・F5区の地点で南へほぼ直角に屈曲し，南方向へ28mほど延び，第12号堀と接合するが，この接合地点の堀の状況は，堀底に３段の階段状の掘り込みが認められ，土の堆積状況から土橋が設置された事が窺えるが，明確にとらえる事はできなかった。

規模は，上幅７～８ｍ，下幅0.4～0.6m，深さ3.75mで，壁は40～45°前後の角度で立ち上がっている。断面形は「⋎」状を呈する箱薬研堀である。

本跡は，第13号堀を拡張して造られ，さらに「⊓」状に掘り，増築の際に粘土層・砂層迄掘り込み，底面の幅が極端に狭く壁の立ち上がりも急であり，より強固に造ったものと考えられる。

覆土は，下層に壁が崩れて堆積したと思われるロームブロック・ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し，中位には粘土ブロック・ロームブロックや木炭・焼土ブロックを含む暗褐色土，上位には多量のロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が自然堆積している。

遺物は，出土していない。

第15号堀（SD71　付図－２）

本跡は，内郭を構成する堀であり，調査区E5・6・F5区で検出された堀で，第12号堀と第１号土塁東端部で接合し，南に延びる堀である。全長は60mを測り，断面形は北側で「Ｖ」の薬研堀を，南側で「⊔」状を呈する箱形堀である。第12号堀と接合する地点（コーナー部）の堀底は，第12号堀が深く，本跡が浅い形状で1.4mの段差をもうけている。また，第12号堀との接合部より南へ16mの地点で，第16号堀と接し，この場所にも竪堀（№12・陥し穴）が設置されている。規模は，上幅６～７ｍ，下幅0.6～1.0m，深さ2.5mで，壁は38～52°前後の角度で立ち上がっている。本跡は，第12号堀・第16号堀より新しい時期に掘られ，第７号堀と同一時期に構築されたと考えられる。

覆土は，全体にロームブロック・炭化粒子・炭化物（木炭）が含まれ，下位は褐色・暗褐色土，中位から上位は明褐色・暗褐色土が堆積し，下位は火熱を帯びたロームブロックが多量に認められるが，本跡の埋没状況は自然堆積である。

遺物は，覆土下層より硯が，中層より内耳形土器・土師質土器片，上層より礫が出土しているが，中層より上層にかけての遺物は，周辺土坑等からの流れ込みとも考えられる。

第16号堀（SD72　付図－２）

本跡は，内郭を構成する第15号堀と外堀の第１号堀との間調査区E6区で検出された堀である。全長は22mを測り，断面形は「⋎」状を呈する箱薬研堀である。

本跡の東端は第１号堀との間に１ｍの残存部があり，この部分は通路として使用されていたと考

えられ，また，西端は第15号堀と接合しているが，調査状況から鑑み，本跡構築後に第15号堀を掘っており，壁面が破壊されている。

規模は，上幅４m，下幅0.4～0.6m，深さ1.5～1.8mで壁は38～52°前後の角度で立ち上がり，底面の幅が極端に狭く壁の立ち上がりも急である。

覆土は，壁際や堀底には，ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し，下位にはハードロームブロックを含む暗褐色土，中位にはハードロームブロックや焼土・炭化物を含む黒褐色土，上位には中量のハードロームブロックや炭化粒子を含む極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土上層より土師質土器片が出土している。

第17Ａ・Ｂ号堀（SD90A・B　付図－２）

本跡Ａ号堀は，第５号土塁の東側，主郭部の西側に位置し，南北に61mほど延び，南端は，第５号土塁下に延びている。

上幅４m，下幅１m，深さ1.5m前後で壁は44°前後の角度で立ち上がっている。断面形は「_/」状を呈する箱形堀であり，北端は第12号堀と接し，北端より54m地点で，西側に延びる堀である。

Ｂ号堀は上幅3.4m，下幅0.6mの「└┘」状を呈する箱形堀で，第５号土塁構築で埋没しているため，全容は不明である。

調査区F4区でＡ・Ｂ号は接合するが，Ａ号が古く，その後Ｂ号を新たに掘り加えている。

覆土は，壁際に崩れて堆積したと思われるハードロームブロック・ローム粒子を多量に含む褐色土堆積し，全体にハードロームブロック・炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土・極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師質土器・釘・礫が出土している。

第18・19号堀（SD87・88　付図－２）

本跡については，第12号堀と重複している状況から第12号堀の項で述べている。

第20号堀（SD74　付図－２）

本跡は，第１号・６号堀に囲まれ虎口部を形成する堀である。調査区G2・H2・３区で確認された堀で，第６号堀と接合する。

堀の全長は28mで，「 」状に構築された「枡形」の虎口の一部であり，断面形は「_/」状を呈する箱形堀である。

本跡の西側の堀と第６号堀の接合する場所には，第６号堀・堀底に竪堀（№４陥し穴）が，さ

らに，東側に土橋（№1）が検出された状況からみて通路として使用されたものと考えられる。

規模は上幅3.6～4.0m，下幅0.8～1.0m，深さ1.8～1.9mで壁は60～68°前後の角度で立ち上がり，壁の立ち上がりは急である。

本跡は，第6号堀底との差が1.5～1.3m程であり，構築の時期は第II期と考えられる。

覆土は，壁際や堀の底面に，壁が崩れて堆積したと思われるローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し，全体にロームブロック・ローム粒子・粘土・焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師質土器・礫が出土している。

第21号堀（SD103　付図－2）

本跡は，第1号・15号堀の間に位置し，第10号堀と対になり北から南へ蛇行しながら延びている。

調査区E6・F5・6区で確認された堀で，南端は第14号堀の北側5.6mで留まるが，北端は，第16号堀によって切断されている。第10号堀と本跡の関係は，第16号堀の位置する場所が通路として使用されていたと考えられる。

規模は，上幅1.8～2.0m，下幅0.6m，深さ0.75mで壁は42～48°前後の角度で立ち上がっている。断面形は「V」状を呈する薬研堀であり，堀周囲に検出された竪穴住居跡・土坑（墓壙）を破壊して本跡を構築している。

覆土は，上層に黒褐色土・ロームブロックを混え，中位・下層には暗褐色土が堆積し，自然堆積の状況を呈している。

遺物は，覆土上面より土師質土器片が出土している。

第22号堀（SD111・113　付図－2）

本跡は，調査区F4区に位置し，第5号土塁，第13号堀の南側に検出された堀で，本跡は西側で第12号堀，北側で第13号堀によって掘り込まれ原形は不明である。当初は，SD111・SD113号と呼称し，別個の異なる遺構として調査を進めたが，堀の中央部を溝によって切られ，第12・13号堀によって掘り込まれている状況から堀の全容をとらえることは不可能であったが，規模・形状・形態が酷似していることから，SD111・113号は本来は同じ堀であり，「⌊ ⌋」状に掘り廻らされたものと判断した。

現存する堀の全長は27mであり，上幅1.4～2.0m，下幅0.6～1.0m，深さ1.0m前後の規模を有し断面形は「⌣」状を呈して箱形堀である。

本跡は，第12号堀と重複する地点から東へ10mほどの所で堀は留まり，幅1.5m程の土橋が設置

され，さらに東へ7m程進んだ地点で北にほぼ直角に屈曲し10m程延びて第13号堀と重複し，13号堀の北壁に本跡の掘り込み面が確認されている。

以上の状況等から判断すると，本跡の構築は，第12・13号堀の構築より一時期古い段階で造られ，虎口部として使用されていた事が考えられる。

覆土は，下層にハードロームブロックを多量に含む黒色土や黒褐色土が堆積し，上層には粘土混りの黒褐色土が含まれ，堆積状況から判断して，人為的に埋め戻しがおこなわれた事が窺える。

遺物は，中層から土師質土器片が出土している。

(4) 掘立柱建物跡

屋代B遺物の調査の結果，城館跡に伴う堀・土塁とともに，14棟におよぶ掘立柱建物跡が検出された。

郭跡は，堀跡によって4区画に分けられ，北からⅠノ郭，Ⅱノ郭，Ⅲノ郭，Ⅳノ郭，Ⅴノ郭と名付られ，Ⅳノ郭はさらにⅣ－西郭とⅣ－東郭とに分けられる。Ⅰノ郭とⅡノ郭から掘立柱建物跡として並ぶ柱穴痕が検出されたが，Ⅲノ郭，Ⅳノ郭，Ⅴノ郭からは検出されなかった。

しかし，これら検出された掘立柱建物跡の柱穴痕は，Ⅰノ郭内では土坑との重複が激しく，さらに第5号土塁下に延び全容を明確に捉えることは不可能であり，柱痕跡は明瞭でなく，柱穴跡も明確に検出されなかった。

建物の構造は，柱穴の配列状態からみて，側柱だけの建物・総柱だけの建物の存在もとらえられる。

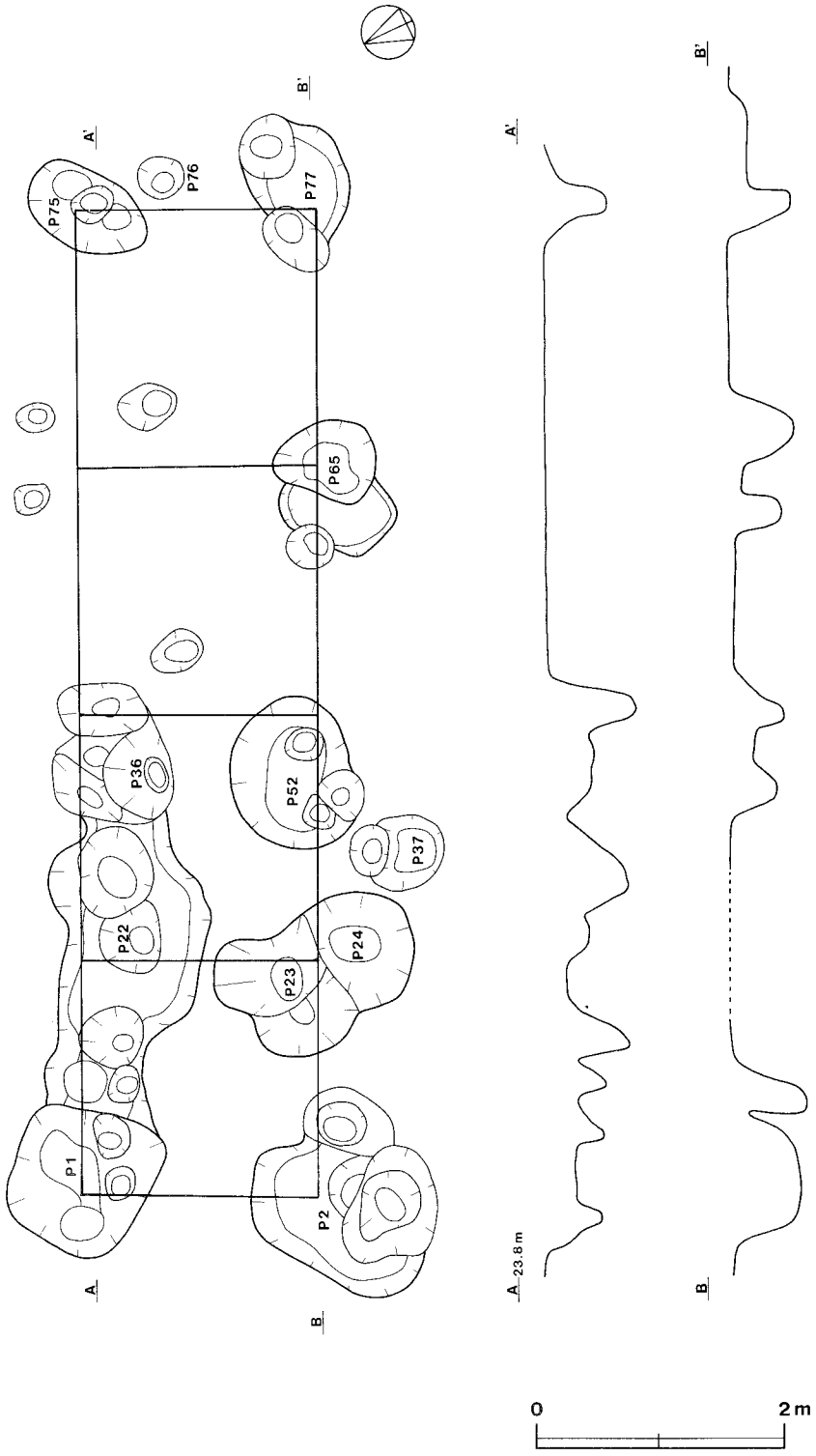
建物跡の時期は，本跡から出土した遺物等から検討すると，12世紀後半まで遡るものであり，16世紀初頭までのもので終っている状況であることから，建物跡の構造や建物跡の重複関係からみて，12世紀後半から15世紀迄に構築されたものと考えられる。

第1号掘立柱建物跡（第55図　付図21）

Ⅰノ郭の西側のE4区に確認され，4間（8m）×1間（1.8m）の東西棟建物跡である。柱間寸法は，桁行・梁行ともに2.0m×1.8m等間とみられる。柱穴掘方は，直径35～50cmのほぼ円形で深さは35～75cmを測る。柱穴内の覆土は，ロームブロックを少量含む褐色土の自然堆積状況を示す。

第2号掘立柱建物跡（第56図　付図21）

Ⅰノ郭の西側，第5号土塁の東側のE4区に確認され，4間（6.4m）×3間（3.4m）の南北棟建物である。柱間寸法は，桁行1.6m（5.3尺）であるのに対して，梁行1.1m（3.6尺）である。柱穴



第55図　第１号掘立柱建物跡実測図

掘方は，直径50cmのほぼ円形で深さは30～70cmを測る。柱穴内の覆土はロームブロックを含む褐色土の堆積がみられ，柱穴の東側に版築の様相が窺える。

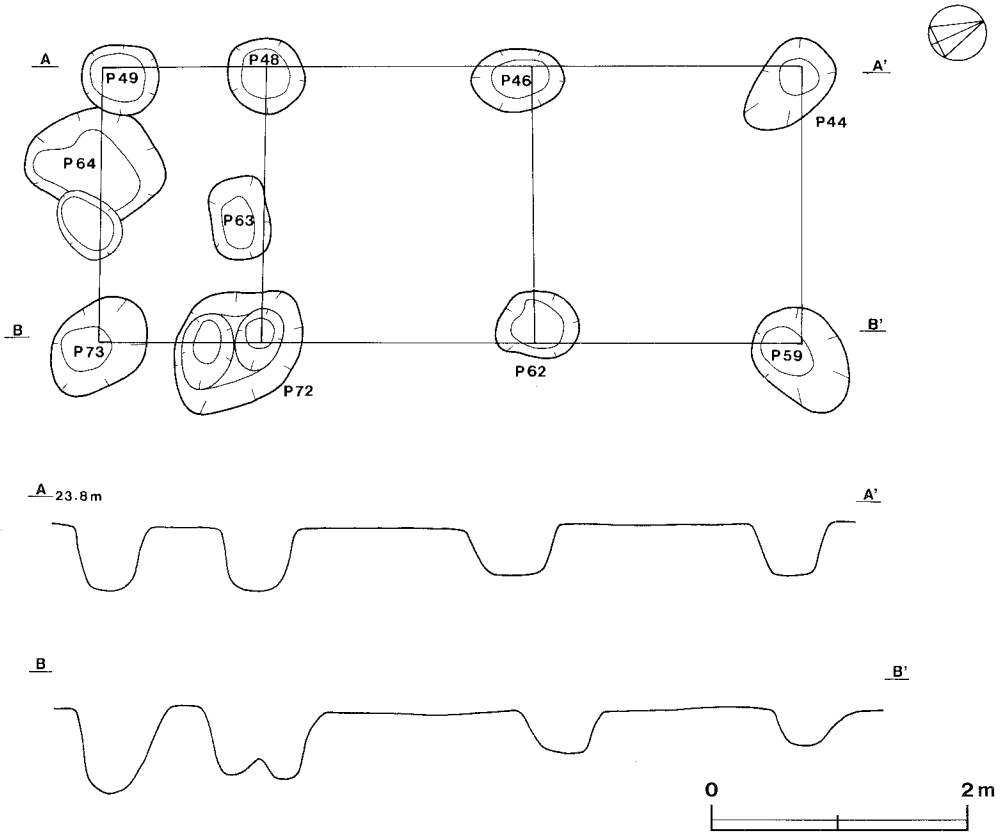
第３号掘立柱建物跡（第57図　付図21）

Ｉノ郭の西側のE4区に確認され，第５号土塁構築時に本跡を埋めている状況で，全容を把握することは不可能であるが，南北棟建物と考えられる。

第４号掘立柱建物跡（第58図　付図21）

Ｉノ郭の東側のE5区に確認され，３間（６ｍ）×１～２間（3.5m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行２ｍ（6.8尺）であるのに対して，梁行は1.7～3.5m（5.8～11.6尺）であるが，梁行間の柱痕跡は検出されなかった。

柱穴掘方は，直径50～60cmのほぼ円形で深さは60～70cmを測る。柱穴内の覆土は，ロームブロックを含む褐色土・黒色土の堆積状況を示すが，上層から土坑との重複関係も捉えられる。



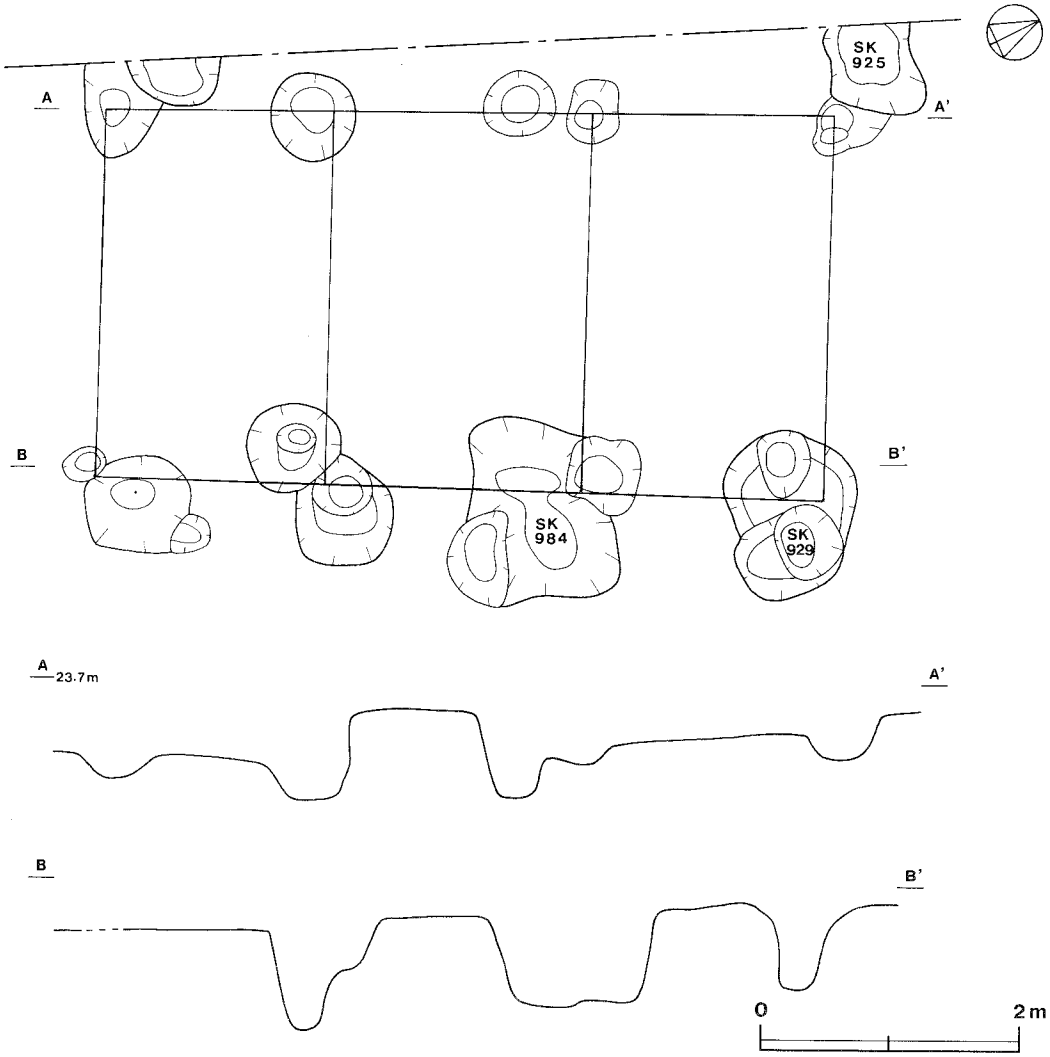
第56図　第２号掘立柱建物跡実測図

第５号掘立柱建物跡（第59図　付図－２）

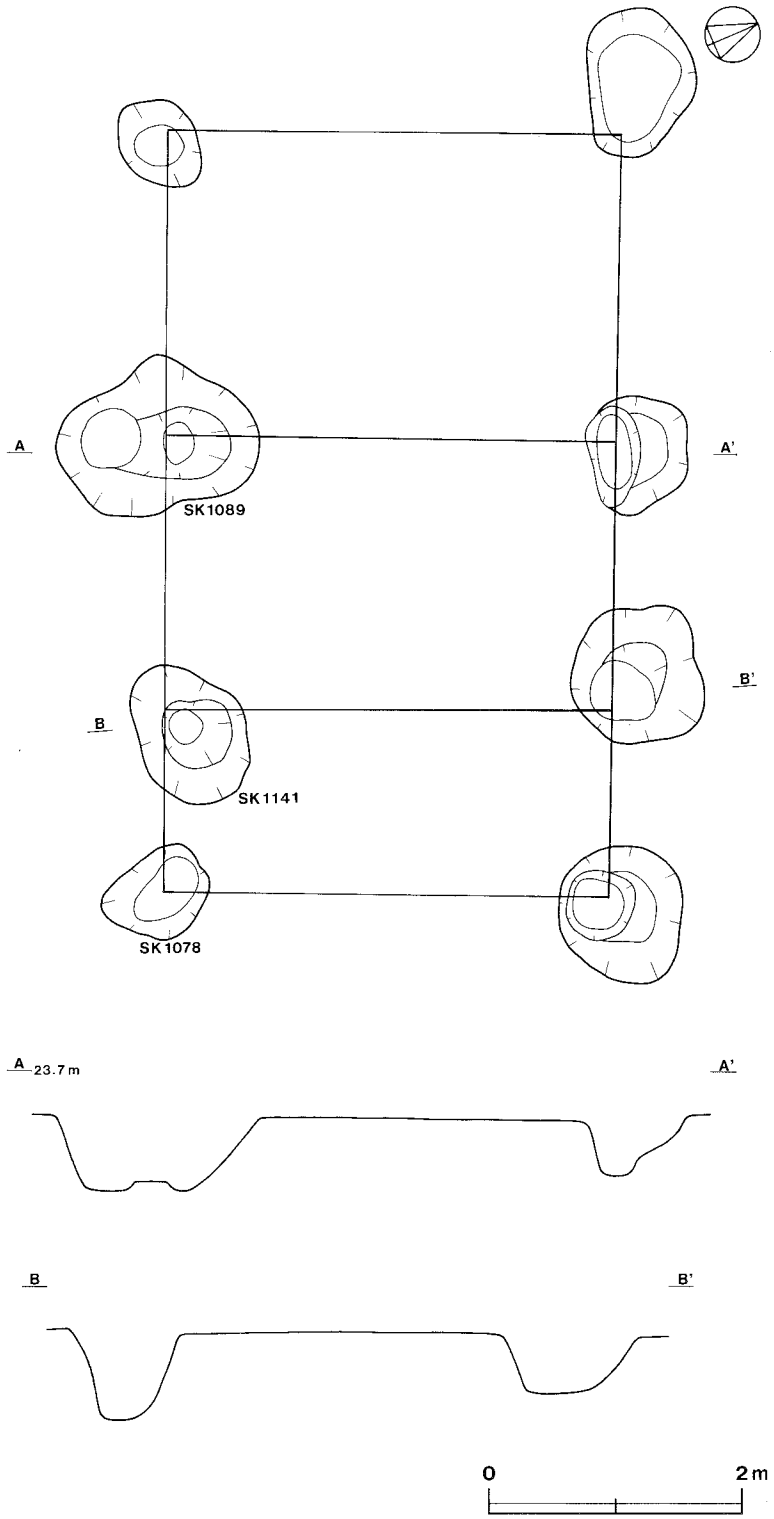
Ｉノ郭の東側のE5区に確認され，２間（５m）×２間(3.5m)の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行2.5m（8.3尺）であるのに対して，梁行は1.75m（5.8尺）である。柱穴掘方は，直径50～70cmのほぼ円形で深さは40～80cmを測る。柱穴内の覆土は，ロームブロックを含む黒褐色土の自然堆積で，柱痕跡は認められない。

第６号掘立柱建物跡（第60図　付図21）

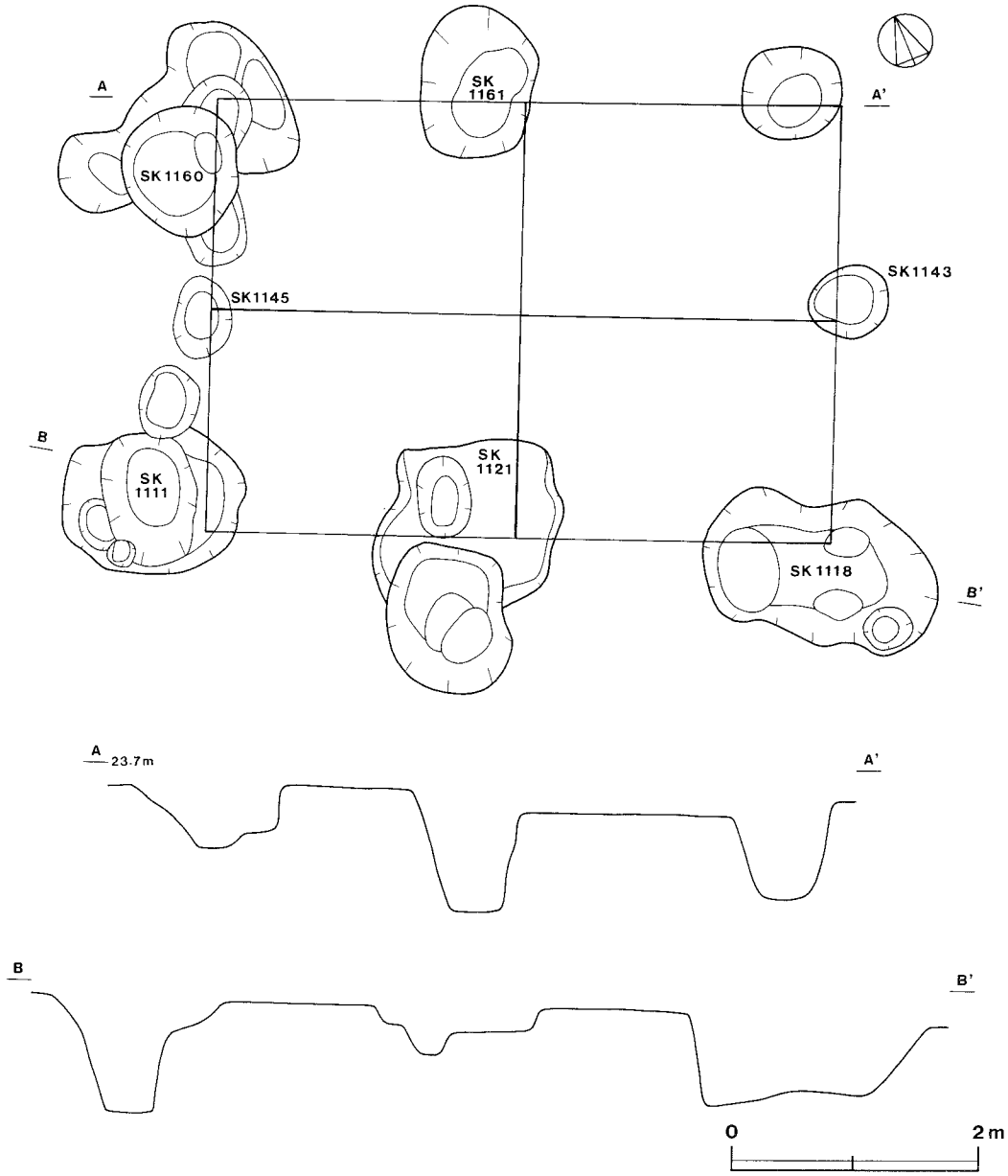
Ｉの郭の東側のE5区に確認され，３間（５m）×１間(2.1m)の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行1.6m（5.3尺）であるのに対して，梁行は2.1m（７尺）である。柱穴掘方は，直径40～80cm



第57図　第３号掘立柱建物跡実測図



第58図　第４号掘立柱建物跡実測図

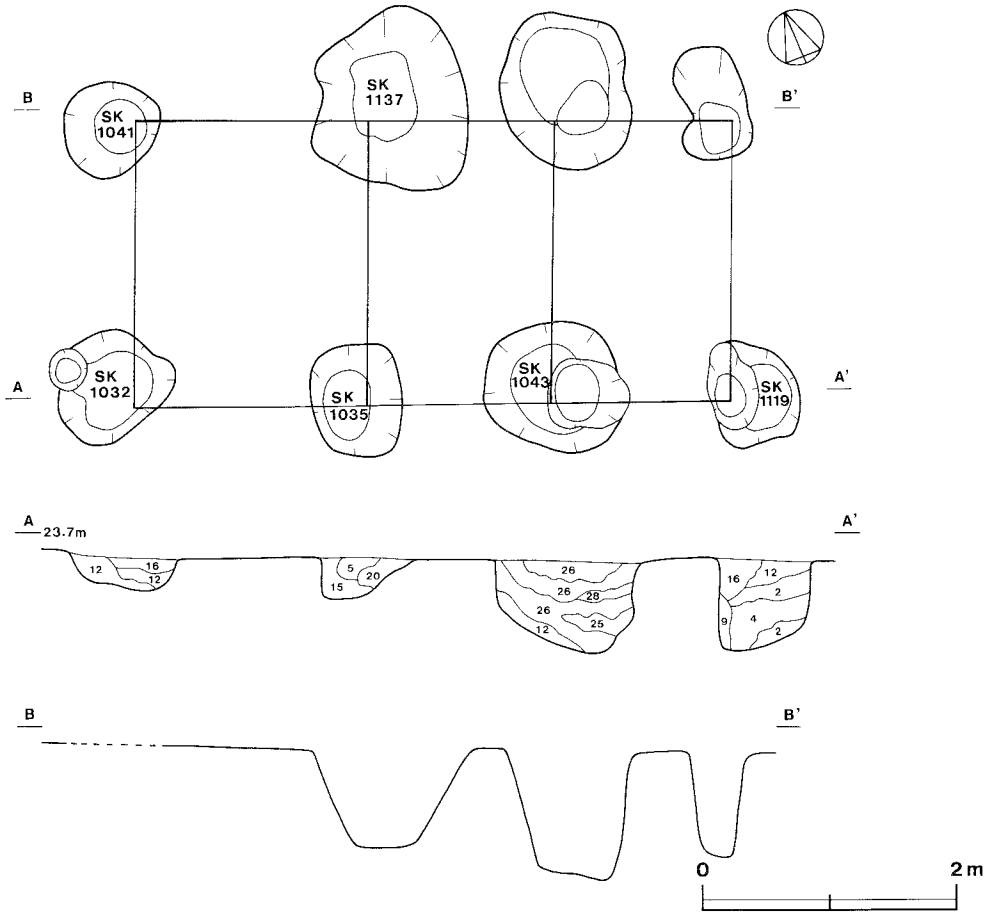


第59図　第５号掘立柱建物跡実測図

のほぼ楕円形で深さ40～70cmを測る。柱穴内の覆土は，ロームブロックを含む褐色土の堆積状況を示すが，土坑との重複が認められる。

第７号掘立柱建物跡（第61図　付図－21）

Ⅰノ跡の南側のF4区に確認され，３間（6.5m）×１間（1.8m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行2.16m(7.2尺)であるのに対して，梁行は1.8m(６尺)である。柱穴掘方は，直径40～80

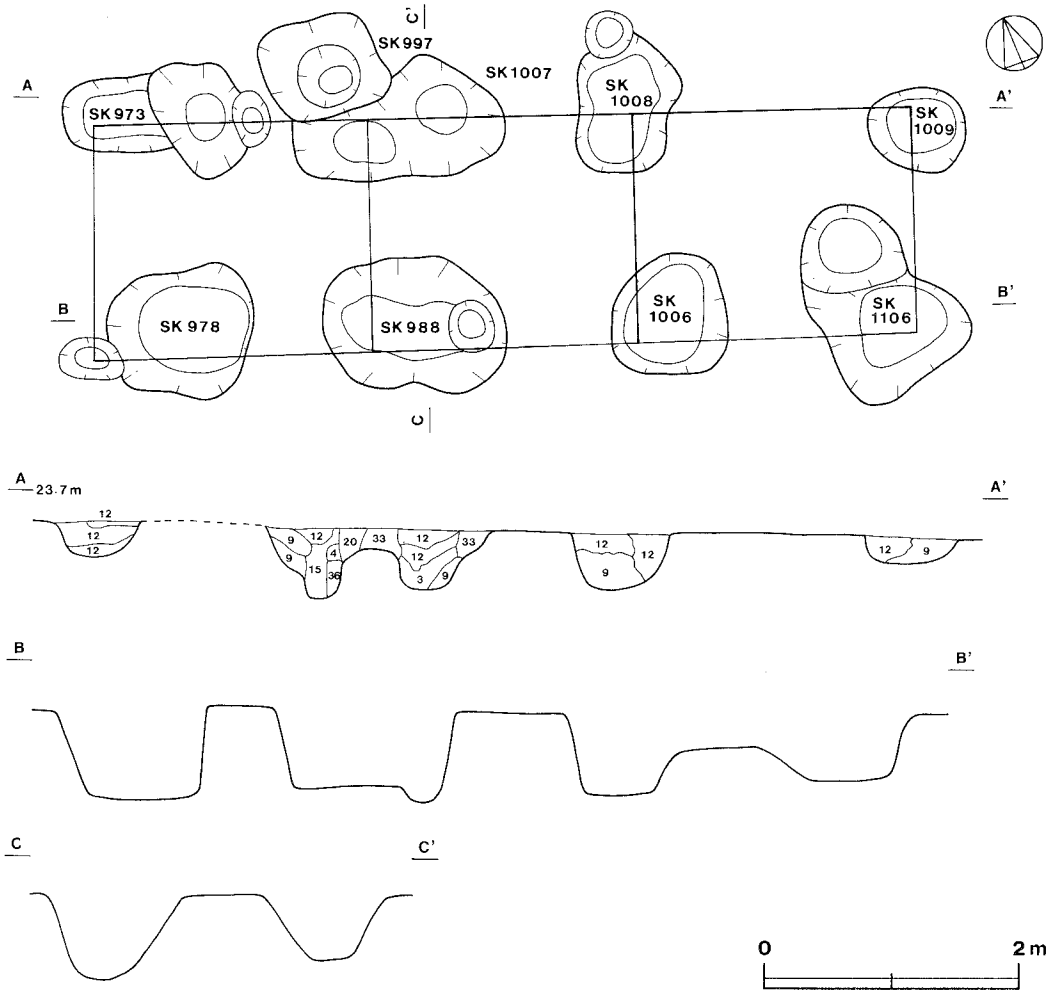


第60図　第6号掘立柱建物跡実測図

cmの円形・楕円形で深さ25～60cmを測る。柱穴内の覆土は，小ロームブロックを含む褐色土の堆積状況を示すが，土坑との重複が認められる。

第8号掘立柱建物跡（第62図　付図－21）

Ⅰノ郭の南側のF4区に確認され，3間(6m)×2間(3.5m)の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行2m（6.6尺）であるのに対して，梁行は1.75m（5.8尺）である。柱穴掘方は，重複や攪乱によって明らかでないものもあるが，径60cm内外の円形で深さは40cmを測る。柱穴内の覆土は，ロームブロックを含む褐色土で，柱痕跡は認められない。



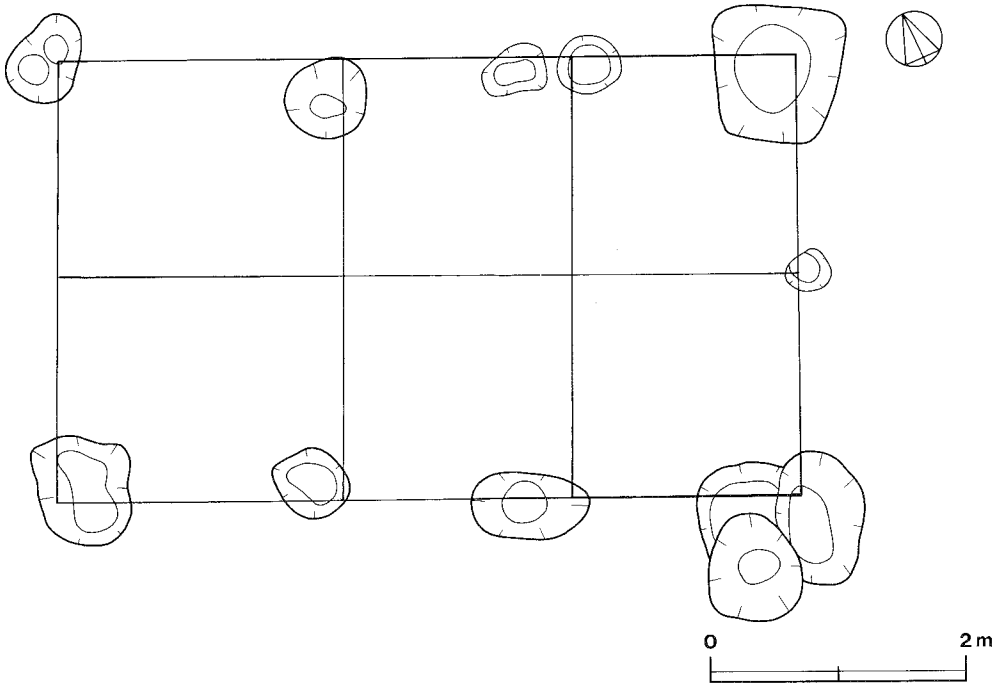
第61図　第７号掘立柱建物跡実測図

第９号掘立柱建物跡（第63図　付図－21）

IIノ郭のF4区に確認され，２間（6.4m）×１間（4.8m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行3.2m（10.6尺）であるのに対して，梁行は2.4m（８尺）である。柱穴掘方は，重複や攪乱によって明らかでないものもあるが，径40～60cm内外の円形・楕円形で深さ40～60cmを測る。

第10号掘立柱建物跡（第63図　付図－21）

IIノ郭のF4区に確認され，１間（3.8m）×１間（3.0m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行3.8m（12.6尺）であるのに対して梁行は3.0m（10尺）である。柱穴掘方は，重複によって明らかでないものもあるが，径20～40cm内外の円形もしくは楕円形で深さ40～60cmを測る。



第62図　第8号掘立柱建物跡実測図

第11号掘立柱建物跡（第63図　付図－21）

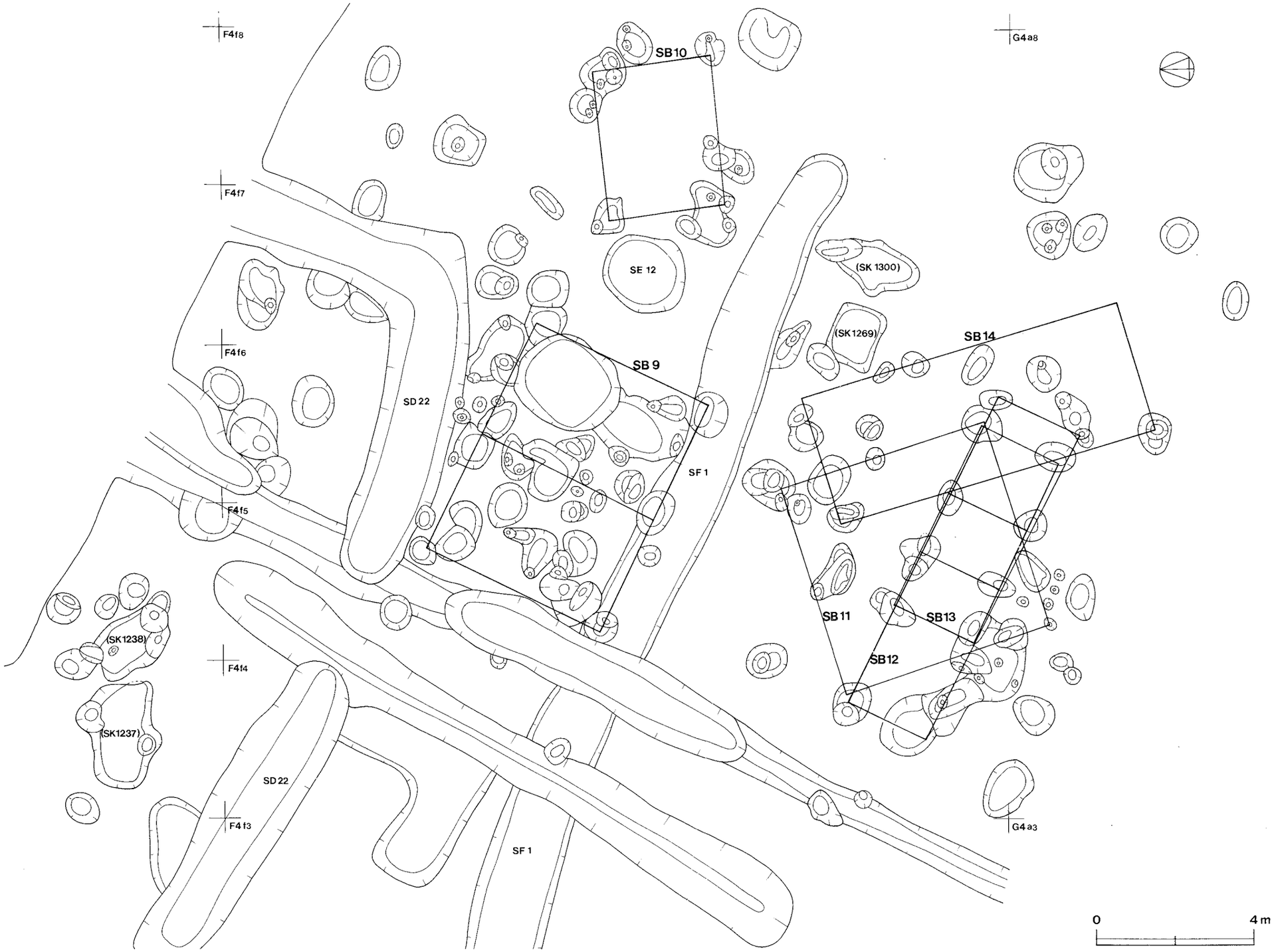
II ノ郭のF・G4区に確認され，2間（5.6m）×2間（5.4m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行2.8m（9.3尺）であるのに対して梁行は2.2m（7.3尺）である。柱穴掘方は，建物跡との重複によって明らかに捉えられるものは少なく，径15～50cm内外の円形と考えられる。

第12号掘立柱建物跡（第63図　付図21）

II ノ郭のF・G4区に確認され，3間（8.7m）×1間（2.2m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行2.9m（9.6尺）であるのに対して梁行は2.2m（7.3尺）である。柱穴掘方は，13号掘立柱建物跡との重複によって明らかでないものもあるが，一辺40cmの方形か，40×25cm内外の楕円形である。深さは50～70cmを測る。柱基部は，全て掘方底面である。

第13号掘立柱建物跡（第63図　付図－21）

II ノ郭のF・G4区に確認され，2間（5.0m）×1間（2.2m）の東西棟建物である。柱間寸法は，桁行2.25m（7.3尺）であるのに対して梁行は2.2m（7.3尺）である。柱穴掘方は，12号掘立柱建物跡との重複が認められるが，一辺1.0mの方形か，70×90cm内外の長方形である。深さは40～60



第63図　第 9 ～14号掘立柱建物跡配置図

cmで比較的深い。

第14号掘立柱建物跡（第63図　付図－21）

II ノ郭のF・G4区に確認され，3間（8.3m）×2間（3.3m）の南北棟建物である。柱間寸法は，桁行3m（10尺）であるのに対して梁行は1.5m（5尺）である。柱穴掘方は，11・12・13号掘立柱建物跡と重複し，重複によって確認されない柱穴もあるが，一辺70cmの方形を呈する。深さは40～50cmで比較的深い。本建物跡は，11・12・13号掘立柱建物跡と重複し，重複状況から各遺構の新旧関係は明確には捉えられない状況である。

(5)　井戸

本年度調査区からは，8基の井戸が検出された。(注1) 第6・7号井戸は調査区の北側E4区第8号井戸はE5区第17号堀南側，第9・10号井戸はE5区，第11号井戸はF5区第15号堀西側，第12号井戸はF4区第13号堀南側，第13号井戸はF5区第12号堀南側から検出されている。第6～11号井戸は主郭内に位置する。

井戸は円形の素堀り井戸と考えられるが，湧水と壁面の崩落が著しく，掘り下げを途中で断念した。

注

(1)　井戸の略号は，SEを用い，番号については，昭和61年度に整理された「屋代B遺跡II」の報告書で使用した番号を継続する。本年度は，SE6号から番号を付し調査を進めた。

第6号井戸（SE6　第64図）

本跡は，調査区の北側E4区に位置する。主郭を囲む第12号堀の内側に位置し，東側には第17号堀が存在する。確認面における平面形は，長径2.7m，短径1.8mの楕円形を呈する。確認面から0.5～1.1mの深さまでは鍋底状に，それ以下は径1.3m前後の円筒形を呈している。掘り込みは，常総粘土層下の砂層に達する素掘り井戸であるため，壁の崩落により底面迄の調査は中断した。

覆土は，暗褐色・褐色土が堆積し，ロームブロック・砂粒が含まれ，自然堆積である。

遺物は，覆土中から土師質土器片，内耳形土器片，陶・磁器片，砥石，礫が出土している。

第7号井戸（SE7　第64図）

本跡は，第6号井戸の東側，調査区E4区に位置する。本跡は，第17号堀と重複し，確認面から

1.5m迄は堀によって破壊されている。平面形は，長径2.1m，短径1.6mの楕円形を呈し，確認面から1～1.5mの深さを測り，底面迄は円筒形の掘形を呈す。掘形は，第6号井戸同様，砂層に達する素掘り井戸であったが崩落によって土層の測量はできなかった。

遺物は，覆土中から土師質土器片・内耳形土器片・礫・石塔（五輪塔の空輪）が出土している。

第8号井戸（SE8　第64図）

本跡は，調査区E5区，第12号堀の南側に位置し，第17号堀と重複し，上面は堀によって破壊されている。確認面における平面形は，長径1.45m，短径1.35mの円形を呈する。確認面から底部迄の掘形は円筒形と考えられ，素掘り井戸であるため壁面の崩落が著しく，掘り下げを調査途中で断念した。

覆土は，自然堆積である。下層には粘土混りの褐色土，中層には暗褐色土，上層には黒褐色土が堆積し，周囲の壁が崩落し，ロームブロック・粘土が混入している。

遺物は，覆土中から土師質土器片が若干出土している。

第9号井戸（SE9　第64図）

本跡は，調査区E5区，第15号堀の西側に位置する。確認面における平面形は，長軸1.7m，短軸1.5mの方形を呈する。確認面から底部迄の掘形は円筒形であり，素掘り井戸であるため壁面の崩落が著しく，掘り下げを途中で断念した。

第10号井戸（SE10　第65図）

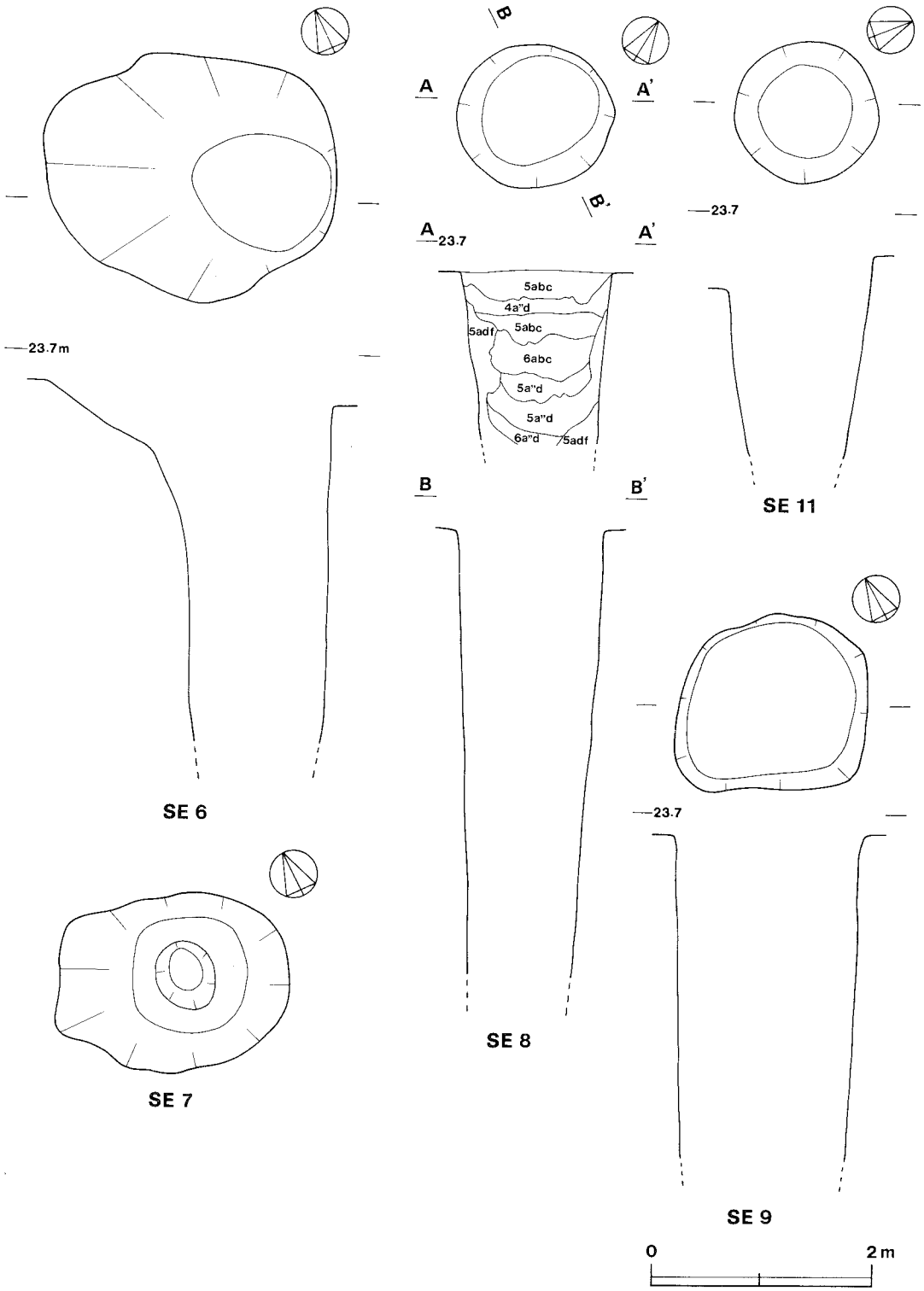
本跡は，調査区E5区，第9号井戸の北側に位置する。確認面における平面形は，長径6.1m，短径5.6mの円形を呈し，確認面から底部迄は鍋底状に，それ以下は円筒状に掘り込まれている。掘り込みは，常総粘土層下の砂層に達している。本跡は，素掘り井戸であるため壁面の崩落が著しかった。

覆土は，下層に粘土・ロームブロック混りの褐色土，中層には，粘土ブロック・ロームブロック混りの暗褐色土，上層には黒褐色土が自然堆積している。

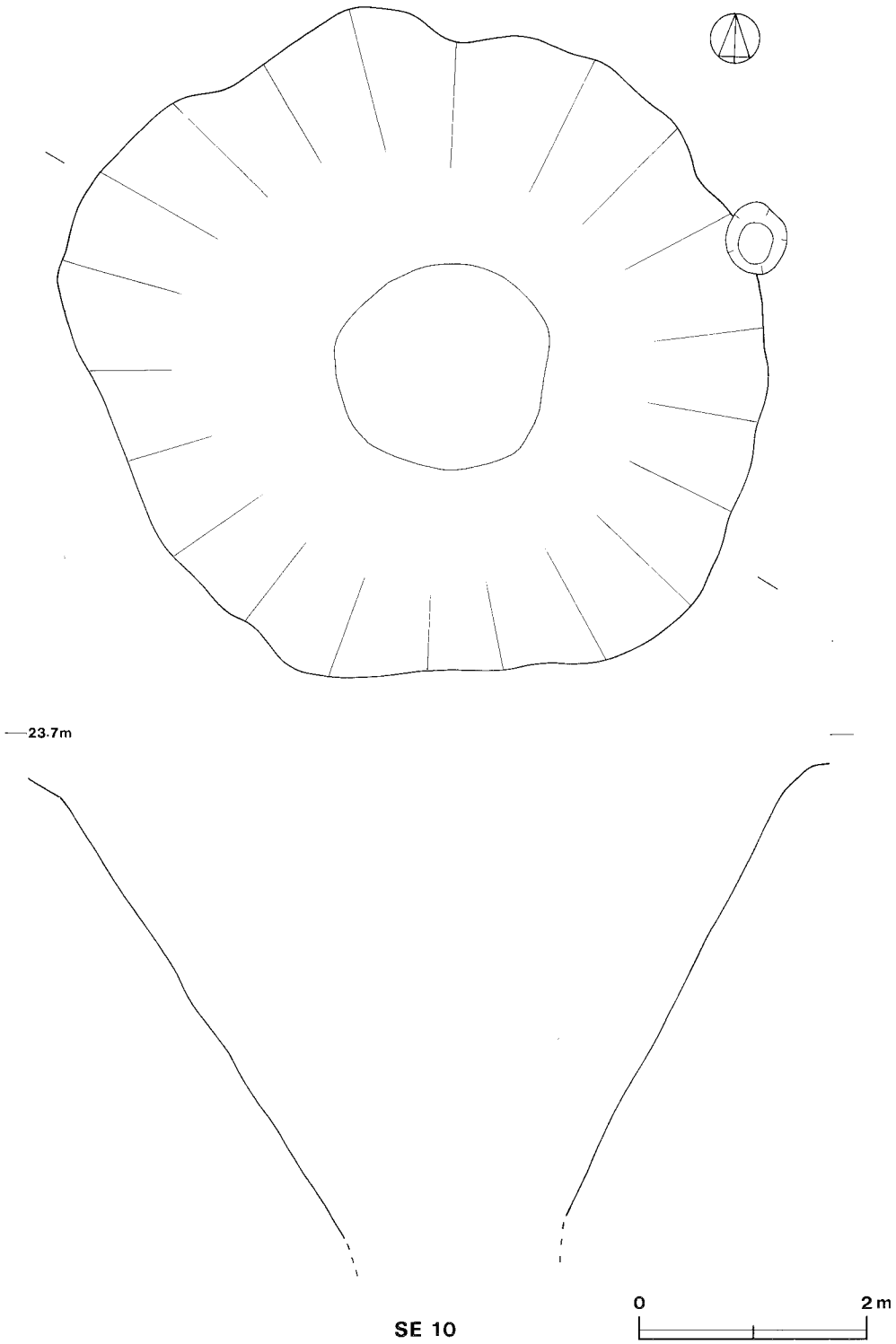
遺物は，覆土中から土師質土器・内耳形土器片が出土している。

第11号井戸（SE11　第64図）

本跡は，調査区F5区，第9号井戸の南側に位置する。確認面における平面形は，直径1.3mの円形を呈し，確認面から底部迄は円筒状に掘り込まれている。本跡は，素掘り井戸であるため壁面の崩落が著しく土層堆積状況の測量を実施できなかった。



第64図　第6・7・8・9・11号井戸跡実測図



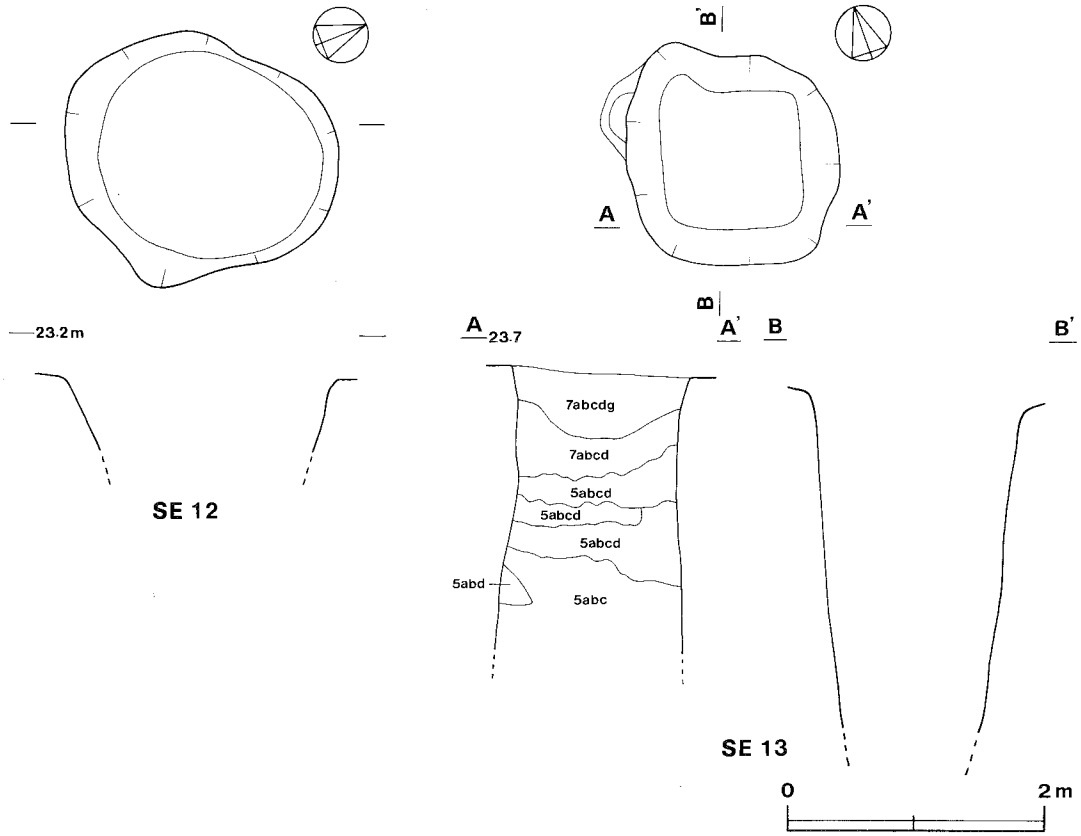
第65図　第10号井戸跡実測図

第12号井戸（SE12　第66図）

本跡は，調査区F4区，第13号堀の南側に位置する。確認面における平面形は，長径2.1m，短径1.7mの円形を呈す。確認面から底部迄は円筒状に掘り込まれ，素掘り井戸であるため壁面の崩落が著しく，第11号井戸同様土層堆積状況の測量を実施できなかった。

第13号井戸（SE13　第66図）

本跡は，調査区F5区，第12号堀の南側に位置する。確認面における平面形は，長軸1.7m，短軸1.6mの方形を呈する。確認面から底部迄の掘形は，円筒状に掘り込まれている。掘り込みは，常総粘土層下の砂層に達し，素掘り井戸であるため壁面の崩落が激しく掘り下げを途中で断念した。



第66図　第12・13号井戸跡実測図

今回の検出例を含めて総数13基の井戸が，屋代城内から確認されている。そのうち井戸側の内容が知られる井戸は５基を数え，他の８基については掘形のみが検出されたものであって，素掘

りの井戸である。

掘形の規模と井戸側の内法とを比較してみると，方形掘形の場合は，円形掘方の場合よりいくぶん大きくなっている。また，井戸の内部構造も側板・礫等の出土は認められない点から，素掘りの井戸であった。

(6) 道路

本遺構は，F3・4・G5区にかけて確認され，ほぼ東西に走る道路である。第12号堀の東から31mまで蛇行しながら確認され，第12・22号堀と平行して走っている。なお，本遺構は，道路跡としてはごくわずか確認できる程度である。

道路幅は，1.2～2.2mで，地山を15～20cmほど掘り込んでいる。掘り込みは，西側に向かうに従って深くなる。断面は「〜」状の箱形を呈し，中央部が若干盛り上がり，両端部は凹みが認められるが轍(わだち)とは違うものである。壁は垂直であり，道路面は非常に硬く踏み固められている。

道路最下面（地山面）から確認面迄15～20cmほどの堆積層が3層認められ，道路面が次第に高くなり，最終的にはほぼ確認面と同じレベルで使用されたものと考えられる。

本道路は，西側で第12号堀，東側で第14B号堀と重複し，いずれも堀によって切られ分断されている。

本跡は，第12・14B号堀によって切られている状況や道路の位置関係から鑑み，屋代城館跡の第Ⅰ期の時期，いわゆる館跡の時期に東西に走る道路であり，調査区F2区に検出された墓域に通じる道路であったものと考えられる。

遺物は出土していない。

(7) 第1号墓壙（第67図）

本跡は，第3・4号土墨の東側，調査区H5・6区で確認された。遺構は西に向かって開口し横穴式の形態を有し，調査の結果，構築状況から再使用されたことが窺えた。

掘り方の形態は，長方形を呈する両袖式であり，玄室と羨道部とに区分される。平面形は各辺がわずかに弧状になるが，長方形で羨道部に向かってわずかに狭くなる。天井部は不明。

玄室は，全長9.5m，幅は奥壁部で4.15m，中央部で3.95mを測る。壁高は1.1mを測り垂直な立ち上がりを示す。北壁下には幅20cm，深さ15cmを測る「凵」状の溝が検出された。主軸方向はN-65°-Wである。

また，調査の結果から玄室内の南壁をそのまま使用して、全長 4.9m，奥壁幅2.3m，中央部幅2.25m，深さ2.0mに掘り込んで小規模な玄室を再構築し，羨道部は共有していることが判明した。

羨道部は長さ1.4m，幅1.3mを測り、前庭部に向かってゆるやかな上りを示している。前庭部は長さ1.5m，幅2.6mを測り両側壁は前方で広がりをみせている。

覆土は天井部の崩落により，下層にローム・粘土が混在しているが，中・上層は流れ込みによる自然堆積の様相を呈している。

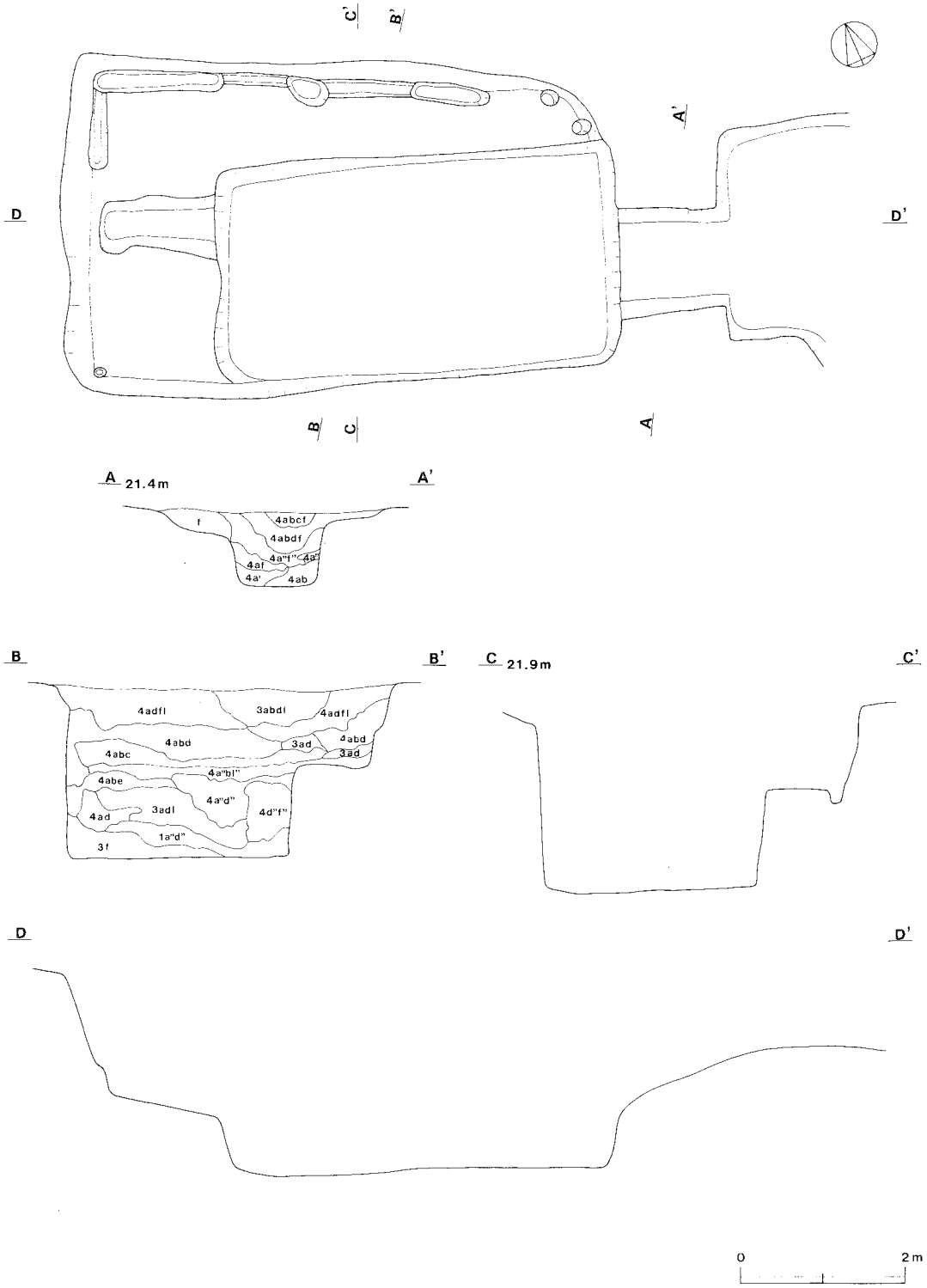
遺物は，玄室内覆土から甕・坏・皿（土師質土器）が20点出土している。

本跡は，出土遺物や構築状況から，12～3世紀の墓と考える。

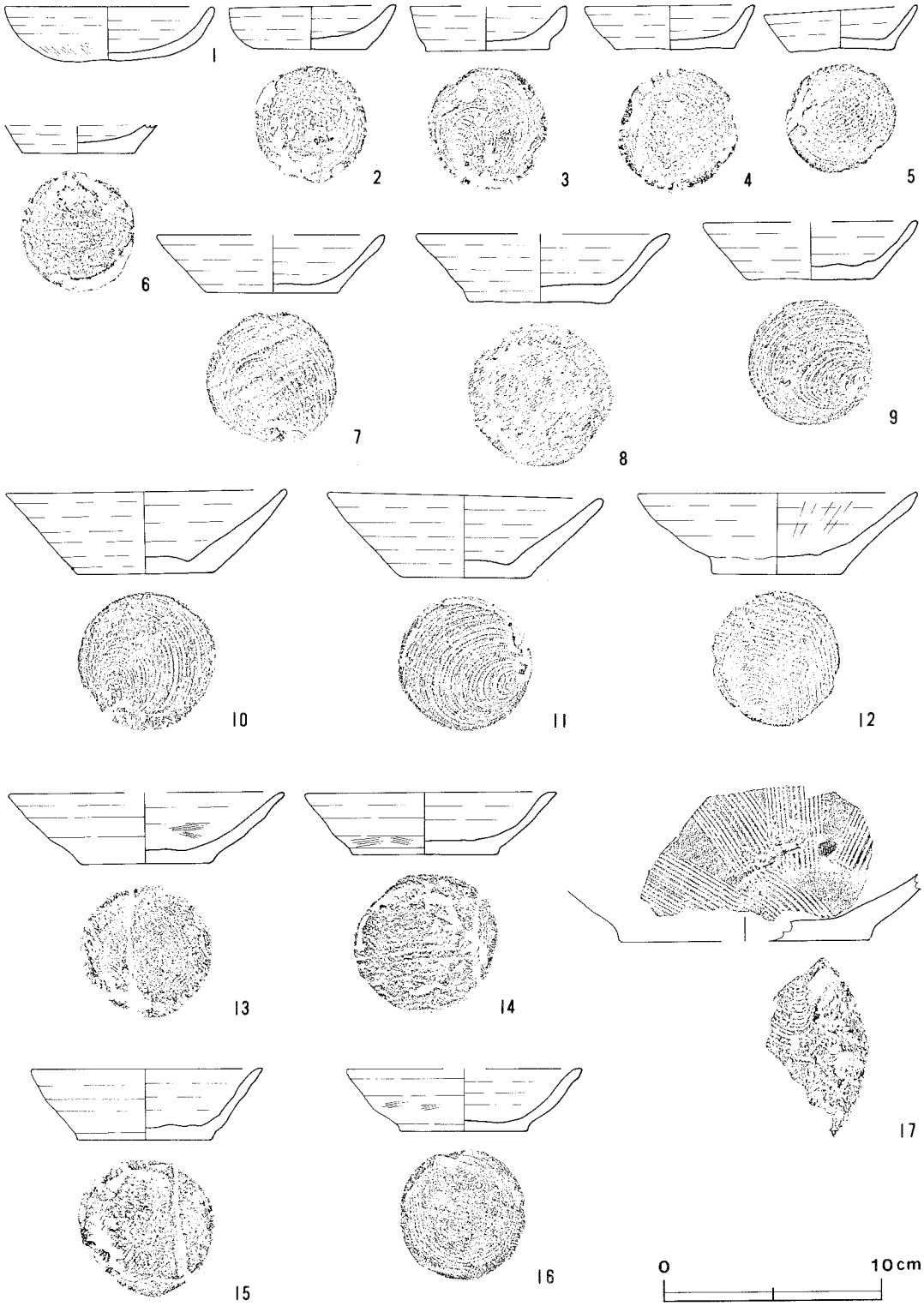
出土遺物

出土土器観察表

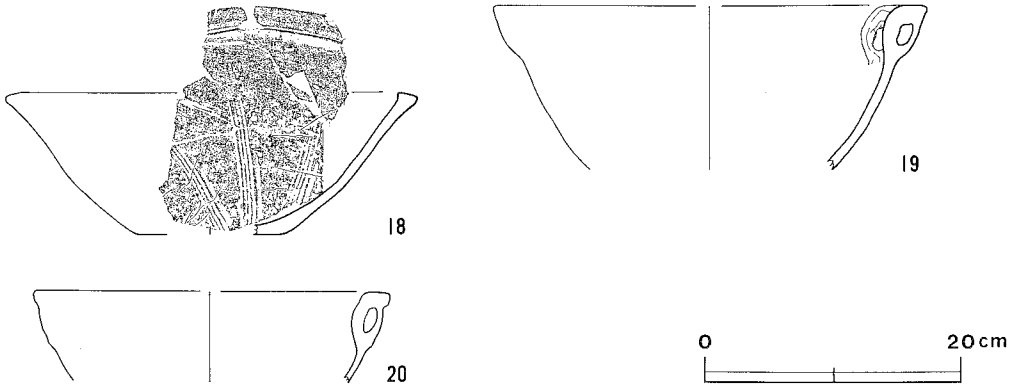
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	皿 （土師質土器）	A 9.7 B 2.5 C 3.8	底部はやや平坦な丸底で，体部は内彎気味に開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ 底面ナデ	砂粒 橙色 良	P225 1号墓 灯明皿
2	皿 （土師質土器）	A 7.7 B 2.1 C 5.1	平底で，体部は器厚を減じながら直線的に開く。底部下半は器肉厚い。底径が大きい。	水挽き 横ナデ 底部静止糸切り	砂粒 橙色 良	P221 1号墓 灯明皿
3	皿 （土師質土器）	A(7.2) B 2.1 C 5.7	平底で，底部・体部は器肉厚い。体部は直線的に開く。底径が大きい。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 橙色 良	P223 1号墓 灯明皿
4	皿 （土師質土器）	A 7.8 B 2.0 C 5.6	平底で，体部は器肉厚く，外反気味に開いて立ち上がる。底部に板の圧痕。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 橙色 良	P219 1号墓 灯明皿
5	皿 （土師質土器）	A 7.2 B 1.8 C 4.9	底部は中央で窪む平底で，体部は外反気味に開いて立ち上がる。底部に板の圧痕。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 橙色 良	P220 1号墓 灯明皿
6	皿 （土師質土器）	A 5.2 B 1.3 C 5.0	平底で，外反気味に開いて立ち上がる。底部に板の圧痕。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 橙色 良	P224 1号墓 灯明皿
7	皿 （土師質土器）	A 10.5 B 2.7 C 6.1	平底で，外反気味に開いて立ち上がり，口唇部先端は丸味をもつ。底部に板の圧痕。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 にぶい橙色 良	P226 1号墓
8	坏 （土師質土器）	A(11.8) B 3.2 C 6.6	平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。底部・体部は器肉厚い。	水挽き 横ナデ 底部静止糸切り	砂粒 淡橙色 良	P228 1号墓
9	坏 （土師質土器）	A(10.0) B 2.7 C 5.8	平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 橙色 良	P282 1号墓
10	坏 （土師質土器）	A 13.0 B 3.8 C 6.2	平底で，体部は外反気味に器厚を減じながら直線的に開く。体部下半は器肉厚い。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 にぶい橙色 良	P230 1号墓



第67図　1号墓壙実測図



第68図　1号墓出土遺物実測図（1）



第69図　1号墓出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
11	坏 （土師質土器）	A 12.8 B 3.8 C 6.1	平底で，体部は外反気味に直線的に開く。体部下半は器肉厚い。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒　金雲母 にぶい橙色 良	P231 1号墓
12	坏 （土師質土器）	A 13.0 B 3.8 C 6.0	平底で底部内面がやや窪む。体部は直線的に開き，口縁部で外反する。内・外面にロクロ痕。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 にぶい橙色 良	P233 1号墓
13	坏 （土師質土器）	A (12.8) B 3.3 C 6.0	平底で底部内面がやや窪む。体部は直線的に開き，口縁部で外反する。外面に強いロクロ痕。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色 良	P374 1号墓
14	坏 （土師質土器）	A 11.6 B 2.9 C 6.8	平底で底部内面がやや窪む。体部は内反して立ち上がり，口縁部は外反する。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色 良	P372 3号土墨下
15	皿 （土師質土器）	A 10.7 B 3.3 C 6.2	平底で底部内面から体部にかけて凹凸している。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 黄橙色 良	P376 1号墓 灯明皿
16	皿 （土師質土器）	A (11.0) B 2.9 C 6.0	平底で底部内面がやや窪む。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 橙色 普通	P373 3号土墨下 灯明皿
17	擂鉢 （陶器）	A 11.6 B 2.4 C	平底で，体部は直線的に開いて立ち上がる。内面には，13本1単位の櫛目が施されている。	ロクロ成形 底部回転糸切り	砂粒 橙色 普通	P370 1号墓
第69図 18	擂鉢 （土師質土器）	A (32.4) B 11.2 C (11.4)	平底で，体部は直線的に開いて立ち上がる。内面には，5本1単位の櫛目が施されている。	ロクロ成形 口唇部・口縁部横ナデ	砂粒 橙色 良	P369 1号墓
19	内耳形土器 （土師質土器）	A (34.0) B 13.0 C	体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。耳接合部の外面はふくらむ。口唇部は平坦。	耳接合	砂粒　雲母 （内）橙色 （外）黒色 良	P371 1号墓
20	内耳形土器 （土師質土器）	A (34.4) B 8.8 C	体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。耳接合部の外面はふくらむ。口唇部は平坦。	内・外面横ナデ 耳接合	砂粒 浅黄橙色 良	P377 1号墓

(8) 中世遺物－(1) 陶・磁器と金属製品

当遺跡から中世遺構に伴って陶・磁器が出土した。これらは調査区域内から出土した，12世紀～13世紀のものとみられる舶載陶・磁器と国内産陶・磁器である。

舶載陶・磁器は，青磁・白磁であり，中国龍泉窯系の製品で，青磁碗・白磁稜花皿がみられる。

国内産陶・磁器は，甕・壺・擂鉢等の大型製品は全て常滑産であり，碗・皿・鉢等の小型製品の大部分は瀬戸産と一部が美濃産である。また，香炉・仏花器等儀器類も，瀬戸・美濃産が使用されている。

時期については，舶載陶・磁器の編年上明確に捉えられていない部分もあるが，おおよそ12～13世紀と見られ，流通経路は鎌倉を経由しているものと考えられる。国内産陶・磁器は，鎌倉期から戦国期までのものが出土しているが，特に南北朝期から戦国期のものが大部分である。

金属製品

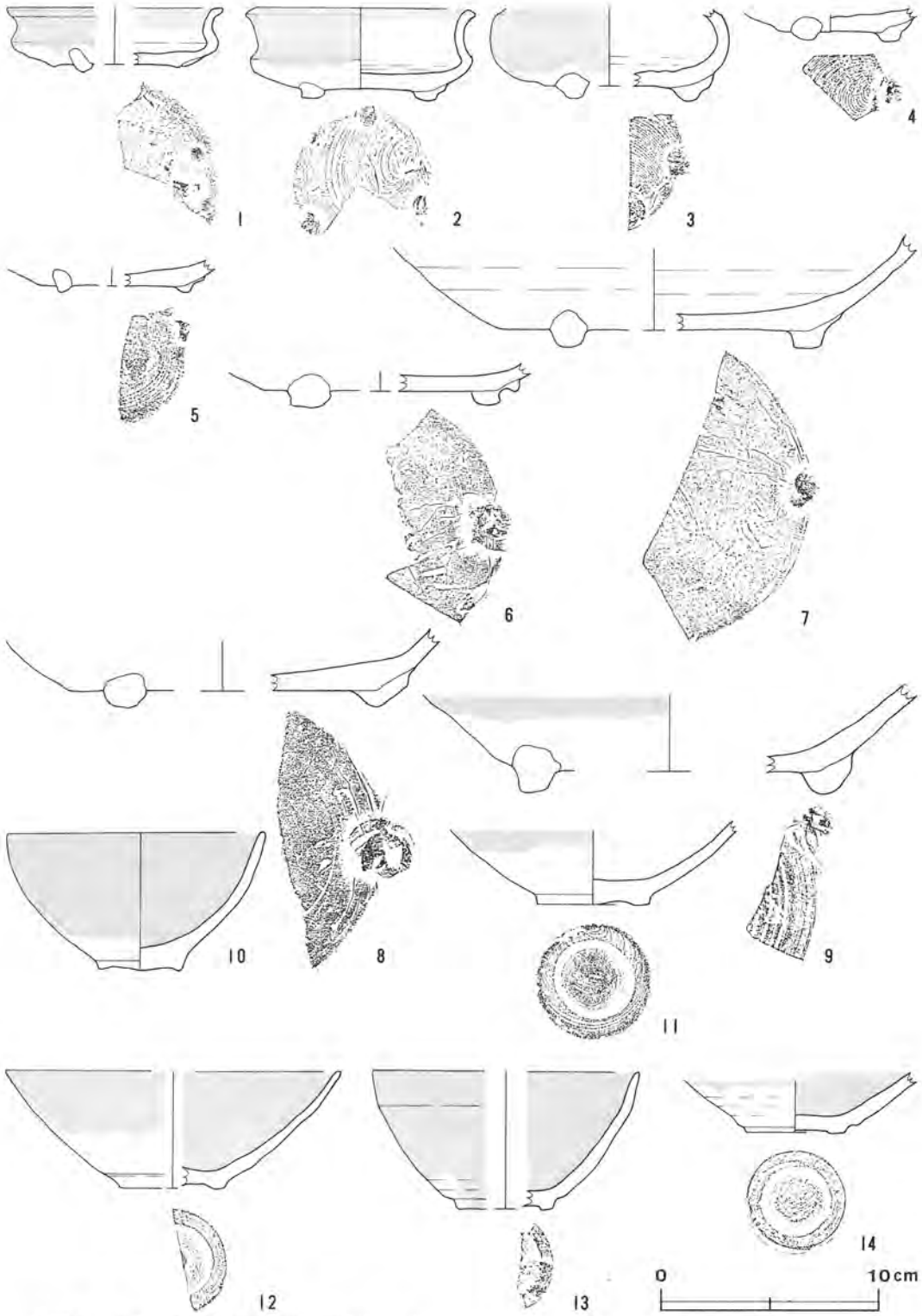
鉄製品には，釘・刀子・鏃・小札・鎌等の武器や生活用具であるが，鉄製品の製作に使用された羽口・鉄滓の出土状況から，鍛治をおこない製品製造をおこなったことが考えられ，製品は搬入品でなく，在地での製作品と考える。

銅製品には，和鏡・刀装具（足金物・柄金具・鎺）・笄・簪・鞐・鏃・仏具（六器）が出土している。これらはいずれも，鎌倉時代～室町時代に位置し、全て搬入されたものと考えられる。

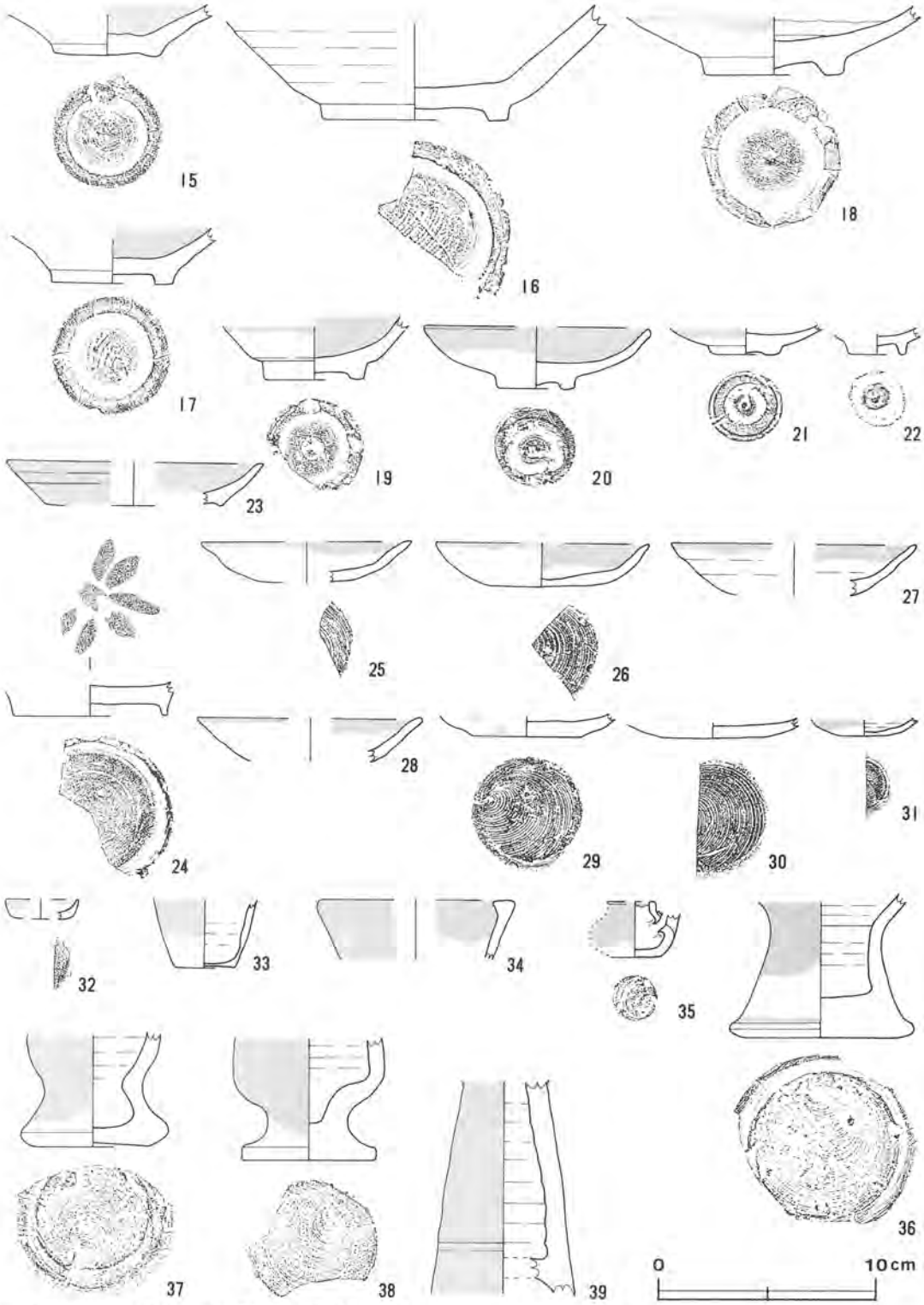
出土遺物

出土土器観察表　陶磁器－(1)

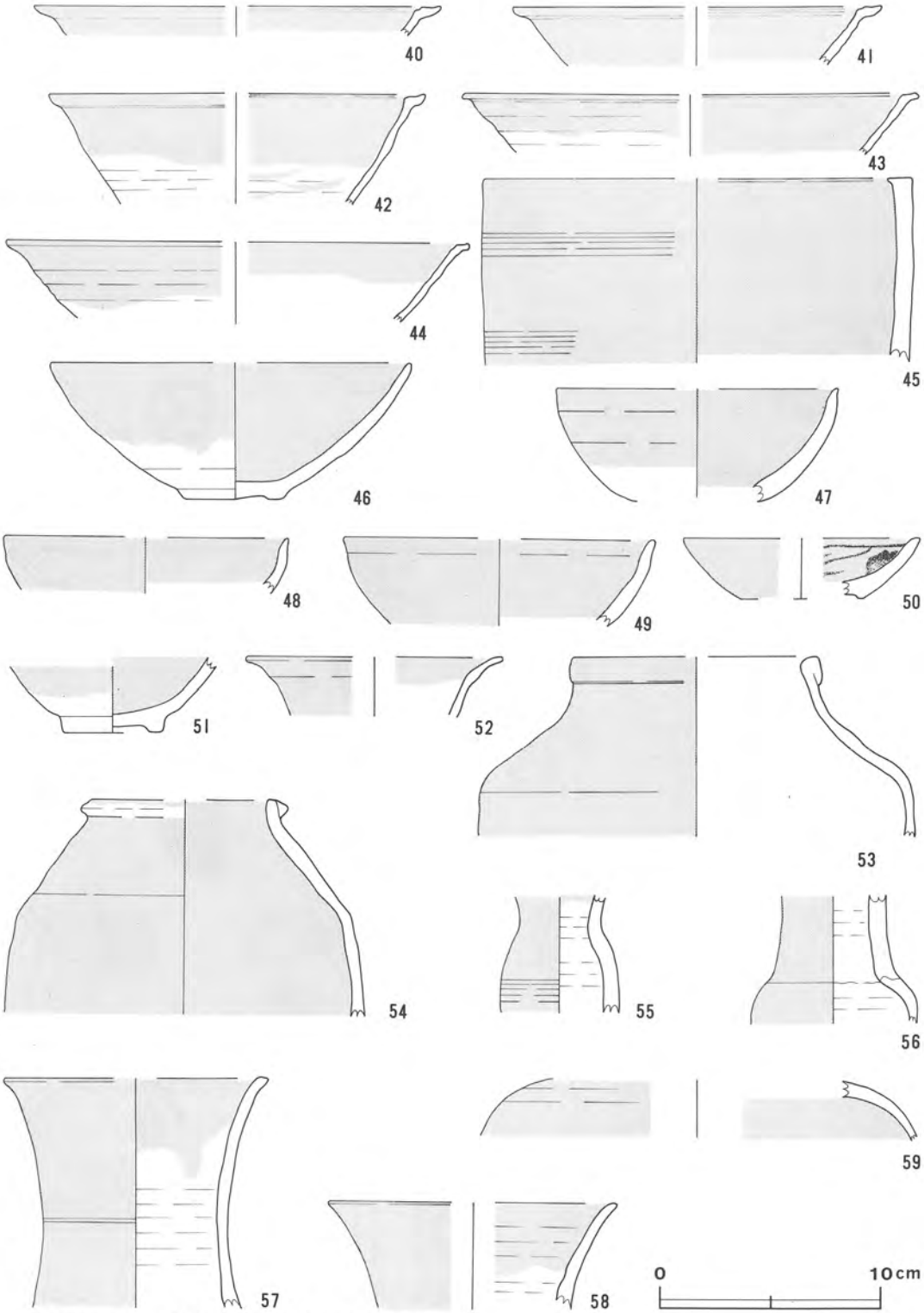
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	香炉（陶器）	A(10.0) B 2.6 C(9.6)	底部外縁は、丸味を以って立ち上がり，口縁部は外反する。口縁部外面に太い凹線が1周する。口縁部内・外面に施釉。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰黄色 (釉)オリーブ黄	P293 SK-850
2	香炉（陶器）	A 10.0 B 4.2 C 6.0	底部外縁は，丸味を以って立ち上がり，口縁部は外反する。口縁部外面に太い凹線が1周する。口縁部内・外面に施釉。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄	P292 SK-685
3	香炉（陶器）	A B 3.6 C(6.0)	底部外縁は，丸味を以って立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部外面に施釉。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉)黒色	P295 SK-866
4	香炉（陶器）	A B 1.2 C(4.8)	底部破片。	底部回転糸切り	(胎土)にぶい黄橙色 (釉)オリーブ黄	P300 SK-1061



第70図　中世遺物実測図（陶・磁器－１）



第71図　中世遺物実測図（陶・磁器－２）



第72図　中世遺物実測図（陶・磁器－３）

第73図　中世遺物実測図（陶・磁器－４）

出土土器観察表陶磁器ー(2)

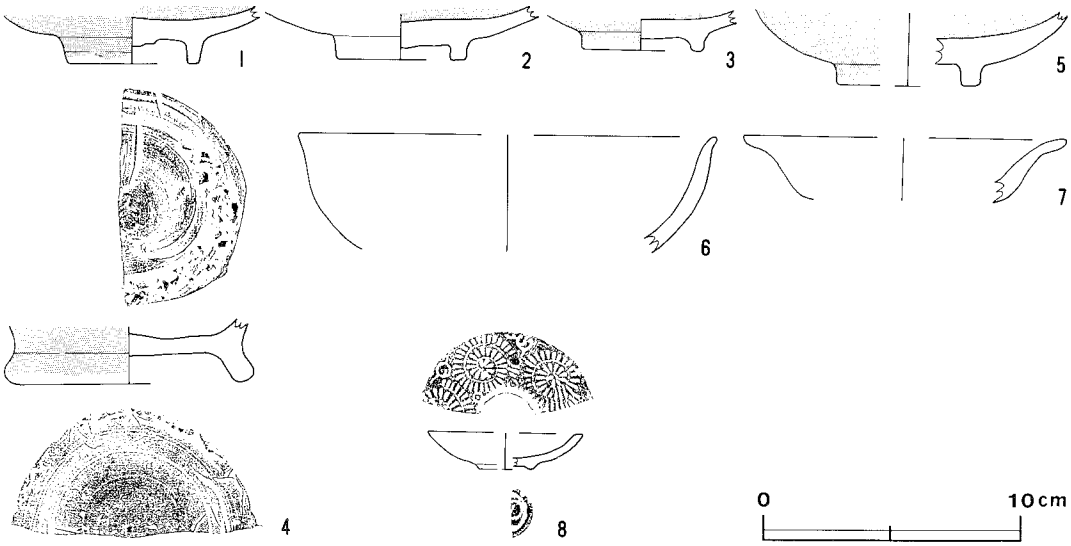
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
5	足付鉢 (陶器)	A B 0.8 C(6.6)	底部破片。体部は外傾して開く。足は3ケ所に付けられる。	底部回転系切り	(胎土)灰褐色 (釉)灰白色	P298 SK-1206
6	足付鉢 (陶器)	A B 0.8 C(10.8)	底部破片。体部は外傾して開く。足は3ケ所に付けられる。	底部回転篦切り	(胎土)灰白色 (釉)灰白色	P294 SK-865
7	足付鉢 (陶器)	A B 3.8 C(14.2)	体部は強く外傾し，直線的に開く。足は3か所に付けられる。	水挽き 外面横ナデ 底部回転篦削り。	(胎土)淡黄色 (釉)灰白色	P297 SK-1187
8	足付鉢 (陶器)	A B 2.3 C(14.4)	底部破片。体部は強く外傾し，直線的に開く。足は3か所に付けられる。	水挽き 外面横ナデ 底部回転篦削り。	(胎土)にぶい黄橙色 (釉)灰黄色	P296 SK-912
9	足付鉢 (陶器)	A B 3.5 C(13.8)	底部破片。体部は強く外傾し，直線的に開く。足は3か所に付けられる。体部外面は下半で露胎。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り。	(胎土)にぶい黄橙色 (釉)灰黄色	P299 表採
10	碗 (陶器)	A 12.0 B 6.4 C 3.8	体部は外傾し中ほどでやや内彎する。口縁でわずかに外反。体部外面は下半で露胎。	水挽き 外面横ナデ	(胎土)灰褐色 (釉)オリーブ黄	P301 SK-794
11	碗 (陶器)	A B 3.4 C 5.2	体部は外傾して立ち上がる。底部は器肉が肥厚する。底部は糸切り後高台接合。外面の体部下半露胎。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)浅黄色	P307 SD-1
12	碗 (陶器)	A(15.6) B 5.4 C(4.8)	体部は外傾し中ほどでやや内彎する。口縁部でわずかに外反。底部は糸切り後高台接合。外面の下半露胎。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄	P316 表採
13	碗 (陶器)	A(12.4) B 6.2 C(4.5)	体部は外傾して立ち上がり，中ほどでやや内彎し，口縁部でわずかに外反。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)にぶい黄橙色 (釉)黒色	P311 SD-79
14	碗 (陶器)	A B 2.4 C 4.6	底部破片。体部は外傾して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)にぶい橙 (釉)灰オリーブ	P310 SD-14
第71図 15	碗 (陶器)	A B 1.9 C 5.0	底部破片。体部は外傾して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)浅黄色	P314 SE-7
16	碗 (陶器)	A B 4.5 C 8.6	底部破片。体部は外傾して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)浅黄色	P312 SD-12
17	皿 (陶器)	A B 2.1 C 5.6	体部は外傾し，内彎して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合部。外面体部下半は露胎。	水挽き 底回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄	P313 SD-17
18	皿 (陶器)	A B 2.7 C 6.4	底部破片。体部は外傾して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 底回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)内 灰白色 外 オリーブ灰	P308 SD-9

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
19	皿 (陶器)	A B 2.6 C 4.6	底部破片。体部は外反して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 底回転糸切り 高台接合	(胎土)浅黄橙色 (釉)オリーブ黒	P325 表採
20	皿 (陶器)	A(10.4) B 2.9 C 3.6	体部は外傾し，内彎して立ち上がり，口縁部で外反する。底部糸切り後高台接合。外面体部下半は露胎。	水挽き 底回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉)浅黄橙色	P304 SK-731
21	皿 (陶器)	A B 1.2 C 2.8	底部破片。体部は外反して立ち上がる。底部糸切り後高台接合。	水挽き 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P309 SD-12
22	皿 (陶器)	A B 0.9 C 2.6	底部破片。体部は外傾して立ち上がる。底部は糸切り後高台接合。	水挽き 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P306 SK-1039
23	皿 (陶器)	A(12.0) B 2.0 C(8.0)	底部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり，中ほどで内反し，口縁は外反する。全体に薄手。	水挽き 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P318 SK-843
24	皿 (陶器)	A B 1.1 C(7.2)	体部破片。底部内面に花文。底部糸切り後高台接合。	水挽き 底部回転糸切り 高台接合	(胎土) 内 灰白色 外 淡黄色	P333 SD-12
25	皿 (陶器)	A(9.8) B 1.9 C 4.2	体部は外傾して立ち上がり，中ほどで内反し，口縁は外反する。外面体部下半は露胎。	水挽き 底部回転糸切り	(胎土)浅黄橙色 (釉)灰オリーブ	P305 SK-1035
26	皿 (陶器)	A(9.8) B 2.1 C(5.0)	平底を呈し，体部は外傾して立ち上がり，中ほどで内反し，口縁は外反する。底部回転糸切り。	水挽き 底部回転糸切り。	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P321 SK-1021
27	皿 (陶器)	A(11.4) B 2.4 C	底部欠損。体部は外傾して立ち上がり，中ほどで内反し，口縁部は外反する。	水挽き 体部横ナデ	(胎土)灰白色 (釉) 浅黄色	P322 SK-1070
28	皿 (陶器)	A(10.6) B 2.0 C	底部欠損。体部は外傾し，中ほどから内反，口縁部はやや外反。口唇は丸くおさめている。口縁部のみ施釉。	水挽き	(胎土)明褐灰色 (釉)オリーブ色	P323 表採
29	皿 (陶器)	A B 0.9 C 5.0	底部破片。体部は外傾し立ち上がる。底部は糸切り。	水挽き 底部回転糸切り。	(胎土)明褐灰色 (釉)オリーブ黄	P320 SK-886
30	皿 (陶器)	A B 0.6 C 4.8	底部破片。丸底を呈す。	水挽き 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P324 表採
31	皿 (磁器)	A B 0.6 C(3.6)	丸底を呈し，体部は外傾して立ち上がる。底部は糸切り後回転篦削り。	水挽き 底部回転糸切り 外面回転篦削り	(胎土)褐灰色 (釉)オリーブ黒	P319 SK-866
32	皿 (陶器)	A B 0.9 C 2.8	体部は外傾して立ち上がり，口縁はやや外反。外面の体部下半露胎。	水挽き 底部回転糸切り。	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P326 表採
33	瓶子 (陶器)	A B 3.2 C 2.8	胴部は内傾し，やや外傾して立ち上がる。底部は中央部が窪む。釉は，下半部まで施釉。	水挽き	(胎土)灰褐色 (釉)上 黄褐色 下 黒褐色	P325 SK-1142

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
34	香炉 (陶器)	A(9.2) B 2.8 C	口縁部片。体部は垂直に立ち上がる。口縁部外面に太い凹線が周回する。全面に施釉。	水挽き	(胎土)明灰褐色 (釉)オリーブ灰色	P338 SK-698
35	小型注口土器 (陶器)	A B 2.6 B 2.2	注口部欠損。底部は平底を呈し，胴部は外反して立ち上がり，口縁部は直立気味に立ち上がる。	水挽き 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ褐色	P303 SK-697
36	仏花器 (陶器)	A B 6.3 C 7.0	基部はしぼられ，胴部は丸味を以ってふくらむ。裾は広がる。脚部下半露胎。	水挽き 体部横ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄	P288 SK-723
37	仏花器 (陶器)	A B 5.2 C 6.9	基部はしぼられ，胴部は張って球状を呈する。裾は広がる。脚部下半露胎。	水挽き 体部横ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 淡黄色	P291 SD-103
38	仏花器 (陶器)	A B 5.7 C 6.2	胴部は張り，やや強い稜を有する。基部は強くしぼられている。裾は広がる。脚部下半露胎。	水挽き 体部横ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄	P289 SD-12
39	燭台 (陶器)	A B 9.7 C 6.2	台から基部へ細くなる。台は基部を糸切り後に，各々接合。	水挽き 体部横ナデ 基部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 浅黄色	P290 SD-12
第72図 40	灰釉鉢 (陶器)	A(37.2) B 3.8 C	折り口平鉢片で，体部上半の内・外面に施釉。外面は轆轤による顕著な凹凸がある。	水挽き	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄	P342 SK-875
41	灰釉鉢 (陶器)	A(33.8) B 7.3 C	折り口平鉢片で，残存部分の内・外面に施釉。体部の内・外面は轆轤による凹凸がある。	水挽き	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P347 SD-94
42	灰釉鉢 (陶器)	A(34.4) B 10.1 C	折り口平鉢片で，体部上半の内・外面に施釉。外面は轆轤による凹凸がある。	水挽き	(胎土)橙色 (釉)オリーブ黄色	P348 SD-96
43	灰釉鉢 (陶器)	A(42.8) B 7.3 C	折り口平鉢片で，体部上半の内・外面に施釉。外面は轆轤による凹凸がある。	水挽き	(胎土)にぶい橙色 (釉)浅黄色	P349 SD-96
44	灰釉鉢 (陶器)	A(42.6) B 9.6 C	折り口平鉢片で，体部上半の内・外面に施釉。外面は轆轤による凹凸がある。	水挽き	(胎土)灰白色 (釉) 浅黄色	P351 SD-110
45	灰釉香炉 (陶器)	A(19.6) B 8.5 C	筒形香炉。体部上半の内・外面に施釉。内・外面は轆轤による横ナデが残る。	水挽き 横ナデ	(胎土)黄橙色 (釉) 浅黄色	P350 SD-110
46	灰釉鉢 (陶器)	A(16.5) B 6.3 C 4.6	体部は外傾し，中ほどで内反する。口縁は外反し，口唇はつまみ上げられている。外面体部下半は露胎。高台は削り出し。	水挽き 横ナデ	(胎土)黄橙色 (釉) 浅黄色	P343 SK-1010
47	天目釉茶碗 (陶器)	A(13.0) B 5.2 C	底部から口縁部までの破片。釉は，天目釉でやや黒色味を帯びる。	水挽き 内面横ナデ 底部篦削り調整	(胎土)灰白色 (釉) 赤黒色	P362 SK-1197
48	天目釉茶碗 (陶器)	A(13.2) B 2.5 C	口縁部片。釉は，天目釉でやや褐色気味が強い鉄釉。	水挽き 口縁部は尖り器肉取り薄い。	(胎土)灰白色 (釉) 黒色	P360 SK-875

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
49	天目釉茶碗 (陶器)	A(14.4) B 4.0 C	口縁部破片。釉は，天目釉でやや褐色気味が強い鉄釉。	水挽き 横ナデ 口縁部は尖り器肉取り薄い	(胎土)灰白色 (釉) 黒褐色	P363 SD-7
50	碗 (陶器)	A(10.8) B 2.8 C(5.6)	体部は外傾し，中ほどで内反する。口縁は内反し，ほぼ水平。口縁はつまみ上げられて凸帯状をなす。	水挽き	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P365 表採
51	天目釉茶碗 (陶器)	A B 3.0 C 4.6	底部破片。釉は，天目釉でやや黒色味を帯びる。底面は篦削りによる調整がおこなわれ，高台は削り出しである。	水挽き 横ナデ	(胎土)灰白色 (釉) 黒色	P364 SD-110
52	灰釉鉢 (陶器)	A(11.8) B 2.7 C	折り口平鉢片で，体部内・外面に施釉あり。外面は轆轤による顕著な凹凸がある。	水挽き 横ナデ	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色	P357 SK-697
53	壺 (陶器)	A(22.4) B 16.4 C	壺の体部から口縁部にかけての破片である。胴部は外傾して立ち上がる。肩部から強く内彎し，頸部に向かってやや外反する。	水挽き 横ナデ 肩部回転篦削り	(胎土)褐灰色 (釉)暗オリーブ色	P353 SK-650
54	壺 (陶器)	A(6.4) B 9.9 C	胴部は内傾して立ち上がり，肩部から頸部に向かってやや外反する。肩部内面は凹凸が著しい。	水挽き 横ナデ 肩部回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) 黒色	P358 SK-797 SK-798 SK-799
55	壺 (陶器)	A B 5.3 C	胴部から頸部の破片で，胴部は内反しながら立ち上がり，肩が張り，頸部は外反気味に立ち上がる。胴部には，轆轤による顕著な凹凸がある。	水挽き 横ナデ	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ灰色	P361 SK-875
56	壺 (陶器)	A B(5.9) C	胴部から頸部の破片で，胴部は内反しながら立ち上がり，肩が強く張り，頸部は外皮気味に立ち上がる。	水挽き 横ナデ	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ灰色	P354 SK-685 SK-728
57	壺 (陶器)	A(12.2) B 10.6 C	頸部から口縁防の破片で，頸部は外反しながら立ち上がり，口縁部は折り返される。	水挽き 内面横ナデ	(胎土)明褐灰色 (釉)オリーブ灰色	P341 SK-800
58	壺 (陶器)	A(13.4) B 4.9 C	口縁部破片。頸部から外反しながら立ち上がり，口唇部は，丸味をもって突き出している。	水挽き 横ナデ	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色	P358 SK-728
59	小型壺 (陶器)	A B 2.5 C	肩部破片。強く内彎し頸部に向かう。	水挽き 横ナデ 肩部回転糸切り	(胎土)にぶい黄橙色 (釉)浅黄色	P356 SK-685
第73図 60	壺 (陶器)	A B 13.0 C(9.0)	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に開いて立ち上がる。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り。	(胎土)にぶい黄橙色 (釉)オリーブ黄色	P345 SD-15
61	壺 (陶器)	A B(5.1) C(9.8)	底部破片。底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に開いて立ち上がる。	水挽き 横ナデ	(胎土)にぶい褐色 (釉)浅黄色	P346 SD-1

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
62	壺 (陶器)	A B 6.3 C(10.8)	底部破片。底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に開いて立ち上がる。	水挽き 横ナデ	(胎土)褐灰色 (釉)オリーブ灰色	P344 SK-1210 SK-1228
63	壺 (陶器)	A B(15.9) C	胴部は外傾して立ち上がる。肩部から強く内彎する。肩部内面は凹凸が著しい。	水挽き 横ナデ 肩部回転糸切り。	(胎土)明褐灰色 (釉)灰オリーブ色	P339 SK-997 SK-719
64	壺 (陶器)	A B 19.3 C	胴部は外傾して立ち上がる。肩部から強く内彎する。	水挽き 横ナデ	(胎土)明褐灰色 (釉)浅黄色	P337 SK-685
65	壺 (陶器)	A B 9.2 C(10.8)	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方に開いて立ち上がる。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り。	(胎土)明褐灰色 (釉)オリーブ黄色	P340 SK-794
66	碗 (陶器)	A(11.6) B 6.0 C(6.6)	体部は外傾し，中ほどでやや内反する。口縁でわずかに外反。底部は高台接合。	水挽き 横ナデ	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色	P355 表採



第74図　中世遺物実測図（青磁・白磁）

出土遺物

出土土器観察表（青磁・白磁）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	皿 (青磁)	A B 1.9 C 5.2	稜花皿の体部片である。体部は外傾して立ち上がる。高台は外面から端部まで施釉され，内面の釉は削り取られている。	高台内回転篦削り	(胎土)灰褐色 (釉)灰オリーブ色	P327 SK-690

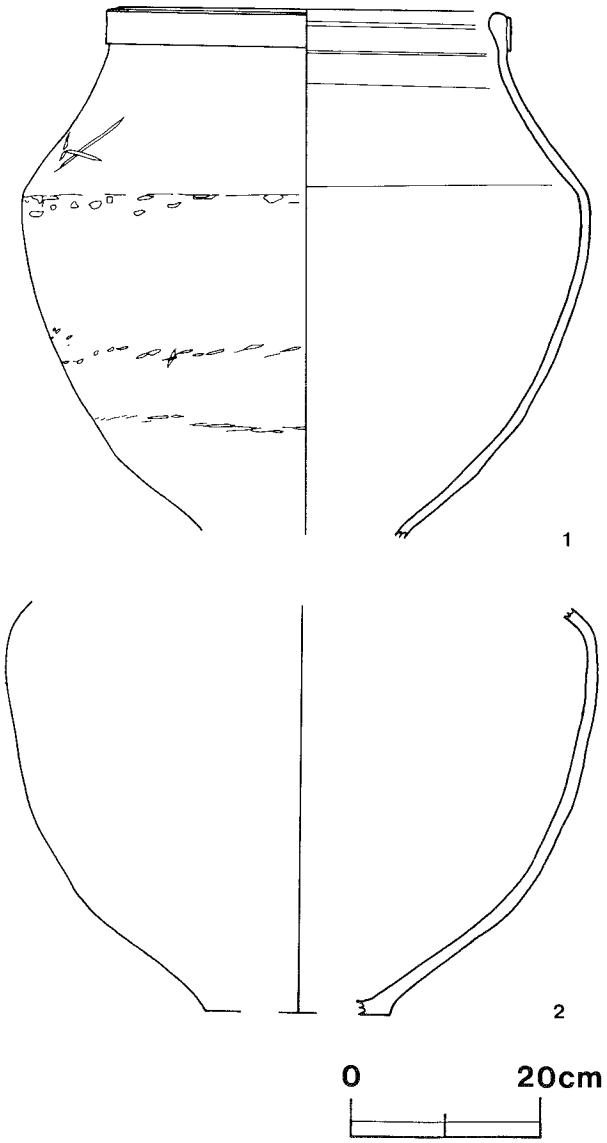
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
2	皿 (青磁)	A B 1.8 C 5.0	稜花皿の体部片である。体部は外傾して立ち上がる。高台は外面から端部まで施釉され，内面の釉は削り取られている。	高台内回転篦削り	(胎土)にぶい褐色 (釉)オリーブ灰色	P335 表採
3	皿 (青磁)	A B 1.3 C 4.6	稜花皿の体部片である。高台は外面から端部まで施釉され，内面は削り取られている。	高台内回転篦削り	(胎土)暗褐灰色 (釉) 灰白色	P334 SD-94
4	碗 (青磁)	A B 2.9 C(5.6)	底部片である。高台は外面から端部まで施釉され，内面は削り取られている。	高台内回転篦削り	(胎土)褐灰色 (釉)灰オリーブ色	P330 SK-851
5	碗 (青磁)	A(16.6) B 4.6 C(11.4)	体部は内傾し直線的に開く。高台は外面から端部まで施釉され，内面は削り取られている。	高台内回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P329 SK-703
6	碗 (青磁)	A(12.8) B 2.5 C	体部は内傾し，上位で外反する。口縁は再び外傾し、先端部は丸味をもつ。	水挽き	(胎土)灰褐色 (釉)オリーブ灰色	P332 SK-1197
7	皿 (青磁)	A B 2.3 C(9.2)	体部は外傾し，口縁は外反する。口唇は丸くおさめる。釉は薄く施釉され，貫入が入る。釉に若干の気泡があり，わずかに乳濁する。	水挽き 横ナデ	(胎土)明緑灰色 (釉)灰白色	P328 SK-708
8	皿 (白磁)	A(6.2) B 1.3 C(2.2)	体部は外傾し，口縁は内反する。口唇は丸くおさめる。底面は高台を削り出す。	水挽き 外面に菊の印花文あり	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	P331 SK-853

出土土器観察表（陶磁器）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	蔵骨器 (磁器)	A 43.0 B 53.6 C	底部より内反しながら立ち上がり，肩が強く張り，強く内傾して頸部に移行する。口縁は丸味をもって外反する。	巻き上げ 外面横ナデ	(胎土)極暗赤褐色	常滑 P30 SK-869
2	蔵骨器 (磁器)	A B 42.4 C(19.6)	胴部は丸味を有して立ち上がる。肩は強く張る。	巻き上げ 外面横ナデ	(胎土)にぶい赤褐色	常滑 P29 SK-685

出土土器観察表（陶磁器・擂鉢）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	擂鉢 (陶器)	A B 2.2 C(11.8)	底部破片。体部は外傾し，直線的に開く。内面の筋は5本が1組になっている。	ナデ 外面横ナデ	(胎土)赤褐色	P286 SD-82
2	擂鉢 (陶器)	A B 3.5 C(11.2)	底部破片。体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。内面の筋は5本が1組となっている。	ナデ 内面横ナデ	(胎土)橙色	P284 SD-1



第75図　蔵骨器

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
3	擂鉢 (陶器)	A B 5.7 C(12.2)	底部破片。体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。内面の筋は5本が1組となっている。	ナデ 外面横ナデ	(胎土)褐色	P285 SD-82
4	擂鉢 (陶器)	A B 5.9 C(12.6)	底部破片。体部は外傾し，直線的に開く。内面の筋は6本が1組となっている。	ナデ 内・外面横ナデ	(胎土)にぶい褐色	P282 SK-704

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
5	擂鉢 (陶器)	A B 4.9 C(10.8)	底部破片。体部は外傾し，直線的に開く。内面の筋は4本が1組となっている。	ナデ 内・外面横ナデ	(胎土)橙色	P283 SD-12
6	擂鉢 (陶器)	A B 3.4 C(10.8)	底部破片。体部は内傾し，直線的に開く。内面の筋は4本が1組となっている。	ナデ 底部回転糸切り	(胎土)灰褐色	P287 表採

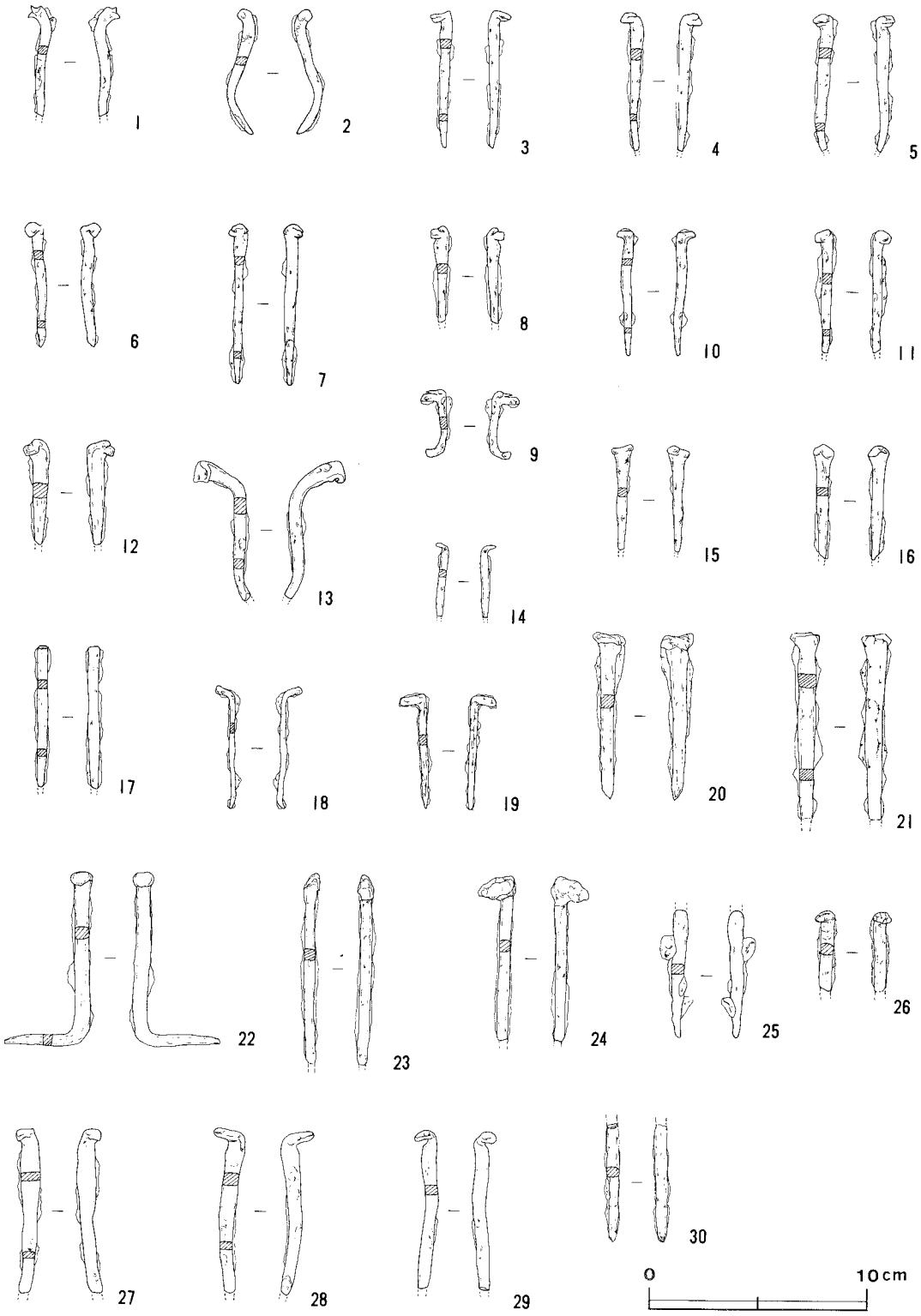
鉄製品観察表

図版番号	器種	法量(cm)	特徴	備考	図版番号	器種	法量(cm)	特徴	備考
第76図 1	釘 (鉄製品)	A(5.1) G 4.9	断面四角形の和釘。腐蝕が著しい。頭部を折り曲げる。	M25 SD83	第76図 16	〃 (〃)	A(5.3) G 3.9		M43 SK711
2	〃 (〃)	A(5.8) G 4.0	断面四角形の和釘。先端・頭部を折り曲げる。腐蝕が著しい。	M26 SD83	17	〃 (〃)	A(6.6) G 5.2		M44 SK711
3	〃 (〃)	A(6.4) G 5.0	断面四角形の和釘。頭部を折り曲げる。腐蝕が著しい。	M27 SD100	18	〃 (〃)	A(5.7) G 3.7		M45 SK713
4	〃 (〃)	A(6.4) G 5.9		M28 SD100	19	〃 (〃)	A 5.3 G 5.0		M50 SK730
5	〃 (〃)	A(6.3) G 6.9		M29 SD100	20	〃 (〃)	A 7.7 G 10.3		M53 SK852
6	〃 (〃)	A(5.8) G 4.3		M30 SD100	21	〃 (〃)	A(8.6) G 18.0		M56 SK976
7	〃 (〃)	A(7.4) G 6.7		M31 SD100	22	〃 (〃)	A 11.0 G 13.2	断面四角形の和釘。頭部・端端部を折り曲げている。腐蝕が著しい。	M55 SK869
8	〃 (〃)	A(4.5) G 4.9		M32 SK690	23	〃 (〃)	A(8.8) G 7.9		M58 グリット
9	〃 (〃)	A 5.9 G 4.0	断面四角形の和釘。先端・頭部を折り曲げる。腐蝕が著しい。	M33 SK692	24	〃 (〃)	A(7.6) G 10.4		M59 グリット
10	〃 (〃)	A(5.7) G 4.6		M36 SK692	25	〃 (〃)	A(5.9) G 3.7		M62 SI52
11	釘 (鉄製品)	A(4.9) G 9.2		M37 SK704	26	〃 (〃)	A(3.7) G 3.9		M63 SI52
12	〃 (〃)	A(6.4) G 15.1		M38 SK704	27	〃 (〃)	A(7.6) G 9.2		M65 表採
13	〃 (〃)	A 3.2 G 3.4	断面四角形の和釘。頭部・先端を折り曲げる。腐蝕が著しい。	M34 SK690	28	〃 (〃)	A(7.6) G 10.7		M66 表採
14	〃 (〃)	A(3.4) G 0.9		M42 SK710	29	〃 (〃)	A(7.3) G 7.5		M67 表採
15	〃 (〃)	A(4.9) G 4.4		M40 SK710	30	〃 (〃)	A(5.4) G 3.6		M64 SI52

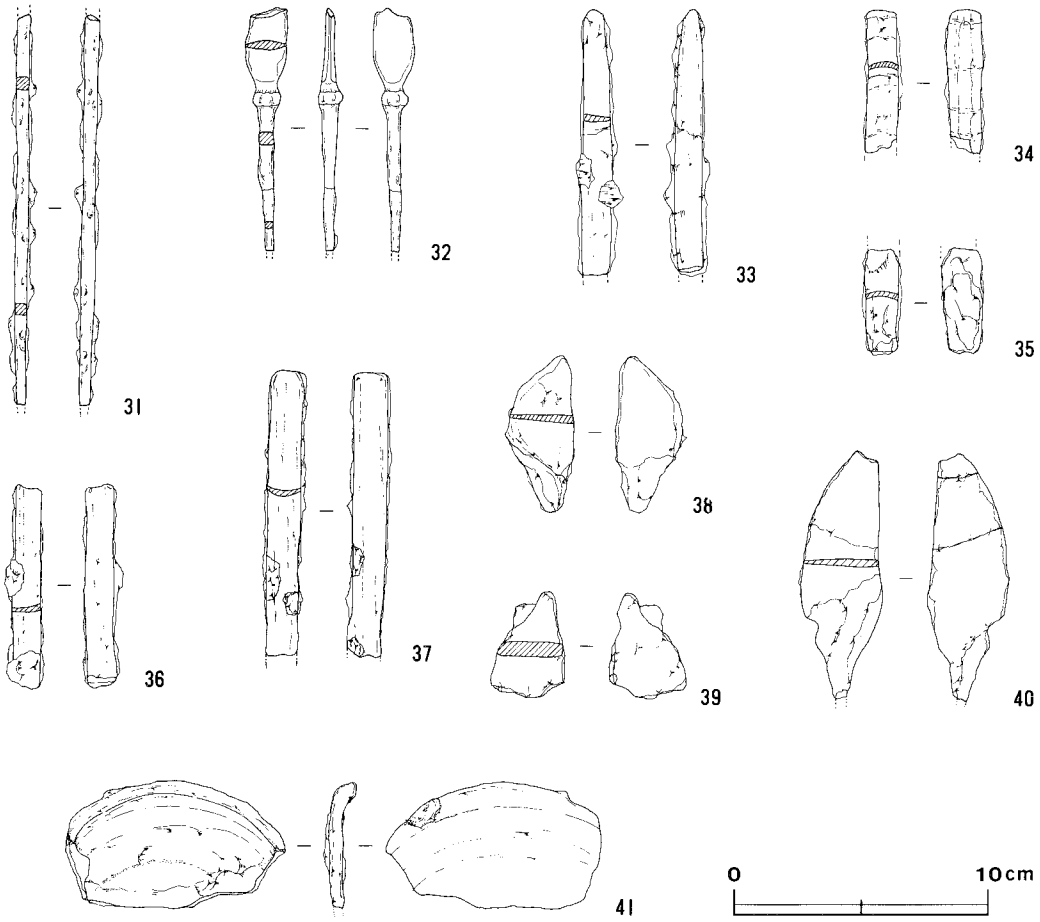
図版番号	器種	法量(cm)	特　　徴	備　考	図版番号	器種	法量(cm)	特　　徴	備　考
第77図 31	鉄　鏃 (鉄製品)	A(15.5) G 16.0	断面は四角形で、両端部は折れている。鉄鏃の茎部か。	M46 SK714	37	〃 (〃)	A(11.3) G 12.6	大形の小札の破片。腐蝕が著しい。	M48 SK714
32	〃 (〃)	A(9.7) G 12.6	茎部の断面は角形，茎の断面は方形を呈する。腐蝕が著しい。	M23 SD1	38	鏟　金 (鉄製品)	A(6.2) G 10.6	鉄製の鏟金で，三角形を呈する。	M51 SK843
33	刀　子 (鉄製品)	A(10.6) G 9.1	刀子の破片。刃部は断面三角形を呈する。先端部は丸味を持つ。	M47 SK714	39	〃 (〃)	A(4.2) G 15.0	鉄製の鏟金で，三角形を呈する。	M52 SK843
34	小　札 (鉄製品)	A(5.7) G 4.8	小札の破片。腐蝕が著しい。	M60 SI46	40	鎌 (鉄製品)	A(9.8) G 18.2	先端部欠損。平棟で断面三角形を呈す。	M57 SK1150
35	〃 (〃)	A(4.2) G 4.5	小札の破片。腐蝕が著しい。	M61 SI46	41	不明鉄製品 (鉄製品)	A 5.0 G 72.1	円形を呈し，口縁部は立ち上がる。腐蝕が著しい。	M24 SD1
36	〃 (〃)	A(8.1) G 7.1	小札の破片。腐蝕が著しい。	M49 K714					

銅製品観察表

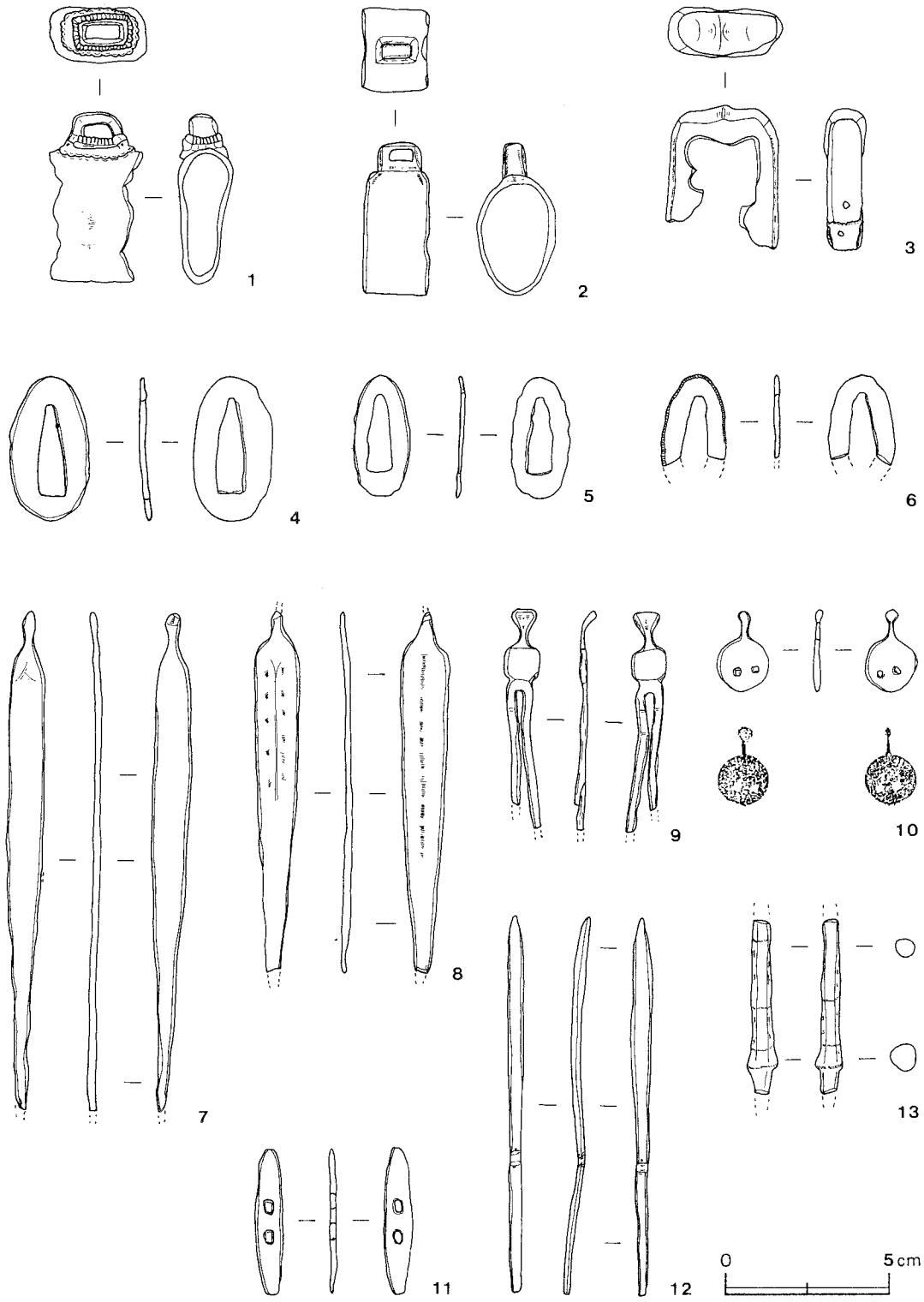
図版番号	器種	法量(cm)	特　　徴	備　考	図版番号	器種	法量(cm)	特　　徴	備　考
第78図 1	足　金　物 (銅製品)	A 5.3 G 21.9	断面は長方形を呈し，菊座は三段に造られている。	M16 SD15	11	鞐 (銅製品)	A 4.5 G 2.7	胴甲の付属品。	M6 SK869
2	足　金　物 (〃)	A 4.7 G 16.4	断面は楕円形を呈する。菊座は一段。	M17 SK714	12	鏃 (銅製品)	A 11.6 G 6.1		M11 SK1073
3	柄　金　具 (〃)	A 4.4 G 9.9	側に一対の目釘穴がある。	M10 SK772	13	鏃 (〃)	A 5.5 G 13.2	峰が狭く，箭頭部が細長い。	M7 グリット
4	鏑 (〃)	A 4.4 G 3.7	楕円形を呈する。	M1 SK1180	第79図 14	不明銅製品 (〃)	A(2.9) G 2.3	縁金具（？）	M21 SI64
5	鏑 (〃)	A 3.7 G 1.9	楕円形を呈する。	M3 グリット	15	把　手 (〃)	A(3.1) G 10.9	把手状の縁金具	M22 表採
6	鏑 (〃)	A 2.8 G 1.3	外周に刻みが施されている。	M2 SK1180	16	不明銅製品 (〃)	A(5.4) G 3.5	縁金具（？）	M20 SK944
7	笄 (〃)	A(15.4) G 12.2	額内に桜の高彫り。肩部に丸味がある。	M5 SK1197	17	不明銅製品 (〃)	A 4.3 G 5.1	槍の石突（？）	M8 SK989
8	笄 (〃)	A(11.1) G 9.0	掻部欠損。肩部に丸味がある。	M4 SK940	18	煙　管 (〃)	A 3.3 G 4.0	煙管の胴部破片。	M9 SD1
9	簪 (〃)	A(6.8) G 4.8	耳掻簪である。	M15	19	六　器 (〃)	A 7.0 B 0.7 G 22.2	銅製の碗	M12 SK697
10	〃 (〃)	A(2.5) G(2.2)	耳掻簪である。	M14	20	六　器 (〃)	A 4.4 B 1.0 G 6.0	低い高台をもつ盤と考えられる。	M13 SK1079



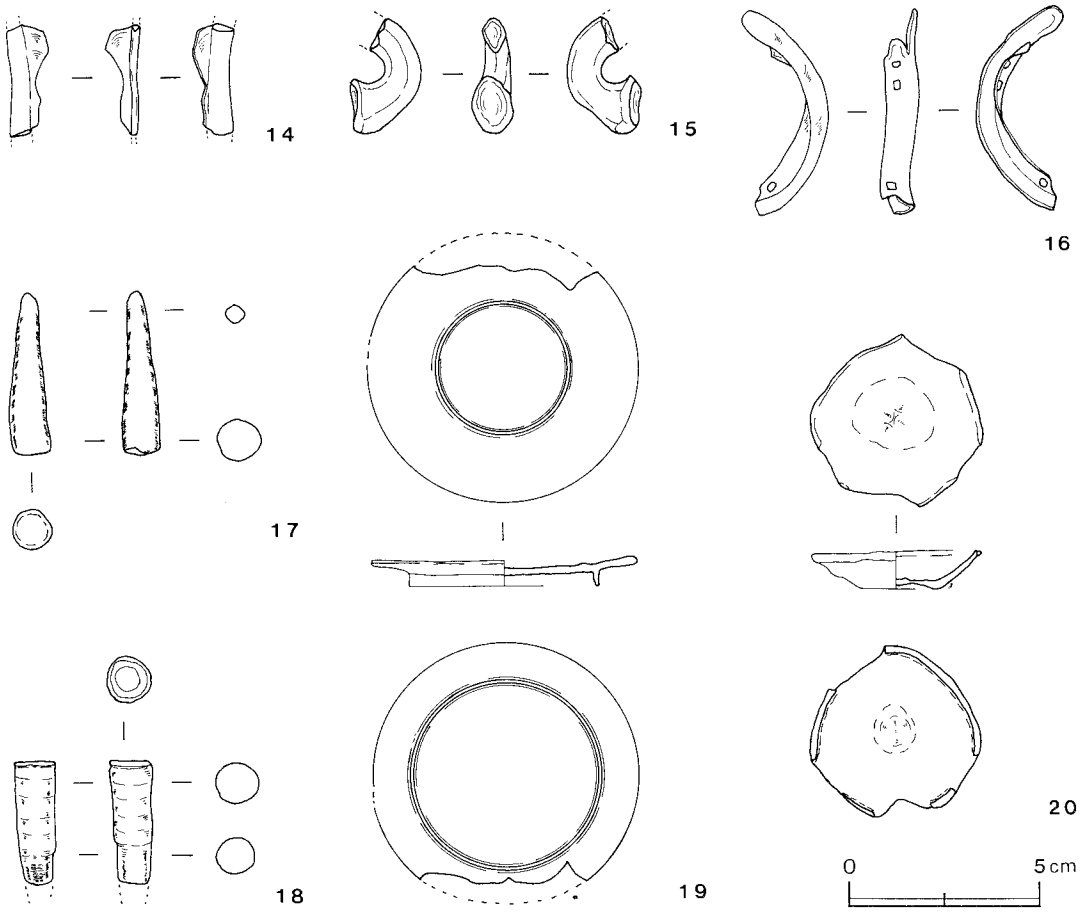
第76図　鉄製品実測図（1）



第77図　鉄製品実測図（2）



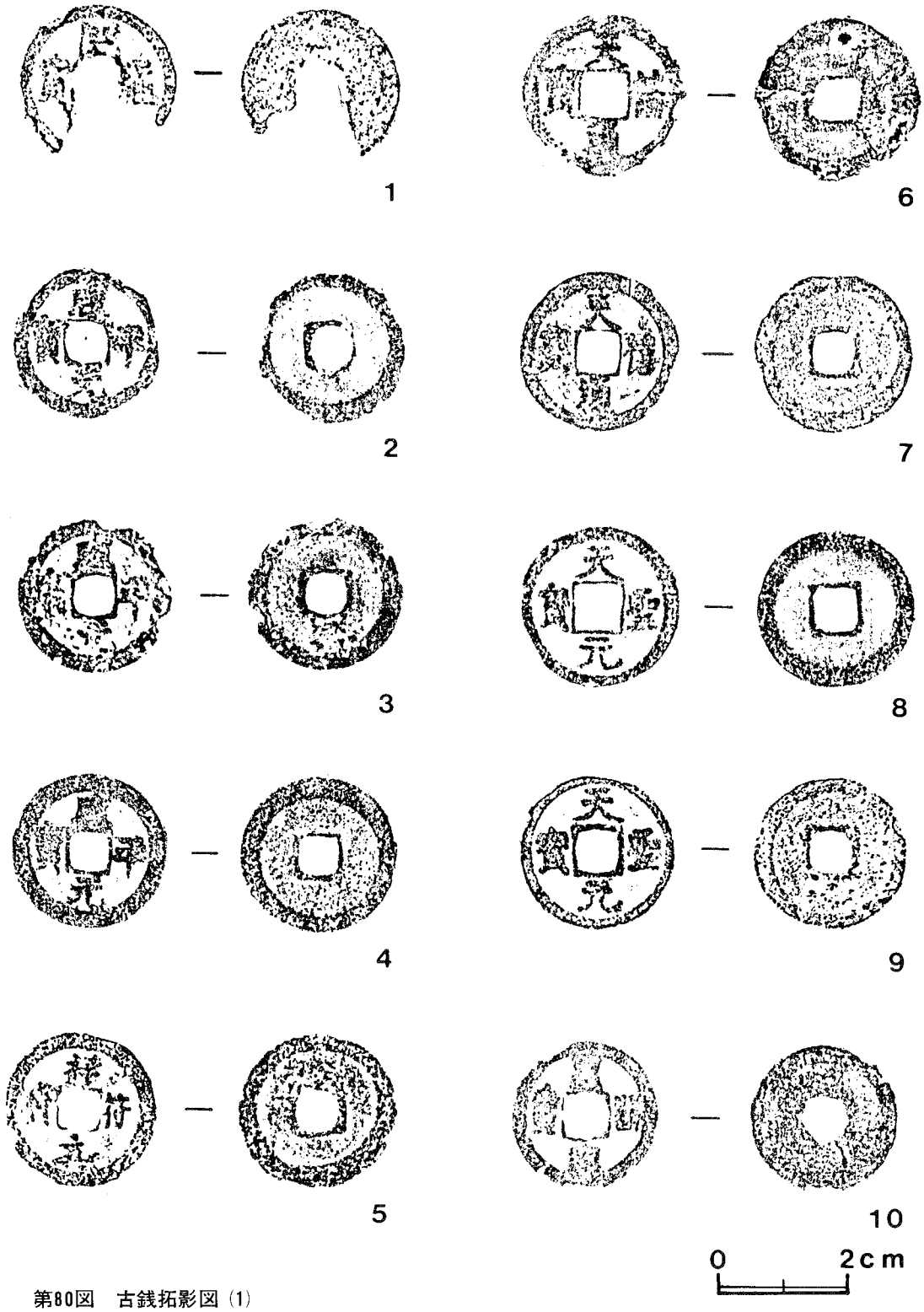
第78図　銅製品実測図（1）



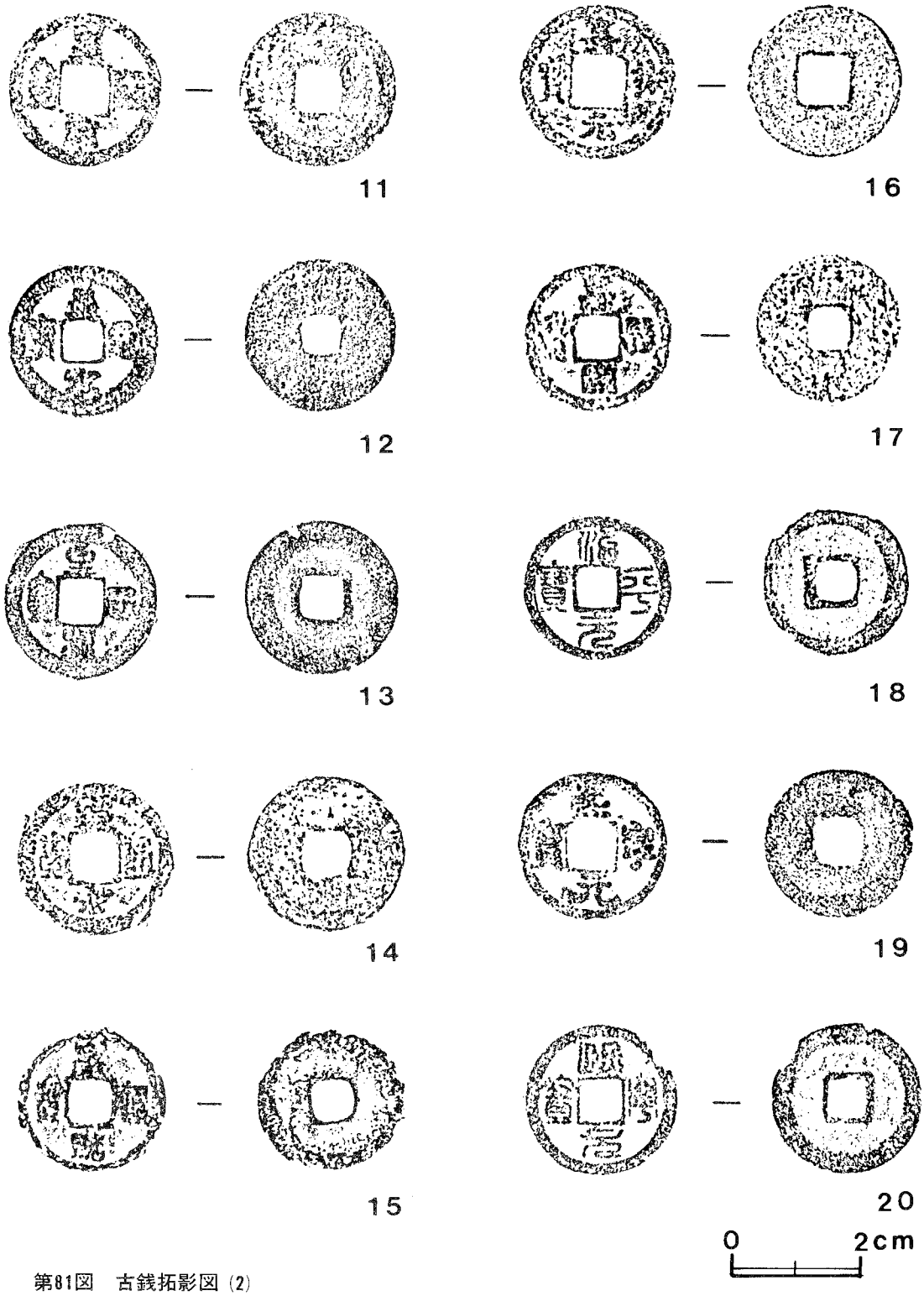
第79図　銅製品実測図（2）

表 2　古銭一覧表

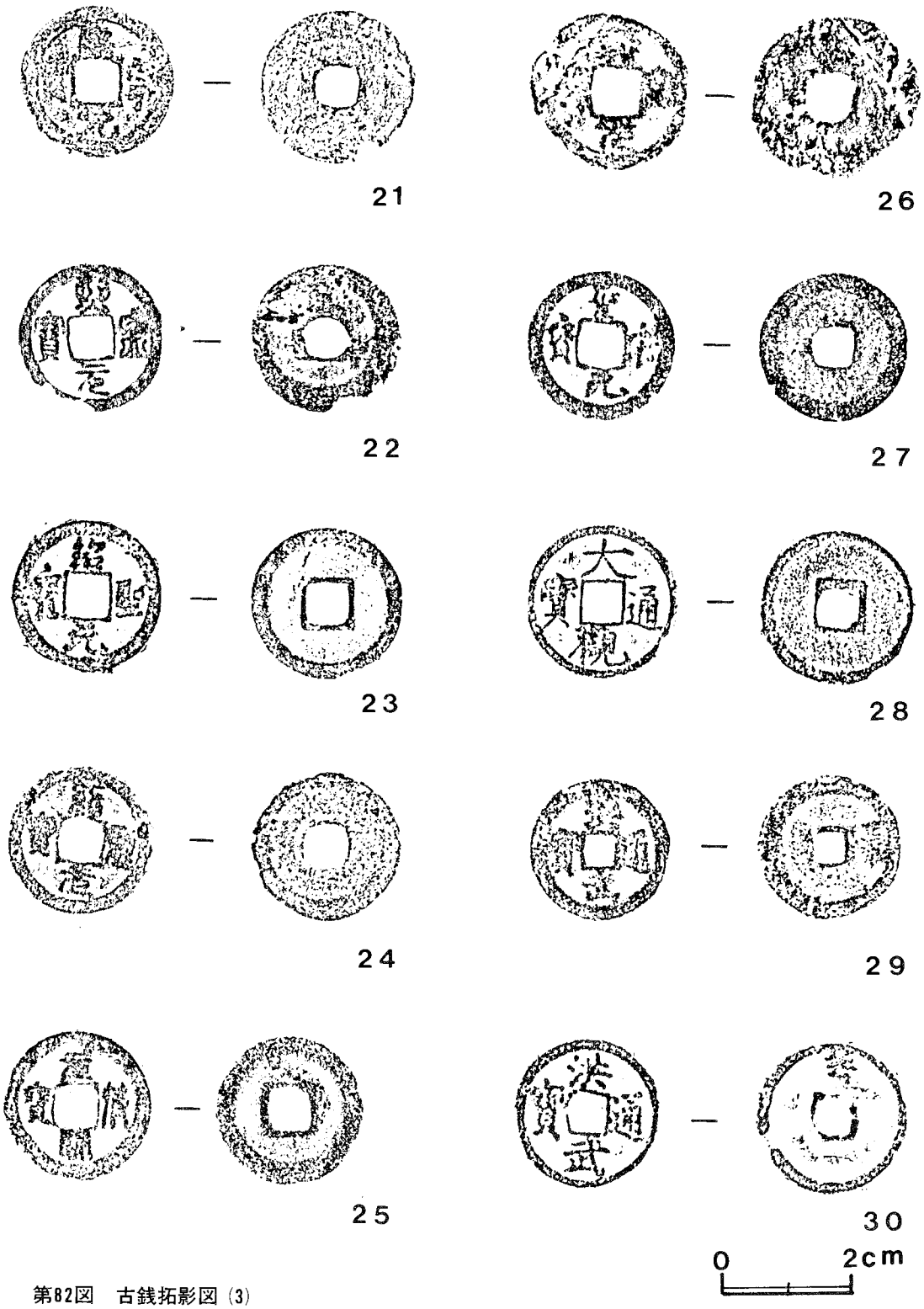
図版番号	銭　名	初鋳年		出土地点	備　　考	図版番号	銭　名	初鋳年		出土地点	備　　考
第80図 1	開通□寶	唐	621	不明	□は元か、一部欠損	25	元符通寶	北宋	1098	SK-1097	
2	咸平元寶	北宋	998	SK- 772		26	聖宋元寶	〃	1101	SK-1224	
3	〃	〃	〃	SK-1157	周縁欠損	27	〃	〃	〃	SE-12	
4	〃	〃	〃	表採		28	大觀通寶	〃	1107	SK-1075	
5	祥符元寶	〃	1008	SK-1224		29	洪武通寶	明	1367	SK-699	
6	天禧通寶	〃	1017	SK947		30	〃	〃	〃	SK-713	裏面に一文字有（判読困難）
7	〃	〃	〃	SD-69		第83図 31	〃	〃	〃	5号土壁	
8	天聖元寶	〃	1023	SE-2		32	永楽通寶	〃	1408	SK-713	
9	〃	〃	〃	不明		33	〃	〃	〃	SK-1205	
10	皇宋通寶	〃	1039	SI-56		34	〃	〃	〃	SK-1183	
11	〃	〃	〃	SI-64		35	〃	〃	〃	SD-1	
12	〃	〃	〃	SI-713		36	紹□□寶			$F5d_2$	
13	〃	〃	〃	SK-713		37	□□□寶			SI-46	
14	〃	〃	〃	SK-879		38	□□□寶			$G4i_1$	
15	〃	〃	〃	SK-1079		39	□□□□			SK-1224	磨滅が激しく不明瞭
16	嘉祐元寶	〃	1056	SK-1205		40	□宋□寶			SK- 688	破片
17	嘉祐通寶	〃	〃	$F5d_2$			□□□寶			SK- 919	〃
18	治平元寶	〃	1064	SK-875			元□□□			SK-1097	〃
19	熙寧元寶	〃	1068	SK-713			――			SK- 869	〃
20	〃	〃	〃	SK-1224			――			SK-1097	〃
第82図 21	〃	〃	〃	表採			――			SK-1097	〃
22	〃	〃	〃	表採	周縁一部欠損		――			SK-1097	〃
23	紹聖元寶	〃	1094	SK-713							
24	〃	〃	〃	SE-6			計46ケ				



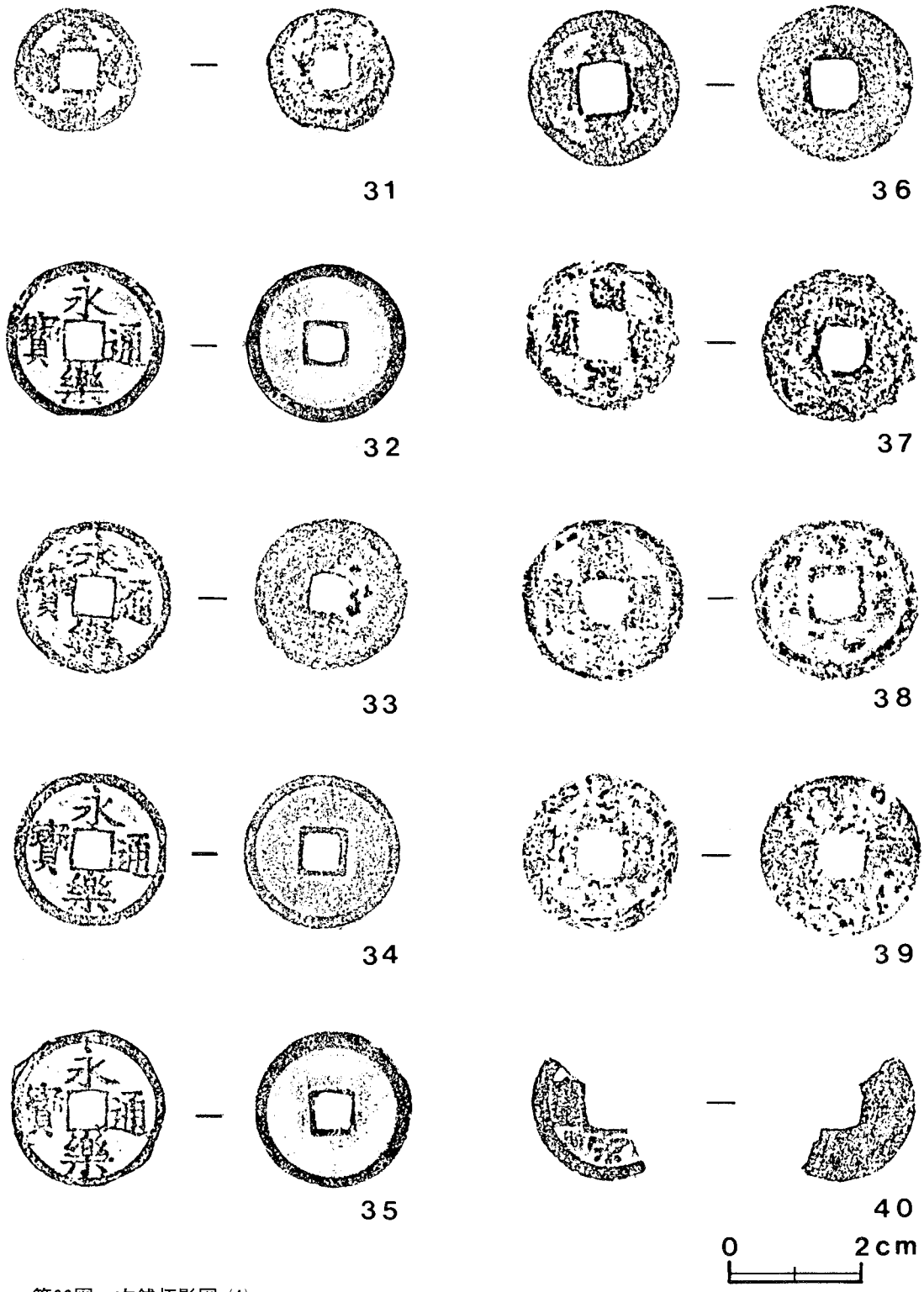
第80図　古銭拓影図 (1)



第81図　古銭拓影図 (2)



第82図　古銭拓影図 (3)



第83図　古銭拓影図 (4)

(9) 中世遺物ー(2) 土製品・石製品

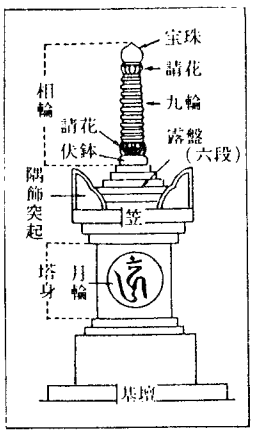
当遺跡から出土した中世の遺物は，前述の陶・磁器・金属製品のほか土製品（内耳形土器）・石塔（宝篋印塔・五輪塔）・石製品（砥石・石臼・石皿・石擂鉢）等がある。

内耳形土器には，深くて体部がやや内反するものと，やや浅くて体部の開き方が直線的なものがあり，機能面を考えた場合前者を土鍋，後者をほうろく状のものとして使用したことが考えられる。内面がくの字状の土器は土鍋に認められ，内耳部分は，つり下げる機能と考えられるが，耳の側面の磨耗度は少ない状態であり、使用状態を考えた場合常時吊り下げて使用したのではなく，移動時だけの使用状況が窺える。

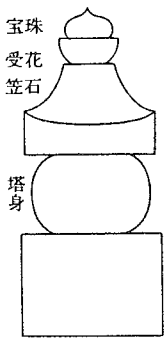
石塔類では，宝篋印塔と五輪塔が出土し，墓石として使用されたものであろう。宝篋印塔は，笠（6），相輪（4）の部分の出土である。笠は軒下に段級・請花が認められ，四隅に弧をもつ突起がある。石材は砂岩である。

五輪塔は，空風輪（53），火輪（84），水輪（57），地輪（65）の合計259個が出土した。五輪塔の個々の形状の特徴をみてみると，空風輪は全て一石からなり，風輪の下面には火輪と接続するための柄が突出して造られているものもある。また空輪の頂部は丸味をもったもの，尖ったものがあり，丸味をもったもの，突ったもので新旧がとらえられると同時に空風輪の境の溝の長さの割合いでも新旧関係が捉えられる。火輪は角錐状を呈し，上面に風輪を差し込むためのほぞ穴が造られ，軒反りの形態の変化によって時期差が認められる。水輪は球体を呈し，上下が平坦である。地輪は方形を呈す。

出土した五輪塔の石材は，砂岩・花崗岩の比較的加工しやすい石材を使用し，筑波山周辺出土の石材を使用している。



宝篋印塔の各部名称



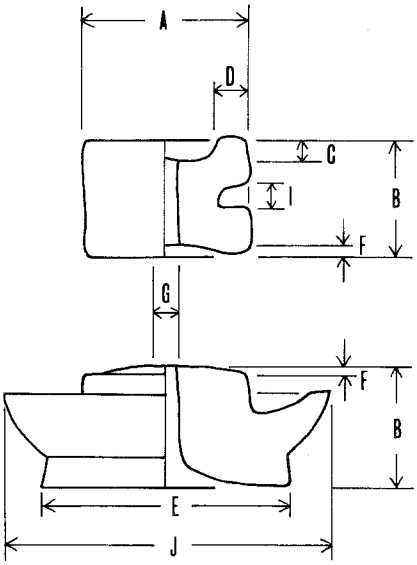
梵字	五大	形式	読み	字義	五気
	空輪	団	キヤ	虚空	土用
	風輪	半月	カ	因業	冬
	火輪	三角	ラ	塵垢	夏
	水輪	円	バ	盲説	秋
	地輪	方	ア	不生	春

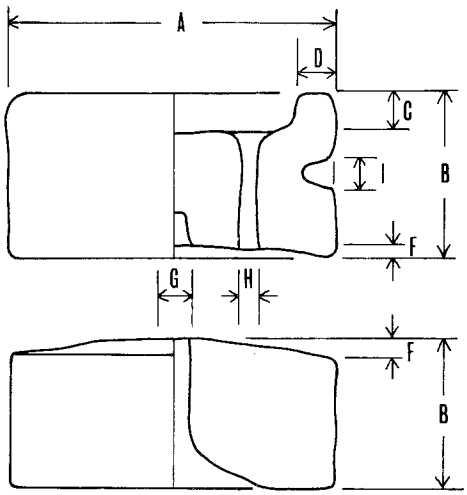
五輪塔各部名称と意味

石製品には，砥石・茶挽臼・石皿・石擂鉢等がある。砥石は45点を数え，形状は方形，長方形を呈する。これら砥石は，荒砥・中砥・仕上砥があり，用途に応じて使い分けていることや砥石が凹状になっている状態から使用頻度の高いことが窺い知れる。石質は，頁岩及び凝灰岩，砂岩が使われ，石塔の破片を二次転用として使用している砥石も多い。また，砥石（仕上げ砥石）の使用状況を観察すると，砥石の面に深い細い擦痕が認められることから，特殊な物の仕上げに使用されたことなどが考えられ。

石臼には，粉挽き石臼と茶挽き臼がある。本跡からは，粉挽き臼９個，茶挽き臼５個が出土した。出土した粉挽き臼は，安山岩で，主溝と不安定な副溝が不規則に刻まれ，ものくばり付近で特に乱れている。臼の目は，時計方向と逆まわし臼であり，側面に挽手孔がある。

石臼模式図



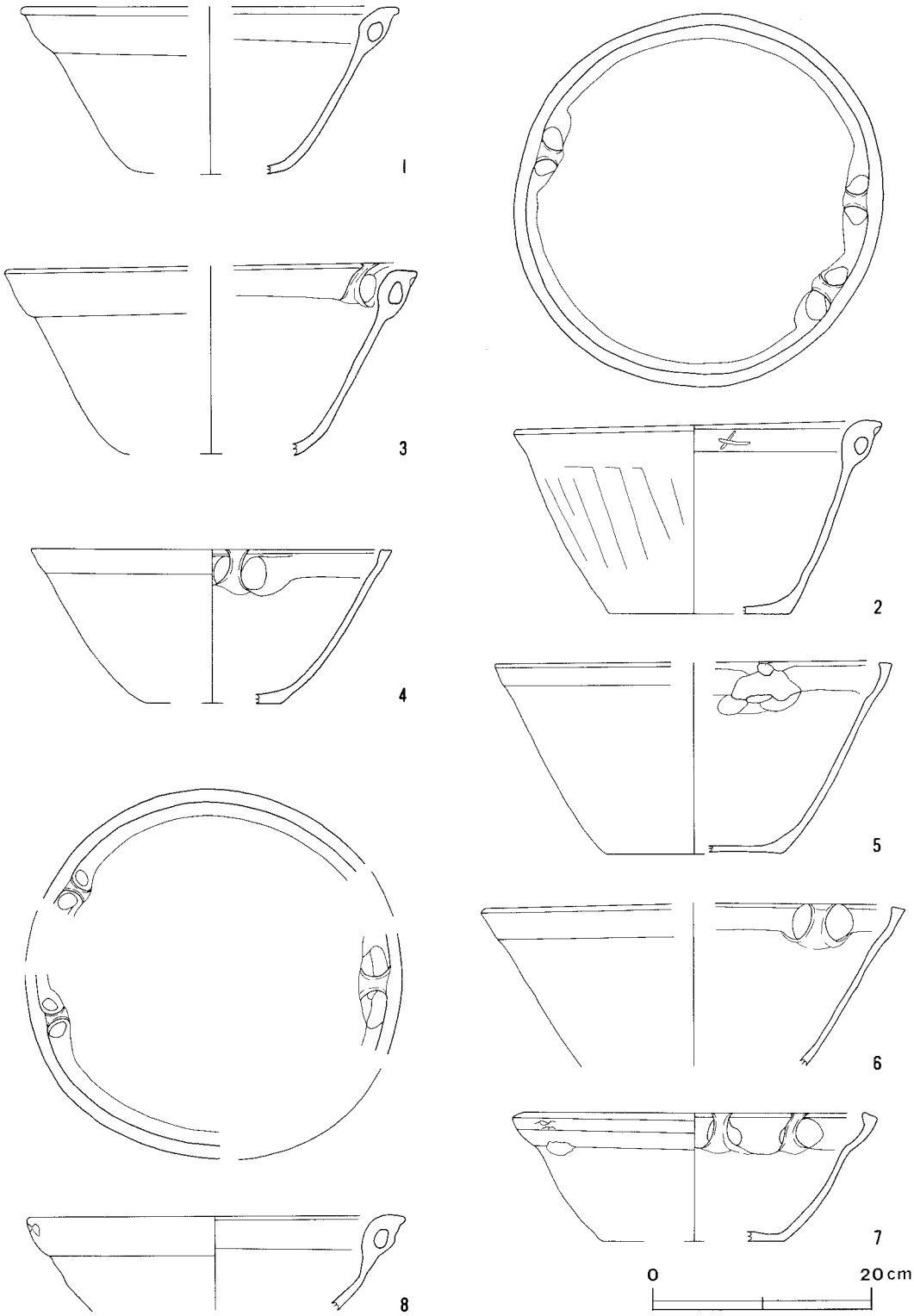


A 直径　B 高さ　C 上縁高　D 上縁幅
E 下縁幅　F ふくみ　G 芯穴の径
H 供給口の径　I 換き手穴の径
J はんぎりの径

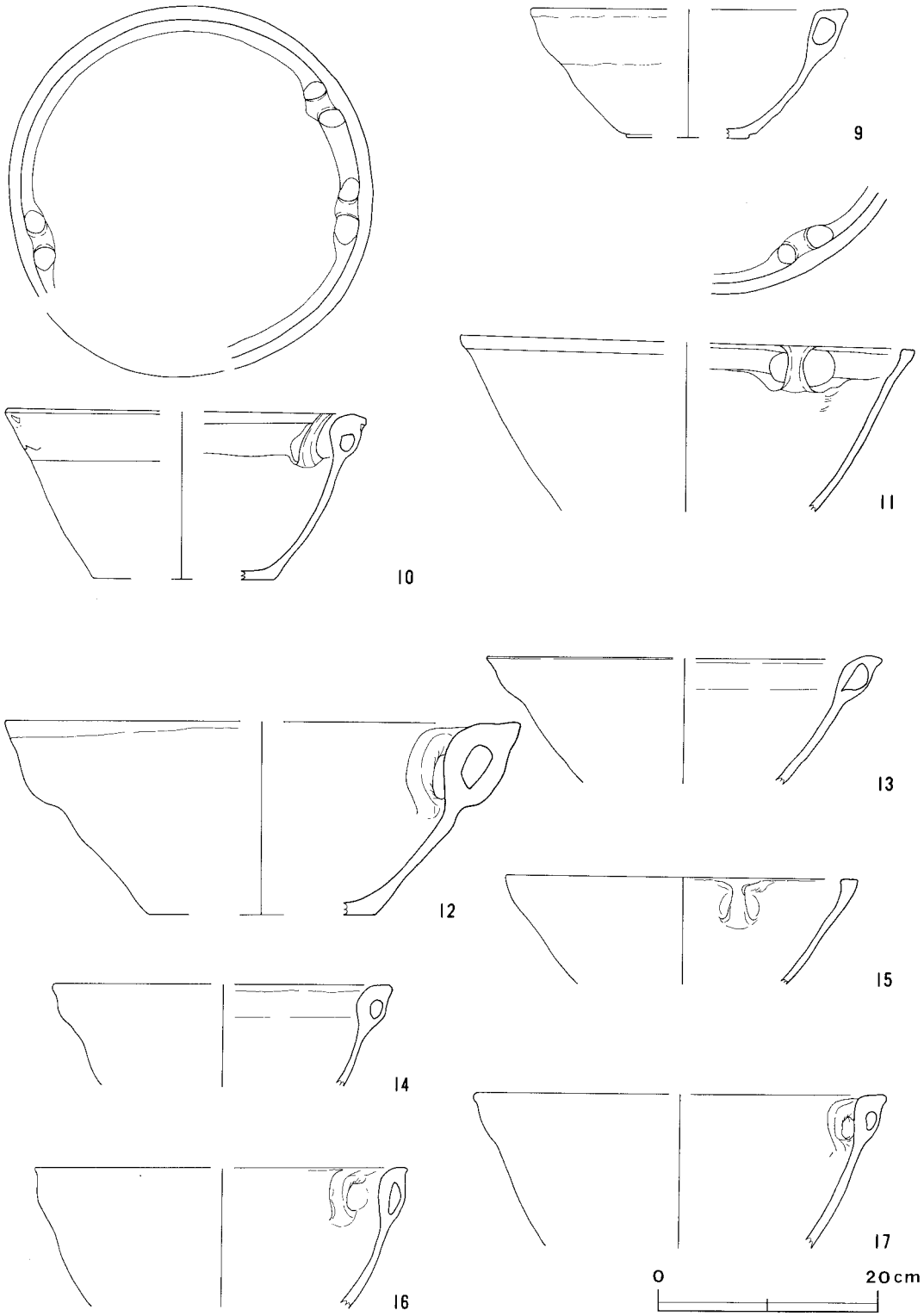
石皿は，６個体分の破井が出土し，砂岩・安山岩製のものである。外面に煤の付着が認められることから，石鍋として使用されたことも窺える。

石擂鉢は破片１個が出土している。器形は，外面がやや丸味をおび，金属工具の敲打による粗仕上げで，いわゆる「ハシリ」痕が残っている。また内面には使用痕跡である回転による磨擦痕がみられ，内・外面には火熱をおびて変色・炭化物の付着も認められる。

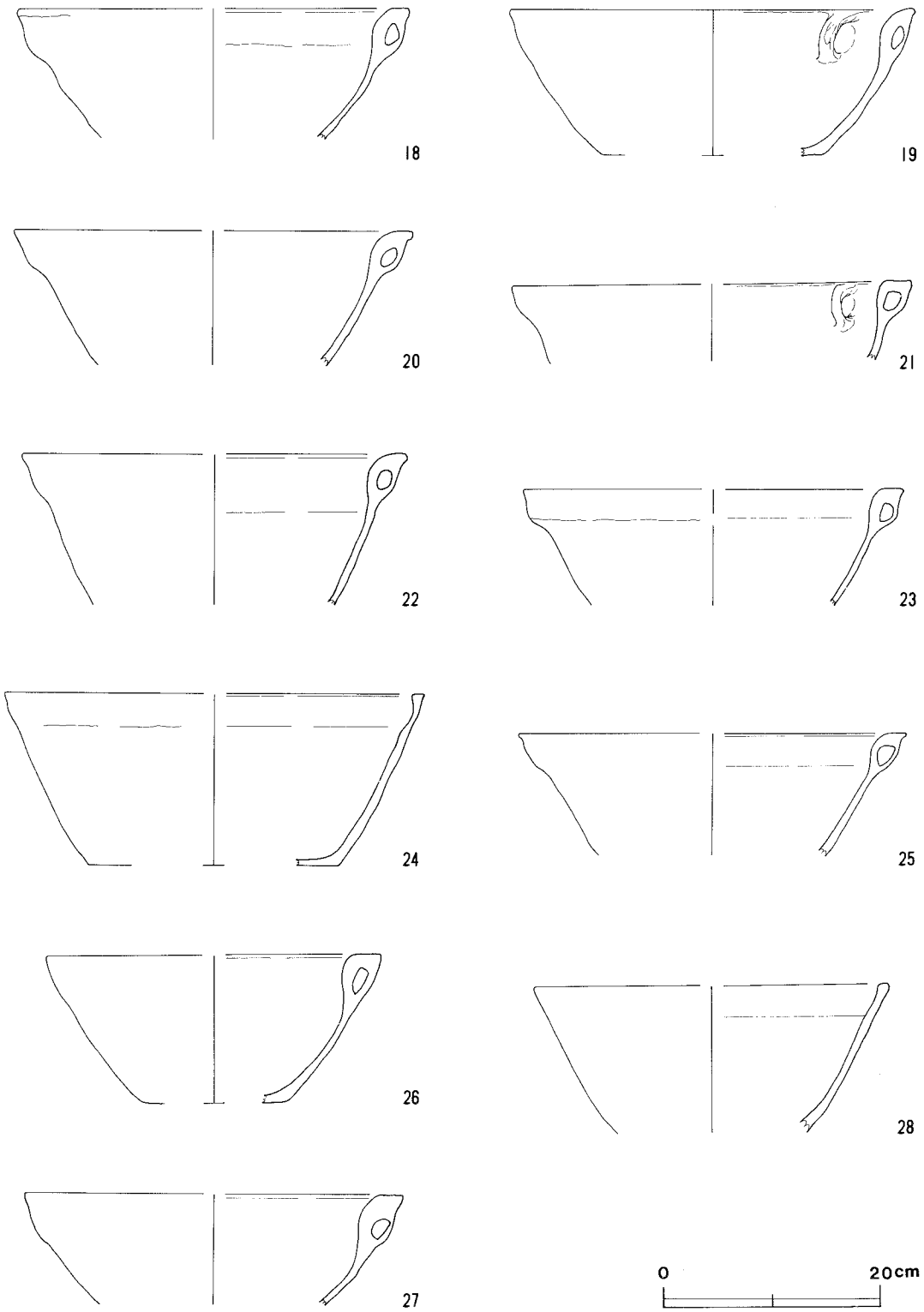
以上に述べたことから明らかなように，当遺跡から出土した遺物は，鎌倉期から戦国時代までのものが大半を占めているが，石塔類や金属製品，舶載陶・磁器等の中には，鎌倉期から使用されたことが窺えるものも多い。



第84図　中世遺物実測図（内耳形土器－１）



第85図　中世遺物実測図（内耳形土器－２）

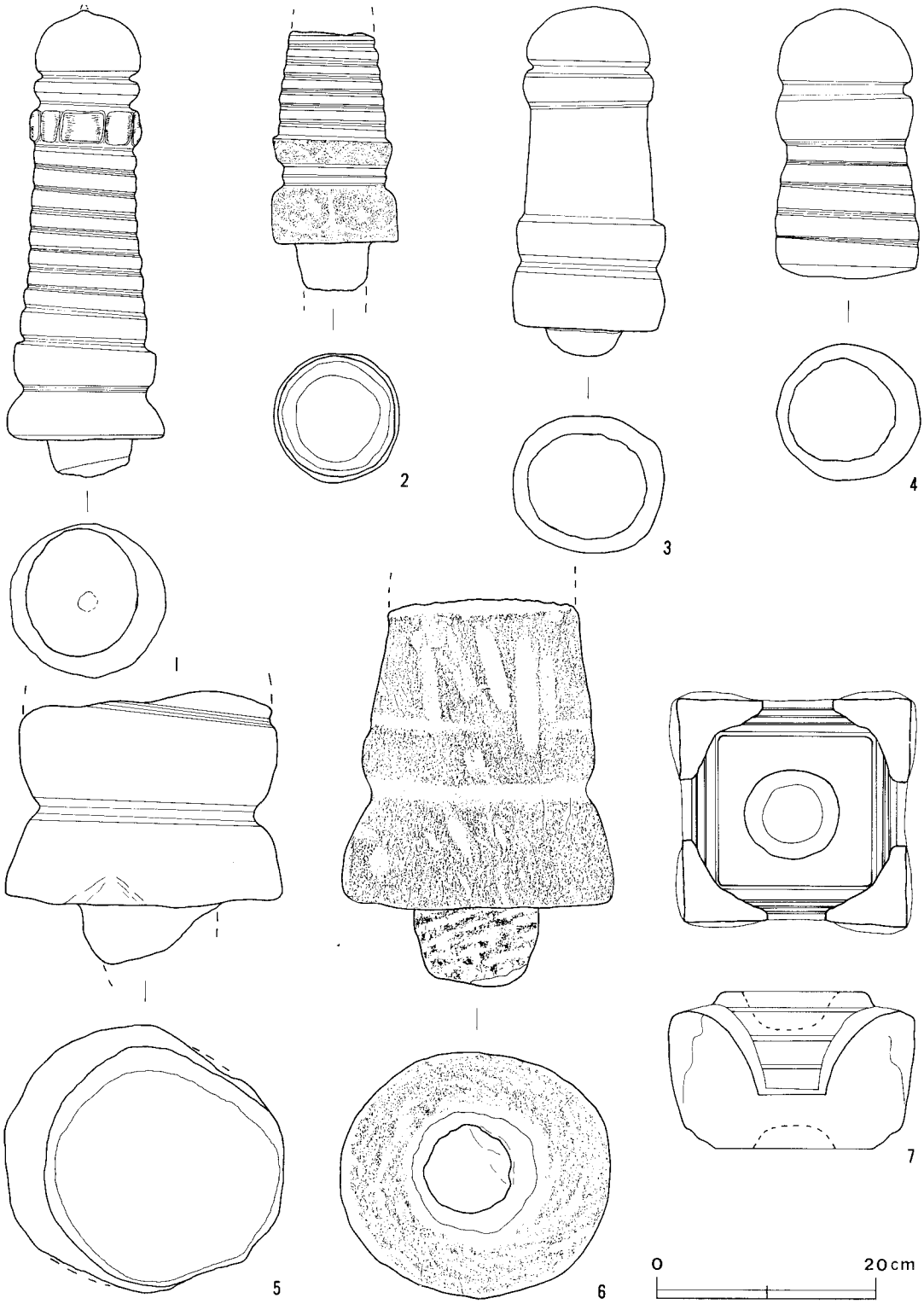


第86図　中世遺物実測図（内耳形土器－３）

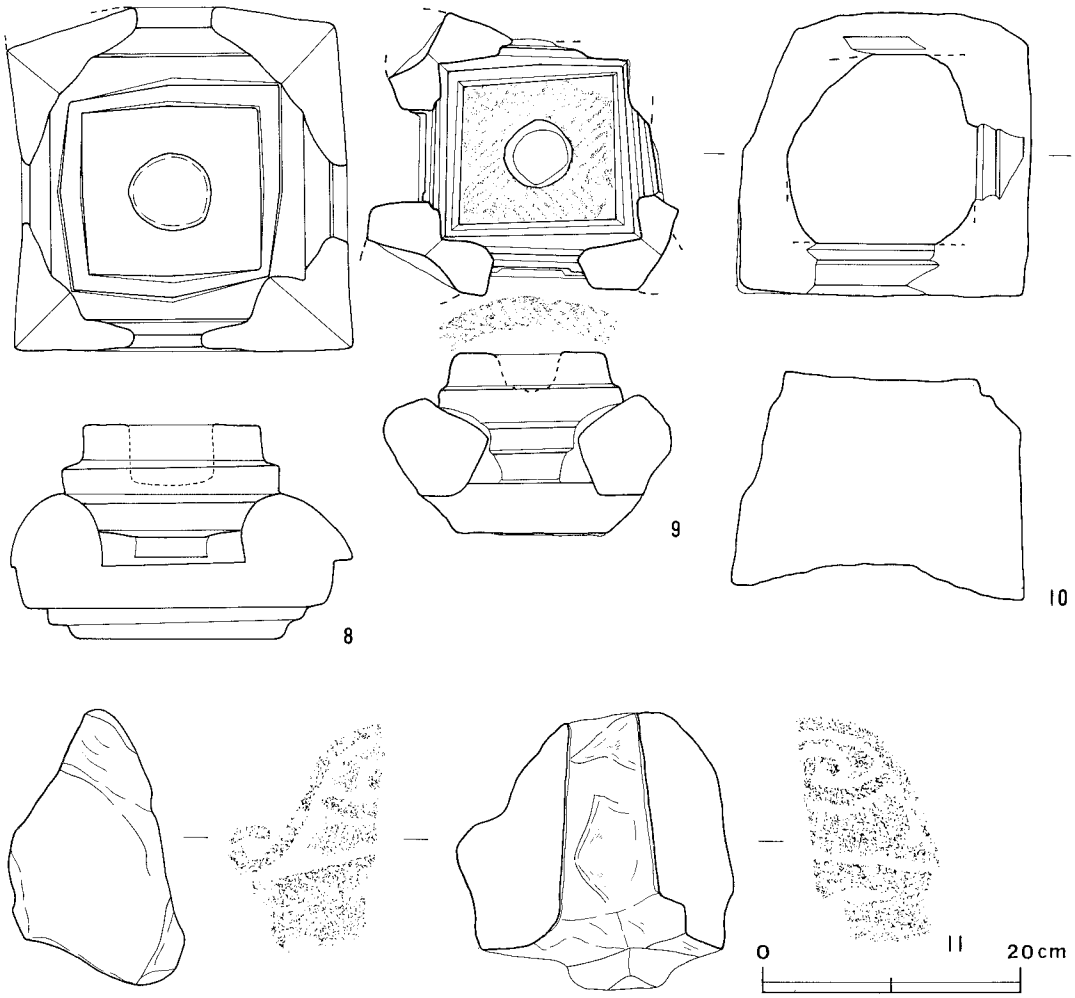
出土土器観察表　中世遺物（内耳形土器）1

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第84図 1	内耳形土器 （土師質土器）	A (34.8) B 15.4 C (14.8)	体部は内反し，頸部はやや外反する。頸部内面には，幅広の浅い凹帯。耳は3ケ所。	砂粒 （内）にぶい褐色 （外）黒色	P16 SK-692 732 SK-718 692
2	内耳形土器 （土師質土器）	A 34.0 B 17.4 C (16.8)	体部は内反し，直線的に開く。頸部はやや外反する。耳は3ケ所。外面に鍋墨付着。	砂粒　砂礫 （内）明褐色 （外）黒褐色	P17 SK-697
3	内耳形土器 （土師質土器）	A (38.0) B 17.4 C (16.0)	体部は外傾し，直線的に開く。頸部はやや外反する。頸部内面には，幅広の浅い凹帯。	砂粒　雲母 （内）にぶい褐色 （外）黒褐色	P18 SK-718 SK-732
4	内耳形土器 （土師質土器）	A (33.0) B 14.2 C (12.6)	体部は内反し，直線的に開く。頸部は内側の凹帯により，外面がふくらむ。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）橙色 （外）暗褐色	P19 SD-36
5	内耳形土器 （土師質土器）	A (36.3) B 17.6 C (16.4)	体部は外反し，直線的に開く。頸部は内側の凹帯により，外面がふくらむ。外面に鍋墨付着。	砂粒　砂礫　雲母 （内）橙色 （外）褐色	P20 SD-12 SD-14
6	内耳形土器 （土師質土器）	A (38.6) B 14.8 C	体部は内反し，直線的に開く。頸部は内側の凹帯により，外面がふくらむ。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）明褐色 （外）黒褐色	P21 SD-12 SD-14
7	内耳形土器 （土師質土器）	A (33.6) B 11.6 C (16.6)	平底で，体部は内反し，直線的に開く。頸部は内側の凹帯により，外面がふくらむ。	砂粒　雲母 （内）にぶい橙色 （外）灰褐色	P22 SD-12
8	内耳形土器 （土師質土器）	A (34.8) B 8.6 C	口縁部は外反し，頸部は内側の凹帯により，外面がふくらむ。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）橙色 （外）黒褐色	P23 SD-1
第85図 9	内耳形土器 （土師質土器）	A (29.4) B 11.8 C (11.4)	体部は外傾し，やや内反する。頸部内側には，幅広の浅い凹帯。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）橙色 （外）黒色	P24 SD-1
10	内耳形土器 （土師質土器）	A (33.5) B 15.4 C (16.6)	体部は内反し，頸部はやや外反する。頸部内面には，幅広の浅い凹部。耳は3か所。	砂粒 （内）にぶい褐色 （外）黒褐色	P27 表採
11	内耳形土器 （土師質土器）	A (41.8) B 15.8 C	体部は外傾し，やや内反する。頸部内側に浅い凹部。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒 （内）明褐色 （外）黒褐色	P28 表採
12	内耳形土器 （土師質土器）	A (23.6) B 8.9 C (10.4)	体部は外傾し，やや内反する。内側に幅広の浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）にぶい橙色 （外）黒褐色	P263 SK-1021 SD-66
13	内耳形土器 （土師質土器）	A (36.4) B 11.4 C	体部は外傾し，直線的に開く。頸部はやや外反する。頸部内面には，幅広の浅い凹部。	砂粒　雲母 （内）にぶい赤褐色 （外）黒褐色	P264 SK-851
14	内耳形土器 （土師質土器）	A (31.0) B 9.2 C	体部は外傾し，内反する。頸部内側に幅広の浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）橙色 （外）暗褐色	P265 SD-1
15	内耳形土器 （土師質土器）	A 32.6 B 9.5 C	体部は外傾し，内反する。頸部内側に浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 （内）橙色 （外）にぶい褐色	P236 SD-1

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
16	内耳形土器 (土師質土器)	A(34.6) B 12.6 C	頸部はわずかに外反し、内側に幅広の浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) にぶい橙色 (外) 黒褐色	P267 SD-1
17	内耳形土器 (土師質土器)	A(37.6) B 13.9 C	体部は外傾し、内反する。頸部内側に浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 橙色 (外) 黒色	P268 SD-1
第86図 18	内耳形土器 (土師質土器)	A(36.4) B 11.9 C	体部は内反し、頸部はやや外反する。頸部内面には幅広の浅い凹帯が見られる。耳は3か所。	砂粒　雲母 (内) にぶい橙色 (外) 黒褐色	P269 SD-12
19	内耳形土器 (土師質土器)	A(37.4) B 13.4 C(20.2)	体部は内反し、頸部はやや外反する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 橙色 (外) 黒褐色	P270 SD-12
20	内耳形土器 (土師質土器)	A(37.2) B 12.2 C	体部は外傾し、内反する。頸部内側に幅広の浅い凹帯が見られる。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 橙色 (外) 黒色	P271 SD-12
21	内耳形土器 (土師質土器)	A(49.2) B 7.2 C	頸部は外反する。頸部内側に幅広の浅い凹帯が見られる。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) にぶい橙色 (外) 暗褐色	P272 SD-12
22	内耳形土器 (土師質土器)	A(35.6) B 13.8 C	体部は外傾して開く。頸部は直線的。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 明褐色 (外) 黒褐色	P273 SD-12
23	内耳形土器 (土師質土器)	A(35.4) B 10.5 C	体部はわずかに内反して開く。頸部は外反し、内側に幅広の浅い凹帯が周回する。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 橙色 (外) 黒色	P274 SD-14
24	内耳形土器 (土師質土器)	A(39.2) B 15.7 C(23.4)	平底で、体部は直立してから外傾して開く。頸部は直線的。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) にぶい赤褐色 (外) 黒褐色	P275 SK-685 SD-14
25	内耳形土器 (土師質土器)	A(36.0) B 11.2 C	体部は外傾して、わずかに内反して開く。内側に幅広の浅い凹帯が周回する。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 明褐色 (外) 黒褐色	P276 SD-14
26	内耳形土器 (土師質土器)	A(31.2) B 13.4 C(12.6)	体部は内反し、頸部はやや外反する。頸部内面には、幅広の浅い凹帯が見られる。器高は高い。	砂粒　雲母 (内) にぶい橙色 (外) 黒色	P277 SD-15
27	内耳形土器 (土師質土器)	A(35.0) B 10.1 C	頸部は外反する。頸部内側には幅広の浅い凹帯が見られる。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) にぶい赤褐色 (外) 黒褐色	P278 SD-1
28	内耳形土器 (土師質土器)	A(32.8) B 13.4 C	体部は内反し、頸部はやや外反する。頸部内側には幅広の浅い凹帯が見られる。器高は高い。外面に鍋墨付着。	砂粒　雲母 (内) 橙色 (外) 黒色	P279 表採



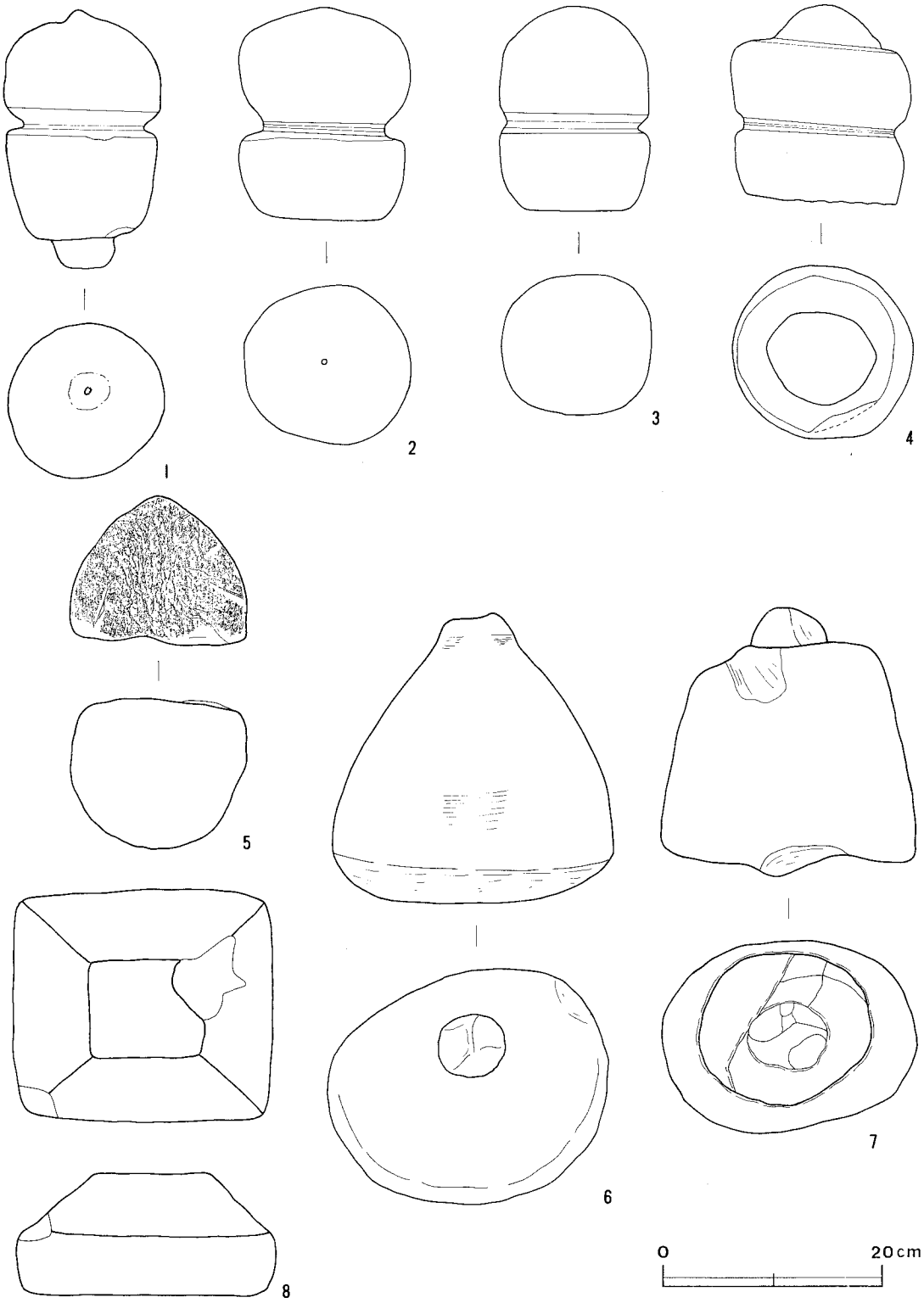
第87図　石製品実測図（宝篋印塔－１）



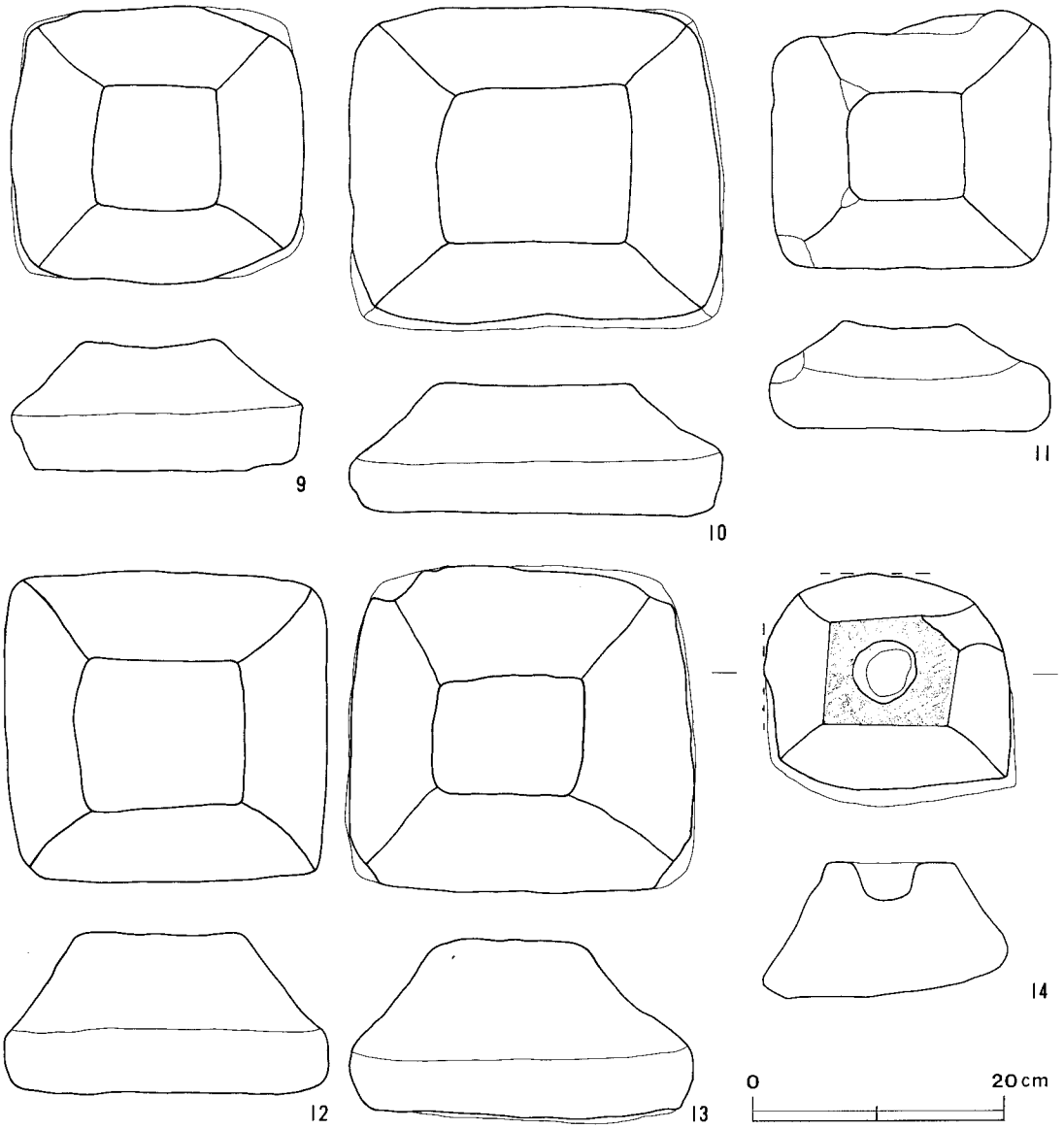
第88図　石製品実測図（宝篋印塔－２）

表３　石製品一覧表（宝篋印塔）

図版番号	器種	法量(cm)			石質	出土地点	備考	図版番号	器種	法量(cm)			石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚						最大長	最大幅	最大厚			
第87図 1	相輪	43.7	14.2		砂岩	SD-1	Q88	7	笠	22.6	22.5	14.7	花崗岩	SD-1	Q92
2	〃	24.1	11.6		安山岩	SD-1	Q86	第88図 8	〃	27.3	26.9	17.2	安山岩	SD-1	Q93
3	〃	32.7	13.7		花崗岩	SD-1	Q89	9	〃	22.4	24.1	14.7	砂岩	SD-1	Q94
4	〃	25.2	13.1		〃	SD-1	Q90	10	〃	22.5	22.8	17.6	安山岩	SD-14	Q95
5	〃	12.5	12.9		砂岩	SD-1	Q85	11	〃	10.9	7.1		〃	SD-1	Q96
6	〃	18.1	12.5		〃	SD-1	Q87								



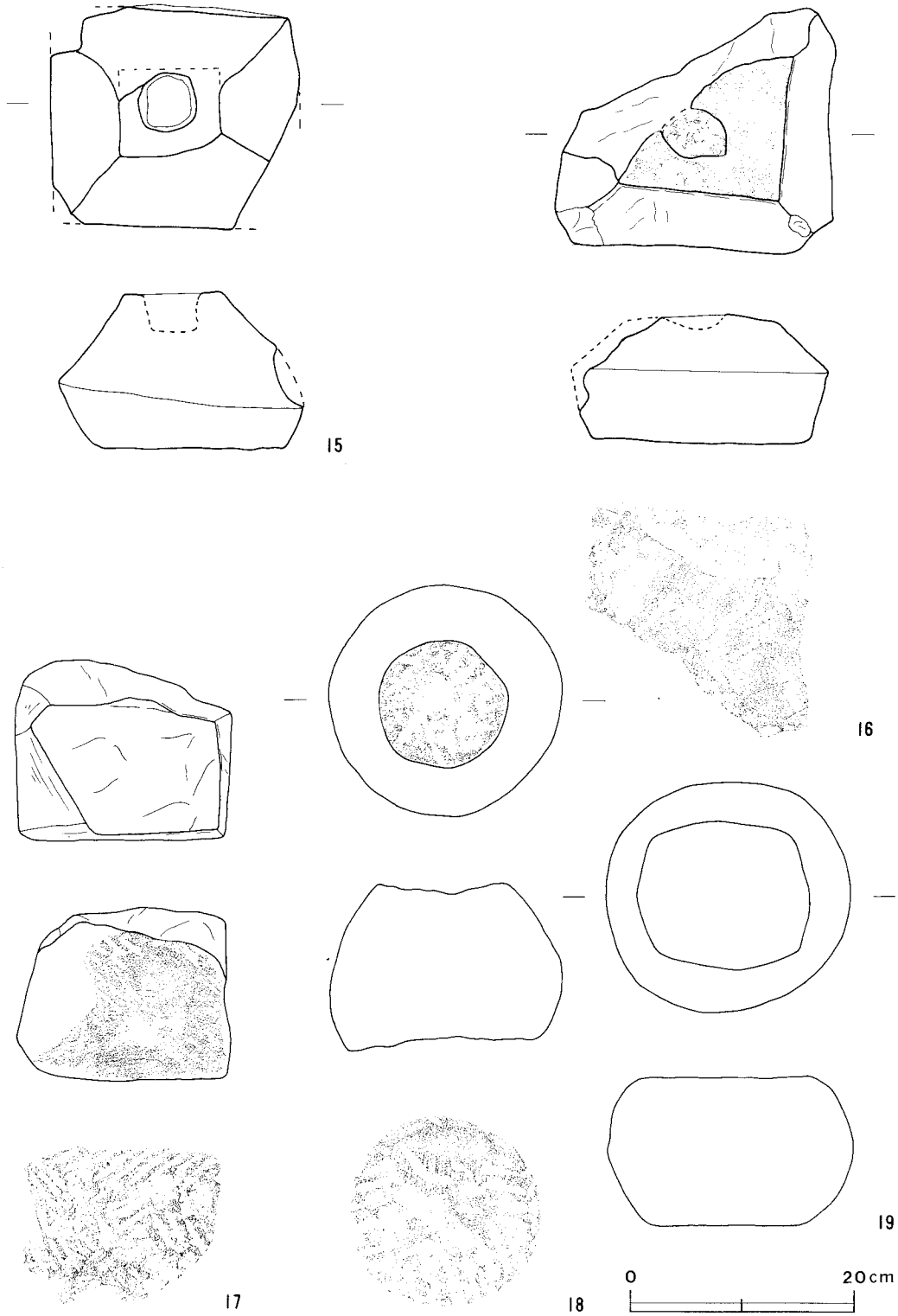
第89図　石製品実測図（五輪塔－１）



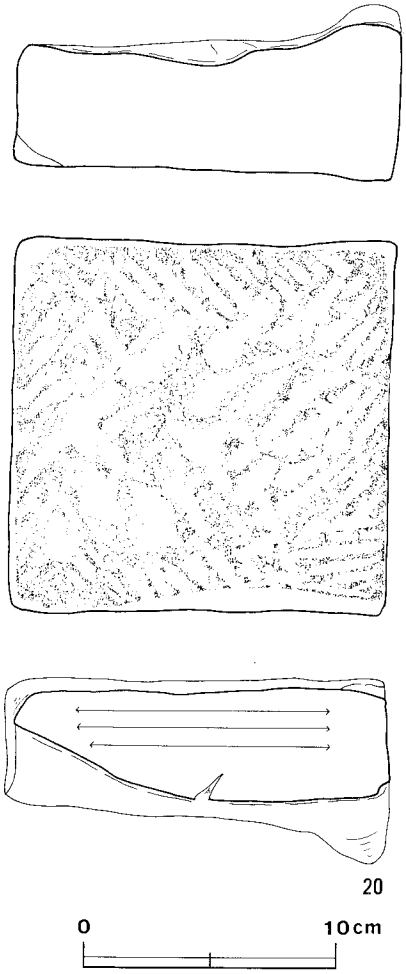
第90図　石製品実測図（五輪塔－２）

表４　石製品一覧表（五輪塔）

図版番号	器種	法量（cm）			石質	出土地点	備考	図版番号	器種	法量（cm）			石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚						最大長	最大幅	最大厚			
第89図 1	空・風・輪	24.2	14.6	14.5	砂　岩	SD-1	Q91	4	空・風・輪	18.9	16.5	16.4	花崗岩	SD-1	Q99
2	〃	19.9	15.2	15.0	花崗岩	SD-1	Q97	5	空・輪	13.9	16.3	14.2	砂　岩	SD-8	Q100
3	〃	19.3	13.9	13.3	〃	SD-1	Q98	6	空・風・輪	13.6	13.1	11.0	〃	SK-753	Q102



第91図　石製品実測図（五輪塔－３）

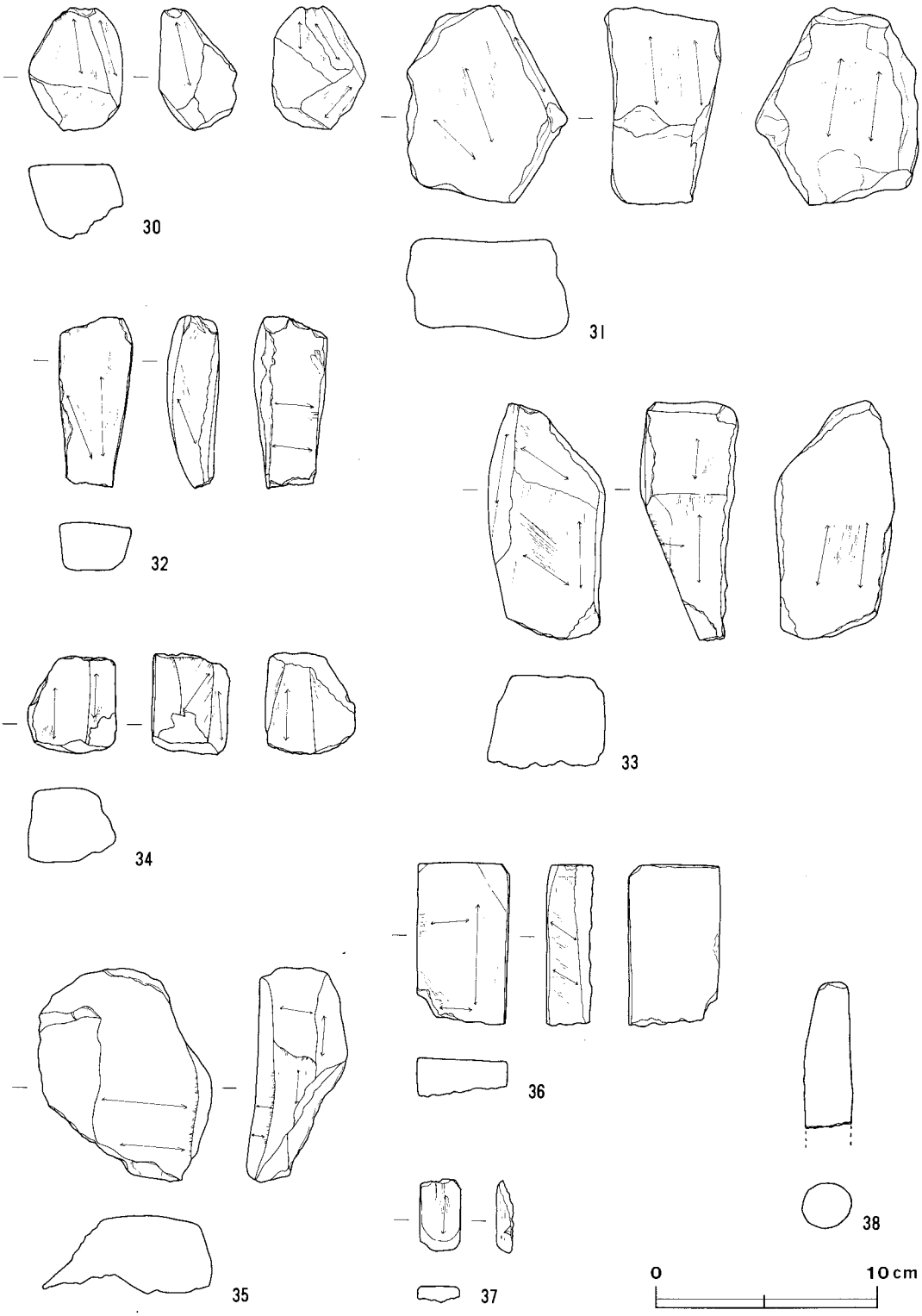


第92図　石製品実測図（五輪塔－４）

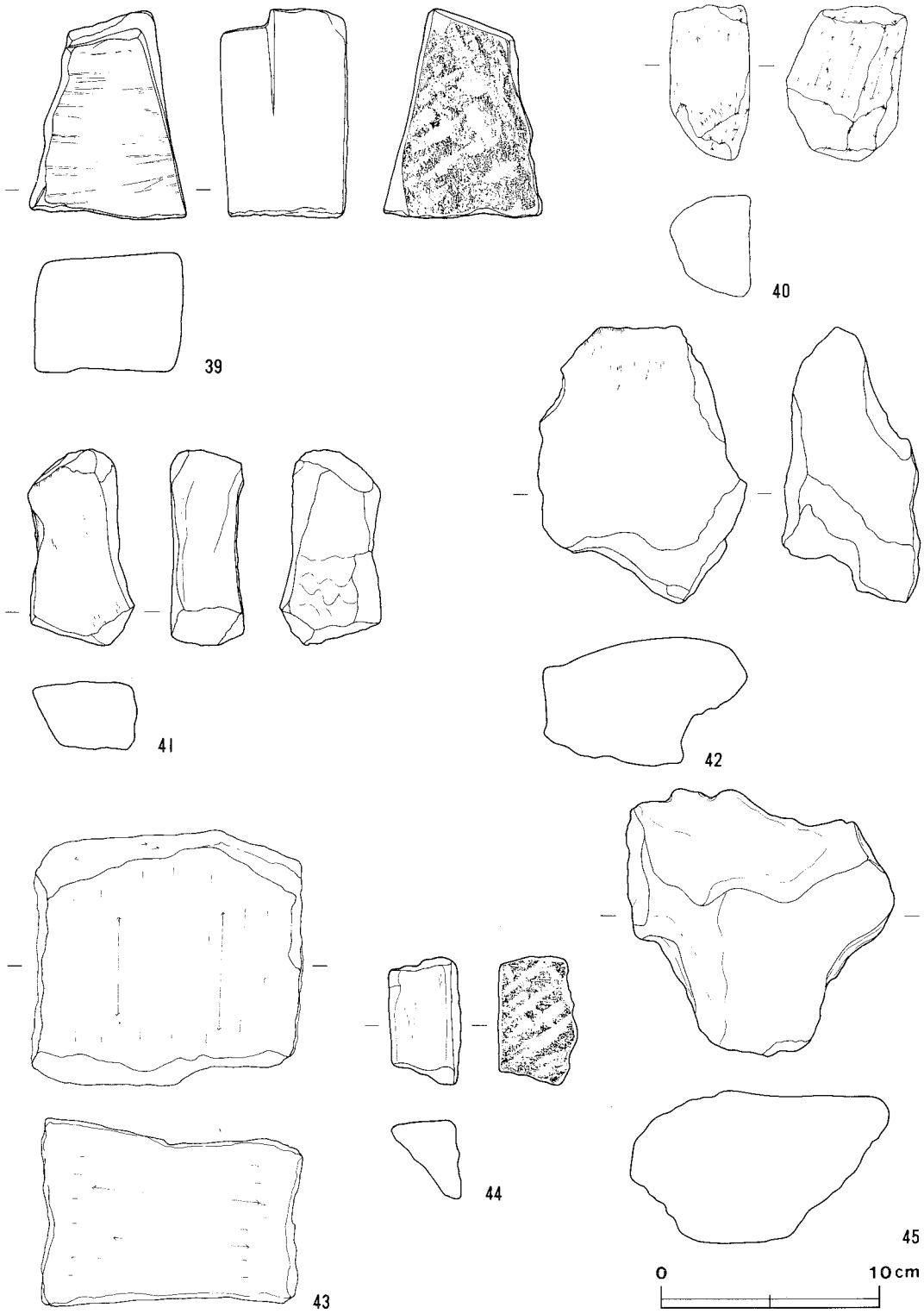
図版番号	器種	法量（cm）			石質	出上地点	備考	図版番号	器種	法量（cm）			石質	出上地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚						最大長	最大幅	最大厚			
7	空・風・輪	12.6	11.8	9.0	砂　岩	表採	Q116	14	火・輪	19.2	20.0	11.2	砂　岩	SD-12	Q109
8	火・輪	21.7	24.2	11.5	花崗岩	SK-688	Q103	第91図 15	〃	20.6	22.6	14.4	〃	SD-1	Q111
第90図 9	〃	22.7	23.5	10.8	〃	SD-1	Q104	16	〃	22.9	25.3	11.9	〃	SD-14	Q110
10	〃	26.3	29.8	10.7	〃	SD-1	Q105	17	水・輪	21.4	21.0	15.3	〃	SD-14	Q112
11	〃	21.1	22.1	8.9	〃	SD-1	Q106	18	地・輪	16.7	19.8	16.1	〃	SD-14	Q115
12	火・輪	25.6	25.9	13.3	〃	SD-1	Q107	19	〃	21.3	21.9	13.7	〃	SD-14	Q113
13	〃	26.7	27.5	15.0	〃	SD-1	Q108	20	〃	15.0	15.3	7.4	砂　岩	SD-12	Q114

第93図　石製品実測図（砥石－１）

第94図　石製品実測図（砥石－２）



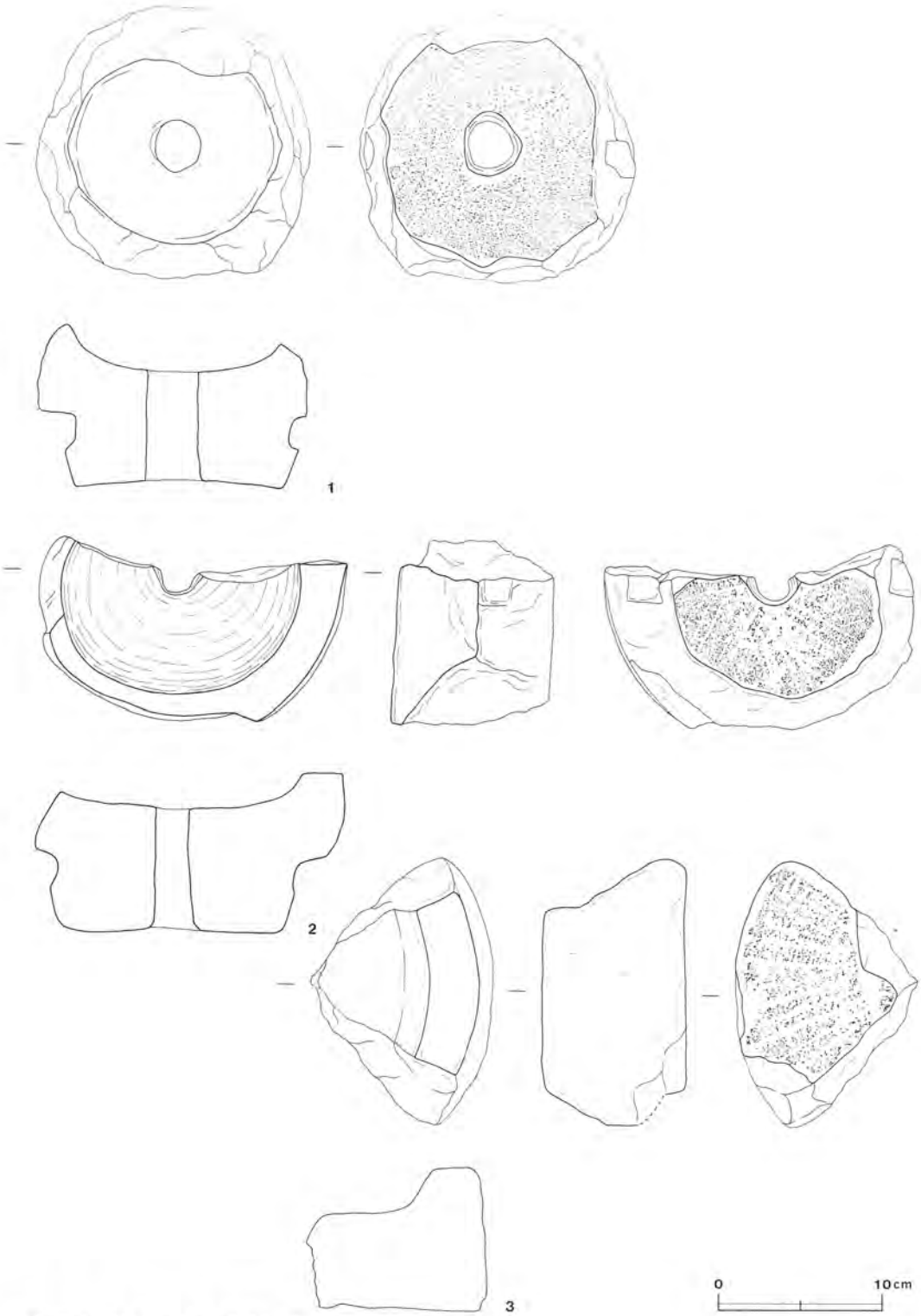
第95図　石製品実測図（砥石－３）



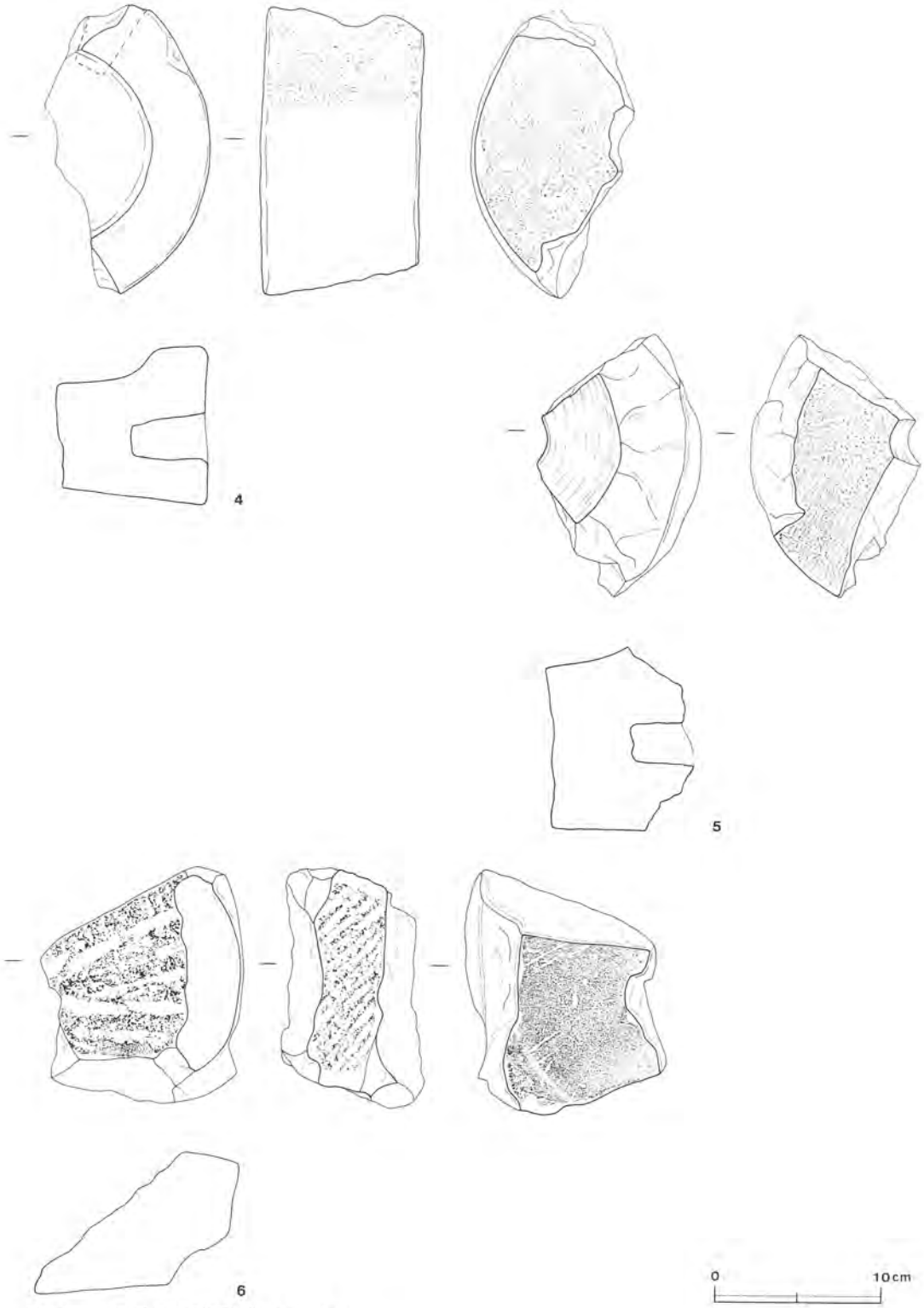
第96図　石製品実測図（砥石－４）

表 5　石製品一覧表（砥石）

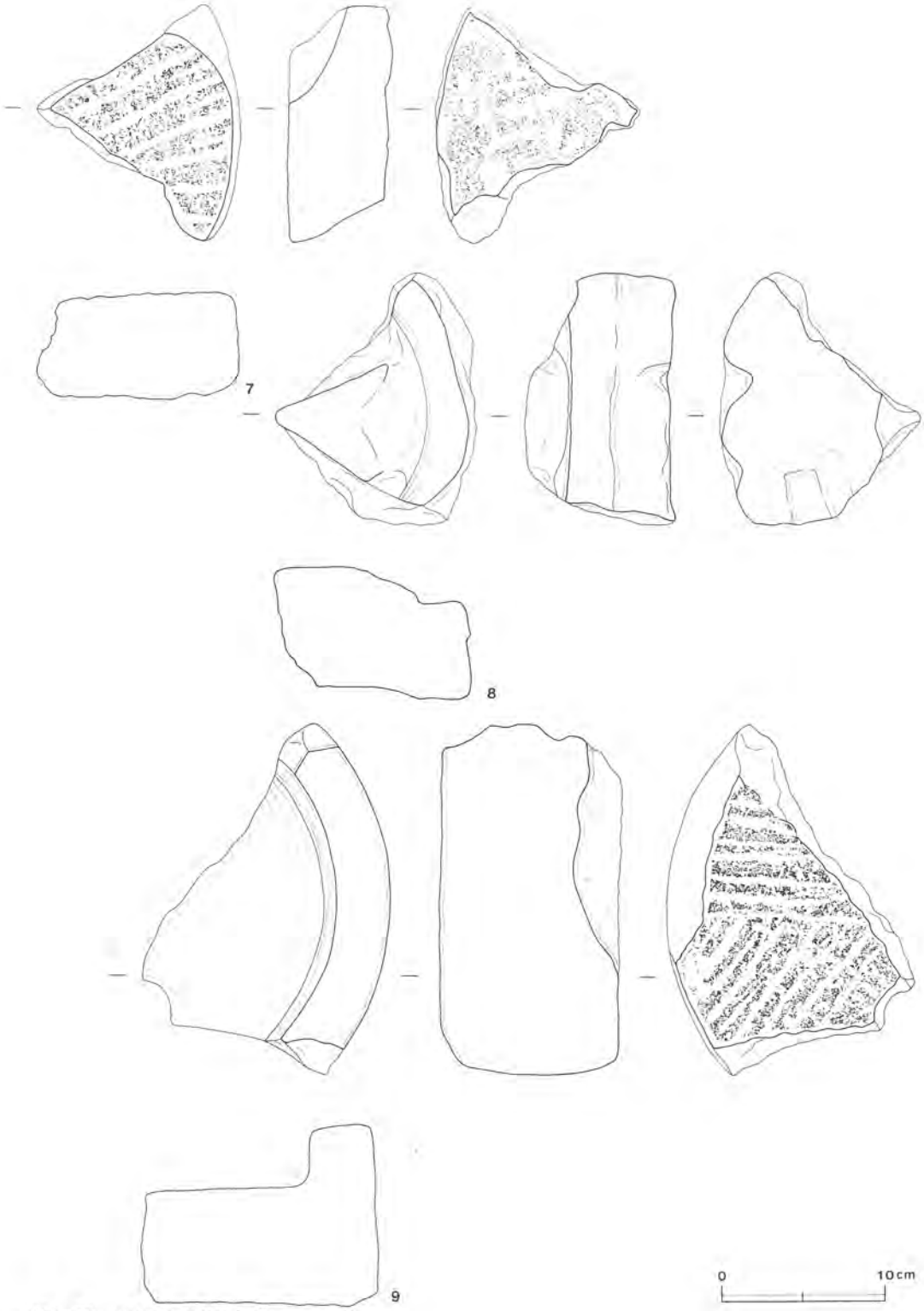
図版番号	器種	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石質	出土地点	備考	
第93図 1	砥石	9.5	3.1	3.1	95.3	凝灰岩	SK-772/839	全面に使用痕が認められる。	Q13
2	〃	7.3	2.3	2.0	36.8	〃	SK-1197	〃	Q26
3	〃	7.4	3.4	2.0	84.0	〃	SK-698	〃	Q 7
4	〃	9.0	3.3	2.4	88.9	〃	SK-707	〃	Q 8
5	〃	6.7	2.5	1.7	28.0	〃	SK-707	〃	Q 9
6	〃	8.7	3.2	2.6	82.6	〃	SK-718	〃	Q10
7	〃	6.9	3.2	0.9	41.4	〃	SK-719	〃	Q11
8	〃	9.0	2.6	2.3	59.5	〃	SK-1168	〃	Q25
9	〃	5.9	3.1	1.9	56.4	〃	グリット	〃	Q44
10	〃	8.1	2.2	1.2	35.3	〃	SK-1014	〃	Q20
11	〃	9.1	3.9	2.0	72.4	〃	SD-12	〃	Q37
12	〃	10.5	5.3	1.4	95.8	頁岩	SD-15	〃	Q34
第94図 13	〃	4.2	3.1	1.2	23.6	凝灰質砂岩	SK-754	〃	Q12
14	〃	3.4	3.0	3.0	26.9	砂岩	表採	〃	Q19
15	〃	4.5	3.3	1.8	38.4	凝灰岩	SK-944	〃	Q17
16	〃	3.5	3.6	3.7	64.2	〃	SK-1021	〃	Q21
17	〃	4.8	3.0	1.7	37.0	〃	SK-1040	〃	Q22
18	〃	3.4	2.4	1.3	18.6	〃	SK-1091	〃	Q24
19	〃	3.4	3.7	3.2	37.0	砂岩	SK-1070	〃	Q23
20	〃	3.3	2.5	1.9	16.4	凝灰岩	SK-1197	〃	Q29
21	〃	4.3	2.7	1.9	27.7	〃	SK-1197	〃	Q27
22	〃	3.0	4.5	1.5	23.8	砂岩	SD-12	〃	Q71
23	〃	4.4	2.6	1.5	28.2	凝灰岩	SD-12	〃	Q32
24	〃	4.1	2.6	3.9	52.7	〃	SD-1	〃	Q36
25	〃	6.9	3.6	1.3	22.5	頁岩	SK-794	〃	Q15
26	〃	7.6	3.0	1.2	28.1	〃	SK-934	〃	Q16
27	〃	4.3	3.3	1.6	30.7	凝灰岩	グリット	〃	Q41
28	〃	6.1	4.0	1.5	53.6	流紋岩	SD-12	〃	Q30
29	〃	7.6	2.8	1.9	46.0	凝灰岩	SK-1197	〃	Q28
第95図 30	〃	5.6	4.3	3.4	74.4	〃	SD-14	〃	Q33
31	〃	9.1	7.3	4.6	405.0	砂岩	SK-775	〃	Q14
32	〃	7.8	3.4	2.3	82.3	流紋岩	グリット	〃	Q42
33	〃	11.0	5.4	4.4	292.9	凝灰岩	SD-12	〃	Q31
34	〃	4.6	4.1	3.5	88.0	〃	表採	〃	Q45
35	〃	9.8	8.1	3.7	307.8	〃	グリット	〃	Q40
36	〃	7.5	4.3	1.9	117.6	砂岩	グリット	〃	Q43
37	〃	3.3	1.9	0.8	7.5	滑岩	グリット	〃	Q74
38	〃	6.7	2.1	2.1	41.1	砂岩	グリット	〃	Q73
第96図 39	〃	9.6	7.2	5.5	525.8	〃	SK-688	石塔の二次転用	Q 6
40	〃	7.2	3.7	4.7	163.6	〃	SK-989	〃	Q18
41	〃	9.1	4.8	3.1	185.0	〃	SD-116	〃	Q39
42	〃	12.8	9.6	5.9	790.3	〃	SD-103	〃	Q38
43	〃	11.7	12.5	8.7	1927.8	〃	SE-9	〃	Q47
44	〃	5.8	3.4	3.6	69.6	〃	表採	〃	Q46
45	〃	12.4	12.3	7.0	1056.5	片麻岩	SD-12	〃	Q70



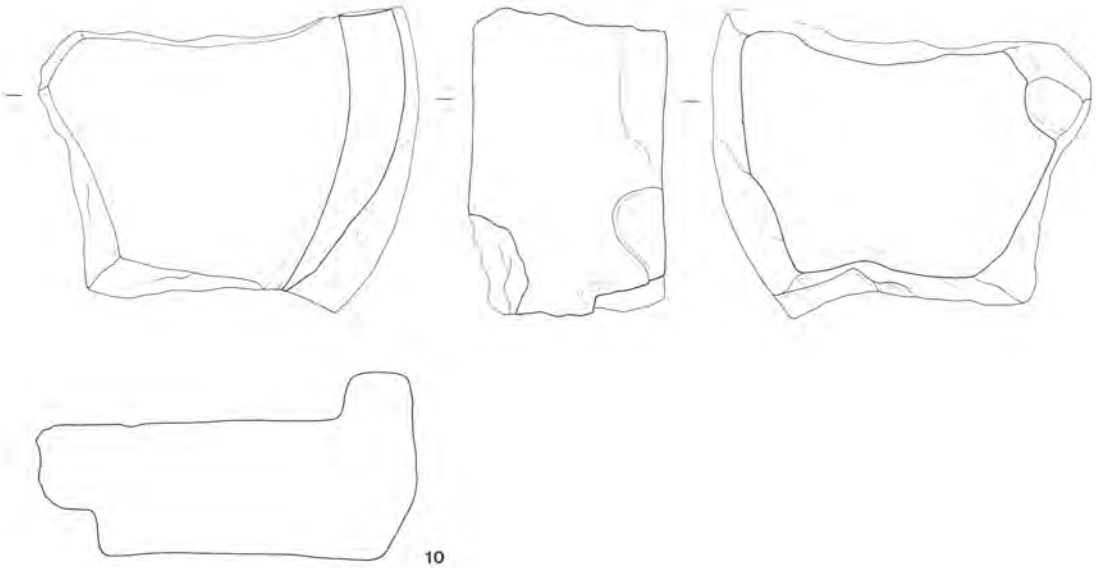
第97図　石製品実測図（石臼－１）

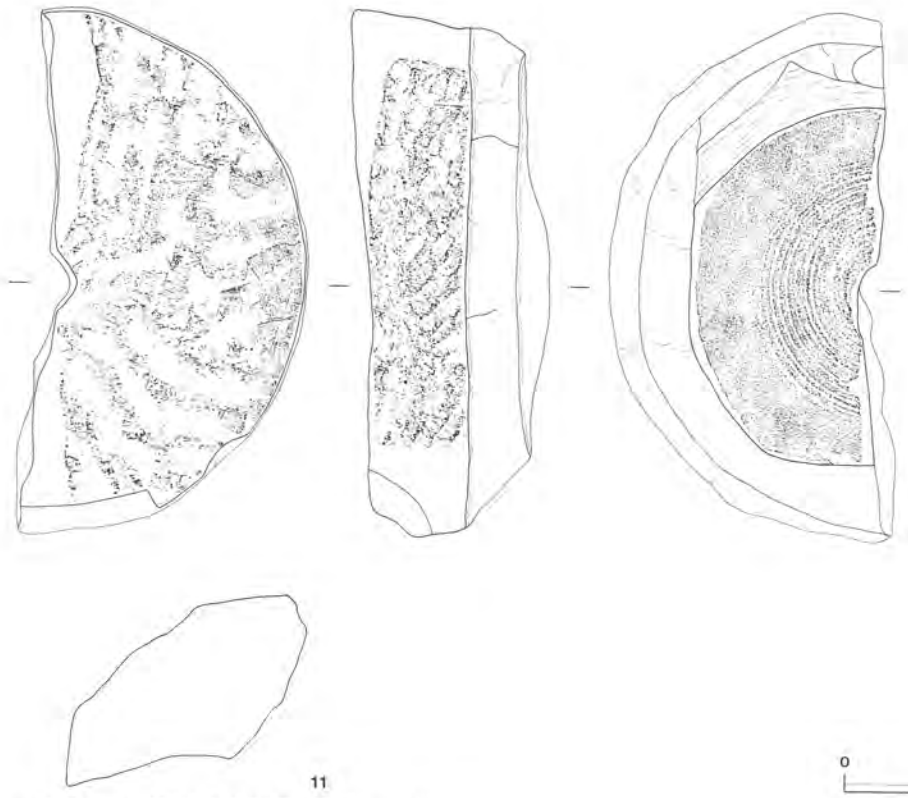


第98図　石製品実測図（石臼－２）

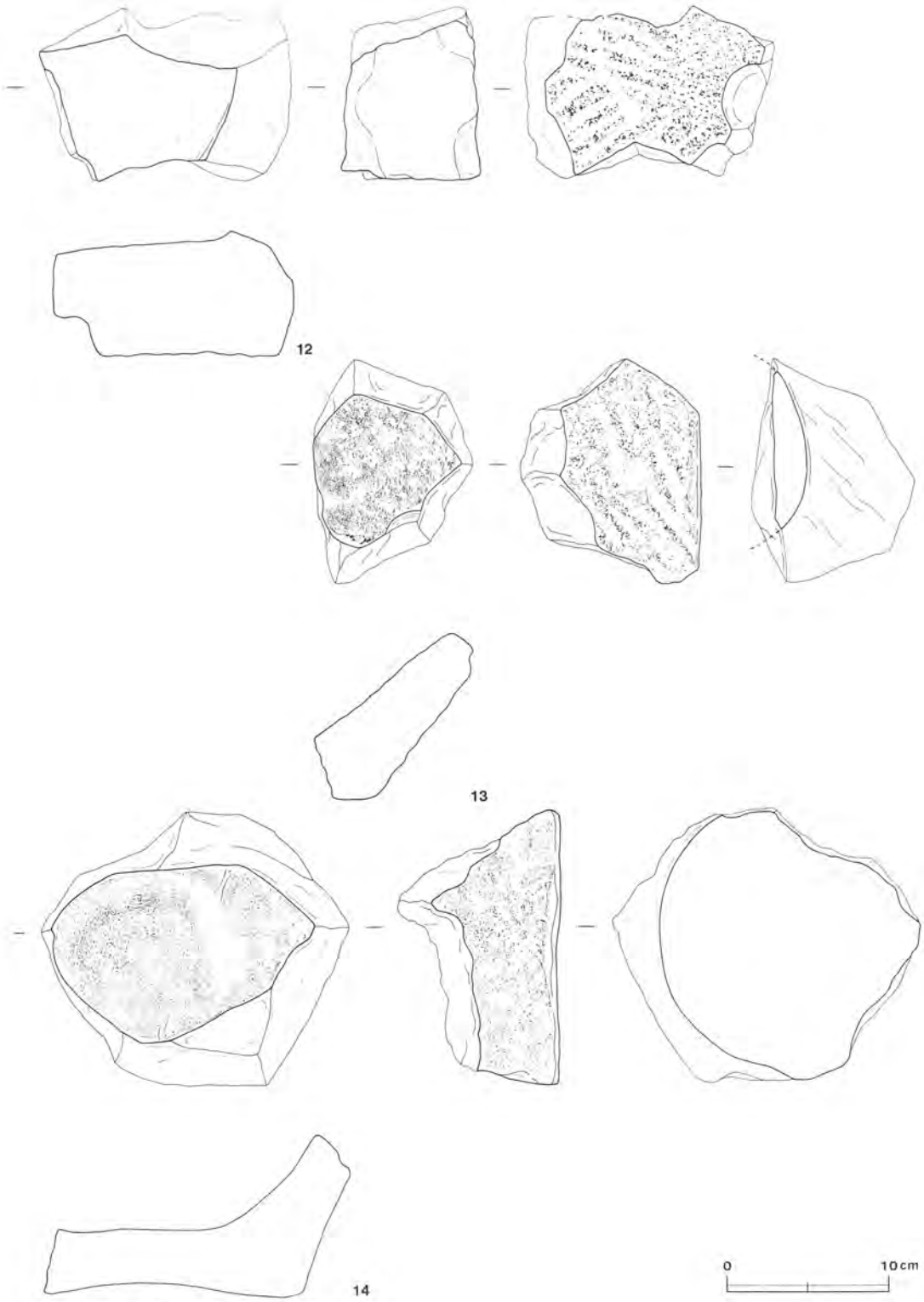


第99図　石製品実測図（石臼－３）

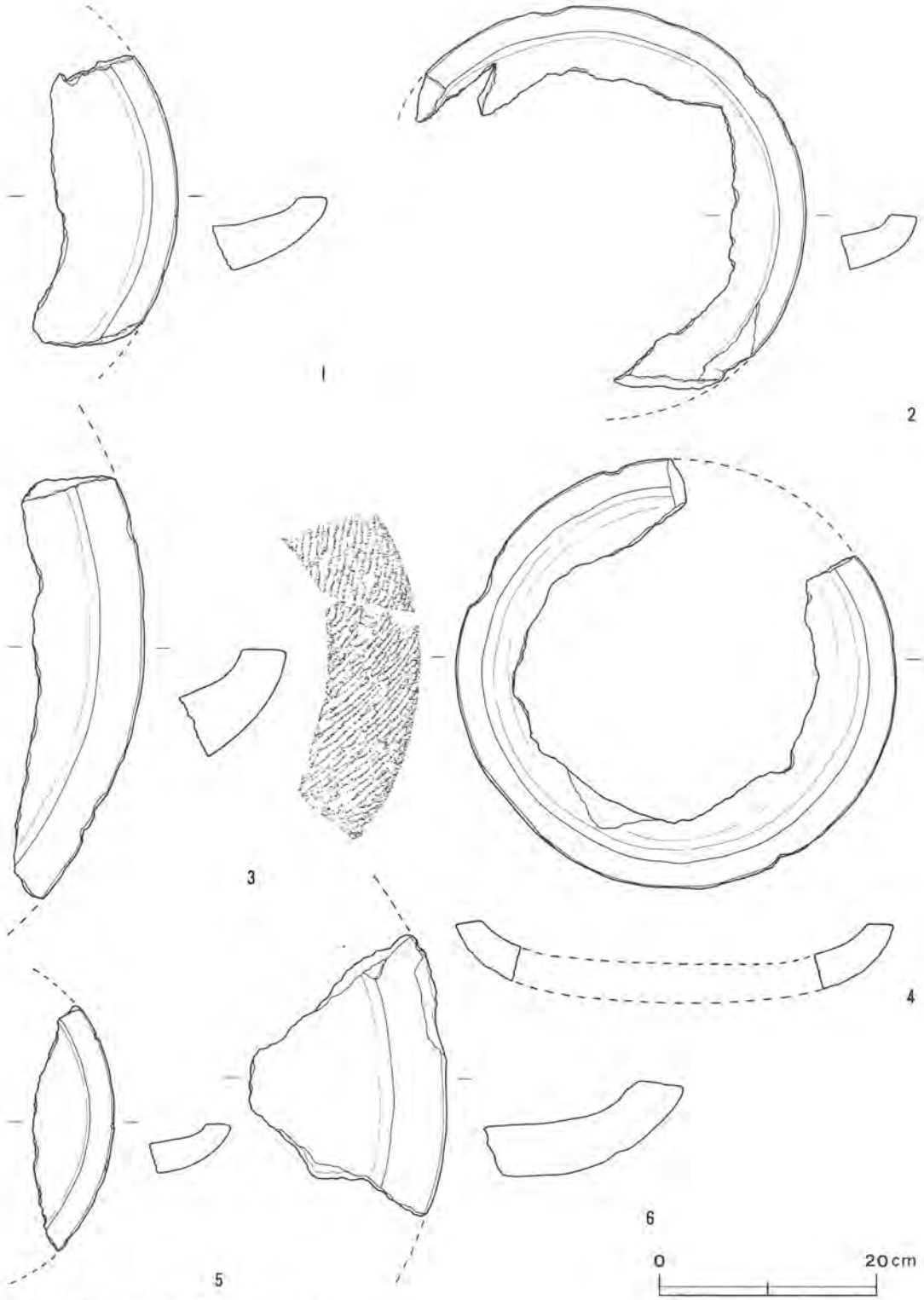




第100図　石製品実測図（石臼－４）



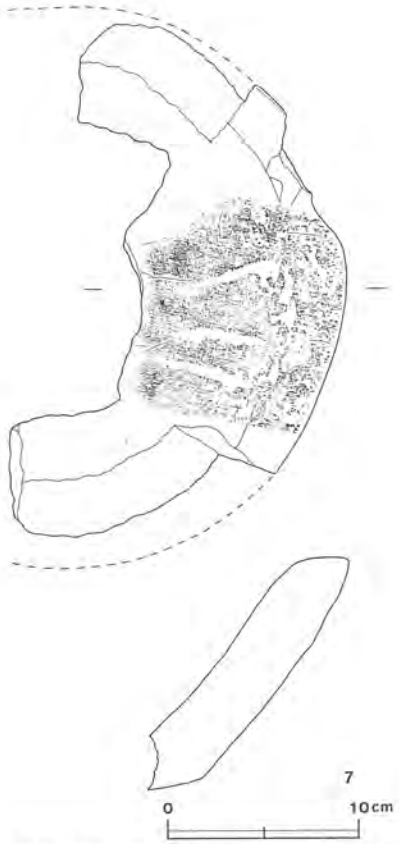
第101図　石製品実測図（石臼－５）



第102図　石製品実測図（石皿）

表 6　石製品一覧表（石臼）

図版番号	器　種	法　量　(cm)			石　質	出土地点	備　　考
		最大長	最大幅	最大高			
第97図 1	茶　挽　臼	16.8	16.7	9.9	安　山　岩	SK-205	Q117
2	〃	直径　19.0		9.7	安　山　岩	SK-874	Q126
3	〃	16.2		8.9	〃	SK-1189	Q119
第98図 4	〃	18.0		10.2	〃	SD-14	Q124
5	〃	16.4		11.4	〃	SD-12	Q122
6	粉　挽　臼	14.8		9.0	砂　　岩	SK-685	Q127
第99図 7	〃	14.6		6.5	安　山　岩	SK-753	Q129
8	〃	15.6		8.1	〃	SD-8	Q132
9	〃	21.7		11.3	〃	SK-728	Q128
第100図 10	〃	16.2		10.0	安　山　岩	SD-1	Q130
11	〃	直径　28.0		10.2	砂　　山	SD-1	Q131
第101図 12	〃	10.8		7.8	安　山　岩	SD-1	Q134
13	〃	13.9		10.4	砂　　岩	SD-78	Q135
14	〃	17.2		10.0	〃	表採	Q136



第103図　石製品実測図（石擂鉢）

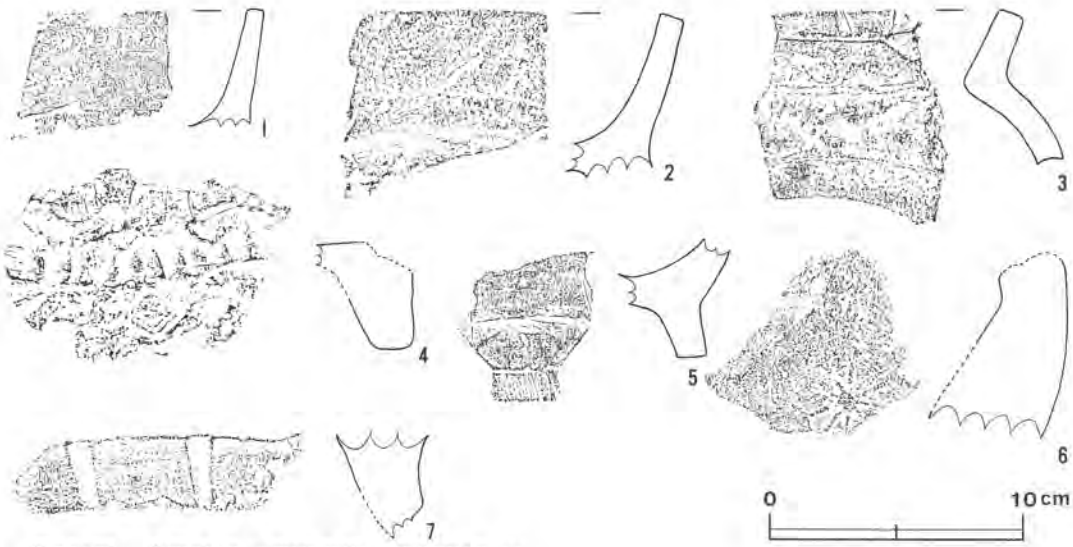
表7　石製品一覧表（石皿・石擂鉢）

図版番号	器種	法量 (cm)			石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大高			
第102図 1	石皿	27.3		7.0	安山岩	SK-731	Q78
2	〃	直径 39.2		5.0	粘板岩	SK-772/850	Q79
3	〃	19.7		5.0	安山岩	SK-1180	Q80
4	〃	直径 39.9		6.0	砂岩	SK-1214	Q82
5	〃	22.7		4.7	安山岩	SK-1214	Q81
6	〃	13.2		4.5	〃	SD-1	Q83
第103図 7	石擂鉢	直径 27.0		12.1	砂岩	SD-12	Q84

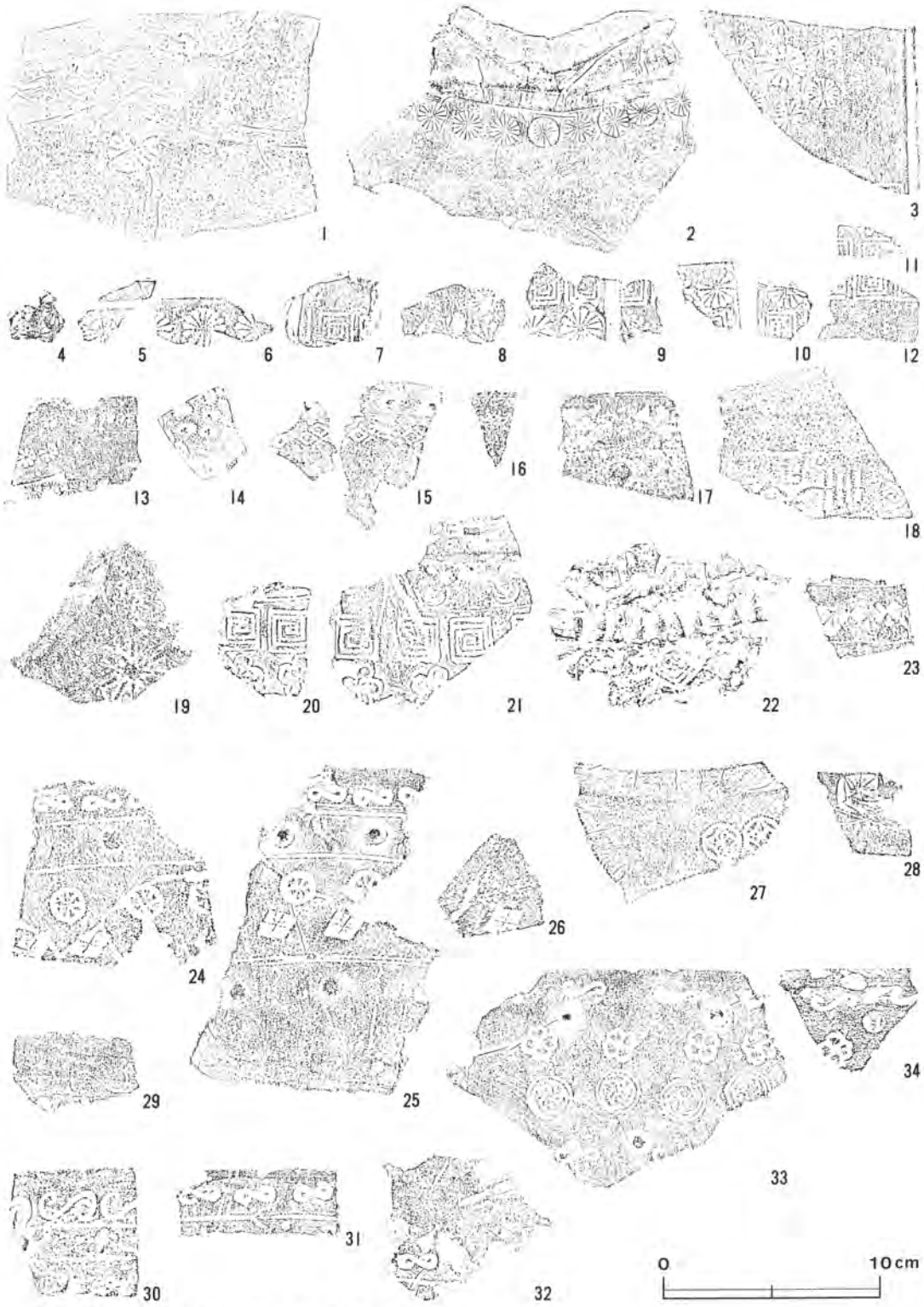
押印文様（第104図1～7　105・106図1～44）

本跡から瓦質の土器片が出土している。いずれも手焙りや火鉢と呼ばれている土器であり，押印文様をもつものが51点出土している。　押印文様は，家紋や文字・草花などの文様を表現し，これら51点には，印花文・三つ巴・菱形文・格子目文・S字文・梅花文・菊花文などの文様がそれぞれ陶印または，木印でスタンプされている。

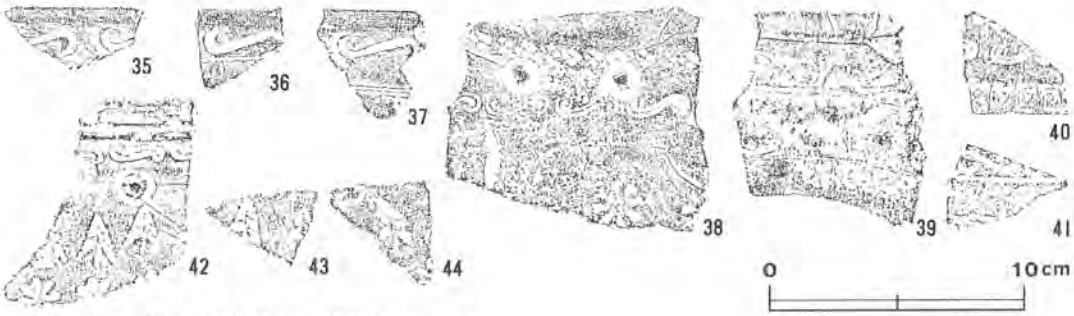
押印文様は，鎌倉時代末から室町時代にかけて装飾的なものとして押印されたものである。



第104図　遺跡内出土押印文様土器拓影図（1）



第105図　遺跡内出土押印文様土器拓影図（2）



第106図　遺跡内出土押印文様拓影図（3）

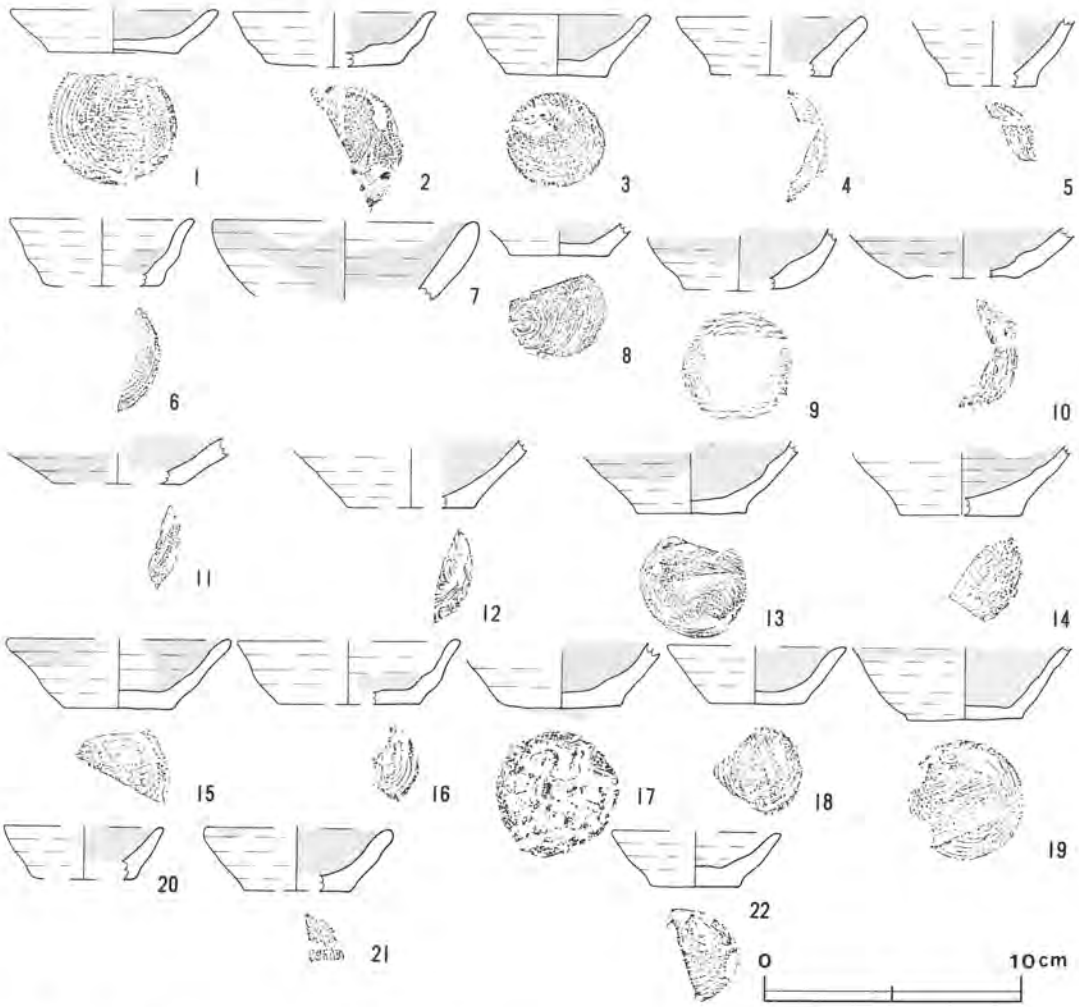
⑽　鋳銅関係遺物（第107図）

遺跡内からは鋳銅関係と思われる遺物が22点出土した。坩堝及び鋳鉄・鋳銅に際して出る鉄滓，銅滓及び鞴羽口があるが，土坑・堀の覆土から鉄滓・羽口が出土している。

1～22は，坩堝破片である。坩堝は一様に土師質土器の皿・椀を使用し，内に黒色・赤錆の溶解物が付着している。また，部分的に緑青の噴出も見られ，これらは鋳銅容器として使用されたことも考えられる。

出土土器観察表（坩堝）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	皿 （土師質土器）	A（8.3） B　1.6 C　5.2	平底で，底部外面はやや窪み，体部はほぼ直線的に開く。内面に，黒色・赤錆の溶解物が付着。	水挽き 外面横ナデ 底部静止糸切り	砂粒 にぶい橙色	P241 SI-49 坩堝
2	皿 （土師質土器）	A（8.0） B　2.2 C（5.4）	平底で，体部は内反気味に立ち上がり，口縁部は外反する。内面に，黒色の溶解物が付着。	水挽き 外面横ナデ 底部静止糸切り	砂粒 灰褐色	P242 SK-875 坩堝
3	皿 （土師質土器）	A　7.2 B　2.4 C　4.0	平底で，体部は内反気味に立ち上がる。内・外面に，黒色・赤錆の溶解物が付着。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色	P243 SK-979 坩堝
4	皿 （土師質土器）	A（7.6） B　2.2 C（4.8）	体部は，外反気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。内面に，黒色溶解物が付着。	水挽き 外面横ナデ 底部静止糸切り	砂粒 灰白色	P244 SK-979 坩堝
5	皿 （土師質土器）	A（6.4） B　2.6 C（3.6）	平底で，底部外面はやや窪み，体部はほぼ直線的に開く。内面に，黒色・赤錆の溶解物が付着。	水挽き 外面横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 明褐灰色	P250 SK-979 坩堝
6	皿 （土師質土器）	A（7.4） B　2.7 C（4.8）	体部は，内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。内面に，黒色の溶解物が付着。	水挽き 内・外面横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 明褐灰色	P246 SK-979 坩堝
7	椀 （土師質土器）	A 10.4 B　3.1 C	体部は，内彎気味に立ち上がり，口唇端部は丸くなっている。内・外面に，黒色の溶解物が付着。	水挽き 内・外面横ナデ	砂粒 黄灰色	P251 SK-979 坩堝

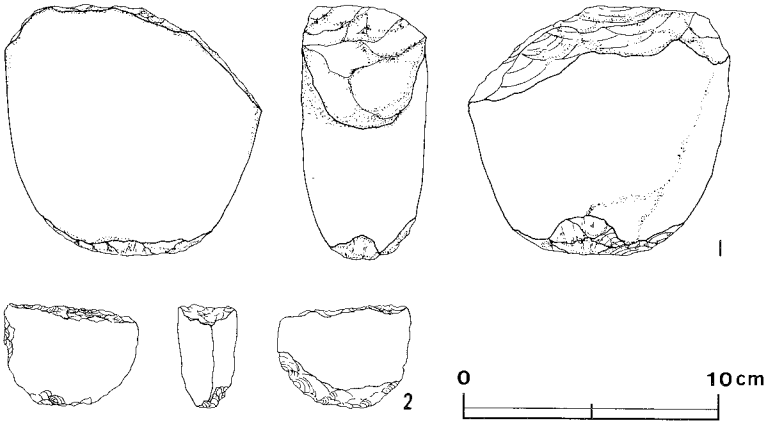


第107図　遺跡内出土遺物実測図（坩堝）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
8	Ⅲ (土師質土器)	A B 1.0 C 4.0	平底で，体部は外反気味に立ち上がる。内面に，黒色・赤錆・緑青の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 明褐灰色	P248 SK-979 坩堝
9	Ⅲ (土師質土器)	A B 2.2 C(4.4)	平底で，体部は内彎気味に立ち上がる。内・外面に，黒色・赤錆・緑青の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 灰白色	P253 SK-979 坩堝
10	Ⅲ (土師質土器)	A B 1.7 C(4.4)	体部は，外反気味に立ち上がる。内・外面に，黒色・赤錆・緑青の溶解物が付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 にぶい褐色	P254 SK-979 坩堝

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
11	皿 (土師質土器)	A B 2.3 C(5.0)	平底で，内彎気味に立ち上がる。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 明褐灰色	P247 SK-979 坩堝
12	皿 (土師質土器)	A B 2.5 C 4.4	平底で，底部外面まやや窪み，体部はほぼ直線的に開く。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 明褐灰色	P245 SK-979 坩堝
13	皿 (土師質土器)	A B 2.5 C(4.8)	平底で，底部外面はやや窪み，体部は外反気味に開く。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色	P249 SK-979 坩堝
14	皿 (土師質土器)	A(9.0) B 2.8 C(4.2)	平底で，体部は内彎気味に開く。内・外面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 灰白色	P255 SK-1010 坩堝
15	皿 (土師質土器)	A(8.8) B 2.5 C(5.6)	平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 明褐灰色	P256 SK-1010 坩堝
16	皿 (土師質土器)	A B 2.2 C 4.8	平底で，底部外面はやや窪む。体部は内彎気味に開く。内・外面に，黒色の溶解物付着。	水挽き 横ナデ	砂粒 灰白色	P257 SK-1010 坩堝
17	皿 (土師質土器)	A(7.2) B 2.3 C 3.8	平底で，体部は外反気味に立ち上がる。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色	P258 SK-1014 坩堝
18	皿 (土師質土器)	A B 2.9 C 5.5	平底で，底面外面はやや窪む。体部は直線的に開く。内・外面に，黒色の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 灰褐色	P259 SK-1040 坩堝
19	皿 (土師質土器)	A(6.4) B 2.1 C(4.0)	平底で，体部は外反気味に立ち上がる。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ	砂粒 浅黄橙色	P260 SK-1151 坩堝
20	皿 (土師質土器)	A(6.8) B 2.2 C(3.6)	平底で，底部外面はやや窪む。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。内・外面に黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色	P261 SE-7 坩堝
21	皿 (土師質土器)	A(7.4) B 2.5 C(4.2)	平底で，底池外面はやや窪む。体部は内彎気味に立ち上がり，切縁部は外反する。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色	P262 表採 坩堝
22	皿 (土師質土器)	A B 2.5 C(4.8)	平底で，底部外面はやや窪み，体部は外反気味に開く。内面に，黒色・赤錆の溶解物付着。	水挽き 横ナデ 底部回転糸切り	砂粒 浅黄橙色	P249 SK-979 坩堝

第108図　遺跡内出土石器実測図（1）



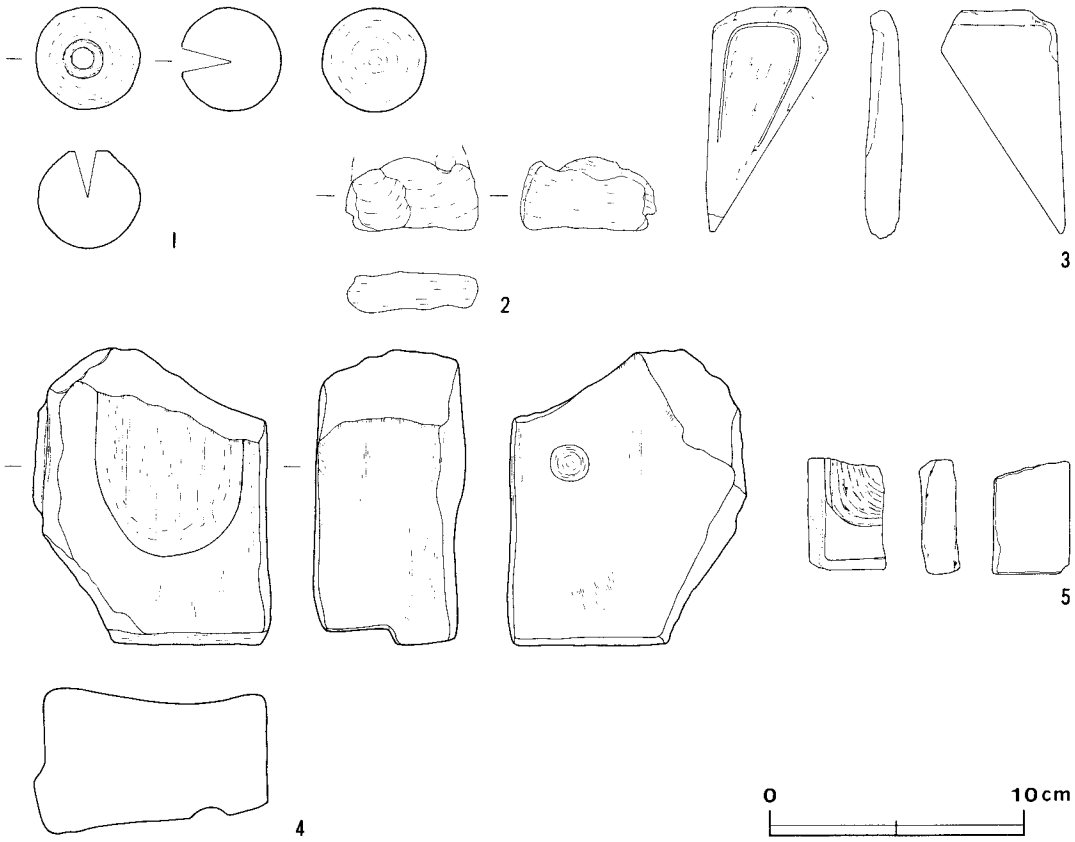
第109図　遺跡内出土石器実測図（2）

表 8　石器一覧表

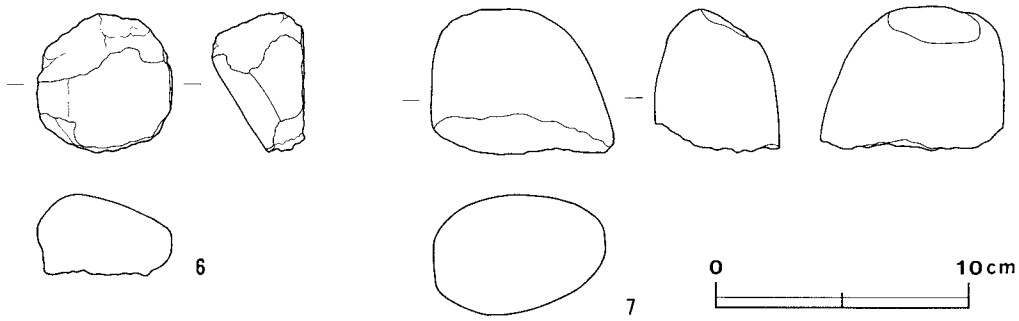
図版番号	器種	法量（cm）			重量(g)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大高				
第108図 1	敲石	10.0	10.2	4.5	721.0	安山岩	SD-14	Q58
2	石斧	4.1	5.4	2.3	59.2	頁岩	SD-12	Q54
第109図 1	〃	7.7	3.7	1.2	61.5	チャート	SK-793	Q53
2	〃	3.8	2.6	1.0	17.9	砂岩	SK-685	Q52
第108図 3	磨石	8.4	7.7	5.4	504.0	安山岩	SE-8	Q61
4	〃	7.4	8.4	3.6	304.5	〃	SD-1	Q59
5	敲石	9.4	6.3	3.2	300.4	砂岩	SD-12	Q57
6	磨石	6.4	6.2	3.9	250.8	安山岩	SD-1	Q60
7	敲石	9.5	3.1	3.1	95.3	凝灰岩	SK-943	Q56

表 9　石製品一覧表

図版番号	器種	法量（cm）			重量(g)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大高				
第110図 1	石玉（？）	4.0	4.1	4.0	77.8	安山岩	SK-794	Q65
2	浮子	2.9	5.3	1.7	4.4	軽岩	SK-770	Q63
3	硯	9.0	4.7	1.5	60.5	千枚岩	SD-15	Q76
4	〃	11.8	9.4	5.8	882.7	砂岩	環濠	Q35
5	〃	4.5	3.2	1.6	32.2	粘板岩	SD-17	Q77
第111図 6	投石	5.5	5.4	3.3	124.7	花崗岩	SD-17	Q72
7	〃	5.8	7.2	4.8	240.7	流紋岩	SD-14	Q66



第110図　石製品実測図（1）



第111図　石製品実測図（2）

第6節　そ　の　他

1　土　　壙

屋代B遺跡の調査の結果，昭和58年度から昭和61年度に検出調査した土坑は1330基である。これらの土坑の大半は，屋代城館跡の内・外郭部に位置し，屋代B遺跡 I[注1]・II[注2]の報文の中で，「墓壙及び墓壙と思われる土坑」として分類された土坑の要素と共通するものや，粘土貼りの土坑，地下式壙等である。

昭和61年度に調査した土坑の数は，652基（土坑としてとらえた数は652基であるが，形態規模等から判断して571番は欠番とした）である。

土坑については，調査の結果をふまえて，以下の（ア）～(オ）の様な特異な形態・遺物を出土するものを墓壙としてとらえた。

（ア）平面形状が方形または長方形を基本とする。

（イ）出入口と考えられる張り出しを有する。

（ウ）向い合った壁下に各々ピットを有する。

（エ）坑底または覆土中から多量の炭化材・炭化米・豆類・灰・焼土が出土する。

（オ）坑底または覆土中から銭・仏花器・土師質土器が出土する。

また，調査した多数の土坑の覆土から，供献物と考えられる仏花器・土師質土器（灯明皿）・銭等が出土し，第1・4・5・6号堀・陥し穴（竪堀）の覆土・底面からは，投げ込まれたと思われる五輪塔・宝篋印塔が出土している。これらの点から，各堀の内側に構築された土坑の多くは，石塔を伴った墓壙として性格づけが可能と考えられる。

本年度の調査区から前述した（ア）～(オ）の特質を有し，覆土が人為的堆積状況を示し，なおかつ土坑内から，土師質土器（灯明皿等）・陶磁器・銭等の遺物が出土し，中世または，中世以降の「墓壙及び墓壙と思われる土坑」「墓壙の可能性のある土坑」と判断されたものについて取り上げた。なお，墓壙としての判断が困難なものや，他の土坑については，第6節の(3)で扱った。

記載に当っては，特徴的なものを抽出して文章で解説し，他は一覧表にまとめた。出土遺物については、種類ごとに掲載した。また，平面図の掲載に当っては土坑の分類が異なるものであっても，重複等により切り離すことが不可能なものや，単独で掲載不可能なものは一括掲載した。

注

1　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「屋代B遺跡 I」茨城県教育財団　昭和61年

2　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15「屋代B遺跡II」茨城県教育財団　昭和62年

(1) 墓壙及び墓壙と思われる土坑（第114～117図）

第685号土坑（第114図）

本跡は，調査区G3h_1区を中心に確認された。

平面形は，長軸2.5m，短軸2.15mの隅丸方形を呈し，長軸方向は N-60°-Wを指している。壁は，下位から垂直に立ち上がり，壁高は98cmを測る。底面は，平坦で硬く締っている。ピットは検出されていない。

覆土は，人為的に埋め戻された様相を呈しており，壁下や中央部に黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。覆土中には，ローム粒子を多量に含み，ハードロームブロック・炭化物・炭化粒子・粘土ブロックが含まれている。

遺物は，覆土中から，石塔（五輪塔）3点，内耳形土器・注口土器が出土している。

第690号土坑（第114図）

本跡は，調査区G3j_1区を中心に確認された。

平面形は，長軸2.90m，短軸2.0mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-61°-Wを指している。壁は，下位から垂直に立ち上がり，壁高は147cmを測る。底面は，平坦で硬く締まっている。

覆土は，下層から中層は人為的に埋め戻された様相を呈し，明褐色・黒褐色・極暗褐色土が堆積し，覆土中には，ハードロームブロック・炭化粒子・木炭・焼土粒子が含まれている。

遺物は，覆土中から，石塔（五輪塔）・土師質土器片・釘が出土している。

第693号土坑（第114図）

本跡は，調査区G3e_4区を中心に確認された。

平面形は，長軸3.0m，短軸1.9mの長方形を呈し，長軸方向はN-59°-Wを指している。壁は，下位から垂直に立ち上がり，壁高は81cmを測る。底面は，平担で硬く締まっている。

覆土は，全体に人為的に埋め戻された様相を呈し，褐色・暗褐色・黒褐色土が堆積し，覆土中には，ハードロームブロック・炭化粒子・木炭・焼土粒子が全体に含まれている。

遺物は，覆土中から，土師質土器片が出土している。

第697号土坑（第114図）

本跡は，調査区G3f_5区を中心に確認され，北東側はピットとの重複がみられる。

平面形は，長軸2.95m，短軸は2.4mの隅丸方形を呈し，長軸方向は，N-58°-Wを指している。

壁は，下位から垂直に立ち上がり，壁高は86cmを測る。底面は，やや凸凹状を呈するが，硬く締っている。

覆土は，下層から中層は人為的に埋め戻された様相を呈し，黒褐色・極暗褐色土が堆積し，覆土中には，ハードロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・炭化米・豆類が含まれている。

遺物は，坑底より六器（銅製）・石塔片（五輪塔）・土師質土器（灯明皿）が出土している。

第703号土坑（第112図）

弥生時代の竪穴住居跡（第46号住居跡）の床面精査の段階で，床面に掘り込みが確認されたため土坑として調査を実施した。

本跡は，第46号住居跡の埋没後に構築されたが，住居跡調査の段階では土坑の掘り込みは確認できなかった。上部で検出ではなかったのは，住居跡の覆土が黒色土であったためである。したがって，土坑の掘り方などの検出は不可能であった。

覆土は，上層より下層迄，黒色・黒褐色土が堆積し，底面には，炭化粒子・焼土粒子とともに炭化米・豆類が含まれている。

第112図　第703号土坑実測図

遺物は，底面より和鏡（第113図）が出土している。和鏡は，薄手で作りが良く，鏡背文様も鮮明である。直径11.1cm，内区径7.5cm，鈕座径1.2cm，縁高0.7cm，縁幅0.3cm，外区厚0.2cmである。縁断面は直角式の細縁で，菊座鈕をもつ。内・外区は浅い細線の単圏によって界される。鏡背文様は籬に一対の雀を配した「籬菊双雀鏡」である。時期は，鎌倉期後半と思われる。

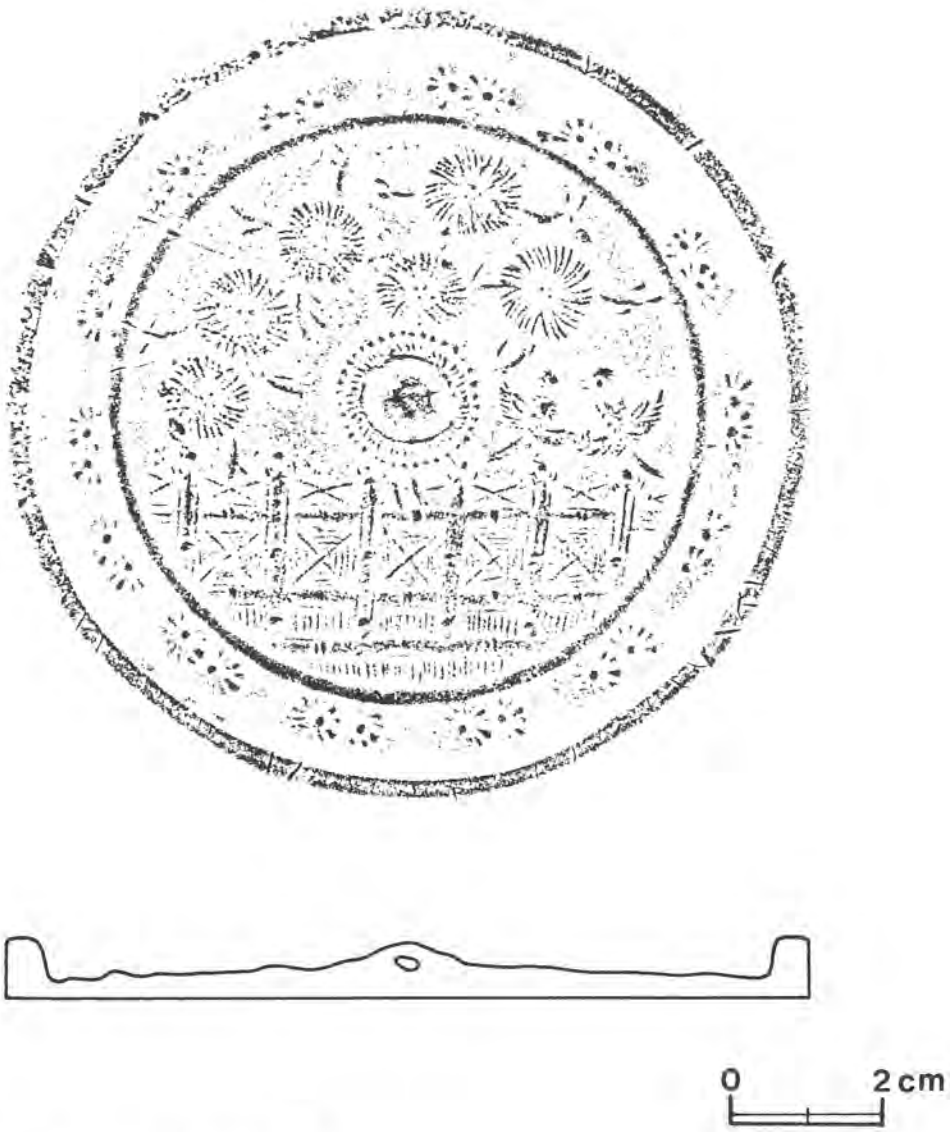
第1214号土坑（第117図）

本跡は，調査区G5d_1区を中心に確認された。

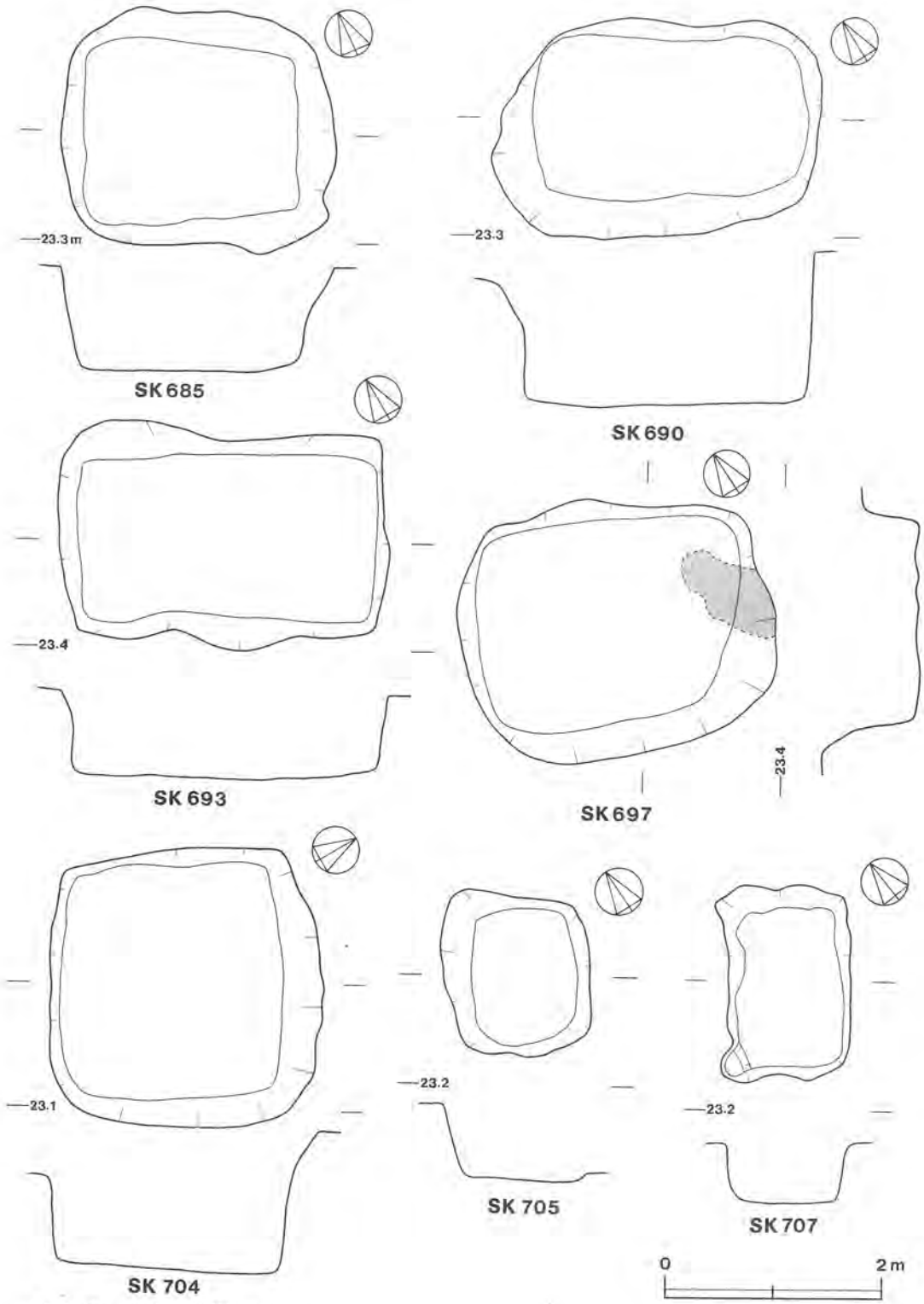
平面形は，長軸2.35m，短軸1.95mの隅丸方形を呈し，長軸方向は北を指している。壁は，下位から垂直に立ち上がり，壁高は北側で50cm，南側で30cmを測る。底面はやや凸凹状を呈しているが締まっている。

覆土は，極暗褐色・暗褐色土が堆積し，覆土中には，ハードロームブロック・炭化粒子・炭化物（木炭）・焼土粒子・灰が全体に含まれている。

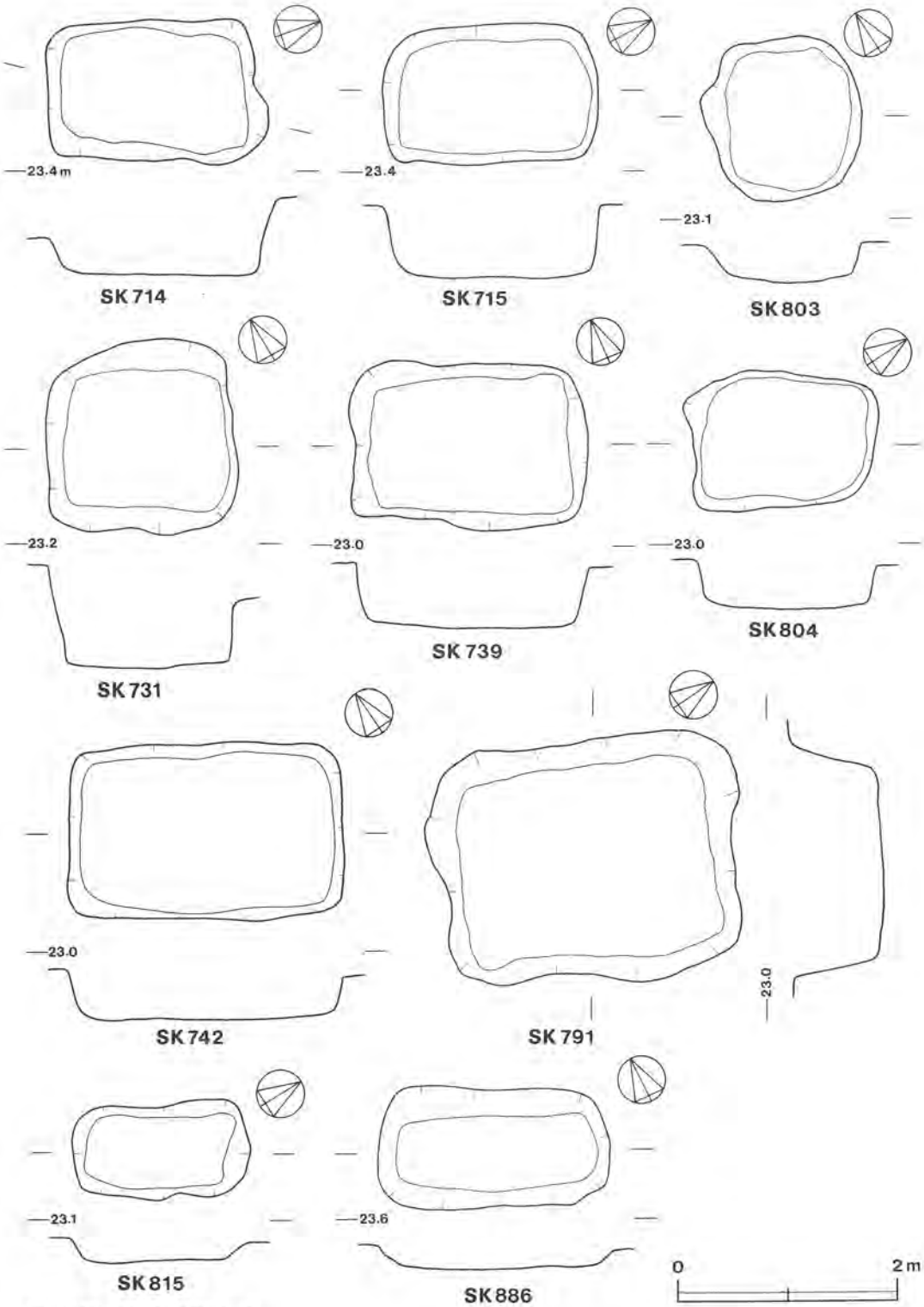
遺物は，覆土中から土師質土器が出土している。



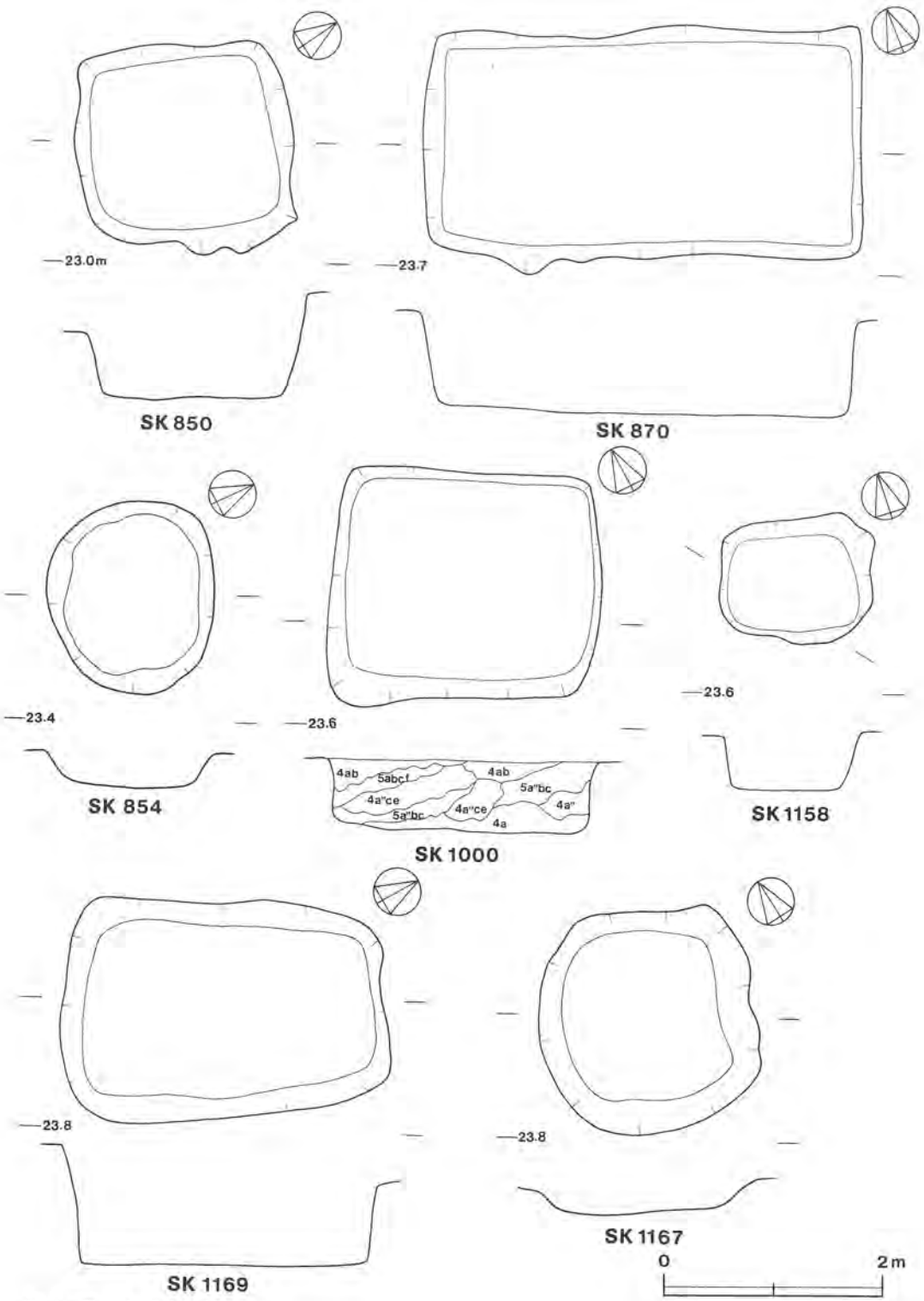
第113図　第703号土坑出土　和鏡拓影図



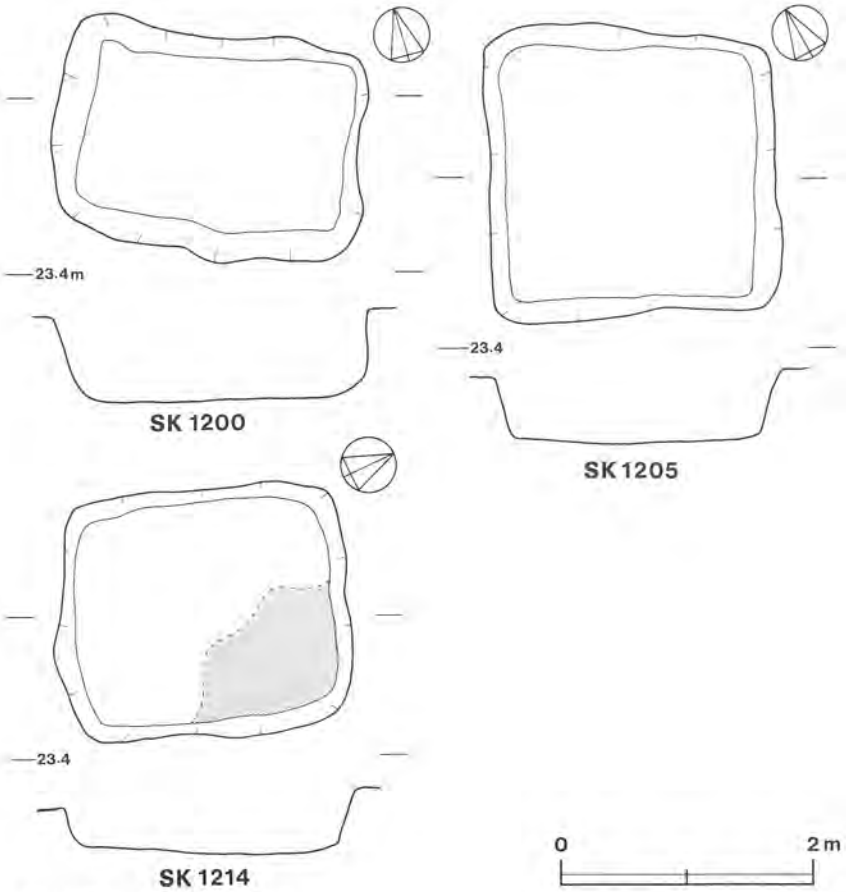
第114図　土坑実測図（1）



第115図　土坑実測図（2）



第116図　土坑実測図（3）



第117図　土坑実測図 (4)

表10　土壙一覧表(1)　墓壙及び墓壙と思われる土坑

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
704	$H4c_5$	N-61°-W	隅丸方形	2.59×2.52	0.83	I	1	N	鉄製品	
705	$H4b_3$	N-31°-E	隅丸方形	1.50×1.35	0.65	I	1	A		
707	$G3g_3$	N-36°-E	隅丸長方形	1.80×1.10	0.50	I	1	N	砥石（石塔転用）	
714	$G2g_6$	N-27°-E	隅丸長方形	1.90×1.30	0.70	II	1	N	銅製品（足金物） 鉄製品(矢の先・刀子)	
715	$G3c_3$	N-27°-E	隅丸長方形	2.00×1.30	0.70	I	1	N		
731	$G3a_5$	N-26°-E	隅丸長方形	1.80×1.70	0.90	I	1	N	土師器（碗） 石製品（石皿）	
739	$G3d_9$	N-63°-W	隅丸長方形	2.15×1.50	0.60	I	1	N		
742	$G3c_0$	N-58°-W	隅丸長方形	2.50×1.60	0.50	I	1	A		
791	$G3c_0$	N-30°-E	隅丸長方形	2.75×2.10	0.85	II	1	A		
803	$G4f_5$	N-62°-E	隅丸方形	1.50×1.50	0.30	II	1	A		

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
804	$G4f_5$	N-35°-E	隅丸方形	1.70×1.30	0.40	I	1	A		
815	$G4h_7$	N-32°-E	隅丸長方形	1.65×0.90	0.20	II	1	N		
850	$G4j_6$	N-33°-E	隅丸方形	2.00×2.00	0.95	II	1	N	香炉	S1-48号と重複
854	$H4g_8$	N-64°-E	隅丸方形	1.80×1.40	0.35	II	1	A		
870	$E5d_5$	N-67°-W	隅丸長方形	4.00×2.15	0.90	I	1	A		
886	$E5d_4$	N-61°-W	隅丸長方形	2.10×1.10	0.20	II	1	N	土師質土器(灯明皿)	
1000	$F4b_7$	N-61°-W	隅丸方形	2.50×2.12	0.65	I	1	A		
1158	$F5c_4$	N-82°-E	隅丸方形	1.40×1.15	0.54	II	1	N		
1167	$F5c_9$	N-23°-E	隅丸方形	2.05×1.95	0.25	II	1	N		
1169	$E6j_1$	N-29°-E	隅丸長方形	3.00×2.00	1.15	II	1	N		SI-55号と重複
1200	$G5c_3$	N-58°-W	隅丸長方形	2.40×1.75	0.70	II	1	N		
1205	$G5d_2$	N-28°-E	隅丸方形	2.30×2.25	0.55	II	1	N		
1214	$G5d_1$	N-20°-E	隅丸方形	2.30×2.00	0.30	II	1	N	石製品(石皿)	

(2) 墓壙の可能性のある土壙(第118～124図)

前頁で述べたように，墓壙及び墓壙と思われる土坑は，4カ所に分散して検出されている。これらの場所には，前述した土坑のほかに，平面形が方形または長方形状で，張り出しを有してピットをもち，覆土が明らかに人為的に埋め戻された様相を呈すると土坑が存在する。その多くは，形状や覆土の状況，出土遺物等から墓壙の可能性が高いと考えられる。ここでは，墓壙及び墓壙と思われる土坑と形状が類似する土坑を取り上げた。

第692号土坑(第118図)

本跡は，調査区の$G3d_4$区を中心に確認され，南側に張り出しを伴った土坑である。

平面形は，長軸3m，短軸2.2mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-58°-Wを指している。壁は，北側では下位から垂直に立ち上がり壁高100cmを測る。南側は張り出しに伴って段差が認められ，坑底よりやや斜めに20cm程立ち上がり，張り出し部は壁高55cmを測り垂直に立ち上がっている。底面はやや凸凹状を呈しているが焼けて締まっている。

覆土は，黒褐色・暗褐色土が堆積し，覆土中には，ハードロームブロック・炭化粒子・炭化物(木炭・炭化米)・焼土粒子が含まれている。

遺物は，覆土中から土師質土器が出土している。

第706号土坑(第118図)

本跡は，調査区の$G3e_2$区を中心に確認され，南西側に張り出しを伴った土坑である。

平面形は，長軸2.6m，短軸1.8mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-39°-Eを指している。

壁は，東側で下位から垂直に立ち上がり，壁高52cmを測る。南西側は張り出しに伴って段差が認められ，坑底よりやや斜めに10cm程立ち上がり，張り出し部は壁高45cmを測りやや内傾しながら立ち上がる。底面は若干凸凹状を呈しているが硬く締まっている。

覆土は，下層に埋め戻した状況が認められ，中層から上層は北東側からの流れ込みが認められ，極暗褐色・暗褐色が堆積し，ハードロームブロック・炭化粒子・炭化物（木炭・炭化米）・焼土粒子が含まれている。

遺物は，覆土中から釘が１点出土している。

第851号土坑（第121図）

本跡は，調査区の$H4f_0$区を中心に確認された。

平面形は，長軸4.2m，短軸2.7mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-31°-Eを指している。

壁は，底面から垂直に立ち上がり，壁高は80cmを測る。底面は、やや凸凹状を呈し，硬く締まっている。ピットは５本検出され，南・東壁下の各コーナーに規則的に配されている。ピットの掘り込みは，坑底に直径15～35cm，深さ20～30cmほど掘り込んで円筒状を呈し，ピットの位置する壁面は，半円状に掘り込まれている。

覆土は，人為的に埋め戻された様相を呈しており，ローム粒子やハードロームブロックを含む黒褐色・暗褐色が堆積している。特に南側底面には，20～25cm程の炭化米・豆類の堆積が認められた。覆土中には，焼土粒子・炭化物・灰等が含まれている。

遺物は，覆土上層より内耳形土器が出土している。

第869号土坑（第121図）

本跡は，調査区の$E5d_5$区を中心に確認された。

平面形は，長軸4.5m，短軸2.7mの隅丸長方形を呈し，北西側に張り出し部を持ち，長軸方向は，N-26°-Eを指している。

壁は，底面から垂直に立ち上がり，壁高は142cmを測る。底面は平坦で硬く締まっている。ピットは８本検出され，各コーナーと壁中間部に規則的に配されている。ピットの掘り込みは，壙底に直径20～30cm，深さ30～80cmほど掘り込んで円筒状を呈し，ピットの位置する壁面は，半円状に掘り込まれている。

張り出し部は，南北1.45m，東西1m，深さ30cmの方形を呈し，本跡の西側に付随している。

覆土は，下層から中層に灰褐色・黒褐色・褐色・暗褐色土が堆積している。特に中間層に焼土炭化粒子・灰が多量に含まれ，上層には，ロームブロック・黒褐色土の混入が多量にみられるこ

とから，人為的に埋め戻しがおこなわれたことが窺い知れる。

遺物は，坑底より銅製品・鉄製品が，覆土上層より土師器甕・坏片が出土している。

第875号土坑（第122図）

本跡は，調査区のE5d_1区を中心に確認された。

平面形は，長軸3.75m，短軸3.06mの隅丸長方形を呈し，北西側に張り出し部を持ち，長軸方向はN-30°-Eを指している。壁は，坑底よりやや傾斜をもって立ち上がり，壁高は133cmを測る。底面は平坦で硬く締まっている。ピットは7本検出されたが，本跡に伴うものは6本であり，ピットは各コーナーと壁中間に規則的に配されている。ピットの掘り込みは，壁面を半円形に掘り込むものと，壁際に掘り込まれたものが確認され，直径35～45cmの円形状を呈し，円筒状に約40cmほど坑面を掘り込んでいる。

張り出し部は，南北2m，東西0.7m，深さ100cmの長方形を呈し，本跡の北西側に付随している。

覆土は，下層から上層にかけて，褐色・暗褐色土が堆積している。覆土中には，灰・焼土・炭化物（木炭）が含まれている。（底面付近で40～50cmの堆積が認められる。）

遺物は，覆土中から土師質土器・坩堝が出土している。

表11　土壙一覧表(2)　墓壙の可能性のある土壙

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
699	G3f_3	N-35°-E	隅丸方形	2.00×1.83	0.98	I	1	A		周溝・張出し
718	G3g_4	N-35°-E	隅丸長方形	2.20×1.00	0.65	II	1	N	内耳式土器	SK732と重複 732を切っている
723	G3d_5	N-35°-E	隅丸長方形	1.20×0.80	0.34	II	1	N	仏花器	
724	G3d_6	N-58°-W	隅丸長方形	2.00×1.50	0.46	II	1	N		
730	G3d_7	N-35°-E	隅丸長方形	2.00×1.50	0.45	II	1	N	鉄製品（釘）	
732	G3g_4	N-57°-W	隅丸長方形	3.20×1.50	0.51	II	1	N	内耳式土器 石製品（茶挽臼）	SK718と重複 718が切っている
749	G3c_7	N-50°-W	隅丸長方形	1.61×1.00	0.52	II	1	N		
753	G4h_1	N-42°-E	隅丸方形	2.60×2.40	0.54	II	1	A	石製品（粉挽臼） 石塔（五輪塔）	炭化米出土
754	G4g_1	N-27°-E	隅丸長方形	1.80×1.20	0.55	II	1	N	砥石（石塔転用）	SK833と重複 833を切っている
786	H4a_3	N-40°-E	隅丸長方形	2.40×2.00	0.51	II	1	A		礫（底面）
793	G4h_5	N-33°-E	隅丸長方形	2.50×1.60	0.50	II	1	A	石器（石斧）	
795	G4e_2	N-57°-W	隅丸方形	1.80×1.55	0.45	II	1	A		張り出し
813	G4h_7	N-57°-W	隅丸方形	1.70×1.50	0.27	II	1	A		
820	G3h_0	N-42°-E	隅丸方形	1.00×0.90	0.45	II	1	N		
825	G4h_7	N-56°-W	隅丸長方形	2.00×1.30	0.53	I	2	A		
826	G4h_1		隅丸方形		0.60	I	1	A		

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
829	$G4h_2$		隅丸長方形					N		
830	$G4h_1$				0.50	II	1	N		
833	$G4g_1$	N-66°-W	隅丸長方形	2.00×1.30	0.16	I	1	N		SK754と重複 754が切っている
837	$G4h_6$	N-30°-E	隅丸長方形	1.50×0.90	0.32	II	1	A		
845	$H4d_0$	N-38°-E	隅丸長方形	2.30×1.80	0.61	I	1	A		
849	$H3e_0$	N-19°-E	隅丸方形	2.80×2.40	0.46	II	1	A		
866	$E4d_6$	N-17°-E	隅丸長方形	3.50×2.60	0.80	I	1	A	香炉	両端に2か所ピット
931	$E5e_6$	N-68°-E	隅丸長方形		0.25	I	1	N		
932	$E5e_6$	N-19°-E	隅丸長方形	3.90×2.20	0.75	I	1	A	土師質土器(灯明皿)	
979	$E4j_6$	N-69°-W	隅丸長方形	2.50×1.90	0.43	I	1	A	土師質土器(灯明皿) 坩堝	
982	$F4a_7$	N-28°-E	隅丸長方形	3.30×2.00	0.36	I	1	A		
1014	$F4c_0$	N-68°-W	隅丸方形	1.80×1.65	0.56	II	2	A	土師質土器（灯明皿） 坩堝・砥石（石塔転用）	
1098	$F5a_3$	N-51°-E	隅丸方形	1.75×1.40	0.71	I	1	N		
1187	$E6j_3$	N-64°-W	隅丸方形	3.40×2.90	0.85	I	2	A	土師質土器(灯明皿) 陶器（足付鉢）	ピット４本
1237	$E4e_4$	N-77°-W	隅丸長方形	2.75×1.35	0.45	I	1	N		
1290	$F4h_6$	N-35°-E	隅丸方形	2.50×2.30	2.00	I	1	A		
1291	$F4h_6$	N-35°-E				II	1	A		

(3) 坑底に周溝を有する土坑（第125図）

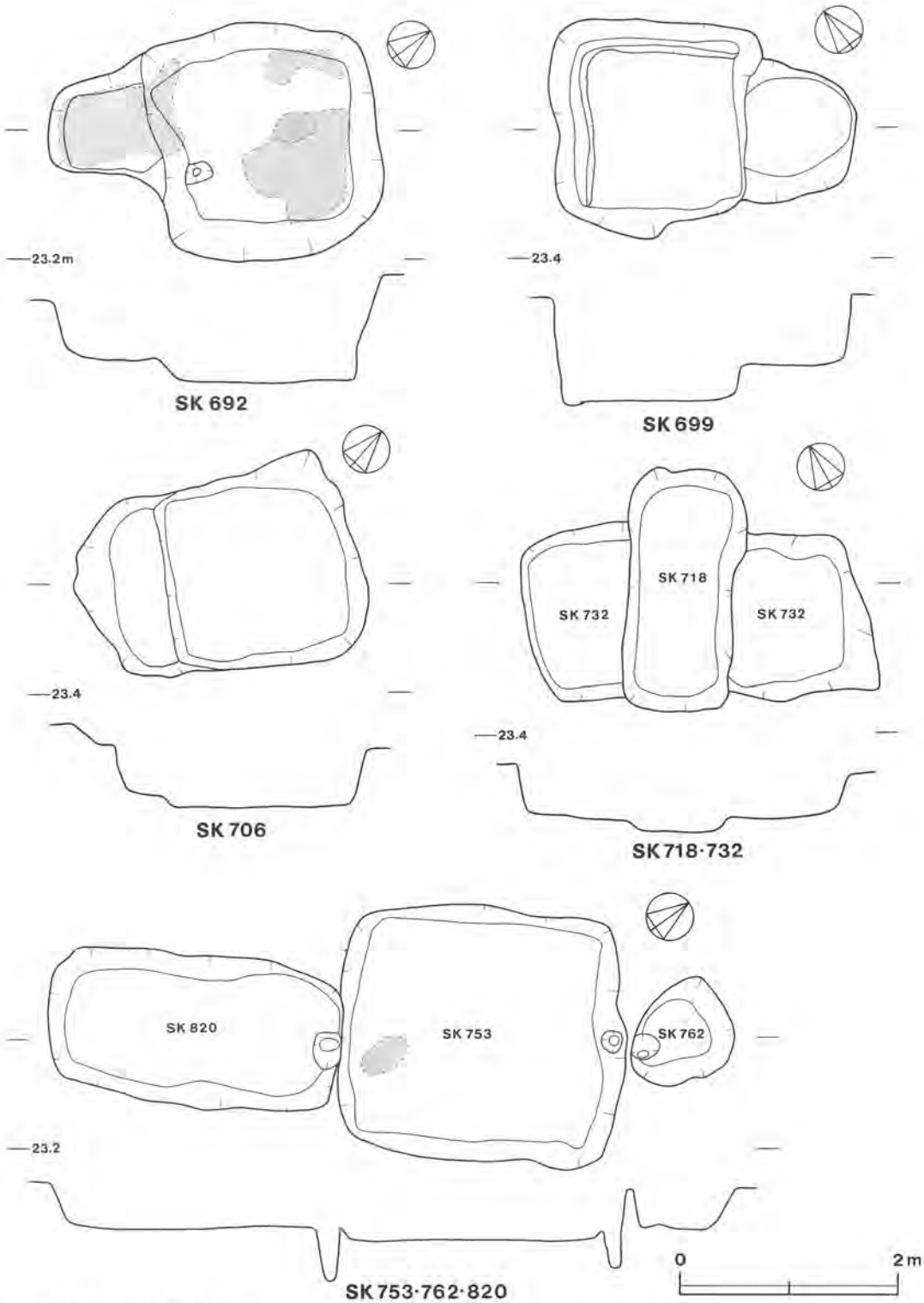
第719号土坑（第125図）

本跡は，調査区の$G3c_4$区に確認され，南西側は第720号土坑と重複している。

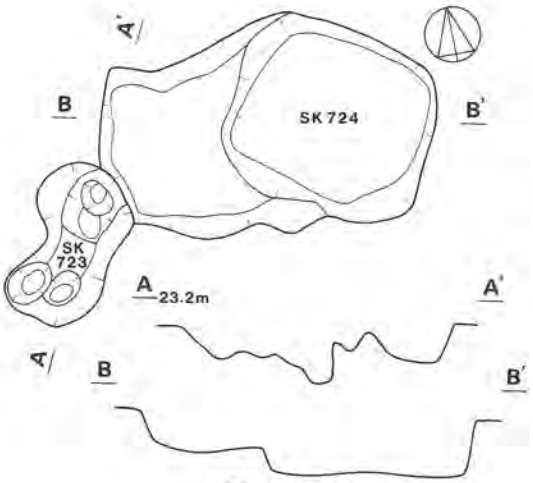
平面形は，長軸1.81m，短軸1.78mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-65°-Wを指している。壁は，底面より垂直に立ち上がり，壁高は93cmを測る。底面は硬く締まり，壁際に幅25cm，深さ5cm，断面形「U」状を呈する溝が周回し，溝の両側に粘土・ロームが幅15cmにわたって裏込めがおこなわれ，両側が突き固められている。また，中央部には，断面「V」状の幅２～３cmの溝が認められた。

覆土は，暗褐色・極暗褐色土が堆積している。覆土中には，焼土粒子・炭化粒子・炭化物（米豆類）が全体に含まれている。

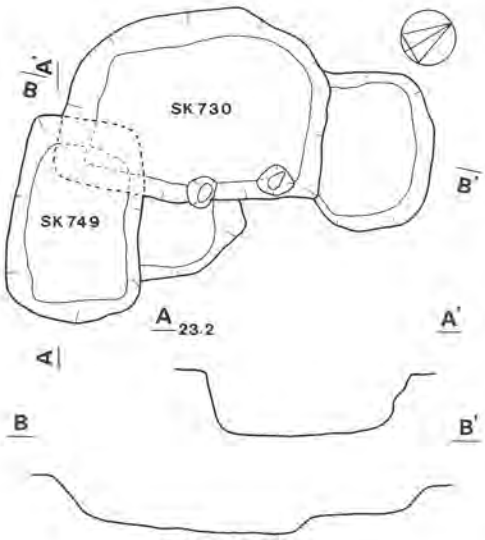
遺物は，覆土中から砥石が出土している。



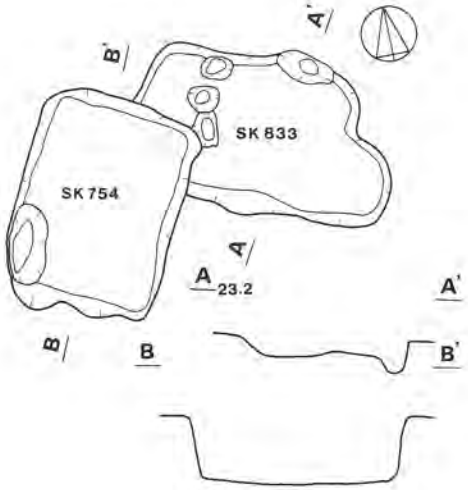
第118図　土坑実測図 (1)



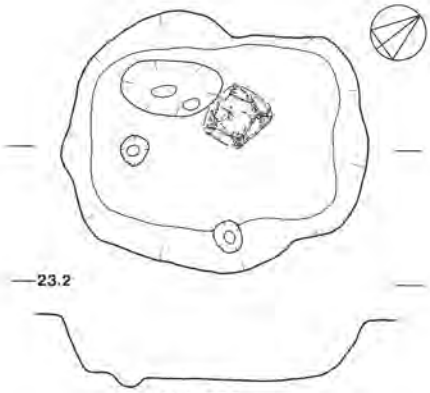
SK723·724



SK 730·749

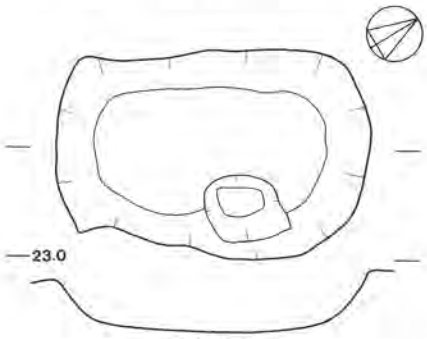


SK 754·833



SK 786

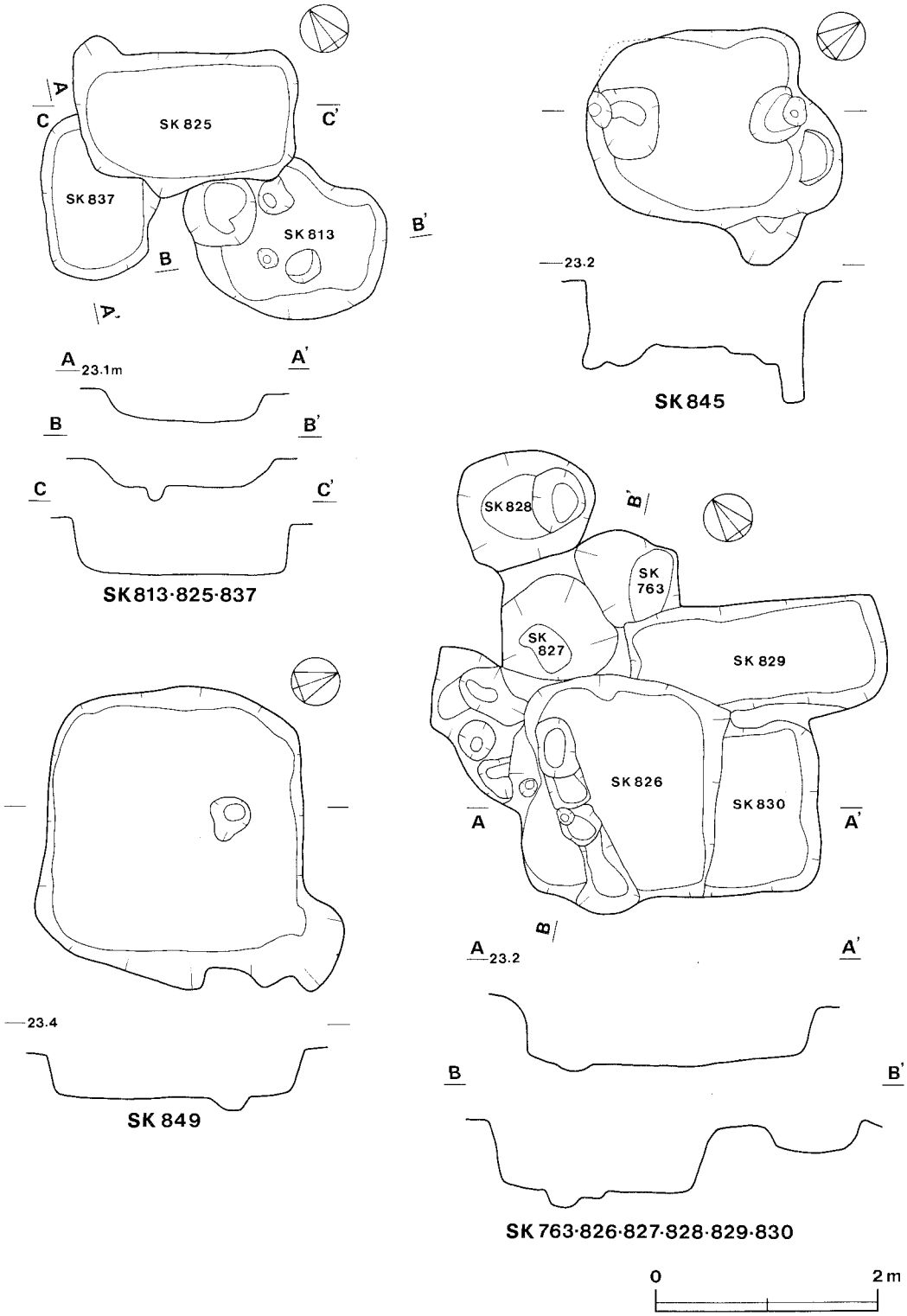
SK 795



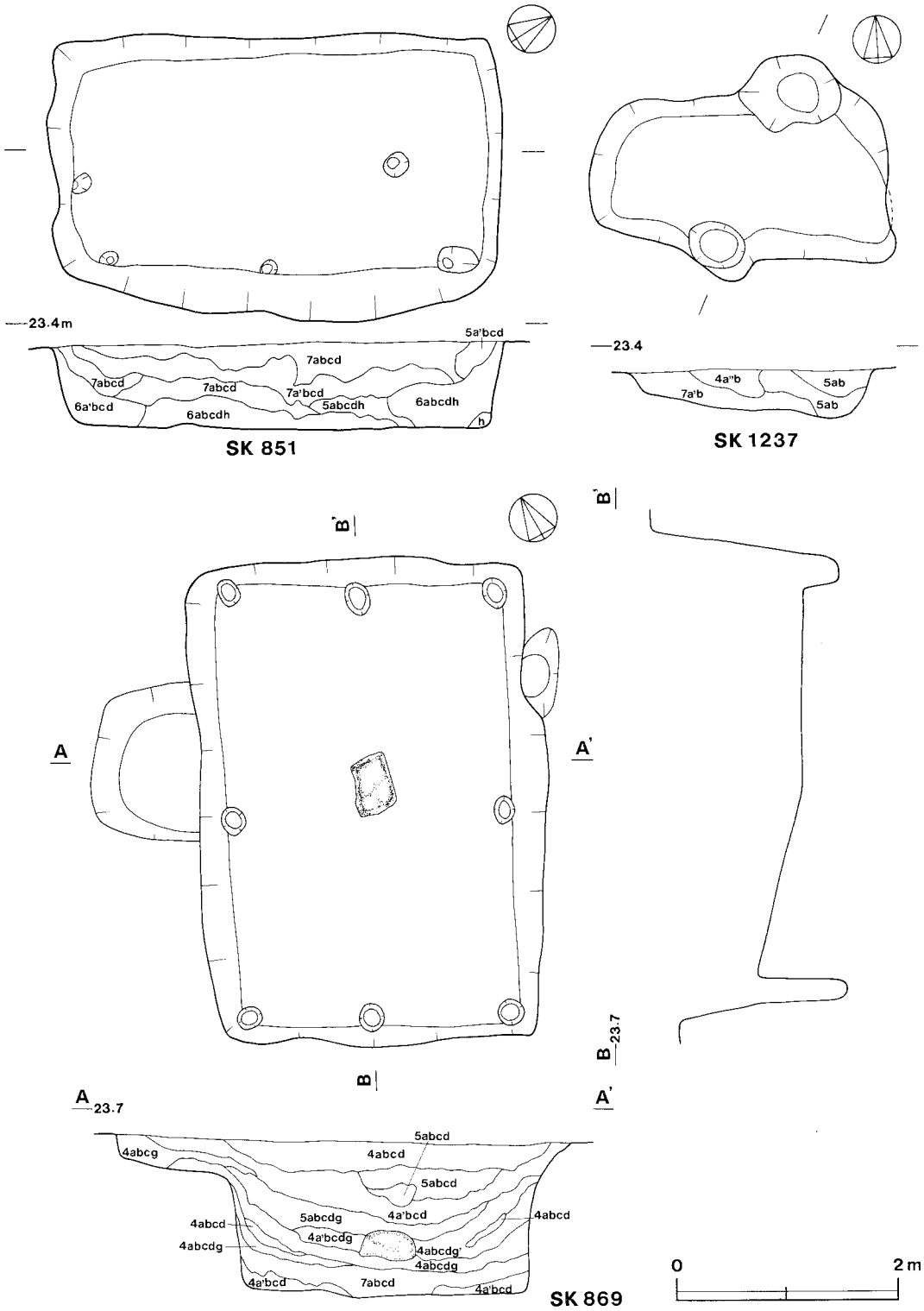
SK 793

0 2m

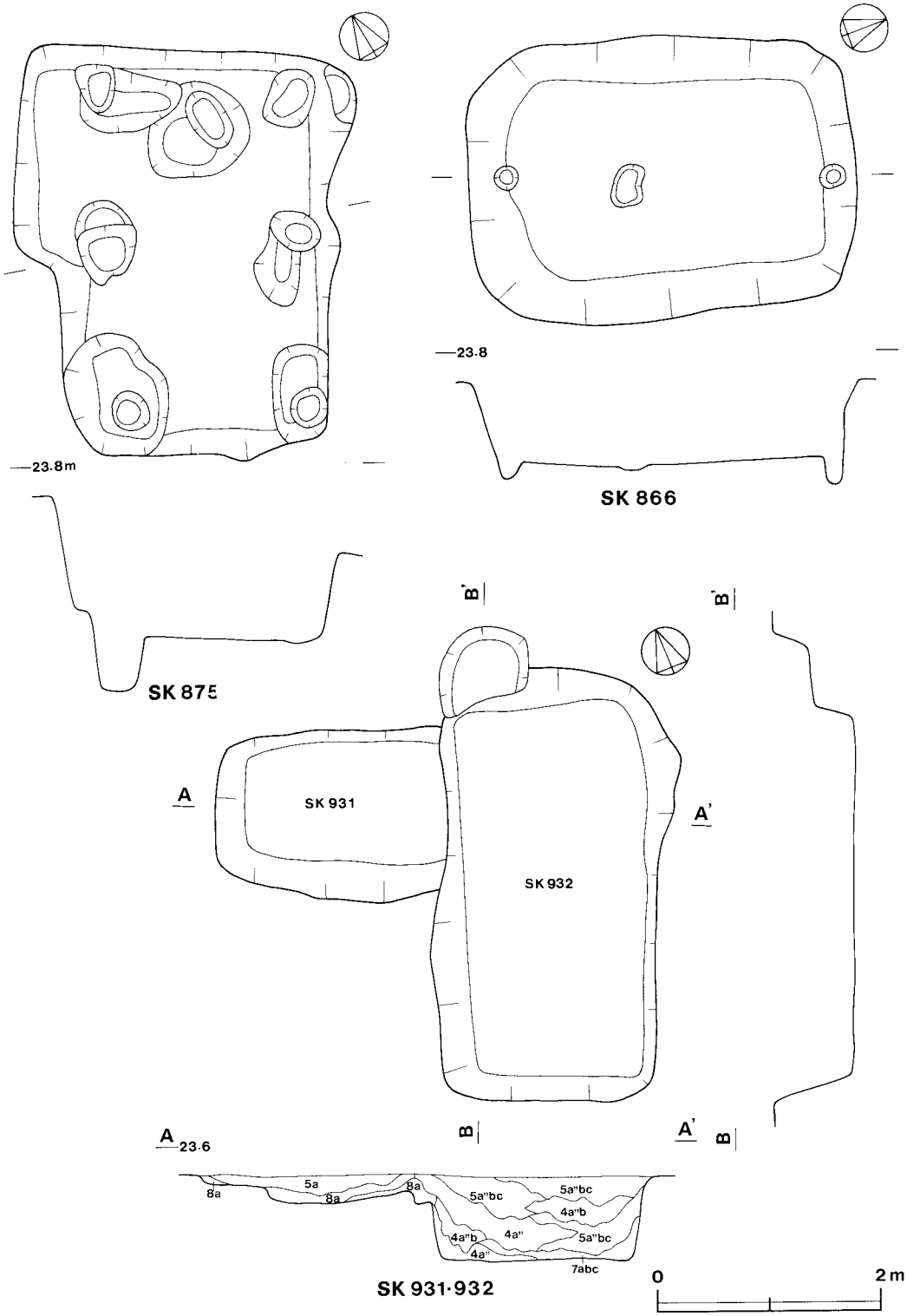
第119図　土坑実測図（2）



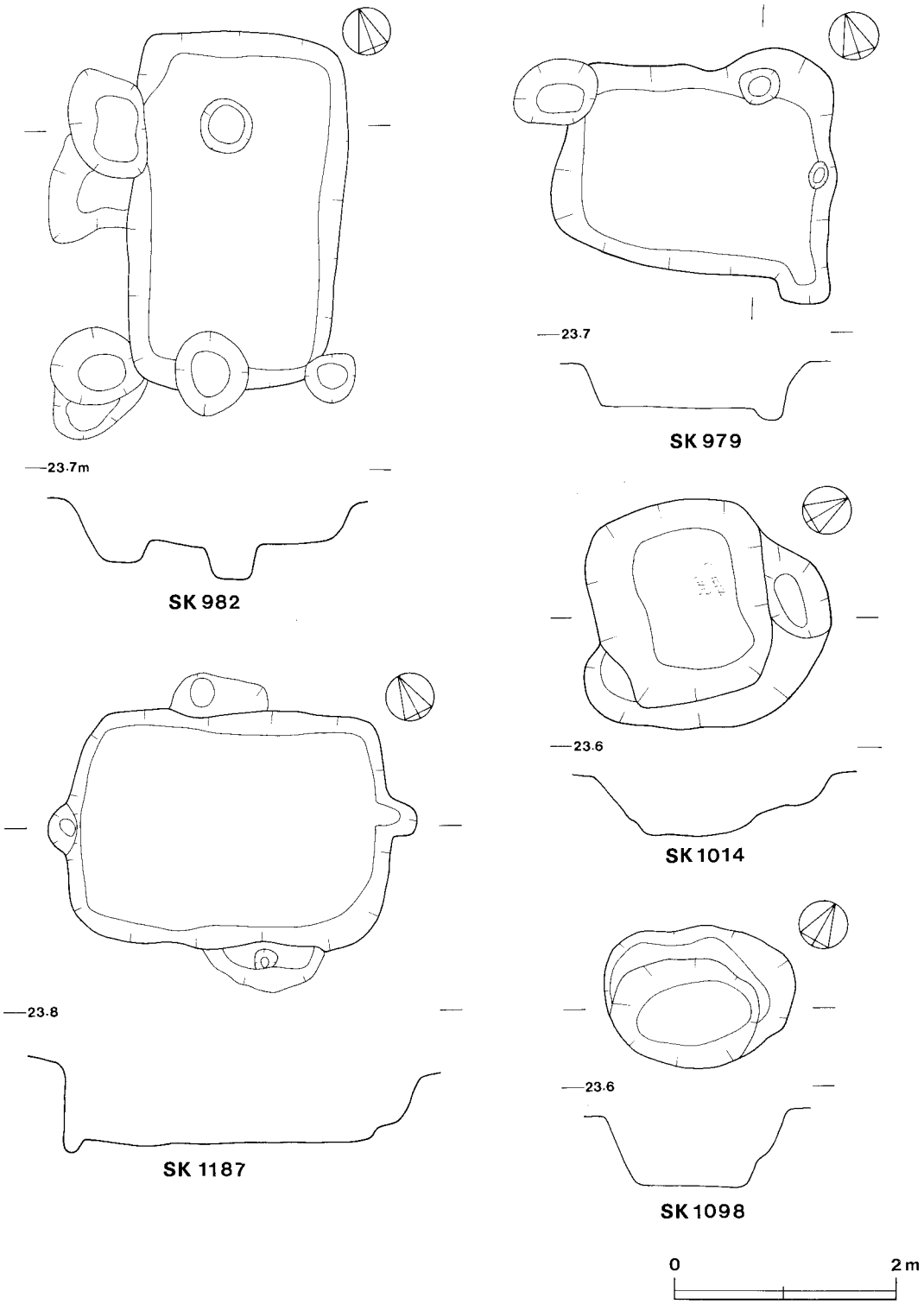
第120図　土坑実測図（3）



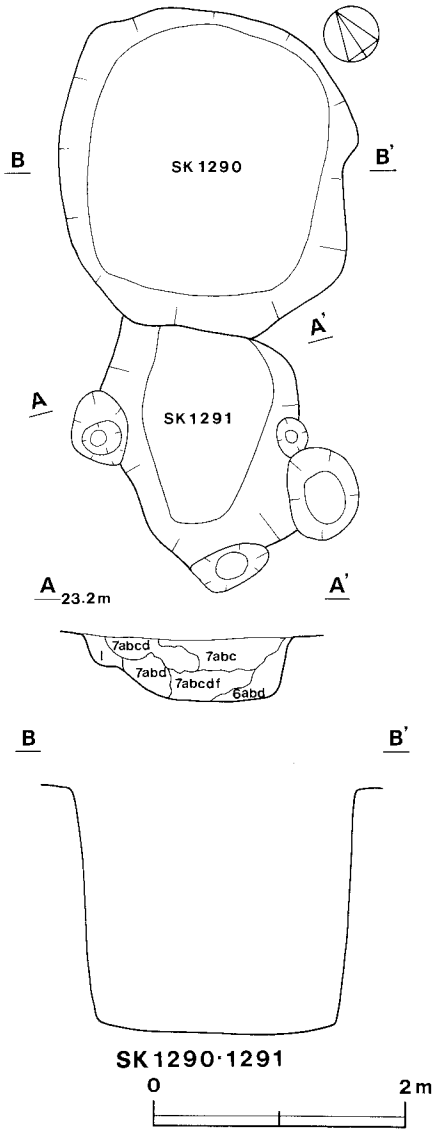
第121図　土坑実測図 (4)



第122図　土坑実測図 (5)



第123図　土坑実測図 (6)



第124図　土坑実測図（7）

第800号土坑（第125図）

本跡は，調査区のH4d_5区に確認された。

平面形は，長軸2.38m，短軸1.97mの隅丸方形を呈し，長軸方向は，N-66°-Wを指している。壁は，底面よりやや傾斜して立ち上がり，壁高は81cmを測る。底面はやや凸凹状を呈しているが締まっている。底面壁際には，幅10～15cm，深さ8～10cmの断面「U」状を呈する溝が周回している。

覆土は，暗褐色・極暗褐色土が堆積している。覆土中には，ローム粒子・ロームブロック・炭化物・炭化粒子・炭化米が全体に含まれている。

遺物は，覆土中から土師質土器が出土している。

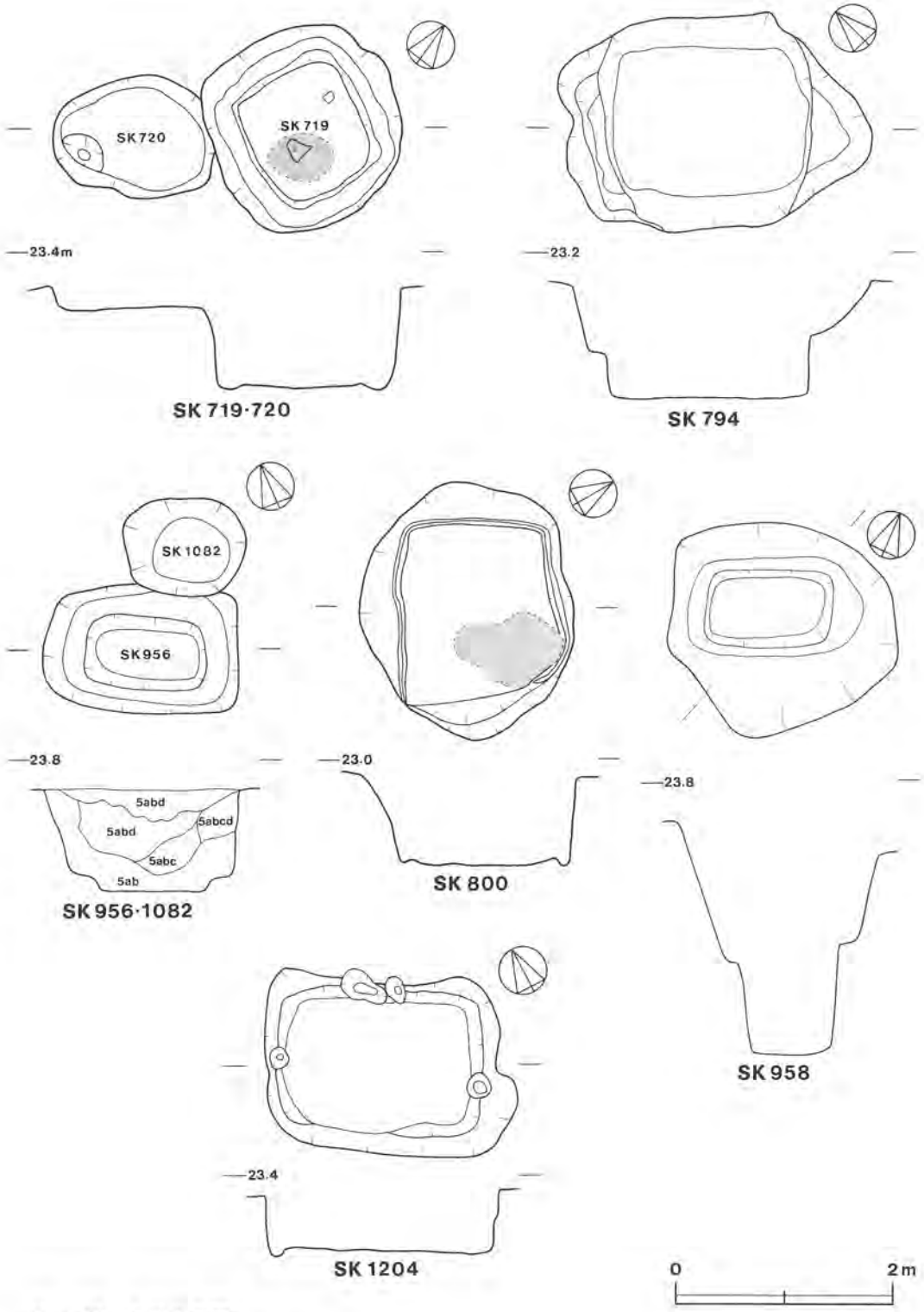
第1204号（第125図）

本跡は，調査区をG5e_3区に確認された。

平面形は，長軸2.15m，短軸1.55mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-61°-Wを指している。壁は、下位から中位にかけて垂直に立ち上がるが，上位はやや外傾ぎみに立ち上がっている。壁高は55cm前後を測る。底面はやや凸凹状を呈しているが締まっている。底面壁際には，幅15cm，深さ10cm程の断面形「凵」状を呈する溝が周回している。

覆土は，暗褐色・極暗褐色土が堆積している。覆土中には，ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子・灰が含まれている。

遺物は，出土していない。


SK720
SK719
23.4m
SK 719·720
23.2
SK 794
SK1082
SK956
23.8
5abd
5abcd
5abd
5abc
5ab
SK 956·1082
23.0
SK 800
23.8
SK 958
23.4
SK 1204
0
2m

第125図　土坑実測図

(4) 粘土貼り土坑（第126・127図）

本年度調査区内からは，土坑の内側に粘土を貼った，いわゆる粘土貼り土坑が7基検出されている。粘土貼り土坑は，昭和59・60年度調査区内からも20基確認されている。これらはすべて，井戸及び墓壙付近と，若干離れた地区から検出されている。

第770号土坑（第126図）

調査区の$G4d_2$区で確認され，南東コーナー部は土坑と重複している。

平面形は，長軸3.3m，短軸2.35mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-34°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高30cmを測り，皿状に掘り込まれている。底面は凸凹しており，粘土が20～40cmの厚さに貼られている。粘土は青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，暗褐色土が堆積し，覆土中には，ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子・粘土小ブロックが含まれている。

遺物は出土していない。

第778号土坑（第126図）

調査区の$G3i_9$区で確認され，東側は，土坑と重複している。

平面形は，長軸2.0m，短軸1.25mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-36°-Eを指している。壁高は約15cm前後を測り，皿状に掘り込まれている。底面は若干凸凹しており，粘土が15cm前後の厚さに貼られている。粘土は，青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，黒褐色・暗褐色土が堆積し，覆土中には，ロームブロック・粘土・ローム粒子が含まれている。

遺物は出土していない。

第811号土坑（第126図）

調査区の$G4i_6$区で確認され，北・北東部は土坑と重複している。

平面形は，長軸2.3m，短軸2.2mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN-57°-Wを指している。　壁高は，20cmを測り，皿状に掘り込まれている。底面は凸凹しており，粘土が15～20cmの厚さに貼られている。粘土は青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，褐色土が堆積し，覆土中には，ロームブロック・ローム粒子・炭化物・粘土小ブロックが含まれている。

遺物は出土していない。

第846号土坑（第126図）

調査区の$H5d_1$区で確認され，東・西側壁は土坑・ピットと重複している。

平面形は，長軸2.6m，短軸1.6mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-58°-Wを指している。壁高は，約20cm前後を測り，皿状に掘り込まれている。底面は平坦で粘土が15cm前後の厚さに貼られている。粘土は，青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，暗褐色・極暗褐色土が堆積し，覆土中には，ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子が含まれている。

遺物は出土していない。

第852号土坑（第126図）

調査区の$H4i_6$区で確認され，東・南部には張り出しとピットが付随している。

平面形は，長軸2.75m，短軸2.3mの隅丸方形を呈し，長軸方向は N-40°-Eを指している。壁高は40cmを測り，垂直な立ち上がりを示している。底面は凸凹しており粘土が10～15cmの厚さに貼られている。粘土は青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，黒褐色・黒色土が堆積し，ロームブロック・粘土ブロックが含まれている。

遺物は，覆土から釘が出土している。

第1010号土坑（第127図）

調査区の$E5f_7$区で確認され，第10号井戸の北側に位置する。

平面形は，長軸4.55m，短軸3.75mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-62°-Wを指している。壁高は，約70cmを測り，下位から中段にかけてほぼ垂直に立ち上がり，中段から上位にかけてやや斜めに広がりを示す。底面は平坦で粘土が15cm前後の厚さに貼られている。粘土は，青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，暗褐色・黒褐色土が堆積し，覆土中には，ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土が含まれている。

遺物は，坑底より砥石が二個，覆土から内耳形土器片・土師質土器片が出土している。

第1167号土坑（第116図）

調査区の$F5c_9$区で確認された。

平面形は，長軸2.1m，短軸1.9mの隅丸方形を呈し，長軸方向は北を指している。壁高は約25～30cmを測り，皿状に掘り込まれている。底面は平坦で粘土が約30cmの厚さに貼られている。粘土は青灰色を呈する常総粘土である。

覆土は，褐色・暗褐色土が堆積し，全体にロームブロック・粘土ブロック・焼土・木炭粒子が含まれている。

遺物は出土していない。

表12　土坑一覧表　粘土貼り土坑

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
794	$G4g_2$	N-50°-W	隅丸長方形	2.80×2.00	1.19	I	1	A	土師質土器(灯明皿・埦・壺) 砥石（石塔転用）石玉	有段
956	$E4g_5$	N-62°-W	隅丸長方形	1.80×1.20	0.93	I	1	A		有段
958	$E4h_5$	N-64°-E	隅丸方形	2.10×1.90	2.16	II	1	A		有段
1082	$E4g_5$	N-57°-W	隅丸方形	1.10×0.90	0.91	I	1	A		有段

2　地下式壙

本年度調査区内から検出された地下式壙は，2基である。これらの地下式壙は，昭和59年度の調査と同様に墓壙と思われる土坑，または墓壙の可能性のある土坑が数多く在存する地区や，その近辺に位置している。しかし，出土遺物や覆土の状況，遺構の構築状況から判断すると，当遺跡内から検出された地下式壙と墓壙には，時間差が認められるとともに同一地区に墓域をもうけている点から，台地上における墓壙の形態や変遷がとらえられるものと考えられる。

調査に際しては，一般の土坑と同一記号（SK）を用いた。記載に当って遺構番号の取扱いは昭和59年度に検出した5基，昭和60年度に検出した4基に継続し，第10号地下式壙(SK688)，第11号地下式壙（SK1189号）として扱った。

第10号地下式壙（SK688　第128図）

本跡は，調査区の西側$G3h_1$区に検出された墓壙群内の東側，$G3h_1$区を中心に位置する。

主軸方向はN-50°-Wを指し,全長は3.15mである。

竪坑は，確認面から約2.5mの深さまで掘り込まれており，竪坑底面は，主室の底面よりも0.7mほど高く，長径1.4m，短径1.1mで中央部が括れ瓢形状を呈している。

主室は，竪坑の底面からさらに0.7mほど掘り込まれており，底面は平坦である。平面形は，奥行1.7m，幅2.7mのやや胴の張った長方形状を呈している。竪坑・主室とも底面は，粘土層に形成されている。

壁は，竪坑が81度の傾斜で立ち上がっている。主室では，底面から1.7～2.0mの高さまでオーバハングし，その上位は垂直に立ち上がっている。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は，自然堆積である。下層には，竪坑から流れ込んだと思われる褐色土が，その上には周囲の壁が崩れて堆積したと思われるハードロームブロックを多量に含む黒褐色・褐色土が見られる。主室では，中層から上層に天井部が崩落したものと思われる粘土が「V」状に堆積し，その後周囲から黒褐色土が流入している。

遺物は出土していない。

第11号地下式壙（SK1189　第129図）

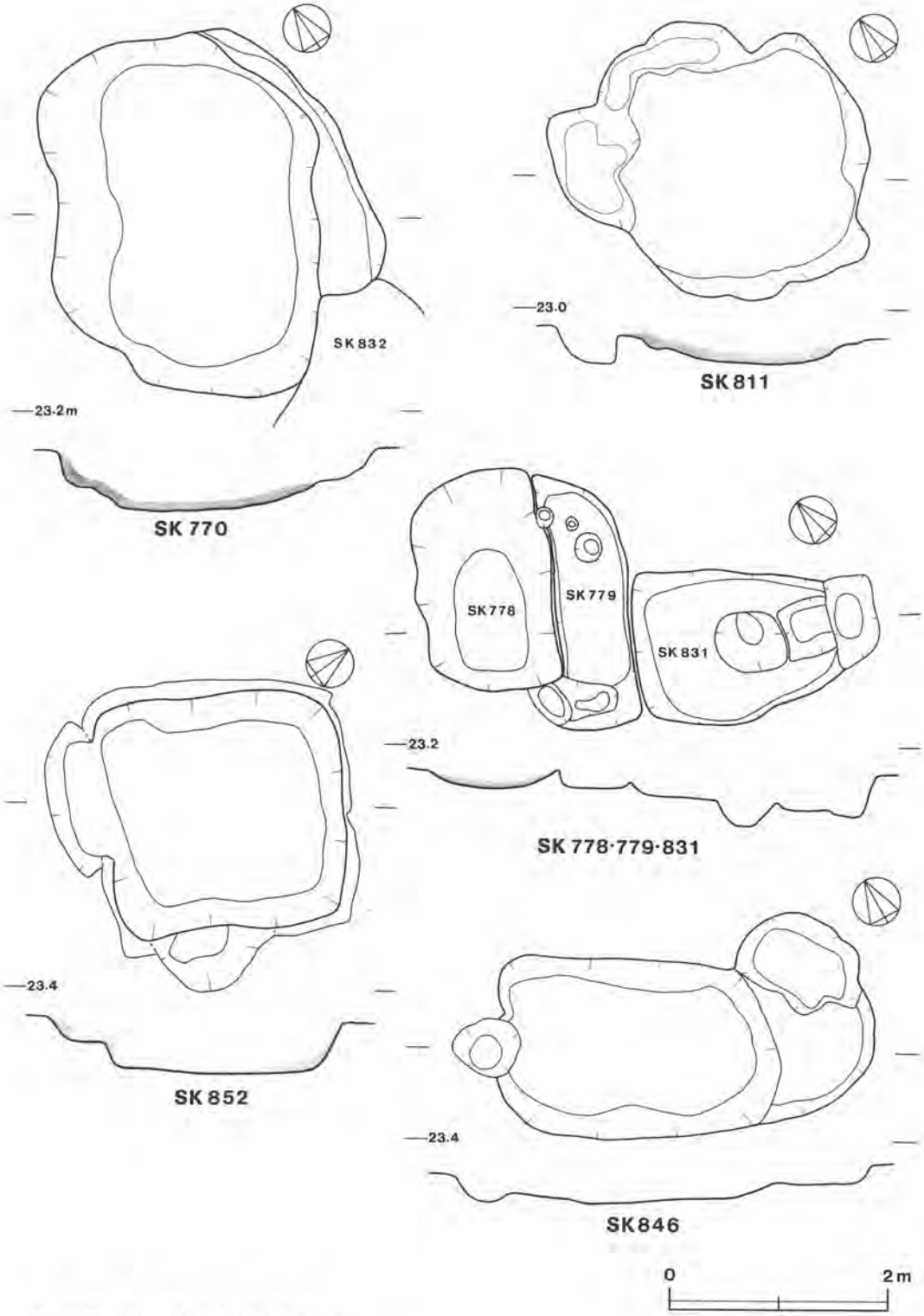
本跡は，調査区の南側$H2b_5$・c_5区に位置する。主軸方向はN-45°-Wを指し，全長は3.4mである。

竪坑は，確認面から2.15mの深さに掘り込まれている。底面は，主室方向にわずかに傾斜している。平面形は，長軸1.6m，短軸0.85mの長方形状を呈している。

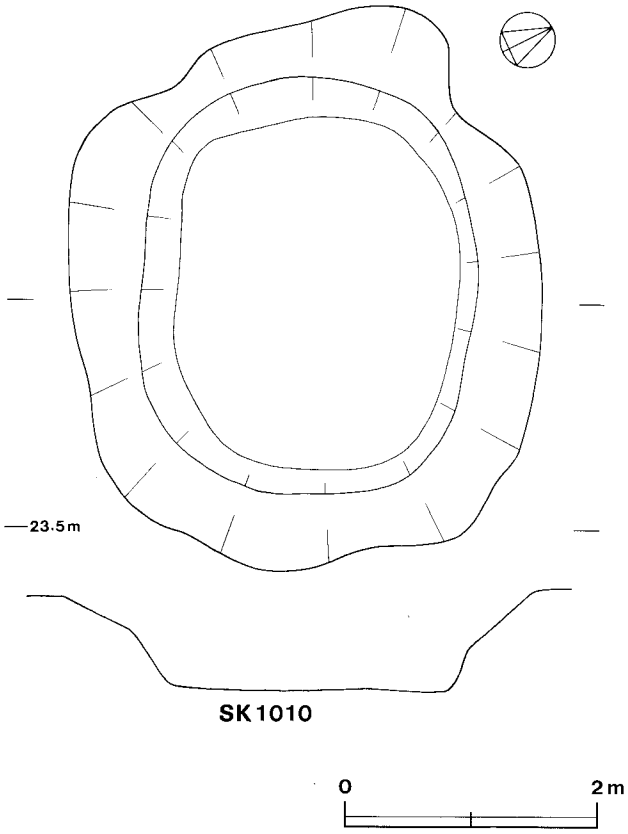
主室は，竪坑の底面からさらに0.25mほど掘り込まれており，底面は平坦である。主室の平面形状は，奥行1.75m，幅2.33mのやや胴の張った方形状を呈している。竪坑・主室とも底面はローム層に形成されている。壁は，竪坑が81度の傾斜で立ち上がり，主室では底面から1.4mの高さまでオーバハングし，その上は垂直に立ち上がっている。主室の横断面は，フラスコ状を呈している。

覆土は，自然堆積である。竪坑からの土の流入はほとんど見られず，壁及び天井部の崩落によって大部分が埋り，その後周囲から暗褐色土や黒褐色土が流入している。

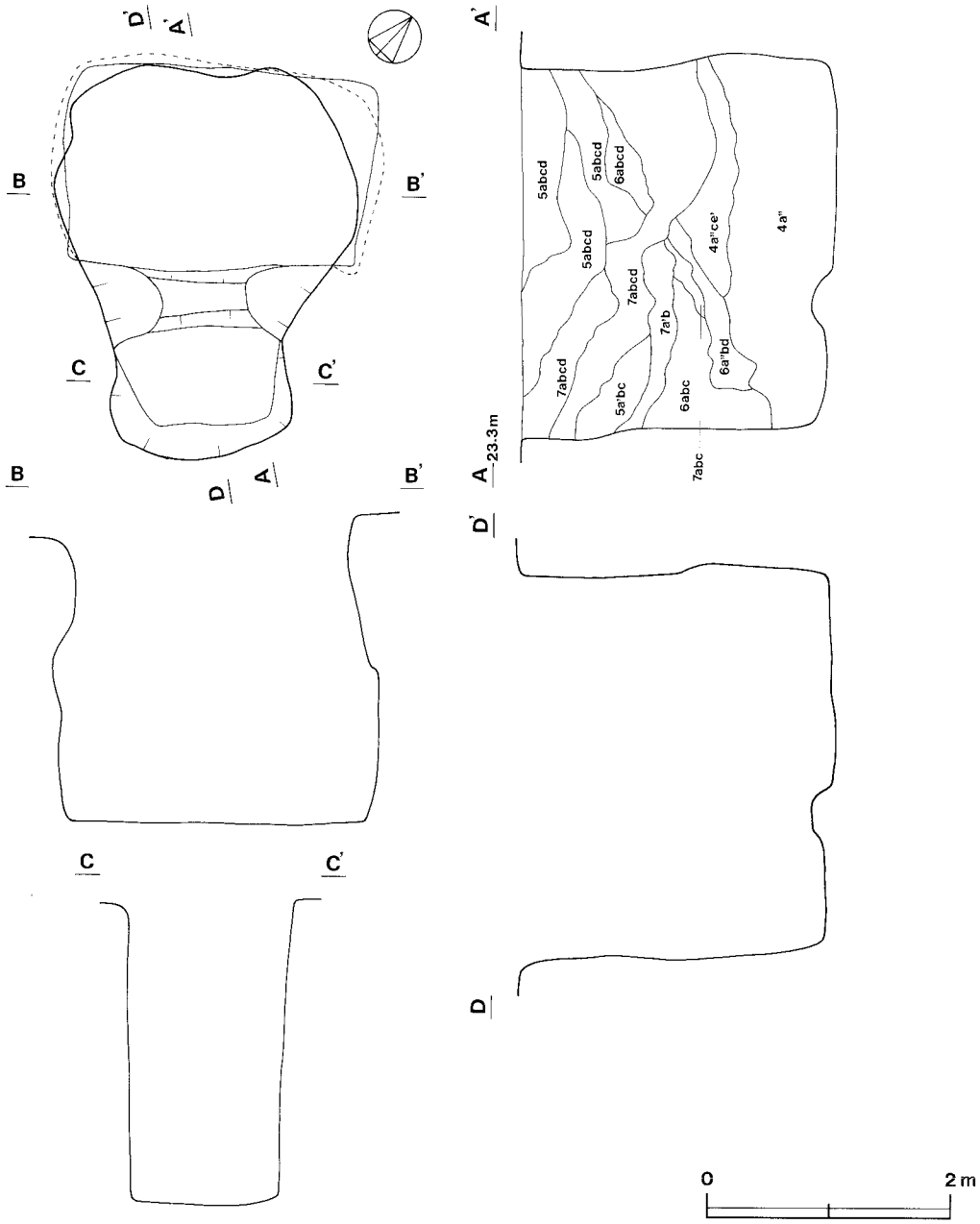
遺物は出土していない。



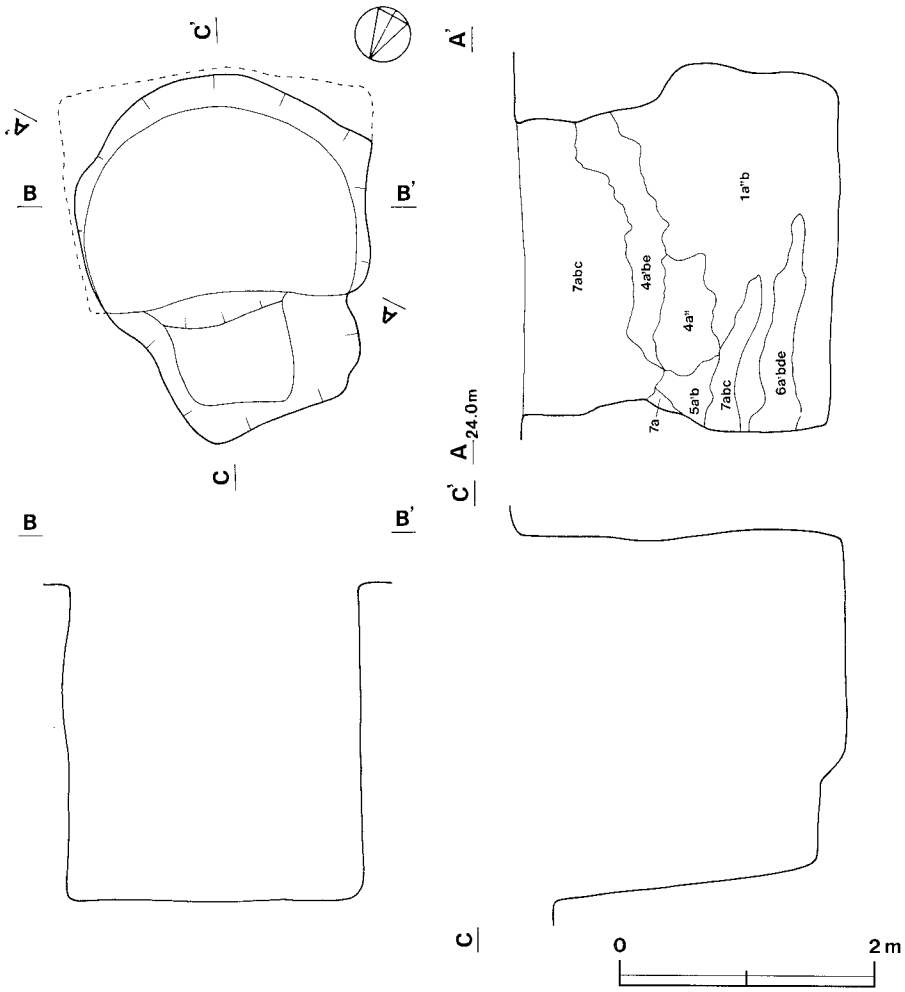
第126図　粘土貼り土坑実測図（1）



第127図　粘土貼り土坑実測図 (2)



第128図　第10号地下式壙実測図



第129図　第11号地下式壙実測図

3　溝

本年度調査区から確認され番号を付して調査した溝の数は23条である。調査及び整理の過程で近世・現代の根切溝等と判断したSD82～85・92・93・94・100・101・102・106・108・109・112号の14条を除外した。またSD91・102号を別々の名称を付して調査したが，調査の結果，2条の溝はそれぞれ一つになり，SD66号として統一してまとめたため，最終的な溝の数は8条となった。溝と同一記号を用して調査した堀（SD10・69・70A・B・71・74・75・88・87・90A・B・95・96・111・112号）については本項から除外し，第3章5節の3に記載した。また，遺物については，特徴的なものを一括して掲載した。

注

(1)　溝の略号は，堀と同様にSDを用いた。番号については，昭和61年度に整理した「屋代B遺

跡II」の報告書中で使用した溝・堀の番号に継続する。本年度は，堀・溝をSD66号から番号を付し，調査を進めた。

第66号溝（SD91　第130図）

本跡は，内郭部の東側，調査区E5・6区に位置する。本跡は，第12・15号堀によって分断されている。溝は，全長40mでE5区から南西方向に直線的に21mほど延び東へほぼ直角に屈曲して19m延びている。上幅0.7～1.4m，深さ0.1～0.15mを測り壁は外傾して立ち上がっている。底面は凸凹しており，不定形を呈するピットが多数検出されているが本跡に伴うピットではない。断面形は「U」状を呈している。

覆土は，黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土中から土師質土器・礫が出土している。

本跡は，第10号井戸の北側に位置する第1010号土坑を囲む形で「└」状に検出された状況から排水溝的な性格が考えられる。

また，第12・15号堀によって分断されている状態から判断すると，城跡よりも館跡に伴う時期に構築されたと考えられる。

第61号溝（SD95）

本跡は，調査区の南端15・16区に位置する。溝の南東側は昭和60年度に調査している。溝の全長は約65mで，北西端は第1号堀と接続している。上幅は2～2.5mで，深さは0.7～1mを測る。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で，断面形は逆台形を呈している。

覆土は，3～4層からなり，黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。覆土は，自然堆積を呈している。

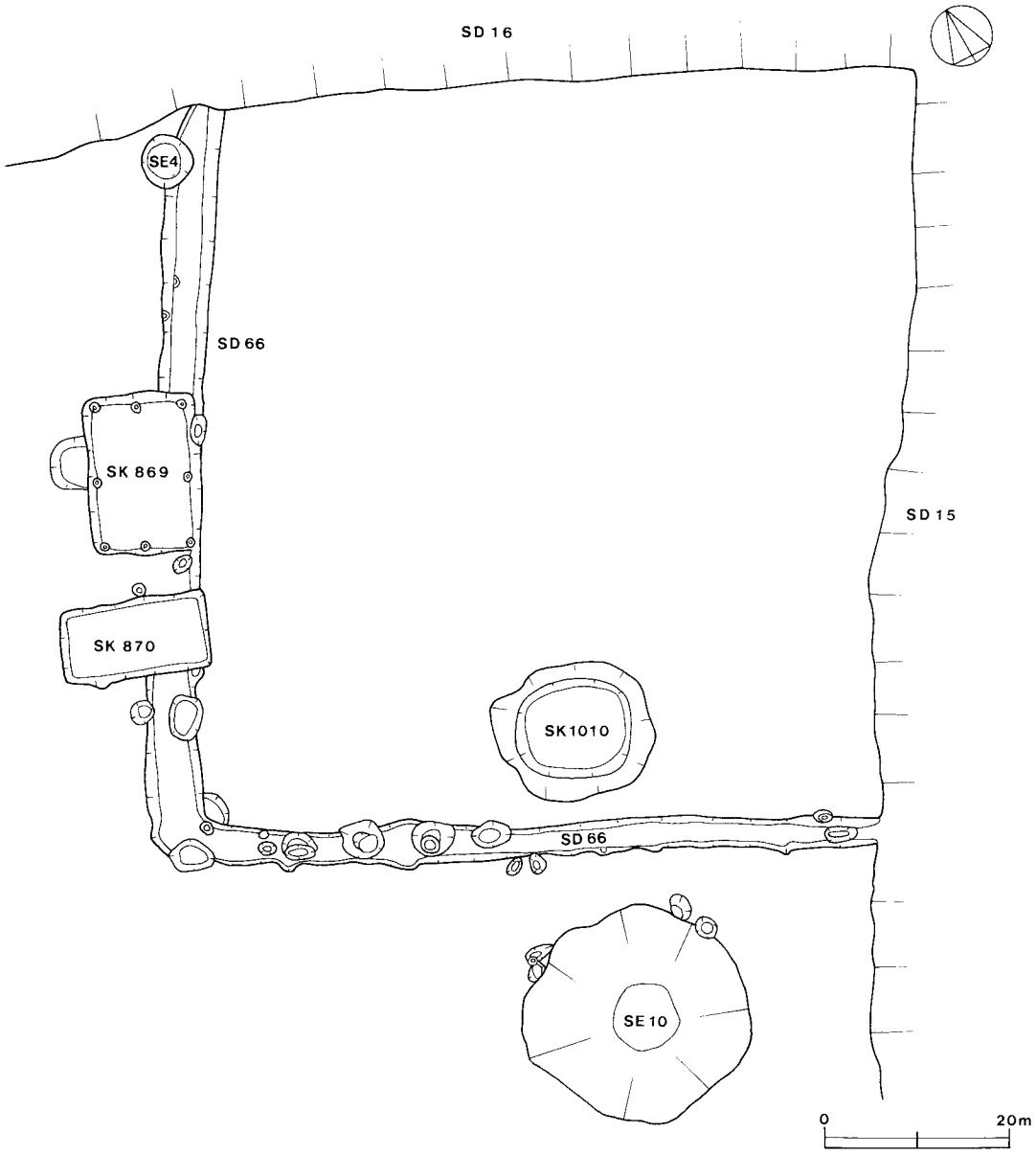
遺物は，覆土中から土師器甕片・土師質土器片が出土している。

第67号溝（SD96）

本跡は，調査区の南側H5・I5区に位置する。溝の北端は第8号堀に，南端は第61号溝に接続している。溝の全長は約30mで，上幅は約2m，深さは0.8～0.9mを測る。壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦であるが，溝の中央部を境にして，南・北に傾斜しながら第8号堀，第61号溝に接続する。断面形は逆台形を呈している。

覆土は，3～4層からなり，黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。覆土の堆積状況は自然堆積である。

遺物は，覆土から土師質土器片・礫が出土している。



第130図　第66号溝実測図

4　方形周溝遺構

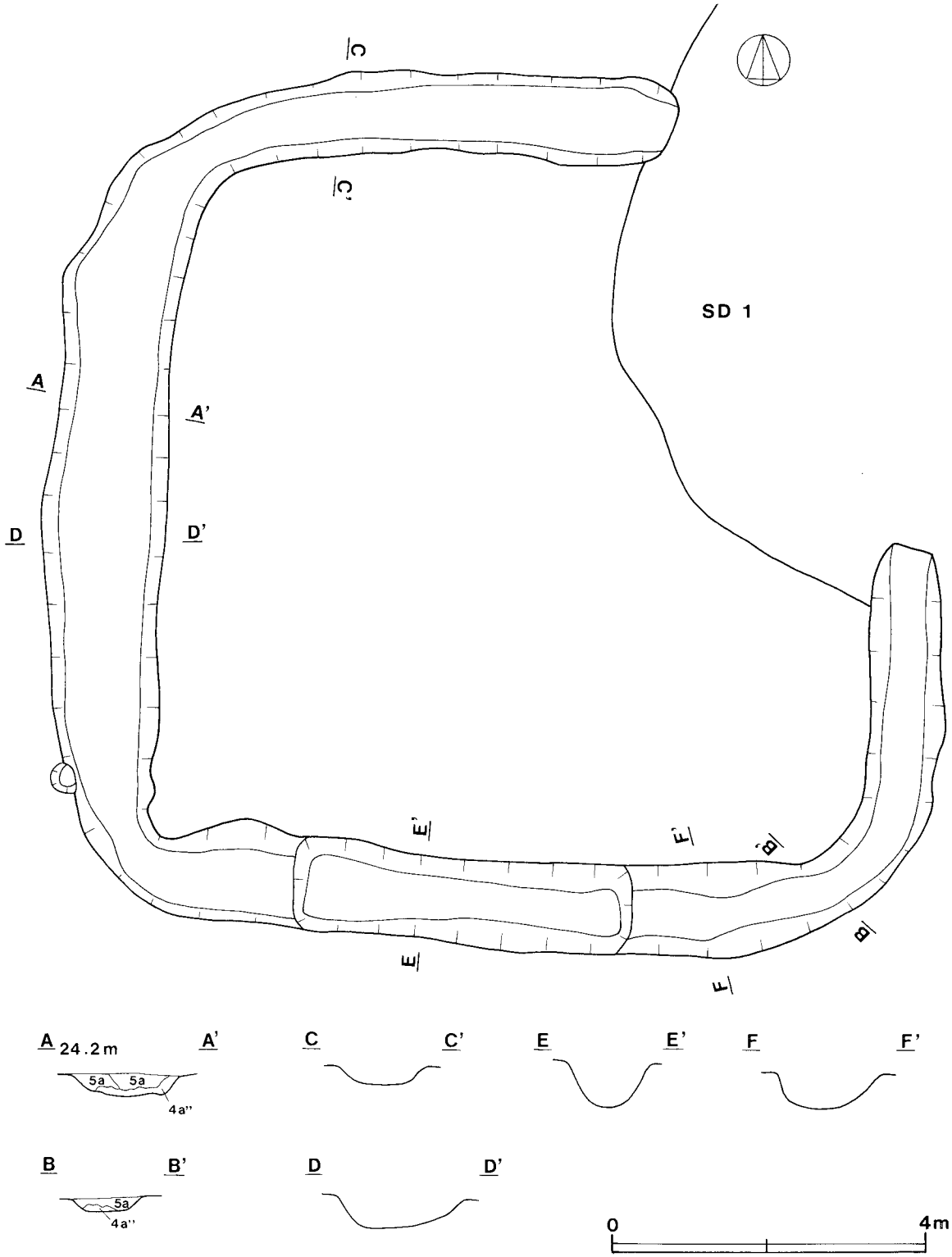
本年度調査区から確認された遺構は２基である。これら遺構の内，第２号遺構は，中世以後の遺構の撹乱によって全体を把握する事が不可能であったために，本報告では割愛する。

第１号方形周溝遺溝（SD105　第131図）

本跡は，調査区の南西H2区に位置する。全形は方形を呈し，周溝は隅丸方形のプランをもつ。東西11.2m，南北11.5mを測り，東コーナー部は第１号堀によって破壊されている。溝の上幅は，南側で 1.0～1.5m，北側で1.0～1.1m，西側で1.5～1.6mを測り主軸方向は N-47°-Wである。溝底面の幅は約40～65cm，深さ25～55cmを測り，断面形状は逆台形を呈し溝底は平坦であり，中央部は若干盛り上がりが認められるが土坑等の検出は認められなかった。

溝中の土層は，最下層には褐色土にロームブロック・ローム粒子が含まれ，中・上層は暗褐色土にローム粒子を含む層の堆積が認められる。

遺物の出土は認められなかった。



第131図　第１号方形周溝遺構実測図

5　出土遺物について

本年度調査区からは，弥生式土器（中期後半～後期），土師器（後期の鬼高式），須恵器，土師質土器（中世），陶・磁器（中・近世），瓦器（中世）や，土製品（紡錘車・土玉・土錘・円板・手培），石製品（石鏃・石斧・敲石・石臼・石皿・砥石・石塔），鉄製品（釘・刀子・鎌・燧金・鏃），銅製品（刀装具・鏃・仏具），古銭等が出土している。

(1)　弥生式土器（第132～134図）

当遺跡から出土した弥生式土器は，弥生時代中期～後期に比定される土器が出土している。器種としては，壺形土器・鉢形土器・手捏ね土器等が出土している。これらは主に、弥生時代の住居跡・環濠の覆土から出土したものである。

出土土器の有文土器における各部の文様は，時期や地域によってそれぞれの特徴がみられる。

遺跡から出土した土器を概略的に述べると，器形は，鉢形土器・壺形土器・甕形土器があり，文様は，口唇部・口縁部の表裏に指頭圧痕文が施されものが多く，また，口縁部は複合口縁のものと素縁のものがあり，縄文の施されるものが多く，無文のものも存在する。さらに，口唇部には縄文原体の回転押圧（捺）が施されたものや，棒状工具による押圧・刺突の加えられたものもみられ、複合口縁（折返し）下端に刺突の加えられたものも多い。頸部には、無文帯とするものと，４～８本の櫛描きによる懸垂文・横走波状文・鋸歯文・山形文・格子目文等を施している。胴部には，縄文が施されて羽状構成のものや単節縄文，撚糸文等がみられる。

当遺跡の弥生時代中期～後期の土器は，南関東系の土器が含まれて集落構成がおこなわれている状況から，弥生時代の中期は南関東系の影響が強く，後期に入るや北関東系の影響を受け，地域色の濃い文化（在地の土器）が形成されたものと考えられる。

(2)　中世（土師質土器・擂鉢）

土師質土器（第137～141図）

当遺跡での土師質土器の出土は量的に最も多い。土師質土器には，大型と小型とに区別され，口径と器高の比から土師質土器を坏形と皿形に分類ができる。

次に，当遺跡から出土した土師質土器について形態的な特徴から分類すると，口縁端部が内傾し，外側に稜をもつものや，口縁部が緩く，内彎気味になり端部が若干肥厚するもの，口縁部が直線的に延びるもの，口縁部は小さな底部から上方へ立ち上がり，大きく内彎気味に開くものがみられる。また，内外面に渦巻状（ロクロ成形痕）が残り，底部に板目の強い圧痕が認められるものが多い。

擂鉢（第142～144図）

当遺跡での擂鉢は，生活用具を示す遺物である。

器形から分類すると，底部から口縁部まで直線的に開くものと，体部中央から外方へ大きく開くものがあり，内面の櫛目は，放射状になるものと斜格子状とがある。片口は，器形や櫛目に関係なく認められるようである。

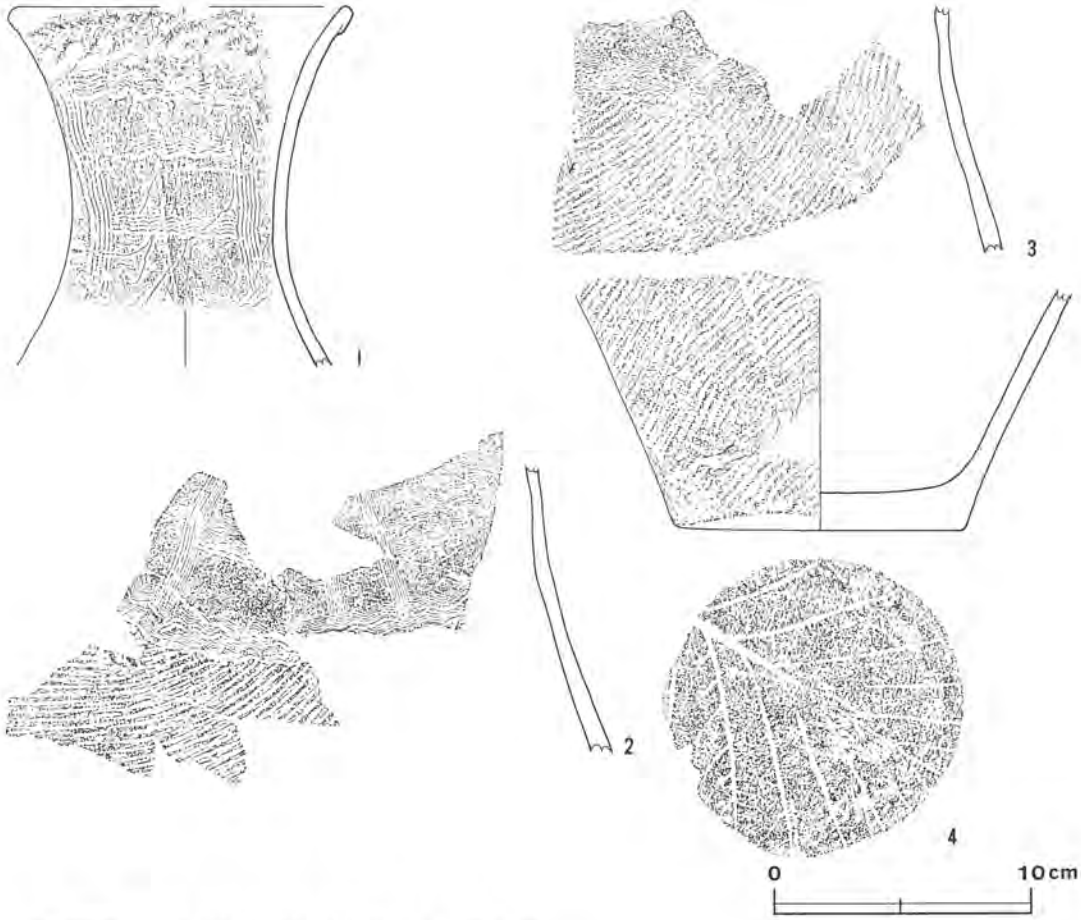
(3) 土師器・須恵器・その他について（第135・136・145図）

第135図１～17は土師器である。１・２は器台であり，３は高坏，４～13は坏形土器で，14は椀形土器で，15は花生，16は甕，17は甑である。

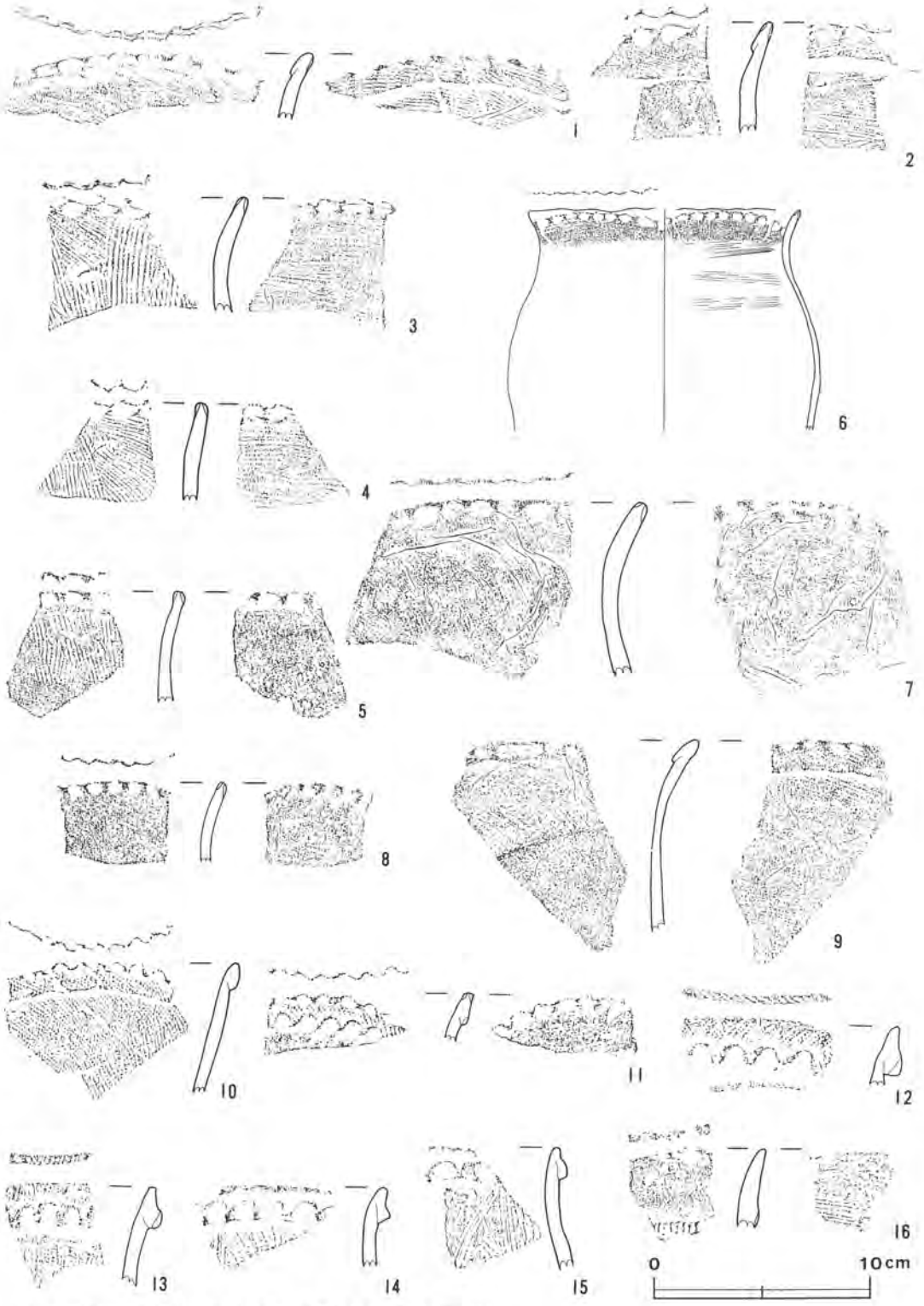
14の椀形土器は，底部破片である。底部は轆轤回転の糸切り痕と板目状の圧痕を持つ。15の花生は内面に轆轤に伴う凹凸と撫痕があり，底部は糸切りである。16の甕は，底部が上げ底気味で，底部から内彎気味に立ち上がり，胴部中位で最大径を測る。胴部から頸部・口縁部にかけて外反気味に立ち上がり，口唇部は内彎しながら立ち上がる。口縁部から頸部にかけて外反気味に立ち上がり，口唇部は内彎しながら立ち上がる。口縁部から頸部にかけては横ナデ整形，胴部から底部へは縦方向への箆削り整形が施されている。17は甑である。口縁部は「く」の字に外反し，口縁部に最大径をもち，胴下半は斜方向への箆削りが施されている。

第136図１・２は蓋である。１は，須恵器の蓋で，天井中央につまみが付くが欠損。天井部はやや丸く，なだらかに下降する。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち，身受け部が「く」の字状に屈曲し，天井部は横ナデ調整。２は，瓦器質の蓋で天井部の破片である。天井部はやや丸くなだらかに下降する。器肉は厚く天井部は横ナデ調整。

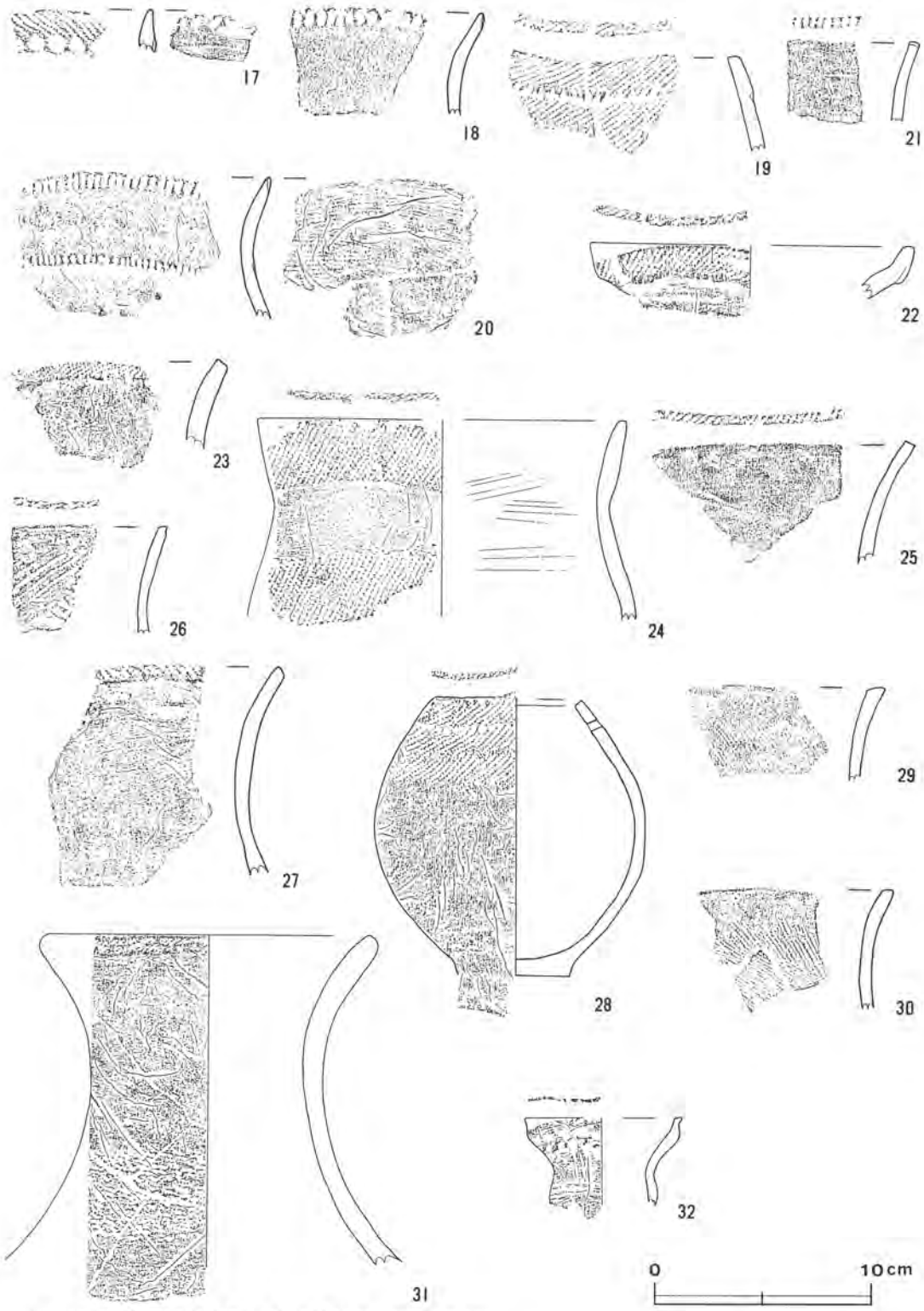
第145図１～17は、土製品・石製品・ガラス製品である。１は石鏃で片脚を欠損する。２～３は紡錘車で，表裏面・側面に箆描きによる格子文が施され，中央部に一方向からの孔が穿たれている。３は台形の断面形を呈し，無文で表裏面・側面に箆状工具による削りが施され，中央部に一方向からの径1.7cmの孔が穿されている。４は土玉で中央に孔が一方向から穿たれ、５は土製勾玉で，Ｃ字形に彎曲し頭に0.4cmの孔が穿たれている。６はガラス製小玉で，中央部に径0.4～0.5cmの孔が穿たれている。７は土製円板で，８は管状土錘で，中央部に径0.5～0.6cmの孔が穿たれている。９は土製支脚，10・11は羽口で，11は瓦器質の手焙である。



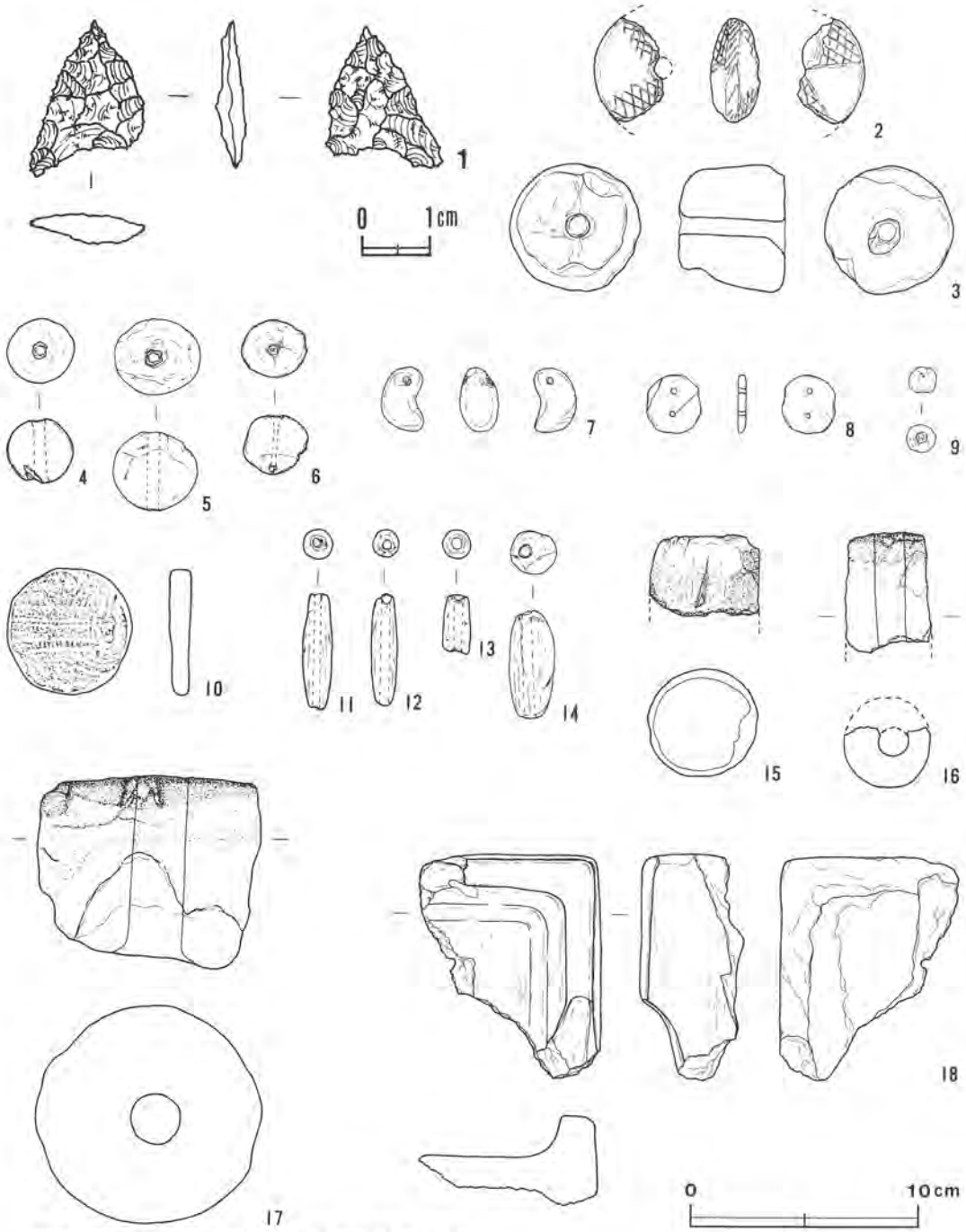
第132図　遺跡内出土弥生式土器実測・拓影図



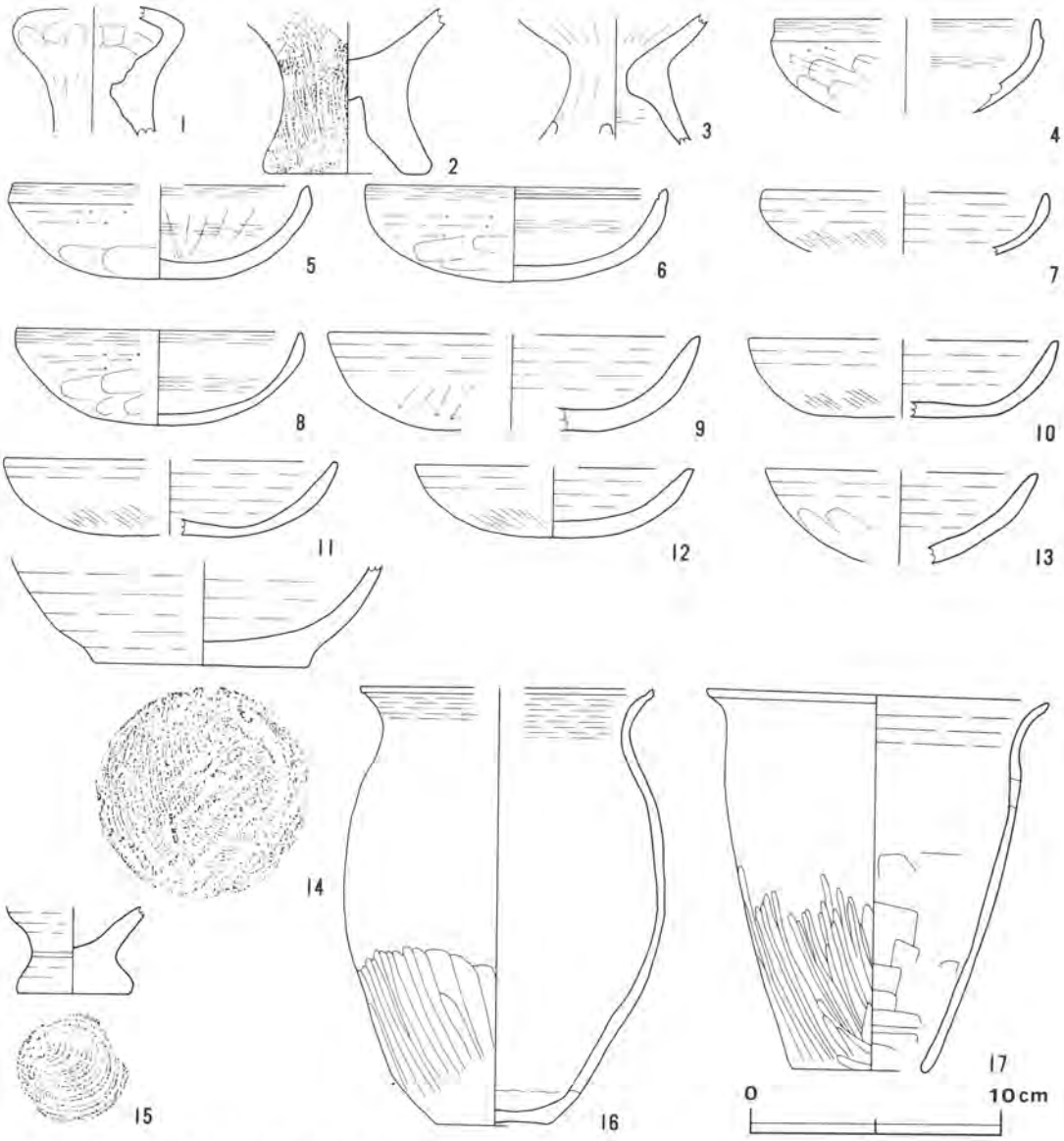
第133図　遺跡内出土弥生式土器実測・拓影図 (1)



第134図　遺跡内出土弥生式土器実測・拓影図 (2)

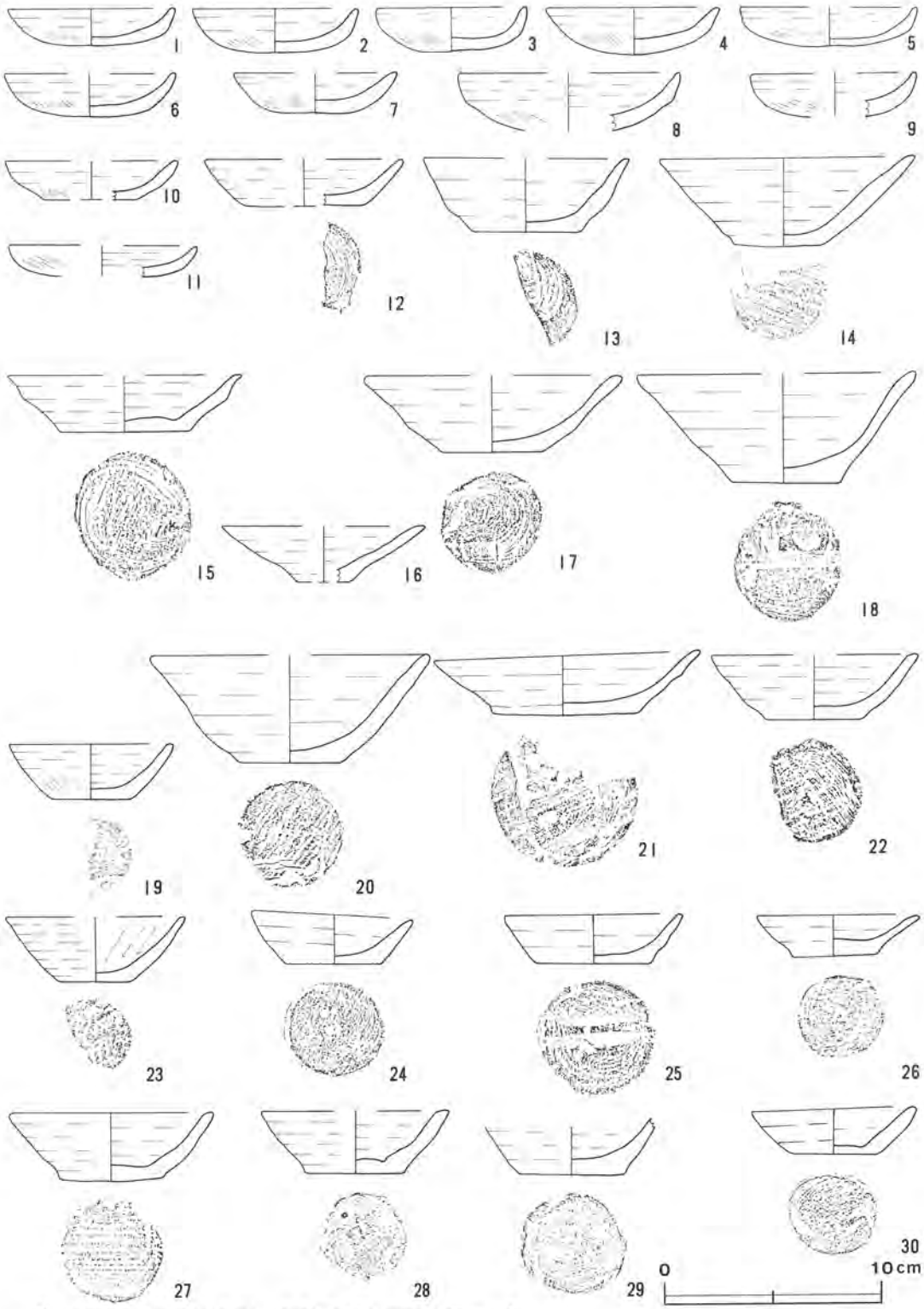


第135図　土製品・石製品・ガラス製品実測図

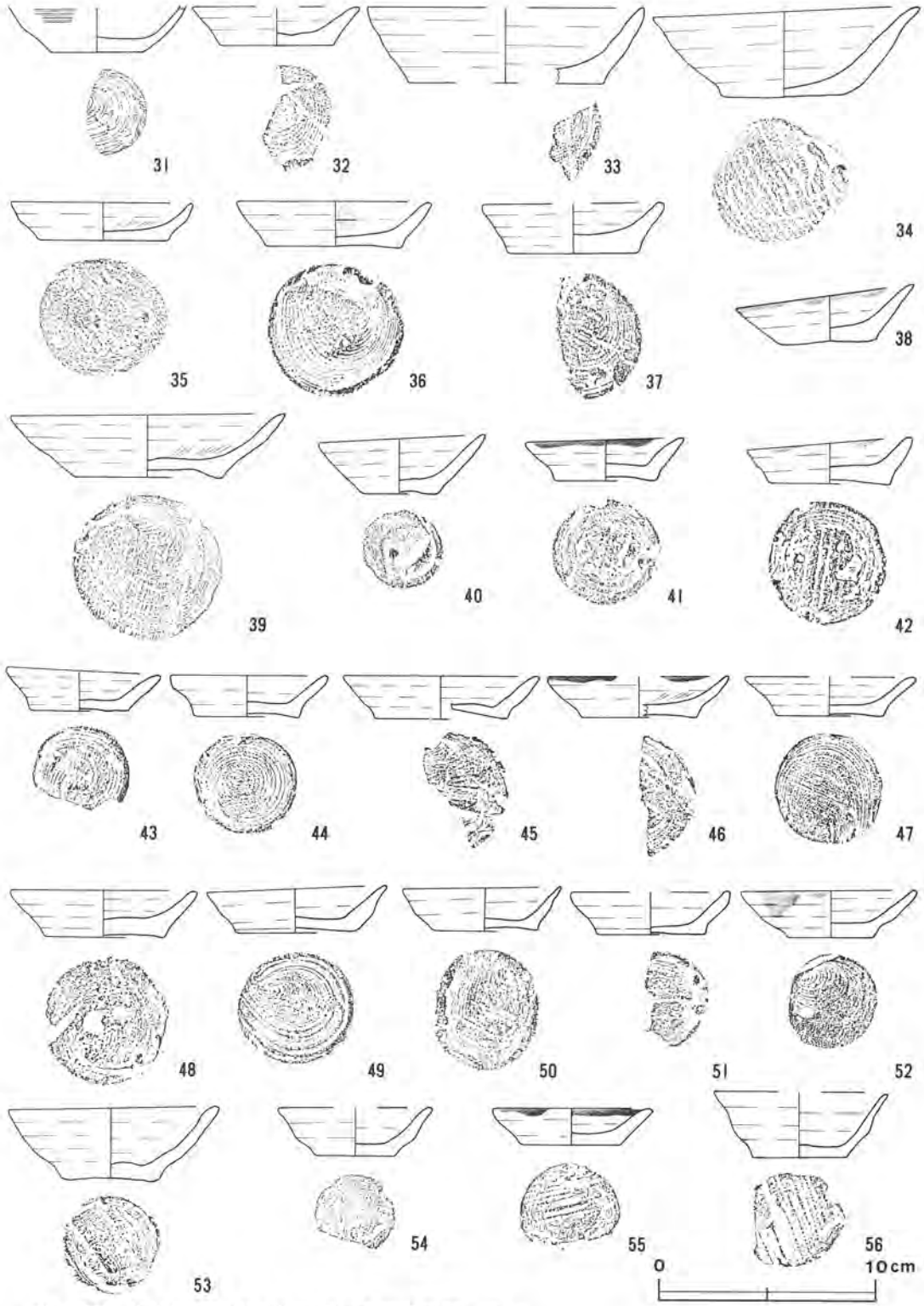


第136図　遺跡内出土土師式土器実測・拓影図

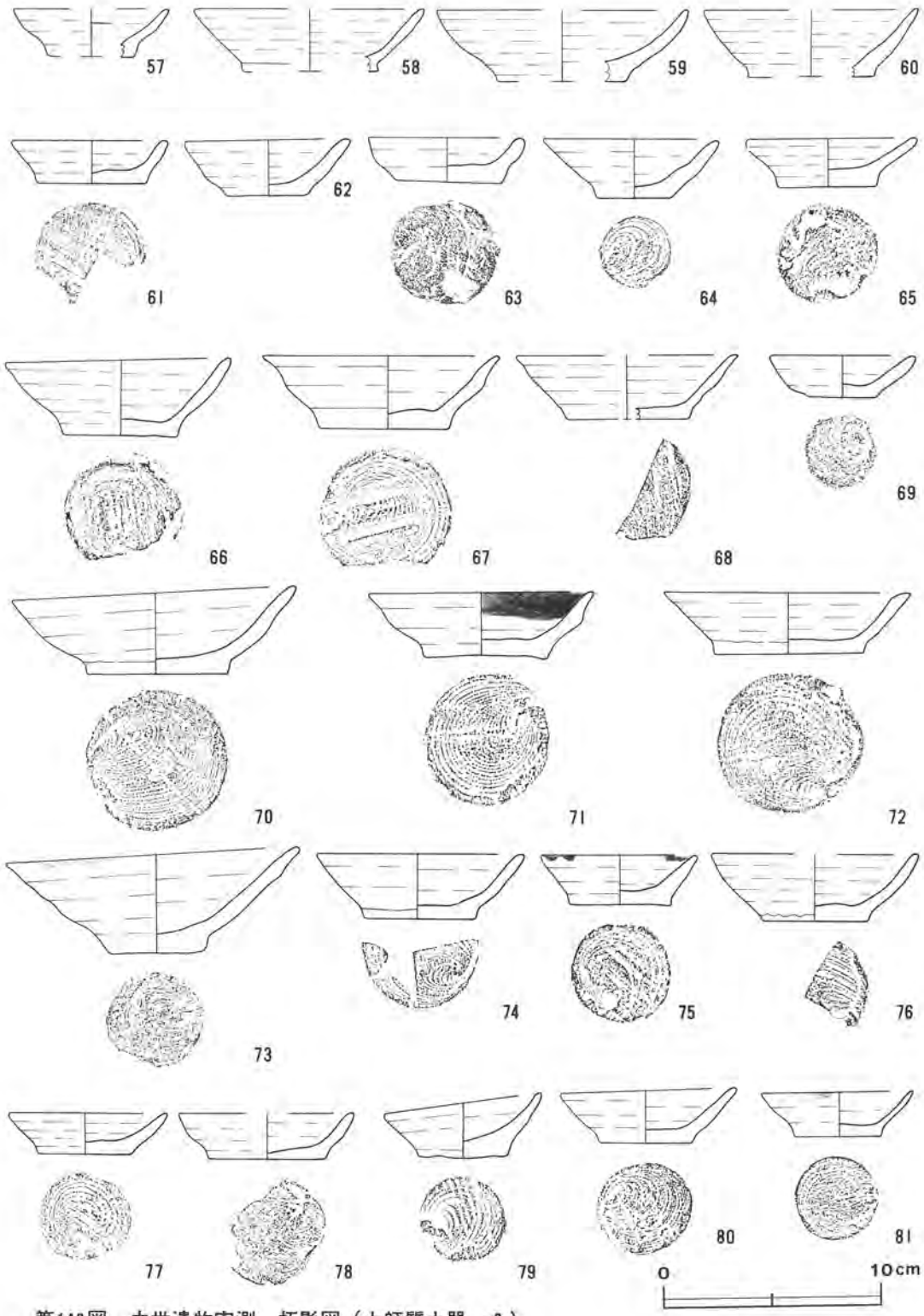
第137図　遺跡内出土遺物実測図（須恵器・瓦器）



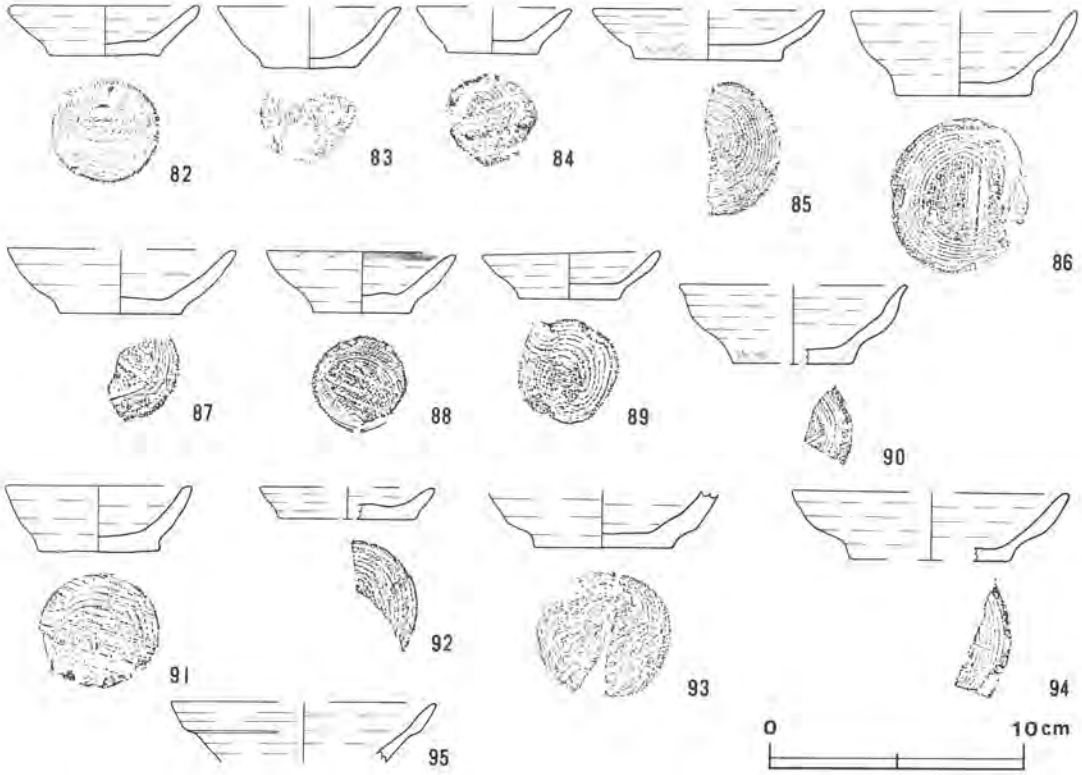
第138図　中世遺物実測・拓影図（土師質土器－１）



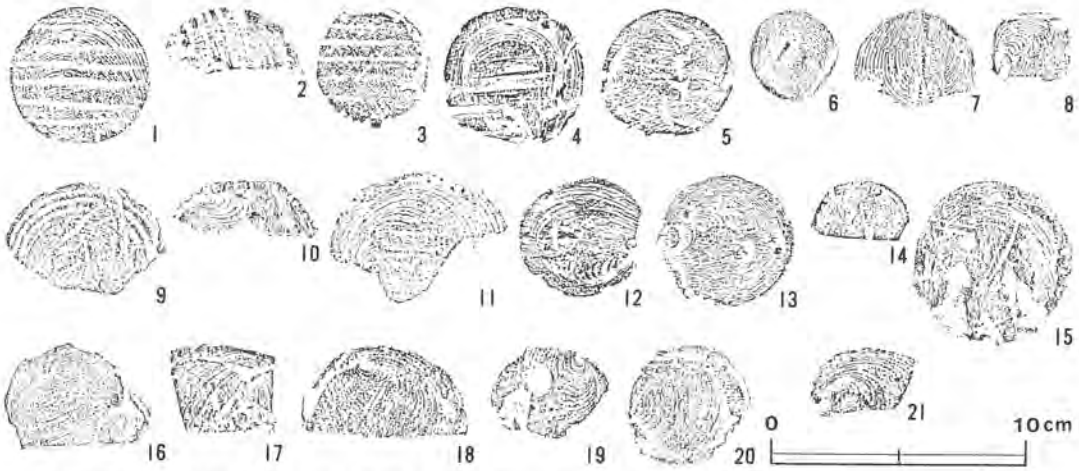
第139図　中世遺物実測・拓影図（土師質土器－２）



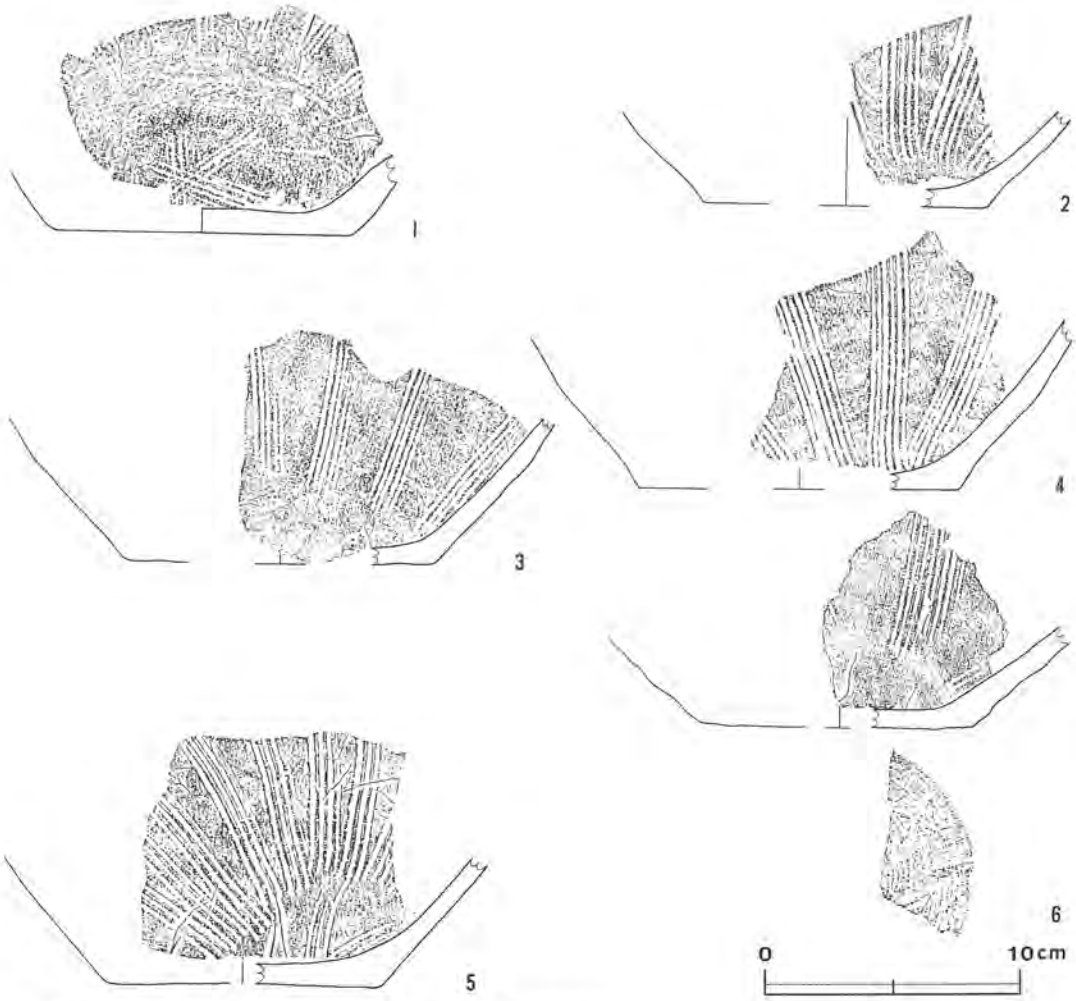
第140図　中世遺物実測・拓影図（土師質土器－3）



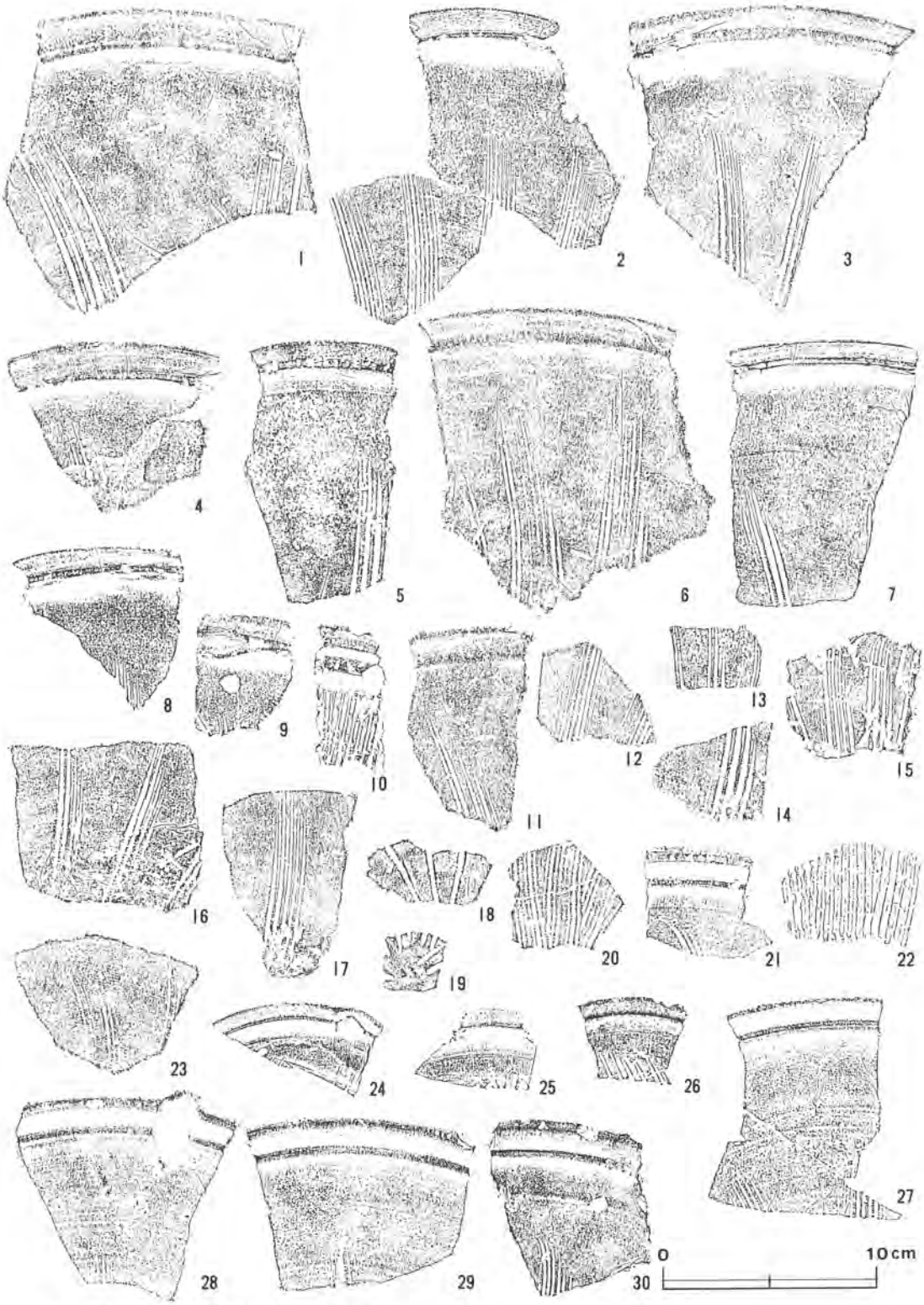
第141図　中世遺物実測・拓影図（土師質土器－４）



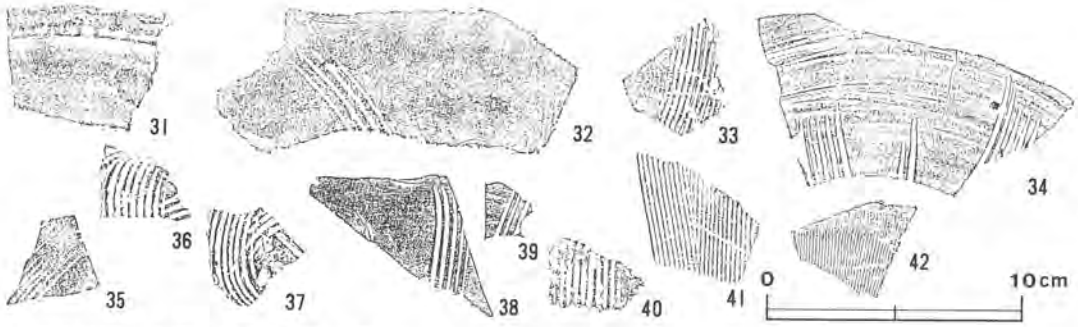
第142図　中世遺物拓影図（土師質土器底部に板の圧痕の残るもの）



第143図　中世遺物実測・拓影図（陶・磁器・擂鉢）



第144図　中世遺物拓影図（擂鉢－１）



第145図　中世遺物拓影図（擂鉢－２）

第4章　ま　と　め

第1節　弥生時代～奈良時代

本年（昭和61年）度調査区から検出された弥生期の遺構は，住居跡8軒，古墳期の遺構は住居跡7軒である。昭和58～60年度調査区からは，弥生期16軒，古墳期18軒，隣接する屋代A遺跡からは弥生期の住居跡28軒，古墳期の住居跡26軒が検出されている。これらの住居跡のうち，古墳時代に比定する51軒の住居跡をさらに分類すると，古墳時代前期（五領期）に位置する住居跡は8軒，古墳時代後期（鬼高期）に位置する住居跡は36軒である。住居跡は，いずれも当遺跡の南東から北西方向にのびる支谷に面した，標高23～25m前後の比較的平坦な台地上に位置している。

以上の点から，屋代A[(1)]・B[(2・3)]遺跡で調査された集落形態（住居跡の分布）や，集落の営なまれた時期等から把えた場合，両遺跡は，弥生時代から古墳時代にかけて台地上で同一集落を形成し営まれたものと考えられる。

また，本跡南側に検出された溝（上幅3m，底幅20cm，深さ1.5mの断面形「V」状を呈する）の検出であるが，調査区域内では、その全容を把握することは困難であったが，溝の両端は，調査区域外の台地崖面に延びていることが予想され，溝の形態・溝内から検出された住居跡の存在を考えた場合，台地北側に広がり，屋代A・B遺跡の集落とは，別の集落構成をするものと考えられ，調査されたこの溝は，環濠としてとらえられる。

環濠の機能・形態を考えた場合，おおむね集落の区画と防禦とが考えられるよう。また，遺跡は舌状台地上に位置し，外に対しての保護・防禦が考えられ，弥生期の高地性集落とともに，城塞的機能ももちあわせていることが考えられる。

また，環濠は，対人間（集落対集落）または，対獣から集落全体を守る役割とともに，一集落の区画を示す施設としても考えられる。

環濠集落内から検出された弥生期の住居跡は2軒である。第44号・59号住居跡内の埋設炉内から出土した土器が，千葉[(4)]県内で出土している弥生中期宮ノ台式期の土器に比定されるものである。

この土器は，深鉢形を呈し，口唇部に指頭による押捺が施され，口唇部は波状を呈し，頸部から胴部にかけて刷毛目が施されている。

これらの土器は，南関東に主に出土し，竜ヶ崎地区で調査された屋代A遺跡の第31・49号住居跡，屋代B遺跡第9号住居跡からの出土もみられる点から，屋代地区における弥生期の集落構成は，台地南側の環濠集落から台地東側へと移動して営なまれたことが窺える。

弥生時代・古墳時代の住居跡の規模と形状については，屋代B遺跡－II－にて報文されているが，これらも含めて，各期の集落構成について述べる。

弥生時代の住居跡は，その大部分が中期後半から後期に属し，屋代A・B遺跡全体を考えた場合該期の所産とみられる。

また，これらの住居跡には，斉一性があり，平面形は楕円形を基調とするものと隅丸方形に近い形態の二大別ができるが、前者は僅かに存在し，殆どが後者に属する。隅丸方形に近い形態をとる住居跡は一般的に規模が小さくなる様相を呈する。

屋代A[(2)]・B遺跡から検出された弥生期の住居跡は，規模の上で長軸5～7m，短軸4～6mを測る。

また，住居跡の内部構造である柱穴・炉跡・床面等にも比較検討すべき箇所はあるが，住居跡の使用面積等の関連から，炉跡の有・無や位置によって時間差や時期差は認められるが，大部分が住居跡の中央部に炉跡を構築している状況等から，時間差は考えられても時期差には大きな相違点は認められないと考えられる。

さらに、調査の段階で，時間差・時期差が明確にとらえられるものとして重複住居跡があるが，この場合同一住居跡内での重複には表面上変化は認められないが，貼床等でその差を認める以外ないが，貼床等も検出されない状況下では判断もむずかしい状況と考えられる。重複関係で貼床がおこなわれるのは一般的であるが，状況によっては重複関係を捉えるのも困難をきたす場合もある。

屋代B遺跡では検出されなかったが，屋代A遺跡からは、弥生期の重複する住居跡が検出されている状況から，構築→廃絶→構築という過程が考えられる。また，弥生期の集落の中で、重複例が顕著に認められる時期は，弥生時代中期に多く認められ，後期に入ると減少することがいわれているが，これらは，弥生期の集落増大・生活・社会環境等の変化に関連するものと考えられる。

次に，集落構成の変遷であるが，屋代A・B遺跡の中で考えられるのは環濠集落と，これ以外の集落の存在である。

台地の南側に検出された環濠集落が時間的に古い時期に位置づけられるものと考えられる。

これらの点から，屋代A・B遺跡の集落構成は，台地の南側に古い時期（弥生時代中期末）に集落が営まれて，後期に入り，台地東側に入り込む支谷を廻る形で集落が形成されたものと考えられる。

竜ヶ崎地区における弥生期の集落は，南東部の台地に検出されている傾向が窺える点から，今後，南関東との比較検討が必要であり，特に，千葉県内における印手式土器との系譜が課題であり，今後検討を加える必要があるものと考える。

古墳時代の住居跡は，屋代B遺跡からは25軒が検出され，その内五領期に比定されるものが3

軒，鬼高期が22軒である。屋代A遺跡からは五領期が5軒，和泉期が7軒，鬼高期が14軒検出されている。

五領期の住居跡規模は，平均5.5×5.0m前後で平面形状は隅丸方形を呈し，鬼高期に入ると住居跡の規模に若干差が認められ，全体に5～7m前後を測り，方形ないし隅丸方形を呈する4本柱の住居跡で，北または北西壁に竈を有する住居跡が全体を占める。

屋代A・B遺跡から検出された該期の住居跡は，一つの規則性をもって形成された様相を呈する。

これら集落の構成を考えた場合，弥生時代中期には，台地上の南側に位置した集落が，弥生時代後期には台地の東・北側へと集落が移動した事が捉えられ，その後古墳時代に入り，五領期・鬼高期にも引き続き台地上で集落が営まれたものと考えられるが，この場合あくまでも生活基盤となる農耕は，台地東側より北に入り密んだ小支谷を対象としておこなわれ，生活が営まれたものと考えられる。

さらに，古墳時代における古墳（塚）の問題である。竜ヶ崎地区において古墳を有する遺跡として，長峰古墳群[5]，大塚山古墳群[6]，奈戸岡古墳群[7]，北方町古墳群[8]があるが，いずれも小野川流域の台地上に形成されているが，古墳（塚）を持たない該期の集落・集団の存在が多いことが遺跡分布・遺跡調査結果[7]から判明している。

また，和泉期に入ると集落は減少し，単一の集落構成がみられ，鬼高期に入ると集落が増大する傾向を示す。

以上の点から，屋代台地上で検出された古墳時代の集落も，台地周辺の小さな小支谷を使用して生産活動をおこない，時期による大巾な移動はなく，遺構の増減がとらえられるだけであり，長期間にわたって台地上で集落が営まれたことが推測できる。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の住居跡は，屋代B遺跡からは3軒検出され，その内真間期に比定されるものが2軒，国分期1軒である。屋代A遺跡からは国分期9軒が検出されている。

真間・国分期の住居跡規模は，鬼高期の住居跡に比べると一般的に小さな住居跡で，規則性をもって構築されている。

屋代A・B遺跡から検出された該期の集落構成は，古墳時代から続く集落構成と生活基盤である農耕地の存在する場所が引き続いて使用されていたことが窺える。生活基盤である農耕地は，台地の南側に広がる湿地帯ではなく，遺跡の東側に入り込む支谷を使用し，さらに台地上でも耕作をし小支谷を中心に集落が営まれたものと考えられる。

また，屋代A遺跡[8]で調査された第5号住居跡から出土した須恵器に，「信太郎郡朝 □ □

口五位 $\boxed{}$ と書かれた墨書から，地名（信太郡朝夷郷）と官位（五位）が読みとれ，奈良時代以降，屋代の地にも「郷」を中心とした集落構成が編成されていたことも窺える資料である。

第2節　中　　世

(1) 館跡について

昭和61年度の調査によって，屋代城館跡の全貌が把握され，本跡は館跡から城郭へとの変遷がおこなわれ，変遷に伴っての改修工事が実施されたことが判明した。しかし，遺構の機能や変遷過程を明確に捉えることはできなかったが，堀の形態・位置等から屋代城館跡の創設期の館跡についての知見を述べることにする。

屋代館跡は，調査の結果東西60m，南北80mの方形を呈する堀(堀上幅２～３m，下幅0.2～0.3m，深さ1.5mの断面「V」状を呈する薬研堀）が廻り，南側に喰い違いの馬出し（虎口）を付随した方形館跡である。また，掘立柱建物跡，井戸，溝は重複関係が激しく適確に捉えることはできなかった。特に建物群は，柱穴の分布が第５号土塁下に延びていることもあり，全容を把握することは困難をきたしたが，柱穴の重複関係から，城跡に移行する間にも何度が建て替えがおこなわれたことが窺える。建物の位置は，堀に平行する形で検出され，井戸は建物群に伴っていたと考えられる。井戸として機能していたのは，第６・７・８号の３基と考えられる。

土塁の検出されなかったが，第10・20・22号堀の内側に土塁が廻されていた可能性が，堀の堆積土の状況から示唆されたが，第10号堀の西側は拡張の段階で掘削され消滅してしまったものと考えられる。

虎口は，第22号堀の南側に馬出しと，第10号堀の北西部・第20号堀の北・南端部の３ヶ所が考えられる。また，第10号堀の北側の堀底・壁に柱穴痕が検出されたことから，木橋の存在も考えられ，外郭部と内郭部との通路として使用されたものと思われる。

館跡は，館主の生活の場であり，本跡で検出され遺構・遺物は日常生活に使用された場であり生活用具であったと考えられる。さらに，館跡は，その地域・土地を支配する場であり，生活拠点でもある。

屋代館跡の位置する東条荘社村（竜ヶ崎市八代町）は，12世紀に北条氏による『得宗領』として支配され，東条荘内の一拠点として館跡が築造されたものと思われ，鎌国幕府が倒壊して，建武政府に没収される14世紀半ばの約２世紀の間に軍事的・経済的な機能を備えた館として営まれたものと考えられる。

調査区域内から検出された墓壙群や，墓壙内から出土した遺物（和鏡・薬師如来立像・簪・笄・六器・銭）は，この時期に埋葬されたものとして捉えることができよう。

以上のように，屋代館跡は，鎌倉期中頃から室町時代前半に営まれ，その後戦国期に入り，城郭として変貌していったものと考えられる。

注　参考文献

(1)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６「成沢遺跡・屋代Ａ遺跡」茨城県教育財団　昭和57年

(2)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13「屋代Ｂ遺跡Ｉ」茨城県教育財団　昭和61年

(3)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15「屋代Ｂ遺跡II」茨城県教育財団　昭和62年

(4)　佐倉市大崎台Ｂ地区遺跡調査会「大崎台遺跡発掘調査報告Ｉ」1985年

(5)～(8)　鈴木秀雄「竜ヶ崎郷土史」竜ヶ崎市　昭和33年　茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」昭和52年

(2) 城郭期について

これまでの調査結果や文献資料等との符号から，屋代城館跡の築造に関する資料は何も伝わってはおらず，現在迄の調査資料や若干の文献資料から築造時期を捉らえる以外にない。前節までに各項目について，調査の報告と若干の考察を行い，事実報告の最終的なまとめとして，屋代城館跡の築造について若干述べたい。

昭和58年度から昭和61年度にかけて屋代B遺跡（屋代城館跡）の調査を実施し，屋代城館跡は中世館跡から城跡へと変遷していく過程で，屋代城跡と最も結びつきの強い屋代氏について，文献上の記述から考えてみたい。

館跡の造営された12～13世紀の竜ヶ崎地方の東条荘は，建長八年（1256）に立荘されて東条荘となり，東条氏の支配下に置かれていたが，その後，東条荘への北条氏の侵略が始まり，東条氏から北条氏へと支配が変わる時期でもあった。竜ヶ崎地方において，北条氏一門による支配，すなわち『得宗領』として，屋代（社村）地区も北条氏の支配に入ってものと考えられ，この時期，屋代台地上に館跡を築造し，東条荘内における北条氏の支配体制を確立したものと考えられる。

その後，元弘三年（1333）鎌倉幕府の倒壊とともに北条氏が支配していた東条荘内においても新たな局面を迎え，東条荘は建武政府に没収され，建武政権の所領となった。しかし，東条荘は南朝方の中心であったため，暦応四年（興国二年・1341）北朝方の足利氏の攻撃を受け，南朝方の敗北は決定的となり康永四年（興国五年・1344）馴馬城の落城を最後に，南朝方は敗れ東条荘は足利氏の勢力下に入ったものと考えられる。

また，屋代館跡も北条氏の得宗領から建武政権（南朝方）の所領となり，さらに足利氏の所領へと変遷し，館跡も廃棄されたものと考えられる。

竜ヶ崎地方は南朝勢力の壊滅とともに，足利氏の支配に入り，南北朝～戦国時代へと続き屋代氏・屋代城跡もこうした背景の中にその存在が現われだしたのである。

屋代氏については，文献上にその存在が認められるのは，興国四年[(1)]（1343）に「集古文書24」別府幸実軍忠状写に「屋代彦七郎信経に同道仕りて，信太庄に馳せ向うの処…」と登場する。しかし，この「屋代信経」に関しては，江戸時代末の歴史家である宮本元球が「関城繹史」に社村（東条荘社村）と屋代氏を結びつけ，文中に「土人に屋代彦七郎信経という者有り。部属のためその地理を熟するを以って師冬これをして嚮導とせしむ」とみられ，この書物・文献に長く引用されてきたのであるが，この文献を引用すれば，興国四年に屋代氏（土着の武士）が東条荘に存在し，足利方（北朝方）について東条氏（南朝方）等らと戦っていたと記載がみられ，これらについて，“市村氏[(4)]”は，「竜ヶ崎市史・別編II」の報文の中で，集古文書の内容から“現地の武士である屋代信経が別府幸実らの案内役になったのは不自然であり，むしろ別府幸実が足利方の高師冬指揮下の一軍の武将であった屋代信経に同道”と見る方が妥当であると述べている。

また，康永二年（1343）正月“別府幸実代別府秋義着到状”（別府文書[注2]）に，別府幸実の代官別府秋義が常陸国大宝城での戦功を注進した着到状である。この着到状の奥に証判が加えられ，この中に屋代彦七のものと考えられ花押がみられ，これらの点から屋代彦七と屋代彦七信経とは同一人物としてその存在をとらえられる。

また，“円覚寺文書”（永和三年）5月の文中に，屋代師国が東条荘社村を拝領した記載がみられ，この内容等から屋代信経と屋代師国が屋代氏の一族であったことが考えられ，南北朝期の動乱による戦功によって足利氏（北朝）から東条荘社村を拝領し，自領とした事も考えられる。

さらに「群書類従」第29輯，「永享以来御番帳」「長享元年9月12日常徳院殿様江州御座当時在陣衆着到」の文中にそれぞれ“屋代四郎・屋代若千代丸”“屋代越中入道”“屋代五郎”の名が見られ，これらの文中から判断して屋代氏が室町幕府奉公衆の一員であり，さらに前述の“円覚寺文書”に屋代氏と足利氏の関係が記されている点からも、屋代氏が足利氏の武将であったことが窺い知れる資料である。

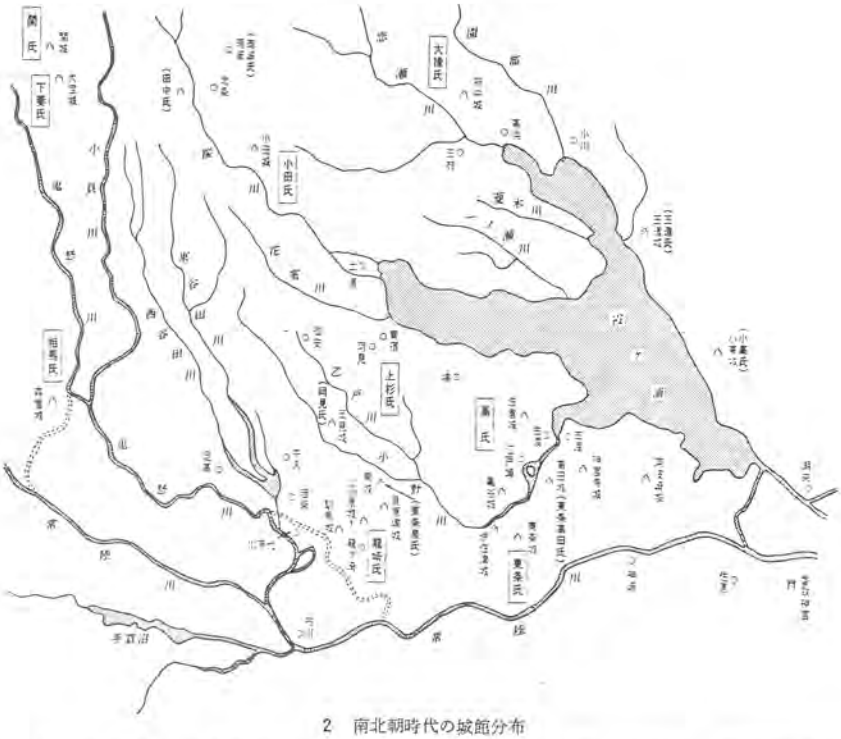
以上の点から，屋代城跡の存在は，足利氏の奉公衆であった屋代氏が，東条荘社村を拝領した14世紀中頃から15世紀初頃に，廃棄された館跡の跡地（現在の竜ヶ崎市八代）に城跡を築造したものと考えられる。

竜ヶ崎地方の14～15世紀の動勢は,永享の乱・結城合戦（1439～1441年）でその結論をみたが，この合戦は，竜ヶ崎の地が主戦場ではなく，鎌倉公方持氏・竜ヶ崎氏と関東管領憲実と土岐原氏との戦いであり，この時期東条荘社村の屋代氏は，鎌倉公方奉公衆であったとすれば竜ヶ崎氏と共に行動したことも考えられる。しかし，大永三年（1523）閏三月東条荘の「屋代要害」での戦いは，土岐原氏と小田氏の戦いであり，土岐原氏の動向の一環をなすものと考えられる。「真壁文書」（大永三年閏三月真壁宗幹宛足利基頼書状），「幸田成友所蔵文書」（大永三年四月長南三河守宛足利高基書状），「臼田文書」（大永三年四月臼田河内守宛上杉憲房書状）にその戦いについて記載がみられる。

真壁文書によれば，「屋代要害」での戦いは，土岐原治頼が近藤勝秀・臼田河内守らと小田方の「屋代要害」を攻め落して引き上げる所へ麻生淡路守が駆けつけて引きおこされた戦いであり，さらにこの戦いの結果については，「長南三河守宛足利高基書状」からこの戦いの結果は，小田方の敗北であったことが窺い知れる。

屋代氏が東条荘社村に入部した時期，すなわち14世紀中頃に屋代城の成立をみることができるからであり，その後15世紀半ばの結城合戦や16世紀初頭の小田・土岐原氏の対立・抗争にあわせて屋代城・外八代城の拡張・整備がなされたものと考えられ，「屋代要害」とは，屋代氏の居城である屋代城を指差し，外八代城はその支城もしくは砦とみなすべきである。

1　龍ヶ崎地方の郡と荘園



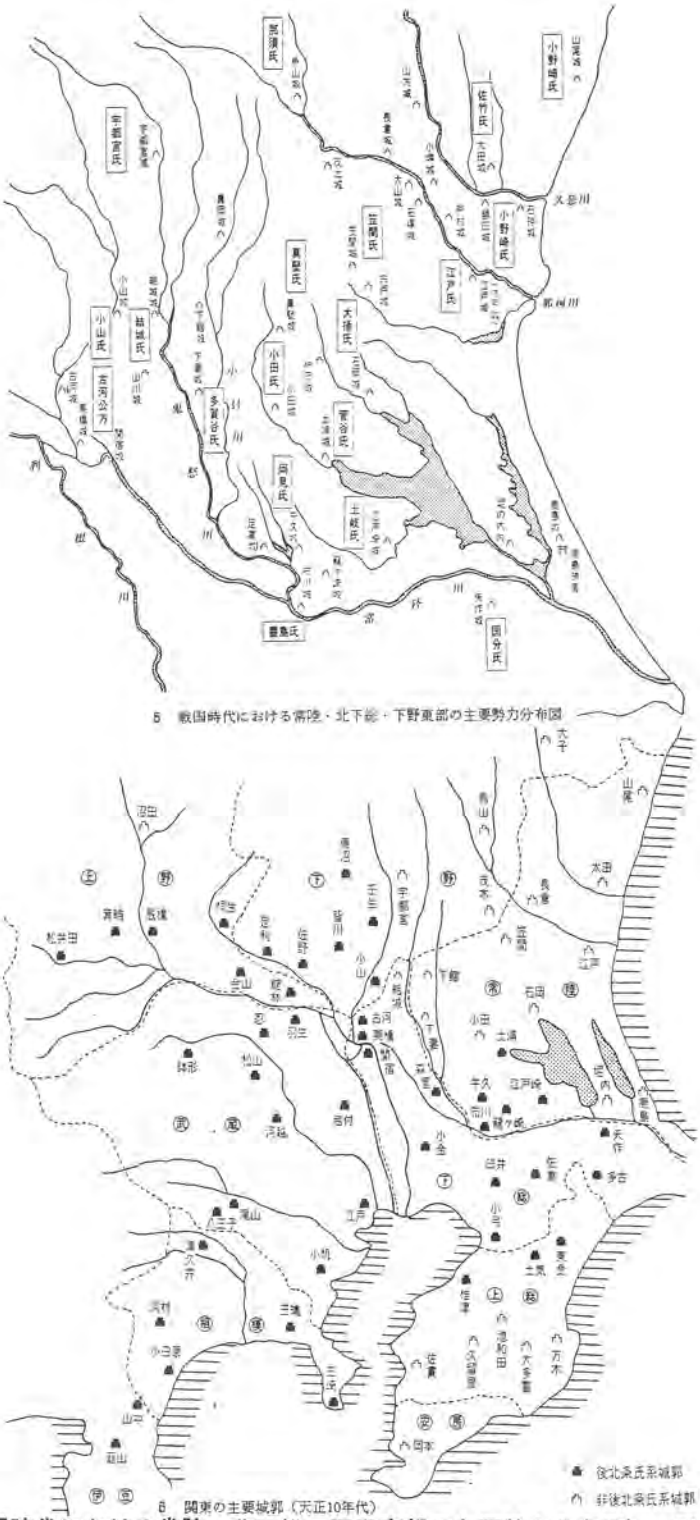
2　南北朝時代の城館分布

第146図　竜ヶ崎地方の郡と荘園・南北朝時代の城館分布（竜ヶ崎市史・別編Ⅱより）

3　室町時代の領主と城館分布

4　戦国時代龍ヶ崎地方の諸勢力と城館

第147図　室町時代の領主と城館分布・戦国時代竜ヶ崎地方の諸勢力と城館
（竜ヶ崎市史・別編Ⅱより）



第148図　戦国時代における常陸，北下総，下野東部の主要勢力分布図）・関東の主要城郭（天正10年代）（竜ヶ崎市史・別編Ⅱより）

これらの状況から考察すると，屋代城・外八代城の整備・拡張は土岐原氏に対しておこなわれたものと考えられ，屋代城・外八代城が短期間の内に整備・拡張をおこなうこにあたっては屋代氏だけの力で実施したとは考えがたく，小田氏の援助があったものと考えられる。また，外八代城の調査の結果，堀跡の検出状況から考えられることは，堀跡の整備・拡張が中途で中断された状態で検出されたことであり，こうした背景には土岐原氏に対しての切迫した社会背景が考えられる。しかし，大永三年「屋代要害」での戦いで土岐原氏に屈服し，外八代城の落城を考えた場合，屋代城においても攻撃を受け，結果的に屋代氏は土岐原氏の配下に下った事が考えられる。これらの点から，屋代氏（屋代城）は土岐原氏の配下の基で戦国期に入り，天正14～15年から17年頃に東条荘を中心に後北条氏が勢力を拡張していった関係で，土岐原・岡見・菅谷氏が後北条氏の配下に下った関係上，屋代氏もその経過をたどったものと考えられ，後北条氏の存在がより明確に東条荘内にとらえられる。

屋代城は，方形館跡から回字形城跡へと変遷し，三度にわたって拡張・整備・改築が施された事が調査の結果判明し，屋代城の最終改築は戦国期におこなわれたことが考えられる。しかし，天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻撃に伴い，北条氏の敗北に伴って後北条氏の配下であった，竜ヶ崎・牛久・江戸崎・土浦・布川の各支城は全て豊臣秀吉によって掌握され，没収所領は豊臣大名の領地として分割され，一部については残存したが，その他屋代城も含めて破棄・廃城になり，屋代城も消滅の道をたどったものと考えられる。しかし，屋代城は，大永三年の屋代要害でその存在が消滅したのか，または，土岐原氏の配下として生き残り，天正年間まで存在していたのかは定かでないが，大永三年迄の146年間は屋代氏が八代の地に確実に存在していたことは明らかである。

参考文献

暦応四年九月　関城繹史

（茨城県立歴史館蔵本）

（暦応四、興国二年）
九月六日、賊攻二小田城一、是日、又攻二下妻等諸城一（白河文書）、十二日、宗玄（北畠親房）作二手書一、乞二援白河一、先レ是下妻等諸城、亦受レ囲已数月、絶無二応援一、兵衆疲倦、戦守太苦、而（白河結城）親朝不察、以為常陸官軍之城、其数亦不レ為レ少、勢当二以足レ支一一二年一、我徐窺二賊有レ釁、諭二下野同族小山朝郷一、合レ兵撃レ之、則功業之成可レ必矣、是以雖二宗玄数趣レ援、未敢出レ兵也、故宗玄手書懇款、言二其不レ然（白河文書）、師冬以二信太荘一為二已所レ有（円密院文書）、土人有二屋代彦七信経者一、為二部属一、以三其熟二地理一、師冬（高）使二之嚮一、分二賊兵一侵二信太荘一、十七日、賊争入二其地一、競相掠略、官軍守二佐倉砦一者、棄レ砦而逃、賊転度一、入二東条荘一、東条族叛降、先レ是亀谷城為二官軍所レ拠、至レ是又攻陥レ之、仍留在二東条間一、悉逐二官軍一馴馬砦亦陥（別府文書、按今河内郡八代村、古信太郡東条地、信経蓋其地人、後有二屋代氏一蓋其後人、佐倉村在二属小田氏一、蓋砦亦族所レ守、今有二古墟一、伊佐度今称二伊佐津村一、在二榎浦上流一、今隷二河内郡一、亦古信太郡地、東条已見、馴馬在二河内郡一、而地与二東条一相接、其砦未レ詳、或云、今河内郡竜崎、曲与二馴馬一同地、後別為二一村一、其城趾、是古馴馬砦、下文称二沼田城一亦是、後土岐氏拠レ之、而竜崎名漸著）

小田治久、視二官軍勢漸衰弱一、稍懐二携貳一、宗玄頗察レ之、益憂二恢復不レ成、作レ書与二親朝一云、守城窘迫之状、嚮数告レ之、意已悉二其詳一、卿以謂レ可レ支二一二年一者、隔境懸想、或以レ有二其理一、然今日此地情勢、大不レ然也、関・伊佐・下妻三城、猶或可レ支、其余属城、豈能耐レ久、長沼其既叛降レ賊、信太荘佐倉砦・河内郡馴馬砦、官軍皆已棄法、小田治久、所レ食之地、為レ賊攝搦略尽、是以財力全屈、勢有二難レ持レ久者一、万一治久叛去、則四方官軍、膽褫気奪、莫二復可レ為者一矣、今日成敗、唯在二卿後援一著一耳、若卿不レ能二自離レ境遠出一、使二子姪輩率レ兵来援一亦可也、苟不レ然、則出二兵東海道、及高野・那須等地一、以示二出援之形一、亦足二以少助一今日兵機一也、卿設使下出二救援一、遅延十四五日上、則城中必生レ変矣、朝郷固党レ賊、決無二帰順之意一、徒望二其勠レ力、竟莫レ有二立レ功之期一焉、卿乃待レ之遷三延日月一、特非二計之得者一也、若卿而不レ援、有下奉二親王一避レ鋭之計上而已、事急、将二竢レ報処置一、故委曲言レ之（白河文書、按長沼名闕、太平記、元弘二年、配二藤原秀房於常陸一、使二長沼駿河守監レ之、尊卑分脈、長沼季行弟有二駿河権守宗親一、蓋是、而大鏡以二季房一為レ配二下野一、則難二必為二宗親一、）

已而師冬縦レ間誘二治久一、治久果潜通レ賊、宗玄覚レ之、廿二日、将レ避二小田城一、又発レ書告二親朝一云、斯境危急、嚮数言レ之、今城中果生レ変、是所レ謂進退維谷者、夫殺レ身以報二先皇一、固老臣之分耳、不レ足二以為一難事一、然身死之後、官軍嗤レ魄、若二恢復無レ期何、是所二以不レ得レ不一熟慮一也、急遽斯不レ尽レ言（白河文書）、廿三日、屋代信経等、攻二信太荘高井城一、縦レ火焼二民舎一（別府文書、按高井城、其地未レ詳、東寺文書、信太荘有二上下高井一、諸岡系図、木工左衛門尉盛綱、観応元年、居二信太高井城一、相伝諸岡氏、世居二貝原塚城一、而其地亦古信太郡、今属二河内一者、然則貝原塚蓋旧高井）

廿六日、治久叛跡全露、宗玄遣二長沼宗俊一（大輔法眼）、乞二援顕信一（北畠）、亦及二親朝一、秀仲亦遣レ書致レ意（白河文書）、是月、官軍屢与二信経所レ導武蔵賊兵一、戦二于信太東条一（別府文書）、

康永二年正月　別府幸実代別苻秋義着到状　（別苻文書）

着到

別苻(府)尾張太郎幸実代同弥三郎秋義

右、自去年康永元十二月至干今、於関・大宝城中、入御陣令越年、役所以下致警固候也、仍着到如件

康永二年正月廿三日

「尊氏・義詮代鎌倉基氏　幸実従五位下　法名行覚　委系図有ニ」

「承了(評判)（花押）」

「屋代彦七判」

康永三年二月　別府幸実軍忠状写

（集古文書二四）

目安

武蔵国別府尾張太郎幸実申所々軍忠間事

一去歴応四年五月九日、自馳参常州苽(瓜)連御陣以来、所々御共仕候、同六月十六日、馳向干小田宝筐塔峯、致合戦追落御敵、即於西尾崎取陣警固仕訖、浅羽太郎左衛門尉、玉井太郎四郎令見知候畢、

一同七月八日、於玉取警固、同十三日、於若森合蔵(戦)仕訖、同九月六日、合戦之時致忠節之条、之河(立)二郎左衛門尉見知仕候畢、

一同十七日、屋代彦七信経同道仕天、馳向于信太庄之処、佐倉城凶徒等令没落候訖、討渡伊仗(佐)度之入海、馳参東条城之処、御敵降参、同日相向亀谷城之刻、又以降参、同廿三日、押寄高井城、焼払所々候訖、

一同十一月十八日、至干小田降参之期、役所警固、同十二月三日、立玉取御発向関城之時、御共仕畢、同八日於関・太(大)宝中入取陣、於其夜合戦仕、同廿六日夜討合戦之時、中間男二郎四郎被疵被射夜肩畢、及散々合戦、追出御敵畢、奈良五郎左衛門尉・若和泉太郎次(左)郎見知畢、

一越年改康永元五月五日・同十二日合戦仕、六月廿一日、責入下妻口、散々仁合戦仕被疵被射通左膝畢、若党河崎与次被疵被射通右股、中間男九郎次郎被疵被射右膝畢、浅羽太郎左衛門尉・玉井参川五郎・奈良新左衛門尉見知畢、

一八月十二日合戦仕、同九月十二日、致夜討合戦候了、毛呂八郎見知畢、

一越年康永弐年正日廿六日、於関城合戦仕候畢、同十二月六日・同九日合戦仕畢、

一四月廿四日、合戦被疵被射通左手中指訖、浅羽後郎兵衛尉・成田四郎次郎見知畢、

一同廿六日合戦仕、同六月廿三日合戦仕畢、

一同八月廿三日合戦之時被疵（被射通右足踝）、矢尻折留之間、度々雖及刹死、終以不去於陣中、或出若党・中間、或出良（郎）従・家子、致兵船黒子己下所々警固訖、関・大宝城没落之後、向伊佐城卜西野口退治御敵仕訖、大将武州府中御返之間、御共仕候訖、

右、軍忠大概如此、然者賜御証判、為備後日亀鏡、恐々言上如件、

康永参年二月　日

「（証判）（花押影）（高師冬）」

大永三年閏三月　真壁宗幹宛足利基頼書状

（真壁文書）

屋代要害、土岐原（治頼）責落引陣候所へ、政治（小田）馳合遂一戦候、因之為合力、

麻生淡路守即時打越候、様躰事、拙共未聞候、此度各令調談、北郡へ馳、

弥相勤可然候、巨細町野淡路守可申遣候、謹言、

閏三月九日（大永三年）　（花押）（足利基頼）

真壁右衛門佐（宗幹）殿

永禄四年　関東幕注文

（上杉文書）

（前略）

宅（宍）戸中務太輔　すハま

彼家中友郡大和守　きっこう内ニまつかハひし

小田中務少輔　すわま

筑波太夫　おなしく

柿岡形（刑）部太輔　同

岡見山城守　同

信太丘部太輔　きっこう之内ノ根菊

同掃部助　おなしもん

田上部紀四郎　同

福田左右亮　同

菅谷左衛門尉　きっこう之内之きちかう

同次良右衛門尉　同

平塚形(刑)部太輔　　ひたりともゑ

屋代彦四郎　　丸之内の上文字

真壁安芸守　　ハリひし

彼家中白井修理亮　　ハリひし

坂本信濃守　　ともへニかしら

高久将監　　一文字ニいしたゝミ

多賀谷修(政経)理亮　　一文字ニ瓜之文

彼家中勝徳寺　　左ともへ三かしら

行田宮内少輔　　はしり龍

水谷弥十郎　　ともへに二ひきりやう

（後略）

明治三十二～三十四年新編常陸国誌

（宮崎報恩会刊行本）

屋代（夜志呂）

屋又ハニ作ル、貝塚(原塚)原村ノ南ニ在リテ、東、西方、辺田、新道、道地、宮下、新屋代、稲塚、二ツ党等ノ小名ヲ有ス、即倭名抄、信太郡稲敷ノ本郷ナラント云ヘリ、天正年間、社佐渡守コヽニ居ル、基城址今柱昌寺ノ辺ニ存ス、元禄十五年ノ石高九百十四石八升二合、

《星住院》（天台宗、小野逢善寺末、高福山神宮寺ト号ス）除地、《東光寺》（天台宗、小野逢善寺門徒、恵日山慈眼院ト号ス）、《普門院》（天台宗、小野逢善寺門徒、極楽山本願寺ト号ス）、《慶昌寺》（曹洞宗、江戸崎管天寺末）、

(3) 屋代城館跡について

屋代B遺跡（屋代城館跡）は，昭和58年度調査開始以来4年の歳月を仕やして，屋代城館跡の全容が把握された。

屋代城館跡は，現在の竜ヶ崎市八代町の台地上の平坦な場所に，鎌倉時代後半～南北朝期にかけて館跡としてその容姿を表わし，その後城郭として拡張・整備され，南北朝・戦国時代へと存続した。

城館跡に伴う遺構は，3期にわたって造営・改修がおこなわれたことが窺われたが，内郭部における遺構の機能や変遷過程は重複が激しく，適確な状況把握は不可能であった。また，城館跡の構築されている台地上に付随する施設（堀り切り）等については，調査区城外に存在が考えられることから城館跡の全容を適確に判断・状況把握はできなかったが，屋代城館跡の調査結果と文献上から判明したことについて知見を述べることにする。

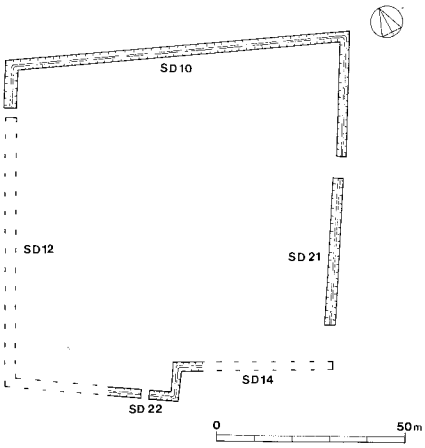
1　調査結果からの城館跡の変遷について

第Ⅰ期（第149図）

屋代城館跡の調査の結果，第Ⅰ期に構築されたのは，第10号・21号・22号堀が方形に廻り，南側に虎口をもち，方80m前後の方形館跡と考えられる。第10号堀は，西側区域で第12号堀によって破壊され，その存在を把握することは困難であったが，調査状況から判断すると第22号堀に連なるものと考えられる。

また，第10号堀の北西側には，規則的に配列された柱穴が検出されたことから，木橋が架かけられ虎口として使用されていたものと思われる。

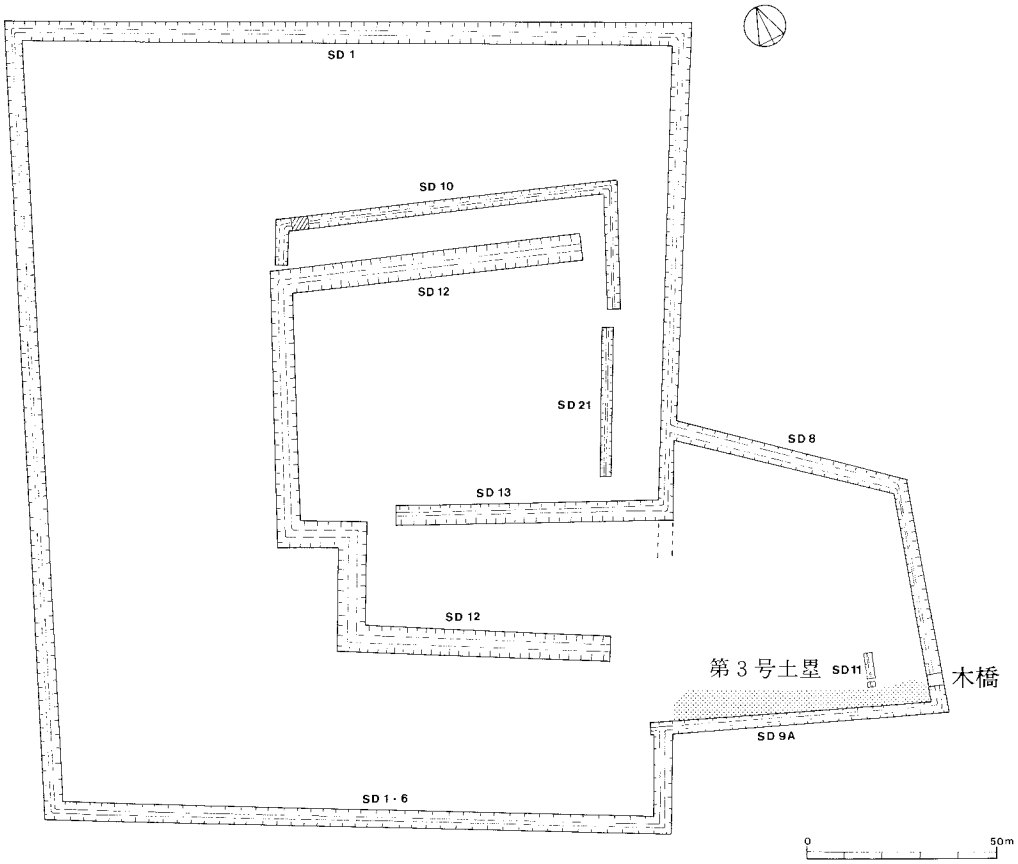
この時期の館跡に伴う遺構は，第5号土塁付近に掘立柱建物跡の存在が確認できたが，柱穴列は土塁下に延びてその全容を把握する事はできなかった。



第149図　屋代城館跡　第Ⅰ期

館跡の南側・西側に土坑群（墓壙群）が認められ，これら墓壙は細い溝によって方形に区画された中に存在し，他の3ヵ所で確認された墓壙群のいずれも細い浅い溝によって区画された中から検出されたが，館跡の内から検出された墓壙群は，いずれも戦国期以降に造られている。

以上の様に，墓域として館跡の周囲に構築されている状況から，館跡に伴っての墓域の存在が窺い知れる。



第150図　屋代城館跡　第Ⅱ期

第Ⅱ期（第150図）

第Ⅰ期の館跡から城郭へと変遷する時期と考えられ，外郭に166m，南北212mの外堀を構築し，東西に7.3m，南北8.5mの方形を呈する郭（Ⅱノ郭）をもうけて城内への出入口とする木橋（虎口）が架けられている。虎口部の堀（第９号堀，堀上幅1.5～2.3m，下幅0.7～1.1m，深さ0.7～1.3m）は，断面形「__/」状を呈する箱形堀で，郭外周を「⊓」状に堀を廻らしている。

土塁（土塁基底面の最大幅2.5～2.7m，上部幅0.65～0.85m，高さ2.5～2.6m）は，堀の内側に確認された。

Ⅰノ郭は，第10・21号堀の北側・東側部を残し，内側に新たに内郭部を囲む形で第12号堀を廻らし，更にⅠノ郭（内郭部）と第12号堀の間に第13号堀を掘り，内郭部を囲む形にして構築している。第12・13号堀は，いずれも外堀の第１号堀と接続している。

Ⅱノ郭からⅠノ郭への通路は，第12・13号堀の間の曲輪であるⅣノ郭を通り，第12号・13号堀間で喰い違いの堀を構築して通路としている。

この時期，Ⅲノ郭には，墓域が存在していたものと考える。

第Ⅲ期（第151図）

屋代城の第Ⅱ期から第Ⅲ期への過渡期は，大巾な改築がおこなわれた時期であり，大永三年の東条荘の「屋代要害」での土岐原・小田氏との戦いに関連があったことが窺い知れる。

この時期，東条荘・信太荘の社会状況，各支配者の動向を考えた場合，東条荘における屋代氏の位置関係から，土岐原氏に対しての防禦施設の拡充をおこなわなければならない状況下であり，屋代城の砦または支城と考えられる外八代城と本跡屋代城の大巾な増改修がおこなわれたことが考えられる。

屋代城の第Ⅲ期における城跡の増改築において最も強固に造り変えられた箇所は，虎口と第1号堀の整備拡充であったと思われる。

虎口は，城館跡の南側に設置され，計3回（第54図）にわたって改修工事がおこなわれ，最初に「枡形」虎口を造り，その後枡形虎口を埋め戻して「馬出し」を構築し，第54図の3に示した如く，堀（第1B号堀）を外側に廻らし土橋を用して城内への出入口とした。さらに虎口は，第54図4に示した如く「枡形」虎口を埋め戻し，土橋部分を掘り込んで木橋に造り替えられている。

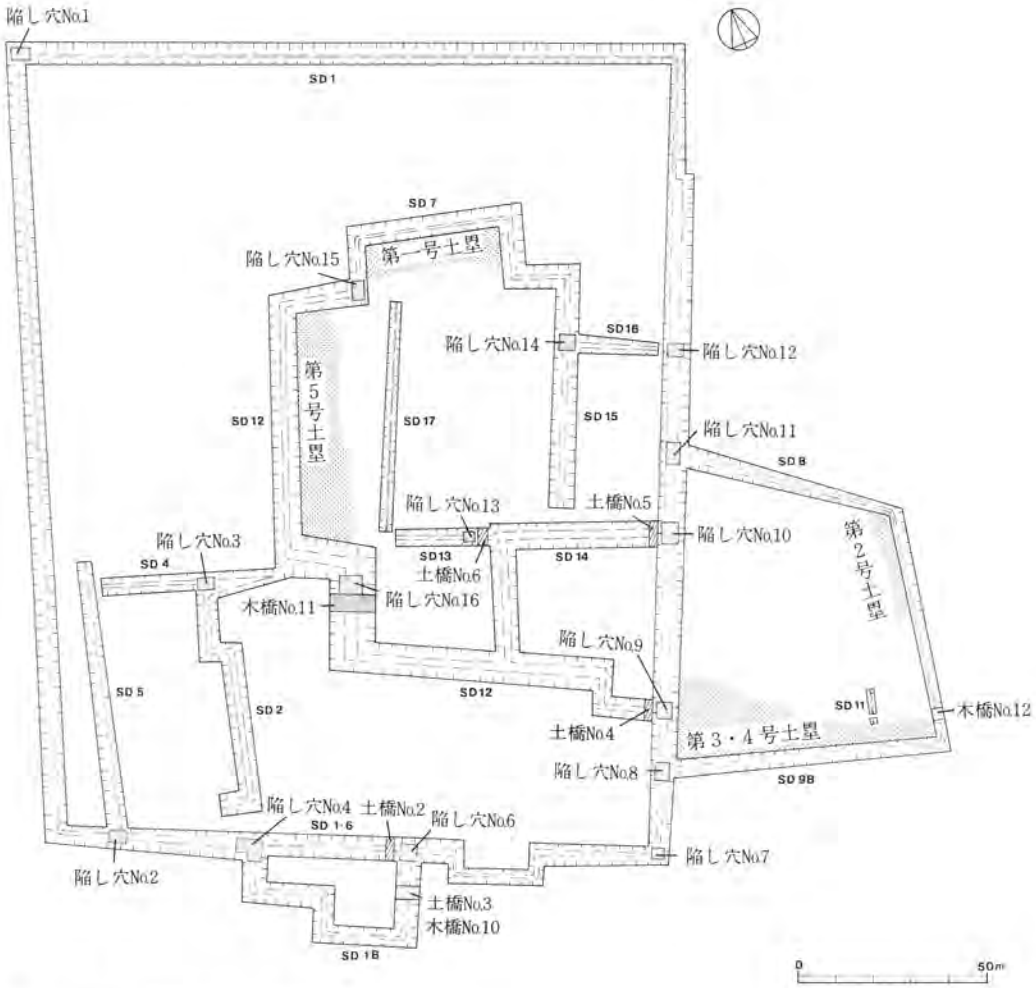
また，第1号堀の東側に「折り」（張り出し）を造り，木橋に対しての防御・攻撃施設を構築している。さらにこの時期，城内においても，墓域区内を曲輪とする改修がほどこされ，それまでの溝に対しても増改修がおこなわれて第4・5号堀を「喰違い」にし，第2号堀と第1号堀の接する場所を「喰違い」にして，敵を虎口に一度に集中させぬことを狙ったもので，橋を長くして敵の渡る時間を延ばす工夫をし，第2号堀に「折り」を構築して，2ヵ所の虎口（喰違い）に対しての攻撃にそなえた施設を造り補強している。

これに併せて，第7・15号堀を新たに掘り，第7号堀の南側に第1号土塁を構築し，これに伴って，第1号土塁の南側に位置する第12号堀の一部を埋め戻して「⌐¬」状に堀を廻らして張り出し状にしている。また，内郭部への防御施設として，第14号堀を拡張し，第16・17号堀を新たに構築して間仕切りとしている。

第1・2・7・12号堀の張り出し部の「折り」や，堀底にみられる竪堀（陥し穴）は，この時期に構築されたものと考えられ，全体的に堀・土塁等の防御施設の強化がおこなわれたと考える。

注　参考文献

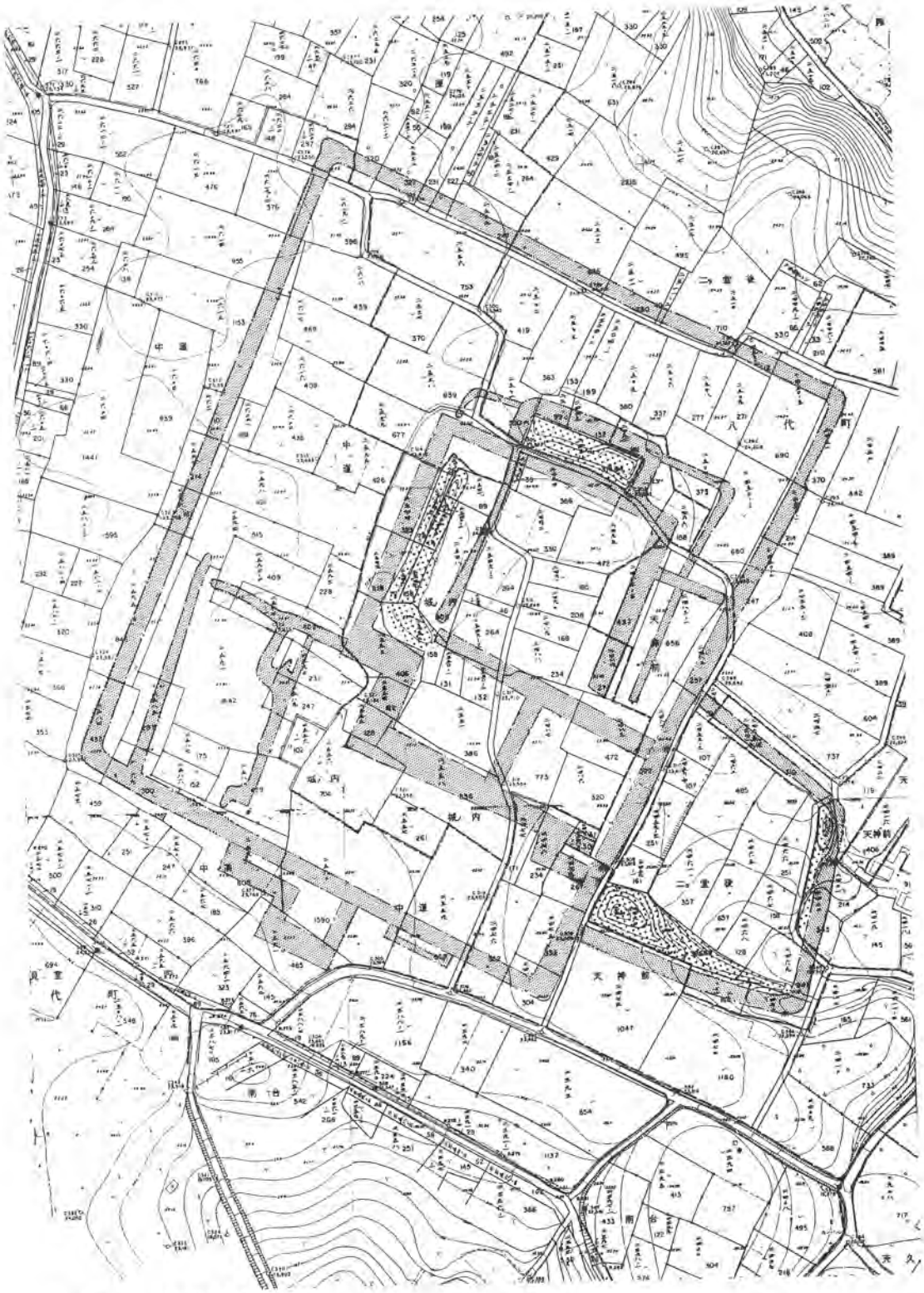
(1)〜(8)　竜ヶ崎市教育委員会「竜ヶ崎市史　別編Ⅱ竜ヶ崎の中世城郭跡」一城郭にみる竜ヶ崎のあゆみ－昭和62年



第151図　屋代城館跡　第Ⅲ期

(4)　地割と城郭遺構（第152図）

屋代B遺跡Ⅰ・Ⅱの報告書の中でも検討されているが，地割と城郭遺構の関連について述べてみたい。地割と城郭遺構とが密接な関連をもつことは良く指摘されることであるが，屋代城の城郭遺構についても例外ではない。昭和58～61年度の調査によって検出された堀跡を，開発以前の地籍図に重ねあわせると第152図の様になる。屋代城の廃城は大永三年または天正十八年と考えられるが，屋代城は天正十八年以降は，城郭としての機能は失していることは確実であり，これらの状況と出土遺物（昭和58･59年度に調査した第１号堀覆土から文久永寶が出土している。）から判断して，堀が完全に埋まったのは，文久三年（1863）以後と思われる。一方，土塁の一部は削平され，堀は埋められたりしながらも名残りを留めていたものと思われ，その結果として，土塁



第152図　地割りと城郭遺構

や堀のあった部分は耕地の境界として名残りを留めている。地域に存在する農道についても，不自然に屈曲している様子が見られ，半ば埋まった堀跡に沿って堀の横を通行したり，または堀や土塁が障害となって屈曲し，長い年月の間に屈曲した農道ができ，それが今日に至ったものと判断される。

(5) 土坑群について

屋代B遺跡の昭和58～61年度調査によって検出された土坑の数は，計1330基で、そのうち墓壙として考えられた数（昭和58・59年度82基，昭和60年度148基，昭和61年度67基）は計297基である。

本項では，墓壙群（墓域）及び地下式壙について検討する。

(1) 墓壙群（墓域）

第3章第6節で述べた様に，墓壙群(「墓壙及び墓壙と思われる土壙」・「墓壙の可能性のある土坑」の総称）は，調査区の内郭・外郭の区域（付図1・第63図）に分布している。

墓壙群を形成する各々の墓壙は，長期間に亘って墓域として使用されたために土壙の重複が激しく，遺構の形状や規模及び遺物等からの特期判別が困難であり，明確に捉えることはできなかったが，墓壙群を形成し，比較的良好な遺存状態を示す土壙については，第3章第6節で述べた(ア)～(オ)に分類し検討を加えた。

その結果，これら土壙の形状や規模等から土壙の変遷・時期等を明確に把握することは困難であったが，比較的遺存状態の良好な土壙をみると，先に述べた様に，「壙底または覆土中から多量の焼土・炭化材・灰・炭化米・炭化麦・豆類」や，「溶解状態の銭・鉄釘，土師質土器，和鏡，六器」等の遺物の出土や，「平面形が方形または長方形」・「出入口部と考えられる張り出し部」や「向い合う各々の壁下にピットをもつ」構造上に違いのある土壙が捉えられた。

また，昭和58・59年度調査区から検出された墓域（F2・G2区）昭和60年度調査区から検出された墓域（E8・F7・8・G7区），昭和61年度調査区から検出された墓域（G3～5・H4・F5区）を比較すると墓壙の形状や規模・覆土の状態等についてはほとんど差異は認められなかったが，墓壙区域が第1号堀の内側（城内）とその外側（城外）に検出され，広い地域にその存在が確認されている状況である。第1・5・6号堀から石塔類（五輪塔・宝篋印塔）が多量に出土しているが，いずれも紀年銘はなく，石塔は積み組み式である。

これらの状況をふまえて，屋代B遺跡で調査した墓壙群は，石塔を伴っての墓壙が城内に存在し，城外には，石塔類を伴なわない墓壙群が存在していたことが考えられる。

また，土壙内からの出土遺物や，土層堆積状況から鑑み，火葬墓か他所で火葬拾骨し焼土や灰

と共に埋納し付帯した品々を埋設した，たとえば詣り墓の如き施設としても捉えられる。

中世における普遍的な葬送の変遷は，単葬墓または火葬がおこなわれていたと考えられ，長岡京跡[1]，根城跡遺跡[2]からも火葬墓としての報告がなされている。

以上の点から，屋代B遺跡の中世墓の初現は12世紀中頃と考えられ，その後の変遷は，石塔類や土師質土器等出土遺物から考えて13世紀前半迄存続していたことが窺える。しかし，石塔類は，破砕され二次加工されて砥石等に使用されたものもあり，前述した如く，堀底から投げ込まれて投棄された状態で検出されている。これらの点から，館跡から城跡への渦渡期に墓域の整地がおこなわれたものと考えられるか，または墓域として残存していた可能性も考えられるが，調査状況から推測するならば，全て整地され戦闘時に武器として使用されたか，または城跡築造時に何らかに使用されたことも考えられる。いずれにしても、屋代城館跡から検出された墓壙群は，12世紀中頃から13世紀迄に構築された埋葬施設と考えられる。

(2) 粘土貼り土坑について

本跡の調査（昭和58～61年度）の結果，粘土貼り土坑は，27基が検出された。土坑の形状は，方形・長方形・楕円形を呈し，断面形は擂鉢状を呈している。構築は土坑を掘り，底・壁面全体に厚さ10～25cm程の青色粘土を貼りつけている。これらの土坑からは，砥石類の出土以外は認められず，形態・形状を捉えた場合，中世における土坑の一様相を呈する遺構と考えられ，粘土貼り土坑の検出された地区から鑑み，当遺構は，水留め場または，洗い場として捉えられるのではないだろうか。

注・参考文献

(1) 長岡京市埋蔵文化財調査報告書－第２集－　財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター1985年

(2) 八戸市埋蔵文化財調査報告書第９集「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ」　青森県八戸市教育委員会昭和56年度

(3) 静岡県磐田市見付一の谷中世墳墓群現地説明会資料昭和62年

終章　む　す　び

屋代B遺跡の調査は昭和58～61年度にわたる調査によって検出された遺構で，縄文時代以降の各期に及んでいる。遺物についても同様であり，当遺跡が所在する台地上に残された幾多の先人達の生活の足跡を窺い知ることができる。

縄文時代については,少量出土した遺物等からわずかにその生活の一端を垣間見るにすぎない。弥生時代になると，特に中期末から南関東系の弥生文化が急速に浸透しはじめた事が出土遺物や遺構の状況から裏付けられ，後期に入るや稲作農耕文化の普及によって安定・定着の文化とともに漁撈・採集の形態も引き続き継続して台地上に集落を営んでいったものと考えられる。弥生時代に引き続き，古墳時代～奈良・平安時代にかけても，台地上には集落が形成されており，この地が生活に適した良好な居住環境を備える場所であったことが窺える。中世（12世紀）に入るや，この地は信太郡東条と呼ばれ，建長八年（1256）に立荘されて東条荘となり東条氏の支配する所となった。

しかし，北条氏に支配が変るや，東条荘は北条氏の「得宗領」となり，八代の台地上に館跡を造営して支配体制をととのえたが，正慶二年（1333）鎌倉幕府の倒壊に伴って建武政権（南朝方）の所領となり,やがて南朝方の壊滅とともに東条荘は北朝方の足利氏の支配下になったのである。文献上での屋代氏の出現は永和三年（1377）の円覚寺文書に屋代師国が東条荘社村を拝領した記載がみられ，この地に屋代氏が足利氏から東条荘社村を拝領して自領とした事が窺える資料があり，13世紀に東条荘社村で屋代氏が存在したことが判明し，屋代氏によって八代台地上に城郭が造営されたことが窺える。また，屋代氏が城郭を造営するにあたっては，北条氏によって築造された館跡跡地に造営されたことが調査結果からも窺える。

東条荘社村での屋代氏の支配は，文献上で確認できる限り，拝領した永和三年（1377）から大永三年(1523)までの約146年間と考えられる。屋代氏が社村への入国が永和三年より若干遅くなったことも考えられ，おおよそこの期間は確実に存在していたことが窺える。屋代城の城郭遺構は，調査の結果検出された堀・土塁・虎口等の重複関係から，３期（縄張りの変更２回）にわたって増・改築がおこなわれたことが明らかになった。

前述したごとく，屋代城は，北条氏によって方形の「館」が造られ，永和三年屋代氏の入荘によって城郭として改築され，大永三年に最終的な「回字型」の城郭に発展していったが，同年の「屋代要害」での戦いで土岐原氏に屈服し，さらに土岐原氏は後北条氏の軍門に下り配下となり，天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻撃に伴って後北条氏の敗北によって東条荘内の城郭は破棄・廃城になり，屋代城も廃城になったのである。

本書をまとめるにあたり，若干の私見を交えながら検討を加えてきたが，その内容は十分と言

えず，また内容の妥当性についても一抹の不安が残されている。先学諸氏の御指導・御批判をいただきたい。

なお，本書をまとめるに際しては，関係各機関・関係各位から御指導と御援助を賜り，文末を借りて，心から謝意を表わす次第である。

別編　竜ヶ崎屋代B(R-6B)遺跡より出土した植物炭化種子の同定について

農林水産省農業生物資源研究所遺伝資源第一部
植物探索導入研究チーム
江　川　宜　伸・中川原　捷　洋

はじめに

竜ヶ崎屋代B（R－6B）遺跡から多量の作物種子と思われる炭化物が出土した。このなかには，複数の作物と思われる種子が混在しており，我が国の作物栽培の歴史を考察する上でも興味深い材料である。作物種子は，現地で遺物のみ対象して採取するのではなく，堆積土を採取し，このなかから土壌成分を取り除き，すべての植物炭化種子を選別しようと試みた。これにより，当時の作物栽培の具体的内容を明らかにしようとした。ここでは，その結果の概要を報告する。

1　材料および採取方法

植物炭化種子を含む堆積土土壌を注意深く水洗いすると，比重の違いにより植物遺物は，水に浮くので，これをガーゼでふるい受けることによって選び分けた。乾燥後これを肉眼および実体顕微鏡で外観の観察を行い作物種であるかどうかの同定をおこなった。この方法によって，各作物ごとに炭化種子を分類し，イネ(Oryza sativa)，オオムギ(Hordeum vulgare)，アズキ(Vigna angularis)，リョクトウ（Vigna radiata)，アワ（Setalia italeca）等を見出した。外観の観察に基づいて分類されたそれぞれの作物遺物は，川上，宮崎，中川原(1980)により開発されたソニックディジタイザーを用いて種子の長さ，幅，長幅比を測定することにより，形状についてさらに詳しい調査を行った。

2　結果及び考察

植物遺物の種類を各調査地点別に示すと表１のようである。以下に各作物別に結果を示す。

1）イネ（表13・14）（第153・154図）

イネ炭化種子は，各採取地点から多量に認められ，保存状態がよいため，容易に稲と判断できた(表13)。第1113号土坑地点からのものを除くと，籾殻がついたものは少なかった。これは調整のために水洗した折に脱落したとは考えにくいので，もともと脱ぷされた状態で存在していたと推定される。また，粒の表面にたて溝が顕著に認められることから，まだ精白されていない状態すなわち玄米で貯蔵されていたと思われる（表14)。

表13　竜ケ崎R6B遺跡の各調査地点における出土物

調査地点	出土物			
	イネ	オオムギ	豆類	雑穀類
1．SK690	○	○カワムギ		
2．SK699	○		アズキ リョクトウ	アワ？
3．SK704	○	カワムギ ハダカムギ	アズキ リョクトウ	
4．SK714	○		リョクトウ	エゴマ？
5．SK851	○	カワムギ ○ハダカムギ	アズキ リョクトウ	アワ？
6．SK1113	○	カワムギ		アワ？
7．SD14	○			
8．SD17	○			
9．SD12(灰)	○	カワムギ		エゴマ？

○は多量に出土したことを示す。

表14　出土した玄米の形態

調査地点	調査粒数	長さ(mm)	幅　(mm)	長幅積	長幅比
1．SK690	210	4.5±0.39	2.5±0.31	11.3	1.8
2．SK699	237	4.8±0.34	2.6±0.24	12.8	1.8
3．SK704	244	4.7±0.35	2.6±0.24	12.6	1.8
4．SK714	255	4.6±0.37	2.7±0.27	12.4	1.8
5．SK851	252	4.8±0.36	2.7±0.27	13.2	1.8
6．SK1113	105	5.0±0.35	2.7±0.25	13.4	1.8
7．SD14	231	4.7±0.38	2.7±0.30	12.9	1.7
8．SD17	70	4.8±0.35	2.5±0.24	12.2	1.9
9．SD12(灰)	239	4.8±0.36	2.6±0.28	12.2	1.9
(参考) コシヒカリ(乾物)	57	5.3±0.20	2.9±0.14	15.3	1.8

これらの炭化種子について，外観の形態調査を行った結果を表14に示す。それによると，第690号土坑地点からのものが，最小であり平均は長さが4.5mm，幅は2.5mmであった。SK1113地点のものが，5.0mm，2.7mmと最大であった。現在我が国で栽培されている代表的品種コシヒカリの種子長，種子幅を測定したところ，5.3mm，2.8mm（長幅比1.8）であった。コシヒカリは現在の品種の中でも決して大粒のものではなく，通常の大きさ（短粒）である。屋代B（R－6B）遺跡から出土した炭化種子は，長幅比が平均で1.7－1.9（表14）であり，形状はコシヒカリとほぼ

同じとみてよいが全体的には，有意に小粒である。

第690号土坑と第699号土坑の両地点からそれぞれ無作為に炭化種子を抽出し，長さと幅について相関図を描き，これをコシヒカリの変異と比較した。これによると測定値の標準偏差がやや大きかった第690号土坑地点からの炭化種子は，コシヒカリの分布範囲より長さ幅とも小さい領域に分布し、かつ広域に散布していた。従って本地点の炭化種子は，変異幅が大きく現在の品種を基準にすれば，ただ一つの品種から構成されているとは考えにくい結果であった(第153図)。一方，測定値の標準偏差の小さい第699号土坑地点からの炭化種子は、それに比べて変異はやや小さいといえ，同一品種の可能性もある（第154図)。

炭化種子を玄米の粒張り（厚み）から判断すると，これらの種子は陸稲ではなく，現在の水稲に近いと考えられる。さらに，粒先端の肩部分が十分に充実しているところから，うるち種であったと思われる。

以上の結果から，当遺跡より出土した炭化米は，今日の種類と比較してやや小型の水稲うるち種で，日本型稲であると推定される。さらに長さ，幅等形態の変異幅は採取地点によって異なるとみてもよいことから，品種はいくつか分化して成立していた可能性もある。しかし，極端な形状の違いはなかったであろう。

2）オオムギ

当遺跡の第690・851号土坑の2地点からそれぞれ皮性と裸性のオオムギと判断できる炭化種子が出土した(表13)。これらの皮性のオオムギは，現在の品種と同じ大きさのものも多く，その粒の大きさから判断して，今日の改良品種に近い種類も含まれていると考えられる。従って，作物としては十分に確立した系統が，当時すでに栽培されていたと推定される（第155・156図)。

出土した皮性のオオムギのうち，301粒につき形態調査した結果が第155図及び第156図である。これによると，これらの炭化種子は長幅比が1.5－2.0と比較的丸い形態をしたものと2.1－2.6とやや長粒タイプのもの，さらに，2.7－3.3と細長い形をしたものが含まれており，形態的な変異は大きかった（第155図)。現在の栽培品種であるカシマムギと比較しても出土炭化種子が一般に小粒に偏って分布しているが，幅広い変異を有していることは明らかである(第157図)。従って，これらの出土物は，単一品種というよりは，今日の品種の概念から判断すると数品種を合わせた変異をもつ遺伝的集団であったといえる。このことから，当遺跡周辺で異なるタイプの品種が別々に作付け，栽培されていたかどうかは判断しにくいが，幅広い種類が存在したことは事実であろう。すなわちここに含まれている細長い皮性のオオムギが，大粒のものとは，別の品種（その場合は，おそらく原始的な品種とおもわれる）かどうかの判定は，供試した遺物のみからでは，困難である。種子が未熟であったという可能性も否定できず，また当時の皮性のオオムギの品種内

変異の程度が明らかでないからである（第157図）。

第851号土坑地点から出土したハダカムギは，比較的大きさや形は揃っており，107粒平均で長さ3.8㎜，幅2.6㎜，長幅比1.5であった。

当遺跡から比較的多量の大粒の皮性のオオムギが出土したことから判断して，当時オオムギは，かなり重要な作物として，この地の人々によって栽培され，大いに利用されていたであろうと容易に想像できる。

3）アズキ，リョクトウ

著者らの関東一円での農家調査によると，アズキは，今日でもたいていの農家で小規模ではあるが在来系統が自家消費用に栽培され，一部の種子は翌年の播種用に残され，毎年継代維持されている（江川，長峰，中川原，1987）。そのため，アズキはいまだに在来種がよく保存されている数少ない作物種である。これまで茨城県内で収集した数十系統のアズキについて種子の形態調査をしたところ，長さが5.7㎜－9.1㎜，幅が3.9㎜－6.2㎜，長幅比が1.3－1.5であった。　リョクトウは，我が国でもつい最近まで広く栽培されていたが，今日では，もはや栽培農家を見出すのは困難な状況にある。リョクトウはアズキに比べて丸い形をした小粒の豆でアズキとは比較的近縁であると考えられている。主に国際植物遺伝資源委員会（IBRGR）によるネパールで収集されたリョクトウ在来系統について調べたところ，種子長3.4㎜－3.9㎜，幅が2.7㎜－3.1㎜，長幅比が1.2－1.3であった。このリョクトウの値は，アズキと比較すると明らかに小粒で短粒形をしている。従って，豆の大きさ及び形からリョクトウとアズキは炭化種子からでもある程度正確に識別できる（表15）。

当遺跡から出土した豆類について，肉眼による観察に基づいて，リョクトウおよびアズキと判定した炭化種子についての測定結果は，リョクトウは14粒の平均で長さ3.3㎜，幅2.6㎜，長幅比1.2，アズキは10粒の平均で長さ5.0㎜，幅3.4㎜，長幅比1.5であった（表15・第158図）。

今日の分類基準を参考にしても，著者らの炭化種子の同定は当を得ていると考えられる（第158図）。

次に，茨城県で現在栽培されている在来系統と出土したアズキを比較した。その結果，遺物アズキは今日の茨城在来品種より長さ，幅ともに小さく，従ってかなり小粒であるといえる（第158図）。また粒の形は，現在の種類よりやや細長い形状であるといえる（表15）。しかし，炭化の過程でアズキ種子がどの程度縮小するのか資料がないので，ここに出土した品種が今日の品種とどの程度異なるものか早急には結論は下せない。

前述したイネとオオムギが多量に出土したのに比べて，極めて少量ではあったが，本遺跡からリョクトウが出土したことは，リョクトウの日本への伝播を考える上で貴重な資料である。リョ

クトウは，すでに述べたように，今日ではほとんど栽培されていないが，当時はアズキと同程度に重要な作物であったと想像される。

表15　出土したアズキ、リョクトウ種子の長さ、幅及び長幅比の計測結果

	アズキ			リョクトウ		
	長さ	幅	長幅比	長さ	幅	長幅比
1．SK699						
	5.7mm	3.6mm	1.6	2.7mm	2.2mm	1.2
	5.7	3.5	1.6	3.5	2.7	1.3
				2.9	2.4	1.2
2．SK704						
	4.1	3.0	1.4	3.7	2.7	1.4
	4.4	3.2	1.4	3.6	2.9	1.2
	4.9	3.3	1.5	3.1	2.9	1.2
				3.2	2.7	1.2
				3.5	2.8	1.3
				3.7	2.8	1.3
				3.2	2.6	1.2
3．SK851						
	4.8	3.2	1.5	3.7	2.8	1.3
	5.0	3.4	1.5	2.6	2.0	1.3
	5.7	3.8	1.5	3.2	2.8	1.1
	4.9	3.3	1.5	3.3	2.6	1.3
	4.9	3.3	1.5			
平　均	5.0mm	3.4mm	1.5	3.3mm	2.6mm	1.2
参考品種*	5.7～	3.9～	1.3～	—	—	—
	9.1mm	6.2mm	1.5			

＊参考品種として茨城県在来品種の変異幅を示した。

なお，アズキの近縁種に，古くに伝来したといわれるツルアズキ（Vigna Umbellata）という種があり，今日でも暖地で栽培されていたり，栽培から逸出植物（escape）として自生していたりする。この種は長幅比1.6－1.9とアズキより細長い豆類で，形態的にアズキとは極めて容易に区別できると思われる。この種は，本遺跡中に存在するとの期待があったが，今回調査した範囲では，出土した植物遺物の中に含まれなかった。

4）雑穀類

調査した地点のうち，第851号土坑から採取した堆積土（土壌）中には多量の炭化した雑穀種子

が含まれ，アワではないかと思われる。それらの211粒について種子外形を測定した結果は，平均で長さ1.3㎜，幅1.2㎜，長幅比1.1と極小粒の丸い形をしていた。もっとも，アワとヒエは，ともに小粒で形も似ており炭化種子の外観から両者を識別することは困難であるが，内頴，外頴等の表皮細胞が残存していれば，灰像の分析や走査電子顕微鏡の利用による微細構造の観察から識別可能だといわれている（Matsutani　1986)。

また，アワと報告された炭化種子が走査電子顕微鏡の観察に基づいてキビと訂正された例もある（松谷　1986)。ここに多量に出土した雑穀種子の正確な識別，同定は今後の課題である。

3　結　論

出土した植物遺物は，当時，その集落で栽培されていた作物を代表するもの，あるいはその周辺地域の作物であると考えることができる。とすれば，当時の人々の生活水準，農業の発達の程度について考察するのに，貴重な資料を提供してくれる。

先ず，イネとオオムギ，雑穀種子が多量に出土したことから，これらの作物が，主食として，つまりデンプン源として重要な役割を演じていたことは明らかである。また，蛋白源である豆類も同時に栽培されており，当時の人々は自給自足ができる高度な農耕生活を営んでおり，食生活が栄養的にも豊かであったと想像される。

当時，リョクトウが，アズキと並び一般的な豆であったと推定されることは，今日の日本においてリョクトウが殆ど栽培されず，作物としては見捨てられてしまったことと対照的である。

その理由として，例えばインゲンマメ等のより収量性の高い豆がもたらされたことによって置き換えられたこと，作付体系の変化，経済作物としての重要度の低下などが考えられるが，より新しい層からの出土物を調査することにより，さらに新しい情報が得られるであろう。

出土した作物遺物は，総じて現在我が国で栽培されている種類よりも小型（小粒）であった。一般に種子を炭化させると実物より小さくなることが知られている（安田　1927）が，本遺物の粒大は炭化による縮小の範囲を大きく越えていると考えられた。とすると，竜ヶ崎屋代B（R－6B）遺跡の作物種子は，今日の種類と比較して小型の品種が栽培されていたがどのように変化して行くか，新しい層からの出土物の調査がまたれる。

まとめると，当時の竜ヶ崎地域は，台地に畑を作り，そこにオオムギ，雑穀さらにアズキ，リョクトウ，低地に水田を作り，稲を栽培するという土地の形態に応じた使い分けがすでに行われていたと考えられ，農業の発達のレベルは相当進んだものであったと考える。　竜ヶ崎に近い茨城県つくば市谷田部町では，20年位前までオオムギを「わりめし（割り飯)」と呼んで，オオムギだけで，あるいは，コメと一緒に炊いて広く利用していたという。

また，竜ヶ崎の遺跡の発堀調査作業にたずさわっていた農家の婦人によると，かつて，緑色の

豆（リョクトウ？）もこのあたりで栽培していたという。

これらの話は，我々の食生活が過去の人々と全く異質なものでなく，過去の人々により発展させられた農耕文化が，遺産として連綿として最近まで受け継がれていたことを示している。この事実は，当遺跡と今日の生活とが極めて近い距離にあることを強く感じさせる。

参考文献

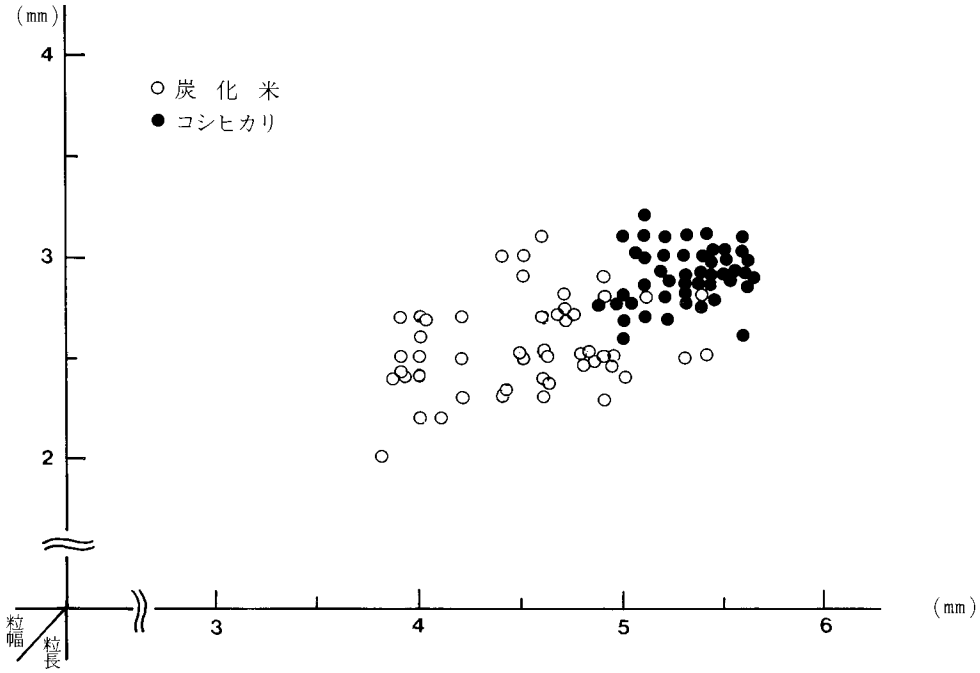
江川宜伸・長峰司・中川原捷洋（1987）「茨城県北部と福島県南部における豆類および雑穀類の収集」1986年　昭和61年度植物遺伝資源探索調査報告書（農業生物資源研究所編）P 1 －18。

川上潤一郎・宮崎尚時・中川原捷洋（1980）「超音波計測機利用による形質の長幅および面積の迅速測定とデータの処置の開発」育雑30別冊 2

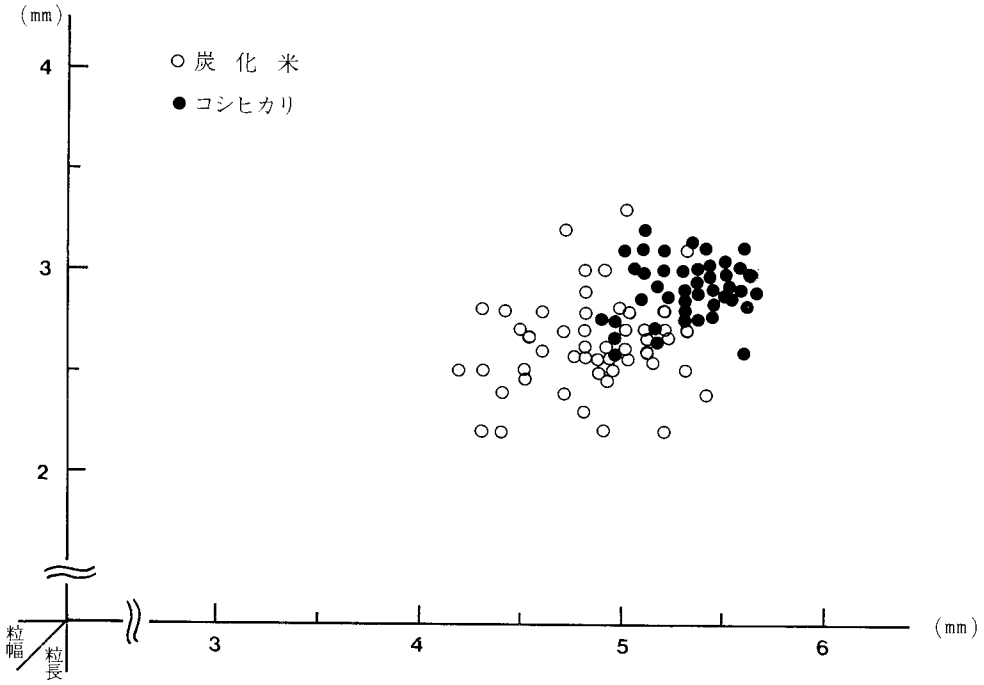
松谷暁子（1986）「豊富町豊富遺跡出土種子の同定について」市立旭川郷土博物館研究報告第16号

Matsutani A.（1986）Identification of italian millet from Esashika site by means of scanning electrom microscope. J.Anthrop. Soc.Nippon.94（1）：111－118.

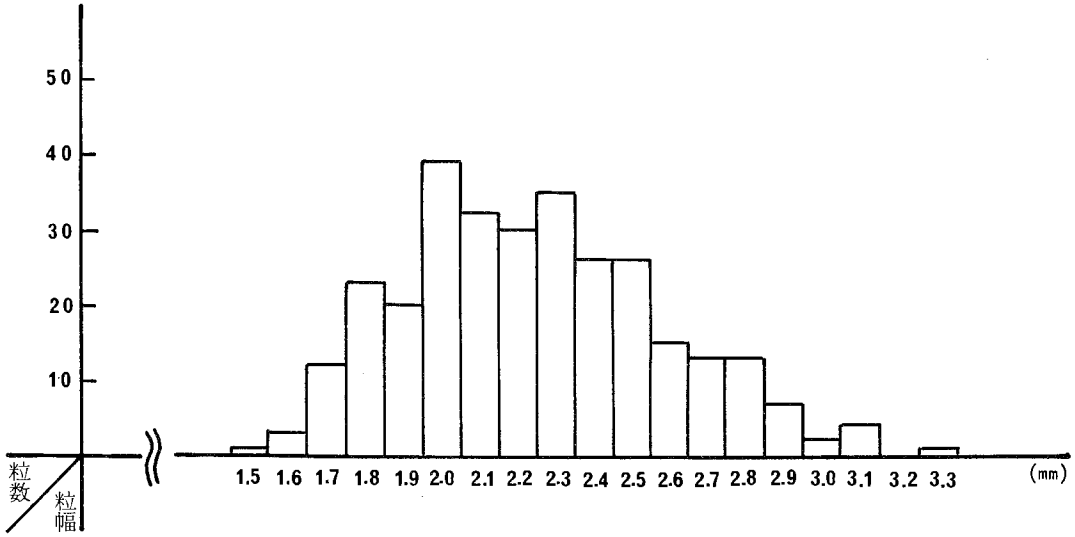
安田貞雄（1927）「日本太古の米」農業及び園芸P 2 － 9



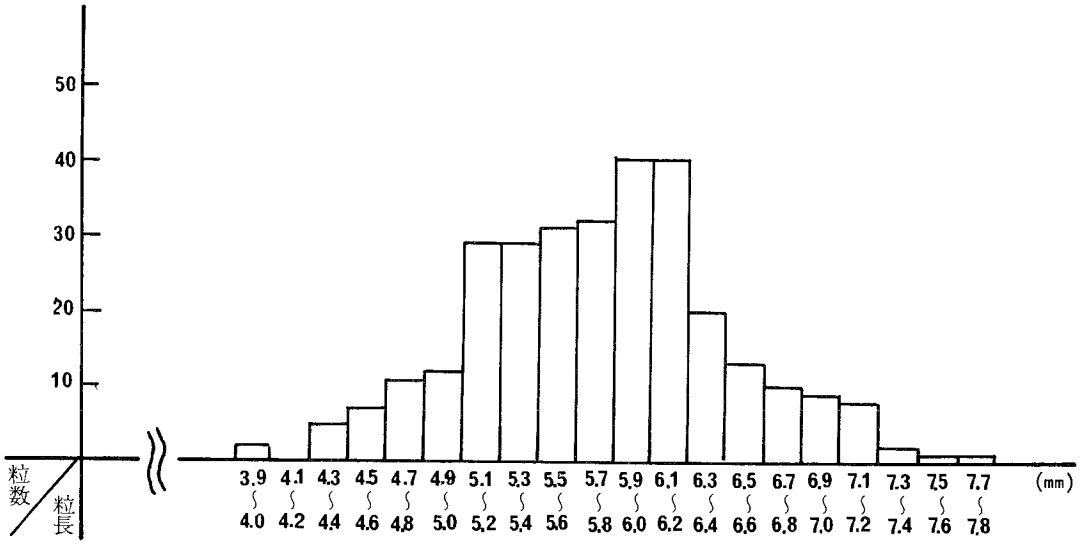
第153図　第690号土坑より出土した炭化米及びコシヒカリ玄米の粒長さと幅の相関図



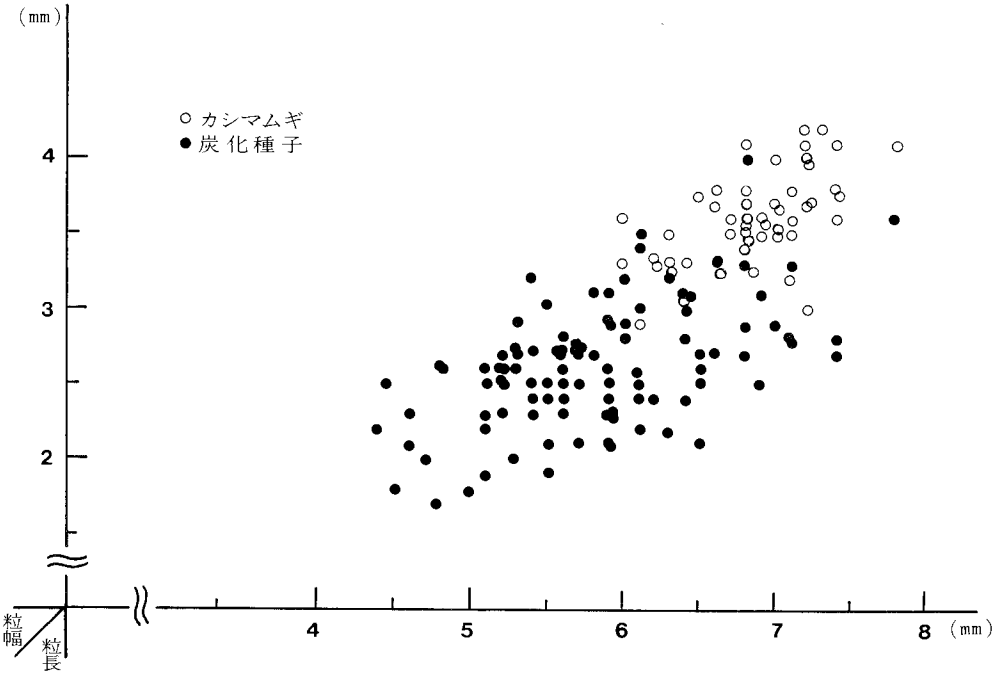
第154図　第699号土坑より出土した炭化米及びコシヒカリ玄米の長さと幅の相関図



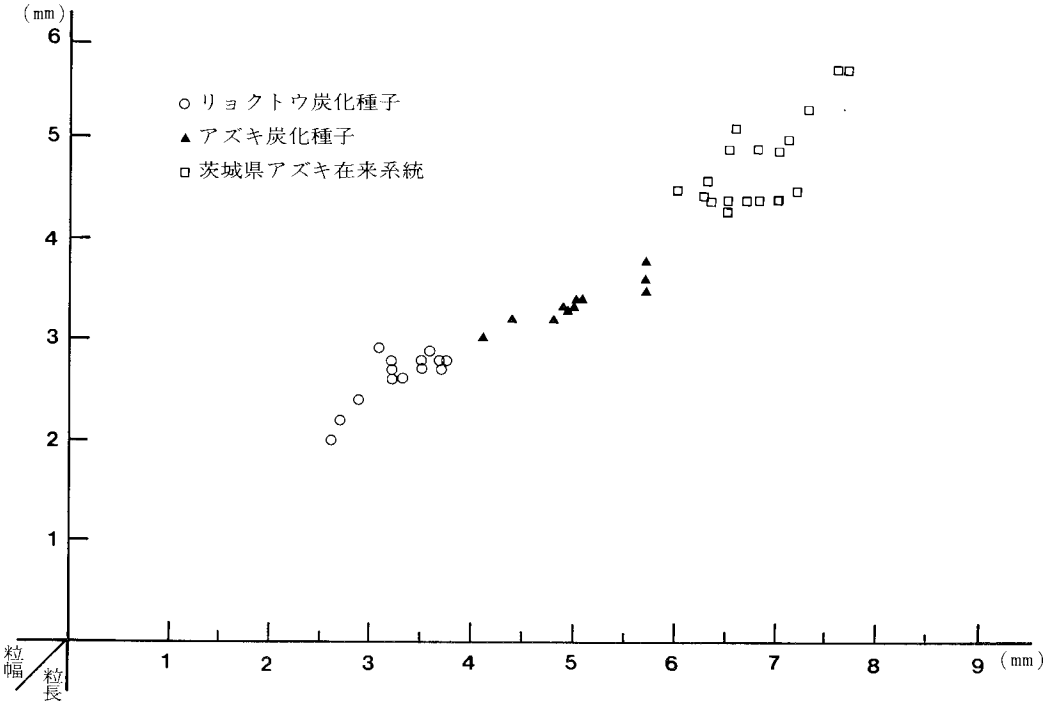
第155図　出土した皮ムギの長幅比の変異



第156図　出土した皮ムギの長さの変異



第157図　出土した皮ムギ炭化種子とオシムギ（皮ムギ）の長さと幅の相関図

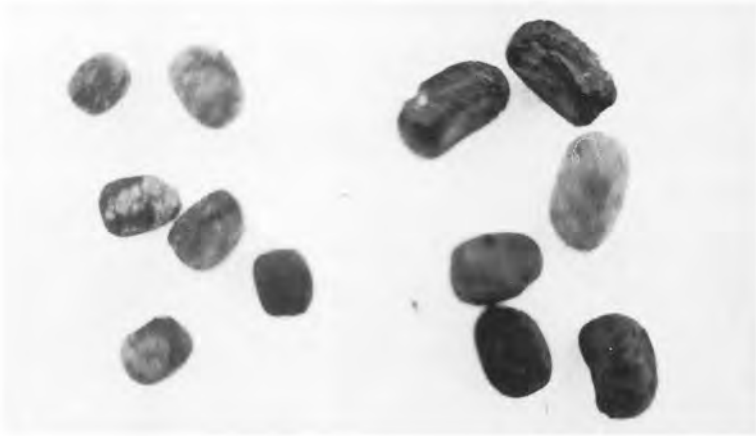


第158図　出土したリョクトウ，アズキ炭化種子及び現在の茨城県アズキ在来系統における種子と長さの相関図

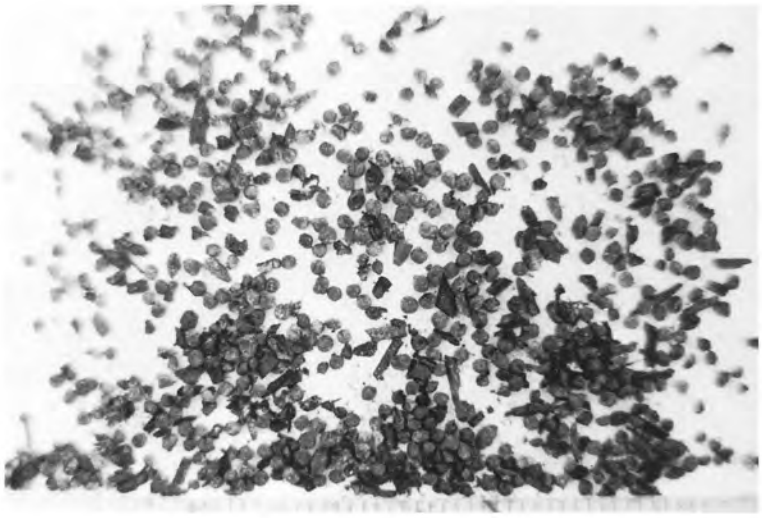
第699号土坑より出土した炭化米

出土した炭化皮ムギ

第851号土坑より出土したハダカムギ

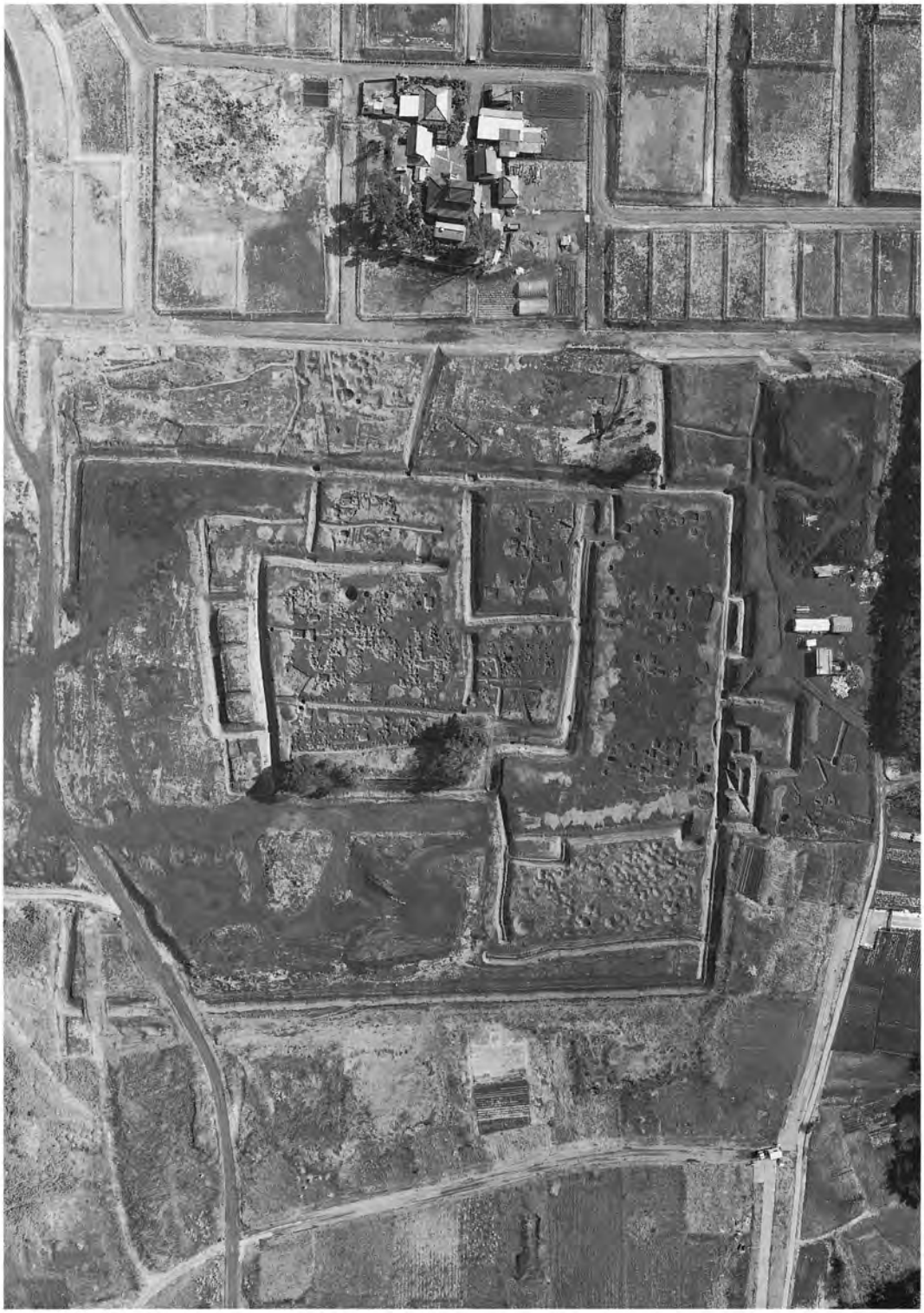


出土したリョクトウ（左の小さい種子）とアズキ（右）



第851号土坑より出土したアワ

写 真 図 版



屋代城館跡全景

調査前風景（1）

調査前風景（2）

第44号住居跡

第46号住居跡　遺物出土状況

第46号住居跡

第56号住居跡

第59号住居跡

第60号住居跡

第62号住居跡

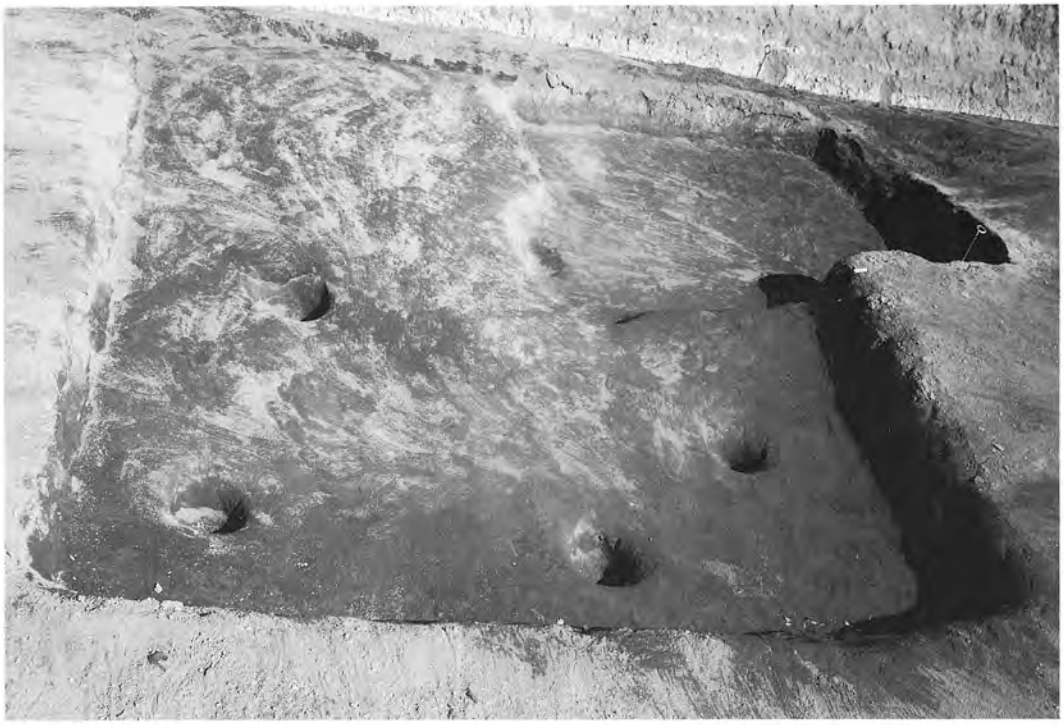
第63号住居跡

第45号住居跡

第51号住居跡遺物出土状況

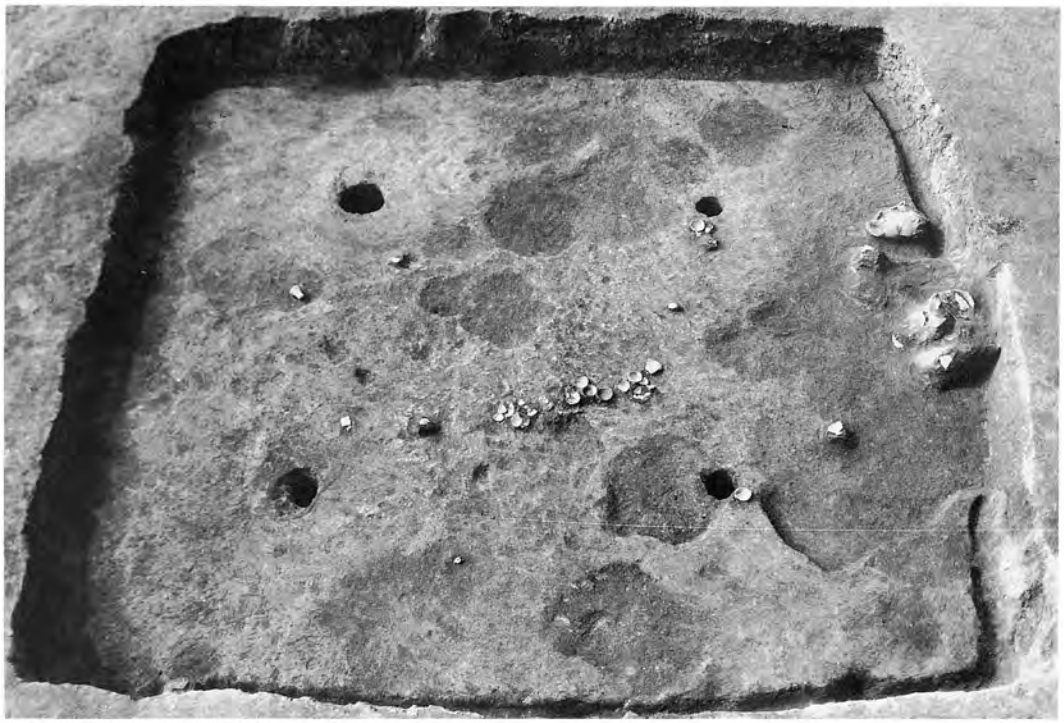
第52号住居跡

第54号住居跡



第58号住居跡

第61号住居跡

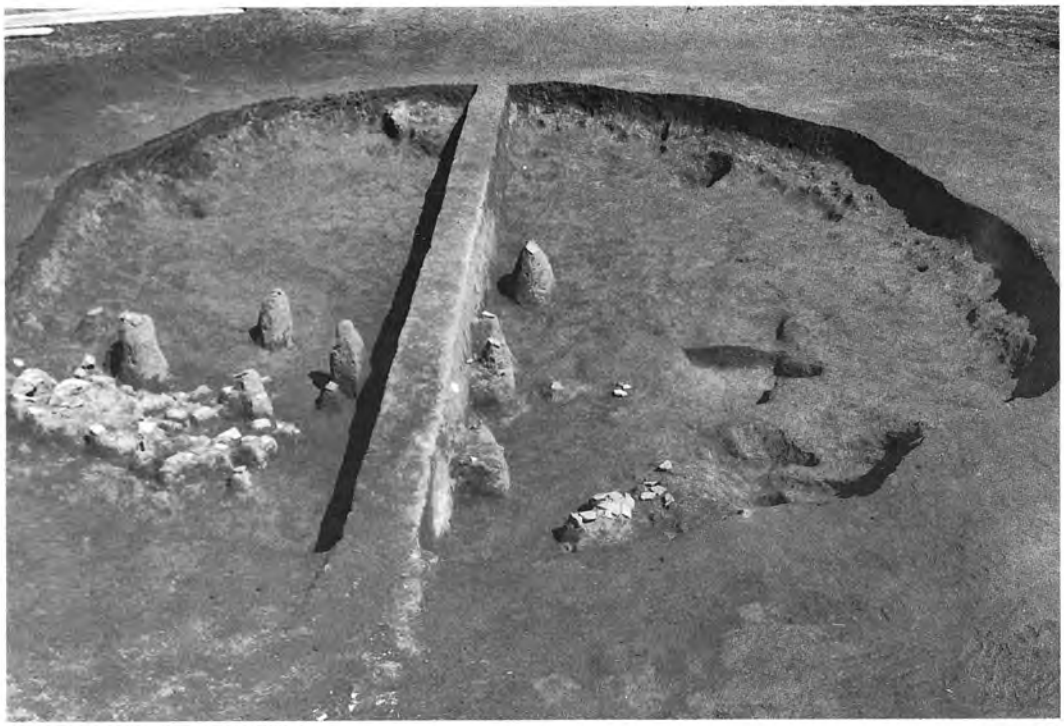


第47号住居跡遺物出土状況

第47号住居跡

第48号住居跡

第55号住居跡



第67号住居跡遺物出土状況

第64号住居跡

第1号虎口

第4・5・6号虎口

第4・5・6号虎口

第5号虎口

第6号虎口と折り

第1号土墨

第2号土墨

第2号土墨断面

第2・3・4号土墨

第3・4号土墨

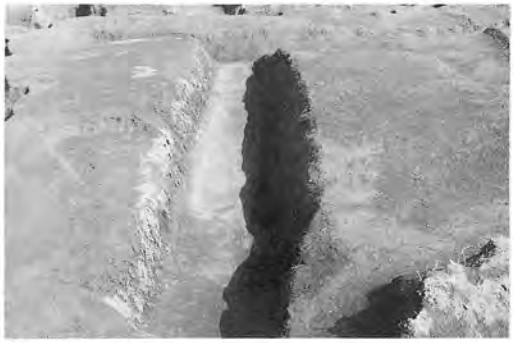
第5号土墨

第5号土墨

第5号土墨

第7・10号堀

第10・20号堀



第22号堀

第22号堀

第1号堀

第2・3号堀

第14－A号堀

第1・18・19号堀

第20号堀

第１号道路

第１号道路

第１号堀（南側）

第１号（東→西）

第１号堀（南→北）

第2・3号堀

第4号堀

第12号堀

第20号堀

第12号堀

第12号堀

第12号堀（折り）

第12号堀

第12号堀

第15・16号堀

第15号堀

第14－A号堀

第14－B号堀

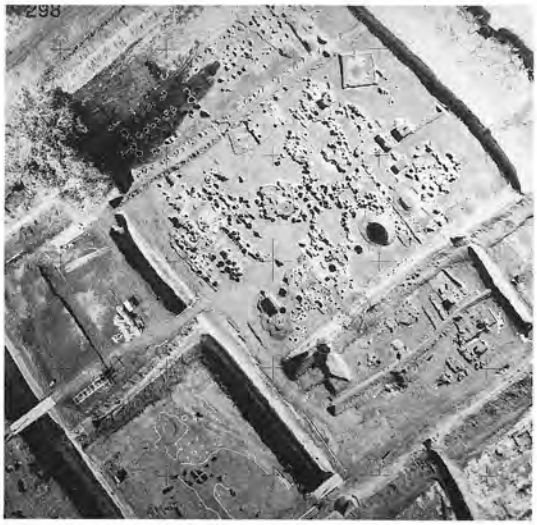
第14－A号堀

第14－B号堀

第17－B号堀

第17－A号堀

Ⅰノ郭全景

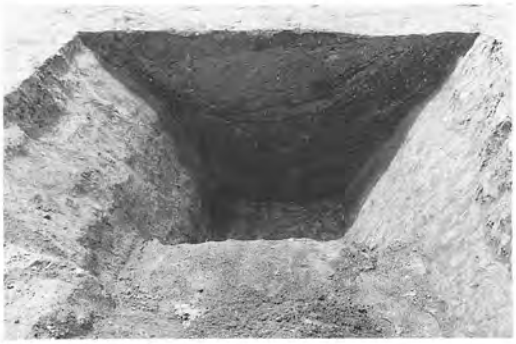


Ⅰ・Ⅱ・Ⅲノ郭全景

第20・1－B号堀・環濠断面

第20号堀断面

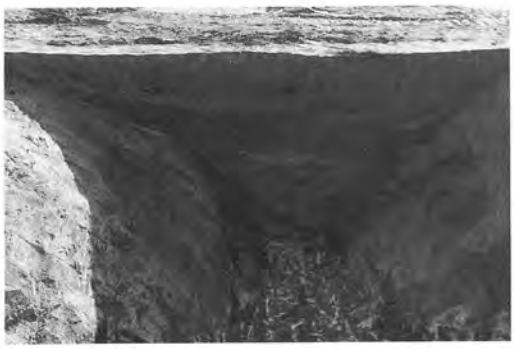
第20号堀断面



第20号堀断面

第20号堀断面

第１号堀断面



第１号堀断面

第１号堀断面

第１－Ｂ号堀断面

第20号堀断面

第１号堀断面

第１号堀断面

第１号堀断面

第１号堀断面

第１号堀断面

第１号堀断面

第 1 号堀断面

第 1 号堀断面

第 1 号堀断面

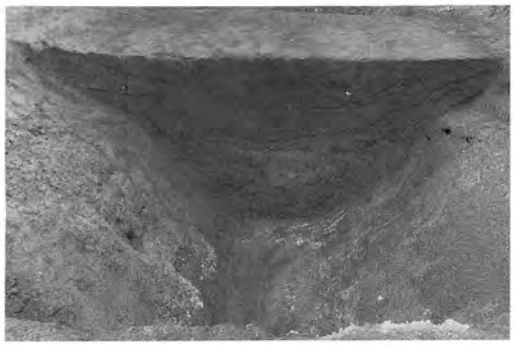
第 1 号堀断面

第 1 号堀断面

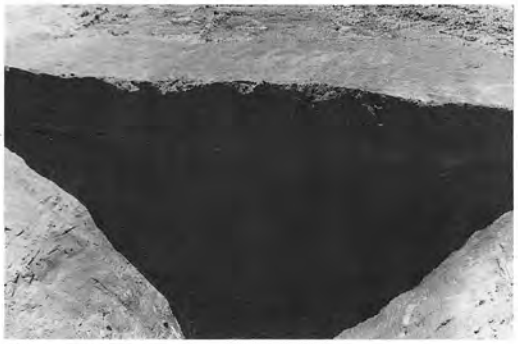
第 1 号堀断面

第 9 号堀断面

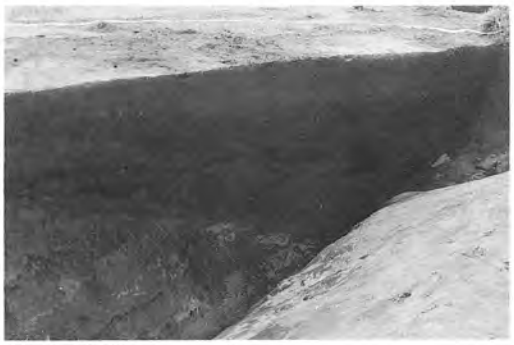
第 8 号堀断面



第 8 号堀断面



第 8 号堀断面



第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第12号堀断面

第14－A号堀断面

第14－B号堀断面

第14－B号堀断面

第14－B号堀断面

第16号堀断面

第16号堀断面

第17号堀断面

第17号堀断面

第67号溝断面

第67号溝断面

土橋No. 1

土橋No. 2 ・ 3

土橋No. 3

土橋No. 4

土橋No. 5

土橋No. 5

土橋No. 5 ・ 6

土橋No. 7

木橋No.10（虎口）

木橋No.10橋脚穴

木橋No.11（Ⅱノ郭）

木橋No.10

木橋No.10橋脚穴

木橋No.10橋脚穴

木橋No.11

陥し穴No. 4 ・ 5

陥し穴No. 6

陥し穴No. 7

陥し穴No. 8

排水孔

陥し穴No. 8

陥し穴No. 8

陥し穴No. 9

陥し穴No.10

陥し穴No.11

陥し穴No.11

陥し穴No.12

陥し穴No.12

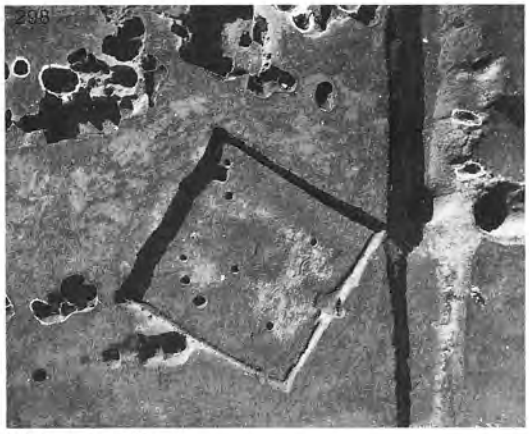
陥し穴No.13

陥し穴No.14

陥し穴No.15

堀・陥し穴石塔出土状況

第6・7・8・9・10・11号井戸



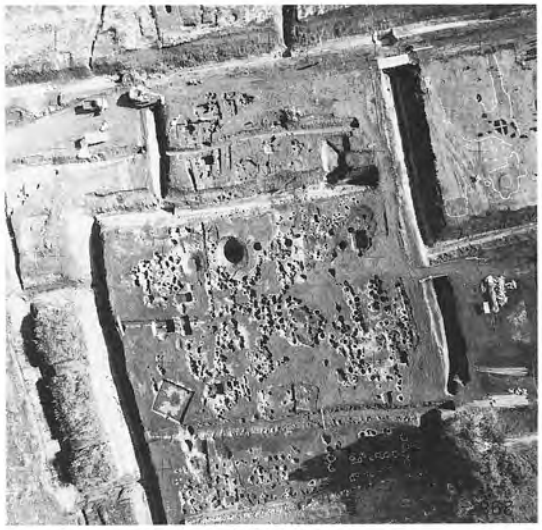
第6・7号井戸

第10号井戸

第12号井戸

第13号井戸

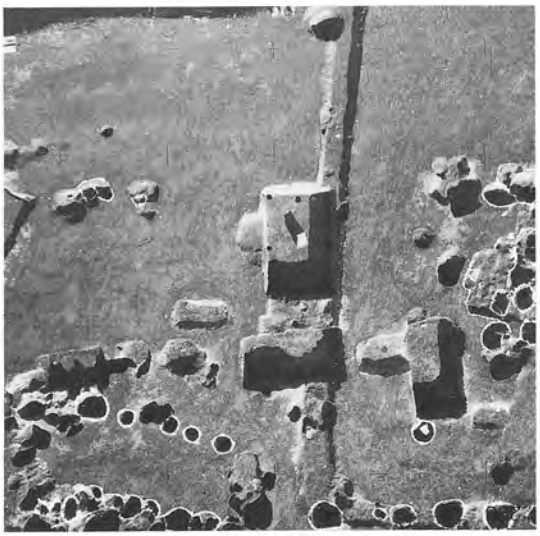
井戸



Ⅰノ郭内土坑・掘立柱遺構群

第133号土坑

第685号土坑



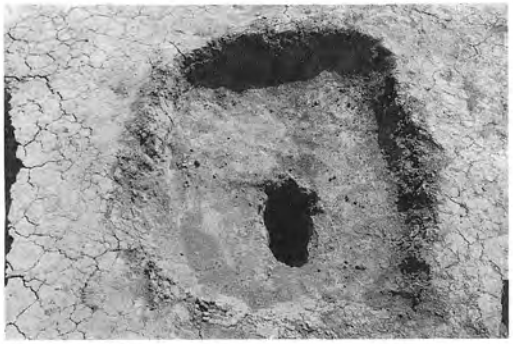
Ⅰノ郭内土坑・掘立柱遺構群

第692号土坑

第693号土坑

第697号土坑

第697号土坑



第700号土坑

第703号土坑和鏡出土状況

第719号土坑

第719・720号土坑

第739号土坑

第744号土坑

第753・820号土坑

第754号土坑

第755・756号土坑

第755号土坑

第772・850号土坑

第776号土坑

第785号土坑

第791号土坑

第794号土坑

第800号土坑

第800号土坑木枠の掘り方

第819号土坑

第763・823・826・827・829・830号土坑

第832号土坑

第754・833号土坑

第845号土坑

第851号土坑

第851号土坑

第856号土坑

第861号土坑

第914号土坑

第967号土坑

第1179号土坑

第1187号土坑

第1197号土坑

第1205号土坑古銭出土状況

第1213号土坑

第1290号土坑

第1322号土坑

第1325号土坑炭化物出土状況

第1189号土坑

蔵骨器（常滑）

蔵骨器（常滑）

第770号土坑

第788号土坑

第787号土坑

第792号土坑

第793号土坑

第812号土坑

第846号土坑

第1010号土坑

環濠

環濠

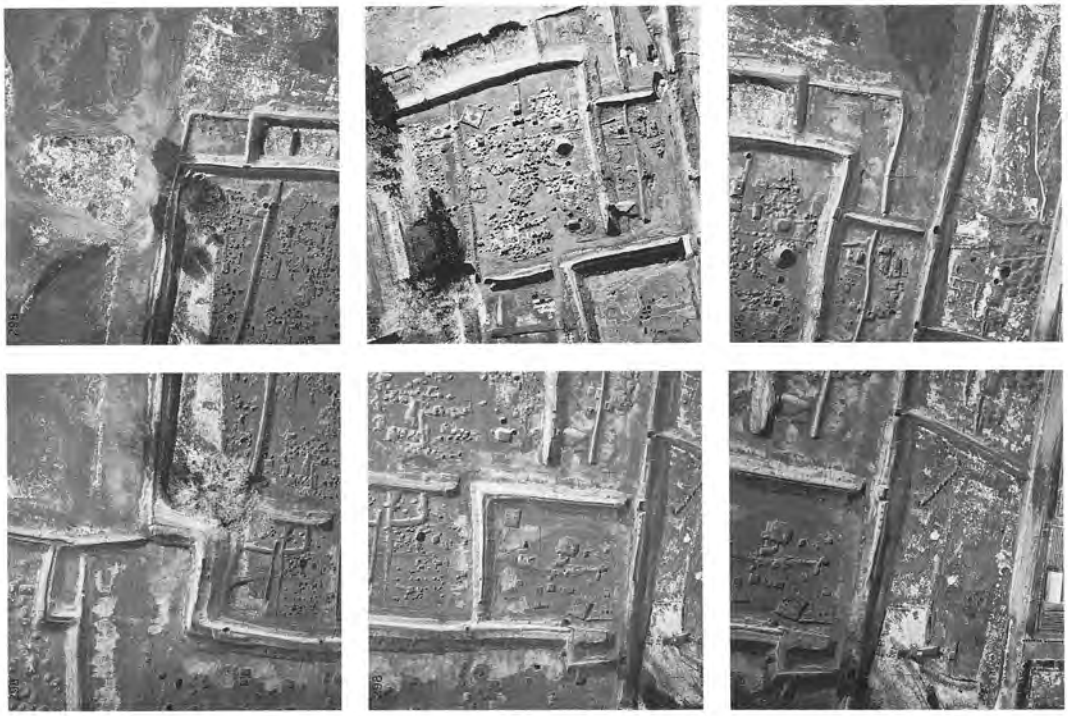
環濠

方形周溝遺構

方形周溝遺構

1号墓壙遺物出土状況

1号墓壙



Ⅱ～Ⅲノ郭

Ⅰノ郭

Ⅱノ郭

Ⅰノ郭

Ⅳノ郭

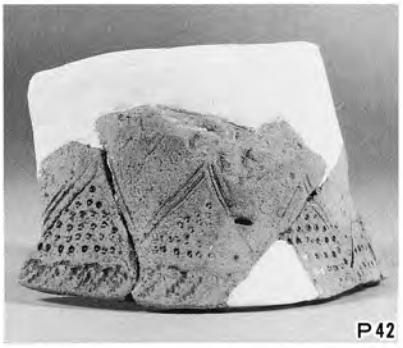
長峰城

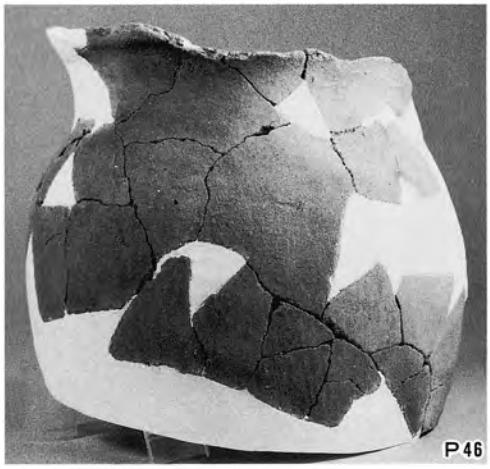
牛久城

登城山城

外八代遺跡（砦）

第44・45号住居跡出土遺物





第46・47号住居跡出土遺物（1）

P48

P51

P61

P59

P56

P57

P53

P54

P60

P50

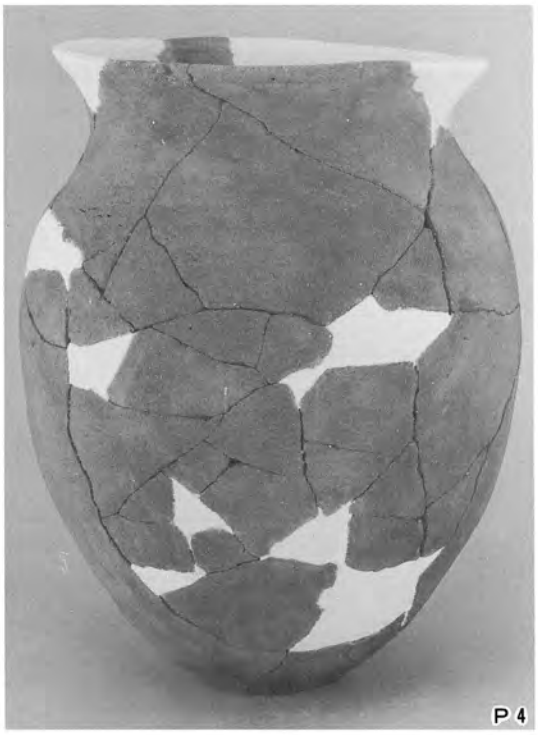
P62

P65

P63

第47号住居跡出土遺物（2）

P 3


P 4

P 68

P 64

Q 75

Q 1

P 67

DP17

P 302

第47号住居跡出土遺物（3）

P70

P73

P72

P 7

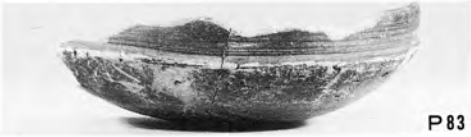
P 6

P 5

P75

P74

第48・49号住居跡出土遺物


P83

P81

P80

P 8

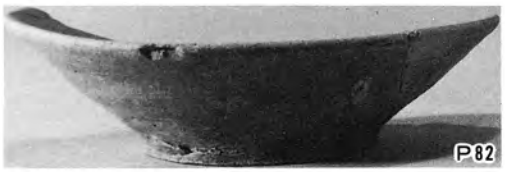
P76

P79

P77

DP19

DP16


P82

第51号住居跡出土遺物

P87

P88

P85

P90

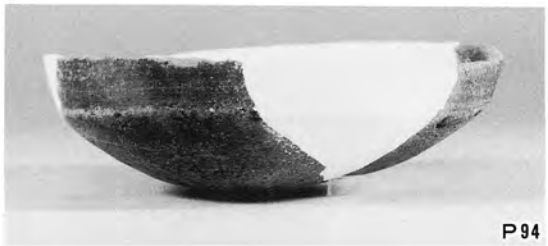
P91

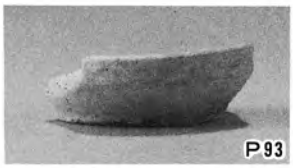
P86

P336

P317

Q 2


P94


P93

P99

P96

第52・54・55号住居跡出土遺物

P95

P101

P100

P98

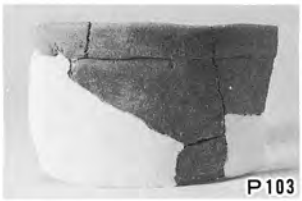
P97

Q 3

Q 4

P 9

Q5


P103

P104

P102

P105

P367

P368

第55・56・57・58号住居跡出土遺物

P10

P11

P10

P108

P107

P13

P12

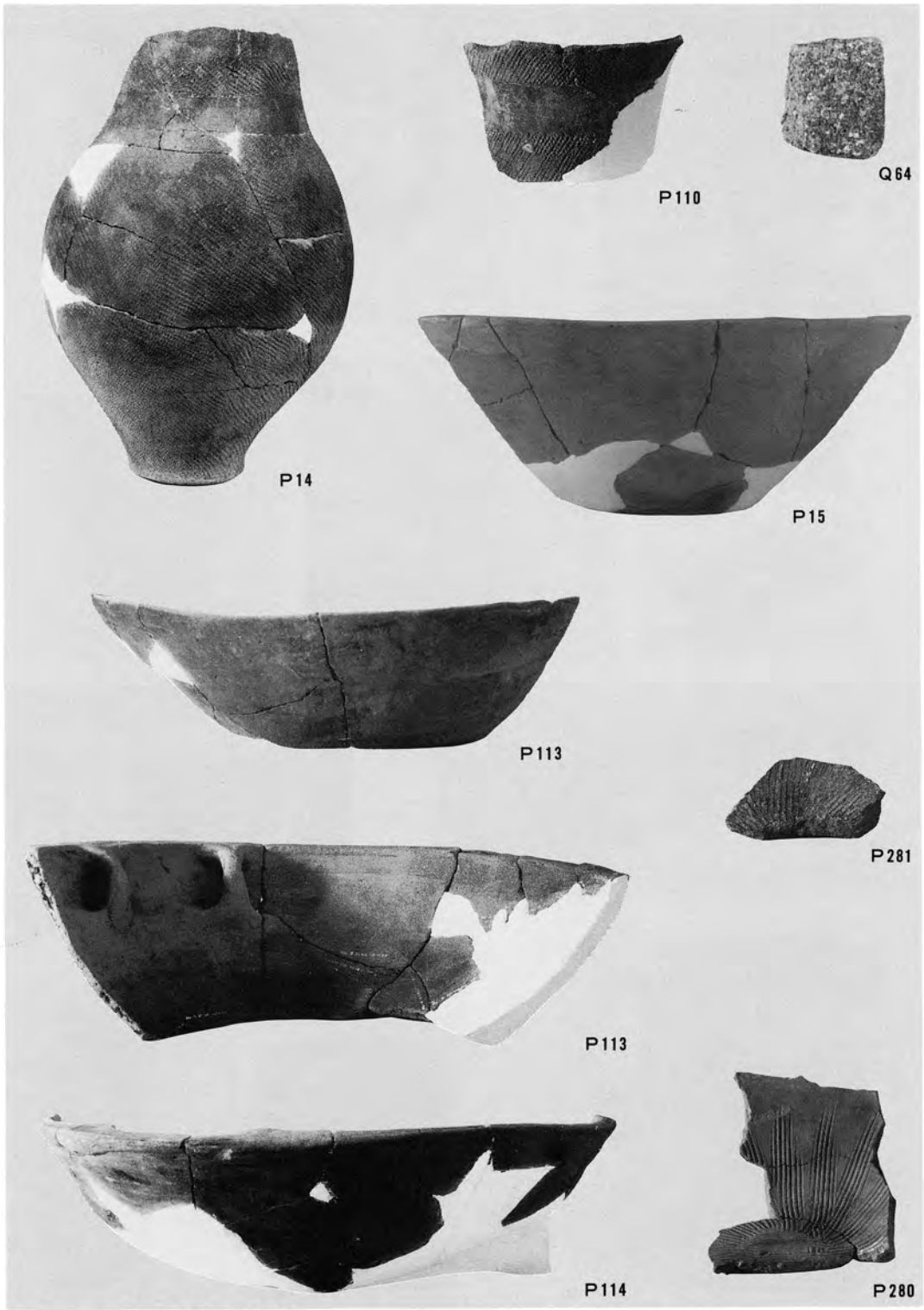
P109

P106

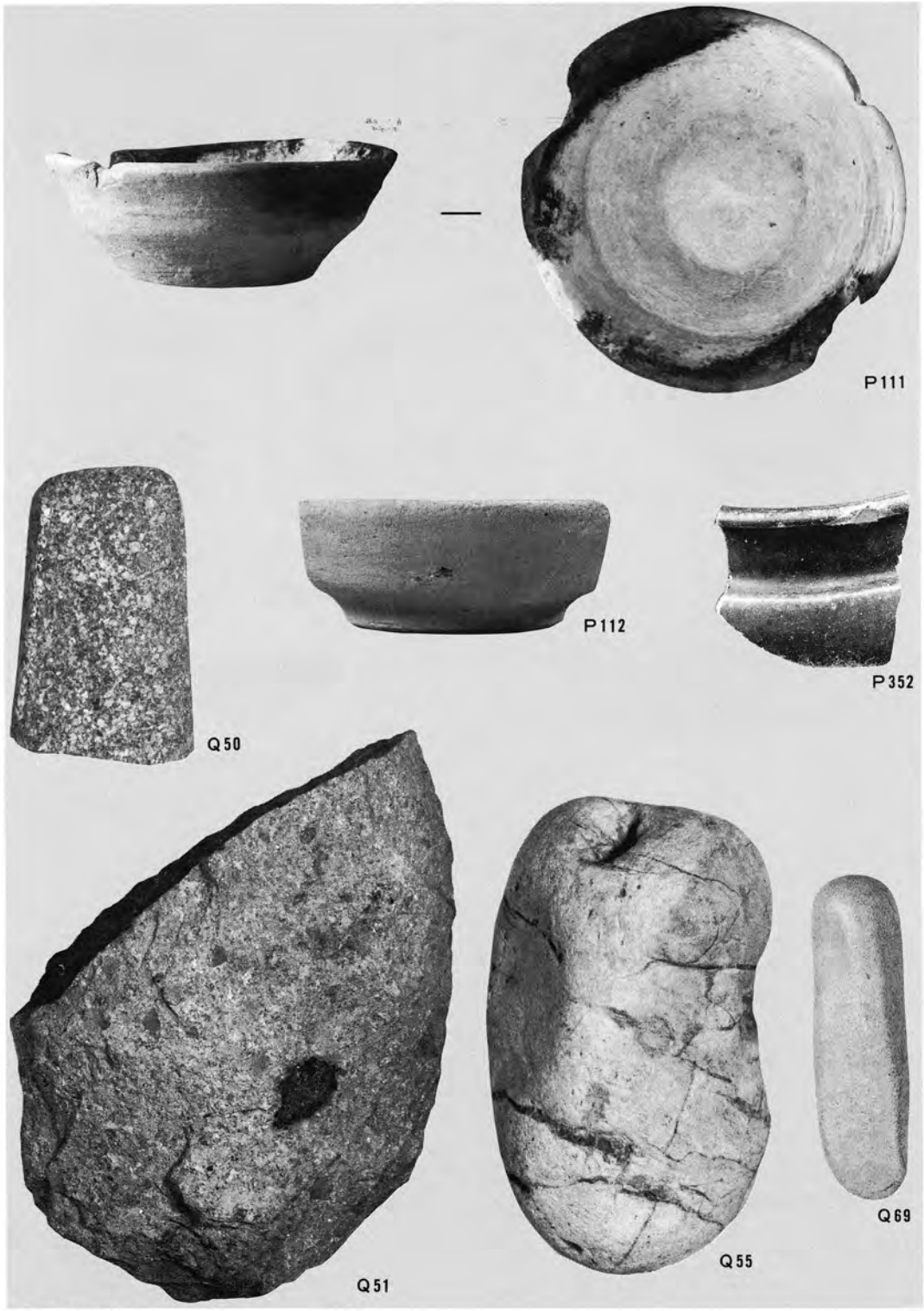
Q48

Q49

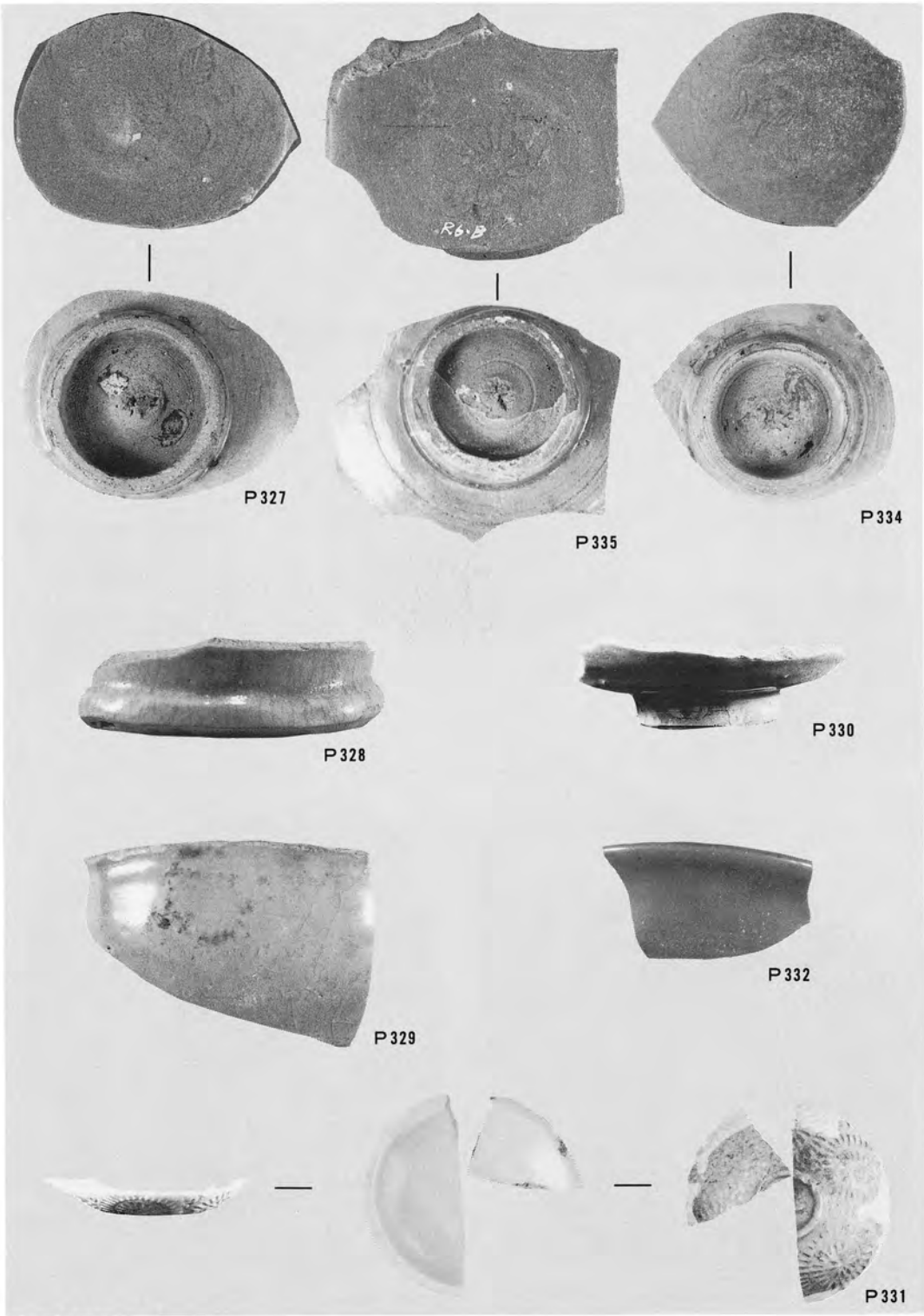
第59号住居跡出土遺物



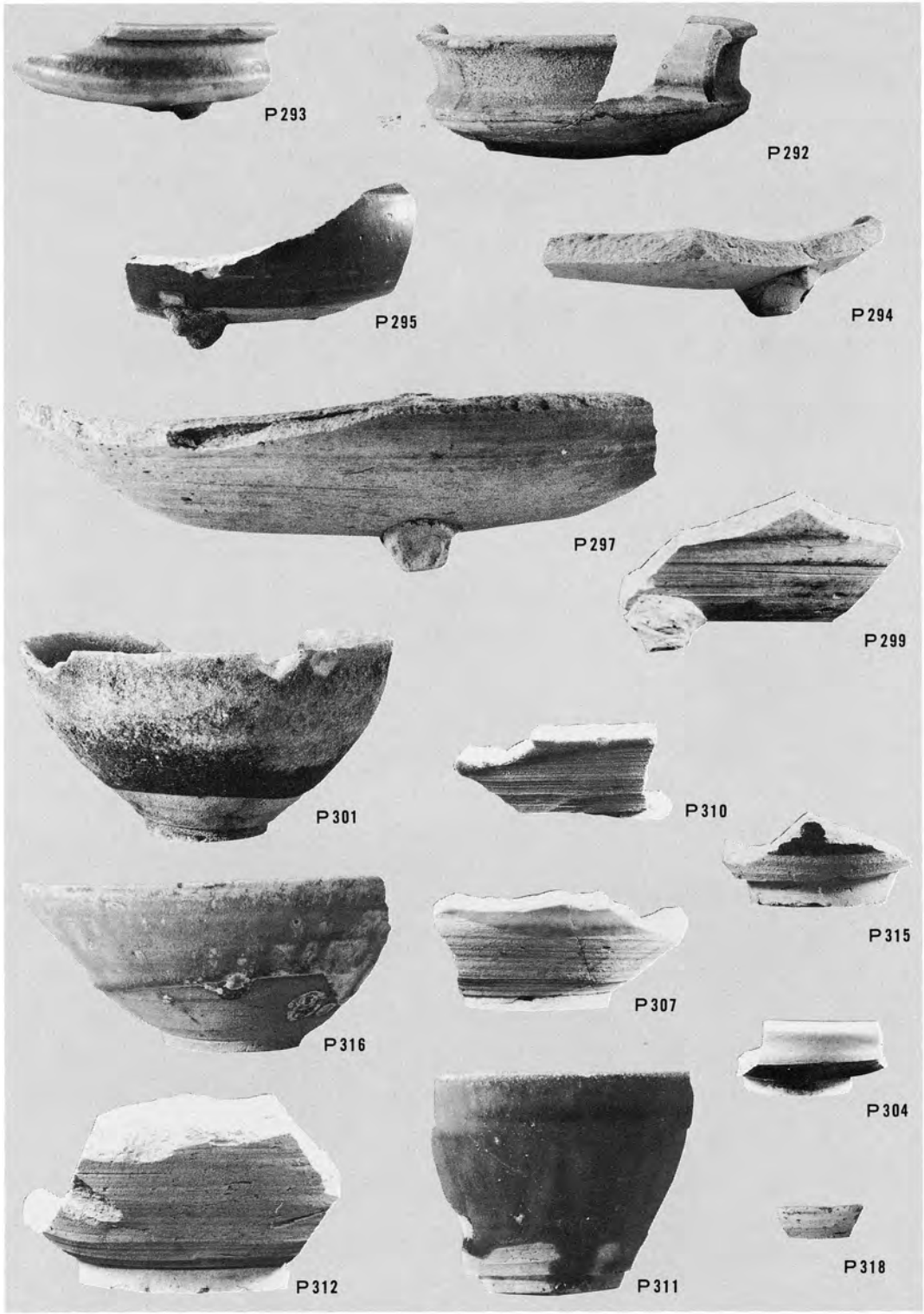
第60・62・64号住居跡出土遺物



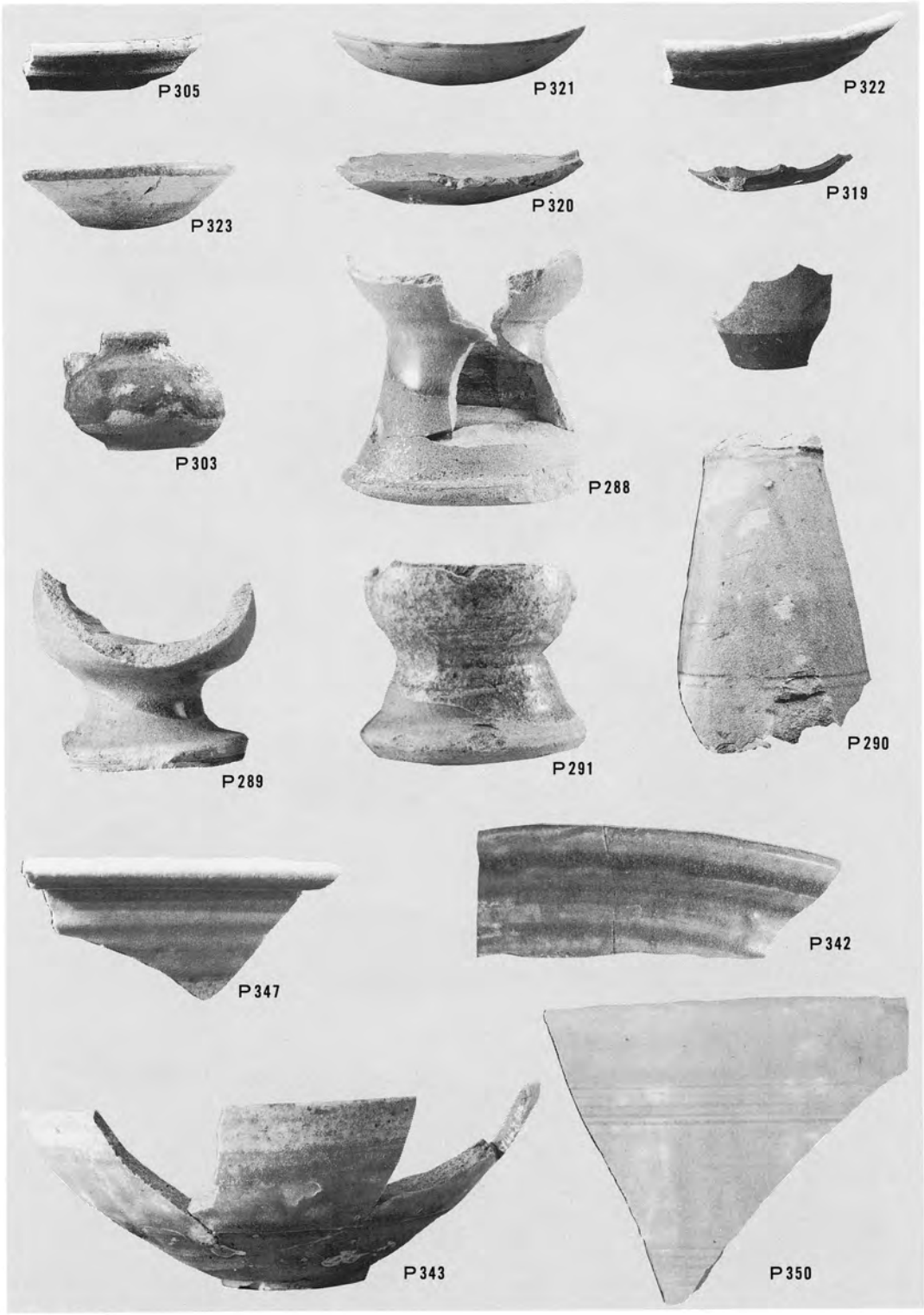
第64号住居跡出土遺物　S＝1/1.5



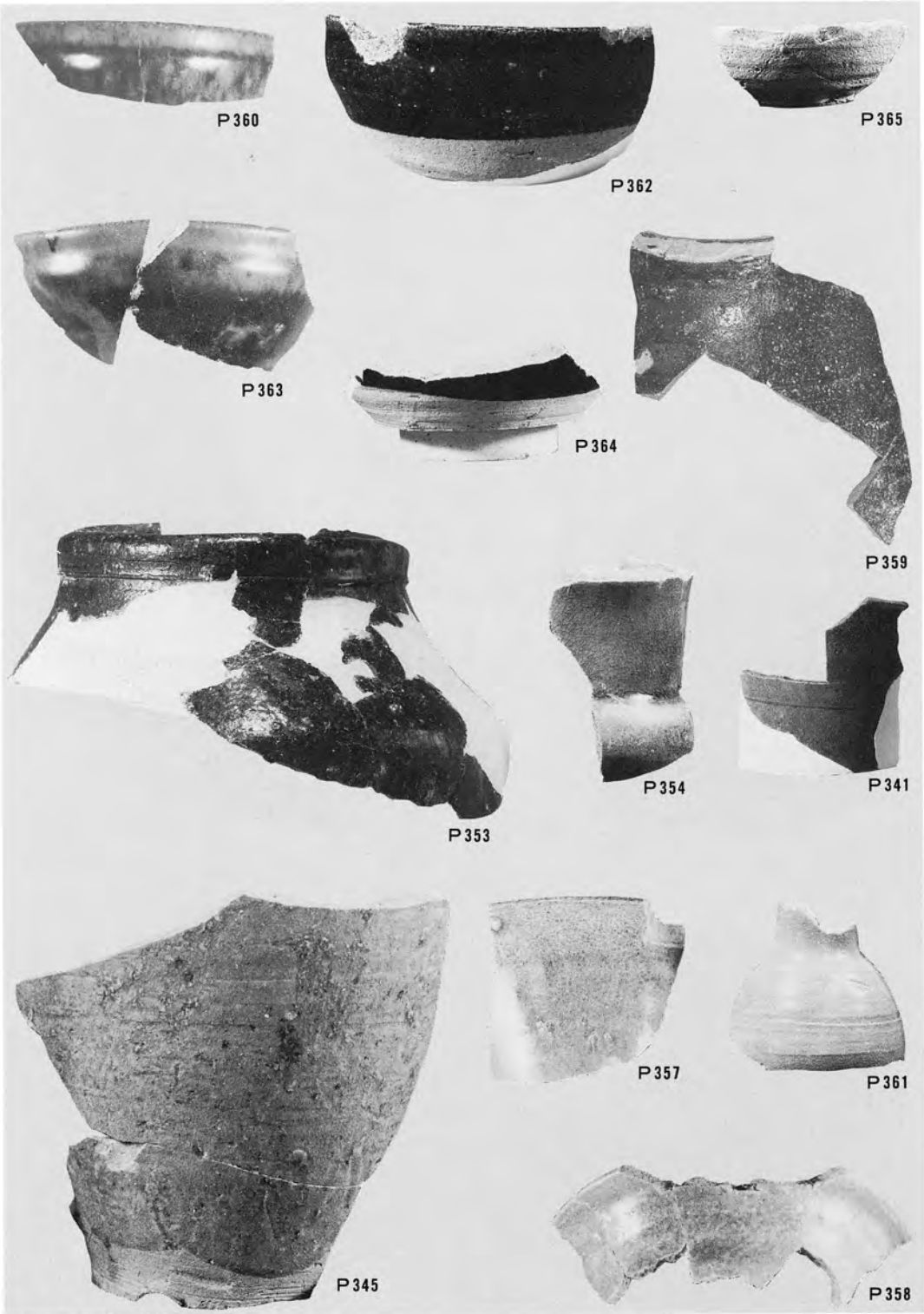
青・白磁器


P293
P292
P295
P294
P297
P299
P301
P310
P315
P316
P307
P304
P312
P311
P318

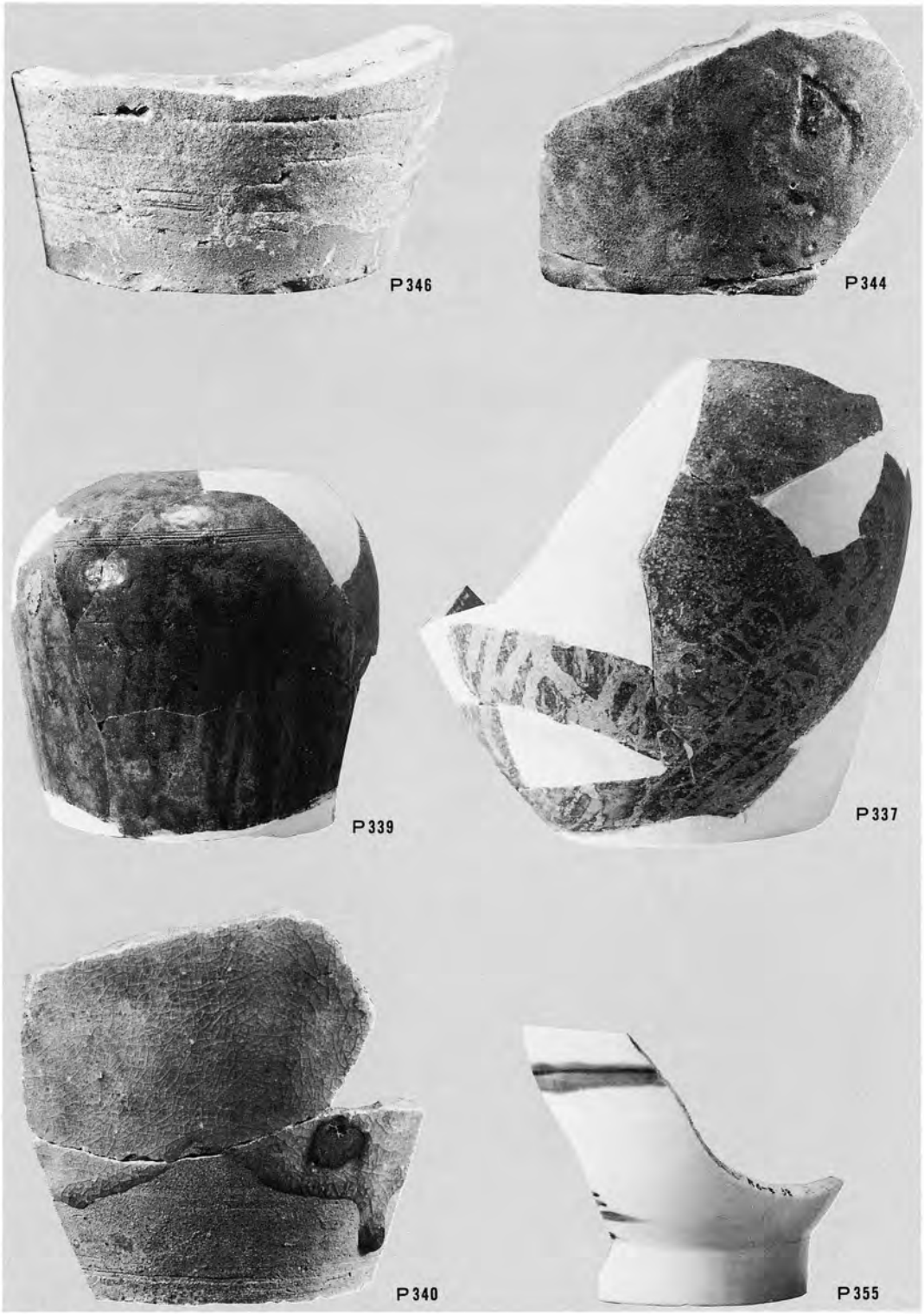
陶・磁器（1）


P305
P321
P322
P323
P320
P319
P303
P288
P289
P291
P290
P347
P342
P343
P350

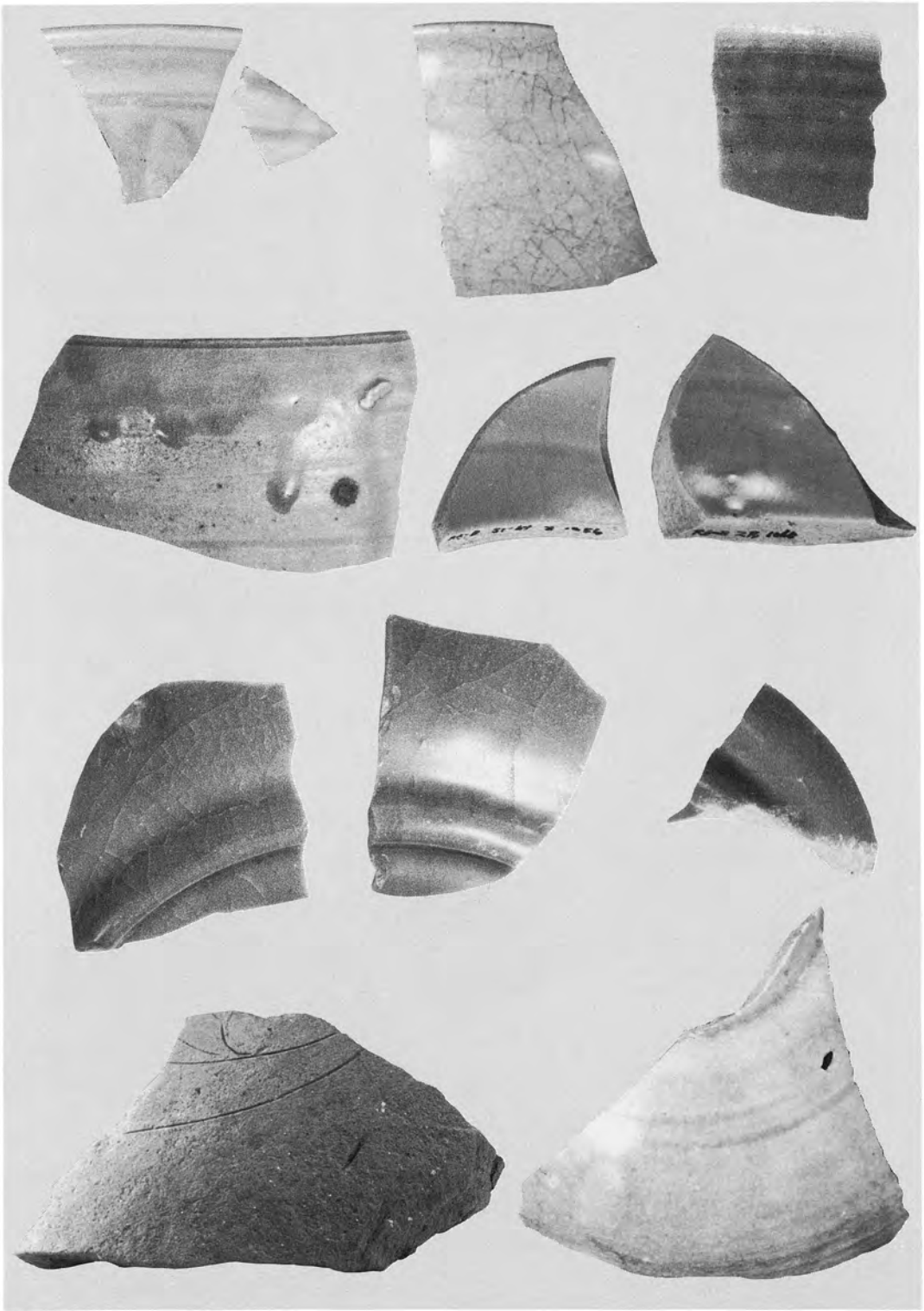
陶・磁器 (2)


P360
P362
P365
P363
P364
P359
P353
P354
P341
P357
P361
P345
P358

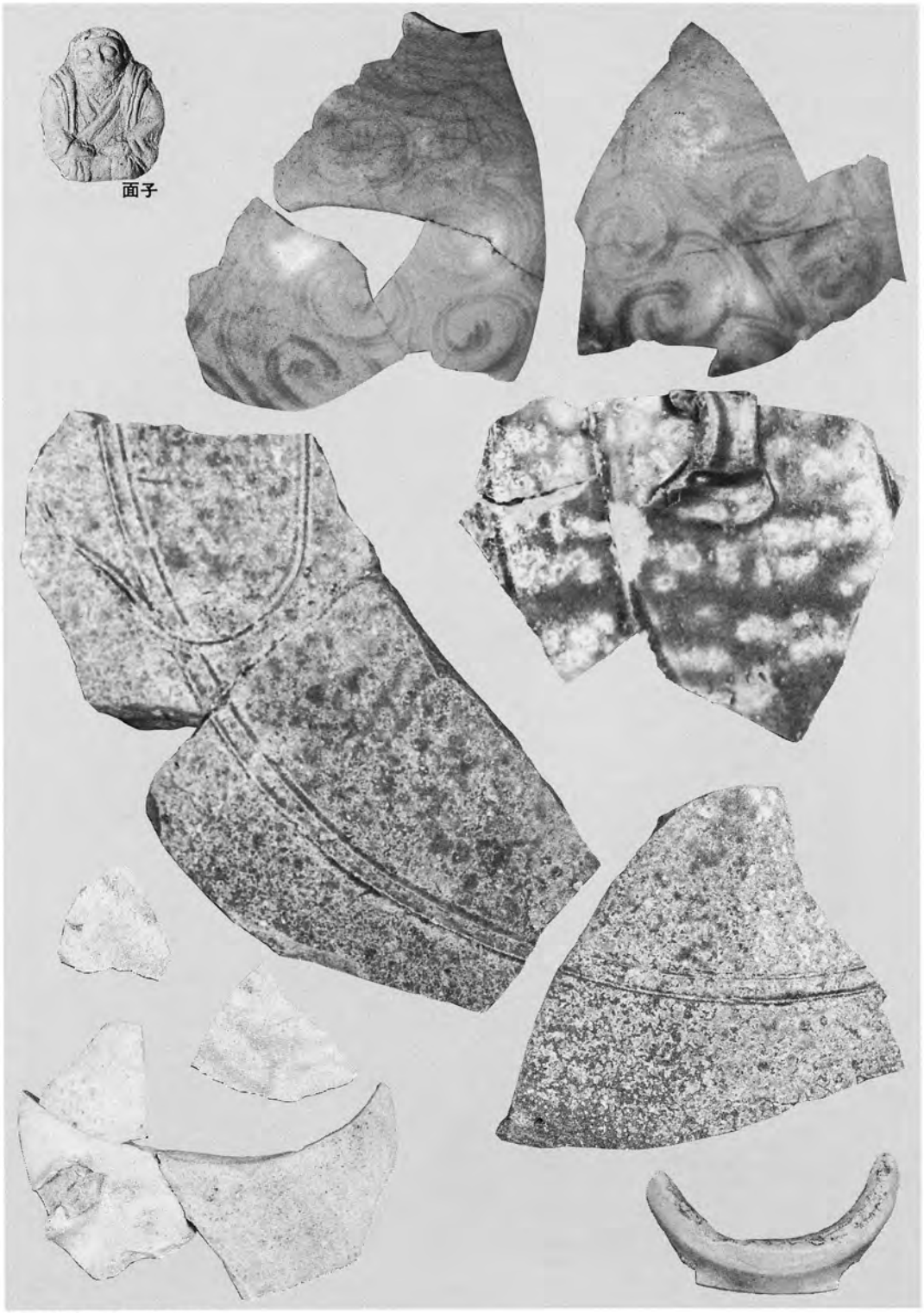
陶・磁器（3）



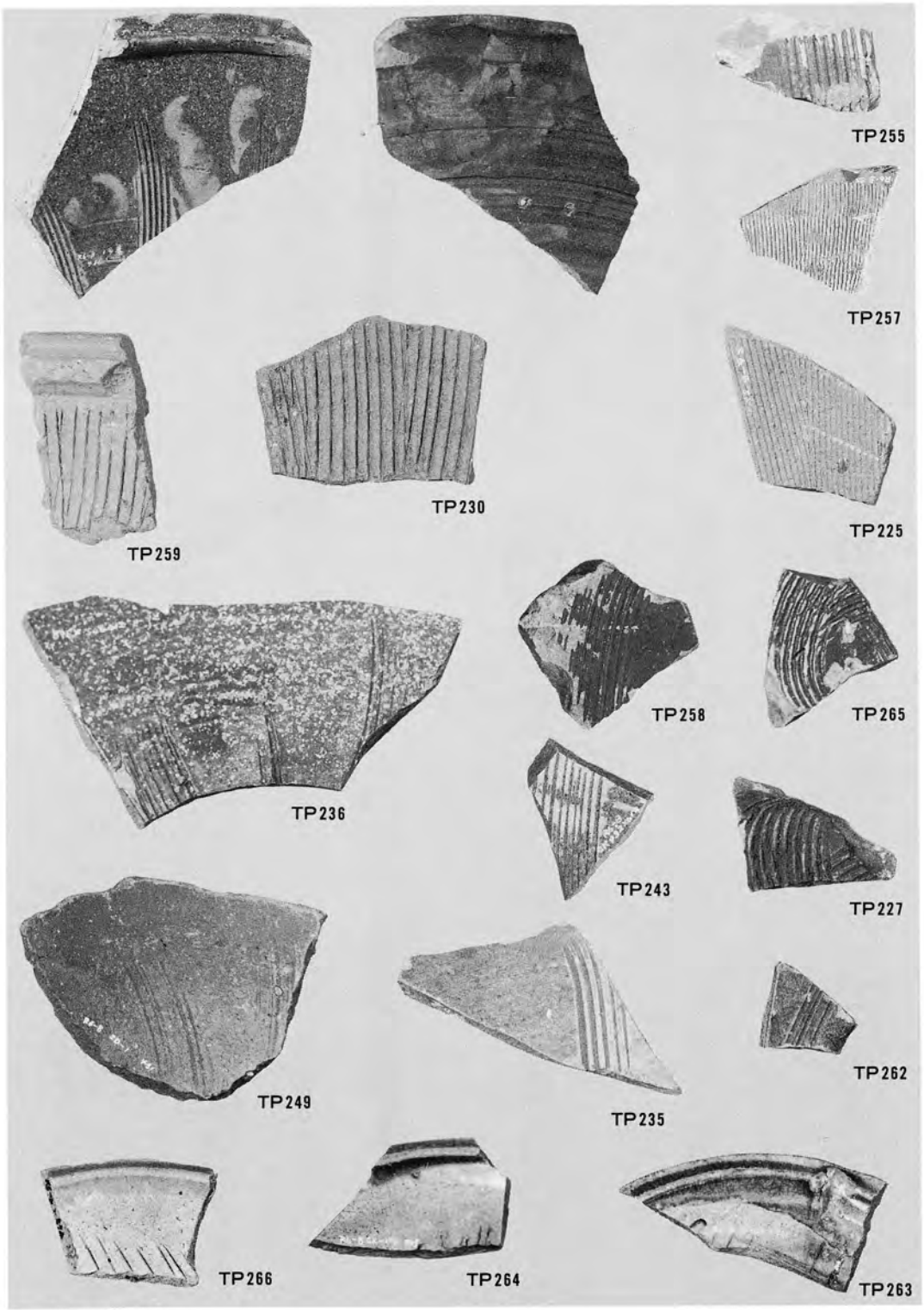
陶・磁器 (4)



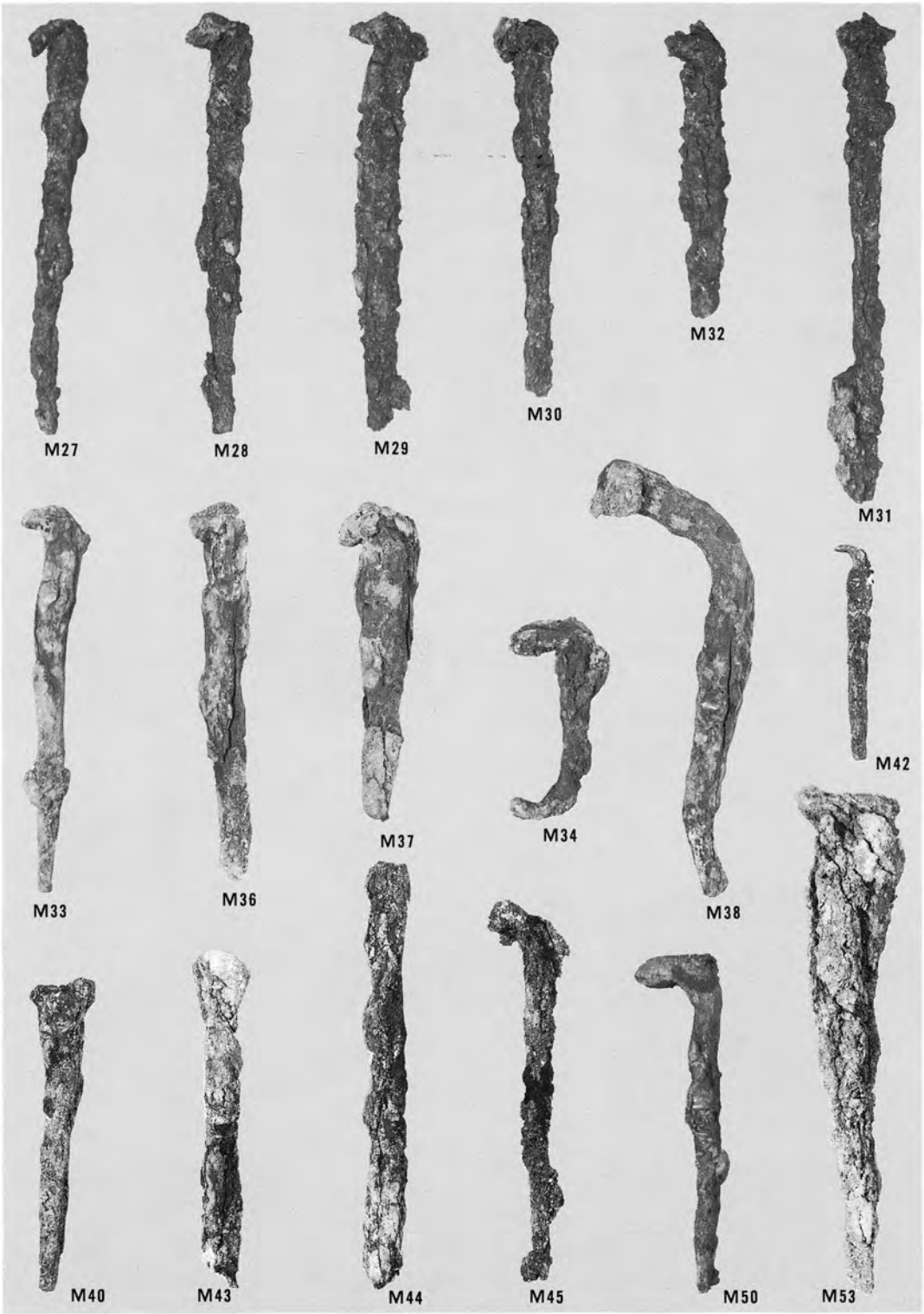
陶・磁器（5）



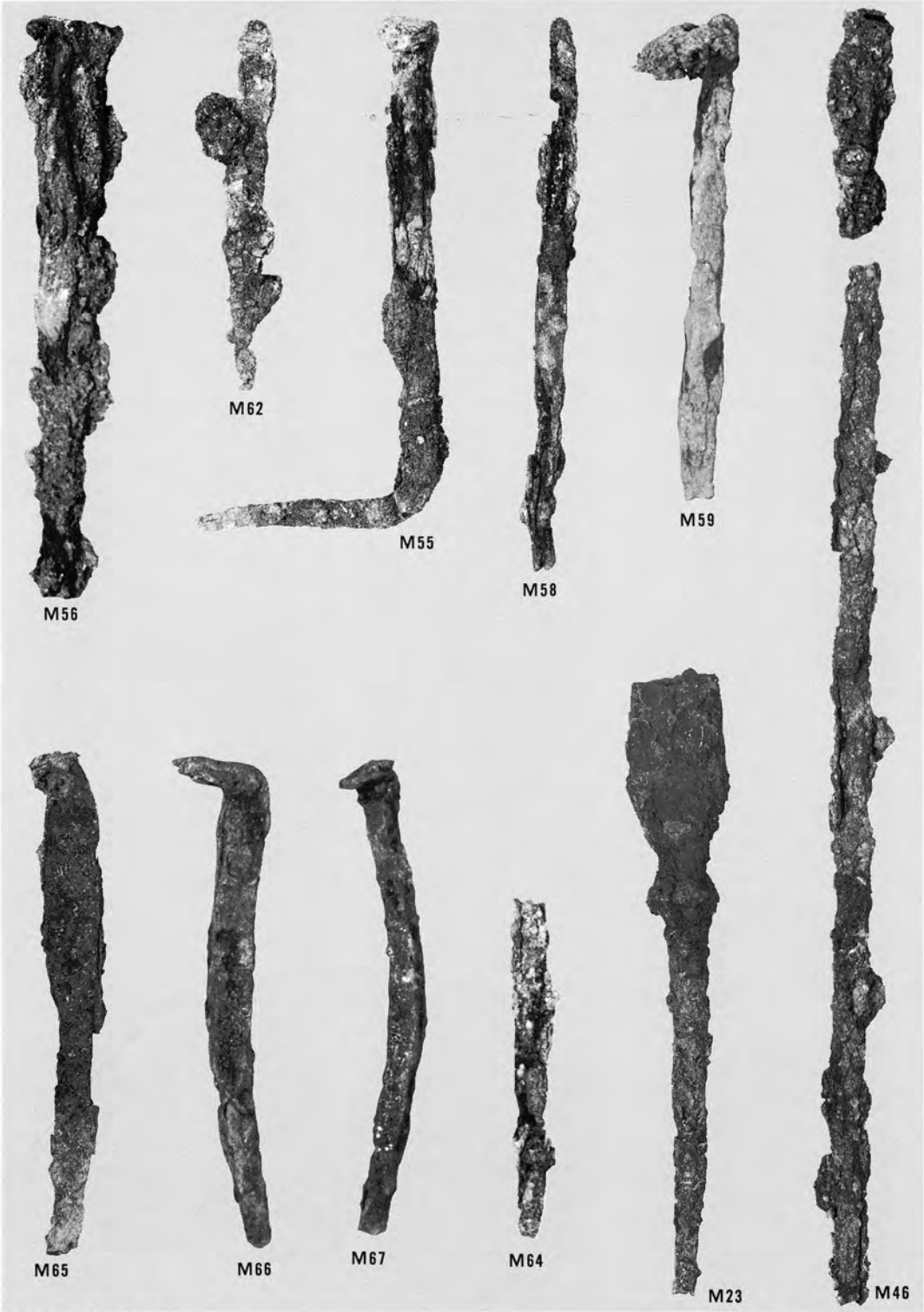
陶・磁器 (6)・土製品


TP255
TP257
TP259
TP230
TP225
TP258
TP265
TP236
TP243
TP227
TP249
TP235
TP262
TP266
TP264
TP263

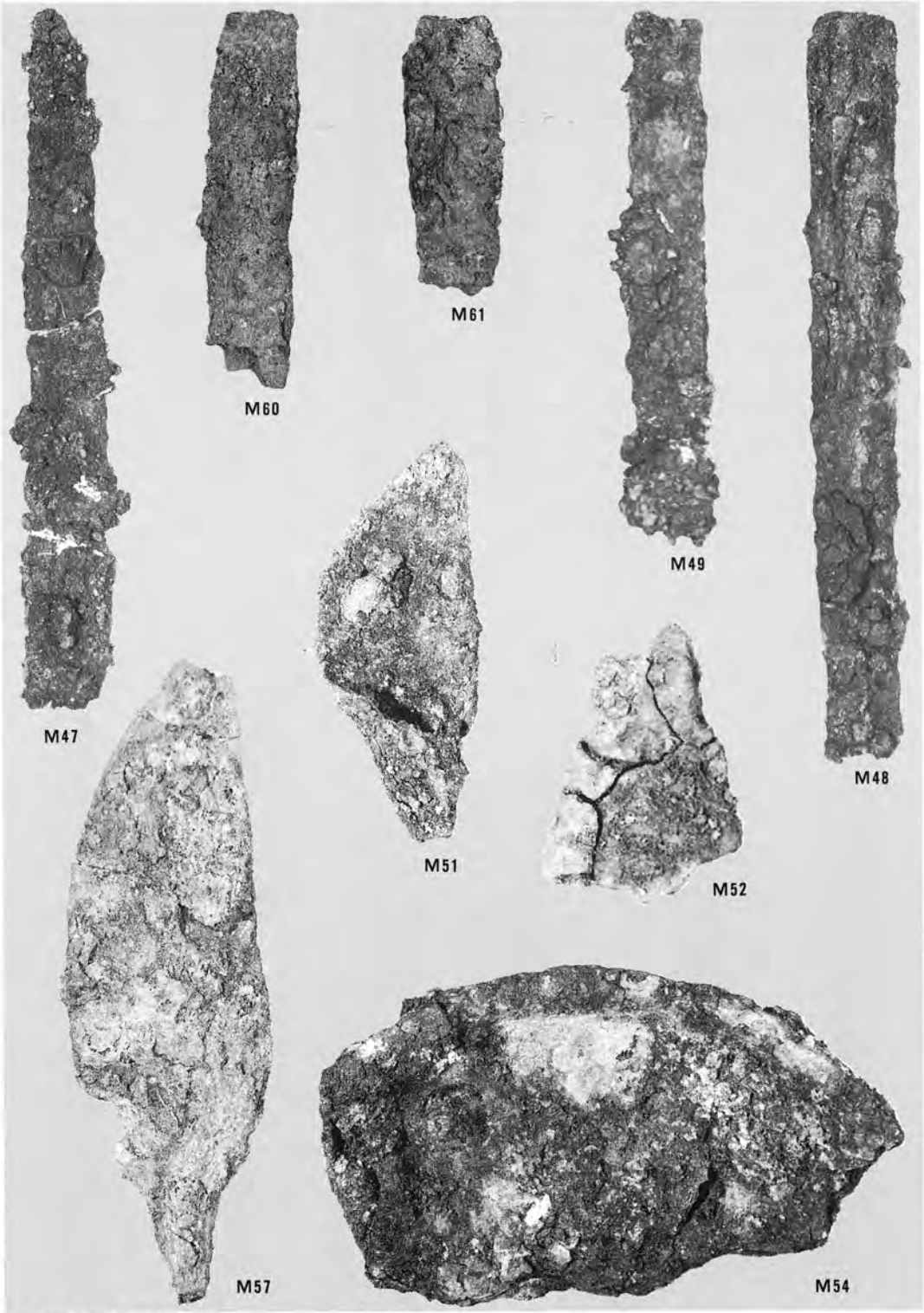
陶・磁器（擂鉢）


M27
M28
M29
M30
M32
M31
M33
M36
M37
M34
M38
M42
M40
M43
M44
M45
M50
M53

鉄製品（釘）



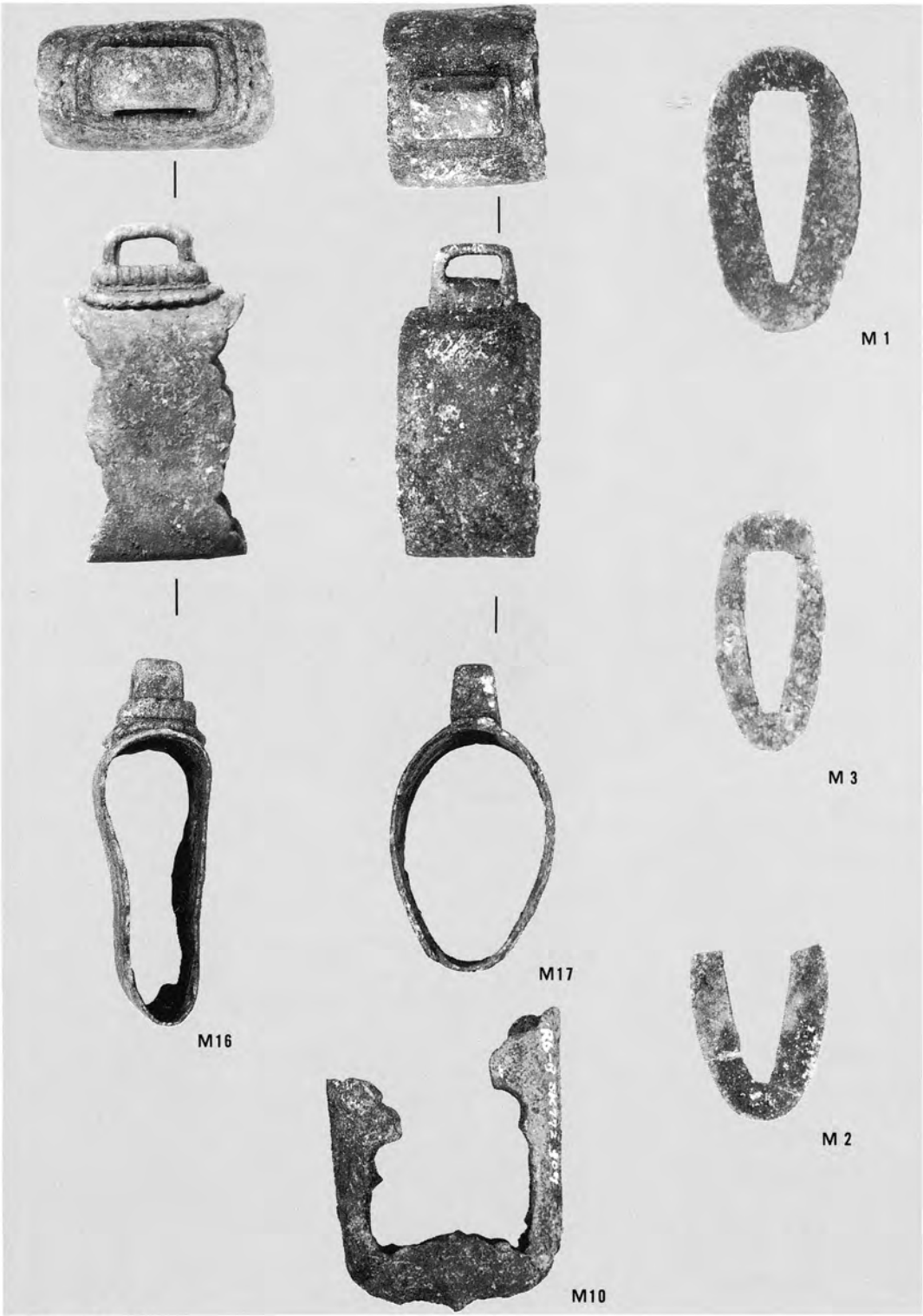
鉄製品（釘・鏃）



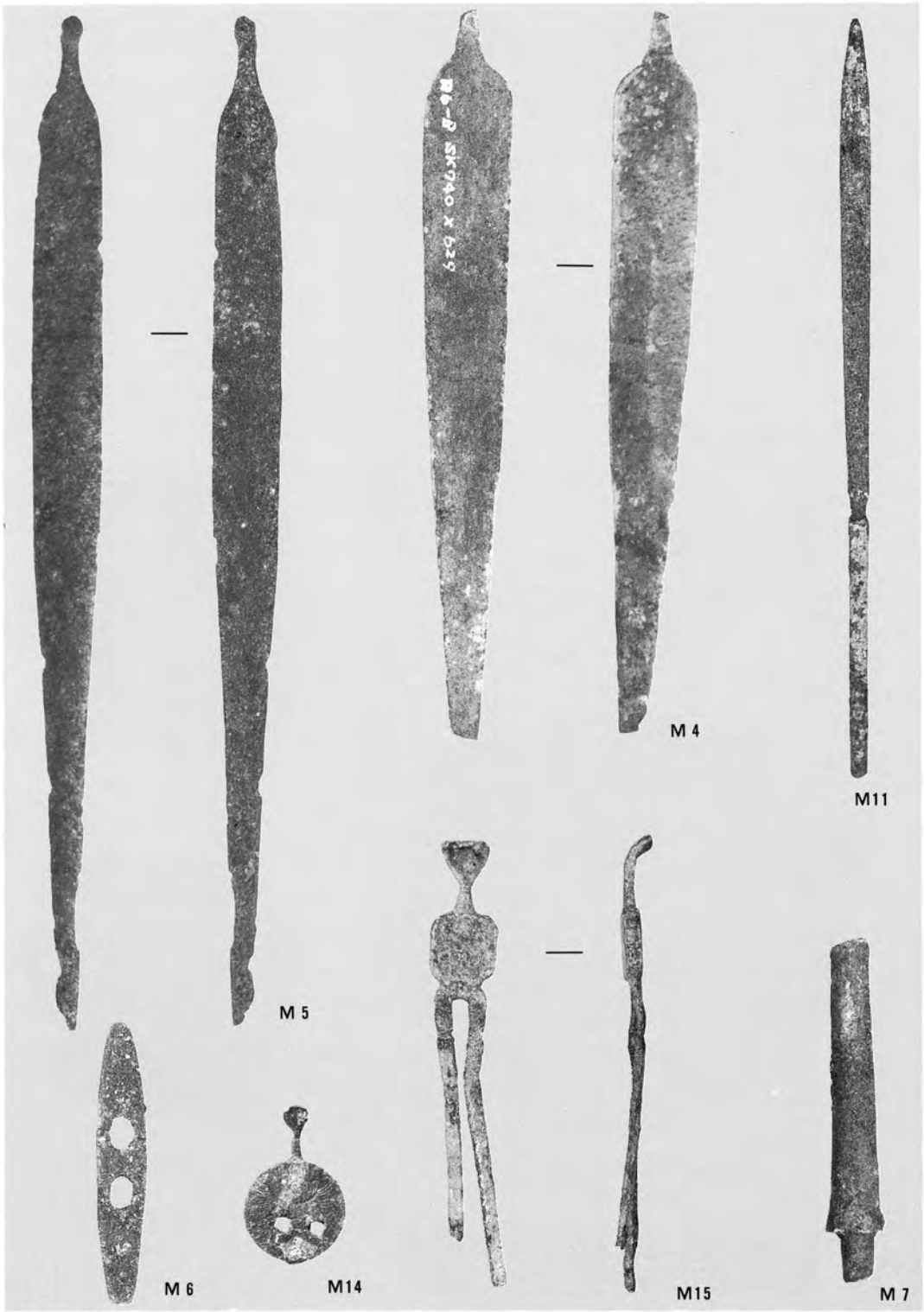
鉄製品（刀子・鏃・鎌）

M19

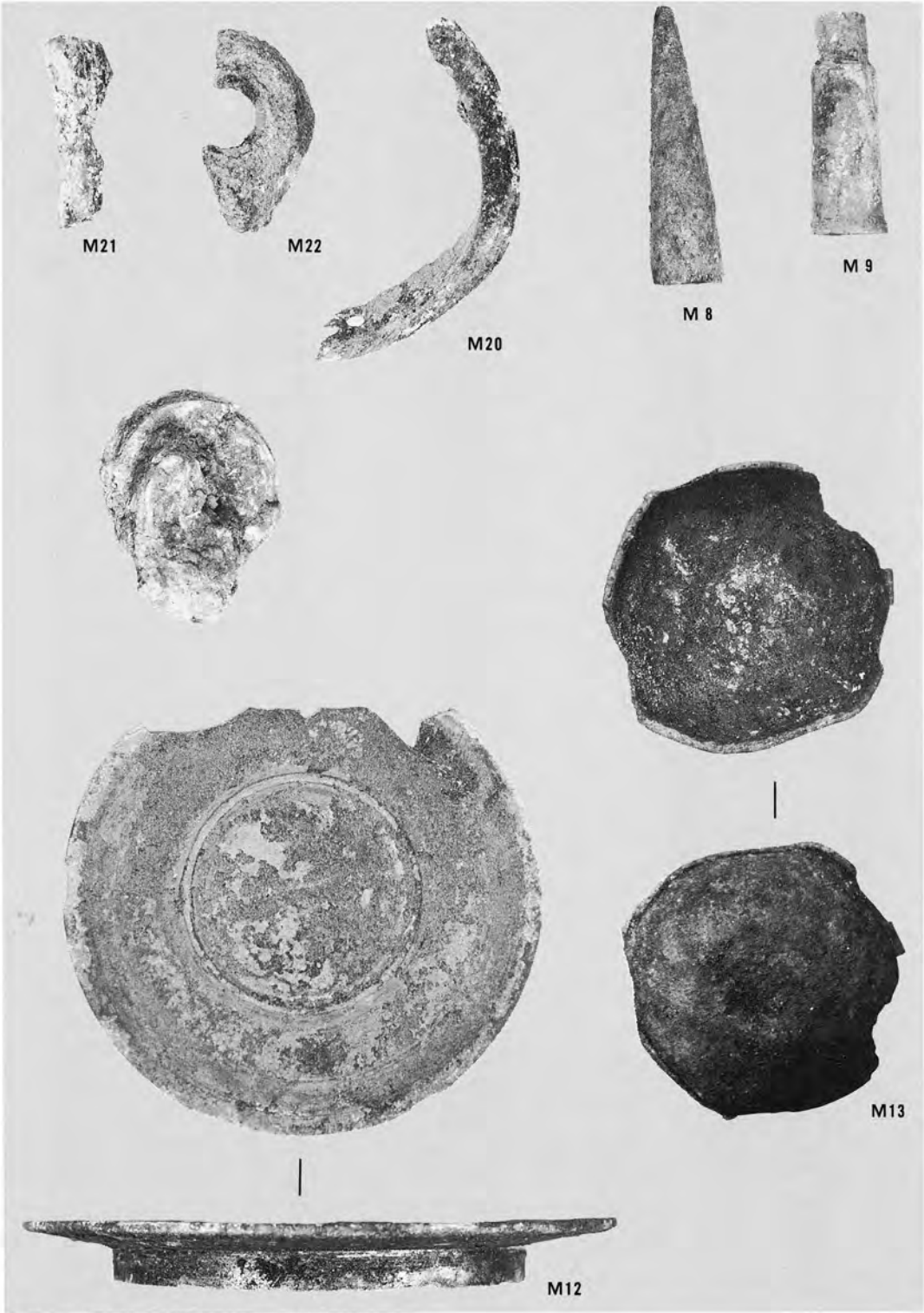
和　鏡



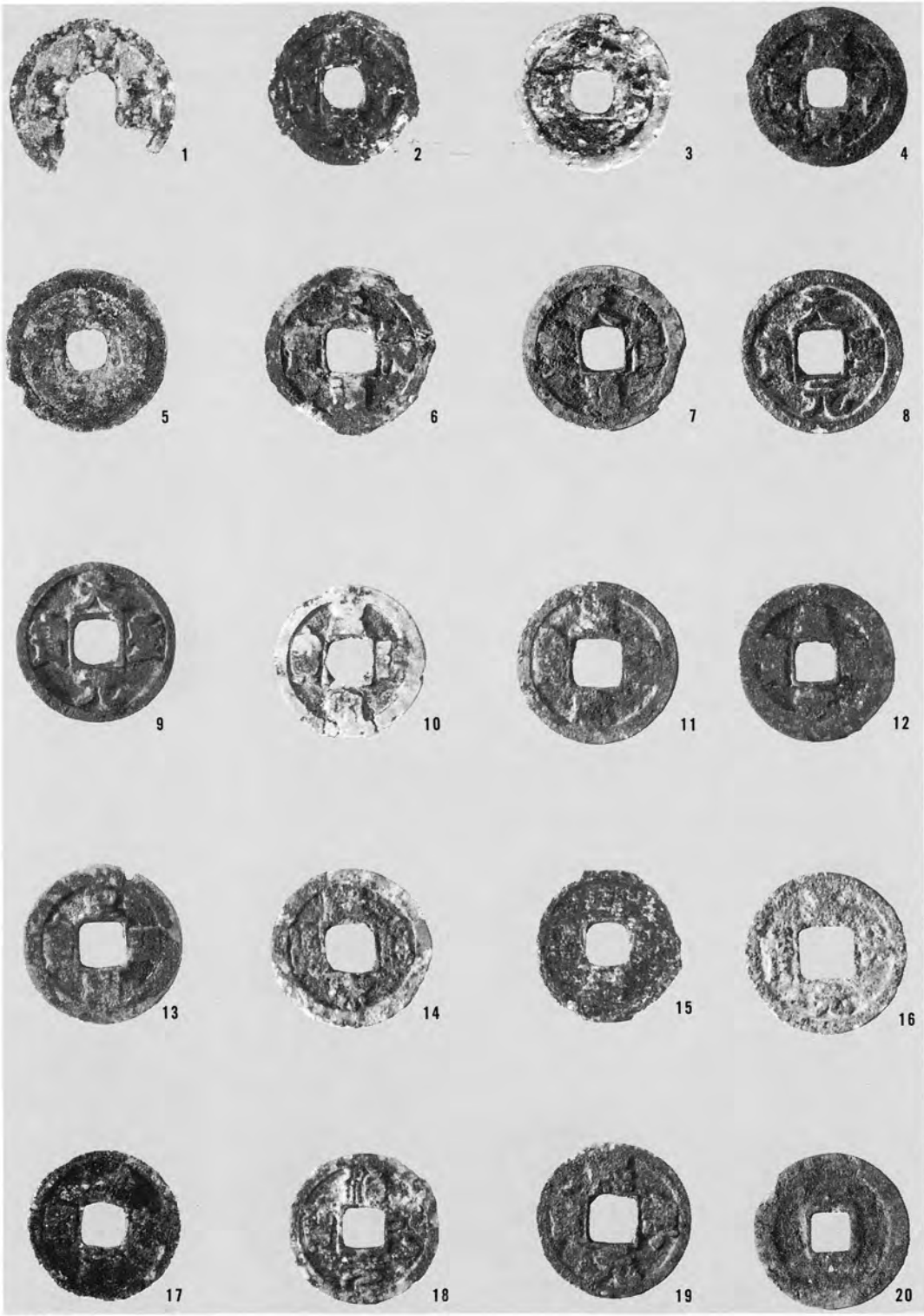
銅製品（刀装具）



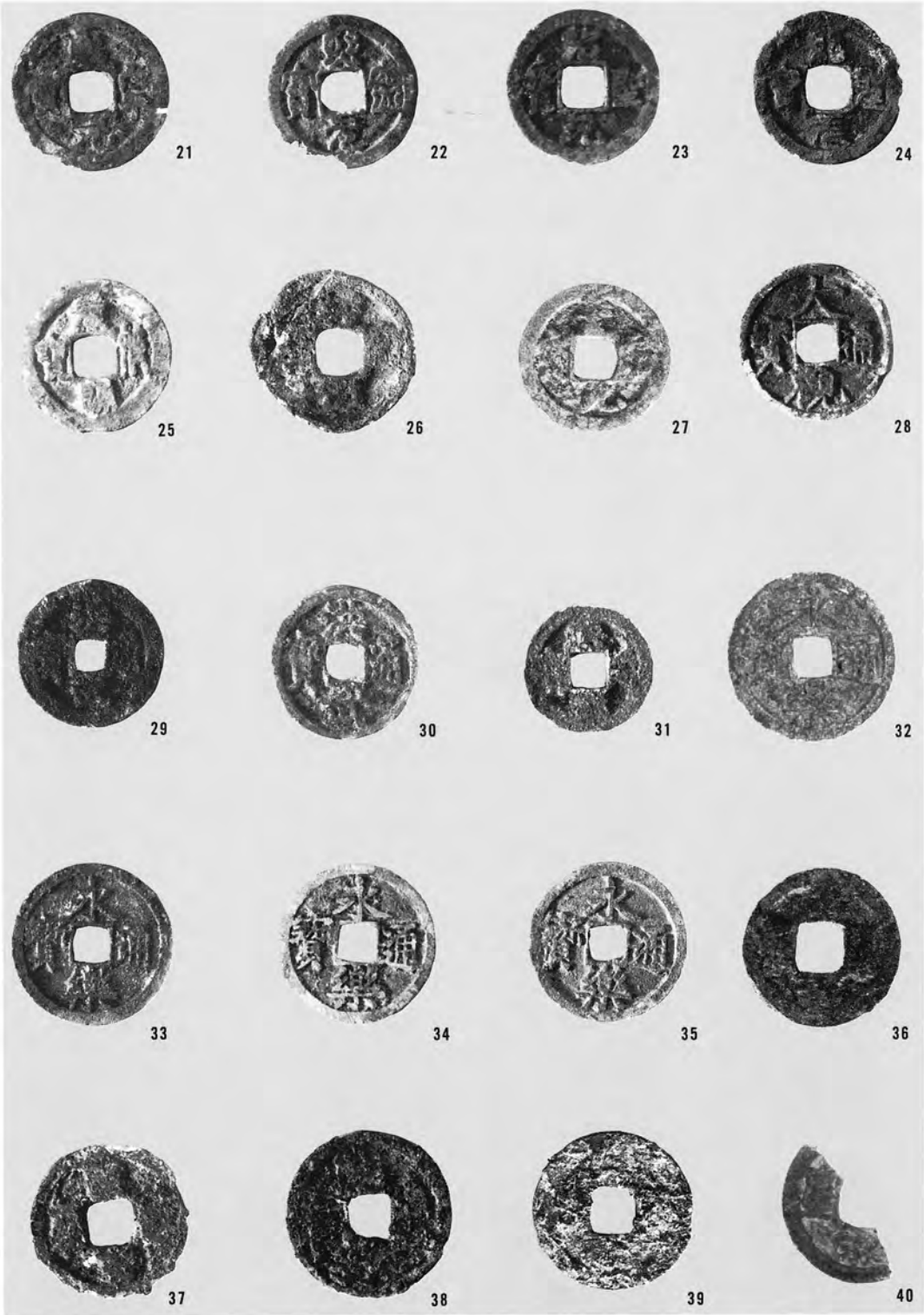
銅製品（斧・鞆・簪・鏃）



銅製品（留金・古銭・六器・煙管）

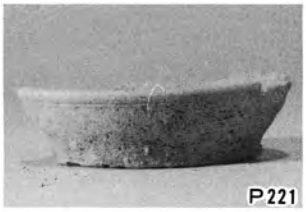


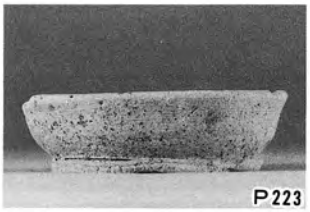
古銭 (1)



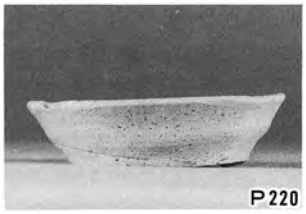
古銭 (2)

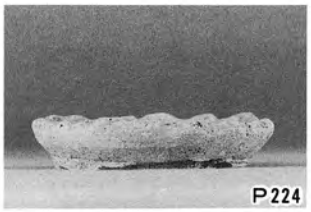
P225

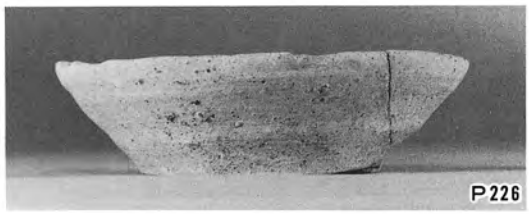

P221


P223

P219


P220

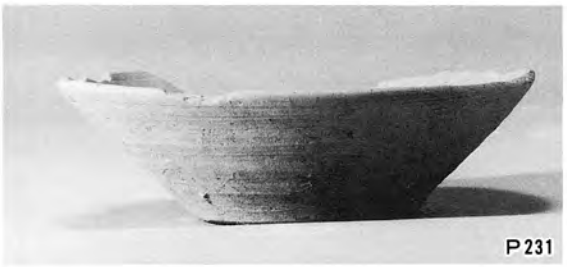

P224


P226

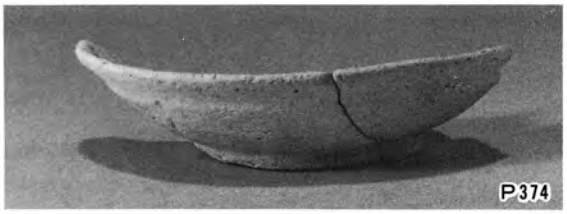
P228

P222

P230

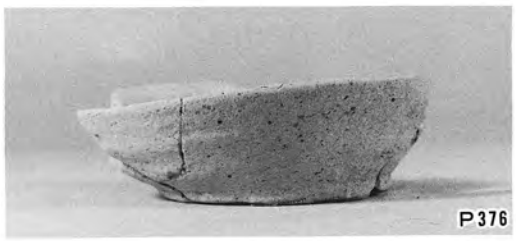

P231

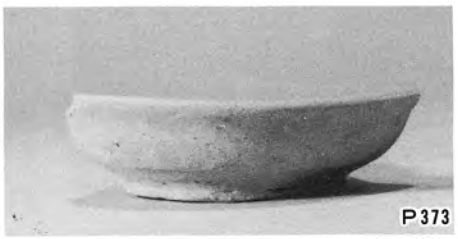
P233

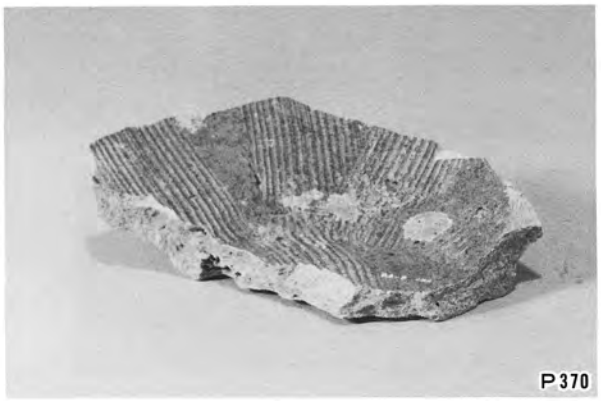

P374

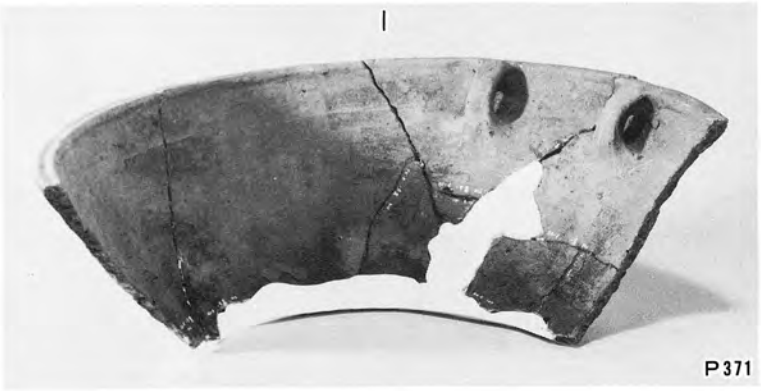
P372

1号墓壙出土遺物（1）

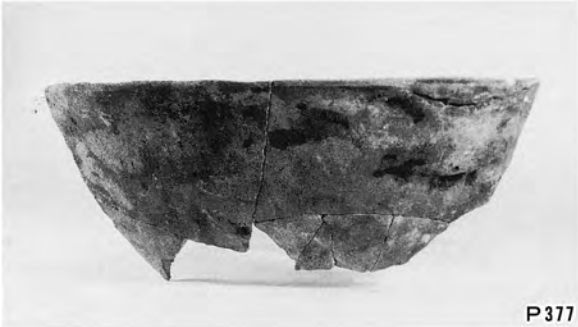




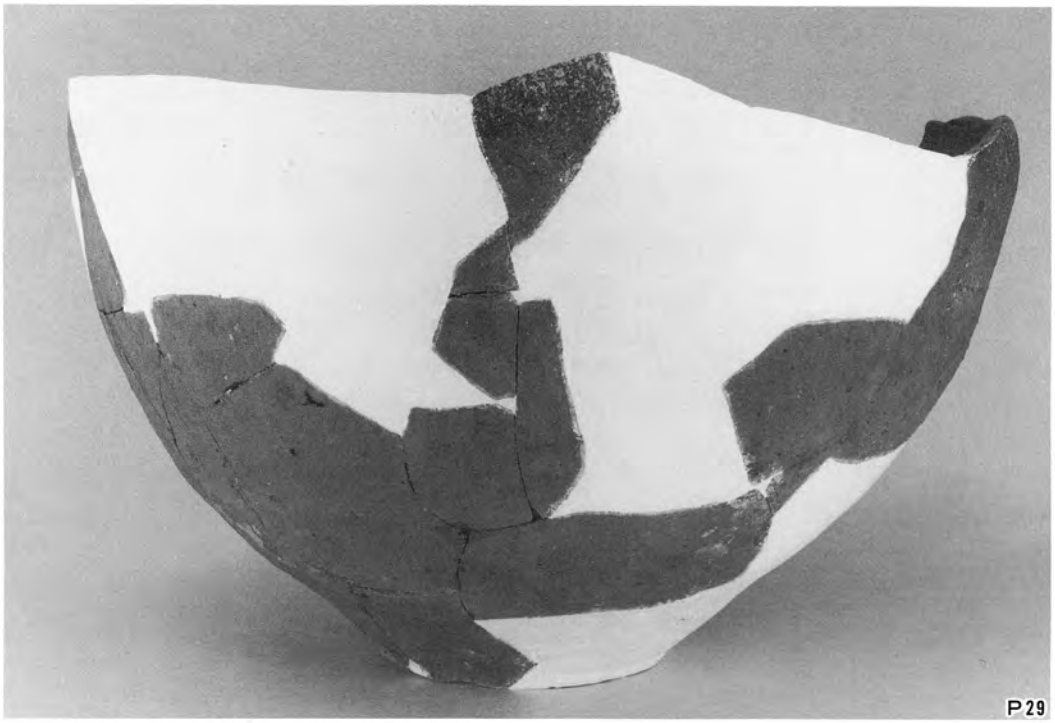


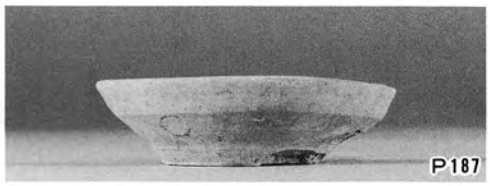


1号墓壙出土遺物 (2)

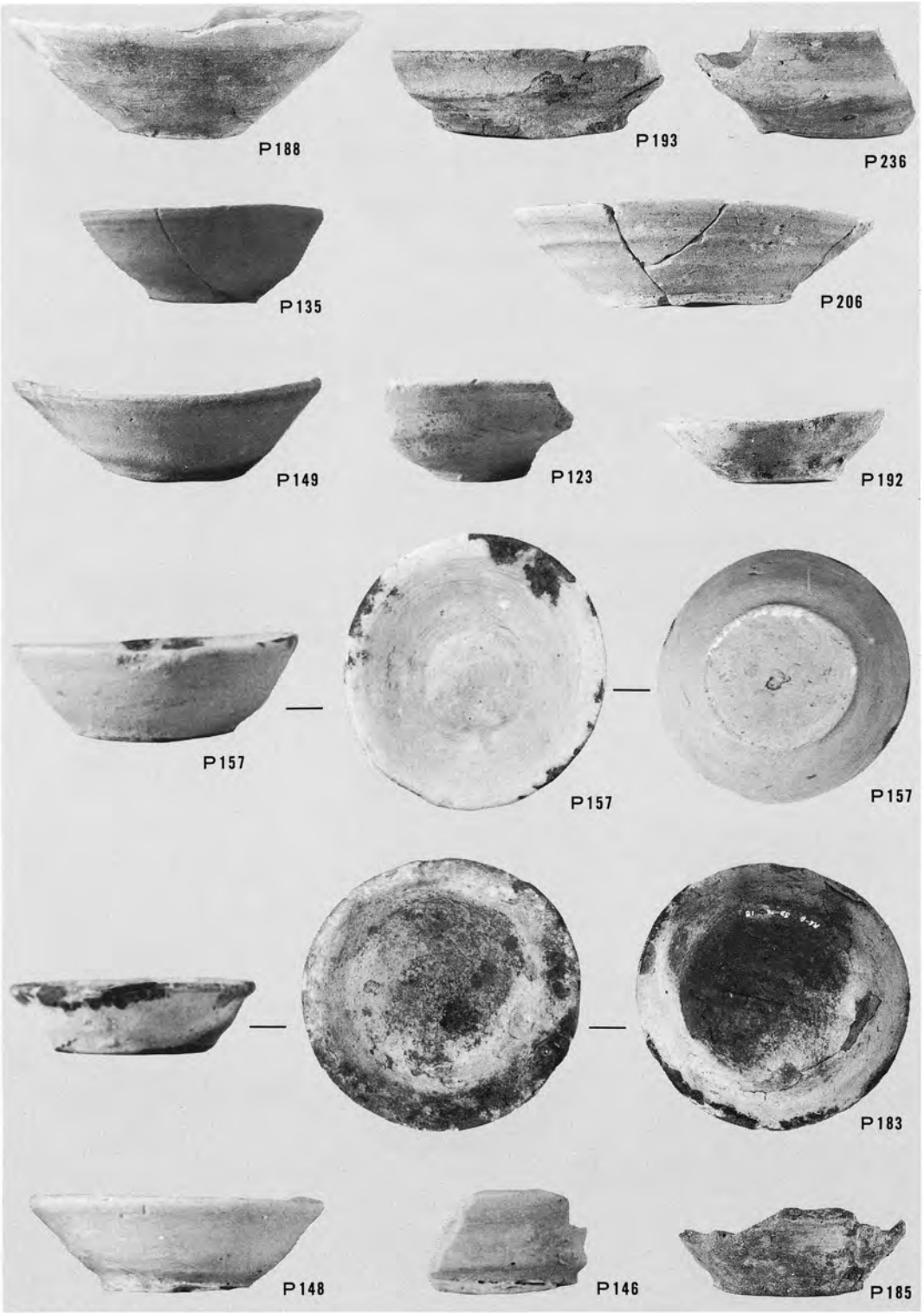


1号墓壙出土遺物 (3)・蔵骨器

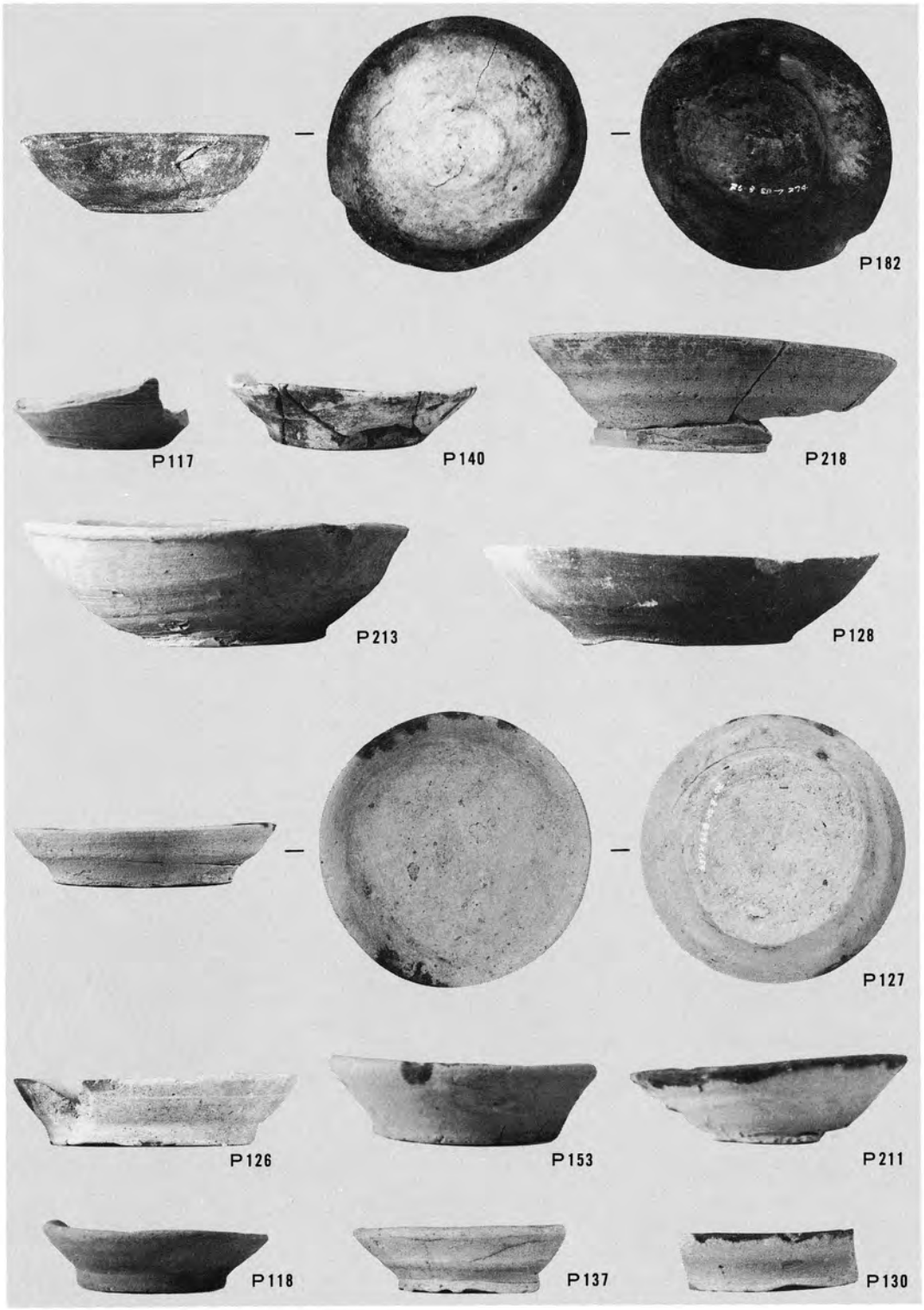




蔵骨器・土師質土器 (1)

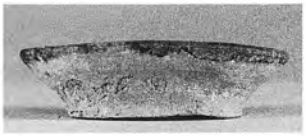

P188
P193
P236
P135
P206
P149
P123
P192
P157
P157
P157
P183
P148
P146
P185

土師質土器 (2)


P182
P117
P140
P218
P213
P128
P127
P126
P153
P211
P118
P137
P130

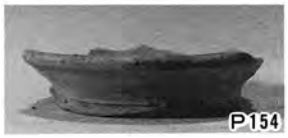
土師質土器 (3)

P211



P186

P207


P154

P198

P204

P227

P238

P189

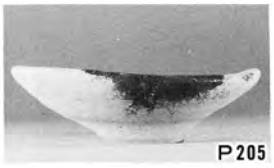
P212

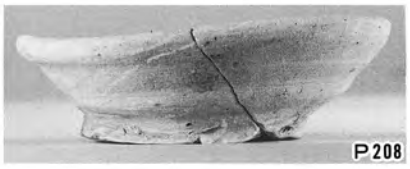
P184

P235

土師質土器 (4)

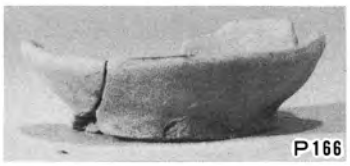
P147


P205


P208

P164

P143


P166

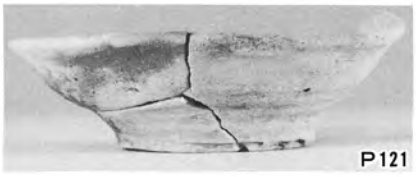
P237

P210

P122

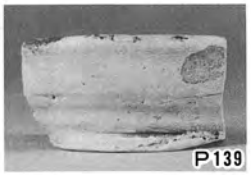
P120

P115


P121

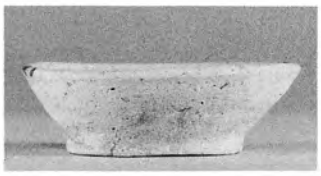
P145

P232

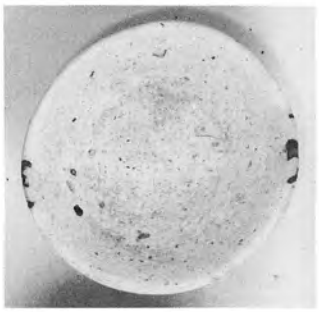

P139

P229

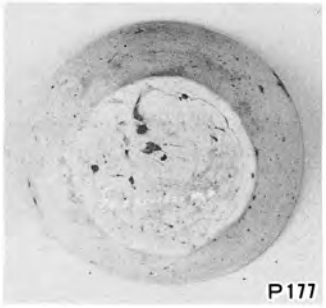
P176



—

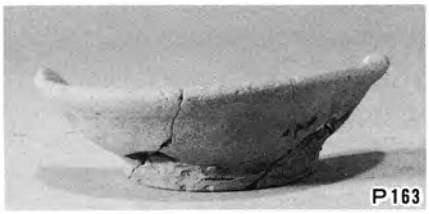


—


P177

土師質土器 (5)

P178


P163

P159

P179

P170

P174

P191

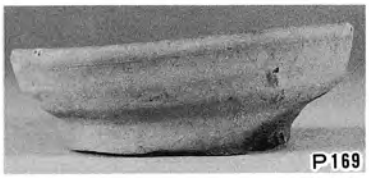
P190

P119

P116

P197

P181


P169

P200

P167

P175

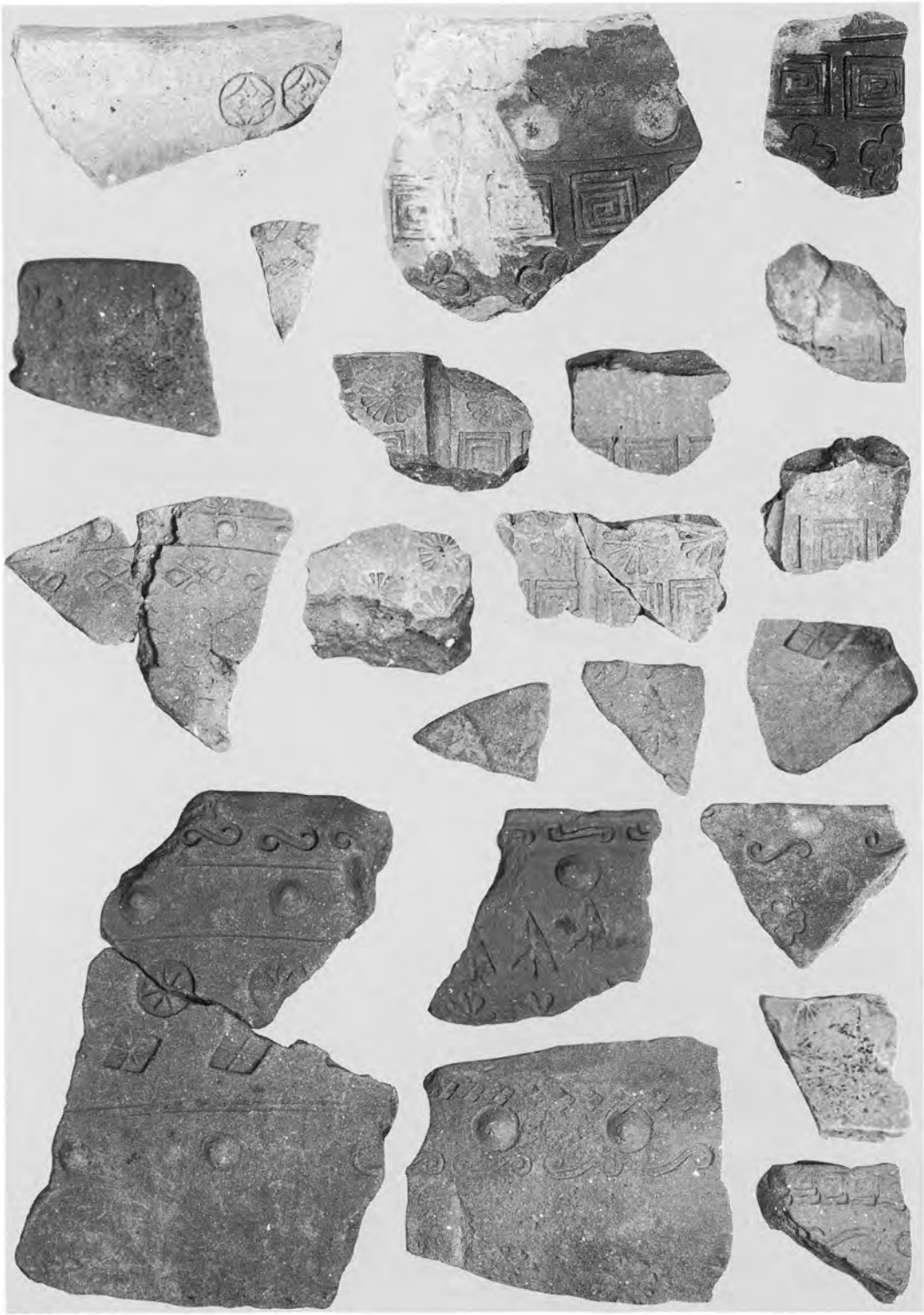
P152

P156

P171

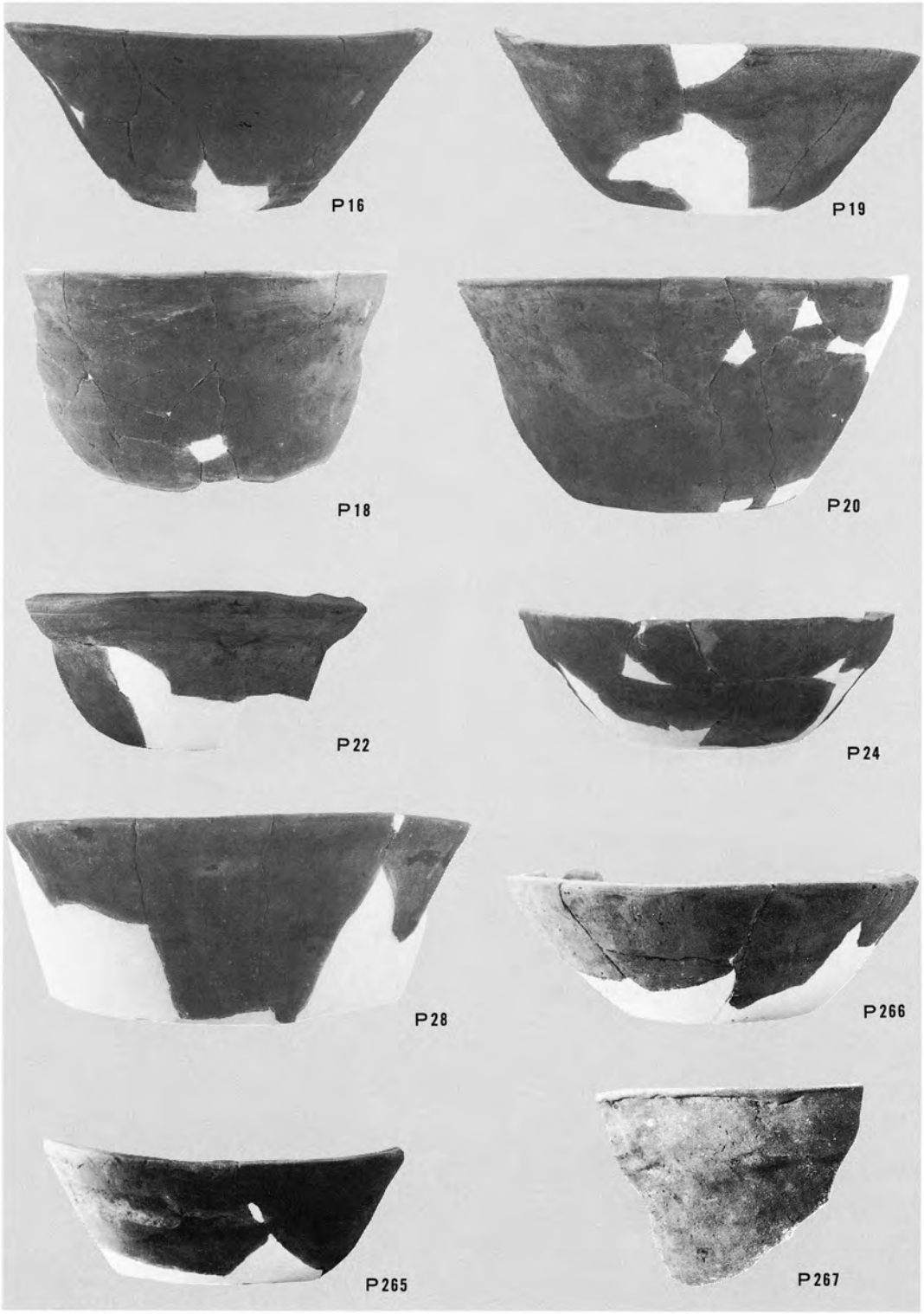
土師質土器 (6)

押印文様（1）

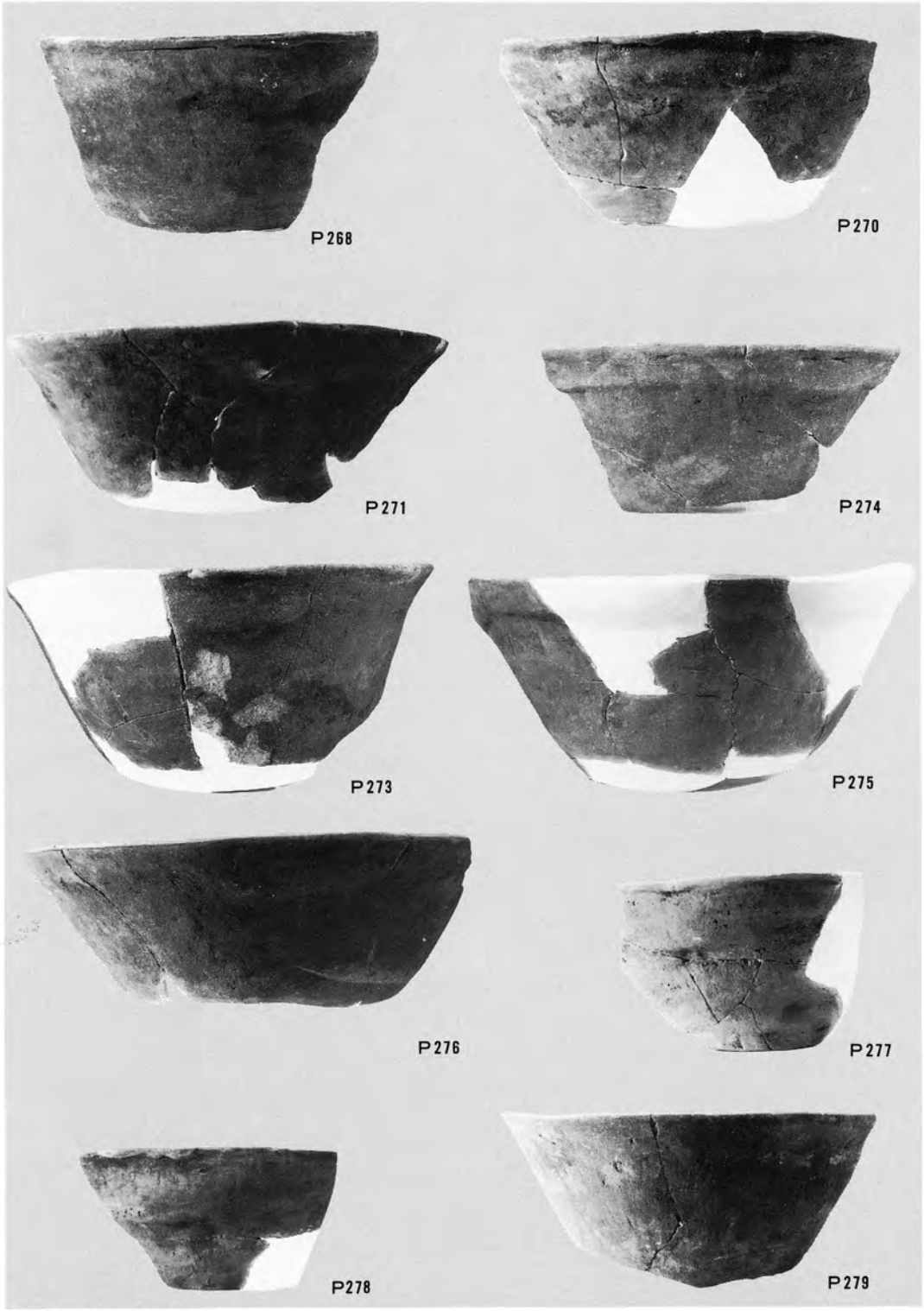


押印文様 (2)

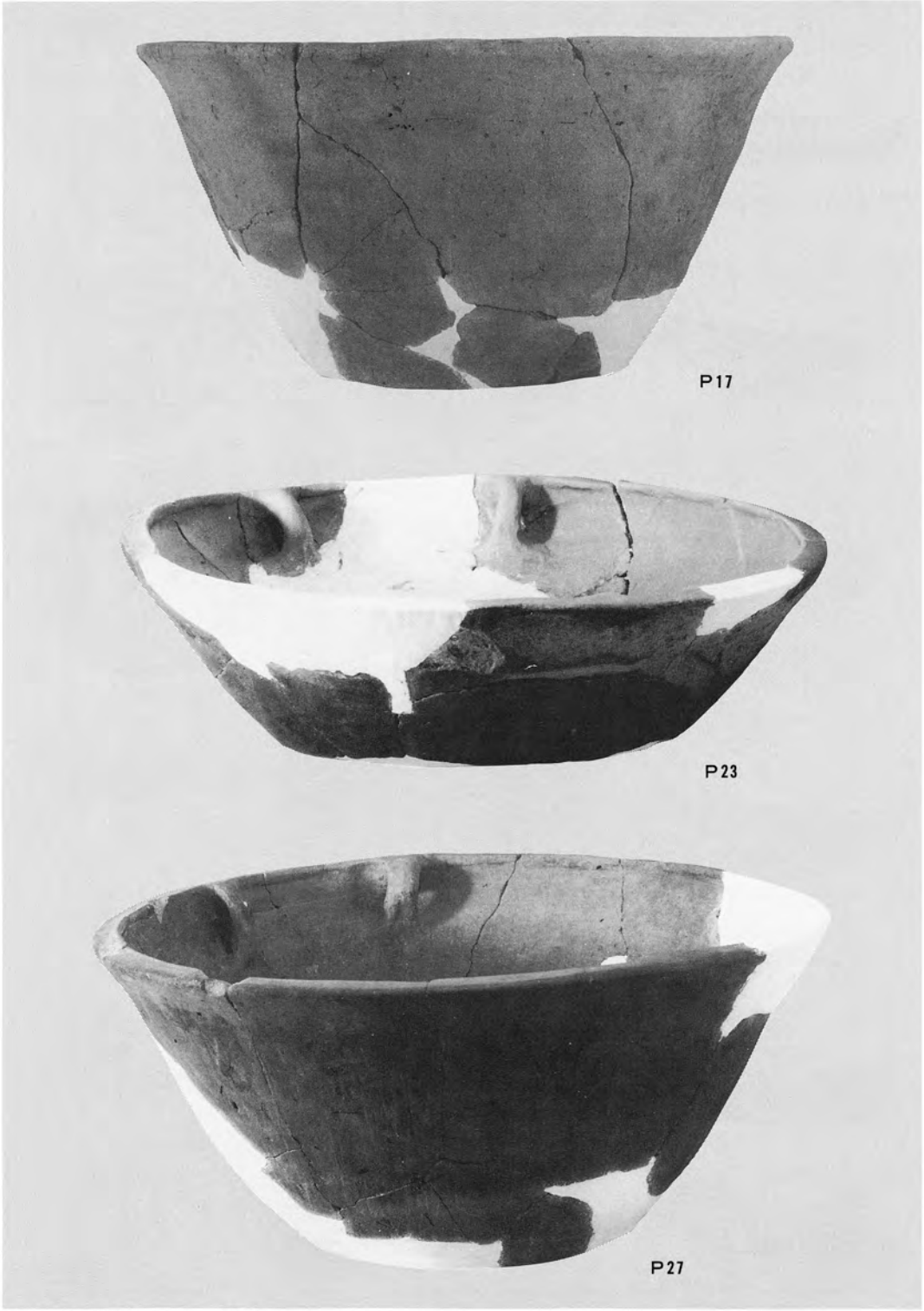
押印文様（3）



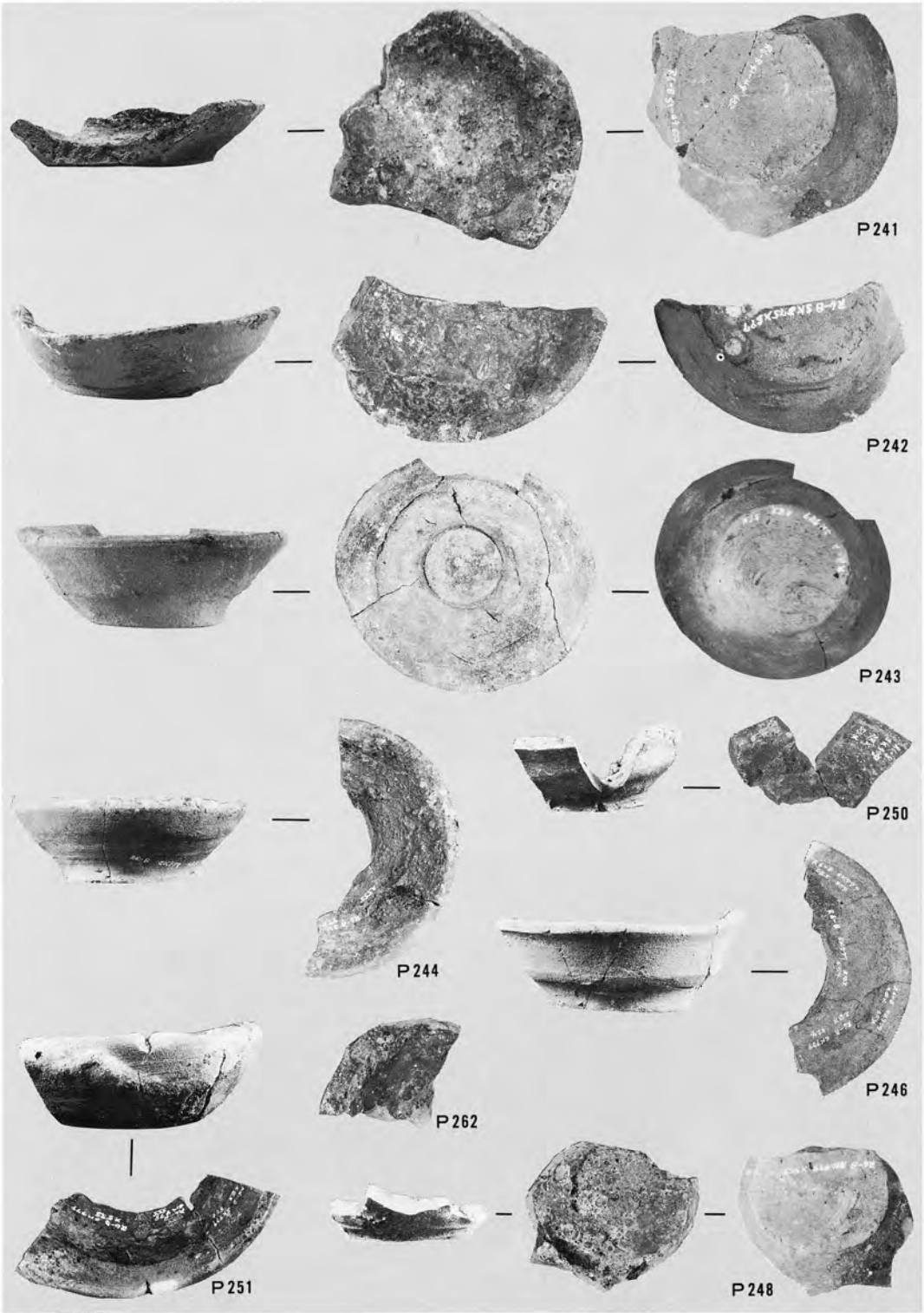
内耳形土器 (1)



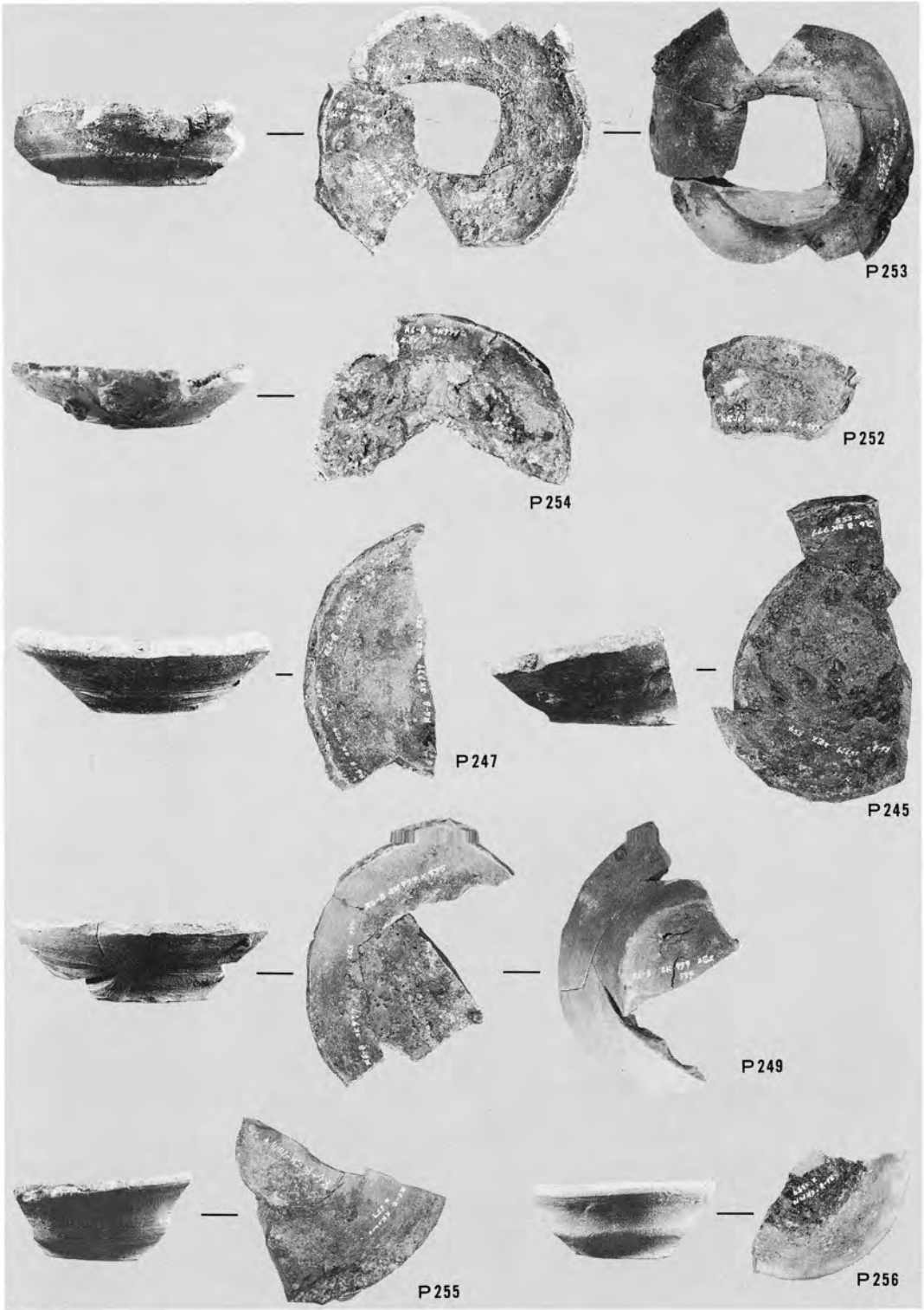
内耳形土器 (2)



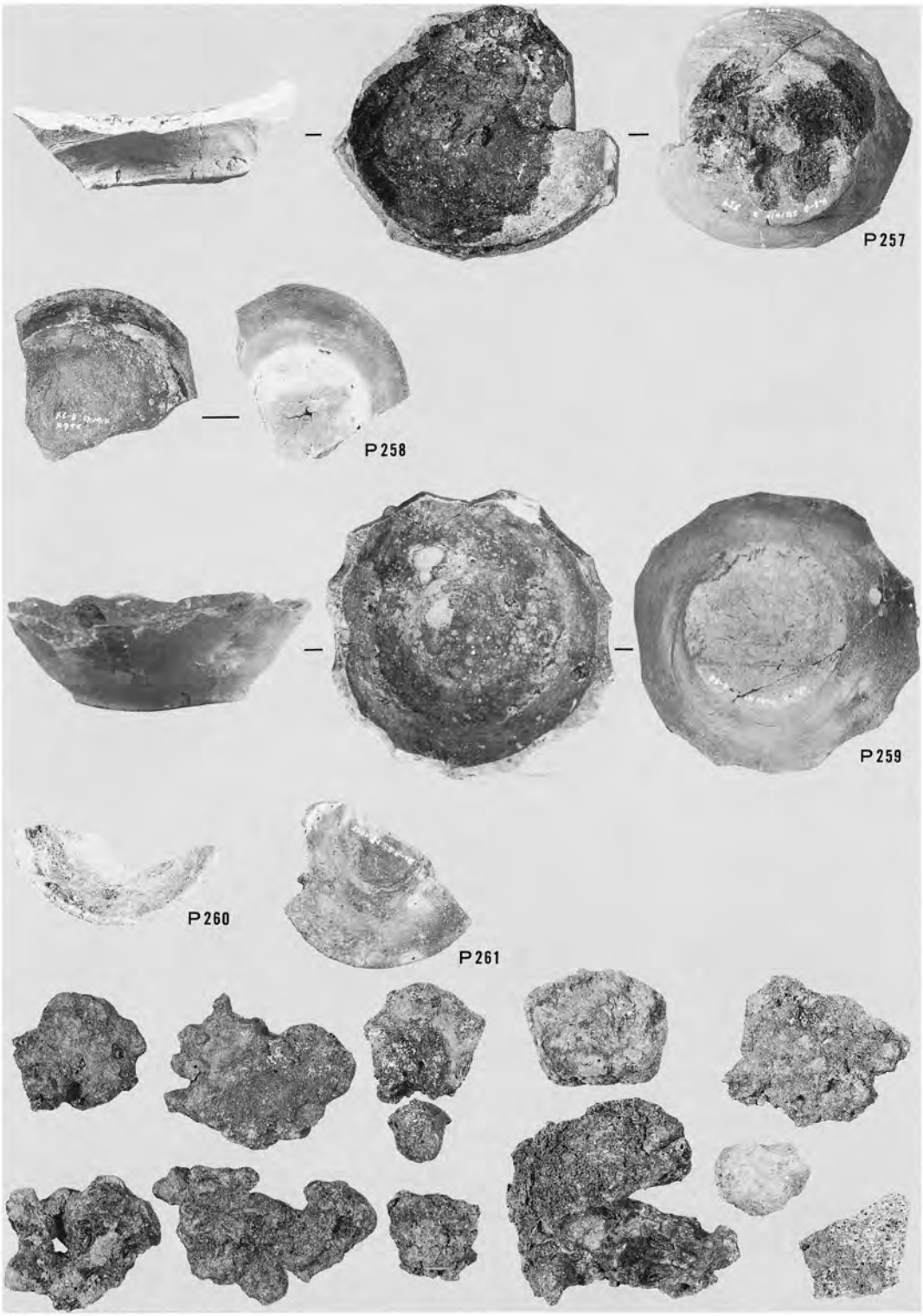
内耳形土器 (3)　S = 1/3



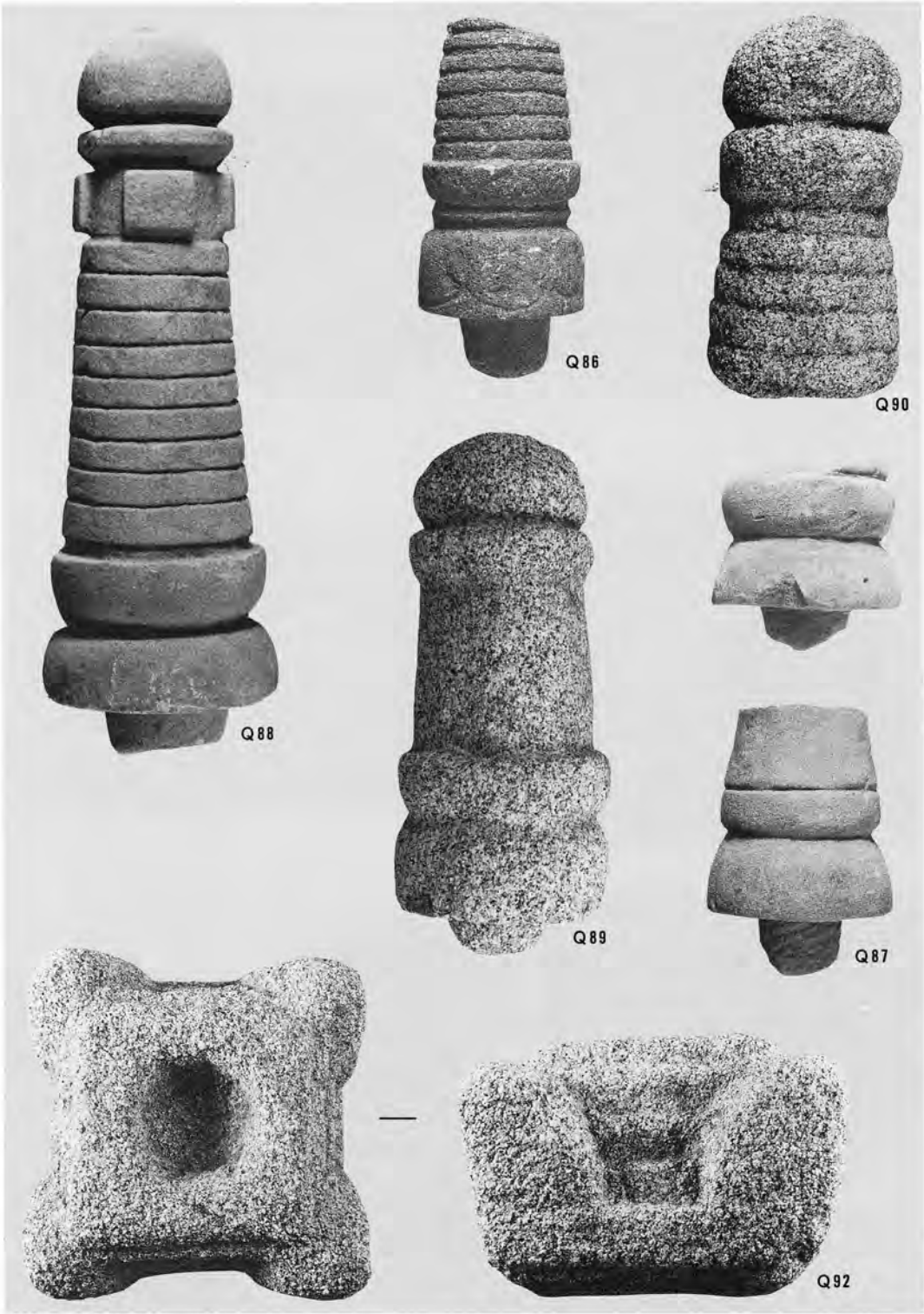
坩堝（1）



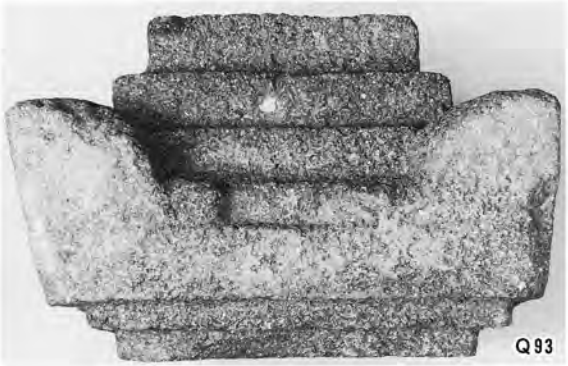
坩堝 (2)



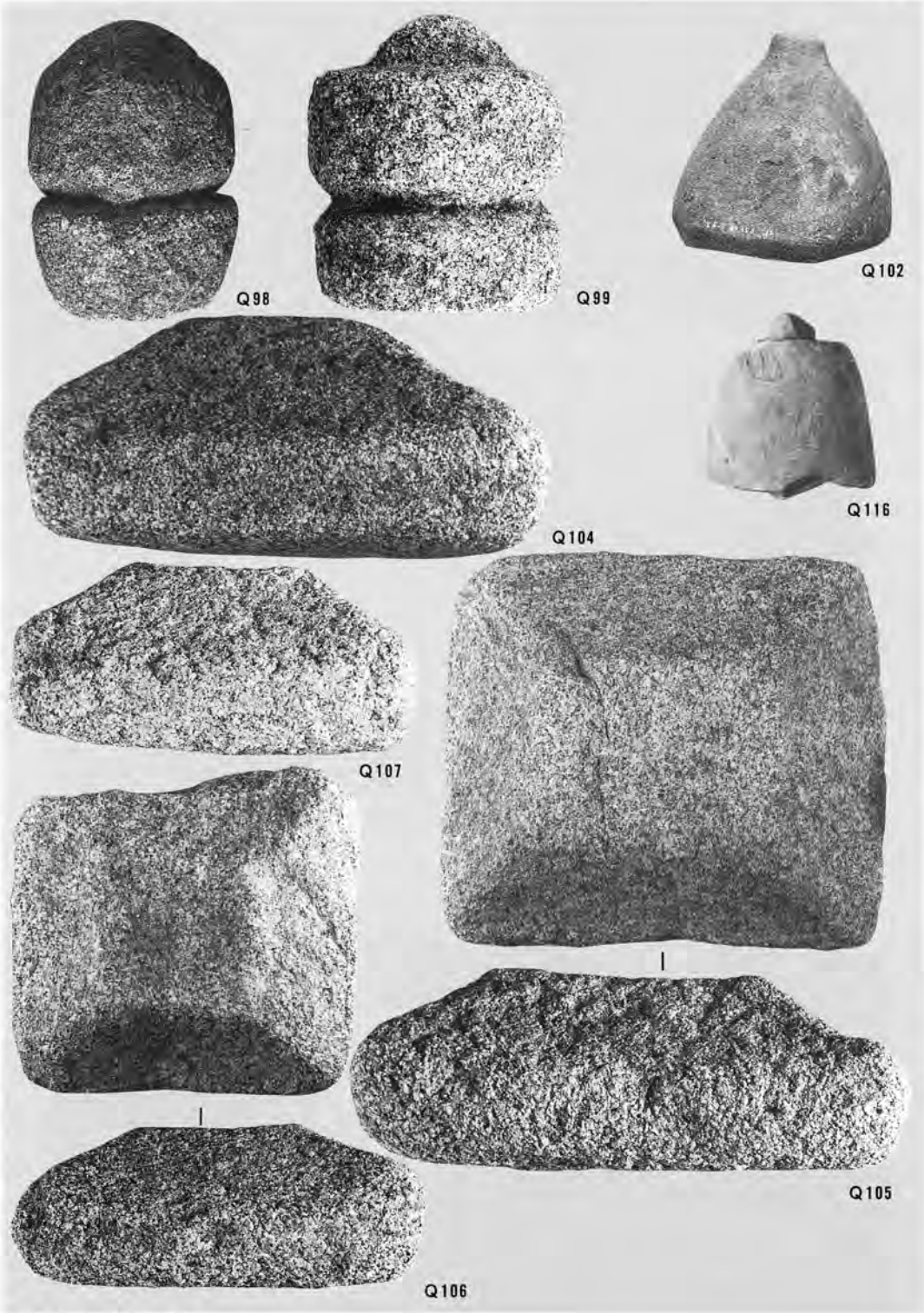
坩堝(3)・鉄滓



石塔（宝篋印塔）－1

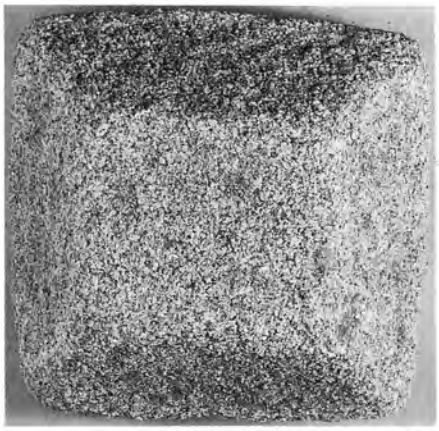


石塔（宝篋印塔・五輪塔）－2



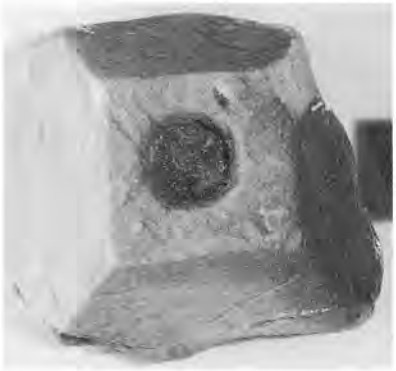
石塔（五輪塔）－3

石塔（五輪塔）－4



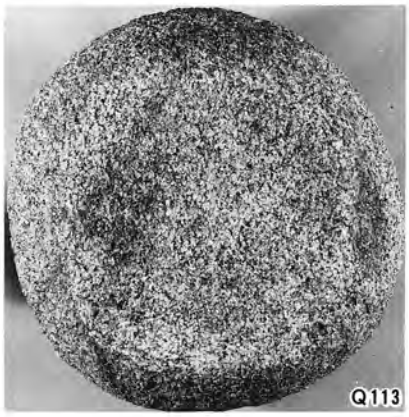
Q107

Q111



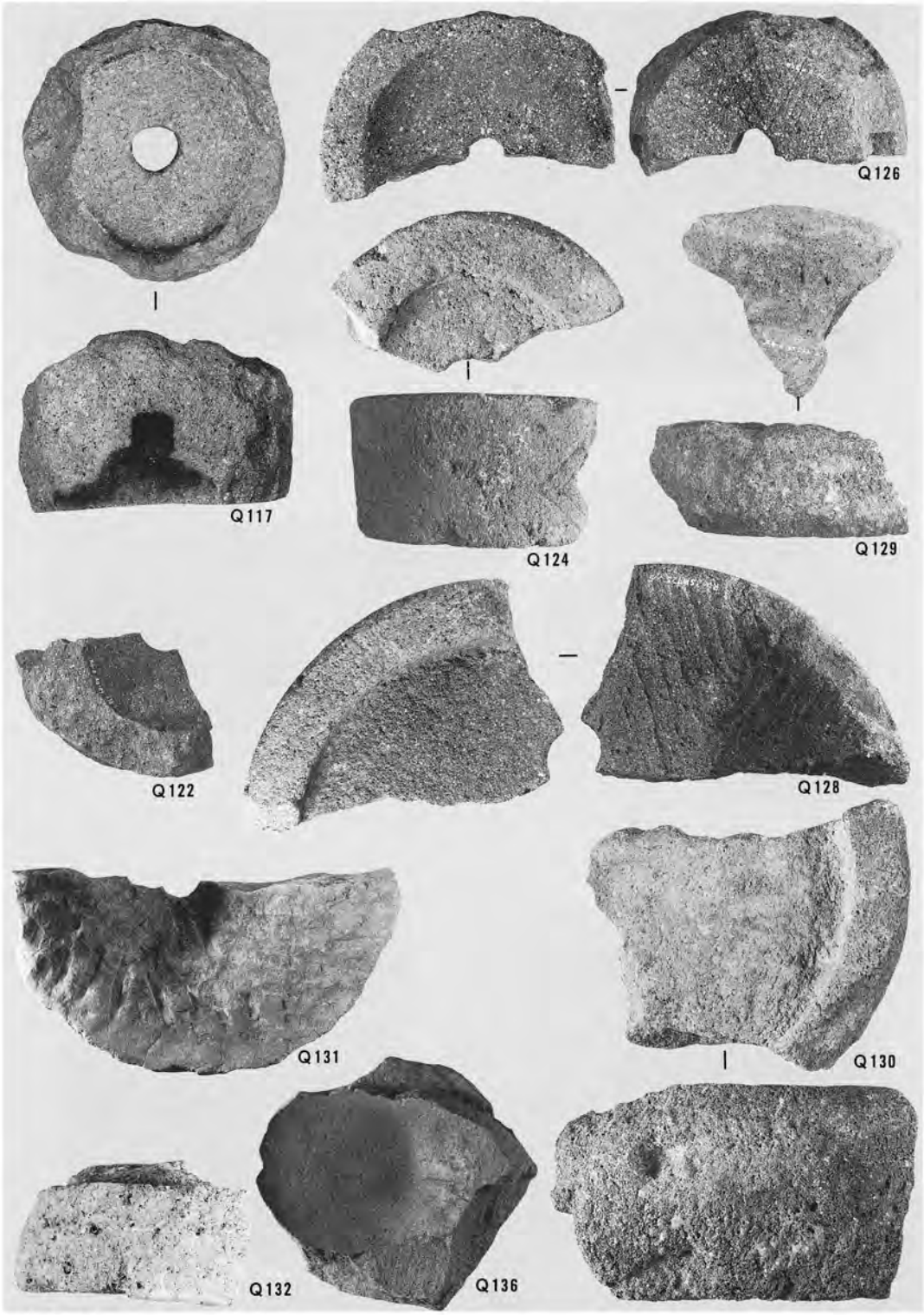
Q109

Q112

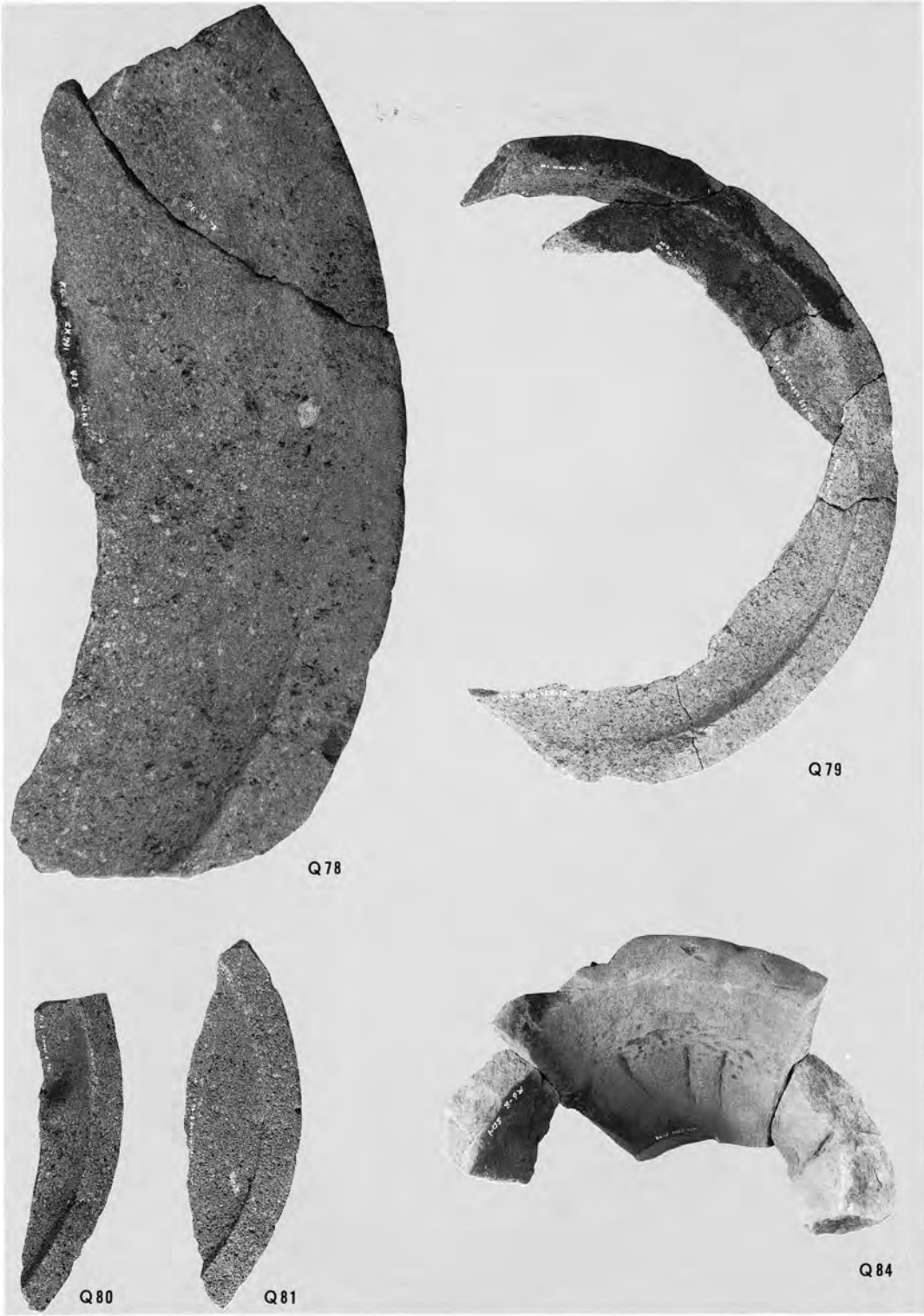


Q113

石塔（五輪塔）－5

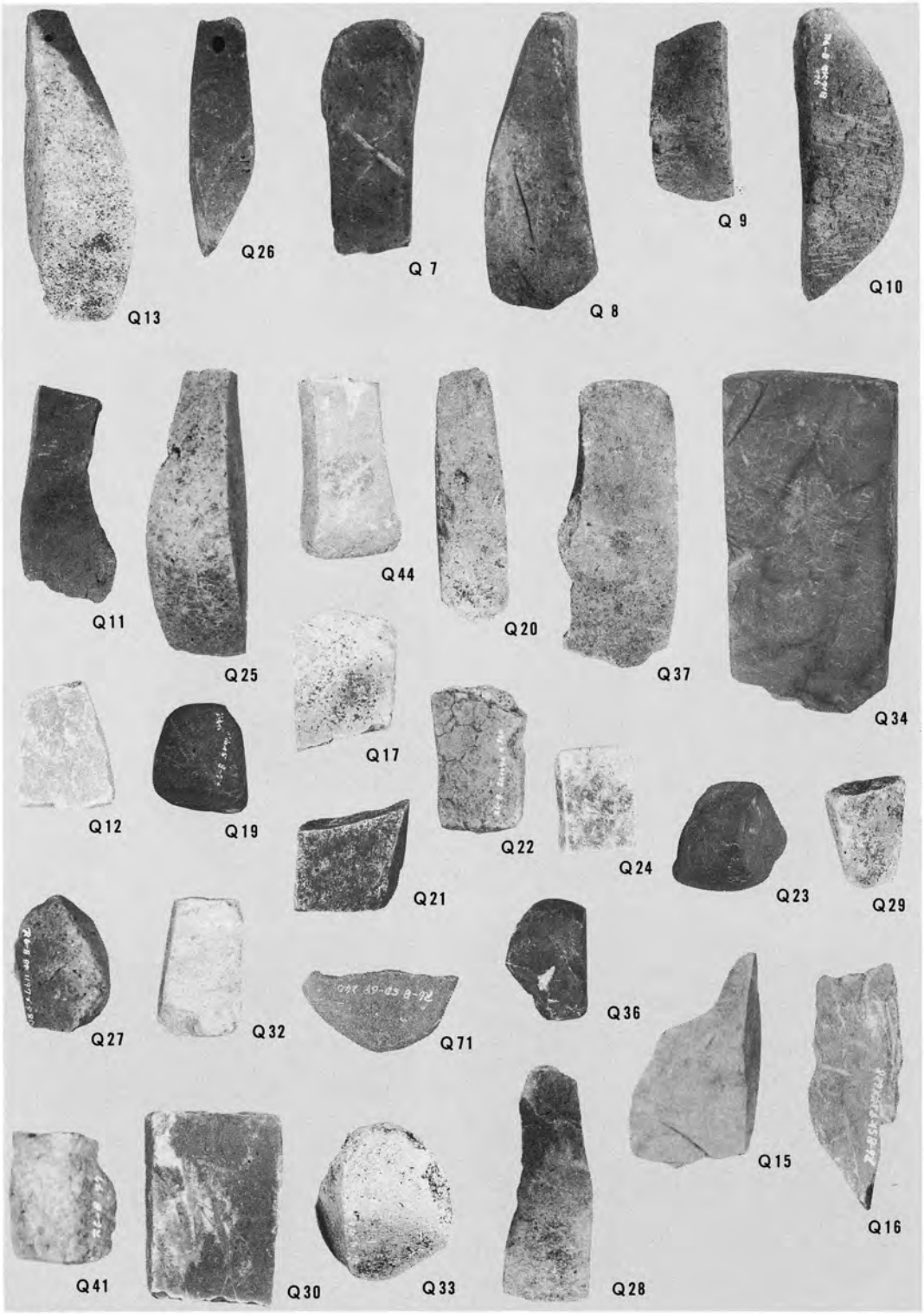


石製品 (1)

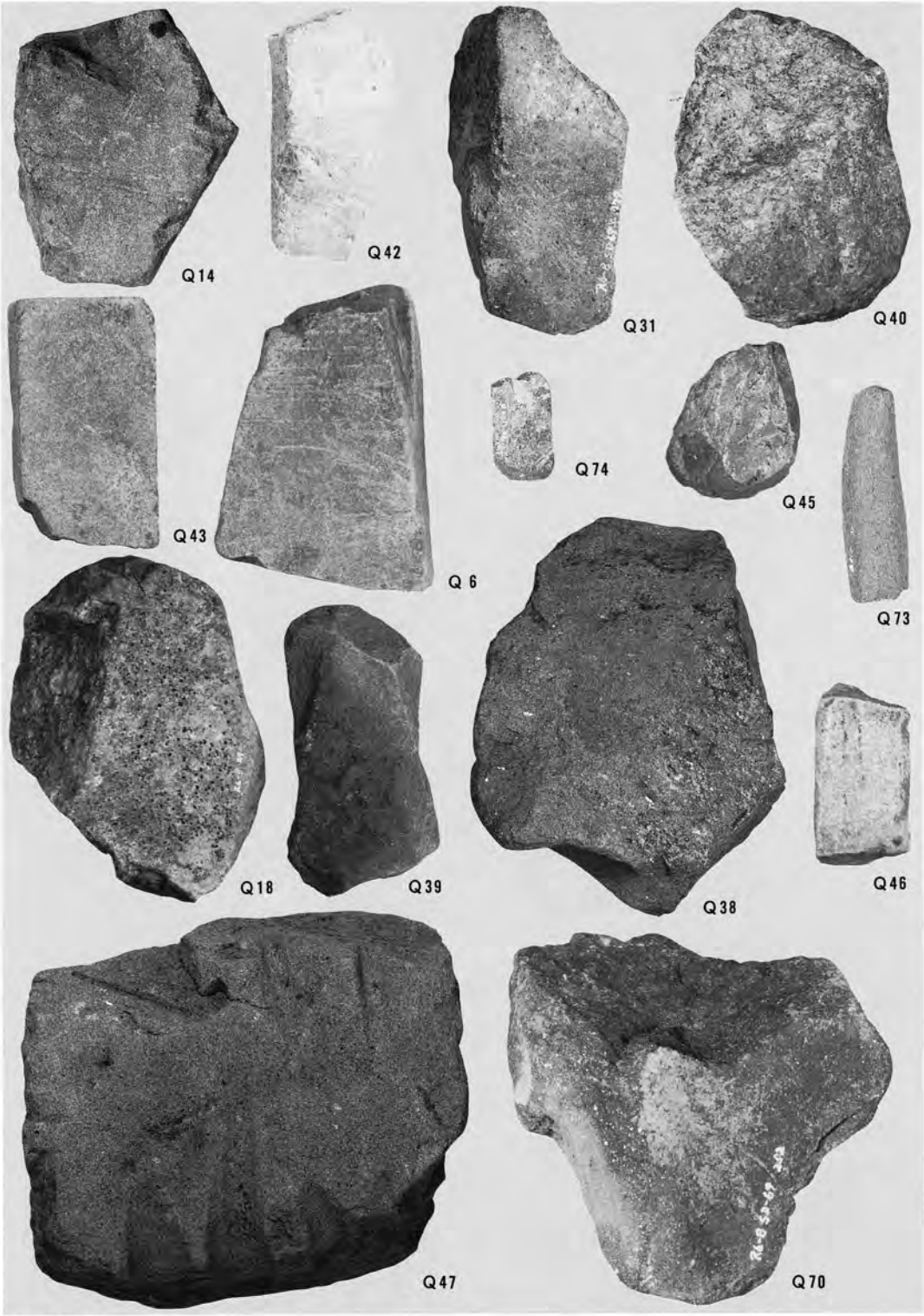


石製品 (2)

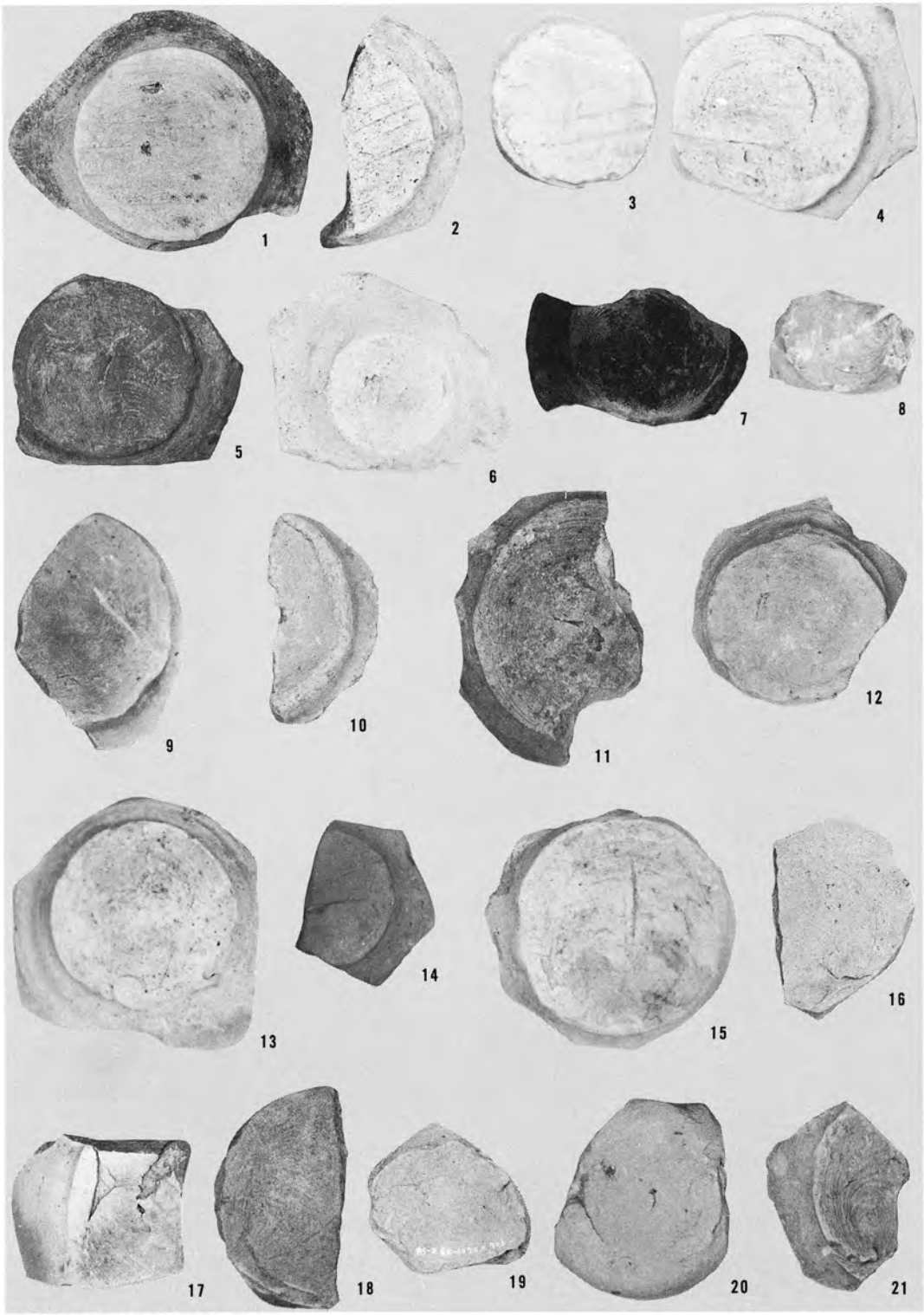
石製品 (3)


Q13
Q26
Q7
Q8
Q9
Q10
Q11
Q25
Q44
Q20
Q37
Q34
Q12
Q19
Q17
Q22
Q24
Q23
Q29
Q21
Q27
Q32
Q71
Q36
Q15
Q16
Q41
Q30
Q33
Q28

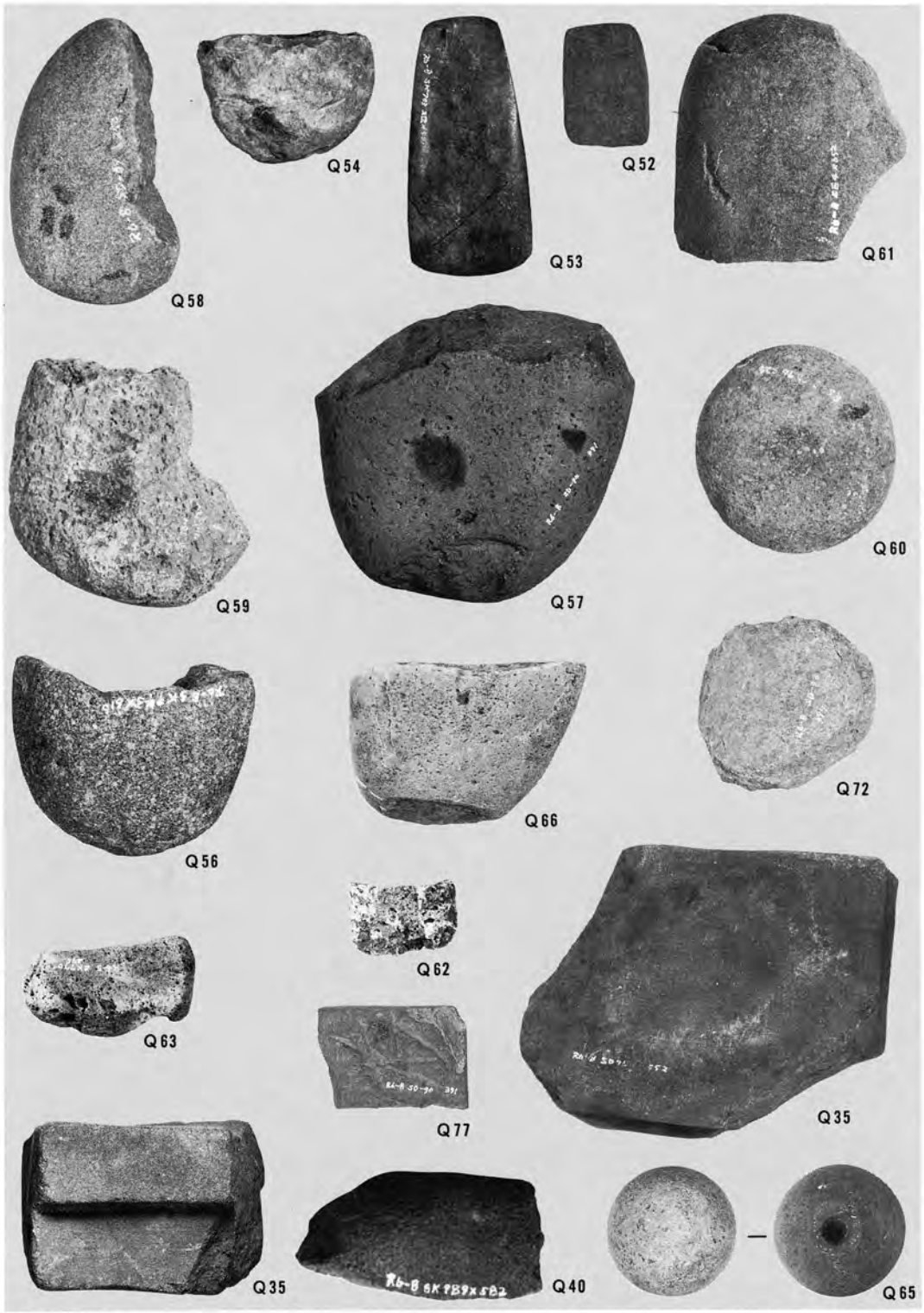
石製品 (4)



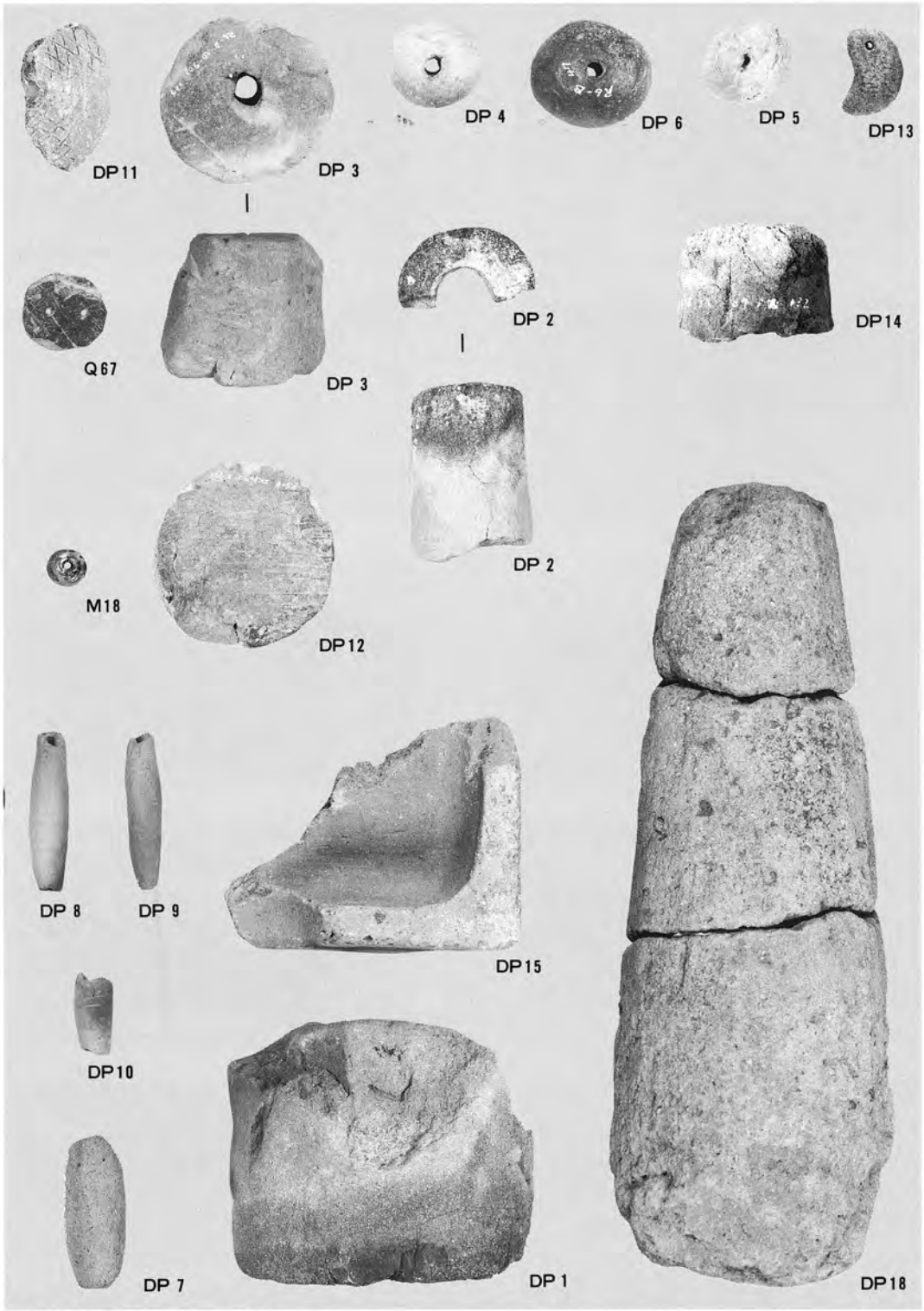
土製品 (5)



土師質土器底部（板の圧痕）


Q58
Q54
Q53
Q52
Q61
Q59
Q57
Q60
Q56
Q66
Q72
Q62
Q63
Q77
Q35
Q35
Q40
Q65

石器・石製品



土製品・石製品・ガラス製品

P203

P195

P201

P180

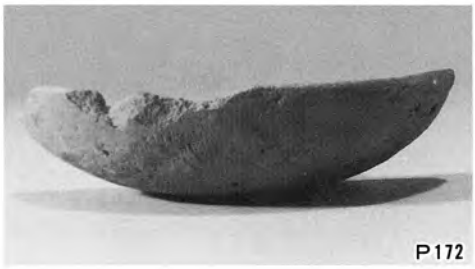
P124

P129

P165

P136

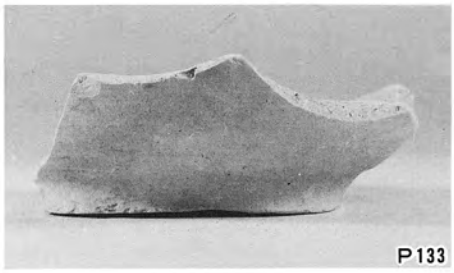
P162


P172

遺跡内出土遺物（1）

P161

P131


P133

P144

P26

P25

遺跡内出土遺物 (2)

茨城県教育財団文化財調査報告第45集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17

屋代B遺跡 III

昭和63年3月25日印刷
昭和63年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　有限会社　川田プリント
水戸市上水戸4丁目6番53号

茨城県教育財団文化財調査報告第45集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17

屋代B遺跡Ⅲ(付図)

付図1　屋代B遺跡航空写真測量図
付図2　屋代B遺跡城郭遺構全体図
付図3　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－1)
付図4　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－2)
付図5　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－3)
付図6　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－4)
付図7　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－5)
付図8　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－6)
付図9　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－7)
付図10　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－8)
付図11　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－9)
付図12　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－10)
付図13　屋代B遺跡航空写真測量図(堀－11)
付図14　虎口・土橋・木橋・陥し穴配置図
付図15　堀土層断面図
付図16　堀土層断面図
付図17　堀・土塁断面図
付図18　堀・土塁断面図
付図19　堀・土塁断面図
付図20　屋代B遺跡航空写真測量図（Ⅰノ郭内遺構配置図）
付図21　屋代B遺跡航空写真測量図（Ⅰノ郭内掘立柱建物跡配置図）

昭和63年3月

住宅・都市整備公団　つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

付図１

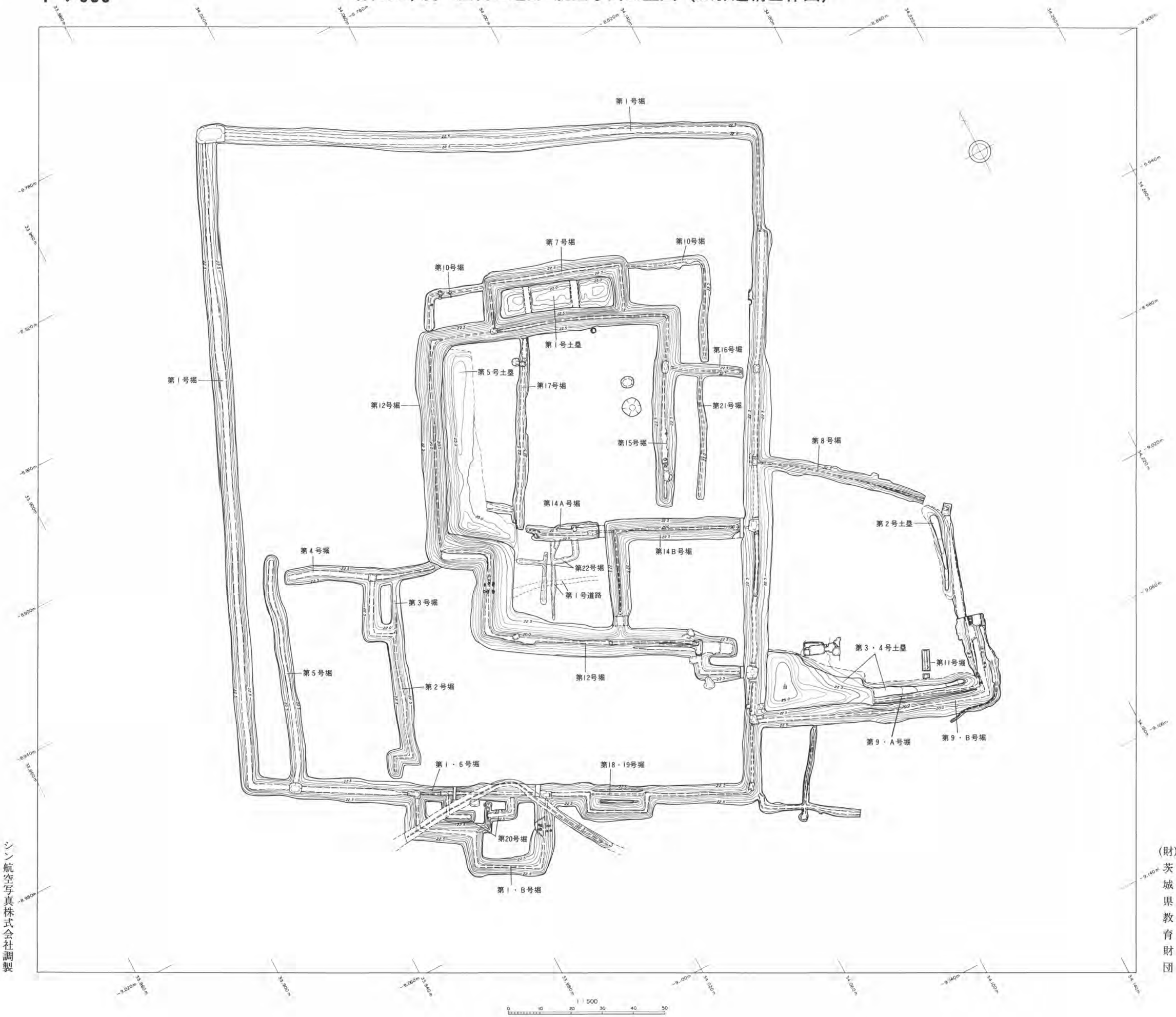
1 ：500

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図

付図 2

1 ：500

昭和61年度　屋代B遺跡 航空写真測量図（城郭遺構全体図）



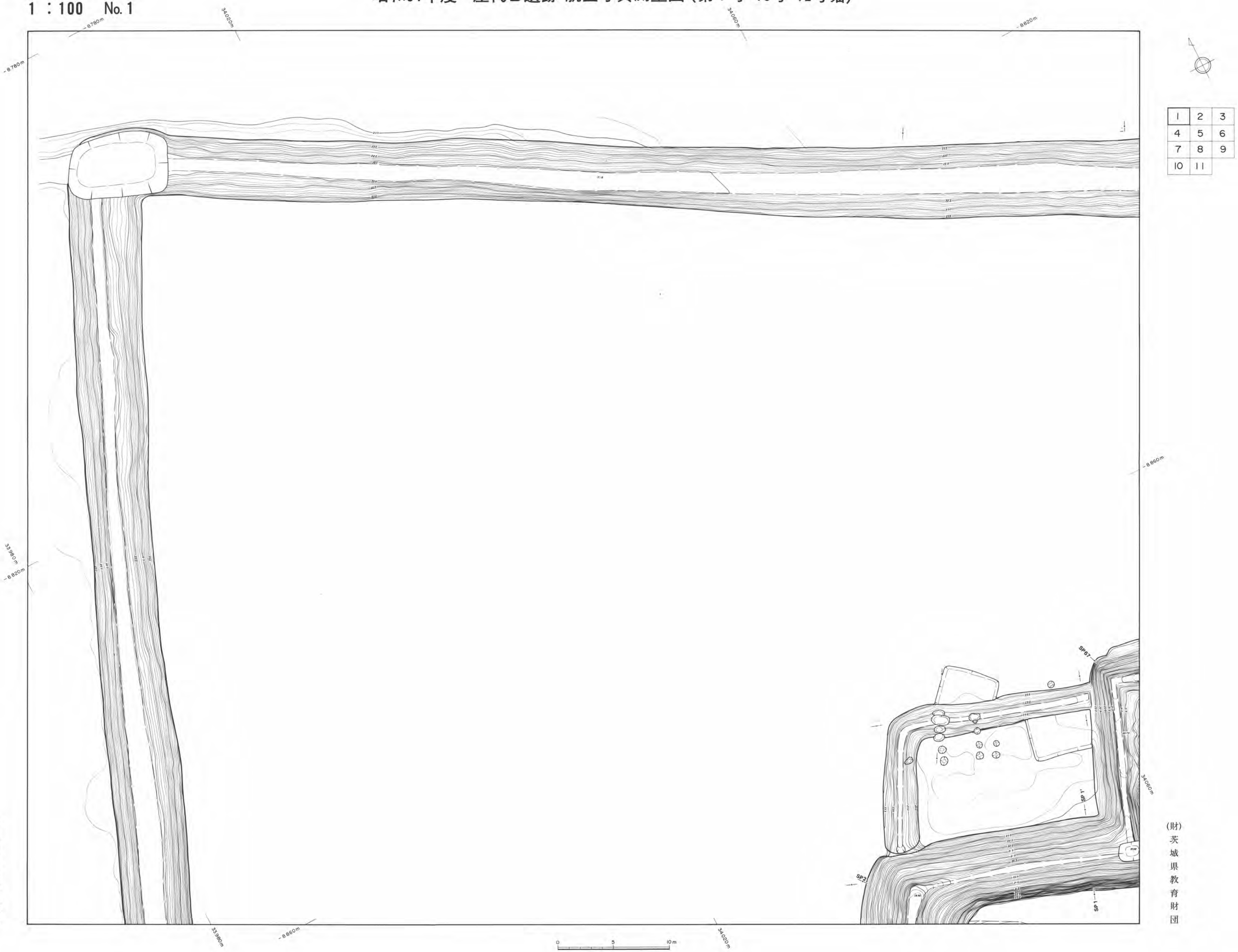
シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図３（堀－１）

1：100　No. 1

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第１号・10号・12号堀）

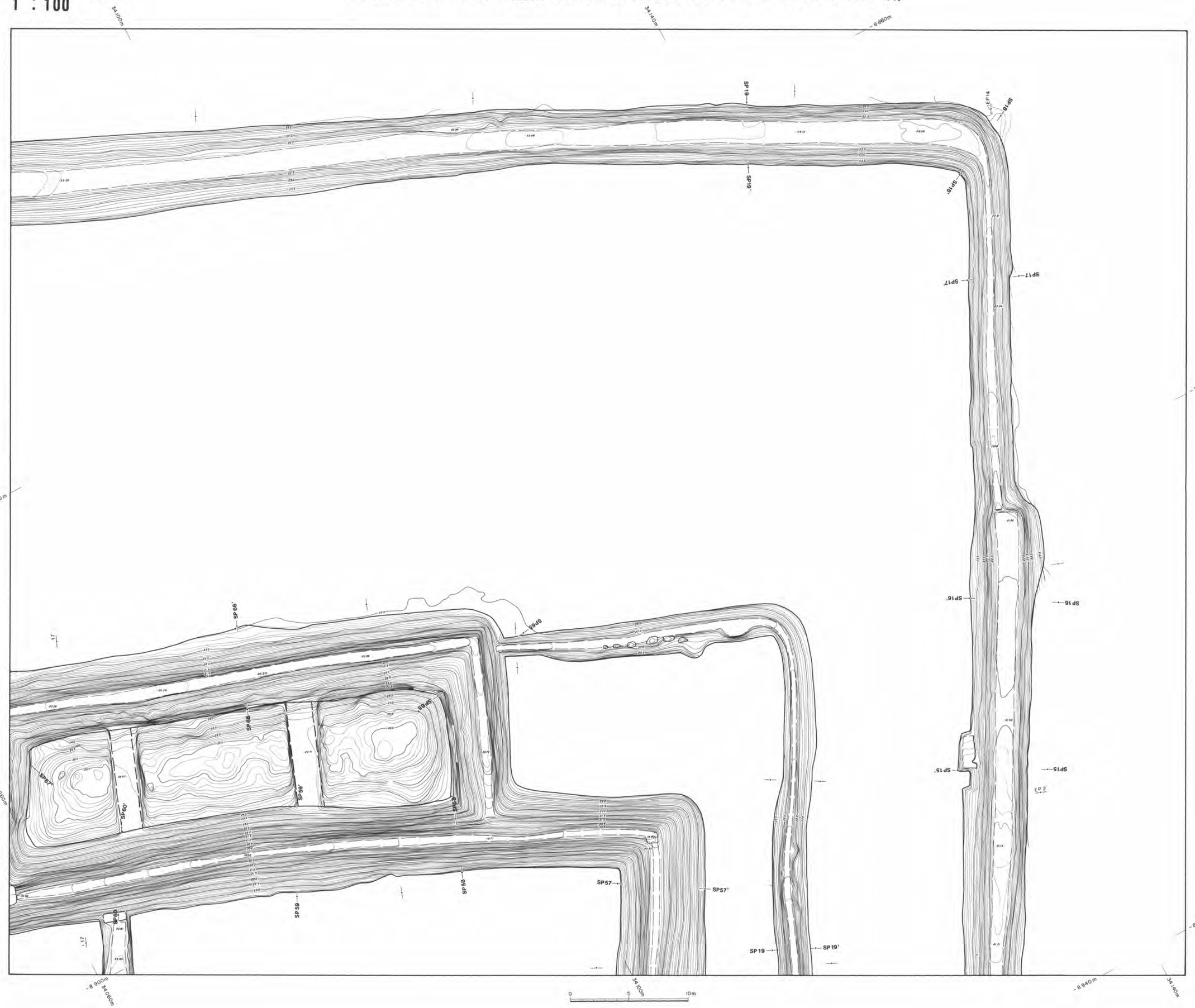


シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図４（堀－２）
１：100　No. 2

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第１号・７号・10号・12号堀）



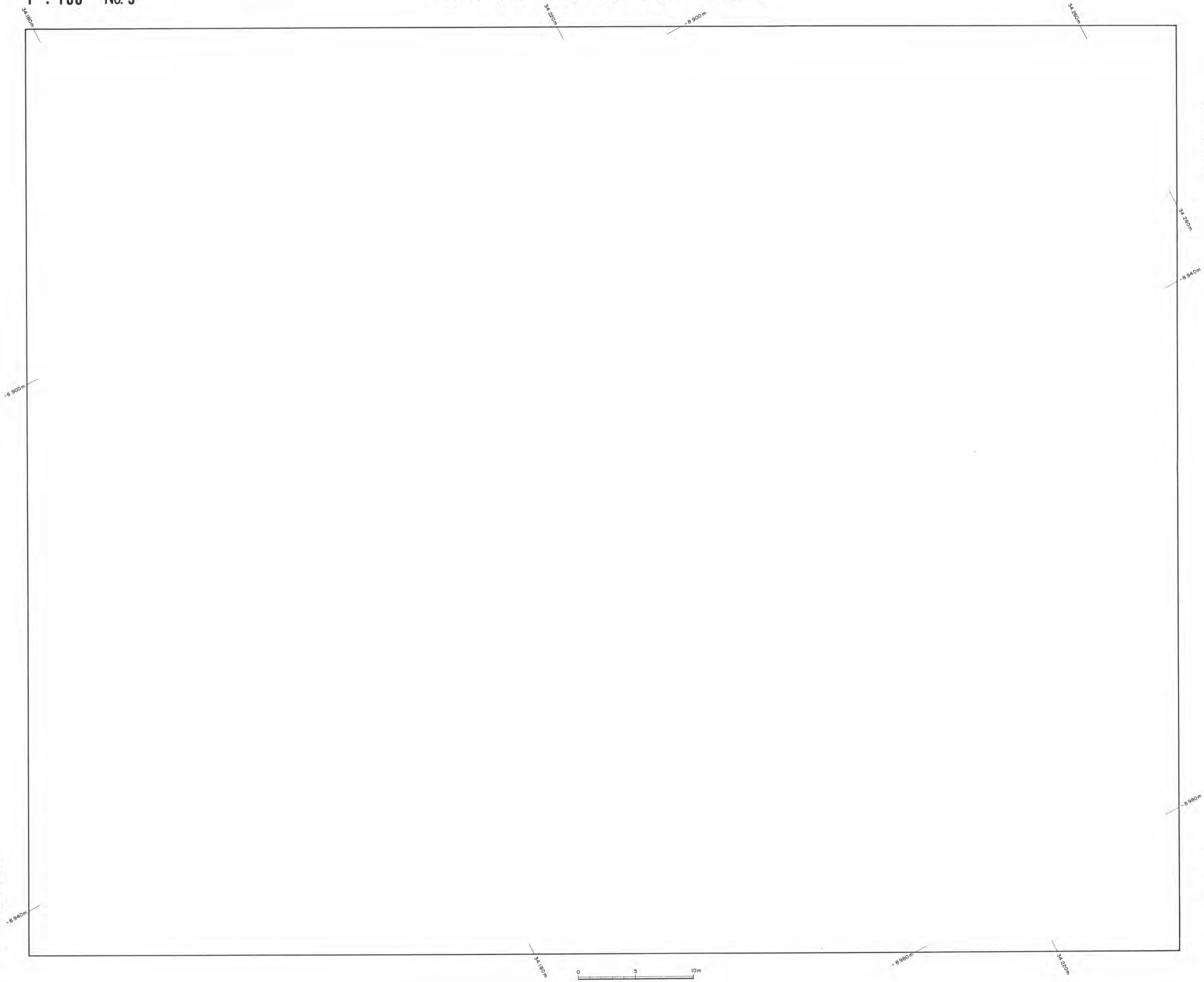
1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	

シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図５（堀－３）
１：100　No. 3

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図



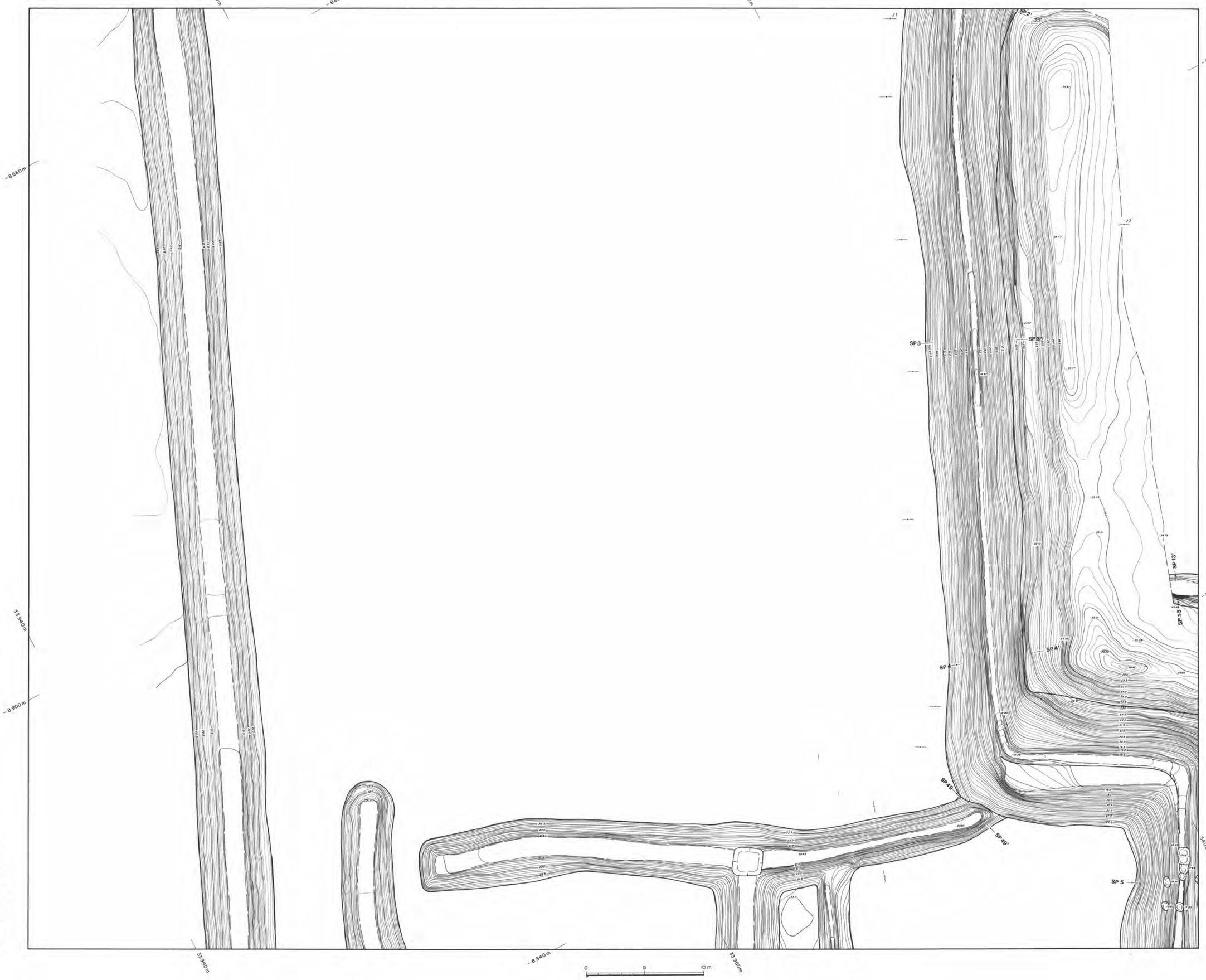
1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	

シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図6（堀－4）
1：100　No. 4

昭和61年度　屋代B遺跡 航空写真測量図（第1号・4号・5号・12号堀）

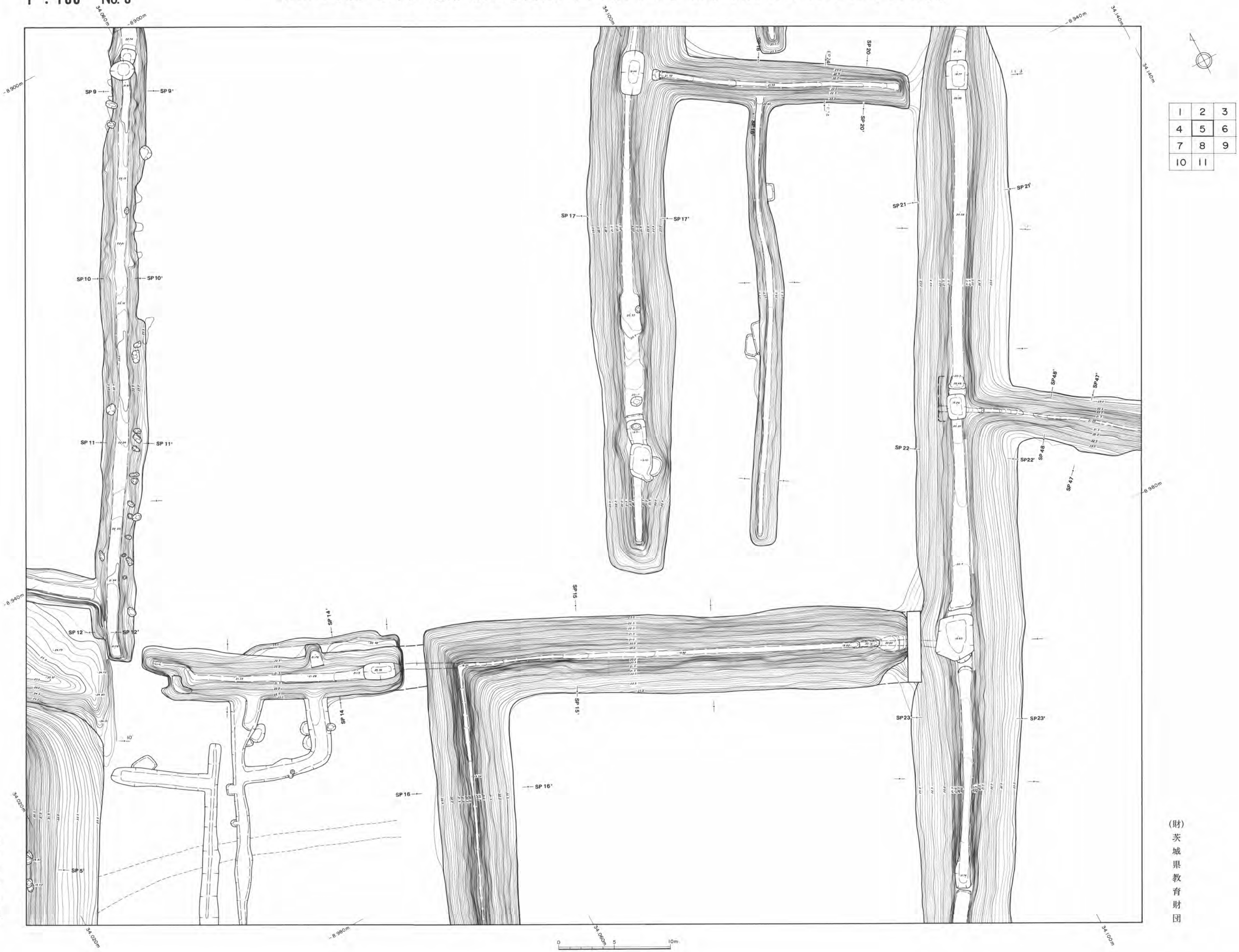


シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図７（堀－５）
１：100　No. 5

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第1号・8号・12号・14A・B号・15号・17号・21号堀）



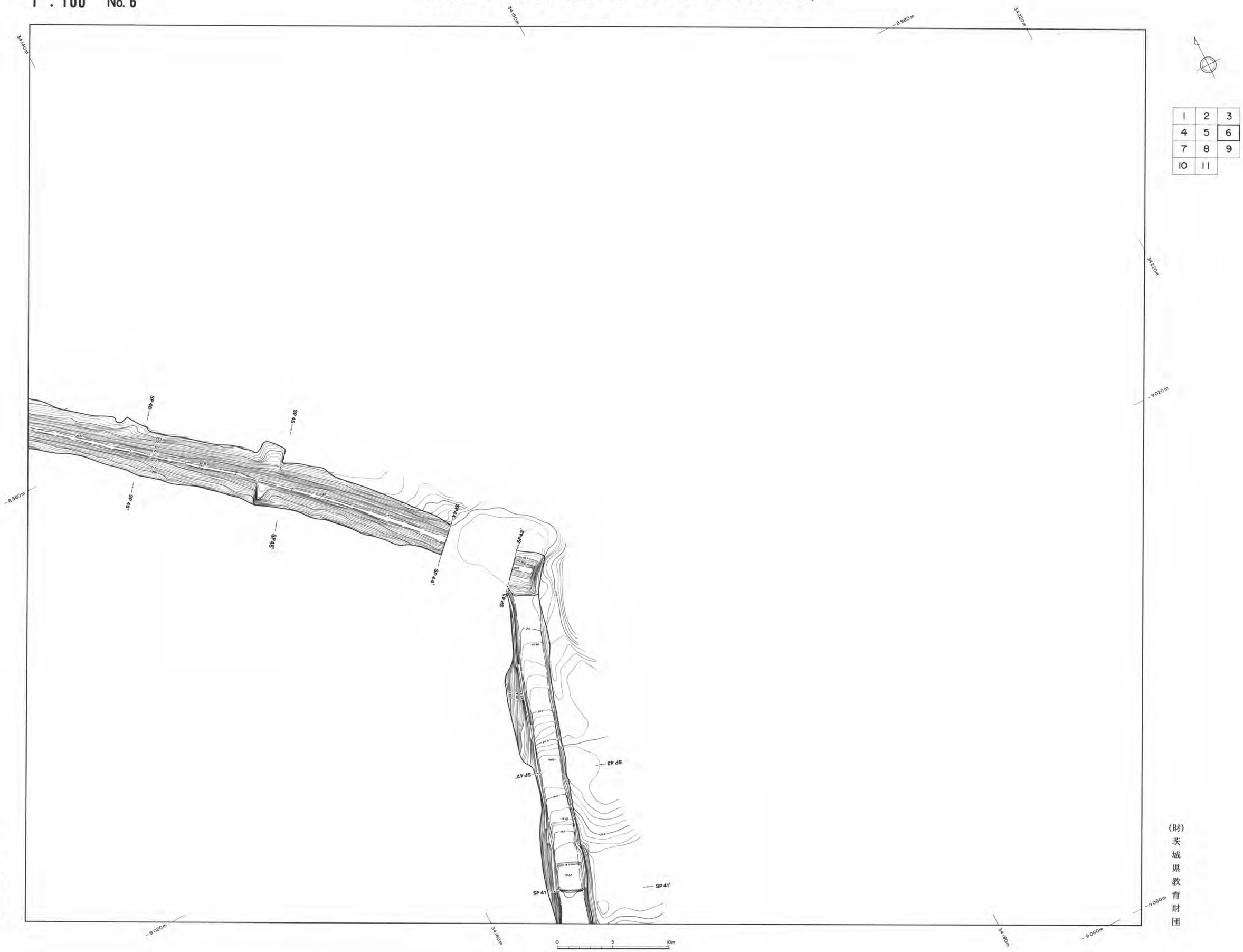
シン航空写真株式会社調製

（財）茨城県教育財団

付図８（堀－６）

1：100　No. 6

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第８号堀）

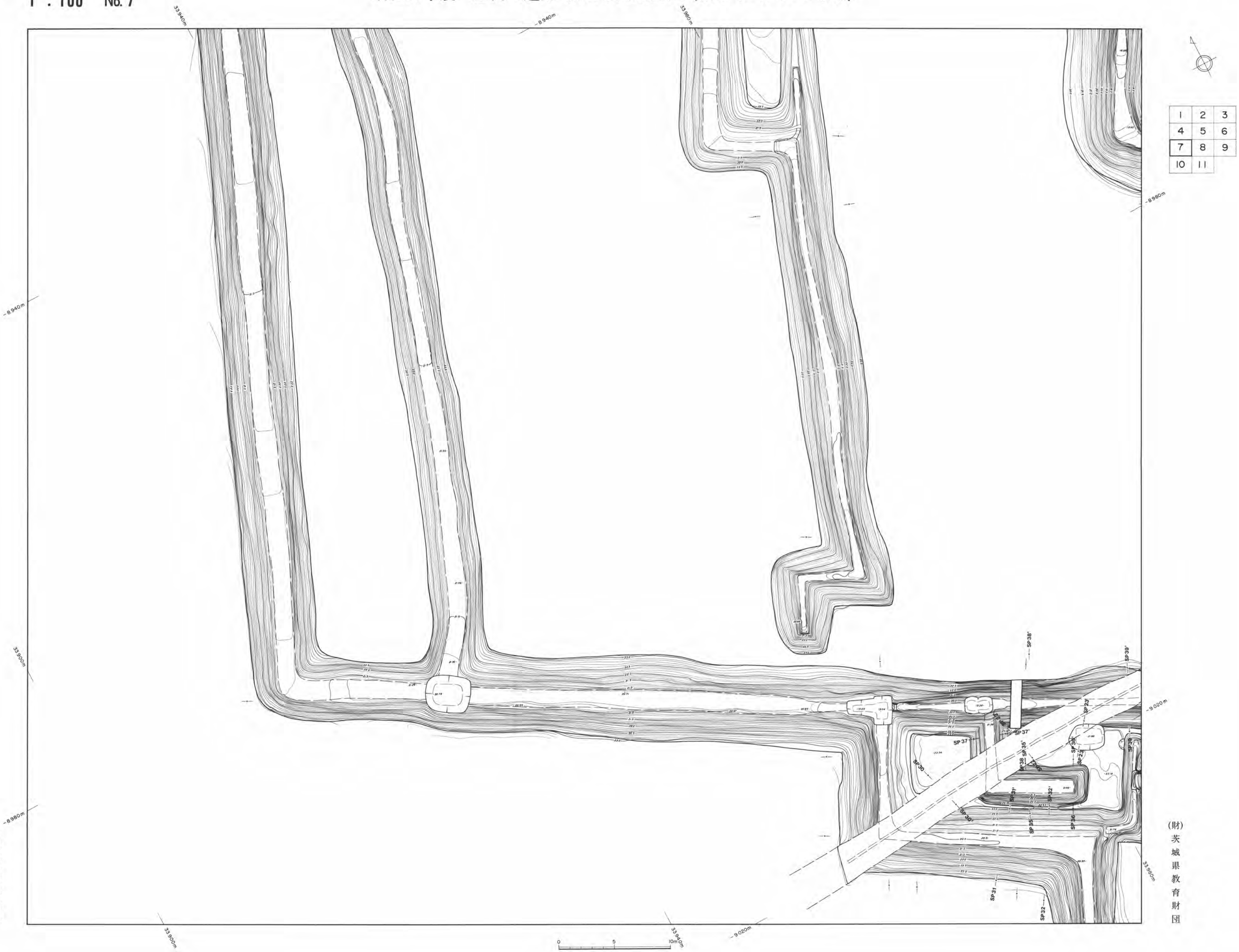


航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図９（堀－７）
１：100　No. 7

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第１号・２号・５号堀）

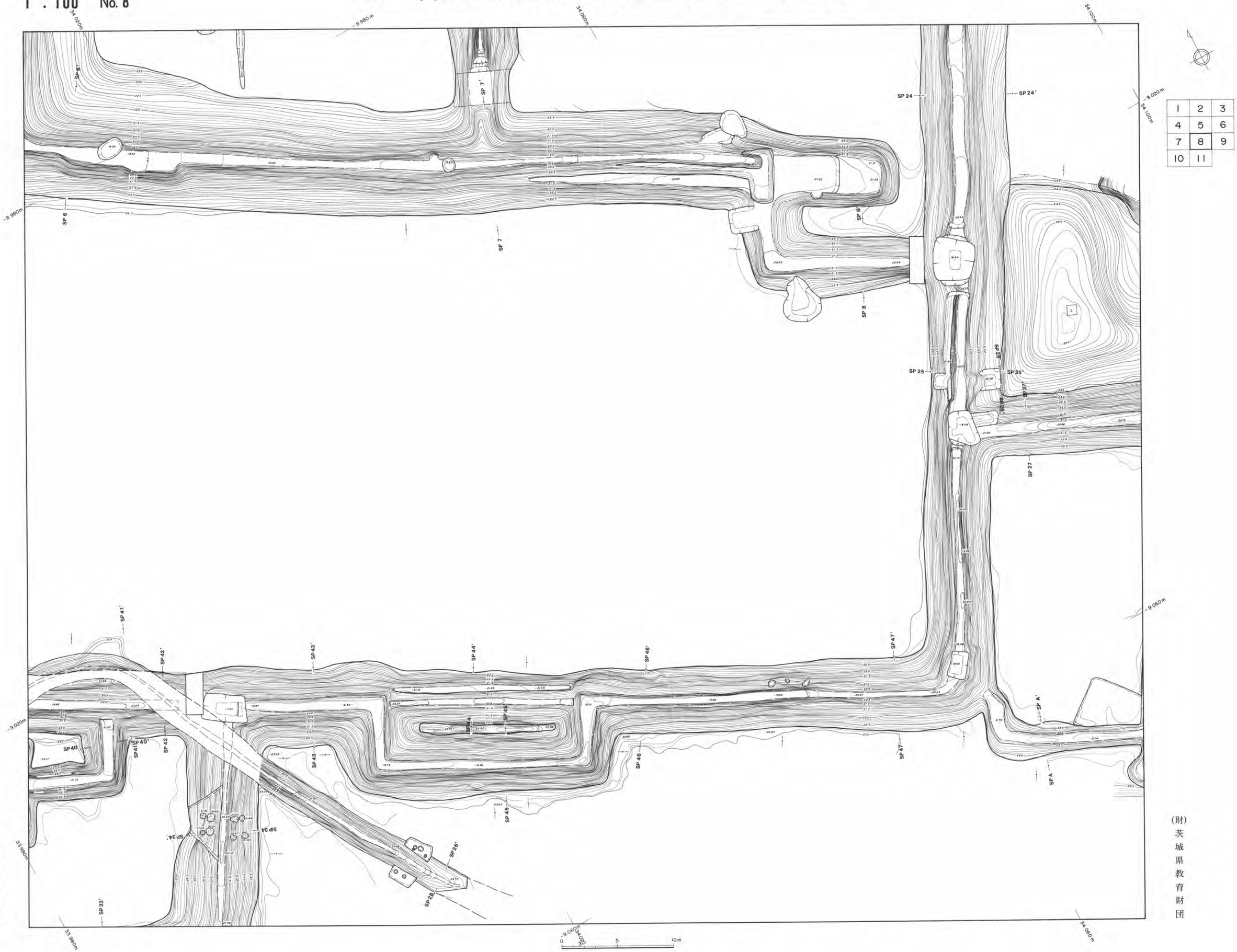


シン航空写真株式会社調製

（財）茨城県教育財団

付図10（堀－8）
1：100　No. 8

昭和61年度　屋代B遺跡 航空写真測量図（第1号・9B号・12号堀）

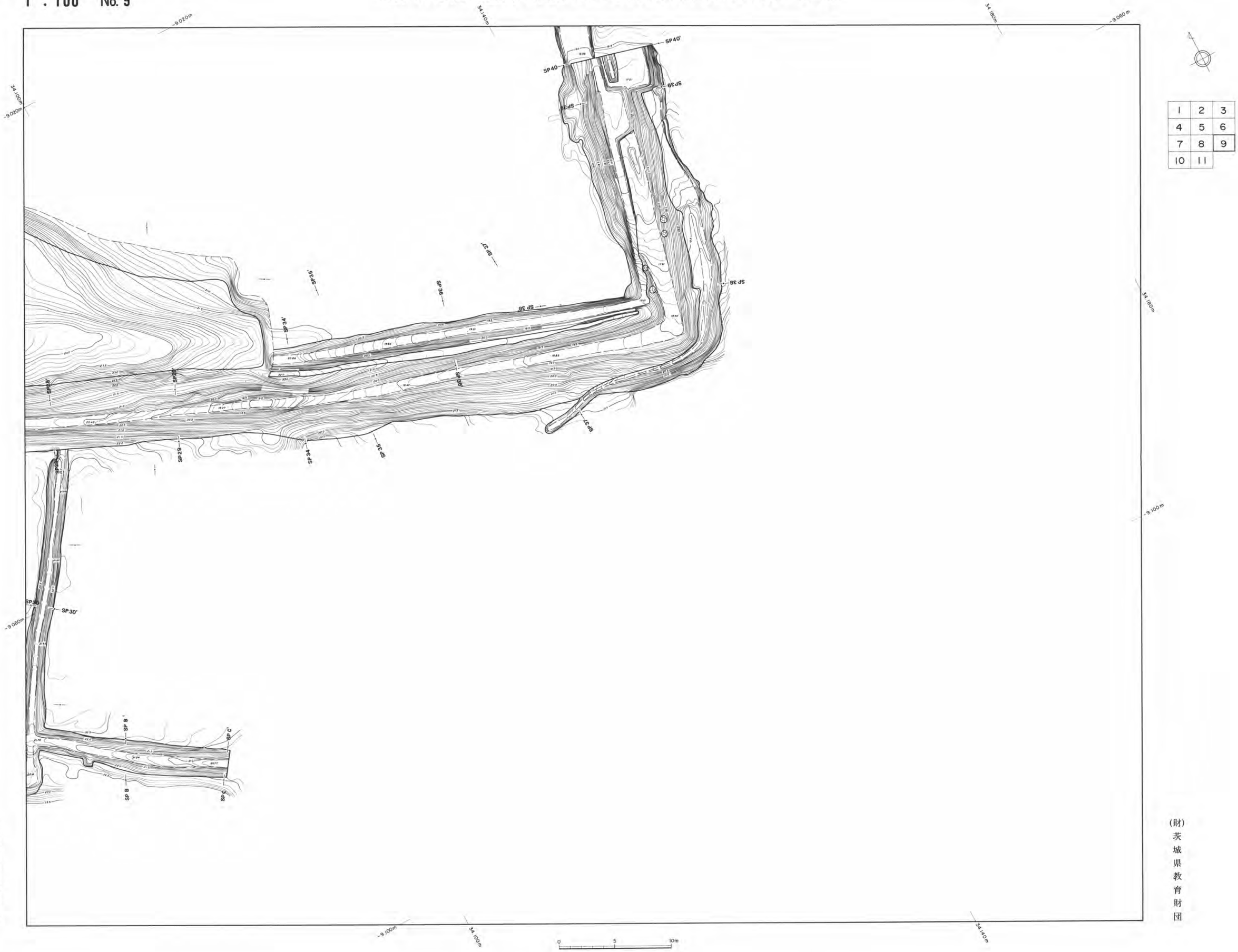


シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図11（堀－９）
１：100　No. 9

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第９Ｂ号堀・虎口）

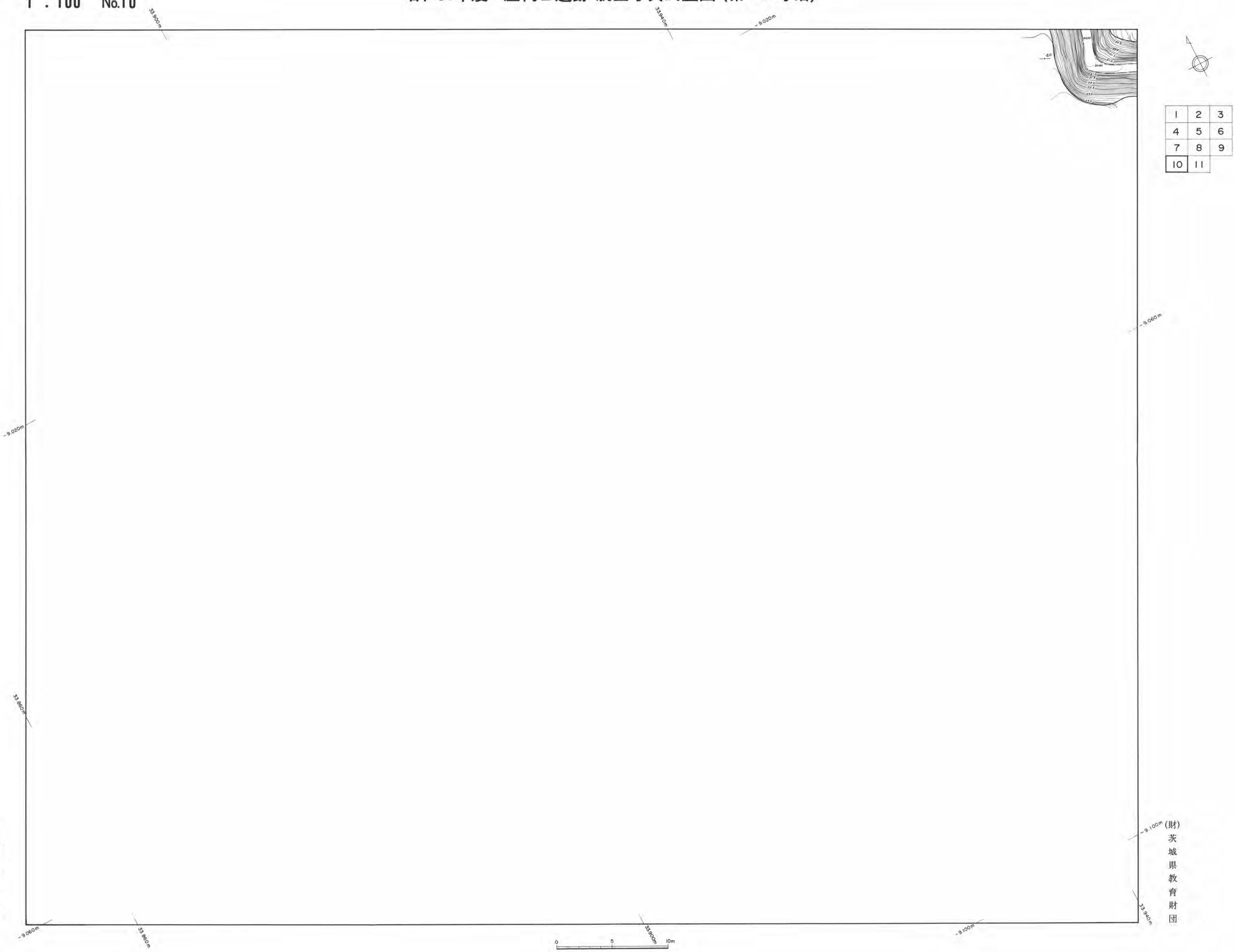


シン航空写真株式会社調製

（財）茨城県教育財団

付図12（堀ー10）
1：100　No.10

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第１Ｂ号堀）



シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図13（堀－11）
1：100 No.11

昭和61年度　屋代Ｂ遺跡 航空写真測量図（第１Ｂ号堀）

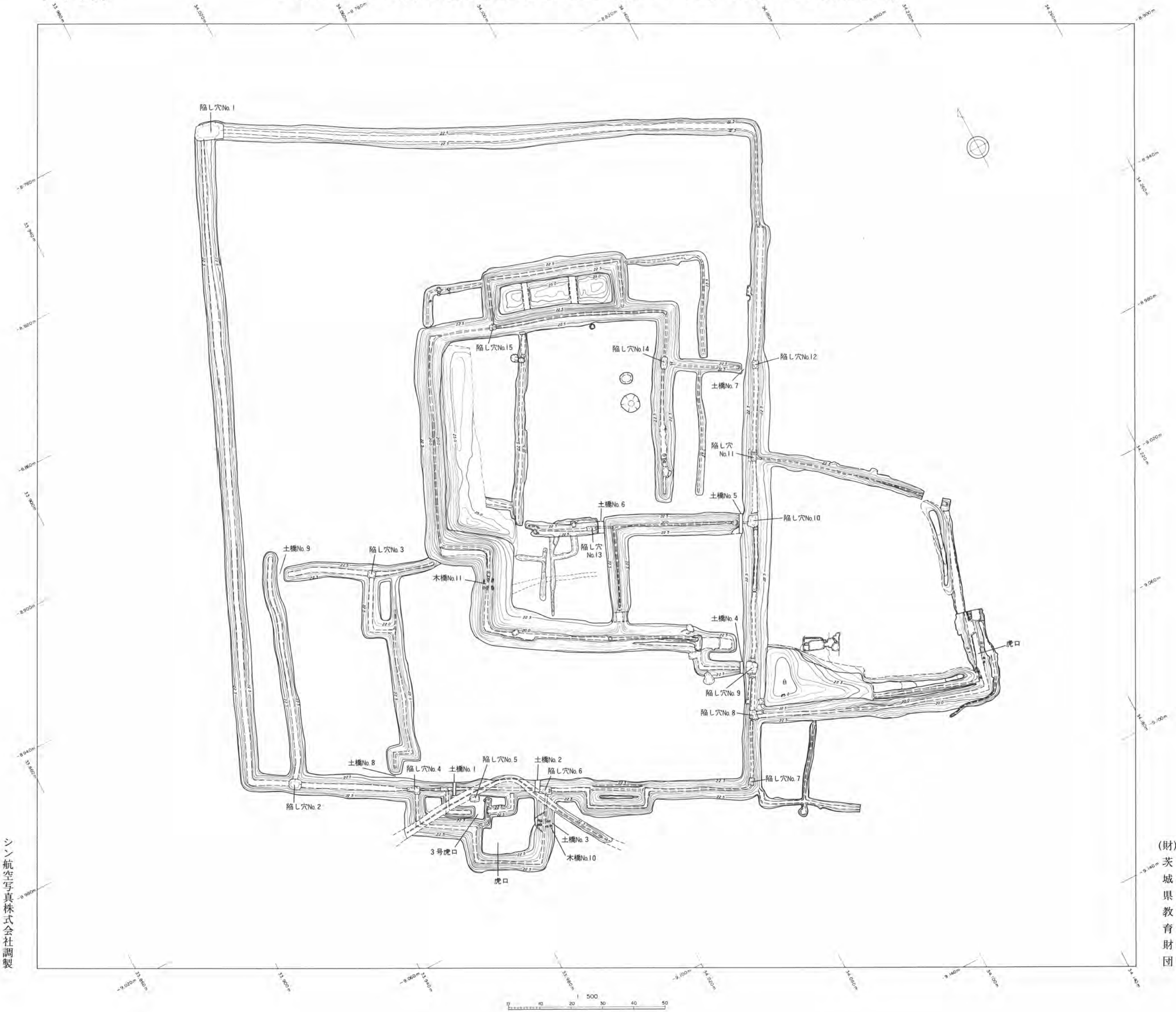
シン航空写真株式会社調製

（財）茨城県教育財団

付図14

1 ：500

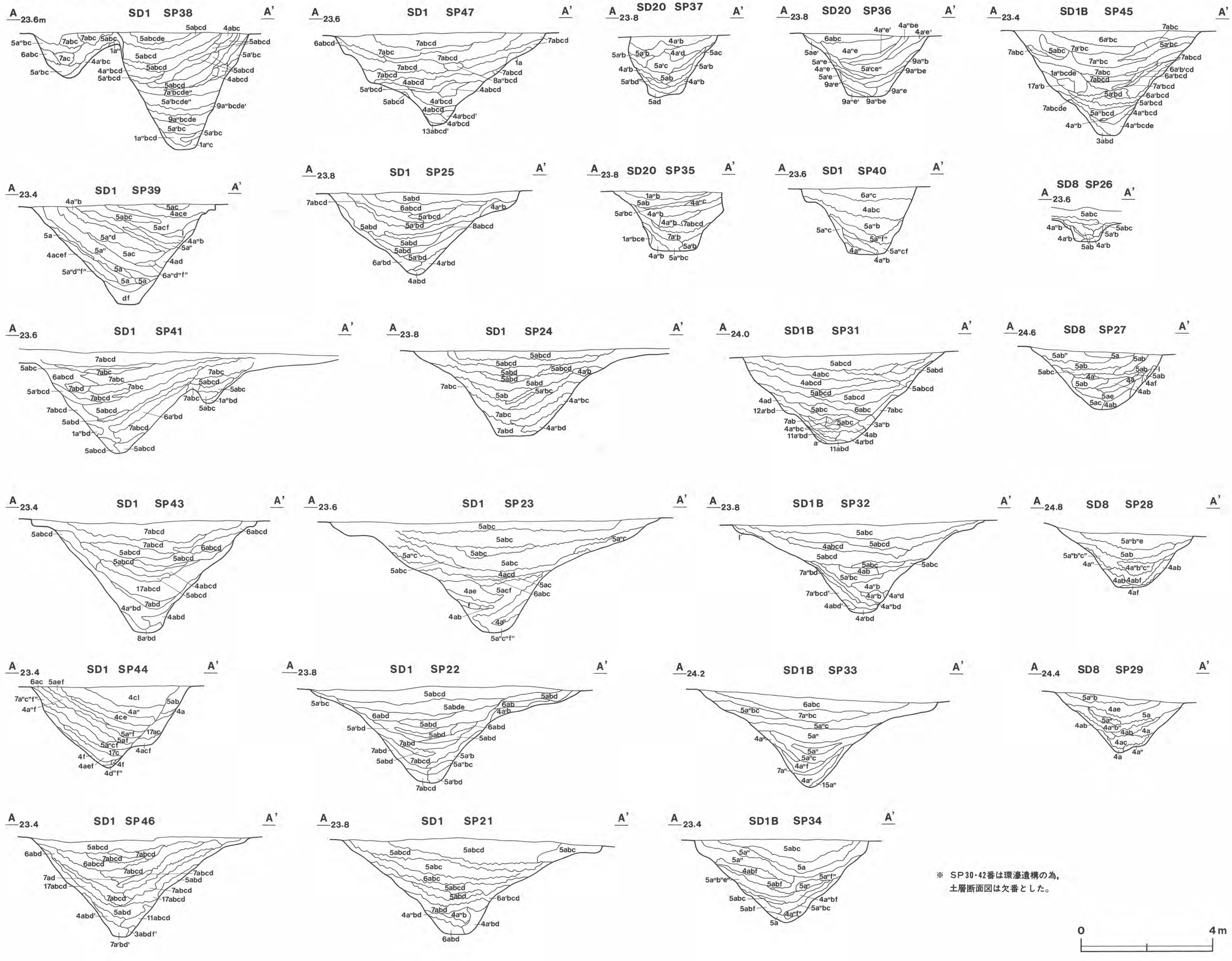
昭和61年度　屋代B遺跡 航空写真測量図（虎口・土橋・木橋・陥し穴配置図）



シン航空写真株式会社調製

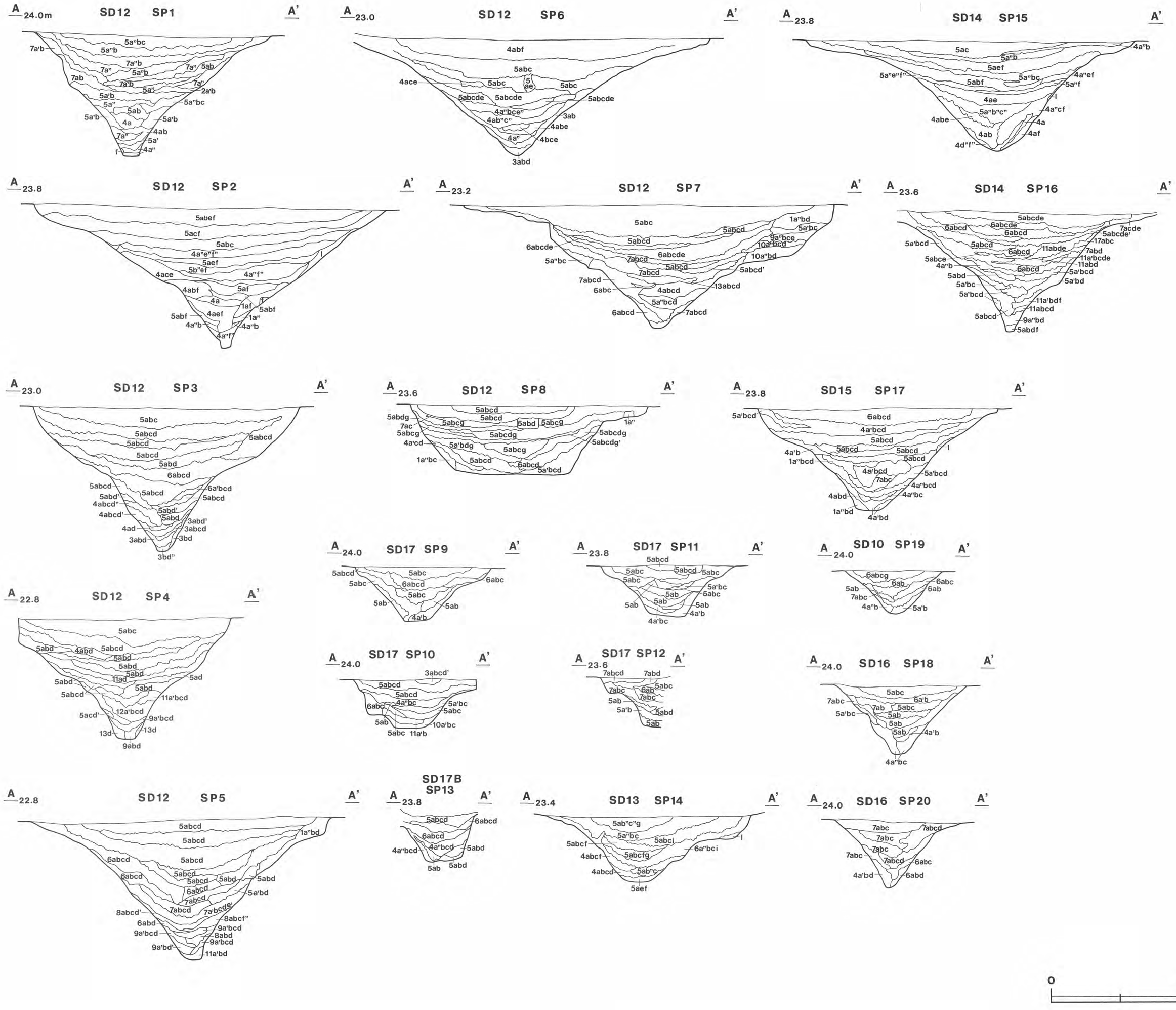
(財)茨城県教育財団

付図15　堀土層断面図



※ SP30・42番は環濠遺構の為，
土層断面図は欠番とした。

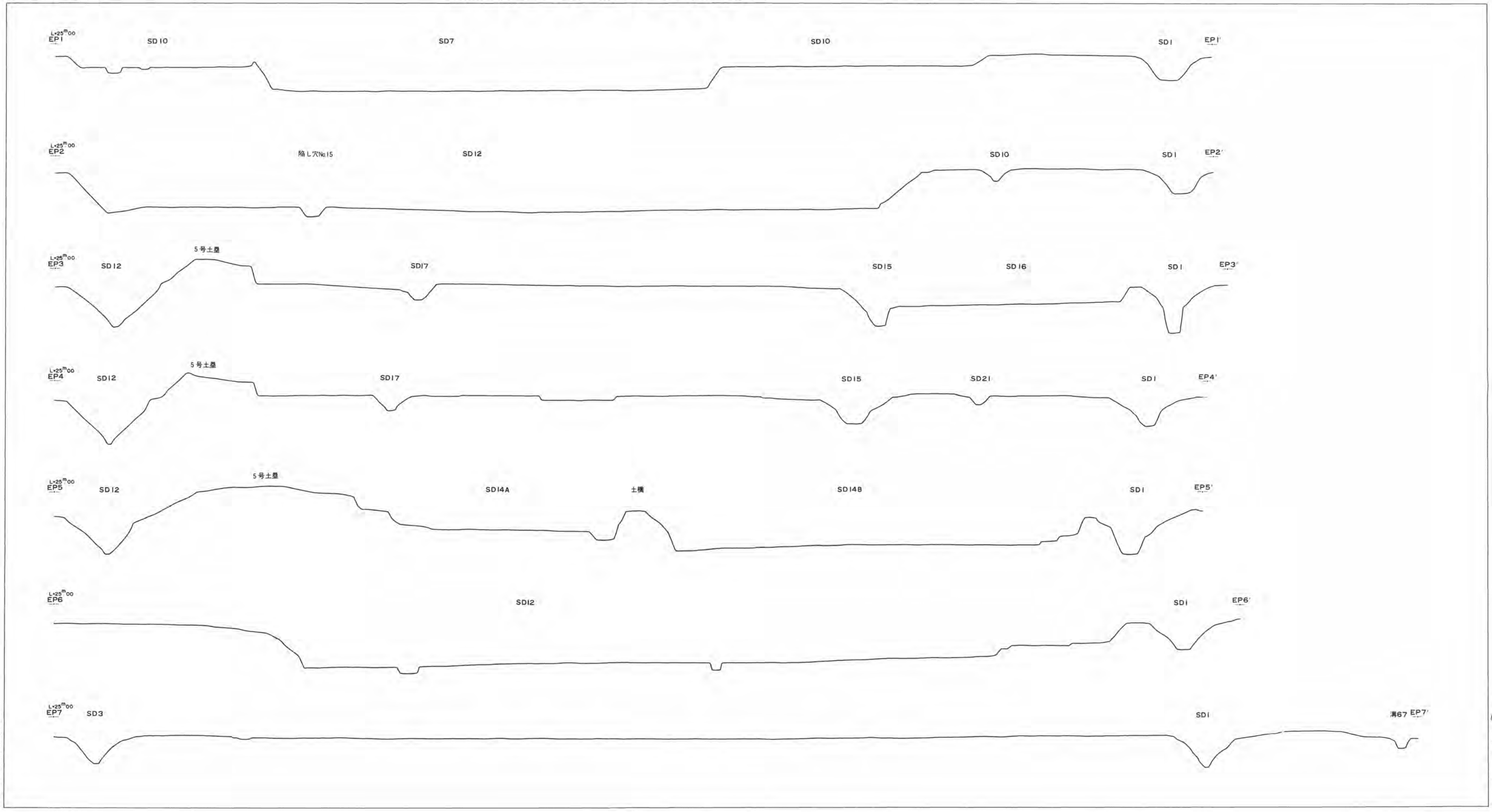
付図16　堀土層断面図


A 24.0m SD12 SP1 A'
A 23.0 SD12 SP6 A'
A 23.8 SD14 SP15 A'
A 23.8 SD12 SP2 A'
A 23.2 SD12 SP7 A'
A 23.6 SD14 SP16 A'
A 23.0 SD12 SP3 A'
A 23.6 SD12 SP8 A'
A 23.8 SD15 SP17 A'
A 24.0 SD17 SP9 A'
A 23.8 SD17 SP11 A'
A 24.0 SD10 SP19 A'
A 22.8 SD12 SP4 A'
A 24.0 SD17 SP10 A'
A 23.6 SD17 SP12 A'
A 24.0 SD16 SP18 A'
A 22.8 SD12 SP5 A'
SD17B SP13
A 23.8 A'
A 23.4 SD13 SP14 A'
A 24.0 SD16 SP20 A'
0 4m

付図17

1：100　No. 1

昭和61年度　屋代B遺跡（堀・土塁）断面図



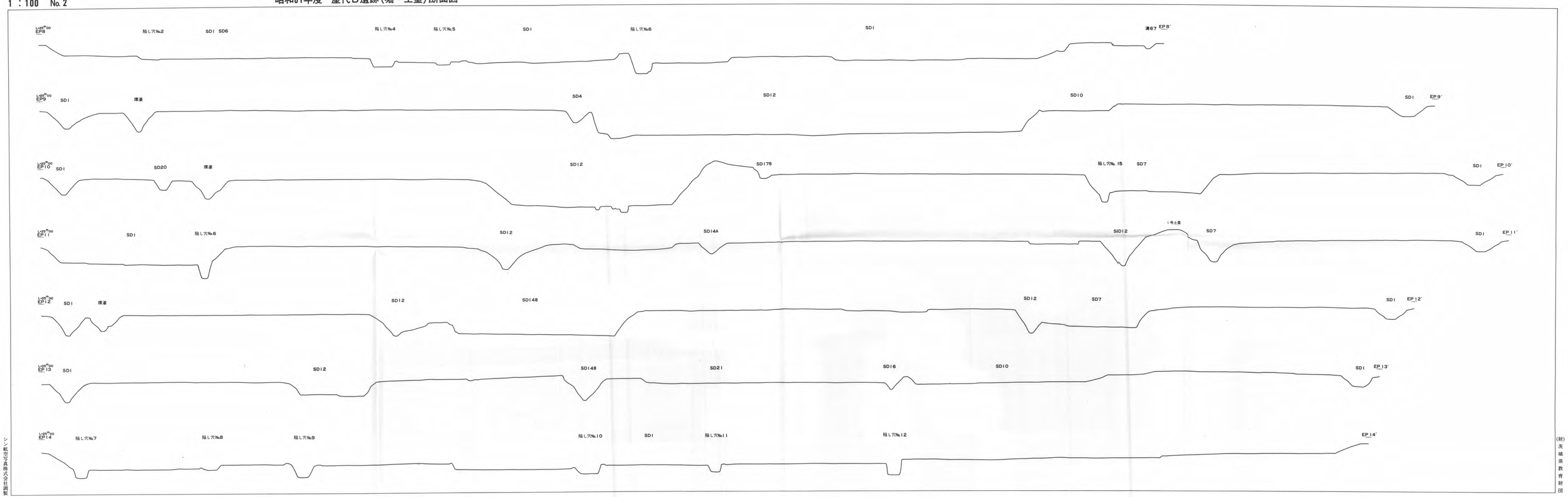
シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図18

1：100　No. 2

昭和61年度　屋代B遺跡（堀・土塁）断面図



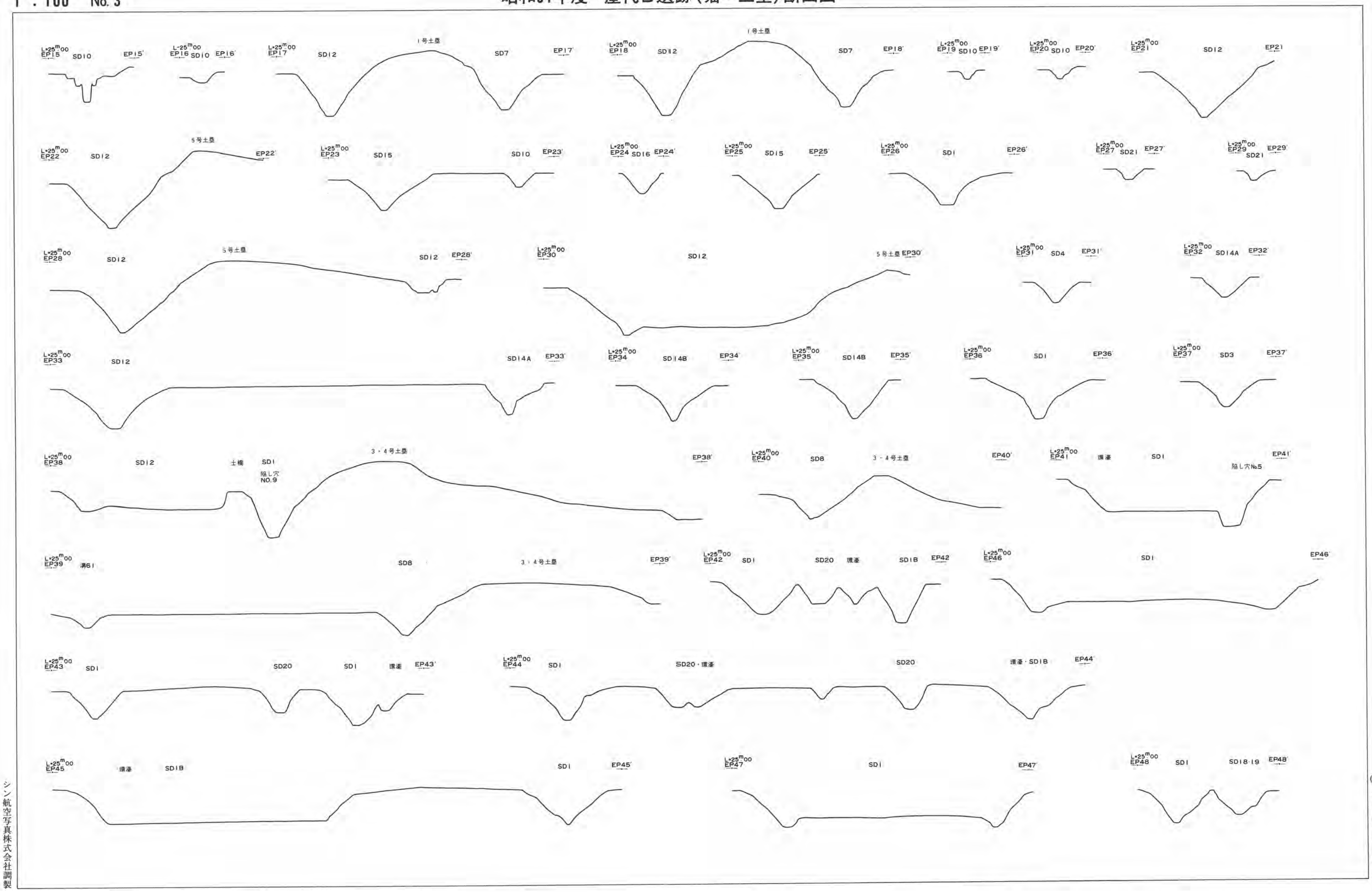
シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図19

1：100　No. 3

昭和61年度　屋代B遺跡（堀・土塁）断面図



シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図20

1：100

昭和61年度　屋代B遺跡 航空写真測量図（Ⅰノ郭内遺構配置図）

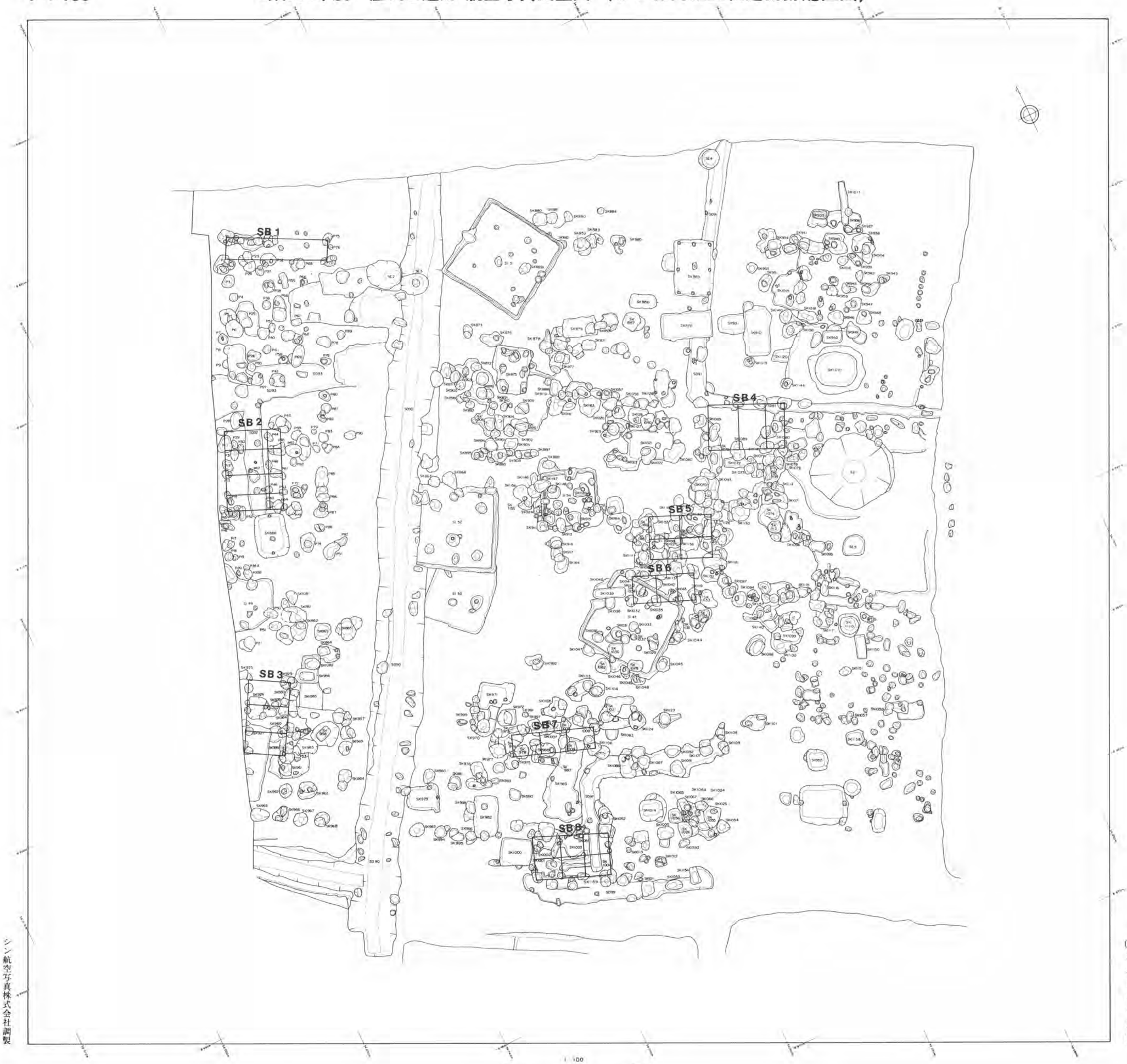
シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団

付図21

1：100

昭和61年度　屋代B遺跡 航空写真測量図（Ⅰノ郭内掘立柱建物跡配置図）



シン航空写真株式会社調製

(財)茨城県教育財団